

---

# フレーム・ウォーカー

エスパー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フレイム・ウォーカー

### 【Nコード】

N1376N

### 【作者名】

エスパ

### 【あらすじ】

倒王歴〇〇一二年。突然行方不明となった師匠・ミレーナを探して、少年・ディーンは一人旅をしていた。旅の途中、とある出来事から少女・リネと知り合い、同時に首都『テルノアリス』を狙うテロリストとの戦いに巻き込まれていく。師匠の行方は？そして、ディーンは首都を守りきれぬのか？

現在『ブラウザナー溪谷編』進行中。及び、『テルノアリス編』から順次改稿作業中。

## 序章 トラブルメーカー（前書き）

二作目の投稿となります、エスパーです。

今回はだいたい前から趣味でちよくちよく書いていた物を、設定や世界観を少し変えたファンタジー小説です。

一人称視点の物語ですが、作者自身、一人称の小説を書いた事が全然無いので、少し文章がおかしいかも知れませんが、努力して続けていきたいと思えます。

という訳で、フレイム・ウォーカー始まります。

どのぐらいのペースでどのくらい連載するかわかりませんが、見つけた方はぜひ読んでやってください（笑）

## 序章 トラブルメーカー

「おい、クソガキ。てめえ、よくこの状況で平然としてられんな？」  
頭の上から降ってきた喧嘩を売っているような台詞に、俺はゆっくりと顔を上げた。

そこにいたのはいかにもガラの悪そうな男。歳は俺より十歳は上に見える。俺の何が気に喰わないのか知らないが、酷くイラついたような顔をしている。

「……何の事だ？」

俺はとぼけたフリをした。

今の状況ならよくわかってる。さっきから妙な連中が列車の中を占拠しているんだ。

要するにこいつらは、強盗とかそれ系の奴だろう。腰にはナイフ、右手には黒光りする拳銃と、ご丁寧にわかりやすい格好で俺に絡んできてやがる。

「頭悪イのかてめえ？ 今俺らはこの列車を占拠してんだよ。なに怯えもしねえで呑気に読書タイムか？ 人をバカにすんのも大概にしとけよ」

こいつの言う通り俺は声を掛けられる直前まで、車内の他の乗客が悲鳴を上げている間も、ずっと手に持った小説を読んでいた。内容は……、まあそこそこ面白かったかな。

なんて考えてる間にも、強盗野郎はべらべらしゃべり続けている。「大体てめえ、その髪の色は何だあ？ ガキのくせに紅い色なんかに染めやがって。気取ってるようにしか見えねえんだよ」

別にお前に関係ねえだろ。それにこれは地毛なんだよ。……なんて言うのが面倒臭くて黙っていると、俺は強盗に胸倉を掴まれて無理矢理立たされた。

「聞いてんのかクソガキ！ 何とか言ってみろ！」

凄みのある言葉を浴びせてるつもりらしいが、この程度の事で俺

は萎縮したりしない。何か言っただけなら言っただけでやるよ。

「あんたよっぽど暇なんだな」

「ああ！？ 何だと！？」

「だってそうだろう？ 列車中を占拠してるって事は、あんたは見張り役のはずだ。その仕事をサボってこんなガキに絡んでるなんて、他にやる事が無くて暇なだけなんだろう？ …… ああ、って事はあれか。あんた下つ端な訳だ。そりゃあ暇なはずだよなあ」

「てっ、めえ……っ！！」

怒りで胸倉を掴む手がブルブル震えている。よしよし、挑発は成功のようだ。

「ただ問題があった。ここで俺がこいつを倒したとしても、こいつにはまだ仲間がいるはずだ。」

この列車は機関室を入れて七両編成。一車両に一人と仮定すると、眼の前の男を除けば、仲間は最低でも六人以上いる事になる。

しかも人質に成り得る乗客は俺以外にもいる。ここで手を出せば、かなり厄介な事になるのは明らかだ。挑発しておいて言うのもなんだが、大人しくしていた方がいいかも知れない。

だが、眼の前の強盗はもう止まりそうにない。男が拳銃を俺の眉間に突き付けた。

「頭吹っ飛ばしてやる！ どうせてめえみてえなクソガキが死んだ所で、悲しむ親なんていやしねえだろうしな！」

「……あ？」

「こいつ今何て言いやがった？」

聞き取れていない訳じゃない。聴こえていたからこそ、もう一度確認しておきたい。

「……俺に親がいないって？」

「どうした、凶星かクソガキ！ どうせ親の顔も知らねえんだろ？ だけど安心しな！ てめえの親は、どうせてめえと同じでクソみたいな野郎だ！ ヒヤハハハハ！」

「……黙れよ」

「あ？ 何か言ったかクソ」

男が言い終わる前に、俺は思いつきり右手で男の顔を殴り付けた。そのたつた一発で男は気を失い、列車の床に倒れ込む。

気絶して倒れている男に向かって、俺は聴こえていないとわかった上でそれでも言った。

「俺の親をバカにする奴は、どこの誰だろうと許さねえ！」

俺を除いた他の乗客たちは、皆少し口を開けて呆然としていた。

前言撤回。大人しくなんてしてられるか！

## 第一章 紅い髪の少年

俺には親がない。

いや、より正確に言うなら、『本当の』親がない。

今から十二年前にこの大陸で起こった、『倒王戦争』。その戦争で戦いに巻き込まれて、俺の両親は死んだらしい。

らしいという曖昧な表現になってしまふのは、俺が当時の事をあまりよく覚えていないからだ。だから両親の顔も名前も、一切覚えていない。自分が名前を付けられていたのかどうかすら、覚えていない。俺に名前を付けてくれたのは、両親とは違う別の人だ。

俺には『本当の』親がない。だけど、育ての親ならいる。戦争孤児だった俺を拾い、育ててくれた人がいた。

ミレーナ・イアルフス。

それが彼女の名前だ。彼女は俺の育ての親であり、とある技術の師匠であり、同時に偉大な人物である。

彼女は俺に、その偉大な姓を授け、名を与えてくれた。

デーン・イアルフス。

それが今の俺の名前だ。

俺はミレーナの事を尊敬し、敬愛し、誇りに思っている。

だからどこの誰だろうと、俺の親を少しでもバカにした奴は容赦しない。それがこいつみたいな強盗野郎なら尚更だ。

「さて、と。すみません。誰か、何か縛るような物持ってませんか？」

気絶している男から視線を外し、俺は他の乗客たちに呼び掛ける。皆驚いた顔をして固まっているが、不意にその中の一人、年配の男性が立ち上がってこっちに近付いてきた。

「あの……、これでいいですかね？」

年配の男性はそう言って、布切れを何枚か差し出す。布切れと言っても、これなら猿轡けんわに使えるし、強盗の身体を工夫して縛れば動

く事も出来ないだろう。

俺は「どうも」と礼を言っただけで布切れを預かり、強盗の傍らにしゃがみ込んで、それで強盗の身体をしつかりと縛っていく。

「あの、ちよつといいかな？」

その作業の途中で、不意に声を掛けられた。顔を上げると、そこにいたのはさっきの年配の男性とは違う、若い女性だった。歳は二十代前半、と言った所だろうか。

俺は顔を確かめた後、再び作業を開始する為、視線を元に戻した。その上で、女性に言葉を返す。

「何ですか？」

「これからどうするつもりなの？ 一人捕まえたって言っても、ただほかに仲間がいるはずでしょ？」

「そいつらも全員倒すんです。心配しなくても、そっちの方は全部俺がやりますから」

これでよしと思いつつ、俺は強盗を縛る作業を終えた。と同時に、強盗からナイフと拳銃を取り上げ、すぐさま立ち上がる。

すると、俺の目の前に立っている若い女性が、随分と驚いた顔をしていた。

「倒すって、キミ一人で？ そんなの危険よ！ あなたまだどう見たって十代じゃない！ 子供にそんな危ない真似させられないわ！」

若い女性は俺を制止するみたいに、真剣な表情で言ってきた。その隣では、年配の男性が「そうだ、止めた方がいい」と、女性に賛同するような言葉を口にしてている。

正直、自分の今までの経験からすれば、こんな状況危険の内に入らないのだが、それをこの人たちに説明するのが面倒臭い。それに恐らく、そんな事をしている時間は無いだろう。他の仲間がこの車両の様子を見に来るかも知れないし、それで混乱が起きて人質を取られてもしたら、それこそやりにくい事になる。

俺はその二人を突き放すつもりで、あえて冷たい言葉を選ぶ事にした。



「元々こいつを殴り倒したのは俺です。あんたたちには関係ない事だ。それに、これ以上手伝おうともしないでください。強盗と戦う事になる以上、あんたたちは足手纏いにしかならない」

俺がそう言うと、若い女性も年配の男性も再び驚いた顔になった。子供にこんな事を言われるなんて思ってもみなかつたんだろう。まあ当然と言えば当然だ。

二人が何か言い出す前にとまって、俺は前方車両に繋がるスライド式のドアに向かって歩き出す。

すると、その時だった。

「おい、何騒いでんだ？」

突然スライド式のドアが開いて、銃を持った男が二人、車両の中に入ってきた。どう考えても、さっきの強盗の仲間だろう。男たちは車両内の状況を見回すと、その表情を徐々に険しい物にしていく。俺は頭を抱えそうになった。何でこのタイミングで入ってくるんだよ？

「何があつたんだ一体！ おいクソガキ！ あれはてめえの仕業か！？」

片方の男が銃を構えて、顎で後ろの状況を差した。それにしても、どいつもこいつもクソガキ呼ばわりしやがって。俺にはデインっていう立派な名前があるんだよ。

「だったらどうする？」

俺は挑発するように、笑みを含んでそう言った。

すると男は前に進み出て、俺の後ろで気絶している奴と同じように、俺の眉間に右手の拳銃を突き付ける。

「殺すに決まってるんだろ！」

そう言って、男が銃の引き金に指を掛ける瞬間、俺はその右手の手首辺りを左手で掴んで、強引に上に持ち上げた。

その直後、乾いた発砲音と共に、天井の一部が挟かれて破片が飛び散る。それに続く形で、乗客の何人かが悲鳴を上げた。

俺はそれを無視して、がら空きになった男の腹に右拳を叩き込む。

「げふっ！」

悶える男をよそに、俺は右手を素早く引き戻し、今度は男の左頬を同じく右手で殴り飛ばした。

「ぐはっ！」

男は座席の間に倒れ込んで動かなくなる。

俺は瞬時に、呆然と突っ立っていたもう一人の男の懐に飛び込み、腹の中心に左右二発の拳を交互に叩き込んだ。

「がっ！」

腹を抱えて崩れようとする男の前で、俺は軽く跳躍して右回転すると、その勢いに乗せて男の右頬を左足で蹴り飛ばした。

「ぐわっ！」

最初の男と逆方向になる形で、男は床に倒れ込む。だが、男はまだ意識を失ってはいない。

俺はその男の上に馬乗りになると、胸倉を掴んで強引に顔を引き寄せた。

「質問に答える。お前の仲間はあると何人いる？ さつさと答えないと、体中の関節が曲がるはずのない方向に曲がる事になるぞ」

俺の脅し文句に対し、男は「ヒッ！」という情けない声を上げる。この程度でビビるような奴が、強盗なんかしてんじゃねえよ。

「じゅ、十人だ……」

「配置は？」

「こ、この車両を除いて、各車両に二人ずつ……」

「リーダーは？」

「先頭車両、機関室に部下を一人連れてる……」

「目的は何だ？」

「お、俺は下っ端だから聞かされてねえ。ホ、ホントだ！」

矢継ぎ早に問い質すと、男はそう言って締め括った。

しかし、予想通り結構な数だ。まともに相手していたらこっちが不利になる。のんびりしている時間は無い。

「立て」

俺は男の胸倉を掴んだまま無理矢理立たせると、反対側に倒れている強盗の前まで連れて行き、さっきの布切れを男に差し出した。「これでそいつの口と手足を縛れ。動けないようにしっかりとな」そう言っただ俺は、男の作業を促す為、先程強盗から奪った拳銃の銃口を男の背中押し当てる。

「わ、わかった」

男はしゃがみ込むと、俺の指示通りに仲間を拘束していく。拳銃で脅しているからだろう。男はテキパキとした動作で作業をしている。

これじゃあ、どっちが強盗犯かわかんねえな。

俺が内心で溜め息をついていると、作業を終えた男がゆっくりと立ち上がった。

「こ、これでいいか？」

「ご苦労さん。じゃあ、あなたにはもう少し付き合ってもらおうか」

「なっ、何で？」

「さっきの銃声を聞いて他の仲間がこっちに来るだろうから、あなたを使って油断させるんだよ。さ、行こうか？」

俺は脅すような笑顔で、男に歩くよう促した。

あなたの紅い髪は、まるで炎みたいね。

この言葉は昔、ミレーナに言われた言葉だ。

正直俺は、自分の髪の色が好きじゃない。ミレーナの言葉を借りるなら、炎のような俺の髪はとてつもなく目立つ。そしてその髪の色いか、俺は行く先々でトラブルに巻き込まれる。

例えば、まさに今とか。

まあ今回の場合、先に手を出したのは俺の方なんだから、被害者面が出来る立場でも無い訳だが、俺はミレーナの事を侮辱されるとどうしても黙ってられない。

彼女は俺に居場所を与えてくれた大切な存在だ。だから俺はどんな事があっても、彼女の存在を大切にしたいんだ。

けどもしかしたら、向こうは俺の事をそれ程気に掛けていないのかも知れない。

ミレーナは一年前、突然何も言わずに俺の前から姿を消した。

理由はわからなかった。最初は捨てられたのかとも思ったが、俺の知っているミレーナはそんな事をする人間じゃない。わかったよ。うな口を利くつもりは無いが、それでも彼女は戦争孤児だった俺を拾い、十数年も育ててくれた人だ。そんな人間が何の理由も無く、俺を捨てたりするはずが無い。きっと何か理由があるはずだ。

だから俺は旅に出る事にした。

彼女を探し出す為に。俺を置いて行った理由を、彼女の口から聞き出す為に。

そうして手掛かりの見つからないまま、気付けば一年という月日が過ぎていた。

案の定、さっきの銃声を聞いて強盗の仲間が数人、俺の行く手に現れた。その度に俺は、捕まえていた男に演技をさせた。

「後部車両でこのガキが暴れてやがったんで、大人しくさせるついでに、ボスに指示を仰ごうかと……」

そんな台詞を男に言わせ、仲間が油断した隙を狙って次々と気絶させる。冗談みたいに俺の作戦は上手くいった。

車両を一つ制覇する度に、周りの乗客に力を借り、強盗たちを縛

りあげて沈黙させる。そんな事を繰り返している内に、とうとう最後の客車の前に辿り着いた。ここを制圧すれば、後は機関室のみ。最後の客車へと繋がるスライド式のドアの前で、俺は男を前に立たせた状態で立ち止まる。

「な、なあ。お前一体何者なんだよ？ ただのガキがここまで戦い慣れてるはずねえよな？」

今更のように、男は俺に尋ねてくる。

こいつの言う通り、俺はただのガキじゃない。俺はミレーナに、有りとあらゆる技術を叩き込まれた。体術や剣術、そして……。

だけど別に、こいつにそれを教える義理は無い。さっさと残る客車と機関室を制圧して、このくだらない事件を終わらせてしまおう。

「あんたには関係ないだろ。さあ、ここが最後だ。行こうか」

俺は男にドアを開けるように催促した。男は渋々といった感じで、ドアを左にスライドさせる。

するとその時。

「いい加減にしてって言うてるでしょ!？」

そんな怒鳴り声が聴こえてきた。

俺が男の肩越しに前方を見ると、二人いる強盗の一味らしき男の片方と、乗客らしき少女が激しく言い争っている。同年代に見えるその少女の様子を、俺は遠巻きに見つめてみた。

黒く艶めいた首の付け根辺りまでの長さの髪。服は白い半袖のシヤツに革の短パン。両手には革の指出し手袋と、なんだかとても男勝りな格好をしている。だが露出の多いその肌は白く、肌理きめが細かいように思う。細身の体型の割に、胸や腰の部分は女性らしい豊満な形をしている。

と、その腰の辺りにベルトが斜めに付けられていて、拳銃を仕舞うようなホルダーがある。だが今そのホルダーには何も入っていない。恐らく武器となり得る物だったので取り上げられているのだろう。

それにしても、一体何を言い争ってるんだ？ 相手は列車強盗な

んだぞ？

「これ以上こんな事続けても意味無いわ！　すぐに鉄道警備隊に捕まるのがオチよ！」

「だから黙ってるって言ってるんだろ！　これ以上騒ぐと容赦しねえぞ！？」

……全く状況は掴めないが、もしかしてあの少女は強盗を説得しようとしているのか？

だとしたら、何てお気楽な考えを持った奴なんだ。どう見ても、俺と同年代のガキの言葉に説得されるような連中なら、最初から強盗なんてする訳ねえだろ。

そんな風に思っていると、強盗の一味の方が俺たちの存在に漸く気付いた。

「あん？　おいお前、何しに来た？　　その後ろの奴は？」

「あ、あの、実は」

男がそこまで言い掛けた所で、俺はすぐさま頭を切り替えた。ここまで来ればもう演技を続ける必要もないだろう。

俺は背後から、男の首筋に右手刀を叩き込んだ。

「ぐつ！？」

男は糸の切れた操り人形の如く、力無くその場に倒れ込んだ。

その光景を目の当たりにし、少女の傍にいた男二人の顔付きが陰しくなった。

「てめえ！　何のつもりだ！？」

「いい加減、演技するのも飽き飽きしてた所だったんだ。残念ながら、後部車両は全部制圧させてもらったぜ？」

俺は男たちを挑発するように、両手を組んで指の骨を軽く鳴らした。それだけで周りの乗客たちは、争いが始まるうとしている事を察知したのだろう。皆一斉に、座席の影に身を隠すように屈んだ。

ただ一人、さっきの少女を除いて。

「ガキが……！　粹がってんじゃねえぞ！」

そう言っって片方の男が、傍らの少女を捕えようと動き出す。

だが俺はそれよりも速く、すでに動き出していた。

俺は拳銃を構えて行く手を阻む男の懐に飛び込み、曲げた右腕の肘を男の腹の中心に叩き込んだ。

「ぐえっ！」

痛みで拳銃を零し、膝をつく男の横を瞬時に擦り抜けて、俺はもう片方の男に突貫する。

「！ちいっ！」

男は俺の接近に対応する為、狙いを少女から俺に切り替えた。その右手が、腰の辺りにあったナイフの柄を掴む。

だがもう遅い。

そのナイフが振られるより速く、俺の右拳が男の顔面を捉えた。顔の中心を思いつきり殴り飛ばし、男を沈黙させる。

「ふう……。危ねえ危ねえ」

そう言いながら、鈍い痛みを感じた右手を、俺が軽く振っている時だった。

「クソガキイイ！」

「！」

油断していた俺は、背後に気を配っていなかった。振り向くと、先程腹に一撃を与えた男がいつの間にか銃を手に取り、その銃口をこちらに向けている。

しまった……。そう思った時だった。

全く違う方向から銃声が響き、俺を狙っていた男の右肩が裂け、鮮血が飛んだ。

「ぐああっ！」

男は拳銃を落として後ろに仰け反り、床に倒れ込んで動かなくなつた。

俺は銃声のした方を見やる。するとそこには、銃を構えた状態で男の方を見ている少女の姿があった。その銃口からは白煙が上り、微かに火薬の臭いが立ち込めている。

「大丈夫？」

少女は視線をこちらに向けると、心配そうな顔付きで言った。  
俺は内心で少々焦っていたが、平静を装って言葉を返す。

「ああ、何ともない。悪いな、助かった」

「どういたしまして」

そう言っただけで少女は屈託のない笑顔を見せた。よくこの状況で笑ってられるな、この子。

「それにしても、さっき言っただけで事ホントなの？ 後部車両を全部制圧した、って話」

少女は持っていた拳銃を床に置くと、傍らで倒れている男のズボンのベルトを奪い、それで男を後ろ手に拘束し始めた。

「ああ、本当だ。これから機関室にも乗り込むつもりだ」

俺は少女から視線を外すと、屈んで身を隠していた乗客たちに呼び掛けた。

「とりあえず皆さん、後方車両の方に移動してください。その方がここにいるよりは安全です」

俺がそう言うと、乗客たちは素直に従った。どうやら一連の出来事で、強盗たちの事は俺に任せようと思ったらしい。まあ、最後には少し油断していたのだが。

俺はもう一度少女に視線を向けると、他の乗客にしたように彼女にも促す。

「あんたも後部車両に引っ込んでけよ。後は俺がやるから」

「ううん、私も手伝う」

「……」

ある程度予想はしていたが、やっぱりそう来たか。俺が言うまでもなく、強盗の身体を率先して拘束し始めた辺りから、こうなる気がしてたんだよね……。

「いや、気持ちは有り難いけど、あんたじゃ足手纏い」

「最後に撃たれ掛けてたあなたを助けたのは誰でしょう？」

「……」

喧嘩売ってんのかこの女。俺の言葉を遮った上に、わざとらしく



聞いてきやがって。

まあそれでも、油断していたのは事実だし、助けられたのも事実だ。ここは素直に折れた方がいいだろう。

「……わかった。協力してくれ」

「そうこなくっちゃ！」

そう言っただけで、屈託のない笑顔を見せる少女。こいつ今の状況わかってんのか？

とりあえず残った強盗一味の拘束を終え、俺たちは機関室へと繋がる最後のドアの前に立った。

すると少女は、何かを思い出したように「そういえば」と言い、俺の方に顔を向けてくる。少女の大きな黒い瞳が、真っ直ぐ俺を捉えた。

「私の名前は、リネ・レディア。あなたの名前は？」

「……デインだ」

俺が素っ気なく言うと、少女リネは不満そうに首を傾げる。

「デイン？ それだけ？」

「……それだけって？」

「『デイン』って言うのはファーストネームでしょ？ 私はあな

たのフルネームを聞いてるんだけど」

「……いいだろ別に。あんたには関係ない」

「何その言い方。何か名乗りたくない理由でもあるの？」

「……」

俺は無言を貫いた。リネの言う通り、名乗りたくない理由があるからだ。

俺の育ての親であり、師匠でもあるミレーナ・イアルフスは、実はかなりの有名人だ。彼女のフルネーム、もしくはセカンドネームを聞いただけで、殆どの人間は眼を丸くして驚く。だからその偉大なセカンドネームを受け継いだ俺としては、あまり人前でその名を名乗りたくないのだ。

理由は単純。『あの』ミレーナの弟子なのか！……と騒がれる

のが嫌だから。

もちろんそんなミレーナの事を誇りに思うし、尊敬もしている。だがそれとこれとは話が別だ。

この話題に喰い下がりそうなりネを無視して、俺はスライド式のドアの取っ手に手を掛ける。

「おしゃべりは終わりだ。行くぜ」

俺は頭を切り替えて、ドアをスライドさせた。

機関室のドアを開けて、俺は不審に思った。

さっきの下っ端が言うには、この機関室には強盗一味のリーダー格と部下一人がいるのではなかったか？　だが突入した機関室には誰もいない。

そう、誰もいないのだ。

「何で運転手や整備士までいねえんだよ？」

この列車は、『導力石』と言う特殊な石の力によって動いている。俺たちの住んでいる大陸の乗り物の多くは、この『導力石』を用いている。『導力石』とはこの大陸で採れる特殊な力を持った石の事で、数百年前に起きたと言われているとある『戦争』において、兵器として活用されていた。それが今では、こういった列車などの移動手段となる乗り物などの動力として使われている。

この列車を動かす場合、まず速度などの基本的な操作を行う運転手と、動力となる石の調節を行う整備士の二名が必要となる。

だが俺たちが辿りついたその場所には、誰一人いない。つまり今この列車は、運転手無しでただレールに沿って進んでいる状態とい

う事だ。これでは目的の駅を通り過ぎてしまえばかりか、無用な事故まで引き起こしてしまうかも知れない。

「どうなってるんだ!? このままじゃ  
「任せて!」

頭を抱えそうになった俺の横を足早に通って、リネが運転席に着いた。彼女はその白く細い両腕で、円形の金属で出来た操縦レバーを握る。

「あんた、運転出来るのか?」

「運転だけならね。さすがに『導力石』の調整とかまでは出来ないから、そっちに異常が出たらどうしようもないけど……」

つまりその異常が起きる前に、整備士を見つけ出さないといけないという事だ。

昔ミレーナに、『導力石』は扱い方が難しいと聞いた事がある。

専門の知識を持った者が傍で出力の調整をきちんと行わないと、力が暴走してしまうらしい。

是が非でも、整備士の存在が不可欠だ。

「じゃあ、リネ。運転はあんたに任せる。俺は整備士を連れてくるから」

「連れてくるって、どこにいるかわかるの?」

「車内は全部見てきたんだ。だったら行き場所は一つしかねえだろ」

俺はそう言ってるリネに背を向け、機関室の隅にある梯子に向かった。この梯子は、列車の上部へと繋がっている。

俺には機関室に入る前から疑問に思っている事があった。

先頭車両で俺が暴れていた時、普通なら隣の車両で騒ぎがあれば、何が起こったのかと様子を見に来る人間がいるはずだ。それがリーダー格のいる車両の隣なら尚更。

だが機関室からは誰も出て来なかった。それもそのはずだ。奴らは既に列車の上部、屋根の上へ出ていたんだから。

俺は列車の上部へと続く梯子を上り、鉄板で出来た蓋を開けて、屋根の上へと這い出た。するとその途端、進行方向から強い風が流

れてくる。

それを背に受ける形で後部車両の屋根を見ると、そこには数人の人影が見えた。

「やっぱり、そういう事だったか」

俺の予想通り、そこには強盗の一味らしき男二人と、青い作業服に身を包んだ男二人の計四人が身を屈めていた。青い作業服とはつまり、この列車の運転手と整備士だ。

列車の連結部分を飛び越えつつ、俺が徐々に近づいて行くと、四人は俺の存在に気付いて立ち上がり、声を掛けてくる。

「……何だ？ ガキがこんな所で何してやがる」

何してやがるはこっちの台詞だ。特に運転手と整備士の男。何で強盗と仲良く煙草なんか吸ってたんだよ？

「下っ端連中は全部制圧させてもらったぜ？ 強盗団さん」

つまりはそういう事だ。運転手と整備士が、元々強盗団の一味。

いや、ここまでの事をするとなると、目的は強盗などでは無いだろう。俺自身勝手に強盗と決めつけていたが、運転手と整備士がグールとなると恐らく目的は

「あんたら、テロリストって奴か」

俺のその言葉で、四人の顔が険しくなった。どうやら当たりを突いたらしい。四人の内の一人、リーダー格らしき男が口を開く。

「その通り。ガキにしては鋭いじゃねえか」

「そりゃどうも」

「だが少し調子に乗り過ぎたなあ。俺たちの目的を邪魔しようってんなら、死んでもらうしかねえ」

そう言っただけ男たちはニヤニヤと笑いながら、腰のベルトに下げたあつた銃やナイフを手を取った。リーダー格以外の男たちが、ジリジリとこちらに近寄ってくる。

だが俺は毛程も気にしない。ただ淡々と問い掛けた。

「あんたらの目的ってのは何なんだ？ 殺されるにしても、それぐらひは聞かせてもらいたいね」

するとリーダー格の男が、意外にもあっさりと答える。

「この列車の終着駅はどこだか知ってるか？」

「首都『テルノアリス』だろ？ それがどうかしたのか？」

「俺たちはそこにこの列車を突っ込ませるんだよ！ もちろん乗客共々なあ！」

「……そんな事して何になる？」

「俺たちの意志を示すのさ！ 今の生温いテルノアリス王に対してな！ 何が『倒王歴』だ！ 何が『倒王戦争』だ！ 今の王は墮落してやがる！ だから俺たちの手で眼を覚まさせてやるんだよ！ かつて『魔王』と呼ばれた、前テルノアリス王の方が正しかったって事をなあ！」

「……なるほど。あんた、『倒王戦争』の生き残りか」

この大陸、ジラータル大陸はかつて、一人の王によって独裁国家となっていた。

虐殺、戦争、虐殺、戦争。従わない者は全て殺し、障害となり得る者も全て殺し、多くの血の上に成り立った独裁国家。その王として首都に君臨していたのが、前テルノアリス王だ。

だが今から十二年前、首都でクーデターが起きた。

前テルノアリス王のやり方に不満を持った一部の王族たちが、『反旗軍』と呼ばれる勢力を立ち上げ、その勢力の中核メンバーとして、『とある技術』を持った五人の人間を集結させた。

その五人とはズバリ、『魔術師』。

この世界には数百年前から『魔術』という物が存在し、歴史の中で数多く起こった戦争の中に『彼ら』はいた。

人々は数百年続いたと言われるその戦争を、『魔術戦争』と呼ぶようになった。

だが、何百年と続いた『魔術戦争』によって多くの者が犠牲となり、『魔術師』という者の存在は、徐々に希少なものとなっていた。

その希少な存在となっていた『魔術師』である五人の人間たちが、『反旗軍』の中核メンバーとして前テルノアリス王の軍勢に戦いを挑み、『魔王』と呼ばれたその王を倒した。その戦いが、後に『倒王戦争』と呼ばれ、王を倒したその年の暦から、新たに『倒王歴』と呼ばれるようになったのだ。

そう……。その『倒王戦争』こそ、俺が両親を失うきっかけとなった戦争だ。

そして十二年経った今でも、前テルノアリス王の軍勢だった者たちの生き残りが、こうしてテロ行為を行っていると、大陸の各地で問題になっている。

リーダー格の男は、息を荒げながら続ける。

「犠牲が出れば民衆の反発は大きくなる！ それをさらに煽る為に俺たちがテロ行為を起こす！ その先には一体何が待ってると思う！？ そうさ！ 『倒王戦争』の再来だ！！」

リーダー格の男はそう言って、愉悦に塗れた高笑いを上げる。

俺はその男の姿に、腹の底から湧き上がるような、深い哀れみと怒りを感じた。

「くだらない野望だな」

「！……何だと？」

侮辱された事に憤るような表情で、リーダー格の男は俺を睨み付けてくる。

だが俺は動じない。感じた事をそのまま口に出した。

「俺たちの意志を示す？ 『倒王戦争』の再来？ バカみたいな事抜かしてんじゃねえよ。結局あんたらは自分たちの事しか見えてねえんだ。あんたらのくだらない行いの裏で、一体どれだけの人間が不幸になってるか考えた事あんのか？」

「うるせえんだよ！ 何も知らねえガキが好き放題抜かしてんじゃねえ！！」

「知ってるさ。俺も一応、戦争経験者だからな」

「もういい！ こんなガキさっさと殺しちまえ！」

リーダー格の男が怒鳴ると、俺の許に近付いてきていた仲間の一人が、俺に拳銃の銃口を向け、その引き金を迷う事無く引いた。乾いた銃声と共に、俺の鮮血が辺りに飛び散る、事は無かった。

俺の身体を貫通する為に飛来するはずだった銃弾は、途中で跡形もなく消え去る。なぜなら俺の身体を中心に、ある現象が起きたからだ。

「なっ!?!」

俺を囲もうとしていたテロリストの一味、そしてリーダー格の男が息を飲む。

俺の身体を中心に起きた現象。それは俺の嫌いな、俺自身の髪と同じ色をしていた。

すなわち、『炎』。

俺の身体を囲むようにして発生した炎の渦は、自然現象などでは無い。

『倒王戦争』で中核メンバーとして活躍した五人の『魔術師』の内の一人。炎を司る『深紅魔法』の使い手。

その者の名は、ミレーナ・イアルルス。

『魔王』を倒した英雄の一人として、彼女の名は歴史に刻まれている。

そして俺は、彼女のたった一人の弟子であり、息子でもある存在。ディーン・イアルルス。

「俺は、『魔術師』だ!」

「『魔術師』になりたい？ また突然何言い出してんのよ、あんたは」

ミレーナは軽く頭を抱えると、とても呆れた表情で溜め息をつく。でも俺は本気だった。本気で『魔術師』になりたいと思ったんだ。ミレーナみたいな立派な『魔術師』に。

だけど彼女は、簡単に首を縦には振ってくれなかった。どうしてそんなに反対するのか？

ある時俺がそう尋ねると、ミレーナは真剣な表情で俺に言った。

「あんた……、人殺しになりたいの？」

俺は驚いて口を噤んだ。人殺し？ 『魔術師』が？

あの頃の俺はとても無知で、ただミレーナへの憧れだけで『魔術師』になりたいと思っていた。でもそれは、とんでもなく幼稚な考えだったんだ。

「いい？ 『魔術』って言うのは、ただ相手を殺す事だけに特化した技術なの。あんたは知らないだろうけど、私はその『魔術』で何人も人を殺した。『倒王歴』を創った英雄なんて言われてるけど、私はただの人殺しよ。決して称賛されるような立派な人間なんかじゃないわ……」

ミレーナの言葉は強かった。そして、同じくらいに悲しげだった。彼女は『魔術師』である自分自身を嫌っていた。『魔術』という物に、深い嫌悪を抱いていた。

俺はその時初めてその事実気付いた。いや、気付かされた。

だから俺は、ミレーナにこう言ったんだ。

「だったら俺が『魔術師』になって証明してやる！ 『魔術師』は『ただの』人殺しじゃないって！ 誰かを守る事が出来る存在なんだって！」

彼女は、そんなただのガキの幼稚な発言を聞いて、可笑しそうに笑った。笑っていた。



その日からミレーナは、俺の親であると同時に、『魔術』の師匠となってくれた。

俺が発生させた炎に撒かれ、テロリストたちは顔を顰めた。恐らく奴らの肌には、チリチリとした熱による痛みが走っている事だろう。

だが『深紅魔法』の使い手である俺は、自分の炎の熱さは感じない。自分の周りを舞う炎は、俺にとっては通り過ぎる風と同じだ。すると、リーダー格の男が驚いた表情で言い放った。

「バカな……！ てめえみてえなガキが『魔術師』だと！？ しかも炎を操るって事はまさか」

「あんたの想像通りだよ。これは『深紅魔法』。かの英雄、ミレーナ・イアルフスが使っていた魔法と同じ物さ」

俺は男の言葉を遮るように、事実を告げてやった。

「だけど男は認めようとしない。声を荒げ、否定の言葉を口にする。『あり得ねえ！ あの英雄と同じ魔法を、てめえみてえなガキが使えるなんて……。てめえ一体何者だ！？』」

「例え俺が何者だろうと、あんたには関係のない事だ。さあ、どうする？ 俺が『深紅魔法』の使い手だと知った上で、それでも戦うのか？」

「わかりやすく挑発してやると、男の顔があからさまに険しくなった。」

「舐めやがってえ……っ！ やつちまえてめえら！」

リーダー格の男が怒鳴るように叫ぶと、ナイフを持った男二人が

俺に斬り掛かってきた。

俺は掌を上にする格好で、両腕を水平に構える。すると、周囲を舞っていた炎の渦が、両掌に吸い込まれるように集束し、松明に灯っているような炎の塊が二つ出来上がった。

俺はその炎を投擲するみたいに両腕を後ろに反らせ、身体の前で両腕が交差する形で投げ付ける。

俺の掌から離れた炎は、ナイフを持った二人の男の身体に、吸い込まれるように命中した。

「ぐああああっ!!」

「ぎゃああああっ!!」

激しい炎にその身を焼かれ、二人の男は悲鳴を上げながらその場に倒れ伏した。

あまりにも一瞬の出来事に恐れを感じたのか、残る二人の男の顔が引き攣っている。

ああ、そういえば整備士を連れ戻さなきゃいけないんだっつたよな。残っている男二人は、どちらも青い作業服を着ている。パツと見では見分けがつかない。

「質問に答えてくれたら危害は加えない。あんたら二人、どっちが整備士なんだ？」

「う、うああああっ!!」

返答無しの銃撃。いや、ある意味これが返答か。

俺は予想していた反撃を防ぐため、自分の周囲に瞬時に炎の渦を出現させた。

二人の男は、恐怖と混乱で後先考えずに銃を乱射する。もちろんその銃弾の雨は、一発たりとも俺の身体を傷付ける事は無かった。

球切れを起こして硬直する二人の男の間を、俺は炎の渦を突き破るように疾走して背後に回る。そしてがら空きだった二人の首の辺りに、両手で手刀を叩き込んだ。

二人の男はほぼ同時に意識を失い、屋根の上に乱雑に倒れ込む。

まあ、どっちかが整備士なのは間違いないんだから、二人とも担い

で機関室に戻れば問題無いよな。

「てっ、てめえ……！」

俺は憎しみの籠った声に振り向く。見るとリーダー格の男は、右手に剣を握っていた。騎士や剣士なんかが良く使う、何の変哲もないロングソードだ。

男は怒りを抑えられないんだろう。身体がワナワナと震えているのがわかる。

「てめえみたいなガキに、俺たちの計画を邪魔されてたまるか！ ブツ殺してやる……！」

その言葉を聞いて、俺はある疑問が浮かんだ。

そういえばこいつらは、この列車からどうやって脱出するつもりだったんだろう？

いくらなんでも飛び降りる、なんて選択肢は無いはずだ。飛行船なんて物が近くを飛んでいる様子も無い。それに転移を目的とした魔法というものは、この世界には存在しない。況してやこいつらの中に『魔術師』がいるとも思えない。

ならば考えられる結論はただ一つ。

「なあ、今俺たちの計画って言ったけど、この計画を考えて指示したのは、あんたなのか？」

「あん？ 俺はこの下っ端たちを集めただけで、計画を考えたのは別の人間だ。それがどうした？」

「やっぱりな……。どうもこいつら、肝心な事に気付いてないらしい。」

「じゃあ、あんたらはこの列車からどうやって脱出するつもりなんだ？」

「へっ！ 俺たちには便利なモンがあんだよ」

そう言っつてリーダー格の男は、懐から青い水晶のような物を取り出した。そしてそれを自慢げに、俺の方に差し向けてくる。

「こいつは特殊な魔力が込められてる『転移石』っていう石なんだよ。こいつがあれば、俺たちはすぐにもこの列車から」

「そんなモン、存在しねえよ」

「……は？」

リーダー格の男は意味がわからない、と言いたげな顔付きになった。

少し惨い気もするが、さっさと真実を告げて楽にしてやろう。

「だから存在しねえんだよ。この世界に『転移魔法』なんてモンは存在しない。あんたら騙されてんだよ。その計画を考えたっていう奴にな」

「ふっ、ふざけんな！ そんなハツタリ」

「じゃあどうやって発動させんだよ？ 眼を瞑ってただ祈ればいい、とか言うんじゃねえだろうな？」

「なっ！？ 何でそれを……」

俺はやれやれと溜め息をついた。つまりはそういう事だ。

こいつらに計画を指示した奴は、最初からこいつらも犠牲にするつもりなんだろう。いくら『倒王戦争』の生き残りとはいえ、こいつらは『魔術』の素人だ。『魔術師』ならこのぐらいの嘘すぐに見抜けるだろうが、何の知識も無い、普通の人間が騙されるのも無理はない。

ただ一つ気になるのは、計画を指示した人間の事。

その人物は、少なくとも目の前の男よりは『魔術』に関する知識がある、という事になる。

どうやら、ただの『倒王戦争』の生き残りって訳じゃなさそうだ。もしかしたらそいつは、俺と同じ『魔術師』なのかも知れない。

「ふざけやがってえええっ！！」

「！！」

思考に囚われていた俺は、何かが砕けるような音で我に返った。

前方を見るとリーダー格の男が、さっきの青い水晶を屋根に叩き付けて粉々にしていた。憤慨するかのように息を荒げながら、怒りの感情が籠った瞳で、俺の方を睨む。

「殺してやる……！！ こうなったらこの列車の乗客、一人残らずな

あ！」

意味のわかんねえキレ方してんじゃねえよ！

とりあえず俺は、リーダー格の男の行く手を阻むため身構える。

「どけ、クソガキ！ 何がミレーナ・イアルフスと同じ魔法だ！

あんな奴が英雄視されてる事自体、馬鹿馬鹿しい事なんだよ！」

……なるほど。今日はどうやら『そういう日』らしい。

俺は燃え盛る炎のような途轍もない怒りで、頭の中が真っ白になっ  
つていく感じがした。

「……今、何て言った？」

「あん？ 聴こえなかつたのか？ ならもう一回言つてやる！ ミ  
レーナなんて奴は、馬鹿馬鹿しいクズみたいな野郎だつて言ったん  
だよ！！！」

その瞬間、ゴウツという音を轟かせながら、俺の周囲に激しい炎  
の渦が生まれた。俺の激しい怒りに同調するみたいに、炎の渦はそ  
の勢いを増していく。

「なっ……！！？」

俺が発生させた『魔術』の力に、焦りと畏怖を感じたのか、リー  
ダー格の男が静かに息を飲む。

だけでもう、どうでもいい。関係無い。こいつは侮辱しやがった  
んだ。

俺の親を。

俺の師匠を……！

俺の大切な存在を！

ミレーナを！！

「もう容赦しねえ。てめえは消し炭にしてやる！！！」

激しく火の粉を振り撒いていた炎の渦が、今度は俺の右掌に集束  
していく。

集束した炎は徐々に形を成していき、全ての炎が集まる頃には、  
そこには片手振りのロングソードがあった。

刀身も、鍔も、柄も、全てが紅く染め上げられたそれは、剣の形

を成しているだけで、炎である事に変わりはない。

俺が剣を構えると、その動作に合わせて刀身から火の粉が散る。

「どうした？ 掛かって来いよ」

俺は怒りの籠った瞳で男を睨み、挑発した。

だが男は俺の迫力に威圧されているのか、剣を構えようとしな  
い。ジリジリと、後退りさえしている。

「う、くうっ……！」

「来ねえなら……、こっちから行くぜ！！」

俺は力強く屋根を蹴り付けて、男の許まで疾走する。その時にな  
って漸く、無防備だった男は剣を構えようとした。

だが当然、一連の動作は俺の方が速かった。

右手に握った炎の剣を水平に振り抜く形で、俺は男と交差する。

斬撃音は響かない。肉を抉った感触も無い。

だが次の瞬間。

「ぐぎやああああああっ！！」

耳の奥にまで響きそうな大絶叫が、俺の背後から聴こえてくる。

俺が背後を一瞥すると、男の身体は、激しい勢いで燃え盛る紅い  
炎に撒かれていた。

男は膝を折ると、そのまま屋根の上に倒れ込む。

やがて炎が、徐々に勢いを弱め、その姿を消し去る頃には、男の  
身体は炭のように黒くなっていた。

「うっ……、あっ……」

炎の剣を握ったまま、俺は静かに男の許へと歩み寄る。そうする  
と、男は弱々しいながらも、微かに息をしているのが確認出来た。

「安心しろ。火加減はしておいたからな」

男の耳に届いているのかはわからなかったが、とりあえず俺はそ  
う告げた。

別に俺は、こいつらを殺してもいいと思っていた。『魔術』の力  
があれば、それも簡単に出来る事だろう。

だがそうはしなかった。

なぜなら俺には、ミレーナとの大切な約束があったからだ。それにきつと、彼女なら今の俺と同じ事をしただろう。俺に大切な事を教えてくれた、彼女なら。

斯くして、前テルノアリス王派のテロリストによる列車衝突事件は、未遂という形で幕を閉じた。

列車は終着駅の一つ手前、『ディケット』と言う街に、どうにか停車する事が出来た。

もちろん無事に何事も無く停車出来たのは、俺が機関室に連れ戻した運転手と整備士、そしてそれまで操縦席に座っていたリネ・レディアの協力があったからこそだ。

駅に着くなり乗客たちは、一斉に車両から降り、口々に『ギルド』に報告しろ」だの、「鉄道警備隊を呼べ」だのと騒いでいる。俺は自分の荷物を持つと、さっさと列車、そして駅から離れる事にした。

『ギルド』の連中や鉄道警備隊に捕まれば、事情聴取やらなんやらで長い足止めを喰らうに決まっている。別に先を急がなければならぬ訳でも無いが、面倒な事は極力避けておきたい。

俺は街に入ると、一度軽く伸びをして通りを眺めた。列車テロが起きたという事が騒ぎになって、野次馬連中が俺と逆方向へ駆けていく。

とりあえず宿でも探すか、と俺が歩き始めようとした時だった。

「あっ！ やつと見つけた！」

と、そんな言葉が響いてくる。

何か聞き覚えのある、明るく弾んだ声。もう嫌な予感しかしないが、俺はゆっくりと声のした方を振り向く。

するとそこにいたのは、予想通り、さっきの黒髪の少女リネ・レディアだった。俺の顔を見るなり、小走りでこっちに近付いてくる。「もう、何で勝手にどっか行っちゃう訳？ 話したい事色々あったのに」

「勝手にって……、別にあんたと一緒に旅してた覚えはねえけどな」俺が冷たく言うと、リネはその白い頬をぶくっつと膨らませて、あからさまに不満そうな顔をした。

「あゝ、酷い。何でそんな言い方するかなあ？ 一緒に協力してテロリストを退治した仲間じゃない！」

「どんな仲だよ」

相手にする必要もないだろうと思いつつ、俺は溜め息混じりに歩き出した。

するとどういつ訳か、リネは歩調を合わせるかのように、ピッタリと俺の後ろを付いて来る。

「……付いて来んなよ」

背後を見つつ、突き放すつもりでそう言ってみた。が、リネは特に気にした様子も無く、明るい声で話し掛けてくる。

「さっき言ったでしょ？ あなたと色々話したい事がある、って」

「俺には無い」

「でもあたしにはあるの」

「……」

話が平行線を辿りそうだったので、仕方なく俺は沈黙を守る事にした。

黒髪の少女リネは、ずっと俺の後ろを付いて来る。

それが少女との、妙な旅の始まりだった。



## 第二章 探し人は何処？

俺は今、ストーキングされている。

この『デイケット』と言う街に着いてからずっと、リネ・レディアと言う少女は俺に付き纏っていた。そして「ねえねえ」と言つて色んな質問を浴びせてくる。

どこから来たの？ とか、何で一人旅してるの？ とか、何歳なの？ とか、その紅い髪かっこいいね！ とか。最後のは質問じゃない気がするが。

実際、宿屋を探す道の道中でも、俺に矢継ぎ早に質問を浴びせ、俺が泊まる宿を決めると、「じゃあ、あたしもここにしよう」なんて言い出す始末。……一体何が目的なんだこの女。

そんな経緯を経て、俺は今とある食堂で昼飯を食べている。もちろんリネも同伴で。

ここに辿り着くまでの間、俺は本当に沈黙を守り続けた。彼女に何を聞かれようと沈黙。たまに出るお世辞発言みたいなものにも沈黙。俺が口を利いた相手と言えば、宿の主と食堂のウェイトレスのみ。

その間俺が無視し続けても、リネは気にした様子も無く質問を続けていた。

「……あんた、よっぽど暇人なんだな」

俺は自分が頼んだ牛肉のステーキを、銀色のナイフで切り分けながらポツリと呟いた。

するとその途端、向かい側の席でミートスパゲッティをフォークに絡ませていたリネが、パツと顔を上げる。顔の周りで星が煌きそうな程、物凄い満面の笑みがそこにあった。

「やっと口利いてくれた！ さつきからずっと黙ってたままなんだもん。もう一生口利いてくれないんじゃないかと思って、何度泣きそうになっただ事か……」

そう言ってるリネは、わざとらしく目頭を押さえる。

……その割には根気よく話し掛けてきてたよな。って言うか一生  
つて。どんだけ付き纏う気なんだよ。

「これ以上付き纏うようなら、『ギルド』に不審者として突き出す  
ぞ？」

「じゃああたしは、あなたがテロリストを退治した人だって言うわ  
よ？」

「……」

脅しを通じないどころか、逆に脅してきやがった。何とも恐ろし  
い女だ。

「……わかったよ。何が知りたいんだ？」

「やったあ！」

我ながら情けないと思いつつ、俺はリネの質問に答える事にした。  
質問の内容は概ねさつきと同じだった。俺が丁寧に一つずつ答え  
る度に、リネはその大きな黒い瞳をキラキラ輝かせながら、「うん  
うん」と何度も頷く。

彼女の振る舞いはまるで、好奇心旺盛な子供みたいだ。まあ成人  
してない以上、子供である事に間違いはないが。

「じゃあ、そのミレーナって人を探し出す為に、一人旅を？」

「ああ、そうだ」

一通り食事を終える頃に、話はミレーナの事に及んでいた。

彼女との出会いから、今に至るまでのある程度の出来事などは説  
明したが、もちろん彼女の正体や、俺が弟子である事などは伏せて  
いる。

粗方の説明を終えると、正面に座るリネは、なぜか少し躊躇った  
ような表情になった。

「……あのさ、もう一つ聞きたい事があるんだけど、いい？」

「？ 何だよ？」

妙に畏まった感じで尋ねてくる彼女に、俺は首を傾げてしまう。  
一体何を聞いてくるつもりだ？

「あなたって、もしかして『魔術師』？」  
「！」

その質問が飛んでくる事など、俺は微塵も考えていなかった。意表を突かれた事で、俺は思わず顔に出してしまう。なぜわかったのか、と。

リネの方も、俺の表情からそれを読み取ったのだろう。少し慌てた様子で、言葉を付け足す。

「さっき列車から降りる時、あなたが退治したテロリストを見ちゃったんだ。そしたら、三人ぐらいだっけ？ まるで炭みたいに黒く焼けてる人がいたから、もしかしたらと思っ……」

参ったな……。やはり列車での件は、少々やり過ぎてしまった感がある。いかにテロリスト相手とはいえ、あれだけの大立ち回りを演じたんだ。見る奴が見れば、それが『魔術師』の仕業だと見抜ける事だろう。

指摘されている以上、下手にとぼけても無駄だ。特にこいつの場合、さつきみたいな質問の嵐を続けるに違いない。

仕方がない。この件に関してだけは、素直に認める事にしよう。

「ああ。あなたの言う通り、俺は『魔術師』だ。炎系統の『魔術』を使う」

ミレーナの正体を話していない以上、うっかり『深紅魔法』なんて口にすれば、素性がバレるかも知れない。とりあえず、その辺りも伏せておく事にした。

「やっぱりそうなんだ！ ねえねえ！ 何かやってみせてよ！」

「俺は大道芸人じゃない」

何だその、一発芸披露しろみたいな軽いノリは！

俺は心の中で激しいツツコミを入れながら、軽く溜め息をついた。そしてふと、ある事を思い付く。

「あなたの方はどうなんだ？」

「え？」

リネは意表を突かれたらしく、キョトンとした顔になった。俺は

それに構わず、思った事を口にする。

「俺ばかり質問に答えてたらフェアじゃないだろ。どこから来たのかとか、何で一人旅してるのかぐらい教えるよ」

「ああ、そっか……。そうだよな」

俺に問われ、リネはその華奢な腕を組んでウーンと唸る。何を話そうかと思案しているような顔付きだ。

しばらく無言で待っていると、話す事を決めたのか、リネは腕組みを解いて口を開いた。

「どこから来たかって言われると、この街から西の方、かな。一人旅してる理由は……、特にない」

「……」

聞いた俺がバカだった。答えているようで答えになってない。

これ以上話していても不毛な会話になりそうだったので、俺は昼飯の代金を支払う為、足早に席を立った。

「え、ちょよ、ちょっと待ってよ」

そう言って、少し慌てた様子でリネも席を立つ。まだ付いて来る気がこの女。

店内を歩いてカウンターに近付いた俺は、そこにいた店主らしき女に代金を支払い、「聞きたい事がある」と言って呼び止めた。

「ん？ どうかしたのかい？」

「この女を見掛けた事無いか？」

俺はマントの内側から一枚の写真を取り出し、女店主に見えるようにした。

その写真には、金色の長髪の二十代前半の女性と、四〜五歳くらいの紅い髪の子供が、笑って写っている。幼い頃の俺と、若い頃のミレーナだ。

『若い頃』なんて言うと、どこからともなくミレーナの鉄拳が飛んで来そうだが。

「今から十年ぐらい前の写真だから、少し雰囲気が変わってるかも知れねえんだけど……」

「探し人かい？ うーん、そうだねえ……」

女店主は顎に手を当てて、考え込むような顔をした。すると横合いにいたリネが（まだいたのか）、俺の手にある写真を物珍しそうに覗き込む。

「ねえ、もしかしなくても一緒に写ってる男の子って、ディーンだよね？」

「……だつたら何だ」

「だよね！ わあ〜可愛い〜！」

本人眼の前にしてよくそんな台詞吐けるな。って言うか邪魔すんじゃないよ！

「で？ 見覚えはあんのか？」

隣のリネが鬱陶しくて、つい催促するように詰め寄ると、女店主は少し不満げな顔をする。親切に考えてやっているのに、と言いたそうな顔だ。

「さあ、見掛けた事はあつたかも知れないけど、こういう商売してるからねえ。客の出入りが激しいから、あんまり覚えてないよ」

まあそうだろうな。ミレーナが行方知れずになったのは、今から一年前だ。最近と言えば最近だが、それでも月日が経っているのは事実だ。それに何より、この街には立ち寄っていない可能性だってある。有力な情報を期待する方が酷だろう。

「悪い、邪魔したな」

短く告げて俺が踵を返すと、女店主は「いやいや。早く見つかるといいね」と言った。

早く見つかるか、か。確かにその通りだ。

ミレーナの行方を探し始めて一年。彼女が立ち寄りそうな場所や地域は色々回ったが、それでも何一つ、手掛かりが見つかる事は無かった。

この『ジラータル大陸』は広い。大地は東西南北にほぼ均一に広がっていて、そのいたる所に、街や村がいくつも点在している。その中から人間一人を探し出すのは、決して容易な事じゃない。況し

て手掛かりが一切無いとなると、さらに絶望的だ。このまま一生見つけられない可能性だってあるんじゃないかと、本気で思う。

食堂を出て、街の通りの一角で歩みを止めた俺は、何をする訳でもなくその場に佇む。さて、これからどうしたモンか。

「あのさ、提案があるんだけど」

不意に隣から声が聴こえて、俺は横を振り向く。するとそこには、本当に当たり前のようにリネが立っていた。歩きながら思案していたので、ここに来るまで全く気が付かなかった。

と言うか、ホントいい加減にしてほしい。一体いつまで付いて来る気なんだ、こいつは。

「……そろそろ本気で『ギルド』に突き出す事を考えた方がいいみたいだな」

言いつつ俺は、準備運動のつもりで、軽く両手の指の骨を鳴らす。女相手に戦う趣味は無いが、今回ばかりは例外になりそうだ。

だが当の本人は気にした様子も無く、無邪気な顔で口を開く。

「その『ギルド』だよ。普通の人たちに聞いてダメなら、『ギルド』の人たちに情報が無いか聞けばいいんじゃない？」

「！ まあ、それは俺も何度か考えたけど……」

リネの至極簡単な提案に、俺はあまり賛同出来ない。

『ギルド』とは、その名の通り組合の事だ。この世界では、『倒王戦争』以前から、『ある問題』が大陸の各地に根付いている。

問題とは即ち、『魔術兵器』。

その『魔術兵器』が、人間を襲う事が問題になっていた。

この大陸で、今から数百年前に起きたとされる『魔術戦争』において、『魔術師』と共に恐れられたのがこの『魔術兵器』だ。その名の通り、『魔術』によって造り出された兵器であり、それらは全て、『意志を持った操り人形』と呼べる存在だった。

『ゴーレム』。それが兵器の名前だ。

『魔術戦争』時代は、今よりも『魔術師』の数が圧倒的に多く、数々の『ゴーレム』が兵器として造り出され、数々の戦場を荒らし回っていたそうだ。

そして『魔術戦争』と『倒王戦争』を経て造り出された、数多くの『魔術兵器』の中で、破壊されなかつた一部の兵器たちが、荒野に、平原に、山に、あらゆる場所にそのままの形で残っている。

そんな彼らの意志となるものはただ一つ。それは、『製作者<sup>マスター</sup>の命令に忠実に従う』事だ。

『製作者<sup>マスター</sup>』の命令とはつまり、『敵を殺す』という事。

その命令のみを忠実に実行する『ゴーレム』は、数百年経つた今でも、その命令を忠実に守り続け、眼に映る全ての人間を『敵』と認識して襲い掛かる。彼らが彼らの時代に『敵』として戦った、敵軍兵士の影を重ねるかのように。

無差別に人間を襲う彼らは、最早ただの化物と言っても過言ではない。

その化物を退治する為に、『首都』の正規軍とは別に組織された民間の団体。それが『ギルド』だ。

『ギルド』はジラータル大陸の殆どの街にある。その活動内容は、主に『魔術兵器』の討伐だが、他にも運搬業務や災害救助、先程のようなテロリスト一味を捕縛し、正規軍に引き渡すという仕事もを行っている。多種多様な仕事を行っている為、各ギルドには、各地の腕利きの猛者たちが揃っているという訳だ。

そう、腕利きの猛者たちが。

「何か行きたくない理由でもあるの？」

リネは若干首を傾げ、不思議そうに俺に尋ねてくる。

そう、まさにその通り。俺には『ギルド』に行きたくない理由がある。

その理由は、先程の列車テロに関わった人物として、事情聴取を受ける羽目になるのが面倒だ、というのもあるが、それだけではない。

実は以前、俺は『魔術兵器討伐』という名目で、一度『ギルド』の仕事に関わった事がある。その際、あるギルドメンバーとちよつとした争いを起こし、以来一部のメンバーと折り合いが悪くなったのだ。

別にその事自体を気にしている訳じゃない。

今でも俺は、自分が間違った事をしたとは思っていないし、だから彼らにどう思われようが知った事じゃない。

ただ、そのメンバーの中で唯一、俺に味方しようとした人物がいた。俺の方がそれを断った為、その人物は今でもギルドメンバーと付き合いがある。

俺が気にしているのは、俺が『ギルド』に顔を出す事で、その人物に少なからず迷惑が掛かってしまう事だ。

俺とそいつが仲良く話している所を、他のギルドメンバーたちが見れば、間違いなくそいつまで迫害を受けてしまうだろう。

そんな事になるのだけは御免だ。

そいつは俺にとって、友達と呼べる存在なのだから……。

……とかなんとか考えていたのだが、他に頼る所が無いのも事実だった。

という訳で、『ダイエット』の『ギルド』前。木造二階建ての建物の上部には、『GUILD』と書かれた看板が掛かっている。

「ここが『ギルド』かあ。立ち寄ってみるの初めてなんだよね」

俺の事情を一切知らないリネは、呑気にそんな事を言っている。

俺が渋々『ギルド』へ行く事を決めると、彼女は「あたしも協力



するよ！ ミレーナさんを探すの！」と言って同行を求めてきた。

正直もう、彼女への対応は諦め始めていたので、「好きにしろ」とだけ言った。すると彼女は、また無邪気に喜んで俺の後を付いて来た。全く、本当に子供みたいな奴だな。

「ねえ、入らないの？」

「……そうしたいのは山々なんだけどな」

こうして入口の前まで来ても、俺の決意はかなり揺らいでいる。入りたくない、というのが正直な気持ちだ。

『ギルド』の情報網は凄い。どんなに小さな噂でも、あつという間に大陸中の『ギルド』を駆け巡る。

例え俺の人相を知らない連中でも、名前が出ればすぐにバレるはずだ。

『あいつがギルドメンバーと争いを起こした奴か』、と。

だが冷静に考えれば、『あの時』のギルドメンバーがここにいる確率は、それこそミレーナを探し出せる確率と同じぐらい低いだろう。いや、そうであってほしい。

俺は漸く覚悟を決め、リネと共に建物の中に足を踏み入れた。

入口に扉という物は無く、中に入るとそこは酒場のように、丸い木製のテーブルがいくつも置いてある。一つのテーブルに対し、椅子の数は五つ。この五つという数にも、ちゃんとした理由がある。

ギルドメンバーの間では、討伐などの『戦い』を主とする仕事をチームでこなす場合、五人までが最もそれに適した人数だと言われている。それ以上の人数になると、連携や伝達に綻びが生じ、逆に戦いにくくなるらしい。

だが一人旅をしている俺にとっては、そういう集団戦闘の概念がいまいちわからない。旅先で『ゴレム』に襲われれば、一人で戦うのが当たり前になっていくからだ。

個人主義。それが以前、俺がギルドメンバーに反感を買った理由の一つだったのかも知れない。

そんな事をぼんやり考えながら、俺は周囲を見回した。

一階には、まるでこれから戦争でも始まるんじゃないかというように、多種多様な格好をした人間が大勢いる。

背中に、何を分断するつもりなのかわからない巨斧を担ぐ大男もいれば、リネのように華奢な身体をした女が、その身長よりも長い槍を片手に、他の仲間と酒らしき物を飲みながら談笑している。

「すごい……。何かみんな、ホントにこれから戦いに行くみたい」「まあ、『討伐』を目的に動いてる奴が殆どだからな。人探しの情報を求めてここに来る奴なんて、俺たちくらいだろ」

俺とリネはそんな言葉を交わしながら、一番奥にあるカウンターを目指した。そこで仕事の依頼や、欲しい情報の交換を行うのだ。

と、丁度『ギルド』内の中程辺りまで来た時だった。

「久しぶりにその顔を見たな」

「！」

俺は横合いから聴こえたその声に心当たりがあった。

見るとそこには、白と黒の特徴的なラインが入ったローブを着た、銀髪碧眼の少年が立っていた。少年と言っても、俺より二つも年上の彼は、もうすぐ青年と呼ばれるようになるかという所だ。風貌にも、どこか落ち着いた雰囲気を感じられる。その彼の背中には、鰐の形が違う二本の剣が担がれている。

俺は彼の傍まで走り寄ると、その肩を軽く叩いた。

「ジン！ 久しぶりだな！ 元気だったか？」

「ああ、特に変わらない。お前も相変わらず、といった感じだな」

そう言っただけでジンはフツと笑う。嫌味じゃなく、こういう時のこいつは本当に爽やかだ。

「デーン、知り合いなの？」

少し遅れて俺の許に歩いてきたリネは、興味深げに聞いてきた。

それに答えようと俺より早く、ジンがリネに軽くお辞儀をする。「初めまして、ジン・ハートラーと言います。失礼ですがあなたのお名前は？」

「え？ あ、えと、リネです。リネ・レディア。初めまして」

リネはあたふたした感じでお辞儀を返した。

相変わらずジンの奴は、初対面の人間に対する礼儀がしっかりしている。自分で言うのもなんだが、俺とはエライ違いだ。

俺はリネに、どんな感じで自己紹介してたっけ？ ……もう覚えてねえけど。

「それにしても珍しいな。お前が『ギルド』に顔を出す事自体珍しいのに、まさか女の同行者がいるとは……。お前の師匠が知ったら泣いて喜ぶんじゃないのか？」

「え？ 師匠って？」

話が不味い方向へ転びそうだったので、俺は慌ててジンの肩を掴んで、彼の耳を引き寄せた。もちろんリネに聴こえないよう、背中を向け、声のボリュームを落として、である。

「その話はしないでくれ。ミレーナを探してるって事はあいつにも話してるけど、ミレーナの正体とか俺が弟子だとか、そういう事は一切説明してねえから」

以前、ジンにだけは俺の素性について話しているので、彼は殆どの事情を知っている。その上で彼は、相変わらずこんな事を続けている俺に呆れたように言う。

「また、『騒がれるのが嫌だ』とかいう理由か？ 全く……。そんな事いちいち気にしてたら、人間関係の幅が広がらないぞ？」

「う、うっせえな。俺の勝手だろ？」

「大体あの子とどういう関係なんだ？」

「何て言うか……。テロリストを退治した仲？」

「どんな仲だそれは」

俺がリネにしたのと全く同じツッコミを、今度は俺がジンにされた。ホント何だよこれ。

「ねえ。さっきから何コソコソ話してるの？」

リネが近付いて来る気配を感じて、俺はジンから身体を離れた。そしてわざとらしく首を横に振る。

「いや、何でもねえよ。それよりジン。何でこの街の『ギルド』

にいるんだ？」

もちろん説明するつもりのない俺は、無理矢理に話題転換を図る。ジンの方も、それに合わせてくれるかのように口を開いた。

「ああ。実は最近、首都に近い地域である噂が広まっていたな。俺はその調査と報告を兼ねて、『テルノアリス』に向かう途中だったんだ」

「噂……？」

妙な話の気配を感じ取って俺が顔を顰めると、ジンは真剣な表情で話し始める。

「首都近辺の町や村に反王族派のテロリストたちが集結している、という噂だ。最初に噂が流れ始めたのは、首都から東に十キロ程離れた所にある『ツエペル』と言う街だった。それから日を追う毎に北、南、西と噂は徐々に広まっていった」

「でもただの噂だろ？ そんな連中がいたら、とつくに正規軍が」

とまで言い掛けて、俺はハツとする。

ここに辿り着くまでに色々あったせいで、すっかり忘れ掛けている。俺はついさつき体験したばかりじゃないか。その反王族派の、テロリストたちとの戦いを。

「やはり、さつき騒ぎになった列車テロに関わってたんだな。相変わらずトラブルに巻き込まれやすい奴だ」

ジンは俺の表情から、全てを察したのだろう。って言うか、俺はさつき『テロリスト』っていう単語を口にしてるしな。

「面目ない……」

ま、別にジンに謝っても何にもならねえんだけど。

俺が溜め息をついて肩を落とすと、代わりにリネが言葉を紡ぐ。

「つまり、さつきの列車テロが起こった事で、その噂の信憑性が高くなったって事ですね？」

「そついう事だ。実際俺も、その列車テロが起きるまでは、噂は噂だと思っていたからな。とりあえず軍への調査報告の為に、明日に

でも『テルノアリス』に向けて出発しようと思うんだが……、一つ提案がある」

「？ 何だよ？」

訝しげな顔をする俺を見て、ジンは躊躇う様子も無く告げる。

「この一件に関して、お前の力を借りたい。だから俺と一緒に、『テルノアリス』に向かってくれないか？」

「……！」

ある程度予想はしていた。こういう頼み事をする時、ジンは躊躇わずに協力してほしいと言ってくる。

それ程長い付き合いでも無いというのに、俺にはジンの考える事がわかってしまう。何だか不思議な関係だ。

「まあ手伝うのは全然いいけど、正規のギルドメンバーじゃない俺が首突っ込んでいいのかよ？」

協力を拒否したつもりは無い。むしろ協力するつもりだ。だけど一応の確認として、俺は聞いておきたかった。

ジンは「心配しなくていい」、と言って首を横に振り、付け足すようにして続ける。

「それに、今回の件は少なからず、お前にも関係している事かも知れないしな」

「あ？ どういう意味だ？」

問い詰めようとする俺を、ジンは軽く右手を上げる事で制した。

「あまりここで話さない方がいい。一旦場所を変えよう」

「え？ あ、ああ……」

渋々俺が引き下がると、ジンは軽く笑みを作ってリネに話し掛ける。

「ところでキミはどうする？ 俺はキミがディーンに同行したいと言うなら、別に構わないけど」

「はあ？ 何言ってるんだよ、お前！ って言うかお前一人で決めんなよー！」

俺が反論するとその瞬間、隣にいたリネがバツと手を上げる。

いつぞやと同じ、顔の周りで星が煌きそうな満面の笑顔で。

「あたしも行きます！」

「よし、これでメンバーは決まったな」

「だから勝手に決めんなって！」

俺が必死に抗議しているにも拘らず、リネは元よりジンは聞く耳を持たない。

という訳で、俺の意見は華麗なまでにスルーされる結果となった。

話し合いの場を変えるに当たって、それをどこにするか思案した結果、俺たち三人は宿の一階の端にある談話室を選んだ。本当に偶然だが、ジンは俺達と同じ宿に宿泊していたらしい。なんとも奇妙が過ぎる偶然だよな。

そんな訳で、宿の談話室。

談話室と言っても、別に部屋として扉で分けられている訳ではない。ロビーから少し離れた入り組んだ場所に座って話の出来るスペースがある、といった感じだ。

長方形型の足の低いテーブルに、両側を挟むように並べられた二、三人用のソファ。

俺たちは談話室まで来ると、向かって左側のソファにジンが、反対側のソファに俺とリネが、それぞれ向かい合って座った。

なぜ敢えて俺と同じ側にリネが座るのか。とりあえずこの際、それには触れないでおこう。

「で、俺にも関係してるかも知れないってどういう事だ？」

ソファに座るなり、俺はジンに問い掛ける。

ジンは真剣な表情で、しかしどこか難しい顔付きをして、それでも話し出した。

「これは調査中に手に入れた情報なんだが……。ある街で、お前の探し人であるミレーナを目撃したと言う人物がいたんだ」

「!!! 本当か!?!」

俺は思わず、大声を上げて立ち上がってしまった。

ミレーナを見た。俺が一年掛けても手掛かりすら掴めなかった彼女を。

俺は興奮を抑えきれない。一瞬、ジンに掴み掛かりそうになった。

「どこだ!?! どの街なんだよ!?!」

「落ちつけ、ディーン。この話にはまだ続きがある」

「続き?」

ジンに宥められても、俺は座らなかつた。そんな俺の様子に困ったように、ジンは頭を掻きながら言う。

「ミレーナの目撃情報があった街の名は、『ツェペル』」

「……!」

「え? それって確か……」

「そう。テロリストが集結しているという噂が、最初に流れ始めた街だ」

俺はとてつもなく嫌な予感がした。これからジンが言おうとしている事が、何となく想像出来てしまう。

だがジンは結論を急ごうとしない。「その前に……」という前置きを置いて、俺の顔を見つめてくる。

「ディーン。この話をここで話す以上、隠している事を全部リネに説明しておけ。ここから先は、お前が彼女に黙っている事が関係する話になる。今話さなければ、彼女はずっと蚊帳の外のままだ」

全身の力を一気に抜いたように、俺はソファアに腰を下ろした。隣を見ると、リネは何の事なのかわからない、と言いたげな不思議そうな顔をしている。

俺がここで説明を始めない限り、ジンは話の続きを教えてはくれ

ないだろう。最早観念するしかなかった。

「実は」

俺はリネに話していなかった事を話した。

俺の探しているミレーナが、『あの』ミレーナ・イアルルスである事。

ミレーナが俺の『魔術』の師匠であり、俺が『深紅魔法』の使い手である事。

そして俺のフルネームが、デイン・イアルルスである事。

リネはやはり驚いた顔をしていたが、それでも、俺を咎めるような事はしなかった。「少し傷付いたわ」なんて軽口は叩いていたが。

「それで、そのミレーナさんがどうしたんですか？」

なぜか俺の代わりに、リネがジンに問い掛ける。

俺は少し身構えた。ジンの口から結論が告げられようとしている。

「その目撃者によると、ミレーナ・イアルルスと思しき人物は……、テロリストと思われる人間と話をしていたらしい」

「！」

思った通り、最悪の結論だ。それはつまり、ミレーナがテロリストと通じていると言っているようなものだ。

ガンガンと、俺の頭の中で重たい鐘が鳴っている気がした。

「そんなの……、出鱈目に決まってる」

「確証がある訳じゃないんですよね？」

俺のせめてもの小声の反論に、リネが賛同してくれるかのような発言をした。

ジンは「確かに確証は無い」と言って、それでも難しい表情を崩さない。

「だが一部のギルドメンバーには、その証言を信じる者も出始めているんだ。かつての『英雄』と言うだけあって、その名を知っている者は多いからな」

「そんな事ある訳ねえだろ……！」

俺は再び立ち上がった。だが今度は、怒鳴り声と共に。誰だ、そ



んなくだらない嘘を吐きやがった奴は！

怒りで顔を顰める俺を宥めるかのように、ジンは自分の意見を述べる。

「もちろん俺だって信じてはいない。お前の敬愛する人間が、そんな人間じゃない事ぐらいわかっているつもりだ。大体、『反旗軍』の中核メンバーとして前テルノアリス王と戦った『英雄』が、その反対の陣営の者と通じる事に、必要性が感じられない。リネの言う通り証言だけで、確固たる証拠がある訳でもないしな」

ジンは一旦言葉を切ると、「ただ」と言って再び言葉を紡いだ。「証拠が無いとはいえ、証言があったのは事実だ。だから俺は王族の意見を求めるため、『テルノアリス』へ向かおうと思っていたんだ。そこへ偶然、お前が現れたという訳だ」

ジンの意見を聞いて、俺は落ち着きを取り戻して腰を下ろした。

つまりジンはこう言っている。その噂の真偽をお前自身の眼で確かめるために、同行してくれないか、と。

「そういう事なら話は早いさ」

元々手伝うつもりだったが、今の話でより一層決意が固まった。

俺は真っ直ぐにジンを見つめ、強く答える。

「協力するに決まってるだろ！」

ミレーナは全く関係ない。それを俺自身の手で証明してやる！

### 第三章 首都への道で

俺は風のように荒野を走り抜け、高く跳躍してその一撃を躲した。鋼鉄で出来たやや黒み掛かった巨大な拳が、轟音と砂塵を巻き上げて地面に深くめり込む。

空中で身を翻した俺は、隆起して高くなった小さい崖のような地面の上に静かに着地した。花卉のように広がっていた砂埃を防ぐための萌葱色のマントが、少し遅れて纏まる。

俺の視線の先にいるのは、体長が五メートル超はあるつかという巨大な人型の『ゴーレム』だ。その巨大さゆえに、少し高い位置に立ったぐらいでは見下ろす事は出来ない。この場所に立つてもまだ、少し見上げなければならぬくらいだ。

視線を左の方に向けると、離れた位置では別の『ゴーレム』と、ジン、リネの二人が戦っているのが見える。あっちの『ゴーレム』も大きさはこつちのと殆ど変わらない。

今俺たちは、荒野で遭遇した古代の『魔術兵器』との戦闘の真っ最中だ。

奴らは人間を発見すると見境なく攻撃してくる。

性別や年齢なんて関係ない。ただ人間を殺す為だけに造り出された存在なのだから。

奴らの行動理念はただ一つ。

それは、『<sup>マスター</sup>製作者の命令を実行する事』。

『<sup>マスター</sup>製作者の命令』とはつまり、敵である人間を殺す、という事だ。それを達成する為、奴らは相手を殺そうとする。

例えばそれが、『<sup>マスター</sup>製作者』と同じ『<sup>マスター</sup>魔術師』だとしても。

地面にめり込んでいた巨大な右拳を引き抜き、それを俺目掛けて叩きつけようと、『ゴーレム』は腕を振り上げる。

俺はその場から右方向に飛び退きながら、自分の右手に炎を集束させる。

少し遅れて、先程まで俺が立っていた場所がいとも容易く砕け散った。『ゴーレム』の拳が炸裂したんだ。

俺は方向転換する為、両脚に力を込めて、地面を滑るかのよう<sup>に</sup>に急停止する。そしてすぐさま、『ゴーレム』の足下へと疾走を開始した。

右手に集束させた炎はすでに、片手用の紅いロングソードに形を成している。この剣は『斬る』為の剣ではなく、言わば『焼き払う』為の剣だ。

俺はそれを握り締め、『ゴーレム』の巨大な右足と交差する瞬間、左下段から斜め上に大きく振り抜いた。

背後に通り抜ける形になった俺は、もう一度『ゴーレム』の方に向き直り、構えを取って立ち止まる。

するとその瞬間。俺が斬り付けた右足から真っ赤な炎が燃え上がり、激しい爆発を起こした。

今の衝撃で僅かにだが、『ゴーレム』の身体がビリビリと振動しているのがわかる。だがこの程度の一撃で、奴の身体が揺らく事は無い。

白い爆煙が消え去った後、露わになった『ゴーレム』の右足は、装甲の一部が少し抉れただけで、完全に破壊するには至っていないかった。

「チツ、やっぱ古代の物とはいえ相当な強度だな……。何百年も経つてんのに脆くなつてないって、どういう素材で出来てんだよ」

誰にともなく愚痴を零しながら、俺は右手に構えていた『紅蓮の<sup>フレイム</sup>爆炎剣』を消滅させる。

この程度の威力であいつを破壊する事は出来ない。ならば、別の手段を使うまでだ。

俺は掌を上に向けると、両腕が水平になるように構えた。

すると俺の周囲で、激しく燃え盛る炎の渦が発生し、俺から一メートル程離れた頭上に向かって集束し始め、まるで満月のように丸い炎の球体を、徐々に作り出していく。

「今度はとびつきりのヤツを喰らわせてやるぜ！」

炎の球体を大きく膨らませながら、俺はこちらに向き直った『ゴーレム』に強烈な笑みを混ぜて告げた。

危険を察知したかのように、奴は俺にその巨大な鉄拳を浴びせる為、地響きを立てながら距離を詰めようと向かってくる。

だがやはり、動作の完了は俺の方が早かった。

自分自身の力が濃密なまでに凝縮された炎の球体の下で、俺は『ゴーレム』を見据えつつ大声で咆える。

「『クリムゾン・レイン』  
深紅の流星』！」

俺の叫びを合図に、炎の球体は轟音を上げて弾け飛ぶと、無数の火球に姿を変えた。そして夜空を駆ける流星群のように、次々と『ゴーレム』の許へと飛来する。

その鋼鉄の身体に降り注いだ無数の火球は、連鎖的に爆発を起こし、強固なはずの装甲を、まるでポロポロと崩れる砂糖菓子のようにいと也容易く吹き飛ばしていく。

火球の流星群が消え去った後、残ったのは半壊状態の『ゴーレム』の骨組みのような身体だった。

装甲を全て吹き飛ばした以上、後は一撃で事足りる。

俺は高く跳躍すると同時に右手に炎を集束させ、再び『フレイム・ロン  
グレート』を出現させた。

それを上段に高く構え、落下の速度を乗せた斬撃を放つ。

「うおおおおおおっ！」

骨組み状態となった『ゴーレム』の頭上から、真っ直ぐに股の間まで線を引く。

俺が地面に膝を曲げて着地すると同時に、裸同然のその身体から爆炎を発生させ、鉄の巨人は左右に分かれて倒れ込んだ。

激しい轟音と共に、砂塵が辺りに舞い上がる。

「フウ」

俺は短く息を吐いて立ち上がると、眼の前の残骸の一点に視線を向けた。

するとその一か所だけ、他とは違い淡い光を放っている。そこには掌に収まる程の大きさの、綺麗な瑠璃色をした正方形型の石があった。

俺はそれをゆっくりと拾い上げ、改めて観察してみる。

この石こそが、『ゴーレム』を動かす源となっていた『導力石』だ。この程度の大きさの石が、五メートルを超す巨大な鉄の塊を動かしているのだから、何とも凄まじい力を持った石だと言える。

これを『ギルド』に持っていけば討伐の証として扱われ、引き換えとして褒賞金を受け取れるという訳だ。『ギルド』に所属している者は、こういった形で生計を立てている。

その『ギルド』所属のジンが言うには、この程度の大きさの『導力石』なら、素人が扱っても暴走の危険性は無いらしい。

彼の言葉を思い出しつつ、俺はその石を、腰の辺りに下げてある道具袋にそのまま押し込んだ。……ホントに大丈夫なんだよな？

やや不安を感じそうになっていたその時、少し離れた所で砂塵が随分高く巻き上がり、何かが崩れるような轟音が聴こえてきた。恐らく、ジンとリネがもう一体の『ゴーレム』を破壊したんだろう。

俺はそれを合図と受け取り、二人の許へ行く為に荒野を駆け出した。

俺たちはつい四時間程前、一日宿泊した街『ディケット』を後にしたばかりだ。

昨日、ジンに同行する事を決めた後、俺たちはそれぞれ旅の準備などを済ませて、宿で一夜を過ごした。

そして今日。日が昇り始めた頃に『ディケット』を出て、北東の方角にある首都『テルノアリス』を目指して、ここまで歩いてきたという訳だ。

昨日の今日では首都行きの列車は運行していなかった。事後処理などが行われているというのものもあるが、やはり連続でテロが起きる事を警戒しているんだろう。

列車が使えない以上、俺たちには徒歩という手段しか残されていない。が、幸いジンの話だと、首都にはゆっくり歩いて一日半程で着くという事らしい。

そう聞くと何だか楽な道のりだと思ってしまうが、それでも距離がある事に変わりはない。しかも荒野では、さっきのような『ゴレム』に遭遇する事もある。

少々大変な道のりになりそうだと、ぼんやりと考えていた時だった。

俺の耳に、明るく元気のいい声が響いてくる。

「あ！ ねえねえ二人とも！ 川があるよ！」

俺とジンよりも少し前を歩いていたりネは、前方に幅のあまり広くない川を見つけて、嬉しそうに走り出した。

だが俺とジンは歩調を変える事無く、リネの走っていった方向へ並んで歩いていく。

「そろそろ昼時だな。休憩も兼ねて昼食にするか」

太陽が高く上った青空を見上げて、ジンは眩しそうに眼を細めながら言う。

その提案に対し俺は、すでに川縁で水と戯れているリネの姿を捉えつつ、

「約一名、すでにそのつもりみただけだな」

と、若干溜め息を混ぜながらそう言った。

辟易している俺の言葉をどう受け取ったのか、ジンはどこか可笑しそうに、フツと軽く笑ってみせる。

そんなこんなで、俺たちは川縁に腰を下ろして昼飯を食べる事に

した。

「それにしてもすごいよねえ、二人とも」

色とりどりの野菜が入った二等辺三角形型のサンドイッチを両手で持って、リネは感心したように俺とジンの顔を交互に見た。

ちなみに俺たちが食べているサンドイッチは、『デイケット』の宿屋の主人の奥さんが、「若い人たちだけで大変ね」と言っ、冷たい水の入った金属製の水筒と一緒に持たせてくれた物だ。

少々子供扱いされているような気がしたが、それは言わないでおく。

「すごいって何が？」

俺はサンドイッチを頬張りながら、気のない返事を返す。

すると、リネは俺の方に視線を向けつつ、その綺麗な小さい口でサンドイッチの端を齧り、よく噛んで飲み込んでから言葉を紡ぐ。

「何て言うか、戦いのプロって感じ？ ジンはあたしが手伝わなくても『ゴーレム』を倒せただろうし、それこそデインは一人で簡単に倒しちゃうし。だからすごいなあと思って」

「そんなの当たり前だろ？ 俺はともかく、ジンは全ギルドメンバーの中で、五本の指に入るぐらい強いって言われてる人間なんだぜ？ あの程度の『ゴーレム』ぐらい、お前が手伝う必要なんてないんだよ」

「あゝ酷い！ 何でそういう冷たい言い方しか出来ないの？」

「事実を言っただけだろ」

俺が冷たく突き放すと、リネはいつぞやと同じように不満そうに

頬をプクツと膨らませる。だから子供かったの。

するとそんな会話の端から、ジンは何かに気付いたように食事する手を止め、俺の方に視線を向ける。

「そういえばデイン。お前結局、『フレイム・リーディング紅の詩篇』は使いこなせるようになったのか？」

水筒の水を飲もうとしていた俺は、ジンのその質問で思わず動きを止めた。なぜならそれは、的確過ぎる程に痛い所を突かれたからだ。

「それは……」

俺は言葉に詰まり、口を噤んでしまう。

ジンは口にしたその『魔法』を、俺はまだ一度も使いこなせた事が無い。

『フレイム・リーディング紅の詩篇』とは、『深紅魔法』最大の能力であり、同時に最も扱うのが難しい能力でもある。

俺の師匠ミレーナは、この能力を存分に操る事で、あの『倒王戦争』を戦い抜く事が出来たんだ。

そんな彼女から技術を享受してもらった俺ではあったが、修業を始めた十歳の頃から、彼女がいなくなるまでの五年の間、結局一度もその能力を扱う事は出来なかった。

そして更に一年経った今でも、俺はまだ成功した例が無い。

「どうしてもミレーナみたいにはいかねんだよ……。やっぱりまだまだ、俺は未熟者って事なんだろうな」

わざと自虐的な言葉を吐いて、俺は水筒の中の冷たい水を一気に飲み干す。

そう、未熟者。俺はまだまだ未熟者で……、そして甘ったれなままだ。

ミレーナがいなくなってからというもの、俺は何か、自分の居場所みたいなものが忽然と消えてしまったような感じがしていた。

彼女はもういない。俺の前には現れてはくれない。何も言わずに、消え去ったんだ。



それはもしかしたら、未熟者で甘ったれな俺に対する、ミレーナりの決別の意志だったんじゃないのか？

……と、月日が経つ程に、俺はそんな風に考えてしまう。

「その『フレイム・リーディング紅の詩篇』って、どんな能力なの？」

そんな心の葛藤を知るはずもないリネは、無邪気にそんな事を口にする。

だが、とてもじゃないが説明する気になれない俺は、例の如く無言を貫いた。その場に少しの間沈黙が流れるが、俺は全く気にしない。

すると、そんな俺の態度を見兼ねたのが、代わりにジンが口を開いた。

「俺も話に聞いただけで詳しくは知らないが、炎の従属能力の事らしい。自然現象の炎であろうと、相手の『魔法』による炎であろうと、一度発動すれば全てを意のままに操る事が出来るそうだ。つまり、炎を操る敵との戦いでは、ほぼ無敵と言ってもいい程の能力なんだろうな」

「……まあ、大体そんな感じだ」

懇切丁寧なジンの説明の後に、俺は気のない感じで言葉を付け足した。

俺は気付かれないように、チラリとリネの様子を窺ってみた。

彼女はジンの説明に頷きながらも、どこか不満そうな表情を浮かべている。多分俺が自分の口で説明しなかったからだろうな。

……まあ、自分の態度が良くない事ぐらい、誰に言われるまでも無く理解してる。だけど俺は今、不満そうなりネの相手をする気になれない。

説明しにくいモヤモヤしたものが胸の辺りに溜まって、酷く気分が悪い。

別にジンを責めるつもりは無いが、出来ればこんな話の展開に持つていってほしくはなかった。

「もう食い終わっただろ？ ならさっさと行こうぜ」

俺は若干顰めっ面のまま立ち上がって、二人に背を向けた。そして二人の動作を待たずにそそくさと歩き出す。

酷く、一人になりたい気分だった。

「……何か余計な事聞いちゃったのかな？」

乾いた土が支配する荒野を歩き続けながら、あたしは何となくそう呟いた。

すると傍らを歩いていたジンが、そんなあたしの言葉に反応し、こちらに視線を向けてくる。

「キミが気にする事は無いさ。さっきの話を話題に出したのは俺だ。あいつが気にしている事に気付けなかった、俺に責任がある」

「そんな……、ジンは悪くないよ。悪いのは」

「もう止そう。過ぎた事を言っても仕方がない。それにあいつの問題は、あいつ自身が何とかするさ」

「……うん」

あたしは少し俯いてから、一人で離れて歩くディーンの背中を、そつと見つめてみた。彼の背中はどこか、「話し掛けんな！」と言ってるみたいに見える。

何だかディーンは私に対して、少し態度が冷たいような気がする。受け答えは素っ気ないし、隠し事ばかりするし……。

そりゃあ、最初はうるさく付き纏っていたあたしが悪いんだろうけど……。でもそれにしだって、もう少し愛想良くしてくれたっていいのに。

その点で言えば、隣を歩いている銀髪の男の子とは大違いだ。

彼とは昨日談話室で話した後、少しだけ話す機会があった。その時に敬語で話していたあたしに、ジンは優しい笑顔で「敬語じゃなくっていい」と言ってくれた。

その時からあたしは少しずつだけど、ディーンにするのと同じように、ジンとも普通に話せるようになった。

ジンは本当に優しい。

一人で前を歩くあの無愛想さんとは、本当に大違いだ。

その後特に何もないうまま歩き続けて、夜。

俺たちは荒野の真ん中で古い遺跡のような物を見つけ、そこで野宿をする事にした。

長い事歩き続けたせいか、足が攣りそうな感覚を覚える。

「昼間はすまなかつたな」

月明かりの中、焚き火の火種になる物を探していた俺は、不意に横から聴こえた声に振り向く。

すぐ傍にいるジンは俺と同じ作業をしながら、こつちを見ずに声だけ掛けてくる。

「お前が能力を使いこなせない事を気にしていると考えると、余計な話題を出してしまった。俺の無神経さが招いた事だ。すまない」「いや、別に……」

気にしてない、とは言えなかった。俺が劣等感を感じているのは確かだし、責めるつもりが無いとはいえ、ジンの言動に不満を持っていたのも確かだ。

ただどここういう雰囲気になるのは嫌だ。まだこれから先があると

いうのに、こんな感じのまま旅を続けたくはない。

俺は嫌な気分を振り払うために、敢えて明るく振る舞う。

「まあ、俺が未熟なのは間違いないからな。今更気にしたって始めらねえし、俺が努力すればいいだけの話だ。だから謝る必要なんてねえよ」

そう言っただけ俺は、快活にニツと笑ってみせる。するとジンは、一瞬少し驚いたような顔を見せたが、最後にはフツと微笑んでくれた。と、その数秒後だった。不意にジンは訝しげな顔をして、何かをジツと見つめている。

あまりにも突然だった為、その視線が自分に向けられているものじゃないと気付くのに、俺は少し時間を掛けてしまう。

「どうしたんだ？」

俺はそう言っただけ、ジンの同じ方向に目を向ける。そして俺もすぐさま不思議に思った。

俺たちからだいぶ離れた遺跡の端の方に、松明の明かりのような物が揺らめいているのが見える。あんな所に光源を設置した覚えは無いし、第一あそこは俺たちが入ってきた方向とは違う、全く正反對の方向だ。

つまり今この近くに、俺たち以外の人間がいるって事だ。

咄嗟に、俺とジンは物影に姿を隠した。まだいくらか距離がある為、向こうの誰かに気付かれるような事は無いだろうが、それでもなぜか身体が反応してしまった。

この感覚はきつと、警戒心に一番近い。

「俺たち以外の人間、か……」

「どう思う？ 旅人だと思っただけか？」

俺の正直な疑問に対し、ジンは若干眉根を寄せ、難しい顔をする。「今の段階では何とも言えないな。相手が何者にしろ、ここから判断出来る事は少ない。本気で確かめるつもりなら、もっと光源に近づく必要があるだろう」

「それもそうだな」

近付いて、相手が何者なのか確かめる。互いの意見は簡単に一致した。

俺たちは軽く頷き合ってから、まるで物影から獲物を狙う獣のように、闇に紛れながら前進を開始した。

遠くに見える松明の明かりを頼りに、俺たちは静かに、だがそれでいて素早く闇の中を駆け抜ける。

そして、崩れた遺跡の壁の辺りに立て掛けられている光源から、三メートル程の距離を開けて俺たちは立ち止まった。

丁度すぐ近くに、遺跡のモニュメントを支えていた柱が倒れているので、即座にその影に飛び込む。

「これ以上は近付かない方が賢明か……。デイン、辺りに人はいるか？」

「いや、今の所」

言葉の途中で、俺は人の気配を感じて黙り込む。するとその直後、暗がりから光源の傍に向かって歩く、黒い長髪の男が現れた。

俺と同じように砂埃を防ぐ為の茶色いマントを着ているが、大きい荷物のような物は見当たらない。旅人にしては、少し軽装過ぎやしないか？

すると男は右手でズボンのポケットを探り、何かを取り出した。遠目だとわかりにくいだが、どうやら懐中時計のようだ。時間を気にしているという事は……。

「誰かと待ち合わせしてるのか？」

「こんな時間に、こんな場所で。」

普通に考えれば、その二つを選んでいる時点で、人眼を避けようとしているのは間違いないだろう。

何となくだが不吉な予感がする。怪しいとしか思えない。

「なあ、ジン。もしかしてあの男……」

「ああ。最近噂になっっているテロリストの一味、かもな」

長髪の子を見つめているジンも、やはり俺と同じ事を考えていたようだ。

噂の真偽を王族と話し合う為に首都へ向かう途中で、その噂を現実のものとする存在に出くわすなんて、妙な偶然としか表現出来なかった。もしかしたら、こういうのを運命と言うのかも知れない。

「よし！ ならとっ捕まえて白状させるか」

意気揚々と飛び出そうとした俺の肩を、しかしジンが強く掴んで引き戻す。

「待てデイン！ 誰か来たぞ」

「！」

ジンに言われて、俺はよろめきながらも何とか身を隠した。心臓の鼓動が、僅かに早くなっているのを感じる。

と、その時。視界の利かない暗がりの方から、馬の走る足音が近づいてきた。

光源から離れた所で、馬の足音が聴こえなくなる。

すると、代わりにガシャ、という鎧を纏った者が歩く時のような重たい足音が聴こえ、暗がりから黒いマントを纏った何者かが現れた。フードを深く被っている為、人相も性別もハッキリしない。

その人物は長髪の子の許まで歩いていくと、ゆっくりと辺りを見回した。

「心配すんな、俺の他には誰もいねえ。そういう約束だったしな」

謎の人物に向けて、長髪の子は軽い調子で言う。

すると謎の人物は無言のまま、黒いマントの中からゆっくりと右手を差し出した。よく見るとその右手は、青紫の鎧を纏っている。

鎧を着てるって事は、正規軍の人間か……？

声に出さず、心の中で呟いていると、長髪の男が黒いマントの人物の仕草に、苦笑のような声を漏らす。

「せっかちな奴だな。ちゃんと注文を受けたモンは持ってきた。そう焦んなよ」

そう言つて長髪の男は、マントの内側から何かを取り出し、軽い調子で謎の人物に手渡した。

手渡されたのは、白い布に覆われた何か。

鎧の右手から少しはみ出しそうな大きさの物体という事以外、どんな形のどんな物なのか判別出来ない。

「さてと。じゃ約束通り、報酬を貰おうか」

長髪の男は愉快そうに、ニヤリとした笑みを浮かべた。

謎の人物は、マントの中に受け取った物品を仕舞うと、無言のまま軽く頷く。

その瞬間だった。

長髪の男の身体から勢い良く、液体のような物が噴き出したのは。

「えっ？」

一瞬、何が起きたのかわからなかった。

まるで全身の骨を抜き取られたかのように、力無く地面に倒れ込む長髪の男と、やや前傾姿勢で傍らに立つ黒いマントの人物。よく見ると鎧を纏ったその右手には、何かがこびり付いたロングソードが握られている。

その光景を目の当たりにし、漸く俺の頭が理解した。

噴き出したのは長髪の男の鮮血で、黒いマントの人物が男を斬り付けたのだと。

俺とジンはしばらく呆然としていたが、謎の人物が剣に付いた血を払い、その場から立ち去ろうとしているのを見て、漸く我に返った。

「貴様！　そこで何をしている！」

大声を上げ、先に飛び出したのはジンだった。倒れている長髪の男の傍らへ駆け付け、脈を計って生死を確かめている。

後に続いた俺は、ジンと謎の人物の間に割り込む形で立ち止まった。

すると目の前の人物は、俺とジンを見て意外そうな声を出す。

「ほう……、こんな所に旅人がいるとはな。全く、予定通りには行かないものだ」

フードの奥から聴こえてきたのは、男の声だった。顔はまだ見えないが、ここまで近付いてみるとその体型でも男だとわかる。

俺より少し高い身長。乱入者が現れたにも関わらず、大して驚いた様子も無い落ち着いた声。間違いなく、俺と一回りぐらい歳が違う。もしかしたらミレーナと同じぐらいかも知れない。

「あんた……、一体何者だ？」

まずは探りを入れようと考えた俺は、慎重にそう切り出した。

すると男は、落ち着き払った声で静かに返答する。

「この大陸に变革を齎す者だよ、少年」

「遅いなあ、二人とも。何してるんだろ？」

月明かりの下、あたしは一人ティーンとジンの帰りを待っていた。火種になる物を探してくると言って二人が暗がり消えてから、もう随分経ったような気がする。だけど一向に、二人が返ってくる気配は無い。

こんな暗い場所に女の子一人を残して帰って来ないなんて、一体何考えてるのよあの二人。



「……別に一人が心細いつて訳じゃ、ないもん」

乾いた地面に膝を抱える格好で座り、あたしは誰にでも無く強がりと言った。

そう、本当は心細い。

自分の周りに誰もいないのが、恐い。

思わず膝を抱える手に力を入れてしまふ。一人になると、どうしても余計な事をあれこれ考えちゃうから嫌だ。

もう！ 二人とも早く。

「、あれ？」

心の中で叫んでいたあたしは、周りの様子に違和感を覚えて立ち上がった。

さっきまで聴こえていた虫の合唱が嘘のように、辺りはいつの間にかシンと静まり返っている。

余りの静けさに、あたしは何だか不吉なものを感じた。

周りの虫たちは、何か得体の知れない気配を察知して黙り込んでいるのかも知れない。そう思うと、居ても立ってもいらなくなってきた。

「何？ 何か起きてるって言うの？」

言いよつた無の不安が込み上げてきて、思わずあたしは暗がりに向かって走り出していた。

ディーン！ ジン！ どこにいるの！？

俺は眼の前の黒いマントの男を強く見据え、そして警戒心を強める。

何だか得体の知れない奴だ。その身から発している雰囲気、今までに接したどの人間とも違う気がする。

「変革を齎すだあ？ 人をいきなり斬り付けるような奴が、そんな大層な奴だとは思えねえけどな」

俺は男に言い返しつつ、チラリと背後に眼をやった。

地面に片膝を付いたジンの傍に倒れている長髪の男は、見るも無残な程、紅い血で身体を汚している。左肩から胸に掛けて斜めに走った剣線からは、今も鮮血が流れ出ているようだ。

血の量から考えても、明らかに命に関わる程の重傷だろう。容体を見るジンの顔は優れない。

「クク、貴様こそ大層な口の利き方だな。ガキにしては中々見所のある奴だ」

余裕を感じさせる男の口振りに、俺は視線を戻した。相変わらず表情を覗く事は出来ないが、恐らく男はその顔を歪め、面白そうに笑っているんだろう。

俺はより一層気を引き締め、男の様子を窺う。

「真面目に答えるよ。あんた一体何者だ？ 最近この辺りの地域で噂になってる、テロリストの一味か？」

「ほう、この状況で少しでも俺から情報を引き出そうという訳か。何とも聡明な事だ」

「この……ッ！」

わざと質問を聞き流している男に、俺は若干苛立ちを覚えた。

感情に任せて思わず歩み寄ろうとする俺の肩を、しかし背後からジンが掴み、無理矢理立ち止まらせる。

「落ち着けデイン、挑発に乗るな。この男、身体から感じる覇気が普通じゃない。相当な手足れだ」

俺を制止するジンの言動を見て、眼の前の男は感心したような声を漏らす。

「クク、面白いガキどもだな。貴様らこそ何者だ？ ただのガキがこんな所で野宿してる訳無いだろ？」

「……俺はジン・ハートラー。『ギルド』に所属している者だ」

「！ お、おいジン！」

いきなり身分を明かしたジンの言葉に、俺はかなり焦った。得体の知れない人間に自分の情報を簡単に教えるなんて、いつもの冷静なジンらしくない。

躊躇う俺を他所に、ジンは眼の前の男を見つめたまま、落ち着いた口調で答える。

「こいつは俺たちが喋るまで自分の事を明かさないうもりだ。お前が考えている通りリスクはあるだろうが、今は情報を手に入れるのを優先するべきだ」

ジンの台詞を聞いて、男が鼻を鳴らすのが聴こえた。確かにここは、ジンの言う通りにした方がいいかも知れない。

「……俺はデイン。こいつの旅の連れだ」

例によって俺はフルネームを名乗らなかつた。ジンの意見には賛成したが、バカ正直に全てを打ち明ける程俺は愚かな人間じゃない。ジンもそれを理解しているのか、特に何も言つてこない。

すると男は、フードの内側で忍び笑いを漏らす。……さっきからよく笑つてるけど、一体何がそんなに面白いんだこいつは？

「なるほど、『ギルド』の人間か。という事は、貴様らもこれから首都へ向かうつもりなんだろう？ なら挨拶ぐらいはしておかないとな」

そう言つて、男は鎧を纏つた両手でフードを捲つた。松明の明かりに晒され、男の短く尖つた山吹色の髪が露わになる。

「俺の名は、アーベント・ディベルグ。貴様らの察しの通りテロリスト……いや、『反王族軍』のリーダーだ」

「『反王族軍』だと？」

黒いマントの男、アーベントはニツと強烈な笑みを見せた。たつたそれだけの動作で、俺の身体に凄まじい威圧感が訪れる。やっぱりこいつは只者じゃない。

「あんたの目的は何だ？ 何を企んでる！？」

「企むも何も、今告げた通りだ。貴様ら程の頭の奴なら、それがどういう意味を持つのか、容易に理解出来るはずだろう?」

自らをテロリストと名乗るアーベントは、探るような眼付きで俺たちを見つめる。

奴が口にした、反王族という言葉が意味するもの。それはつまり、こいつの狙いは首都に住まう王族たちって事だ。しかも大層に軍隊なんて名前を掲げている以上、殺すのが目的と考えるのが自然だろう。

王族を殺して、今の政権を崩壊させるのが目的なんだとすれば。

「あんたまさか、『倒王戦争』の生き残り……、しかも前テルノアリス王派の人間か!」

「……」

アーベントは答えない。不敵な笑みを作ったまま、何も語ろうとしない。

だが、それも長くは続かなかった。

「お喋りはここまでだ、ガキども」

冷徹さを感じさせる言葉と共に、アーベントが黒いマントの内側で剣を抜くのがわかった。

戦闘開始の合図。そう瞬時に判断した俺は、怒鳴るように叫ぶ。

「離れるジン!」

「!」

瞬間、俺の意図を察してくれたジンが、跳躍して後方に下がる。

その直後、俺は自分の周囲に炎の渦を作り出した。速攻で戦いを終わらせる為、俺は即座に『クリムゾン・レイン深紅の流星』の発動を選ぶ。

と、その時だった。

剣を抜き、構えようとしていたアーベントの表情が、とてつもない強烈な笑みに支配された。

「クハハハハ! これは驚いた! 貴様のようなガキが『魔術師』とは! しかもその炎……! 『深紅魔法』か!」

「!?!?」

俺は驚きのあまり、予備動作の途中で固まった。それと同時に、発生していた炎が尻すばみに勢いを弱めていく。

一体どういう事だ？ こいつは俺の炎を見ただけで、それが『深紅魔法』であると簡単に言い当てた。

今まで戦ったどんな相手、例え俺と同じ『魔術師』でさえ、炎を見ただけでこれが『深紅魔法』だと気付いた者は一人もいなかった。なのにこいつは……！

「あんた……、何でこれが『深紅魔法』だつて……」

「ククク、そんなに不思議か？ この俺が『深紅魔法』を知っている事が！」

呆然とする俺を嘲笑うかのように、アーベントはロングソードの切っ先をこちらに向けようとする。

だがその時。

「『白滅剣』！」

「！」

俺たちの間に割り込むような形で、頭上から剣を構えたジンが落下してきた。

左右の手に握られた、刀身が黒と白の二つの剣。

ジンは左手に握った刀身が白い方の剣を、地上のアーベントに向けて振り下ろした。

直後、白い光と共に衝撃波が押し寄せ、俺の眼の前で弾け飛ぶ。

俺は一瞬両腕で顔を覆ったが、すぐにその腕を退けて前方を見た。すぐ眼の前には、片膝を付いた状態のジン。その左手に握られた白い剣はアーベントの身体ではなく、乾いた地面を両断していた。

ふと気付くと、いつの間にかアーベントは、光源と暗がりの境目辺りまで移動している。恐らくマントの下に鎧を纏っているはずだが、今の一瞬である場所まで移動したらしい。だとすれば信じ難い移動速度だ。

「悪いが、貴様らとのお遊びで時間を潰す訳にはいかない。俺を止

めたければ追ってくるがいい。先に首都へ行っているぞ」

ロングソードを仕舞いつつ、不敵な笑みを浮かべて告げるアーベント。ゆっくりと後退るその姿が、徐々に暗がりには飲まれていく。

「待  
」

奴を制止しようとして、俺が手を伸ばし掛けた瞬間だった。

火薬が弾けるような破裂音が断続的に響き、叫ぼうとする俺の声を遮る。聴き間違いじゃなければ、今のは銃撃音のはずだ。

銃撃音はすぐに止んだものの、俺とジンは何事かと身構えてしま  
う。

辺りに訪れる静寂。それを破るかのように暗がりから現れたのは、  
右手に銃を構えたりネだった。

俺たちは互いにそれを確認すると、少し安堵して構えを解く。

「何だ、リネか……」

「二人とも大丈夫？ もう、中々帰って来ないから心配したじゃない」

「あ、いや悪い。……って言うかお前、今何で撃ったんだよ？ 別に指示なんか出してないだろ？」

俺がそう言うと、リネはバツが悪そうに右手で軽く頭を掻きながら、躊躇いがちに口を開く。

「あ、えっと。何か怪しい感じの二人が戦ってるのが見え  
たから、思わず……」

「ああ？ って事はお前、相手が誰なのかもわからずに撃ってたの  
か！？」

信じられねえ事すんなこの女……。大胆って言うか考え無しって  
言うか……。

俺が啞然とした顔をすると、リネは「い、いいでしょ？ 結果的  
には何ともなかったんだから！」、なんて口走りやがった。全然よ  
くねえし、俺やジンに当たってたらどうするつもりだったんだよ？

「おい、お前！ しつかりしろ！ あの男に何を渡していたんだ！  
げんなりとしていた俺は、切羽詰まったジンの声でハツと振り返

った。

見るとジンは、地面に倒れている長髪の男に激しく問い掛けている。あの様子から察するに、恐らく男はもう永くないのだろう。

と、長髪の男は口をパクパクと動かし、何かを伝えようとしていた。

「何だ？ 何が言いたいんだ？」

ジンが問い掛けても男は声が出せないらしく、返事は一向に返って来ない。

やがて長髪の男は、俺たちが見ている前で両眼を開いたまま動かなくなった。

ジンは悔しそうに眼を伏せると、右手で男の顔を覆つようにして、開いたままだった<sup>まぶた</sup>瞼を閉じさせた。何とも言えない感情が、俺の胸に押し寄せてくる。

すると、その時だった。

「あ……」

不意に背後から微かに漏れる声を耳にして、俺は何気なく振り返る。

するとリネは、さっきまでと打って変わった顔面蒼白の表情で立っていた。気のせいか、微かに身体も震えているように見える。

「あ……、ああ……」

「？ リネ……？」

何か彼女の様子がおかしい。気のせいかと思っていた震えは徐々に大きくなり、その華奢な両足は、逃げようとするかのように後退りまでしている。

長髪の男が死んだ事でショックを受けているんだろうか？ いや、それにしただって今の様子は尋常じゃない。

「お、おい。大丈夫」

「いや……っ！ いやああああああっ！！」

「！」

突然悲鳴を上げたかと思うと、リネは意識を失って地面に倒れ込

む。

訳がわからないまま、俺は倒れたリネの傍らに走り寄り、その華奢な身体を抱き上げた。

柔らかい感触と共に、彼女の体温が腕を通して伝わってくる。だが、今はそれに気を取られている状況では無かった。

「おい、リネ！ しつかりしろ！ リネ！！」

倒れた彼女の上半身を抱えたまま、俺は何度も強く呼び掛ける。彼女から返事が返ってくる事は、無かった。

やがて夜が明け、太陽が東の空に昇り始めた頃。俺たちは再び、荒野の真ん中を歩いていった。

あの後結局、リネは明け方になるまで目を覚まさなかった。出発の直前、俺とジンは彼女に倒れた理由と体調を尋ねてみた。だが返答は。

「……………うん、よくわかんないや。あ、でももう平気だから心配しないで。とにかく今は、早く首都に行かないといけない。そうですよ？」

というものだった。

そんな彼女の言動から、俺とジンは言葉を交わさずにしてある事を共通認識としていた。

話せない、或いは話したくない事が彼女にはある、と。



そして俺たちは、半ばリネに急かされる形で首都行きを再開させたのだった。

当の本人であるリネは気不味いのか知らないが、俺たち二人から少し離れた前方を歩いている。まるで昨日の俺と逆のパターンだな。

「あのアーベントと言う男。これから本当に首都の王族を狙うつもりだと思うか？」

リネの背中を見つめていた俺は、ジンの言葉で我に返った。俺は少し思考を巡らせ、昨夜の出来事を頭の中で整理してから口を開く。「あいつの口振りには嘘はなかったように俺は思う。王族を直接狙うかどうかは別として、何かを起こすつもりなのは間違いないんじゃないか？」

俺はあいつの言動を思い出しながら、別の事も考えていた。

あの男には聞きたい事がある。

それは、なぜ俺の炎が『深紅魔法』だとわかったのかという事だ。昨日の口振りから察するに、あの男が『倒王戦争』の生き残りだというのは間違いないと思う。

だが、果たしてたったそれだけの事で、俺の炎が『深紅魔法』だと見抜けるものなんだろうか？

考えられる可能性。あり得るかも知れない事実。

まさか、あいつ。

「まあ現状ではそう見るのが妥当か。あの長髪の男から受け取っていた物も、何かはわからないままだしな」

少し悔しそうなジンの言葉で俺は思考を止め、チラリと背後を振り返った。

俺たちが一夜を過ごした遺跡の姿は、すでにかなり後方に霞んでいる。

結局、助からなかったあの長髪の男をそのままにはおけず、俺とジンは二人で地面に埋葬してやった。ジンは首都に着いてから、正規軍に依頼して遺体を回収してもらおうと言っていた。

俺が視線を戻すと、それを待っていたかのようにジンは再び口を開く。

「あのアーベントと言う男の事も気になるが……」

「リネの事か？」

言い淀むジンの言葉を察して、俺は代わりに結論を告げる。そしてもう一度、前方を歩くリネの背中を見つめた。

彼女の背中には相変わらず、「近寄らないでほしい」という雰囲気醸し出している。

「何にせよ、本人に話す気が無いんだ。なら俺たちに来るのは、黙って見守る事だけだろ」

少し冷たいかも知れないが、リネが話そうとしないのは事実だ。

本人に話す気が無い以上、周りが何を言っても無駄な事は、それを実行してきた俺が一番よく知ってる。

だけどジンは、そんな俺の考えに賛同はしているようなものの、納得はいっていないという感じだ。少し心配そうな顔付きで俺に言うってくる。

「なあ、ディーン。自分の事や師匠の事で頭がいっぱいなのはわかるが、もう少しリネの事も気に掛けてやったらどうだ？ まだ知り合って日が浅いとはいえ、ここまで旅してきた仲だろ？」

「それはまあ、そうだけど……」

正直な所、リネとの距離感が俺にはよくわからない。

一人旅をしている俺にとって、人付き合いはかなり軽薄なものだ。今まで人と接する機会が無かった訳じゃないが、旅の道中、俺は常に一人だった。意識的にそうしていた面もあるし、根無し草で大陸の各地を転々としていたせいもある。

だからこそ、初めて出来た旅の同行者に対する接し方を、上手く図る事が出来ない。こんな複雑な心境になる事自体初めてなんだ。

あれこれ考えつつ言い淀む俺に、ジンは無慈悲なまでに追い打ちを掛けてくる。

「何かを抱えて生きているのは、お前だけじゃないんだぞ」

「そんな事……」

わかってる、とまでは言い切れなかった。そうだ、俺は何にもわかっていない。

結局俺は、自分の事しか考えていないんだ。ミレーナの事も『深紅魔法』の事も、元を辿れば、そこにはどうしようもない事実がある。

ミレーナを探しているのは、自分が可哀想だから。

『深紅魔法』を気にするのは、自分が未熟者だから。

俺の行動理由の根源は、全て自分の為。

我ながらなんて自己中心的な人間なんだ。そんな勝手な人間が、一体誰の事を気に掛けられるって言うんだよ？ 他人の事を気にする余裕なんて、今の俺には無い。自分が何をすべきなのかもわからないんだから。

「……すまない。また余計な事を言った」

俺の表情から何かを察したのか、ジンは申し訳なさそうに謝り、

「俺の悪い癖だな」と言って苦笑した。

「いや……。お前の言ってる事は正しいよ」

ジンと同じように、俺は自虐的に苦笑してみせる。

そのぐらいの事しか、出来なかった。

恐ろしい光景だった。

紅黒い血溜まりに沈む人々。どことも知れない虚空を見つめたまま動かない、見開かれた両眼。辺り一面に飛び散り、視界を染める血の海。

そして膝をついた自分の両手が、鮮血で紅く染まっ

寒気を感じて、あたしは両腕を抱えるように抱いた。微かに身体も震えている。

ダメだ。こんな状態でいる事を後ろの二人に気付かれたら、また余計な心配をさせてしまう。

それに、恐い。あたしの過去が、二人に知られてしまうのが、とても恐い。

あたしの過去を知れば、きっと二人も今までの人たちと同じ反応を見せるだろう。そんな事になるのだけは絶対に嫌だ……！

あたしは震えのせいで止まりそうになる足を必死に動かした。

お願い、どうか気付かれな……！ と、そんな事を思いながら、両眼をギョツと固く瞑る。

と、その時だった。

「漸く見えてきたな」

後ろから聴こえたディーンの声で、あたしはゆっくりと眼を開ける。すると少し遠くの方に、白い大きな壁と、お城のような建物が見えた。

その光景を眼にしてあたしは息を飲む。ごく自然に、そして素直に、その大きさに感嘆してしまった。

「あれが、首都『テルノアリス』……」

そう呟いた後であたしは気付いた。

いつの間にか、身体を支配していた恐怖と震えが消え去っている。それが首都の大きさに驚いたせいなのか、それとも……。

そんな事を考えていたら、横合いからディーンがあたしの顔を覗き込んできた。

「何だ？ お前ひよつとして、首都を見るの初めてなのか？」

とても意外そうな声でディーンは聞いてくる。あたしが変な事考えてたなんて、思ってもみないような表情だった。

あたしは何事も無かったように見せる為、敢えて明るく振る舞う。さっきまでの色んな事を、悟られたくなかった。

「う、うん。だから驚いちゃった。すごく大きいんだね。　　よ〜

し！　じゃあ早く行こ！　もっと近くで見たいし！」

そう言っただけは、ディーンの右手を無理矢理握って走り出した。

「ジンも早く〜！」

「お、おい！　危ねえだろ！」

あたしに引つ張られながら迷惑そうに言うディーンは、それでもあたしの手を振り払おうとはしなかった。

本当に意外だったけど、あたしはそれがとっても嬉しかった。

## 第四章 過去から逃れる術は無く

首都『テルノアリス』はジラータル大陸最大の都市であり、大陸内の政治を動かす王族たちが住まう、巨大な城がある街だ。都市全体を囲むように、二十メートルにも及ぶ高さの外壁が東西南北二キロメートルに亘って張り巡らされている。

リネは今回が初めてらしいが、俺は昔、ミレーナに連れられて何度か首都へ来た事がある。俺も初めて首都を見た時は、その大きさに驚いたものだった。

上空から見る事が出来れば、正方形型になっているはずの首都の中心にあるのが、王族の住む『テルノアリス城』だ。そして外壁の部分には、東西南北にそれぞれ二カ所ずつ、徒歩専用の出入り口となる門があり、その門の横を通過する形で線路が設置されていて、都市の内部四力所に列車を止める為の駅がある。

俺たちは徒歩で、南西門から『テルノアリス』に入る事にした。

体格の良い二人の門番が控える検疫所を抜けて内部に入ると、そこにはまさしく、別世界が広がっていた。

「うわあ〜！ すごい！」

都市の光景に眼を輝かせながら、リネは忙しなく辺りを見回している。

まあ無理も無いか。俺も初めてこの街並みを見た時は、多分あれぐらい興奮してただろうし……。

今まで歩いてきた荒れ果てた荒野から一変、まさに様変わりという感じだ。

大小様々な大きさの建物が並ぶ大通りには、武具を扱う店、野菜や果物売る商店、昼間から賑わっているような酒場、お洒落な看板を軒先に飾る洋服店など、初めて見る者にとっては眼を引く物ばかりだ。大通りを行き交う人の数も、大陸に点在するどの街よりも遙かに多い。しかも広さだって比較にならない。俺も何度か来た

事があるとはいえ、気を付けていないと道に迷いそうだ。

「とりあえず、俺はこれから城にいる王族たちに謁見を試みるつもりだが、お前たちはどうする？」

遠く都市の中心に見える白い巨城を見つめた後、ジンがこちらに視線を投げつつ尋ねてきた。

「そうだな、俺たちは」

と、逡巡しようとしていた俺の耳に、明るく呑気な声が届いてくる。

「あ！ あれ何だろ！？ おもしろそ〜！」

俺が振り向いた時には、すでにリネは何かを見つけて走り出していた。

ジンと共にその場に取り残された俺は、何処かへ走っていくリネの背中を見つめ、やれやれと思いつながら告げる。

「……とりあえず、俺はあのバカを回収してくる」

「フフ。ご苦労様、だな」

苦笑するジンを横目に歩き出そうとした俺は、しかしある事を思い付いてその足を止める。そういえばまだ、肝心な事を決めていなかった。

「王族への報告が済んだら、どこで合流する？」

「ん？ ああ、そうだな……」

問い掛けると、ジンは顎に手を当ててしばらく考え込んだ後、何かを思い付いたようにこちらを見た。

「都市の東側、ジェニツク通りにある『ライム』と言う店を知っているか？」

「『ライム』？ ……いや、聞いた事ねえけど」

「わからないようなら、この先に都市の案内所がある。そこで道を尋ねるといい」

ジンは軽く通りの前方を指差しながら、どこか面白そうな表情で告げる。

しかし何だろっ？ わざわざ案内所に行ってまでその店、『ライ

ム』とやらに行かせたい理由があるのか？

「その店じゃなきゃダメなのか？　そこに何かあんのかよ？」

「まあ、行ってみればわかるさ。ジン・ハートラーの知り合いだと  
言えば、それで通じる」

「はあ……」

生返事を返す俺の肩をポンと叩いて、ジンは人混みの中に消えて  
いった。

対して、一人取り残された俺はと言えば、首を傾げる事しか出来  
ない。

何だか隠し事をされてるみたいで気持ちが悪いんだよな。リネに  
散々隠し事をしていた俺が言う台詞じゃないんだろうけど。

「ってそうだ！　リネの奴どこ行った!？」

今更のように思い出した俺は、すぐさま辺りを見回してみた。

だが当然と言うかやっぱりと云うか、近くにリネの姿は見当たら  
ない。大通りには昼間というせいもあってか、多くの人々が行き交  
っている。

悪いジン。『ライム』とか言う店に行くのが遅れそうな気がして  
きた。

「……やべえ。迷った」

リネの奴を探してウロウロしてる内に、気付けば俺は道に迷って  
いた。

ジンに教えられた案内所に行かずに、リネを探していた事が仇に  
なった。何度か来た事のある街だからといって油断していたという



のもある。ちゃんとジンの言う事を聞いておけば……。

「ん？」

肩を落とし掛けていた俺は、視界の端にある物を見つけた。

それは店の看板。数メートル先にある、四角く区切られた一階建てのレンガ造りの建物。その上部に掲げられた鉄製の看板には、『LIME』と書かれている。

そう、つまり『ライム』と。

「もしかして、ジンが言ってた店ってこれの事か？」

おいおい、見つけちゃったよ。まさかりネより先にこっちを見つけるとは……、何か複雑な気分だ。

そう思いつつ、俺は少し離れた所からその建物の様子を窺っていた。

建物には『LIME』と書かれた看板以外、目立つた装飾類が見当たらない。どういう店でどんな商売をしているのかも、外側からではわからなかった。

何だか少し、怪しさすら感じてしまう。こんな得体の知れない店にジンの奴が入りしている事もそうだが、あいつが何のために俺をここへ行かせようとしていたのかがさっぱりわからない。

いずれにしろ、ここでジツとしても埒が明かない。この店が何なのかを確かめる為には、中に足を踏み入れるしかないだろう。意を決して、俺は店の入り口に向かって歩き出した。

しかし、その瞬間。

「また会ったな、紅い髪の少年」

「！」

突然、背後から聞き覚えのある声がして、俺は思わず立ち止ってしまう。声の主に心当たりがあった。

昨日の今日で忘れるはずがない。昨夜あの遺跡で遭遇した謎の男、アーベントの声だ。

「おっと。動くなよ」

振り向こうとした俺の背中に、何か鋭く尖った物が触れた。恐ら

くナイフのような物だろう。

俺はその場に立ったまま、背後のアーベントに声を掛ける。

「まさかこんな所であんたに会うとは思わなかったぜ。買い物でもしてたのか？」

「クク、本当にそう思うか？」

背後でアーベントが愉快そうに笑う。

動くなと言われたが、俺はチラリと背後に視線を向けた。アーベントは最初に会った時と同じように、フードを被ってその表情を隠している。

「冗談に決まってるんだろ。……ここで何してやがる」

「まあ、ちよつとした下準備をな。その作業も終わりそうだという所で、貴様を見つけたという訳さ。 どうだ？ 少し話さないか？」

「話す？ テロリストが俺に何の用だ？」

怪訝な顔で俺が尋ねると、アーベントは少し辺りを気にするような素振りを見せた。

「ここでは人目につく。場所を変えようか」

「俺がそれに従うと思うのか？」

挑戦的な俺の言葉に、アーベントは「ふむ……」と声を漏らす。

そして辺りを見回すようにしてこんな事を言った。

「なら仕方ない。昼間から街の大通りで、惨劇を見る事になるだけだ」

「！ てめえ！」

俺は瞬時にその言葉の意味を悟った。周りの人間を人質にとって、俺を脅している。

通りを歩く人々は、俺たちの間でどんなやり取りが行なわれているか気付いていない。自分たちの身に、危険が迫っているという事にすら。

「どうする？ 少年」

「……！」

肩越しに見えるアーベントはフードのせいで表情が読み取れないが、その声を聞けばわかる。こいつは本気だ。俺が従わなければ、本気で周りの無関係な人間に危害を加えてしまうだろう。

こうなるともう、選択の余地は無い。

「……わかった」

黙って従う事に若干の抵抗を覚えたが、周りの人間を巻き込まない為にはこうするしかない。

俺が同意すると、アーベントは満足そうに口を開いた。

「それでいい。じゃあ、少し歩こうか」

背中をナイフのような物で軽く押され、俺はアーベントと共に歩き出す。

通りを行き交う人混みに紛れ、首都を狙うテロリストと、まるで友達のように街中を歩く。

何とも奇妙な体験の幕開けだった。

何とも無様な事ながら、あたしはいつの間にか二人と逸れてしまった。

やっぱり、無理してはしゃぎ過ぎたのがいけないかったかな……。

自分の様子がおかしい事を二人に悟られたくなくて、カラ元気みたいな感じで動き回ったのが完全に仇になってるよね。

反省しつつ、あたしは通りをキョロキョロと見回す。だけでもちろん、そんな事をしただけで二人が見つかるはずもない。

何だか自分が情けなくなつて、あたしは思わず溜め息をついた。

今頃二人はどうしてるんだろう？ あたしの事を心配してくれそ

うなジンならともかく、ディーンは「何で俺が探さなきゃいけないんだよ、メンドクせえ」とか言つて、探そうともしてくれない気がする。あたしに対して冷たいもんなあ、ディーンは。

でも……、と思つて、あたしは自分の右手を見つめてみる。

この街に入る少し前、あたしが無理矢理握った手を、ディーンは振り払おうとはしなかった。しばらくして照れ臭くなったあたしが手を離すまですつと。

それがとても意外で、とても嬉しくて。

「探してくれてると良いな、あたしの事」

気が付いたら、そんな風に呟いて微笑んでいた。それが隠しようの無い本音だと理解しつつ、あたしはすぐさま気を引き締め直す。

探していてはほしいけど、やっぱり相手任せにしてたらダメだよ。ね。こういう時こそ自分から探しに行かないと！

そう思つて歩き出そうとした時だった。

「……………」

通りの前方。裏通りと呼ばれそうな感じの脇道の方に、マントを着た数人の人影が入っていくのが見えた。

何だろ、今の人たち？ 普通に考えれば、何も裏通りに人が入っていくなんて珍しい事じゃないかも知れない。だけどなぜか、あたしにはそれが気になつてしまう。

直感と言うのか、それとも予感と言うのか。

どっちにしても、その光景にはあたしの気を引き付ける何かがあった。

「……………尾行してみようかな」

そう口にした時には、身体はもう動き出していた。

もしかしたら、ディーンやジンに会えるかも知れない。

と、言い訳っぽく心の中で付け足して、あたしは裏通りへと足を踏み入れた。

俺がアーベントに無理矢理連れて行かされたのは、街の外壁近くにある裏通りのような所だった。

方角がわからないからハッキリしないが、『ライム』から歩かされた方向を考えると、どうやらここは街の南東、丁度外壁の角の部分のようだ。いくら人が大勢いるこの都市とはいえ、さすがにここまで来ると人気は全く無い。

「ここまで来れば問題無いだろう。それじゃあゆっくり話そうか、少年」

背後でアーベントが立ち止まるのを感じて、俺は前方に進んで距離を取り、振り返って奴の方を睨む。

すると、アーベントはゆっくりとした動作で深く被っていたフードを捲った。短く尖った山吹色の髪が現れ、不敵な笑みを湛えた奴の顔が露わになる。

「単刀直入に聞こう」

僅かに身構える俺を他所に、アーベントはこう続けた。

「少年、貴様はミレーナ・イアルフスの関係者だな？」

「！」

奴自身の言葉から、俺は驚きと共に確信を得る事が出来た。

勘違いなんかじゃない。こいつはやっぱり、ミレーナの事を知ってる！

ここまで来ればもう、自分の素性を隠す意味も必要も無いだろう。俺は奴の動きに警戒しつつ、素直に答える事にした。

「ああ、あんたの言う通りだ。ミレーナは俺の育ての親であり、『魔術』の師匠でもある。戦争孤児だった俺を拾い、育ててくれた恩人だ」

「ほう……、何とも慈悲深い事だな」

「俺もあんたに聞きたい事がある」

どこか余裕を感じさせるアーベントに向かって、俺は昨夜から疑問に思っていた事をぶつける。

「あんたは何でミレーナの事を知ってる？ どうして俺の炎を見ただけで、それが『深紅魔法』だってわかったんだ？」

俺が問いかけると、アーベントはフンと鼻を鳴らし、何かを思い出すかのように語り始めた。

「何も難しい事じゃない。貴様が考えている通り、俺は『倒王戦争』当時、『魔王』側について『反旗軍』と戦った者だ。だから知っているんだよ、貴様の師匠ミレーナ・イアルフス。奴とは戦場で何度も顔を合わせた事があったからな」

アーベントは語りながら、警戒する俺の隣を悠然と歩いて通り過ぎていく。

「わかるか？ つまり俺は戦場で、奴の『深紅魔法』を何度も見た事があるのさ。それに俺自身、『魔術』の才能は無いが『魔術』の性質を見抜く事には長けている。故に貴様の力が何なのか見分ける事など、造作も無いという事だ」

立ち止まり、俺の方を振り返るアーベントは、再び不敵な笑みを見せた。

その表情に少々の苛立ちを覚えながら、俺は奴を睨み付け、再度問い掛ける。

「あんたは昨日、自分の事を『反王族軍』のリーダーだと言ってたけど、それはつまり、今の王族を殺すのが目的って事だよな？ そんなくだらない事をして、一体何がどうなるってんだ？」

「はて……、問われている意味がわからないな」

言いつつアーベントは、心底呆れたような表情を見せた。気だるそうに右手で頭を掻いたかと思うと、だが次の瞬間には、俺の心臓を射抜くかのような鋭い眼差しを向けてくる。

「どついう意図があつてそんな質問をしている？ 王族を殺そうと

する俺を制止する為か？ それとも俺の行いを愚行だと決めつけ、否定する為か？ だとすれば失笑を禁じ得ないぞ少年。どうやら貴様は、何もわかっていないようだな」

「何だと？」

「何かを変える事が目的なのではない。戦いを求める事に、戦う事に意味があるのさ。『あの戦争』で歪んでしまった俺のような人間は、所詮そうする事でしか己の『存在意義』を確かめられない。」

それは少年。『魔術師』である貴様自身にも言える事だぞ」

俺の周囲をゆっくりとした歩調で回りながら、アーベントは躊躇う素振りも見せず続ける。

「『魔術師』とは歪んだ存在だ。相手を殺す事に特化した自らの技術を使い、人の命を奪う。そんなおぞましい行為がこの大陸で、一体どれだけの間続けられてきたと思う？ 長きに渡る争いで数が減少すらしているものの、未だに『魔術師』が存在し続けるのはどうしてだと思う？ ……答えは簡単だ。『魔術師』となった者たちも皆、戦いを求めているからだよ。他者と争い、戦う事でしか己の『存在意義』を見出せない。俺と貴様の間には、区別出来る差など何一つ無いのさ」

「そんな事」

「貴様の親であり、師匠でもあるというミレーナ・イアルフスはどうだった？ 今の貴様のように、胸を張って違うと否定していたのか？」

「！」

即座に否定しようとした俺は、その言葉で口を噤んでしまう。

そんな俺の反応を面白がっているかのようになり、アーベントは再び俺の正面に立つとニヤリと笑ってみせる。

「フツ、どうやら思い当たる節があるようだな」

思わずとはいえ黙り込んでしまった自分自身に苛立ちを覚え、俺は奥歯を強く噛み締める。

実際、奴の言葉は的中していた。

ミレーナは俺の前で、一度だって自分の立場を誇った事など無い。常日頃から繰り返し、自分の事を『ただの人殺し』だと言って蔑んでいた。

自分は決して、称賛されるような立派な人間ではない、と。多分、彼女は否定し続けていたんだろう。

人を殺す為に造り出されてしまった技術を。

自らが手にした力である、『魔術』を。

俺は、そんなミレーナを見ていたくは無かった。自分を蔑む言葉を吐き続ける彼女を眼にするのが、耐えられなかった。

だから俺は、自分が『魔術師』になつて証明しようと思ったんだ。『魔術』は人を殺す為だけの技術ではない、と。

だけど眼の前のこいつは、そんな経緯を一切知らない。知っている訳が無い。だからわからないんだ。

俺の気持ちだ。俺の思いが！

「貴様も認めてしまえば楽になるぞ？ 俺『たち』は、互いに戦いを求め続ける存在なのだ。そして理解するんだ。戦いを、争いを求める為には、それを奪おうとする現政権、元老院や王族の者どもを抹殺するしかないとな！」

アーベントは愉悦に塗れるかの如く、感情を高ぶらせながら語る。だが、感情が高ぶり始めているのはこっちも同じだった。

「……何もわかってないのはあんたの方だろ」  
拳を硬く握り締め、俺は口を開く。

胸の内に、煮え滾るような熱い感情を生み出しながら。

「邪魔だから殺そうつてののかよ。戦いを求める為なんていうくだらない理由で、ミレーナが、『英雄』たちが必死の思いで作った今の平和を、あんたはブチ壊そうつて言うのか？」

溢れ出る怒りに任せて、俺はアーベントを強く睨み付けた。

だが奴は意に介した様子も無く、氷のように冷たい眼差しで見つめ返してくる。

「フン、『平和』だと？ 貴様は一体、この世界の何を見ている？



どこを見てそう言っている？ 戦争と呼ばれない争いなど、この世界のどこにでも存在しているだろう。それこそ数え切れぬ程にな。それを無視して貴様は、『世界は平和だ』などと綺麗事を抜かすのか？ クク、何とも傲慢な考え方だな。覚えておくといい。『争いの無い世界』など、所詮は夢物語に過ぎんだ。争いが生まれる事で戦いが起こり、戦いが起こる事で戦争へと繋がるのさ」

「ふざけんな！ あんたのその言葉こそが傲慢だ！ 戦いを起こそうとしてる張本人が、そんな台詞吐いてんじゃねえよ！」

「クク、何とでも言え。すでに戦いの準備は整った。この首都を相手にした戦いは直に始まる。止められると言うのなら、力尽くで止めてみせろ、イアルフスの弟子！」

アーベントが高らかに叫ぶと、周りの路地から複数の足音が聴こえてきた。

俺の周囲を取り囲むように現れたのは、黒いマントに身を包み、眼の辺りだけを隠す白い仮面を付けた六人の人間。

容姿がはっきりしないが、男四人に女二人なのは間違いない。そいつらは無言のまま、ジツと俺の方を見つめている。

俺は炎剣を造り出す為、僅かにだが右手に意識を向けつつ、正面のアーベントを見据える。

「大人数で俺を撈り殺そうって訳かよ？ あんたって見た眼通り悪趣味なんだな」

「褒め言葉として受け取っておこう。心配しなくてもこいつらはただの見物人だ。貴様の相手は、直々にこの俺がしてやる」

そう言っつて、アーベントは黒いマントの内側からロングソードを抜き出した。切れ味の良さそうな刀身に、奴の不敵な笑みが映り込む。

それを合図と受け取って、俺はアーベントに向かって突貫した。

右手に発生させた炎が、一瞬で紅い剣に姿を変える。

俺はそれを上段高くに構え、勢いを付けて一気に振り下ろす。

するとその一撃を、アーベントは剣で難無く受け止めた。固い刀

身同士がぶつかり、衝撃音が辺りに響く。

……つて、ちょっと待て。どうして炎が生まれなんだ!?

俺が『魔術』で造り出したこの剣には、触れた物に対して炎と爆発を齎す能力がある。

だがその能力は、いつまで経っても発生する気配が無い。ただ鏝迫り合いの状態が続くばかりだ。

「『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』か。『深紅魔法』の基本技の一つだな」

ギシギシと剣を軋ませながら、アーベントは俺の手元を見つつ嘲笑うかのように告げてくる。さっき言っていた通り、どうやらこいつは本当に、『深紅魔法』の事を知り尽くしているらしい。

「だけど、一体どうなってるんだ? どうして俺の『魔術』が『不思議で仕方無い』と言いたそうだな」

「!」  
俺の表情から内心を悟ったのか、アーベントは不敵な笑みを浮かべて言う。確かにその通りだが、こいつに指摘されると酷く気分が悪い。

俺が露骨に顔を顰めると、アーベントは待っていたと言わんばかりに続ける。

「なぜ貴様の『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』は、俺の剣に炎と爆発を齎そうとしないのか。答えは簡単だ。この剣は『導力石』を用いて造った、『魔術』に対する耐性を備えた特別製の物なんだよ。首都を叩く以上、敵側に『魔術師』がいる可能性を考慮しない訳が無いだろう?」

「そうかよ。そいつはご苦労な事だ、なっ!」

俺は無理矢理剣を弾き返し、アーベントと距離を取る。

『導力石』を用いた特別な武器まで準備しているこの男の事だ。まだ何か隠し玉を持つてる可能性は充分にあるだろう。

すると案の定、アーベントが愉快そうな笑みを湛えながら、不審な動きを見せる。

「計画の実行を目前にして、貴様に会ったのも何かの縁だ。ついでに面白い物を見せてやろう」

「あ？」

意味深な発言をするアーベントを、俺は怪訝に思いながら見つめ、同時に警戒する。

すると、奴はマントの内側から、分厚い鎧を纏った左腕を出し、それを胸の前辺りに掲げてみせた。

その瞬間、『それ』は眼の前で引き起こされる。

ゴウツという音がしたかと思うと、鎧に包まれた奴の左手の部分に、激しく燃え盛る真っ赤な炎が生まれた。

あれは明らかに自然現象なんかじゃない。

間違いないく、『魔術』によって引き起こされたものだ！

「あんた、『魔術』の才能は無いんじゃないのかよ？」

さっきの奴の言葉を覚えていた俺は、こいつが嘘をついたのかと考えてしまう。

そんな俺を見て、だがアーベントは緩く苦笑する。

「そう恐い顔をするな。『魔術』が使えないのは本当さ。貴様も『魔術師』なら、『こいつ』を見た事ぐらいあるんじゃないのか？」

そう言っつてアーベントは、左手に炎を灯したまま、左腕の前腕部分を俺に見えるようにした。

するとその部分にだけ、奇妙な形をした記号のようなものが彫り込まれている。

『魔術』に詳しくない者が見ても、それはただの落書きにしか見えなかっただろう。

だが『魔術師』である俺は違う。その文字の、記号の意味が理解出来る。

五つの菱形を四つの線で結んだ、十字型の記号。

それが意味するものは、『炎』。

『魔術』の力を記号として刻み込んだ事により、奴の左腕の籠手には、炎を生み出す能力が備わっている訳だ。

「一体そんなモン、どうやって手に入れたんだ？」

「簡単な事さ。金に飢えた『魔術師』に、報酬をやると言って造ら

せたのさ。　　貴様も見ていただろ？　　昨夜の遺跡で俺が殺した、あの男だよ」

……そうか。あの時こいつが長髪の男から受け取っていたのは、この籠手だったんだ。

俺は納得すると同時に、改めて認識した。

こいつは本気で首都に戦争を仕掛ける気なんだ。そうじゃなければ、ここまで戦いの準備を整えているはずがない。

「しかし面白いものだ。今初めて実感したが、炎を生むとはこういう感じなのか。術者は自身の炎の熱を感じないと聞いてはいたが……。何事も試してみなければわからんものだ。なあ、少年！」

「！」  
アーベントは愉悦に溺れた表情のまま、左手を前に突き出し、炎の波濤を放ってくる。

俺は咄嗟に、軽く身体を捻ってそれを回避した。

この局面でその行動を取る事が、いかに愚かな事かを理解しないままに。

短絡的な俺の行動を眼にした瞬間、アーベントは盛大な高笑いを上げる。

「クハハハハハ！ 『深紅魔法』の使い手が炎を『避けた』！ 何という事だ！ ミレーナ・イアルフスの弟子ともあるう者が、『フレム・リーディング紅の詩篇』を使えないのか！？ クハハハハハ！ 滑稽だな少年！」

「……ッ！」  
奴に余計な情報を与えてしまったと、そう気付いた時にはすでに手遅れだった。

こいつはミレーナの事を知っていて、『深紅魔法』の事も熟知している。そんな人間の前で『炎を避ける』という行動を取れば、『フレム・リーディング紅の詩篇』が使えないんだと見抜かれぬはずが無い。

思慮が足りなかった。奴の言う通り滑稽過ぎる。

自分に対する迂闊さと、どうにもならない未熟さに苛立ちを覚え、俺は歯を食い縛った。

「ククク、その程度の腕でよく『魔術師』を名乗れるものだ。『深紅魔法』の使い手が聞いて呆れる。あの女め。弟子にする人間を見誤ったようだな」

「うるせえ！」

失望したと言わんばかりに落胆した様子のアーベントに、俺は炎剣を構えて斬り掛かる。

だがアーベントは、上段からの攻撃も、下段からの攻撃も、軽く身を捻るだけで躲してしまふ。

それでも俺は攻撃の手を緩めない。どんなに躲されても、斬撃を放ち続けた。

「ミレーナの事を侮辱すんな！ ミレーナは……、俺の師匠は偉大な人なんだ！」

「偉大だと？ クク、笑わせるな。所詮、罪の意識から逃れる為だけに貴様を拾った人間が、本当に偉大だと言えるのか？」

「！ 何だと？」

聞き捨てならないアーベントの台詞に、俺は思わず攻撃する手を止めてしまふ。

「貴様もあの女から聞いてはいるはずだ。奴は戦争中、多くの人間の命を奪った。奴自身それを悔やんでいたんだろう？ だから奴は貴様を拾ったのさ。せめてもの罪滅ぼしにと、戦争孤児だった貴様を育てる事で、奴は罪の意識から逃れようとしただけだ。そんな矮小な考えしか持てない人間の、どこが偉大だと言うんだ？」

「なっ……！！？」

息が止まるかと思った。まるで見知ったように話すアーベントの言葉によつて、俺は完全に動きが鈍っていた。

そんなはずないと心で否定しても、それを邪魔するかのようにな、過去の記憶が蘇ってくる。

『私はただの人殺しよ』

「……違う」

『決して称賛されるような立派な人間なんかじゃないわ……』

「違う……！ 違う違う！ ミレーナはそんな人間じゃねえッ！！」  
どうにか身体を動かし、力任せに振り下ろした炎剣は、しかしアーベントによって難無く受け止められてしまう。

奴の顔には、俺を哀れむかのような表情が浮かんでいた。

「全く、愚かとしか言いようが無い。どうやら貴様は何もわかっていないようだな。己の師匠の事も、この世界の流れというもの事も！」

罅迫り合いの状態から、アーベントは鎧を纏った左手を俺の胸の中心に押し当てる。

その瞬間、発生した炎の渦が俺の身体を巻き込み、容赦無く後方へと吹き飛ばす。

「があっ！」

数メートル程地面を転がった所で、漸く俺の身体が止まった。

俺はどうにか上半身を起こしながら、自分の身体を確かめてみる。大丈夫だ。炎の『魔術』を操る俺は、『炎属性』の攻撃に対してある程度の耐性を持っている。服のあちこちが炎に焼かれただけで、身体の方にはほとんど外傷が無い。

まだ戦える。戦う事は出来る！

俺はすぐさま立ち上がって、相対するアーベントを強く睨んだ。

「俺の事なんかどうだっていい。あんたは俺の師匠を侮辱した。その事実だけで充分だ！」

ギリッと、俺は右手に生まれたままの紅い剣を強く握り締める。

そつだ、もう充分なんだ。

例え『魔術』に耐性を持つ剣を携えていようと、炎を生み出す籠手を備えていようと。

俺はこいつを倒す。何が何でも倒してやる！

「フン、くだらん。だから貴様は愚かだと言っただ」

心の士気を上げていた俺を嘲笑うかのように、アーベントは心底

つまらなそうな表情を見せる。

「そうやって眼の前の事にしか気を配らないから、貴様は大事な事を見落とすんだ」

「?」

一体何の事を言ってるんだ？ そう思いつつも、俺はアーベントから眼が離せない。

するとその時。

「デーン！」

「！」

裏通りに響く聞き覚えのある声。自分の名前を呼ばれて、そこで俺は初めて気が付いた。

俺から少し離れた位置に、リネが心配そうな顔をして立っている事に。

一体いつからそこにいたのか、俺には全くわからない。それだけ俺は、アーベントの言う通り眼の前の事しか見えていなかったという事だ。

思わず驚いてしまった俺の表情を見ると、リネはこちらに駆け出そうとしてくる。

バカ野郎！ 今の状況わかってねえのかよ！

「来るなリネ！」

この時の俺は、本当に何もわかっていなかった。

本当に、眼の前の事にしか気を配っていなかった。

だからこそ、すぐに気付けなかったんだ。

リネの接近に気を取られている俺の懐に、アーベントが潜り込んでいる事に。

「戦闘中に余所見とは、命知らずにも程があるぞ！」

「ッ！」

アーベントの捨て台詞が聴こえた時にはすでに、左下段から放た

れた逆袈裟斬りが、俺の身体を斬り裂いていた。

鮮血が飛び散ると同時に、右手に握っていた炎剣が消え去り、俺は後ろ向きに倒れ込む。受け身なんて取れはずも無く、倒れた衝撃がそのまま俺の身体を襲う。

だがそんな痛みよりも、こっちの痛みの方が勝っていた。

胸の辺りが焼けるように熱い。

ズキズキとした鋭い痛みが、乱暴なまでに全身を駆け巡る。

右手で胸の辺りを押さえると、ヌルツとした感触が伝わってくる。一体何だろうと思ってみてみると、俺の右手が真っ赤に染め上げられていた。

どう見ても俺の血、だよな……。

「ぐっ！　がはあっ！」

上半身を起こそうとして失敗した俺は、我慢する暇も無く吐血した。

不味い、完全に致命傷だ。身体を起こす事も儘ままならないなんて……。

「いやあああああぁあぁあぁっ！！」

朦朧とする意識の中、いつぞやと同じように、リネの悲痛な叫び声が聴こえてきた。

また気を失って倒れたんじゃないかと、俺は何とか首を動かして声のした方を見やる。

だがリネは気を失ってはいなかった。悲痛な表情で俺の許まで走ってくる、両膝をついて俺の顔を覗き込んでくる。

「デーン！　しっかりしてデーン！　死んじゃダメ！」

大きな黒い瞳から大粒の涙を流しながら、リネは必死に叫んでいる。

何か言っでやりたい。そう思うのに、声が上手く出せない。瞼が重くなり始めている。

するとそんな俺の耳に、明らかに熱を失っているアーベントの声が聴こえてきた。



「興醒めだな。イアルフスの弟子だと言うから、少しはまともな戦いが出来ると思っていたんだが……。どうやら見込み違いだったよ  
うだ」

反論したいのに声が出ない。せめてもの反抗精神として、俺は弱々しく歯を食い縛る。

もう一度立ち上がって戦いたい。

あいつを、アーベントを倒したい。

だがそんな思いとは裏腹に、身体は言う事を聞いてくれない。

もう……。俺はここまでなのか？

「…………ツ！」

俺が全てを諦めそうになった、まさにその時だった。

傍らで大粒の涙を流していたリネが、左手で両眼を乱暴に拭うと、意を決したように両手にしていた指し手袋を外し始める。

何をする気なのかと思う俺の眼に、不思議な物が飛び込んできた。手袋を外したリネの両掌りねのうで。その中心に、不思議な模様のような痣がある。

何か、鳥が翼を広げているような形に見えるそれは、怪我をして出来た痣とは違う、元からそこに刻まれていた物のように見えた。

「リ……。ネ……。？」

何とか絞り出せたものの、自分の声は酷く掠れていた。

そんな俺の声を聞いて、リネは自然に笑ってみせる。

見る者を釘付けにしまいそうな、とても切なそうな表情で。

「ごめんね、ディーン……。でも安心して。あなたはあたしが助けるから」

そう言ってリネは、両掌を俺の傷口の上に翳かざす。

不思議な現象が起きたのは、その瞬間だった。

突然リネの身体から、ランプの灯火を思わせる淡い光がいくつも発せられ、それが俺の全身を包み込んだ。それと同時に、彼女の両掌の痣も光を放ち始める。

不思議な感じがする光だ。まるで心地良い熱を発する物に、身体

を優しく包みこまれているような感覚。

昔、ミレーナに抱き締められた時に感じたものと、どこか似ている気がする。

そして俺は気付く。さっきまで俺の身体を支配していた、焼けるような熱さと痛みが引いている。

訳がわからないまま呆然としてしていると、すぐ傍で驚いたような声が聴こえた。

「バカな！ 他者の傷を癒すだと！？ 貴様……、なぜ当たり前のように『治癒魔法』が使える！？」

「！」

驚愕している様子のアーベントの声で、俺にも衝撃が走った。

なぜならそう、『有り得ない』からだ。

この世界に、『回復』という名の『魔術』は無い。このジラータル大陸の事しか知らない俺が、世界と言うと語弊があるだろうが、少なくともこの大陸において、『回復魔術』は存在しない。

何度も言うが、『魔術』とは人を殺す事に特化した技術だ。

それはつまり、人を生かせず、また活かせないという事。

だから『回復』などという『魔術』は存在しない。『転移』などという便利な『魔術』は有り得ない。

だが以前は、それを作り出すとする試みがあったそうだ。

ミレーナから聞いた話だと、『回復』に一番近い要素を持っているのは、『水属性』の『魔術』らしい。

『倒王戦争』以降、水を操る『魔術師』たちが『回復魔術』を作り出す為に研究を重ねたそうだが、未だにその成果は得られていない。つまりそれだけ、人を殺す為に生まれた技術から、人を生かし活かす技術を作り出すのは容易な事じゃない、って事になる。

だがそれならば、眼の前の少女はどうなるんだろう？

彼女は平然と『治癒魔法』らしき力を使っている。存在しないは

ずの『魔術』を。

……いや、待てよ。確かミレーナはこう言っただけだったか？

『回復魔術』は『存在しない』のではなく、『存在しなくなった』のだ、と。

「クハハハハハハ！ そうか、思い出したぞ！ これが事実ならば何という巡り合わせだ！」

俺がその結論に至った時、アーベントが愉快そうに笑いながらそう言った。

恐らく奴も、俺と同じ事を考えているんだろう。

「女！ 貴様、『妖魔』一族の生き残りだな！？」

そうだ、俺が聞いたのは確かにその名前だ。

『妖魔』一族。

大昔、この大陸で起きた『魔術戦争』の時代から存在していたとされる、特殊な力を持った人間たち。

その特殊な力というのが、すなわち『治癒』。

何百年と進歩の無かった『魔術師』たちとは対照的に、『妖魔』一族は生まれながらにしてその能力を有していた。そしてそれは前例の無い能力だった為に、『魔術師』たちからは『回復魔術』の一種として考えられているが、もしかしたら、彼らの力は『魔術』とは違う、もっと別の何かなのかも知れない。

ミレーナも真偽はわからないと言っていたがとにかく、それは一族だけが持っている特殊な力だったらしい。

だからこそ、一族は命を狙われる羽目になった。

自身にとっての反乱分子になるかも知れないと危惧した、前テルノアリス王に。

かつての『魔王』が行ったのは、大量虐殺。

反乱分子になるかも知れない、という理由だけで、一族は男も女も子供も老人も、無慈悲なまでに抹殺されたという。その虐殺は止まる事を知らず、ミレーナたちが前テルノアリス王を倒す頃には、『妖魔』一族は滅亡していたそうだ。

それ故に、大陸から『回復』という名の力が消え去ったんだ。だがどうやら、滅亡していたというのは誤りだったらしい。現に『治癒』の力を使っている少女が、眼の前にいる。

俺もよく知っている少女、リネ・レディアが。

「お……、前……」

絞り出すように俺が声を出すと、リネは切なそうな笑顔のまま、静かに口を開く。

「やっぱりディーンも知ってたんだね、『妖魔』一族の事。……そう。あたしはその生き残りって訳。出来れば知られなくなかったんだけどなあ……。特に、ディーンには」

そう言つて、リネは徐々に微笑みを消す。そこにはもう、悲しげな表情しか残っていない。

と、そこで俺は漸く気が付いた。いつの間にか全身を包んでいた温かな光が消え、痛みが全く無くなっている事に。

だが依然として、意識だけは朦朧としている。身体を動かそうとしても上手く動かない。

「まるで僥倖だな。天が俺に味方しているかのようだ」

愉快そうな声が見ると、いつの間にかアーベントが、俺の傍らに膝をつくりネの隣に立っていた。そして、悲しげな表情のリネの右手を掴み、無理矢理彼女を立ち上げらせる。

「良いものが手に入った。イアルフスの弟子。この女は俺が貰っていくぞ」

「!？」

リネを連れていくだって？ 一体何の為に？ 『治癒』の力を使える事が、こいつにとって利益になるっていうのか？

疑問に思う俺の心を、表情から読み取ったんだろう。アーベント

はニヤリとした顔で、見下すかのように俺の顔を見つめる。

「わからないならそれでもいい。所詮貴様は無知なガキだ。師匠の事も、世界の事も、身近な人間の事も、何一つわかっていない愚か者。そんな人間が自分の命を、況して他者の命を守れるはずが無い」

「！」  
何も言い返せない。例え声が出せたとしても、俺は反論出来なかつただろう。

アーベントの言葉に俺の心は、悉く打ちのめされていた。

「大丈夫だよ、ディーン」

薄れ掛かった意識の中で、リネが俺に優しく語り掛けてくる。

「言つたでしょ？ あなたはあたしが助けるつて。あたしがこの人に付いて行けば、それで全部解決する。……だから、ディーンはゆっくり休んでて」

ふざけんなよ！ 何が全部解決するだ！ お前が付いて行つたつて、アーベントが首都を狙うのを止める訳じゃない！ それに……！ それに俺は……！

「じゃあね、ディーン」

リネを連れ戻そう。

アーベントを止めよう。

どれだけ強くそう思つても、徐々に俺の意識は薄れていく。意識が途絶える前のほんの一瞬。遠ざかっていくリネの背中に、ミレーナの背中が重なって見えた。

そこまで至つて、俺は今更のように気付いてしまう。

もっと早くに気付くべきだったんだ。

黒髪の少女、リネ・レディア。

自分で思っていた以上に、彼女との繋がりが、とても温かく大切なものだったんだ、と。

## 第五章 嵐の前触れ

自分の秘密を知られなくなかった。

自分が『妖魔』一族の生き残りだと、悟られなくなかった。

今まで『治癒』の力を見た人たちは、あたしが『魔術師』ではない事を知ると、まるで化物を見るかのような眼であたしの傍から離れていった。

人は自分とは違う存在を容易く受け入れられない。

それがあたしのような、異質の力を持った者なら尚更。

一族が滅んでからの十数年。学んだ事は数多くあったけど、この事実に勝るものは何一つ無いと思う。

きつとあたしは、もっと自分の立場を弁えるべきなんだ。滅亡した存在だと言われている『妖魔』の力は、安易に行使されてはいけないものなんだと。

だからあたしは、力を隠して生きるようになった。

もう誰にも嫌われなくなかったから。一人になりなくなかったから。

だけど、現実はそんなに甘くない。

必ずどこかで綻びが生じる。

あたしは一番知られなくなかった事を、一番知られなくなかった人に、知られてしまった。

確かに悲しい気持ちはある。事実を知ってしまった彼はもう、今までと同じようにあたしと接してくれる事は無いだろう。

でも後悔はしてない。

だってこの力を使わなければ彼は、ディーンは死んでしまっていたかも知れないのだから。

死んで二度と会えなくなるくらいなら、嫌われる方がよっぽどマシだ。

だから、後悔なんてしていない。後悔なんて。

「……そんなの、嘘に決まってるよ」  
どんなに正論を並べて心を律しようとしても、やっぱりダメだった。

悲しみはもちろんある。

後悔だっけしてしてるに決まってる。

だけど、もうどうしようもない。あたしに出来る事は、もう何も無い。

「……ディーン」

せめて忘れないようにと思って、彼の名前を呼んでみる。

返事が返ってくる事は、無かった。

眼を覚ますと、そこには見慣れない光景があった。

俺の視界を埋め尽くす、白い石造りの天井。どうやら俺は、ベッドの上で仰向けになっているらしい。さっきから俺の身体を、ふわりとしたベッドの優しい感触（やけに肌触りが良い）が包み込んでいる。

って言うか、一体どこなんだここ？

ぼんやりする頭で疑問に思いながら、何となく気だるい身体を起こして、俺は周囲を見回した。

壁も床も天井も、全て磨き抜かれた石造りの四角い部屋。窓の傍には木製の作業机。壁際には豪華な装飾（多分金だと思う）のされた本棚が二つ。棚はどちらも四段造りになっていて、どの段も端から端までびっしりと分厚い本で埋め尽くされている。

部屋の中央には客に対応する為なのか、四角い金属製のテーブル

と、一人用のソファが四つ、テーブルを挟む形で二つずつ置かれている。そのどれもが、棚と同じように値段の張りそうな煌びやかな装飾で彩られていた。

……このいかにも金に物言わせて造ったって感じの部屋。

「貴族が使ってる部屋、だよな」

ここまで部屋の模様を、もとい金を使う宿は、いくら天下の首都とはいえさすがに存在しないだろう。

ならば考えられる可能性はただ一つ。

今いるこの場所が、王族や貴族が住まう巨城、『テルノアリス城』だという事だ。

俺には全く記憶が無いが、恐らく裏通りで気を失った後、騒ぎを聞き付けた正規軍にでも発見されて、ここに運び込まれたって所だろう。

部屋の中に時計らしき物は見当たらず、あれからどれぐらい時間が経ったのかわからない。が、ベットの傍にある窓から見える空は、すでに夕暮れ時の明るさだった。

「……」

そうだ、俺は気を失っていたんだ。

アーベントに剣で胸を斬られて、その傷が致命傷で、死に掛ける所にリネが来て、リネが妙な力で俺の傷を治して、そしてアーベントに連れて行かれて。

「……八八。何てザマだよ、全く」

俺は力無く笑った。記憶なんて整理するまでもない。

結果的に俺は、守る事が出来なかったんだ。

人眼に晒したくは無かったであろう自らの力を行使して、俺の命を救ってくれた少女を。

リネ・レディア。

彼女の正体は、滅亡したと言われる『妖魔』一族の生き残りだっ



た。

『倒王戦争』終結から十二年。その長い年月を、彼女は一体、どんな風にして過ごしてきたんだろう？

辛く感じる時は無かったんだろうか。

心細く思う日は無かったんだろうか。

そんな彼女の事を気にも掛けず、知ろうともせず、自分の事しか考えてこなかったのはどこの誰だ？

意識を失う直前まで、あの黒髪の少女との繋がりが、自分にとって大切なものだったんだと気付けなかった愚かしさ。

全くもって本当に、情けないにも程がある。間違いなくこの結果は、当然の報いってヤツだ。

打ちひしがれるように俯き、俺は両手を強く握り締めた。白く透き通ったシャツに、クシャリと皺が出来る。

と、その時だった。

部屋の扉が数回ノックされる音が響き、続いてガチャリとドアノブが回され扉が開いた。

「……！ デイーン、眼が覚めたのか」

聴こえてきたのはジンの声だった。その声の調子から察するに、随分安堵しているらしい。何だか物凄く久しぶりに、彼の声を聞いた気がする。

妙な錯覚に陥りつつ、だが俺は、顔を上げる事が出来なかった。

返事をする気力すら失い、無言のまま彼を迎え入れる。

そんな俺の様子を見て、ジンは何も言わなかった。何も言わずに歩み寄ってくると、ベットの傍にあった簡単な造りの椅子に腰を下ろす。そして落ち着いた様子で、再び口を開いた。

「一体何があったんだ？ 彼女、リネがいない事と何か関係があるのか？」

こいつは本当に、鋭いと言うか容赦が無いと言うか。ジンに事情聴取をさせれば、どんな凶悪犯だって数分で自分の罪を自白してしまえそうだ。

少しだけ躊躇いを覚えたものの、俺は裏通りでの出来事をジンに話して聞かせた。

ジンは俺が話している間、一度も割って入ろうとはせず、ただ黙って俺の話に耳を傾けていた。

「なるほどな。しかしこれで、漸くハッキリした訳だ。あのアーベントという男は、本気でこの都市を襲うつもりなんだという事が」

軽く俯いている俺は、ジンが何度か頷くのを気配で感じ取った。だが俺は、彼の言葉に相槌を打つでもなく、ただ沈黙を守る。正直な所、話し疲れたという気持ちがあった。

すると、俺の沈黙をどう受け取ったのかはわからないが、ジンは真剣な口調で続ける。

「しかし、まさかリネが『妖魔』一族の生き残りだったとは……。今考えてみれば、彼女がああ長髪の男の死を目撃して気を失ったのは、一族が抹殺される光景を思い出したからなのかも知れないな。いずれにしろ、リネがいない事には話を聞きようがない訳だが……」

「……………」

リネの過去。今はそれを知る術が無い。  
俺の命の恩人は、今頃どこで何をしているんだろう？ あのアーベントが傍にいる以上、彼女の身が危険に晒される可能性は充分考えられるけど……。

と、そんな事を思っていると、ジンは無言でいる俺に気を遣ったのか、突然話題を変える。

「さっきある王族と話をしてきた。その中で俺が『アーベント』という名前を口にする、その王族は随分驚いていたよ。深く話を聞くと、どうやらあのアーベントという男、『倒王戦争』が起こる以前までは貴族だったらしい。あの男のセカンドネームを覚えてるか？」

「……さあ、何だっけ」

真剣な話の最中だとわかっていて、それでも俺は気の無い返事を返した。すると俺とジンの中に、一瞬張り詰めたような空気が流れる。

が、ジンは気を取り直そうとするかのように、再び説明をし始めた。

「『デibelグ』。それがあいつのセカンドネームだ。デibelグ家と言えば、かつては五大貴族と呼ばれていた貴族の一つらしい。だが知つての通り、『倒王戦争』で前テルノアリス王が倒された後、『魔王』側に就いていた貴族の殆どはその権利を剥奪され、城を追われる身となっている。『アーベント・デibelグ』。奴もその一人という訳だ」

「……へえ」

ジンの説明を聞いても、俺には何の感慨も浮かばなかった。

今更そんな事を知っても、何かが変わる訳じゃない。どうでもいいというのが素直な気持ちだった。

尚も生返事をし続ける俺を、ジンはしばらく無言で見つめていたようだが、一旦椅子から立ち上がると、またすぐに説明を始める。

「王族たちはアーベント・デibelグを最重要犯罪人と決定し、身柄を拘束、もしくは殺害も視野に入れて行動を開始した。今正規軍の内部で、討伐隊も編成され始めている。明日の朝には大規模な捜索が始まるだろう。事態がここまで動いている以上、奴がすでにこの街にいるという事を、すぐにでも元老院に知らせなければならぬ」

「……そうだな」

俺の言葉に覇気が感じられない事を、ジンはとっくに気付いているだろう。ここまで何も言わなかったジンだったが、だがついに、我慢の限界が訪れたようだ。

ベッドの傍らに立つジンは、力強く俺の肩を掴むと、少し苛立ちの混じったような声で詰め寄ってきた。

「デイン、ちゃんと聞いているのか？」

「……聞いているよ」

「そうか。だが見ている側からすれば、今のお前は完全に上の空だ。まるで、『俺には全く関係無い』と、そう言っているようにすら見えるぞ」

「……うるせえな」

俺の中で、何かが我慢出来なくなっていた。

辛辣とも言えるジンの言葉で、俺は漸く顔を上げると、両手を強く握り締め、威圧するつもりでジンを睨む。完全な八つ当たりだとわかっていて、それでも制御が利かなくなっていた。

「言われなくてもわかってんだよ！ アーベントの野郎を止めるんだろ？ 首都を守らなきゃいけないんだろ？ 大切な事だつて言いたいんだろ？ そんな事わかってんだよ！！ だけどそれが何だ！ 何でそれをわざわざ俺に報告すんだよ！？ それこそお前の言う通り、俺には全く関係無い事だろうが！！」

「本気でそう思ってるのか？ 自分には関係の無い事だと」

「ああ、そう思ってるよ！ だったら何だ！？」

「……なら聞くが、どうしてお前は責任を感じているんだ？」

「ッ！」

たった一言。冷静なジンのそのたった一言で、俺は簡単に反論の余地を失ってしまう。

俺が言葉に詰まるのを良い事に、ジンは一切黙ろうとしない。すぐさま追い討ちを掛けてくる。

「アーベントを止められなかった事に、憤りを感じているのか？」

「……うるせえ」

「奴に敗北を喫した自分に、怒りを感じているのか？」

「うるせえ！」

「それとも、リネを守れなかった自分の非力さを悔んでいるのか？」

「うるせえって言うてんだろ！！」

何も考えていなかった。

ジンを殴り付ける。その事以外頭に無かった俺は、ベッドから勢い良く立ち上がり、ジンの胸倉を左手で掴んで、右拳を思い切り彼の左頬に叩き込んだ。

殴った衝撃で、俺はジンと共に床に倒れ込む。

息を荒げ、胸倉を掴んだままジンの身体の上に馬乗りになった俺は、その状態になって漸く理性を取り戻した。

「……俺の、せいだ」

絞り出すように言葉を紡ぐと、床に倒れたままのジンが声を掛けてくる。

「彼女が連れ去られたのが、か？」

「……俺が、俺が弱いせいだ。何も……、見えてなかったからだ。何も気付いてやれなかったからだ……！」

自分自身に対する怒りで、ジンの胸倉を掴む手がブルブルと震えていた。

ふと気付くと、何故か視界がぼやけている。

その理由は考えるまでも無い。

俺の眼には涙が溜まり、それが頬を、ゆっくりと伝っていた。

「すまなかったな」

しばらくして俺が落ち着きを取り戻した頃、窓辺に立つジンが静かに告げた。

俺はジンに背を向ける形で、ベッドの端に腰を掛けている。だから彼の表情は読み取れない。

「何で……、お前が謝るんだよ。悪いのは俺だろ？」

「フツ……。彼女と似たような事を言うんだな」

「え……？」

疑問に思っただけの方を振り返ると、ジンは俺の方を見て「何でもない」と微笑した。そして部屋の扉の方に向かってゆっくりと歩

き出す。

「色々あつて疲れてるだろ？ リネが治してくれたとはいえ、怪我をしていた事に変わりはないんだ。今日はもう休め。 ああ、もう気付いてると思うが、ここはテルノアリス城の一室だ。その辺の宿に泊るより、色々と豪華だぞ」

「でも、いいのか？ 俺なんか勝手に借りたりして」

「心配しなくても、王族に話は通してある。変に気兼ねせず、好きに使うといい」

とは言っても、それ相応の節度を持って使えよ？ と俺の方を指差ししつつ、ジンは優しく笑ってみせる。

気兼ねすんなって言われても、俺こういう豪華な雰囲気って苦手なんだよな……。 って言うか王族と話が出来るって、お前一体どういう立場の人間なんだよ？

と、そんな事を思っていると、ジンは部屋の扉を開けながら、ふと思い出したように俺の方を振り返った。

「 そういえばディーン。俺が教えた店、『ライム』には行って見たのか？ 」

「 え？ …… あ、いや悪い。店の近くまでは行っただけけどホラ、妙な邪魔が入ったから…… 」

「 ああ、そういう事か。ならいいんだ。じゃあな 」

苦笑混じりにそう言うと、俺が尋ねようとする前に、ジンは部屋を出て行ってしまった。

部屋に一人残された俺は、ずっと疑問に思っている事を頭の中で繰り返す。

お前が行かせようとしてるその『ライム』って、一体何の店なんだ？

「我らは明日、ついに行動を起こす。その行動によって生温い現政権は終わりを告げる。そして我らが奴らに代わり、新たな政治、そして新たな時代を創るのだ！」

アーベントが高らかに宣言すると、怒号のような人々の叫び声が辺りに響いた。

彼は今大勢の人を前にして、少し高い位置から演説のような事をしている。何だかわかりやすい組織の実態みたいなものを見た気がした。

そんな演説を傍で聞いていた、もとい聞かされていたあたしは、当然のように拘束されている。後ろ手に鉄製の手錠という、これまたわかりやすい格好だ。足の方は拘束されていないので、逃げ出さないように見張り役として、仮面を付けた黒いマントを着た男があたしの傍に張り付いている。

演説が終わわり、集合していた人々がバラバラに散っていく。

それに合わせて、アーベントがこちらに近付いてきた。不敵な笑みを湛えたその表情を見ると、何だかとても気分が悪くなってくる。

「どんな気分だ女？ いや、『化物』と呼んだ方がいいか？ まあ、

『妖魔』の生き残り」

開口一番にそんな台詞を聞かされて、あたしは思いつ切り顔を顰めた。

悪意の塊を人間に例えたら、多分この人が一番当て嵌まりそうな気がする。

「どんな気分かって聞かれれば、最悪、かな。でも意外だったよ。あなたみたいな頭のおかしい人に付いて行こうとする人って、あんなに大勢いたんだね」

思いつき悪口のもりで吐き出したその言葉を、だけどアーベ

ントは、意に介さずといった感じで受け流す。

「クク、小娘の割には強気な発言だ。まあいい。明日の今頃には全てが変わっている。いや、終わっていると言っべきか。首都の人間たちには、新たな時代の礎となってもらおう。もちろん、貴様を守ろうとしていたあのガキにもな」

「！」

弱みを見せないようにしていたのに、その言葉であたしは簡単に動揺を見せってしまった。

アーベントはニヤリと嫌な笑みを見せると、顔を近づけてあたしの耳元で囁く。

「安心しろ。あのガキを殺すのは一番最後にしてやる。奴にはまだ色々と用があるからな」

「……！」

あたしが不快な表情を見せると、アーベントはゆっくりと身体を離れた。

「さてと。ではその為にもまず、貴様に役立つてもらおうとするか」

そう言っただけでアーベントが、マントの内側から何かを取り出すのが見えた。

視線を向けて漸く理解する。彼の手に握られているのは、刃渡り十五センチ程の、鋭く尖ったナイフだ。

危険な雰囲気を感じて逃げ出そうとするあたしを、後ろにいる仮面を付けた男が強く抑えつける。

その瞬間。

「あうっ！」

焼けるような鋭い痛みが、左の二の腕辺りに走った。

見るとアーベントが振ったナイフの刃先に、僅かに血が付いている。どうやら二の腕の辺りを浅く斬り付けられたらしい。

「知っているか化物」

アーベントはあたしの血が付いたナイフを見つめて、どこか愉快げに声を掛けてくる。



「貴様ら『妖魔』と呼ばれる人間の『血液』には、『魔術』を扱う能力を飛躍的に高める効力があると言われている。その昔、『魔術戦争』時代には『妖魔』の血を引く人間を捕らえ、血を一滴残らず絞り出し、『魔術』の力の増幅剤として使っていたという『史実』がある。その血を飲めば『魔術』の才が無い者でも、その力を扱えるようになるんだそうさ。つまり」

そう言っつて、アーベントはナイフの刃先に付いた血を、唾で湿った舌でかなり強引に舐め取った。

眼の前でそれを見せつけられたあたしは、何だか自分の身体を舐められているような気がして、背筋に悪寒が走るのを感じた。

アーベントは、そんなあたしの様子を気に留めていない。ナイフを無造作に放り捨てると、ただジツと虚空を見つめて、何かを待っているようだった。

「……ふむ。これといって変化は見られない気がするが、まあいい。少し試してみるか」

言葉と共にアーベントは、鎧を纏った左腕を正面に翳した。

囚われの身となっている、あたしの方に。

その瞬間。

「ぐぎゃあああああつー!!」

「!?!」

すぐ後ろで、突然激しい熱気を持った炎が生まれ、さっきまであたしを抑えつけていた仮面の男の身体が、松明の炎のように燃え盛り始めた。

あたしは驚いて、思わず尻餅をつく。

人が燃えている。自身の身体を真っ赤に染め上げながら。

しかもこの人は、さっきまで話していた男、アーベントの仲間のはずでしょ？

呆然とした表情のまま、あたしはゆっくりと背後を振り返る。

そこにはまるで、歓喜に打ち震えているかのような、強烈な笑みを湛えた男が立っていた。

「クハハハハハ！ これはいい！ たった少量でこれ程の力が得られるとは！ 最高だ！ これがあれば俺は……！ クハッ！ クハッハッハッハッハッハッハッ！」

アーベントは笑う。強烈な笑みを湛えたまま、高らかに。

そんな彼の姿に、あたしは背筋が凍りつくのを感じた。

笑い続けるアーベントの姿は、もう人間のものとは思えない。

邪悪な笑みを湛えた悪魔にしか、見えなかった。

太陽も完全に落ち切り、夜を迎えた街の中を、街灯や店の明かりに照らされながら、俺はどこへともなく歩いていく。

ジンには休めと言われたが、とても眠れる気分じゃない。早々に城を抜け出した俺は、こうして一人、街の大通りを歩いているという訳だ。

「……何やってんだろ、俺」

こんな事をしていても事態が治まる訳じゃない。リネが帰ってくる訳でもない。だけど俺は、彷徨せずにはいられなかった。

これから俺はどうするべきなんだろう？

アーベントの行方を追い、再戦したとしても、『フレイム・リーディング紅の詩篇』を使いこなせない今の俺では勝つ事は出来ないだろう。況してあいつは俺以上に『深紅魔法』の事を熟知している。そんな奴相手に、一体どう戦えば勝てると言うのか。

リネの事だってそうだ。あいつは俺を守る為に、自分の身を犠牲にしてアーベントに付いて行った。そんな彼女の意志を、思いを、俺が捻じ曲げてまで助ける必要は本当にあるんだろうか。

いつその事全部放り出して、再びミレーナ探しを始めるか？

……いや、探し始めて一年経った今でさえ、何の手掛かりも無い状態が続いてるんだ。搜索を再開したって、そう簡単に見つかりっこないだろう。

それに、例え探し出せたとしても、彼女はもう俺の事なんて忘れてるんじゃないのか。

「随分辛気臭い顔をしてるわね、お兄さん」

ゴチャゴチャと色んな事を考えていた俺は、その言葉で我に返った。

声のした方を見ると、煌々とした灯りを発する街灯の下に、顔を銀色のベールで隠した女性が佇んでいた。

まるで宝石のような綺麗な輝きを放つ翡翠色の瞳が、真っ直ぐ俺を見つめている。

「……誰だ、あんた」

無関心半分、警戒心半分で俺は尋ねた。

そんな俺に、女性は銀色のベールの下でニコリと微笑んでみせる。

「私の名前はエリーゼ。この街で占いをやってるの。どう？ あなたの事も占ってあげるわよ？」

「……占い師になんか用はねえよ」

大体俺は、そういう胡散臭いものを信じないようにしてる。相手にするのにもバカらしい。

そう思って再び歩き出そうとした時だった。

「あなた、行方不明になった師匠を探して一人旅してるのね」

「！？」

妙に弾んだ声で告げられた言葉に、俺は警戒心全開で振り返った。

この女、何でそんな事を知ってるんだ！？

「どう？ 当たってる？」

屈託の無い笑顔を見せるエリーゼとか言う女。逆にその笑顔が、

何か得体の知れないものを隠していそうで、素直に恐ろしさを感じる。

慎重に、俺はエリーゼとの距離を距離を測りつつ、もう一度問い掛けた。

「あんた、何者だ？」

「さっき言ったでしょ？ この街で占いをやってるって。あなたがあまりにも興味無さ気だったから、試しにと思って言ってみただけど。もしかして不味い事を言ったかしら？」

「……」

俺は無言で警戒を続ける。俺がミレーナを探してるって事をどうやって突き止めたのか？ そう逡巡していた所で、俺はある事に気付く。

この女は確か、『ミレーナ・イアルフスを探してる』じゃなくて、『師匠を探してる』って口にしたはずだ。それはつまり、俺の素性を全て知り得ている訳じゃない、という事に繋がるんじゃないか？ 考えが正しいのかわからないが、俺は若干警戒心を緩め、そしてまたエリーゼに問う。

「あんた、俺の師匠の名前までわかるのか？」

「残念ながらそこまでは。私のはただの占いであって、読心術じゃないの。だから全てがわかるって訳じゃないわ」

「……」

まだ完全に信用した訳ではないが、エリーゼの言葉に嘘は無いように思う。

俺は戦闘態勢に移行しようとしていた身体を、何とか落ち着かせた。

「……わかった。とりあえず、警戒心の強さは下げておくよ」

「フフ、いい心掛けだわ。やっぱり一人旅してるんなら、それぐらの警戒心を持つておくのが正解なのかしらね」

言いつつ苦笑していたエリーゼは、そこで急に真剣な顔付きになった。翡翠色の彼女の瞳が、女性とは思えない程強い眼光を放って

いる。

「あなたに少し聞きたい事があってね。声を掛けたのはその為よ」

「聞きたい事？　　八八ツ。占い師にも他人に聞きたくなるような事があるんだな」

真剣な雰囲気崩すつもりは無かったが、思わず俺は苦笑してしまった。

するとエリーゼは、気を悪くした様子も見せず、真剣な表情を崩して可笑しそうにクスツと笑う。

「まあね。何でも一人で解決出来れば、それに越した事は無いんだろうけど。　　こんな所で立ち話もなんだし、私の店に行きましよう。すぐ近くだから、案内するわ」

そう言って彼女は、華麗に身を翻して夜の街を歩き始める。

何だか不思議な雰囲気のある女性の後を、俺はゆっくりと追った。

「なるほど。こういうオチって訳か」

俺は眼の前にある建物を見つめて、何となく呟いてしまった。

嫌な予感がしていた訳じゃない。ただ単に、『こうなるんじゃないかな』と予想が付いてしまっただけだ。

眼の前の一階建ての建物の上部には、『LIME』と書かれた看板がある。そう、つまり『ライム』と。……この台詞ももう二回目だしな。

「何の話？」

入口の前で俺の方を振り返ったエリーゼは、首を傾げて尋ねてくる。

……なぜだろう。何だか知らないが、ジンの奴にはめられたんじゃないかと、捻くれた俺の内心が告げている。多分考え過ぎなんだろうけど、エリーゼに事の経緯を説明するのが物凄く嫌だ。

が、話さないと後々面倒な事になりそうな気がしたので、結局俺は観念する事にした。

「なあ。あんた、ジン・ハートラーって名前を知ってるか？」

俺が質問返しをすると、エリーゼは本当に予想通り、その翡翠色の眼を丸くする。

「その名前が出るって事は、あなたジンの知り合いなの？ ……もしかして、あなたが『あの』デーン？」

「ああ、そうだよ」

彼女が口にした『あの』の部分が若干気にはなったが、とりあえず聞き流しておく。

対してエリーゼは、両手をパチパチと数度合わせて、どこか嬉しそうな表情を見せている。

「へえ〜！ じゃああなたが、『英雄』ミレーナ・イアルフスの弟子って訳ね。アハハ、凄く光栄な事だわ！ まさか『英雄』のお弟子さんと直接話せる機会が来るなんて思わなかったもの。ねえねえ、握手してもらってもいい？」

「あ、うん。もちろん……」

これだよこれ、俺が一番苦手としてる反応は。

今は夜で人通りも少なかったから良かったものの、人通りの多い昼間だったら今の台詞を聴いた周りの連中が、こぞって俺を取り囲んでいたはずだ。偉大な師匠を持った未熟者の弟子としては、微妙な心境だよ、ホント……。

エリーゼに握られた右手を、上下にブンブン振られながら、俺は苦笑する事しか出来ない。

「まあ狭い店だけど、とりあえず入って頂戴。お茶でも飲みながらお話しでしょ？」

漸く手を離してくれたエリーゼは、そう言って軽くウィンクして

みせた。

あんだ歳いくつなんだよ？ ……なんて聞いたら、ブツ飛ばされるんだろうなあ。

失礼な話だが、エリーゼの言う通り店の中はあまり広くなかった。入口から入ってすぐの場所に、白いテーブルクロスを掛けられた四角い木製のテーブルが一つと、同じく木製の椅子が二つ、向かい合う形で置かれている。四角い店内の壁の両側には、額に入れられた風景画や写真、何に使うのかわからない骨董品などが数多く飾られていた。

店の奥には仕切りの為の紅いカーテンが掛けられていて、その奥の方から、エリーゼは中から紅茶らしき香りを漂わせるティーポットと、ティーカップ二組を乗せたトレイを持って現れた。

「ほら、座って座って。別に大した物は飾ってないわよ？」

壁に掛けられた骨董品の一つを訝しげな顔で見つめていた俺に、エリーゼは手をひらひらと振りながら催促した。

エリーゼが先に店の奥側に座ったので、俺はその反対側に腰を下ろす。

「それで、俺に聞きたい事って何なんだ？」

エリーゼが紅茶をティーカップに注ぎ入れるのを見ながら、俺は静かに尋ねた。

彼女は湯気の立つティーカップを俺の前に差し出しながら、再び真剣な表情を作って答える。

「最初はあなたがこの街で見掛けた事の無い感じの人だったから、この事を聞こうと思ったんだけど……。ジンの知り合いだって言うんなら話は早いわ」

「どついつ事だ？」

前置きを挟むエリーゼの表情は厳しい。少し聞くのを躊躇っている。そんな風にも見えた。

数秒間を置いた後、彼女は漸く口を開く。

「もしかして今、この街はテロリストに狙われてるんじゃないの？」  
「！」

正直俺は、彼女の口からこんな確信めいた言葉が出るとは予想もしていなかった。

彼女は俺やジンと違って、完全に一般人と呼ばれる立場の人間だ。そんな人間がなぜ、そんな確信めいた事を口にする事が出来るのか。俺の表情からそれを読み取ったかのように、エリーゼは説明し始める。

「最近街の外の地域で、妙な噂が流れてるみたいだからもしかしたらと思っただけけど……。どうやら当たりみたいね。ひよつとしてあなたやジンも、この件に関わってるのかしら？」

「……」  
俺は戸惑いから、無言にならざるを得なかった。こういう状況下において、エリーゼのような一般人に、この街にテロリストが潜伏している、なんて情報を与えていいものだろうか。

……いや、控えるべきだ。民衆の不安を煽るような真似をすれば、それこそどんな事態に発展するかわからない。俺自身この件に深く関わってしまったているが、余計な情報は外に漏らさない方が賢明だろう。きつとジンだって、俺と同じ事を考えるはずだ。

俺が終始黙っていると、エリーゼはそれを察してくれたらしい。真剣な表情を消し、苦笑混じりに言う。

「ごめんなさい、答えられる問題じゃないわよね。ジンだってきつと、あなたと同じ事をすると思うし……。どうやら良い関係を築いてるみたいね、あいつと」

そう言って、エリーゼは優しくニコリと微笑む。その言葉は何だか、俺以上にジンとの親密さを感じさせる言葉だった。

まあ当然か。俺も、ジンとは以前から交流があるとはいえ、それほど頻繁に会っていた訳じゃない。対してエリーゼは、あいつが俺にこの店を紹介する程の繋がりがあるんだ。



恐らくずっと以前からの知り合い、或いは友人かそれ以上。

「何か変な事想像してない？」

「へっ？ い、いや、何も……」

エリーゼに指摘されて我に返った俺は、首をブンブンと横に振る。正直、冷や汗を掻かずにはいらなかった。こいつ本当は読心術も使えるんじゃないのか？

「まあいいわ。それよりも、ジンに伝えてほしい事があるの。これから何か事が起ころうとしてるなら、あなたの方があいつに会う確率高いでしょ？」

「ああ、多分。でも一体何を？」

俺が尋ね返すと、エリーゼはこれまで以上に厳しい表情を見せ、どこか探り探りといった様子で、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「最近の事なんだけど、この街で怪しい連中を見掛ける事が多くなつた気がするの。それも一人や二人じゃないわ。何十人もよ」

「怪しい連中？ どこがどういう風に？」

俺が眉根を寄せて問い掛けると、エリーゼは自身でもわかりかねると言いたげな表情で、言葉を選びながら言う。

「何て言うか、雰囲気って言うのか心配って言うのか……。ただ街の外から来ただけじゃない人間、って言ったらわかる？」

「いや、全然」

「だよねえ。でも他に表現しようがないのよ」

困り果てた様子でエリーゼは頭を抱える。

俺はそんなエリーゼの姿を見ながら、出された紅茶に手を伸ばした。ゆっくりと口に運び、音を立てないように嚙る。すると口の中に、紅茶の独特な香りが広がっていく。

それにしても、怪しい連中、か。もしかしたら、付き合いが長そくなジンなら、今の言葉の意味が伝わるかも知れないな……。

紅茶を飲むと頭が冴える、なんて話は聞いた事が無いが、とりあえずそう思い至った俺はティーカップをテーブルに戻した。

「わかった。今の言葉をそっくりそのままジンに伝えるよ。任せと

いてくれ」

「ありがとう。そうしてもらえると助かるわ」

そう言って申し訳なさそうに苦笑すると、エリーゼ自身も紅茶を飲み始めた。

その姿を見ながら、再び俺は考える。さて、これからどうしたもののか。

こうしてエリーゼと知り合えた訳だが、特に俺の方の問題が解決した訳じゃない。むしろ何一つ状況は変わっていないだろう。

また一人で街を彷徨う羽目になるのか……。そう考えていた時だった。

エリーゼが突然カップをテーブルに戻し、やけに食い入る感じで俺に迫ってくる。

「そうだ！ 御礼って言ったたらなんだけど、あなたの事占ってあげるわ！ もちろんタダでね」

「え？ え〜と……」

エリーゼの強引な提案に、俺は思わず眼を泳がせてしまう。

どうしよう。ここまで来て「占いなんて胡散臭いものを信じてる訳ねえだろ」なんて、一体どの口が言えるというのか。況してや大ッ嫌いで関わるのも嫌だなんて、占い師を眼の前にして言えるはずが無い。自殺行為もいい所だ。

身体中に嫌な汗を掻きながら逡巡していると、エリーゼは見兼ねた様子で右手を差し出してきた。

「そんな重く考える必要なんて無いわ。占いなんて、所詮何の根拠もない不明確なものなんだから。信じる信じないはあなたの自由よね？ だから軽い気持ちでさ」

「……」

まさか自分が、こうして占いなんかに頼る羽目になるとはな……。ある意味これも、俺の情けなさが招いた結果なのか……。

まだ少し抵抗があったが、俺は渋々右手を差し出す。

するとエリーゼは、俺の右手を両手で上下から挟み込み、ゆっくり

りと眼を瞑った。俺はやる事もないので、エリーゼの顔をジッと見つめてみる。

しばらく沈黙が続いた後、エリーゼが突然口を開いた。

「ディーン。確かあなたはミレーナ・イアルフス、師匠を探してるって言ってたわね？」

「あ、ああ」

「じゃあ師匠と一緒に暮らしていた間、首都を中心にして、この大陸で行った事の無い方角はある？ 大体でいいわ。教えて頂戴」

「行った事の無い方角？ ええっと……」

いきなりそんな事言われてもなあ。この街を中心にして、となる  
と……。

「北、かな？」

「北ね。もう一つ質問するわ。あなたの師匠、何か苦手にしているものはなかった？ 人でも物でも何でもいいんだけど」

「苦手にしてるもの？」

師匠が、ミレーナが苦手にしてるもの。意外と色々あったはずだけど、やっぱり一番苦手なものは……。

「『水』かな？ 別に泳げないとか、水が飲めないとか、そういう訳じゃないんだけど。やっぱり『魔術』の属性の関係で苦手にしてるって感じだったかな」

「『水』ね。わかったわ」

……こんなので一体何がわかるってんだ。エリーゼには悪いけど、やっぱり信用出来ねえ。

俺が少々呆れていると、エリーゼは両手を離して眼を開いた。俺の右手から柔らかい感触が消え去る。

「ここから北。より正確に言えば北東の方角だけど、マジキュール・ファウンテン『紺碧の泉』  
って呼ばれてる湖上都市があるのを知ってる？」

「ああ、話ぐらいなら聞いた事は……って何？ そこにミレーナがいるって言うのか？」

「確証は無いけどね。私の占いではそう出たわ」

「……」

いかにも胡散臭い感じがする結論だ。確証が無い以上、今までと比べて状況に差が出ている気がしない。

それを隠そうともせず顔に出す俺に、エリーゼはクスツと笑って言う。

「だから言ったでしょ？ 信じるも信じないもあなたの自由だ、つて。胡散臭い占い師の戯言だと思っんなら、無視してくれて構わないわ。実際そうする人だって大勢いるもの」

「そう言われるとなあ……」

俺は弱った感じで頭を掻いた。占いを信じていないのは事実だけど、エリーゼが俺を騙そうとしてるとも思えない。

いずれにしても、判断するには材料が足りなさ過ぎる。戯言として無視するとまではいかないまでも、せめて頭の片隅くらいには置いておこう。

「まあ何にせよ、参考にはなったよ。ありがとな、エリーゼ」  
ふと店の壁に掛けられている時計を見ると、だいぶ時間が経っている。

長居は無用だと判断した俺は、そう言って椅子から立ち上がった。するとエリーゼは若干慌てた様子で、立ち去ろうとする俺の手を握って引き止める。

「待って！ 後もう一つだけ」

「なっ、何だよ突然？」

急に手を握られた事に対する照れ臭さから、思わず俺は口籠ってしまう。

が、エリーゼの方は特に気にした様子も無く、真剣な顔でこう言うてきた。

「あなた、他にも何か悩みを抱えてるんじゃない？」

「！」

予想だにしない指摘をされて、立ち去ろうとしていた気持ちがどこかへと消え去る。

ホント、何者なんだろうこの女。いや、占い師だって言うのはわかったけど、何かもうここまで来ると心を読まれてるとしか思えないんだよな……。

感心を通り越して呆れてしまった俺は、一瞬言葉に詰まる。

だけど不思議と、すぐに言葉を紡ぐ事が出来た。エリーゼのどこか優しいな雰囲気そうさせるのか、自分でも驚くくらいに。

「俺が『魔術師』だって事は……、ああ、そっか。ミレーナの事師匠って呼んだんだし、わかってるんだよな。まあとにかく、俺はミレーナに『深紅魔法』っていう『魔術』を教わったんだけどさ。何年腕を磨いても、どうしても使いこなせない能力があるんだ。だから――」

「自分は師匠に劣っている未熟者だと感じてしまっ、とかそういう事？」

「……まあ、そんな感じだ」

その場に立ち尽くしたまま、俺は僅かに俯き、今は自由になった両手を固く握り締めた。

自分でも痛いぐらいわかってる。

俺は悔しいんだ。フレイム・リーディング『紅の詩篇』を使いこなせない事が。

ミレーナに劣っていると感じてしまっ事が。

あいつに、アーベントに敗北した自分自身が！ 悔しくて悔しくて、怒りを感じてしまっんだ！

だけど、どんなに強く悔しさや怒りを感じた所で、結果が変わる事なんて多分有り得ない。

俺にはきつと才能が無いんだ。アーベントの奴の言う通り、俺なんか『魔術師』になろうなんて、それこそおこがましい事に違いない。

ただ黙って暗い気分浸っている俺に、しかしエリーゼは優しいげな口調で告げる。

まるで、闇の中を歩き続ける者に、一筋の光明を齎すかのように。「ねえ、デーン。あなたは今、色々な事をゴチャゴチャと考え過

ぎて、自分でも大事な事を忘れてしまってるんじゃない？」

「！ えっ……？」

重たい空気に支配されていた俺は、エリーゼの言葉で我に返り、ハツと顔を上げた。

眼の前には、優しい頬笑みを湛えたエリーゼがいた。彼女はジッと俺の方を見つめて、ゆっくりと口を開く。

「そもそも、どうしてあなたは『魔術師』になろうと思ったの？」

「！」

彼女に問われて、俺は考える。いや、漸く思い出した。

俺が『魔術師』になろうと思った理由。それは。

「『魔術師』が『ただの』人殺しなんかじゃなく、『誰かを守る事が出来る存在』なんだと、証明する為」

俺は声に出してそう答えていた。

そうだ。この台詞は幼い頃、俺が『魔術師』を目指そうと思った時に、ミレーナに対して言った台詞だ。

何で……、何でこんな簡単な事を忘れていたんだ。

いつの間にか俺は、ミレーナに認めてもらう事はばかりを意識して、大事な気持ちを見失っていた。

アーベントに敗北した事で、自分の信念を見落としていた。

俺はミレーナに認めてもらう為に、『魔術師』になろうと思ったんじゃない。

アーベントに敗北した程度の事で、簡単に折れてしまうような信念を持ってた訳じゃない。

誰かを、例えばミレーナを、リネを、ジンを、他者を守りたいと思ったから、そういう信念を持ったから『魔術師』になろうと思ったんだ！

『何もわかっていない』と、俺にそう言ったのは他でも無いアーベントだった。

何てこった。ムカつくけど、あの野郎の言葉は的を射ている。確かに俺はわかってなかった。自分の本当の気持ちさえも、見失っていたんだ。

「悩みを持つって事自体は、私としては良い事だと思うわ。だけどそれによって、あなた自身の本当の気持ちを埋もれさせてしまつてダメよ」

そう言つてエリーゼは立ち上がり、もう一度、今度は両手で俺の右手を優しく包み込む。

「こんな事ぐらいしか言えないけど、頑張つてね、ディーン」

「……ああ。本当にありがとう、エリーゼ」

俺はこの時本当に、久しぶりに心の底から笑えたような気がした。素直な笑顔を、他人に見せる事が出来ていた。

その後しばらくして、俺はテルノアリス城に戻る為、街灯に照らされた夜の大通りを疾走していた。

店を出る時、エリーゼは「ジンにもよろしく」と言つて小さく手を振っていた。

俺は軽く頷いて走り出すと、速度を緩める事無く疾走し続けた。

もう迷いは無い。やる事は決まつてる。

今度こそ『フレイム・リーディング紅の詩篇』を会得して、アーベントの野郎を倒す。

そしてあいつを、リネを助け出すんだ！

「作戦開始は明日の正午。その時を持って、戦争の幕開けだ！」

薄暗い闇の中、聞き覚えのある誰かの声が聴こえた。

あたしはゆつくりと薄眼を開けて、辺りを見回そうとする。

そして気が付いた。身体が自由に動かない。何かに拘束されているみたいだ。

……そういえばあたしは、あの後意識を失って倒れたんだ。きつとその間に、今の状態にされてしまったんだと思う。

なぜだかわからないけど、意識がハッキリとしない。それどころか、また眠りに落ちてしまいそうになる。

眠りに落ちないようにあたしが抵抗していると、不意に耳元でさっきの声が聴こえた。

「今は安らかに眠っている。眼が覚める頃には、全ての終わりが待っている」

耳元で嫌な感じの忍び笑いをすると、声の主、アーベントの足音が遠ざかっていくのがわかった。

ここはどこなんだろう？ 眼を開けてちゃんと確かめたいのに、意識は徐々に遠退いていく。

結局あたしは、何も出来ずに意識を失った。



## 第六章 開幕は爆発と共に

松明に灯った炎が、陽炎のように揺らめいている。

俺は意識を集中させる為、両眼をゆつくりと閉じた。

ここはテルノアリス城の敷地内の一角にある、『修練場』と呼ばれる場所だ。

天井の高さと空間の幅が、それぞれ十メートル程の広さで造られている室内には、特に目立った物が置かれていない。異様な程殺風景に見えてしまう空間ではあるが、今その中心には、俺の身長とほぼ同じ高さの、松明がくべられた鉄製の丸い籠状の燭台がある。

その燭台から、二メートル程の距離を取って佇む俺が、今まさに行なっている事。それは、『紅の詩編』フレイム・リーディングを使いこなす為の修練だ。

長年に渡って会得出来ずにいるこの能力の真髄は、ありとあらゆる炎を従属する事にある。

一度能力が発動すれば、俺が発現した炎とは別の炎（例えば自然現象の炎や、『魔術』によって引き起こされた炎）を、自由自在に操る事が出来る。つまり、眼の前の松明の炎を思い通りに動かす事が出来れば、それが『紅の詩編』フレイム・リーディングを会得したという確実な証拠になる訳だ。

……そういえば、今は何時ぐらいになっているんだろう？

この『修練場』には窓も時計も無いので、どれぐらい時間が経過しているのかわからない。が、恐らく外は、太陽が昇り始めている時間帯のはずだ。

昨日の夜、すぐに城に戻った俺は、ジンに頼み込んで王族からこの場所の使用許可を取り付けてもらった。

以降俺は、ほとんど寝ずにここで修練を続けている。

「っと、いけねえ。他の事に気を取られてる場合じゃないよな」  
一度眼を開けてしまった俺は、声に出して自分を律してから、再び集中を始める。

全ての『魔術』に通じる、能力を発動する上で基本となるものは、『自分が起こしたい現象を頭の中で想像し、眼の前の現象として投影する事』だ。

個々の『魔術師』によってその現象は様々だろうが、俺の場合はまず、『炎』が生まれている所を想像する。そしてそこから派生する形で、『炎』が剣になったり、火球になって飛んでいく様子を思い描き、現実に投影する事で、『魔術』の基本形態が生まれていく。だが想像出来たからと言って、必ずしもそれが成功に繋がるとは限らない。

強大な能力になればなる程、想像と投影にはかなりの集中力が必要となり、容易に発現する事が出来なくなってしまう。故に何度も同じ工程を繰り返す事が、『魔術』を発動する為に必要な事柄となってくる。

集中力を高め、事象の想像を完成させた俺は、眼を開くと同時に言い放つ。

「フレイム・リーディング  
『紅の詩編』」

俺が言葉を放った瞬間だった。

眼の前にある松明の炎が波打つかのように小さくうねり、俺の許へ伸びるように近付いてくる。この光景は昨日の夜から、もう何度も目撃している現象だ。

だが。  
「くっ！」

俺の許に届く寸前で、伸びようとしていた炎の帯は拡散するようになり、やがて消えた。

軽く息を吐いて視線を戻すと、松明の炎はまるで何事も無かったかのように、静かに、だが盛んに燃え続けている。

「くそ……、また失敗か」

俺は悔しさの余り、思わず憤慨の言葉を呟いた。

集中力の維持が難しいのは確かだが、それ以前に、『フレイム・リーディング  
紅の詩編』  
はこんな脆弱な力じゃない。この程度の大きさの松明の炎なら、一

瞬で全てを奪い取るぐらいの従属能力を持っているはずなんだ。こんな未完成の状態のままじゃ、実戦で使うのなんてほぼ不可能だろう。

扱うのが難しいのはわかっていたつもりだが、どうやら自分の考えはまだ甘かったらしい。

改めて思う。こんなとんでもない能力を行使していたミレーナは、やっぱり凄い人間なんだと。

だけど俺は諦めたりしない。

迷う事も、立ち止まる事ももうしない。

自分自身の大事な気持ちを思い出した今なら、絶対に。

「よし！ もう一回だ！」

深呼吸して気持ちを切り替え、俺は再び松明の炎に向かい合う。

と、その時だった。

「まだここにいたのか」

冷静さを纏った聞き慣れた声が、静まり返った室内に響き渡る。声のした方を振り向くと、『修練場』の入口付近にジンが立っていた。彼は驚き半分、呆れ半分といった器用な表情で、ジッと俺の顔を見つめている。

俺は一旦作業を中断し、苦笑しながら言葉を返した。

「今の状況を考えたら、のんびり休んでる事なんて出来なくてさ。それにあんな豪華な部屋、俺の性に合わねえよ。ずっと閉じ籠っていたら、逆に肩が凝りそうだ」

あの豪華な装飾が至る所に施された部屋を思い出しながら、俺は思いつ切り顔を顰めて、二度とゴメンだとばかりに手をヒラヒラと振った。

するとジンは、やれやれと言いたげな表情で、俺と同じように苦笑する。

「随分な言い草だな。まあ、その方がお前らしい」

切迫した状況下であるはずの現状において、だが俺とジンの間では、普段通りの会話が成立していた。それだけ俺たちには、ある種

の余裕のようなものが生まれているらしい。

そんな事を感じさせるゆっくりとした歩調で、ジンは俺の傍まで歩いてくると、軽く腕組みをして立ち止まった。

「ついさっき討伐隊の編成が完了した。これからアーベント・ディベルグの大規模な搜索が始まる。作戦開始の前に、お前には伝えておこうと思っただけ」

「ああ、そっか。……って言うか、今何時？」

「午前八時を回った頃だ。修練に夢中になるのはいいが、時間の確認ぐらいちゃんとしておけ」

「……面目ない」

ジンに注意されるとなぜか平謝りしてしまう。何かもう、すでに上下関係が出来上がってるって感じだよな。

と、内心で肩を落とす俺を尻目に、ジンは真剣な様子で続ける。

「それと、昨日お前が教えてくれた件だが……」

「！ ああ、エリーゼからの伝言の事か」

自然と俯き掛けていた俺は、ジンのその言葉で頭を切り替えた。

俺は昨日、『修練場』の使用許可をもらう前に、ジンにエリーゼからの伝言を伝えていた。

俺が全てを伝え終わると、ジンは一人納得した感じで頷いて、「後は任せておいてくれ」と言った切り、それ以上何も教えてくれようとはしなかった。

だからずっと気になってたんだよなあ……。我ながら、修練に支障が出なかったのが不思議なくらいだ。

「で、結局昨日のはどういう事だったんだ？」

伝言だけで互いの意図を察するという、ジンとエリーゼの繋がり  
の深さ、みたいなのを見せつけられたような俺としては、一人蚊帳の外に置かれている感が否めない。仲間外れも良いとこだ。

俺が根暗な人間だったら、間違いなく根に持つてる所だぜ。……

などと思う俺の胸中を知ってか知らずか、ジンは漸く説明を始める。  
「エリーゼが伝えたかった真意は恐らく、テロリストの仲間がこの

街に入り込んでいて、という事だ。しかもただ入り込んでいてるんじゃない。潜伏していると言いたかったんだろう」

「潜伏？ テロリストがこの街に？ いやでも、この街は東西南北全ての門に検疫所があるじゃねえか。テロリストがこの街に入り込むなんて真似、そう簡単に来れる訳が」

と、そこまで言い掛けて、俺はある事を思い出した。

そうだ、絶対に出来ないとも言いつれない。そもそも俺は、その根拠となり得る現場を目撃しているじゃないか。

この街に来る前、『ディケット』における列車テロ事件。未遂で終わったあの事件の時、列車の運転手と整備士がテロリストの仲間だった。

今回の件も、それと同じだとすれば……。

「そうか。その検疫所の兵士が、テロリストの仲間かも知れないって事だな？」

確信しつつ発言する俺に、ジンは無言のまま軽く頷いてみせる。俺も、この街へ入る際に体験したから知ってる事だが、この街の東西南北に二カ所ずつある検疫所には、一カ所につき常時二人の正規軍兵士が見張り役として待機している。それ故に、首都の警備は強固なまでに万全だと言える面がある。

だがもし仮に、その二人の兵士がテロリストの一味だったとしたら。他の仲間がこの街に入る際に、色々と手を加える事が出来るだろう。それこそ戦闘を行なう為に必要な、武器などの物資を運び入れる事も。

一体いつからそんな不正が行われていたのか、と疑問に思う所だが、今はそんな事を言ってる場合じゃない。

「だったら早く、その検疫所にいる兵士全員を取り調べて」

「もうすでに行なったさ。だが残念ながら、こちらの方が一手遅かったらしい」

俺の言葉を遮るようにして、ジンはその顔に悔しさを滲ませる。

何となく、彼の言おうとしている事が想像出来てしまうが、俺は

問わずにはいられなかった。

「どういう事だ？」

「お前の言う通り、検疫所の兵士全員を取り調べようとした矢先の事だ。街の北側、第二検疫所の兵士二名の行方がわからなくなった。恐らくその二人がテロリスト、そしてアーベントの仲間という事だろっ」

「発覚したのはいつだ？」

「昨日の夜、お前からエリーゼの伝言を伝えられたすぐ後だ。恐らく奴らの方も、この辺りが潮時だと考えたんだろっ。なんとも手回しの良い事だ」

ジンは悔しさと同時に、呆れの混ざった表情で軽く溜め息をついた。

だがそんな表情もすぐに消え、真剣な表情になる。

「しかし逆に考えれば、奴らが引いたという事は、近い内に何かが起こるとい事だ。それが今日なのか、或いは明日なのか。詳しい事はわからないにしろ、正規軍も『ギルド』も、すでに戦いの準備を始めている。……お前の方はどうなんだ？」

ジんに尋ねられ、俺は返答に少し躊躇いを覚えた。

全く駄目という訳では無いが、かといって順調という訳でも無い。抱えている問題は色々あるにせよ、『フレイム・リーディング紅の詩編』を完全に会得する為には、まだまだ時間が掛かりそうだ。

だが俺にはもう、以前のような迷いは無い。

自分で言うのもなんだけど、諦めの悪さだけは折り紙つきだ。

「どれだけ時間が掛かってもやり遂げてみせるさ。何たって俺は、

『英雄』ミレーナ・イアルフスの弟子なんだからな」

「そうか」

根拠など全く無い、己を過信しているみたいな俺の言葉に、だがジンは優しく微笑してみせる。そして俺に背を向けると、静かにその場から立ち去った。

物言わぬジンの背中を見送った後、俺は視線を松明に戻し、再び

集中を開始する。

静けさが戻った『修練場』に、松明の火が爆ぜる音が響いた。

どれぐらい時間が経った頃だろうか。

室内に籠り切りだった俺は、休憩を兼ねて城の外に出ようと考え、城の敷地内を歩いていた。

高さ五メートルはあるうかという、『テルノアリス城』の巨大な門を潜り、相変わらず多くの人で溢れ返る大通りに出ると、俺は大きく伸びをしつつ、雲一つ無い青空を見上げた。

太陽が高々と昇っている事から、恐らく昼時が近いと思われる。

そのせいか、大通りに軒を連ねる飲食店の多くは、どこもかしこも満席になっているようだ。

「あゝ、腹減ったなあ」

正直な俺の腹が、グウウと言うわかりやすい空腹のサインを出す。昨日の夜から『修練場』に籠っていた俺は、体力を回復させる為に寝る事はあっても、何かを食べるといふ事はしなかった。それに今朝だって、ジンが去った後も修練を続けていた為、結局朝飯も口にしていない。

急に身体が空腹感を思い出したのは、休憩を取った事で集中力が途切れたからだろう。これじゃお腹の虫が鳴くのも仕方が無い事だ。とりあえずまずは腹ごしらえからだな、という結論に至り、俺は混み合っている飲食店を避けて、大通りにある色々な出店で買い食いをする事にした。

新鮮な野菜と肉汁がたっぷりソーセイジを使ったホットドッグ

や、酸味と甘みが絶妙に合わさった果物のドリンク。他にも出店で色々と食べ物を買って、行儀が悪いとわかっていて、街の中を食べながら歩き回った。

そんな事を飽きるまで繰り返して、だいぶ腹も膨れてきた頃。果物のドリンクを片手に歩いていたら俺は、ふと今朝ジンに注意された事を思い出した。

「そついや時間の確認してねえや。こんな事してたらまたジンにどやされちまうよ。え〜っど……」

苦言を呈するジンの表情を思い浮かべつつ、俺は時間を確かめる為、辺りに小さい時計塔などがないか見回していた。

するとその時。

ゴォーンという大きな音が、俺の背後、さらには少し離れた位置から、規則的な旋律を奏でながら響いてきた。

首都では名物として知られている、腹に響くような独特の深い音色を持った鐘の音だ。

俺は背後を振り返り、音のする方を見上げる。

視線の先、『テルノアリス城』の中央に建つ時計塔。白く聳え立つその塔の上部には、太陽光を反射して煌めく、金色の巨大な鐘が吊るされていて、それが正午を迎えた事を告げている。

「もうこんな時間か。ジンの奴は昼飯食ったのかな？」

今朝『修練場』で別れた切り、俺はジンの顔を見ていない。今頃彼は、どこで何をしているんだろう？

と、呑気にそんな事を考えた後、そろそろ城に戻って修練の続きをしようかと思つた俺は、僅かに視線を落とす。

それは、まさにその時だった。

天地が裂けたのかと思うような巨大な爆発音が、突然辺りに響き渡り、俺の耳を瞬時に走り抜けていった。

「なっ！？」



正午を告げる鐘の音を掻き消す程の爆発音。そして衝撃の余波で地面が揺れ、微かに何かが崩れるような地響きが伝わってくる。

あまりにも突然の事で、俺は手にしていたドリンクの容器を地面に落としてしまう。だが、驚き戸惑っているのは俺だけじゃなかった。

大通りを行き交う人々は、地面に身を伏せる人や、何かと俄かに騒ぎ始める人など、まさに様々な反応を見せながら、忙しく辺りの様子を窺っている。

「何だ？ 一体何が起きてる？」

妙な不安に駆られ、俺は状況を確かめようと走り出そうとした。

するとその時、丁度近くに、大通りで見回りをしていた数人の正規軍兵士が居合わせた。そこに別の方向から、一人の兵士が酷く焦ったような表情で、転がるように駆け込んできた。

「一体この騒ぎは何ですか？」

見回りをしていた兵士の一人が、駆け込んできた兵士に声を掛ける。するとその兵士は、落ち着く暇も無く、息も絶え絶えにこう返答した。

「たっ、大変だ！ 街の四力所にある全ての駅が、停車していた列車ごと爆破された！」

「何ですって!？」

兵士のほとんど叫びに近い言葉は、俺の耳にもしつかりと届いていた。

列車を止める為の駅が爆発した、だつて？

俺もさほど詳しい訳じゃないが、この街には東西南北のとある一角に、列車を停止させる為の駅があるらしい。

そもそも『首都・テルノアリス』は、商業区、劇場区、住宅区、工業区といった、四つの区に分かれた構造で、それぞれその場所に則した建造物が建てられている。そしてその四力所に造られた停車駅には、それぞれ列車が発着していて、首都から大陸のあらゆる地域へ鉄道が伸びているそうだ。

確か俺も昔、ミレーナとその四つの駅の内どれかを利用した事があったはずんだけど……。今その駅が、列車共々謎の爆発によって破壊されたようだ。

進行している事態の把握を図る為、俺は詳しく話を聞こうと、未だ焦燥に駆られている様子の兵士たちの許に歩み寄ろうとした。

だが、その瞬間。

「きゃあああああ！！」

「！」

大通りの一角から聴こえてきた、女性のものらしき悲鳴に俺が振り返ると、そこには信じられない光景があった。

黒いマントに身を包み、眼の周囲だけを隠す白い仮面を付けた怪しげな人物たちが、謎の騒動に戦慄く人々を容赦無く襲っている。

俺の眼が届く範囲だけでも、仮面の人物の数は十を下回っていない。その人物全てが、手に殺人の凶器となり得る武器（主にロングソードやレイピア）を握っている。

目視した時にはすでに辺りは血の海となり、刺されたか斬られたかわからないが、通りには何人も人間が倒れ伏していた。

「何してんだてめえら！ー！ー！ー！」

俺は叫ぶと同時に走り出し、今また民衆を襲おうとしていた仮面の人物に飛び蹴りを喰らわせた。

思い切り身体を仰け反らせて、仮面の人物はあらぬ方向へと倒れ込む。

俺はすぐさま、右手に『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』を出現させる。が、そこで漸く、眼の前の光景にある事を思い出した。

「……おいおい。見覚えがある、どここの話じゃねえぞ」

相対する人物たちの格好は、記憶にある人物たちと符合する。決して勘違いなんかじゃない。

こいつらの格好は、俺が昨日裏通りでアーベントと戦っていた時

に、見物人として周囲に立っていた奴らと全く同じ物だ。

という事は、どうやら結論は簡単に導き出せてしまう。

駅の爆発、そして仮面の人物たちの襲撃。これらが招き寄せる答えは。

「ついに始まったって事か、アーベントの野郎！」

俺は右手の炎剣を強く握り締め、即座に走り出すと同時に、一番近くにいた仮面の人物に斬り掛かった。

仮面の人物は、俺が上段から放った斬撃を、持っていたロングソードで受け止める。

すると再び、『あの時』と同じ事が起こった。

裏通りでアーベントと対峙した時と同じように、俺の炎剣から炎と爆発が生まれない。『魔術』の効力が正しく発動しない。

一度経験していた分、大した驚きも無く、俺は瞬時に悟る事が出来た。

つまりこいつらが握っているのは、アーベントが持っていた物と同じ、『導力石』を用いた武器って事だ！

ならばこのままの体勢でいても埒が明かない。

確実にこいつらを倒す為には、別の手段を用いる必要がある。

すぐさま判断をつけた俺は、仮面の人物の剣を押し返し、距離を取ると瞬時に『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』を消滅させた。

そして自分の周囲に新たな炎を出現させ、頭上に一点集束させる。  
「『クリムゾン・レイン深紅の流星』！」

叫んだ言葉と共に、頭上の炎の塊が弾け飛び、辺りに散らばっていた仮面の人物たちに火球が降り注ぐ。

「ぐあああああつ！！！」

「ぎゃあああああつ！！！」

火球を喰らった仮面の人物たちは、皆口々に苦痛の叫びを上げて地面に倒れ込んだ。

辺りにはまだ避難出来ていない民間人もいたが、『クリムゾン・レイン深紅の流星』は目標を定めて撃てば、対象物以外に被害が及ぶ事は無い。

俺の視界にいた仮面の人物は十数人。標的の数が増える程、より精密な計算が求められる術だが、『フレイム・リーディング紅の詩篇』に比べればその難易度は高くない。俺にとっては容易な術だ。

と、今の攻防で漸く事態を悟ったのか、大通りにいた人々は一斉に逃げ回り始めた。

一応この辺りに敵はいなくなったようだが、遠くの方からは未だに悲鳴や怒号、そして小規模な争いによる戦闘音らしきものが聴こえてくる。恐らくここ以外の場所でも、仮面の人物たちが暴れ回っているに違いない。

「くそっ！ 一体何人いやがるんだ！」

吐き捨てるように叫び、走り出そうとした時だった。

後方から聴こえてきたのは、複数の足音。それらは全て、やけにしつかりとした足取りで近付いてくる。

背後を振り返った俺は、飛び込んできた光景に少々安堵した。

足音の主は、先程俺が目撃した見回りの兵士たちとは別の、正規軍の兵士たちだった。その数は十人程。彼らは走り寄ってくるや否や、地面に伏して動かなくなった仮面の人物たちを次々と拘束していく。

と、それに気を取られていた俺は、視界の端で先程の見回りをしていた兵士たちが、負傷者の傷の手当てなどを行なっているの僅かに捉えた。やはり彼らも、立派な軍人ではあるらしい。

すると、敵を拘束していた兵士の内の一人が、俺の方（特に髪）を見つめ、足早に近寄ってきた。

「失礼ですが、あなたがディーンさんですか？」

「えっ？ ああ、そうだけど……」

「つい今し方、ジン・ハートラーさんからあなた宛てに伝言を預かってきました」

「ジンから？」

俺が眼を丸くしているのを良い事に、兵士は詳しい経緯も説明せず、伝言の内容を話し出した。

それによると、東西南北四つの駅が爆破されたのは事実だが、敵がどこから現れたのかは不明。雑兵の相手は正規軍と『ギルド』の人間が対処するから、俺にはアーベントの行方を探ってほしい、という簡潔なものだった。

やはりこういう時、ジンは仕事をこなすのが早い。さすがと言うか、ホントに呆れるぐらい感心出来る奴だ。

こうなるともう、俺がやるべき事は決まっている。

「わざわざありがとな。　あぁ、つい喋って言ったら何だけど、こっちはこっちでどうにかやってみるって、ジンの奴に伝えてくれるか？」

「はい、わかりました！」

兵士はかなり大げさな敬礼をすると、踵を返してあっという間に走り去っていった。

何だか妙に畏まられてる気がしたが、どうにか頭を切り替えた俺は、再び前方を見つめる。

「必ず探し出して止めてやるからな……！　覚悟しとけ！」

脳裏に浮かぶ不敵な笑みのアーベントに向けて、俺は宣戦布告のつもりで呟いた。

今も奴は、街のどこかでこの状況を笑って見ているに違いない。

例え『フレイム・リーディング紅の詩篇』が扱えない今の俺でも、必ず見つけ出して倒してやる！

意気込みと共に気を引き締め直し、俺は力強く一步を踏み出す。

すると、俺が走り出すのを待っていたかのように、辺りから激しい戦闘音が響き始めた。

眼が覚めて最初に視界に入ったのは、爆発による黒煙を巻き上げる首都の姿だった。

相変わらず拘束されたままの身体を必死に動かして、あたしはとうにか抵抗しようと試みる。

「だけどそんなのは、全く無駄な行為だった。」

あたしの身体を、金属製の十字架に磔にする太い鋼鉄の鎖は、あたしの華奢な腕でとうにか出来るような代物じゃない。どんなに激しく揺さぶっても、目一杯力を込めて引っ張っても、外れる処か緩む心配すらない。

「何をしても無意味だと認めるまでに、一体どれくらい掛かっただろう。」

抵抗の意思を削がれたあたしは、もう一度眼の前の光景を見つめた。

遙か彼方に見える白い外壁の中で、激しい戦乱が巻き起こっている。

そして多分、あたしのよく知っている人物が、あの戦乱の渦に巻き込まれているはずだ。

「だけど、あたしには何も出来ない。そう、何も……。」

「どんな気分だ、化物？」

無力感に苛まれているあたしを嘲笑うかのような声が、視界の端から聴こえてくる。

声の主が誰なのかは、改めて確認するまでもない。あたしを『化物』と呼ぶ人は、一人しかいないんだから。

「あなたって、最低の人間ね」

問われた事には答えずに、あたしは思いつ切り顔を顰めて、暴言極まらない言葉を返してみた。

「だけど、遠く首都の街並みを見つめるアーベントは、愉快そうに笑うだけで気にしている様子は全く無い。」

「クク、相変わらず強情な小娘だ。貴様も少しはこの景色を堪能し

たらどうだ？ 狂おしい程の激しい戦乱に吞まれ、悲鳴と怒号を撒き散らしながら、燃え盛る炎に包まれていく街。実に美しいじゃないか」

「……こんな大変な状況を前にして何言ってるの？ あなたが起こした戦いのせいで、たくさんの方が犠牲になるかも知れないのに」

「だからどうした？」

「！」

あたしの言葉を遮って振り返るアーベントの表情は、途轍もなく平淡な物だった。どこまでも無感情で、無慈悲で、彼が操っていた炎の熱さとは全く正反対の、氷のような冷たさを感じる。

その表情に背筋が凍り付くような恐ろしさを感じて、あたしは一瞬で口を噤んでしまう。

そんな情けないあたしを蔑むかのように、アーベントは冷徹な微笑を浮かべながら口を開く。

「その辺にいる人間の命など、俺には全く興味が無い。誰が死のうと生きようと知った事か。まあただ一人、例外と言っていい人間はいるがな」

「！ それって、デイーンの事？」

もしかしたらという思いが働いて、気付けばあたしは、ほとんど反射的に彼の名前を口にしていった。

だけどアーベントは、あたしの予想に反して不満そうなに顔を顰め、忌々しそうな口調で吐き捨てるように言う。

「あのガキが例外？ フン、笑わせるな。誰があんな未熟者などに入れ込むものか。奴は所詮、この街と共に消え去る運命だ。自らが操る力と同じ力によってな」

「？ どういう意味……？」

疑問を投げ掛けるあたしに対して、アーベントは嘲笑うかのよう  
に冷笑すると、再び黒煙を上げる首都の景色に眼を向けた。

「直にわかる。その時が来るまで精々大人しくしている事だ、化物」

あらゆる方向から聴こえてくる戦鬪音を聞き流しながら、大規模な襲撃と破壊で荒れ果てた首都の大通りを、俺は縦横無尽に駆け抜けていた。

ジンからの伝言を聞き、街中を探索し始めてから、すでに一時間は経っただろうか。だが、未だにアーベントの姿どころか、行方を捜す手掛かりすら見つけられていない。

疾走を続けながら、前方の十字路を右に曲がろうとした、その時何らかの騒ぎで破壊され残骸と化した出店の陰から、突然仮面の人物が現れ、手にしているロングソードを無慈悲に振るいながら、猛然とこちらへ迫ってきた。

「くっ！」

俺は無理矢理身体を捻って右に跳ぶ事で、その凶刃を紙一重で回避する。

二、三度地面を転がった俺は、その勢いを利用してすぐさま立ち上がった。するといつの間にか、剣を構えた仮面の人物が間近に迫っていた。

「てめえの相手してる暇はねえんだよ！」

吐き捨てるつもりで叫びつつ、俺は右手に集束させた炎を、『レイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』に変化させる。

その直後、仮面の人物が上段に構えたロングソードを、勢い良く振り下ろしてきた。

先制攻撃を仕掛けている分、動作完了は相手の方が僅かに早い。だが焦りは禁物だ。



俺は相手の剣線を瞬時に見切り、下段から炎剣を振り上げる事で、それを易々と弾き返す。

接触の瞬間、炎剣の刀身から火の粉が飛び、俺の右頬を掠めるが、それに気を取られてはいられない。

斬撃を弾き返した事で、がら空きになった相手の胴目掛けて、俺は炎剣を横一文字に叩き込んだ。

「がああああぁっ!!」

紅い刀身が交錯した瞬間、鮮血が飛ぶ代わりに、仮面の人物の身体から踊るように燃え盛る炎が勢い良く噴き出す。

皮膚を焼かれる熱さと痛みから、仮面の人物は狂ったように悶え続けていたが、しばらくして炎が消えると、受け身など取る気配も無く、そのまま地面に身体を伏した。

だがもちろん、力を加減している為死んだりはしていない。今は意識を奪う程度で充分だろう。

「これで、二十一人居か……」

俺は倒れたその人物を見つめ、息を整えながら呟いた。

ここに来るまでに倒した仮面の人物は二十人。今、目の前に倒れている人物はどうやら男のようだが、敵の中には女も混じっていた。別にその事自体に驚きはしない。問題なのはそこじゃなくて、戦っている敵の数だ。

俺が相手にしたのだけで二十一人。他の場所でも大規模な戦闘が続いてる事を考えると、敵側にはかなりの人数が揃っていると見て間違いない。

尤も、本気で首都に戦争を仕掛けるなら、少なく見積もっても何百という単位の間が必要はずだ。そう考えると、これはまだ序盤戦。まだまだこれから、かなりの大人数を相手にしなければならなくなるだろう。音を上げている暇なんて無い。

「それはそれとして……。くそっ、一体アーベントの野郎はどこにいるんだ？」

この街で戦闘が起きている以上、恐らく指揮を取っているはずの

あの男も、必ずどこかにいるはずだ。

だが問題点が一つ。

舞台となっているこの街は、大陸の中心たる首都であるが故に、広さが他の街とは比べ物にならない。そんな場所で人間一人を見つけて出すのは、決して容易な事じゃないだろう。俺のように、首都の地理にあまり詳しくない者が探そうとしてるんだから尚更だ。

それに、アーベントを探していつまでも無駄足を続けていれば、こっちの体力が底を付いてしまう。……いや、もしかしたら、それも奴の狙いの一つなのかも知れない。

いずれにしろ、何か打開策を考えるべきだ。

「……つてのはわかってんだけど。一体どうすりゃいいんだ？」  
完全に立ち止まってしまった俺は、当ても無く辺りを見回してしまっ

すると、まさにその時だった。

「あなたがデイン・イアルフスですね？」

妙に落ち着き払った声が周囲に木霊したかと思うと、突然俺の身体が空中高くに浮かび上がった。

……いや、正確には地響きと共に地面を突き破って現れた何か、俺の身体を足下から持ち上げていているんだ。

「なっ!？」

数メートル持ち上げられた所で、辺りに飛び散る瓦礫と共に、俺は地面へと落下する。

何とか受け身を取って着地した俺は、砂埃が舞い続ける視界の中にある物を見つけた。

それは、五メートルはあろうかという巨大な影。

真上から覆い被さるかのように屹立するその影の正体に、俺は砂埃が晴れる前に気付く事が出来た。なぜなら、俺が『それ』を眼にする機会は、今までに何度もあったからだ。

「『ゴーレム』！」

砂埃が完全に晴れた後にその全貌を現したのは、人型を模した胡<sup>るみ</sup>桃色の巨体。全身が石膏像のように滑らかに整形されているせいか、少し艶のある質感をしている。手足から胴体に至るまで、ほとんど岩の塊のような大きさだが、顔と呼べる部分だけが他の部位に比べて僅かに小さい。その顔の中心には薄藍色の丸い窪みがあり、それがまるで眼だと言わんばかりに、淡く明滅を繰り返している。

つい先日、『テルノアリス』に来る途中で遭遇した『ゴーレム』とは構造が違う。

以前遭遇した『ゴーレム』が鉄製だったのに対して、眼の前の『ゴーレム』は岩石で出来ているようだ。この辺りの違いは恐らく、『製作者』である『魔術師』の、『魔術』の『属性』や『錬成方法』によって変わってくるんだろう。

と、少々頼りない言い方になってしまふのは、俺に『ゴーレム』製造関係の深い専門知識がある訳じゃないからだ。

ただ、以前ミレーナから聞いた話だと、個々の『魔術師』の『錬成方法』によって、『ゴーレム』自身が持つ『属性』は変わってくるらしい。その点から考えると、眼の前の『ゴーレム』はそのまま『地属性』って感じた。

俺は持ち得る限りの知識を総動員して敵を分析しつつ、さっきの声の主を探し始めた。

俺の耳に届いた声と、『ゴーレム』が現れた事から考えても、この近くにいるのは間違いない。

『製作者』<sup>マスター</sup>となる、『魔術師』が！

「デイン・イアルフス」

「！」

再び聴こえてきた声は、どうやら男のものらしい。落ち着いた印象を感じさせるその声は、屹立して動かない『ゴーレム』の足下の辺りから聞こえる。

「かの英雄、ミレーナ・イアルフスの弟子であり、『深紅魔法』の

使い手。アーベント様から聞いていますよ。碌に『深紅魔法』を扱えない、未熟者の『魔術師』だと」

言葉を発しながら現れた男は、今までの連中と同じように黒いマントを身に纏い、眼の周囲だけを隠す白い仮面を付けている。その口振りからすると、間違いなくこいつが『ゴーレム』を操っている『魔術師』だ。

……って言うか、誰が未熟者だって？

「下っ端の分際で随分な事言ってくれるな。何も知らねえ野郎が好き勝手抜かしてんじゃねえよ」

言葉の端に含み笑いを挟んでしゃべる男は、言葉遣いは礼儀正しい感じだが、何だか気に喰わない。アーベントの野郎に未熟者扱いされるのも御免だが、眼の前の得体の知れない人間にそう言われるのはもつと御免だ！

俺は『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』を右手に造り出しながら、威圧するつもりで強く『魔術師』を睨み付ける。

「邪魔するってんなら容赦しねえ。退くなら今の内だぜ？」

「フフ、面白い人だ。この状況で敵に情けを掛けるとは……。折角の申し出、すみませんが丁重にお断りさせて頂きます。未熟者相手に背を向けるなど、『魔術師』として有るまじき行為ですから」

「……そうかよ。なら、どんな眼に遭おうと文句はねえよな！」

叫ぶと同時に、炎剣を携えて走り出す俺の視線の先で、『魔術師』の身体が僅かに動く。

「行け」

『魔術師』が呟いた瞬間、今まで静止していた『ゴーレム』が突然動き出した。

岩石で出来た巨大な右腕を振り上げ、岩の塊のような右拳を俺に向けて放ってくる。

俺は咄嗟に、地面を強く蹴り付けて左に跳んだ。するとそこに、ほんの数秒遅れて『ゴーレム』の拳が突っ込んできた。

轟音を響かせて地面に突き刺さる巨大な拳。巻き起こった激しい

揺れに、俺は一瞬足を取られそうになる。

しかしどうにか体勢を保った俺は、反撃を試みようとして『ゴーレムの太い右肘の辺りに、炎剣を振り下ろそうとした。

だが、その時。

「『メテオ・フランス  
岩裂槍』」

「！」

突然横合いから、槍の矛先を模した無数の鋭利な岩石の雨が、俺の身体を貫こうと飛来した。

間一髪、後方に跳躍してそれらを躲した俺の眼に映ったのは、口許にニヤリとした笑みを湛えた『魔術師』の姿だった。

今の攻撃も恐らく、奴の『魔術』によって生み出された攻撃だ。もしも上手く回避出来ていなければ、俺の身体はかなりの傷を負う事になっていただろう。

「不意討ちとはやってくれるじゃねえか。あんたの辞書に正々堂々って言葉は載ってないみたいだな」

「おや、心外な物言いですねえ。誰も『エルザ』だけがあなたの相手をするとは言ってませんよ？」

愉快そうな笑みを言葉に含みつつ、『魔術師』は傍らの『ゴーレム』の身体を、随分と優しい手付きで撫でてみせる。

だが俺の方はと言えば、『魔術師』の妙な発言に、思わず首を傾げてしまう。

「……………なあ、『エルザ』って誰の事だ？」

「何を言ってるんです？ 決まっているでしょう。この『ゴーレム』の名前ですよ。『彼女』は私の大切な従者であり、永遠のパートナーでもある。まあ、あなたのような未熟者には、到底理解出来ない事でしょうがね」

「……………」

何しれつと気持ち悪い発言してんだこいつ……………。今までにも『ゴーレム』を操る『魔術師』と戦った事はあるけど、こいつみたいに名前を付けてる奴なんて初めてだ。しかも女の名前かよ……………。

少々、どころかかなり嫌悪感を覚えるその思想は、奴の言う通り俺には理解出来そうにない。

と、そう露骨に顔に出しているにも拘らず、『魔術師』の方は涼しい顔で続ける。

「さあ、私たち二人を相手にどう戦いますか？ あなたが未熟者ではないと言うのなら、その証拠を今ここで見せて頂きたいものだ」

「その前に、あなたに聞いておきたい事がある」

妙な発言のせいで心が萎えてしまいそうにはなったが、俺はどうにか気を取り直し、『魔術師』に問い掛ける。

それは、出来れば再び戦闘が始まる前に確認しておきたい事だった。

「おや、何ですか？」

「アーベントの野郎はどこにいる？」

然して戸惑った様子も無かった『魔術師』に対し、俺に即座に尋ね返した。言葉の端に、滲み出るような敵意を絡ませて。

脅しが効くような相手じゃない事はわかってる。ただ単に俺は、自分の内から沸々と湧き上がる感情を抑える事が出来なかった。

憎しみ、怒り。恐らくそれがほとんどだったろう。

だがそれだけじゃない。それらの感情の中に隠れて、強敵と戦う前の高揚感のようなものがある。

そうだ。俺はきつと、心のどこかで望んでいるんだ。

無抵抗なりネを連れ去り、俺の信念にまで傷を付けた男、アーベント・ディベルグと再戦する事を。

そんな俺の心中を察しているはずもない『魔術師』は、終始落ち着いた口調で告げる。

「さあ、どこにいるんでしょうねえ。私の口を割らせる事が出来れば、自ずとわかる事なのではないですか？」

……何かこいつ、言う事がいちいち芝居掛かってないか？ まる

で物語や小説に出て来る悪役が使うような台詞だ。わかりやすいって言うか、単純って言うか。

しかしまあ、こいつの言う事も一理ある。相手の口を手っ取り早く割らせるには、やはり実力行使が一番だろう。

「仕方ねえ。あんたがそう言うんなら、望み通りブツ倒してやるよ！」

こんな台詞を吐ける俺自身も、どうやら充分単純な奴らしい。

物語の主人公になったような気分になりつつ、俺は再び『フレイム・紅蓮の爆炎剣』を構えて、力強く駆け出す。

戦闘再開は、ものの数秒後だった。

第七章 紅蓮の炎は全てを滅す（前書き）

テルノアリス編もようやく終わりが見えてきました。  
後もうちよつとだ！ 頑張るぞ！（笑）



## 第七章 紅蓮の炎は全てを滅す

『魔術』とは、人を殺す事だけに特化した技術。故に人を生かし、活かせる『魔術』は存在しない。

その事を俺は改めて認識した。

確かに今、眼の前で戦っているこの『魔術師』は、本気で俺を殺そうとしている。殺す事以外考えていない。それがハッキリとわかってしまう。

辺り一面に飛び交う岩石の槍を躲しつつ、俺は攻撃者の『魔術師』をチラリと一瞥する。

奴は攻撃を続けながら、必死に回避行動を取る俺を心底愉快そうに歪めた表情で見つめている。全くアーベントの野郎と言い、なんて悪趣味な連中なんだ。

と、『魔術師』の動きに気を取られていた俺は、通りの建物の影から出て来た『ゴーレム』、『エルザ』に気付くのが一瞬遅れた。

慌てて急停止する俺に向けて、彼女はその巨大な右拳を容赦無く振り下ろす。

「ヤッバツ！」

反応が少し遅れたものの、俺はほとんど転がる格好で右に跳躍し、紙一重でその一撃を躲した。我ながら拍手を送りたい程の華麗さだ。

俺は瞬時に体勢を立て直し、右手に握る『紅蓮の爆炎剣』フレイム・ロングソードは消滅させずに、左手に新たな炎を生み出した。そして炎を纏った左手を、左から右に横一文字に払う。

するとその動きに沿って、まるで真っ白な紙に紅い線を引くかのように、炎が空中に留まった。

俺はそのまま、その炎と交差させる形で、今度は上から下に向けて炎の線を引き、虚空に十字型の炎を作り出す。

「俺だつてやられっ放しじゃないぜ、『エルザ』ちゃん！」

叫ぶと同時に、炎を纏ったままの左手で、虚空に描いた十字型の

炎の中心を思い切り殴り付ける。

これは『深紅魔法』の技の一つ、『バーニング・クロス烈火の十字爆撃』と言う名の『魔法』だ。

「行っけえ！」

殴り付けた十字型の炎が、『エルザ』の硬そうな胸の辺りに飛来し、紅い光を放つと同時に爆発を起こす。

爆発の衝撃で彼女の身体は大きく揺らぎ、その巨体を後ろ向きに仰け反らせると、体勢を立て直す事無く地面に倒れ込んだ。

轟音と共に、辺りに大量の土煙が舞い上がる。

「よし！ このまま一気に」

片を付けるつもりで息巻いていた俺は、止めの一撃を『ゴーレム』に放とうとした。

ところが、背後から突然無数の岩石の槍が飛来し、その内の一つが俺の右肩の辺りを掠めた。

「がっ！」

またもや不意を討たれた事で、俺は痛みを感じる暇もなく前のめに倒れ込む。

痛みを堪え、すぐさま立ち上がるうとして肩越しに上空を見上げた俺は、視界の中にある物を捉えた事で、思わず硬直してしまう。

それは先程右肩を掠めた物と同じ、鋭利な岩石の槍。

上空から飛来する無数の槍は、まるで降り注ぐ雨水のように、容赦無く俺の身体を傷付ける。

「があああああああああっ！」

皮膚が焼けるかのような激痛が全身を駆け巡り、辺りには岩石の槍が地面を貫く音が響き渡った。

一瞬意識が飛び掛けたが、俺はとにかく持ち堪えて立ち上がる。

「くっそ……、俺の『クリムゾン・レイン深紅の流星』と似たような攻撃の仕方じゃがっ……ッ！」

苛立ち紛れに吐き捨てて、ふと自分の身体に視線を向けると、服のあちこちが破れ、随分とみすばらしい格好になっていた。が、身

体の至る所に出来た擦過傷の方は思ったよりも軽いみたいだ。

……まあこういう怪我には慣れてるけど、これはこれで結構地味に痛いんだよな。

「随分悠長な戦い方をなさるんですね」

身体の負傷個所を調べていた俺の耳に響く、随分と余裕を感じさせる声。その主は言うまでも無く、俺の身体に傷を付けた張本人だ。「やはりあなたが未熟者だとするアーベント様の見立ては正しいよ。うだ。少しは出来る方なのかと思っていたんですが、興が削がれてしまいましたよ」

岩石の槍による破壊で巻き起こった土煙の向こうから、『魔術師』は酷く落胆したような様子で現れた。

しかしまあ、さつきからいちいち物言いが偉そうな奴だな……。ただでさえイラつく発言ばかりな上、妙に丁寧な口調も相俟って、俺は余計に腹立たしさを感じている。会話する気が削がれるばかりだ。

嫌味のような台詞を聴き続ける必要は無いと思い、傷の痛みを堪えつつ、俺は『魔術師』との距離を詰める為に走り出す。

すると、その瞬間。

「『エルザ』」

「！」

『魔術師』が呟いた言葉に反応するかのようになり、いきなり俺の行く手を阻む形で、地面が大きく盛り上がる。

轟音を響かせながら地中より現れたのは、ついさつき破壊したはずの『ゴーレム』、『エルザ』だった。地面を割って現れた彼女は、その巨大な腕で俺の身体を殴り飛ばそうとする。

巨大な拳が届く寸前、俺は炎剣を水平に構え、胸の前に翳す形で防御体勢を取った。

が、しかし。

「ぐっ、おわ……ッ！」

普通に考えて、『ゴーレム』が放つ見るからに超重量の一撃を、

人間如きの力で止め切れる訳が無い。

真正面から襲うとんでもない衝撃に圧され、俺の身体は軽々と宙を舞い、あっさり数メートルもの距離を吹き飛ばされてしまう。

体勢を立て直す暇など無いまま、俺は通りの一角にあった出店の屋根を突き破る形で、背中から地面に叩きつけられた。

轟音を上げて出店が崩れ、瓦礫に早変わりする。

「突然地面から『エルザ』が出て来て驚きましたか？」

瓦礫に埋もれる俺の耳に、悠然とした『魔術師』の音が聴こえてきた。

俺が何とか瓦礫を押し退けながら這い出る間にも、『魔術師』は自分の力に酔いしれているかのように、どこか楽しげな口調で続ける。

「彼女は少し特別でしてね。一度身体を破壊されても、『核』となる心臓部が無事なら、身体を再構成する事が出来るんですよ。今はそれを利用して、地中から奇襲を掛けたまでの事です」

漸く瓦礫の中から立ち上がった俺は、勝ち誇ったような表情の『魔術師』を睨み、再び炎剣を構える。奴の自慢話に付き合う気は全く無かった。

「どういう理屈だろうが、いちいち説明する必要ねえんだよ。あんなの行使する『魔術』に興味がある訳でもねえしな」

「……！ フフ、何て事だ。とても『魔術師』とは思えない物言いですね」

「あん？」

不満そうに俺が声を荒げると、『魔術師』は呆れた様子で答える。「我々『魔術師』は、相手の『魔術』を解析し理解する事で、それらを知識として自身の身に蓄積していくのです。それは言わば、我々『魔術師』が『賢者』となり得る為に、必要かつ重要な事柄だ。にも拘らず、あなたのように『魔術』に興味を示さない人間が『魔術師』を名乗るとは頂けない。滑稽の極みですね」

自らの持論を得意げに披露した『魔術師』は、少々怒りの籠った

ような眼付きで俺を見ている。

知識として自分の中に蓄積していく、ね……。確かに、こいつの言う『魔術師』のあるべき姿みたいなものもわからなくはない。

が、俺にはそれよりも必要だと思える事がある。重要だと教えられた事がある。

この辺りは、見解の相違ってヤツだ。

「生憎俺は、知識よりも大切な事があるって教えられたモンでね。知識ばかり詰め込んでも、それを扱う人間が破綻してたら知識に意味なんて無いんだよ。人を殺す事しか考えてない、今のあんたみたいにな」

「ほう。それがミレーナ・イアルフスの教えという訳ですか。

フツ。どうやらかの『英雄』は、私が思っていた程聡明な人物ではないようだ。大した知識も持ち合わせていない、愚かで哀れな人間と言った所ですかね」

「……おい。てめえ今何て言った？」

「はい？」

「今何て言ったのかって聞いてんだよ」

俺は歯を強く食い縛り、怪訝な顔付きの『魔術師』に向かって右足を一步、力強く踏み出す。

眼の前の大バカ野郎は何も知らないんだ。何もわかっていないんだ。

俺が一体、どれだけミレーナを尊敬してるのかって事を。

「大した知識を持ってない？ 愚かで哀れな人間？ てめえは一体、どこの誰を侮辱してやがるんだ？」

ギリツと、俺は炎剣を握る手により一層力を込めた。煮え滾るような激しい怒りは、すでに頂点を迎えようとしている。

そんな俺の様子を察した気配も無い『魔術師』は、呑気にこう口にした。

「何を言ってるんです、そんなの決まっているでしょう？ あなた  
の師匠、ミレーナ・イアルフスの事ですよ」

その言葉が、最後の引き金だった。

俺は踏み出していた右足を軸にして、風のように疾走する。

そして瞬時に『魔術師』との距離を詰め、その顔面に速度を載せた左拳を叩き込んだ。

「ぐおっ!？」

あまりにも綺麗に命中した為、左手に鈍い痛みが走った。

だが俺はそんな事など気にせず、後方に『魔術師』の身体が飛んだ所で、標的を『エルザ』に切り替える。

右手に握った炎剣『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』を下から払い、彼女の右肘の辺りを斬り付け、爆炎で吹き飛ばした。

「うおおおおおっ!!！」

俺は『エルザ』の巨体を利用して踏み台代わりにし、右に左に跳躍しながら、その巨体を炎剣の一撃で抉り取っていく。身体を再構成する暇など与えない。

何十回とそれを繰り返す内に、彼女の身体は徐々に、原形を留めない程削れていく。

だが俺は攻撃の手を緩めない。

彼女の正面に降り立ち、『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』を消滅させ、頭上に炎の塊を作り出す。

『深紅魔法』の技の一つ、『クリムゾン・レイン深紅の流星』。

凝縮した炎の塊を頭上に静止させ、俺は今頃になって漸く起き上がった『魔術師』を一瞥する。

「もう一回聞けど。アーベントの野郎はどこにいる」

これで決めるつもりだというのが、『魔術師』にもわかったのだろう。僅かに身動きするその姿が、俺には酷く滑稽なものに見えた。だが、それでも奴は口を割ろうとせず、声を荒げて挑み掛かってくる。

「この程度で勝った気になるな！ 私が本気を出せば、貴様のような未熟者など」

「答えねえならもう黙れ！」

最後まで言わせるつもりが無かった俺は、叫ぶと同時に、今度こそ『深紅の流星』クリムゾン・レインを発動させた。

轟音を上げて炎の塊が弾け飛び、無数の火球となって『魔術師』と『エルザ』の許に降り注ぐ。

「ぎゃあああああつー！」

無数の火球による連鎖爆発は、辛うじて残っていた『エルザ』の身体を吹き飛ばし、同時に彼女の傍らにいた『魔術師』をも巻き込んだ。

静寂の訪れと共に、周囲にはしばらく爆煙が立ち込めていたが、やがてそれも晴れ、また遠くの方から戦闘音らしきものが聴こえ始める。

俺は短く息を吐くと、無数の岩の塊と共に、地面に倒れている『魔術師』の許へと歩み寄った。

『エルザ』が再生する気配が感じられないという事は、どうやら上手く『核』を破壊出来たらしい。

『魔術師』の方も、まあ無事では済まないだろうが、死ぬような事は無いだろう。ミレーナとの約束を破る気なんて、俺には全く無いんだから。

「おい、生きてんだろ。気絶すんのは別にいいけど、アーベントの居所を答えてからにしろよな」

「し……、知りません。わ、私は……聞かされていない。ほ、本当です……」

喉が焼けているせいか、酷くしゃがれた声で『魔術師』は白状した。ここまで追い込んでるんだから、嘘をついている可能性は低いだろう。って言うか、結局こいつも知らねえんじゃねえか。

呆れて思わず溜め息をついた俺は、未だに戦闘音の響きが続いている周囲の様子を窺いながら、静かに思考を開始する。さて、これからどう動けばいいものか。

アーベントの配下であるはずのこの男ですら、奴の居場所を知らないという事実。ここまで手掛かりが無いとなると、まるで探しよ

うがない。そもそもあいつは、本当にこの戦いに参加してるのか？  
それに、あいつに囚われてるはずのリネの事も気に掛かる。解放  
されていないとすれば、恐らくアーベントと一緒にいるはずなんだ  
けど……。

「……ん？」

少しの間考え込んでいた俺は、不意に首都の街並みの中に、妙な  
ものを見つけて思考を止めた。

「何だ、あの紅い光？」

大通りに立ち並ぶ大小様々な大きさの建物。その建物の隙間から  
見える遠方に、微かに紅い光の柱が見える。その光の柱はゆつくり  
と、天に向かって真っ直ぐに伸びて行っているようだ。だが周りの  
建物が邪魔で、それがどこから発生しているものなのか、ここから  
だとハッキリ見えない。

となると。

「『テルノアリス城』からなら見えるかも知れねえな」

この街で一番高い建物と言えば、街の中心に聳え立つあの城をお  
いて他には無いはずだ。

目的地が決まれば、後は行動を起こすのみ。

俺は踵を返して歩き出そうとして、しかし一旦その足を止めた。

そして肩越しに振り返り、地面に倒れたままの『魔術師』に声を掛  
ける。

「……途中で正規軍兵士でも見つけて、保護してくれるように頼ん  
どいてやる。有り難く思えよな」

「……」

『魔術師』は気絶している訳じゃないようだが、返事が返ってくる  
事は無かった。……まあ、こっちも最初から期待なんかしていない。  
無視したいならすばいいいさ。

適当に流して頭を切り替えた俺は、前方に視線を戻し、『テルノ  
アリス城』へ向かって走り出した。



ほんの一時間ぐらい前に潜ったばかりのテルノアリス城の巨大な門を潜り、俺は城の敷地内へと足を踏み入れた。

門を抜けると、そこには広場のような幅二十メートル程の石畳が続いていて、その至る所に負傷兵らしき者やその手当てをする者など、大勢の人間でごった返していた。門の近くでは再び戦場へ戻ろうとする者が、それを制止しようとする者と言い争いになっている。俺はその人の波をなんとか掻き分け、目的の人物を探し出す事が出来た。

「ジン！」

俺が一声掛けると、銀髪の少年は少々驚いた様子で振り返った。

「デイン、なぜここに？ アーベントは見つかったのか？」

「そんな簡単に見つかったら苦労しねえよ。『魔術師』やらなんやらに絡まれて、正直それどころじゃなかったぜ。って、そんな事言いに戻ってきた訳じゃなくてだな」

危つく話が脱線し掛かった所で、俺はなんとか軌道修正を図る。

と、眼の前のジンを見てある事に気付いた。彼の服も所々破れたりしていて、その身体には白い包帯が巻かれている。

「おい、ジン。その身体……」

「ああ。察しの通り、なかなか手強い奴がいてな。これはその時出来た傷だ。まあ見ての通り、そこまで酷い怪我じゃない」

全ギルドメンバーの中で、五本の指に入るぐらい強いって言われているお前に怪我させるなんて、相手はどんな奴なんだよ？

と思つた所で、俺はやや遅れて気付く。

「まさか、お前も『魔術師』と戦つたのか？」

「ああ、まあな。あの爆発の後、すぐに俺も戦いに出ていたんだが……、少し妙な感じがする」

「妙な感じ？ 『魔術師』がいる事がか？」

疑問を投げ掛ける俺に、ジンは首を横に振る。それは違うという意志の表れだった。

「相手側の敵の数が、だ。確かに今も、街のあらゆる場所で戦闘が続いている。だが首都を攻め落とそうとしている割には、敵兵の数が少ないように思う。それに奴らが一体どこから現れたのかという疑問も残る。未だにアーベントの行方も掴めていないしな」

そう言つて、ジンは腕を組んで難しそうな顔をする。確かにジンの感じている疑問は、俺も少なからず感じていた事だ。

そもそも黒服の仮面の人物たちは、一体どこに潜んでいたんだろう？ 街の中に潜んでいたにしても、奴らの格好は目立つ。服装を変えていたとも考えられるが、それにしただって敵側の人数は多い。不審な動きをしていれば、誰かが疑問に思うはずだ。

それに警備の手は、外壁の検問所だけにじゃなく、街中を見回っている兵士も大勢いる。そいつら全員の眼を欺いて今まで潜んでおく事が、果たしてそう簡単に出来る事なんだろうか？

俺とジンは、互いに黙り込んでその場に立ち尽くす。するとその時。

「もしかしたら、地下に潜んでいたのかも知れないね」

落ち着いた聡明さが感じられる声が聴こえ、俺とジンは同時に顔を上げる。声のした方を見ると、大人しい雰囲気を漂わせる青年が立っていた。

長い若竹色の髪を後ろで一つに纏めたその青年は、眼鏡を掛けているせいか知的な雰囲気醸し出している。少し眼がっすり上がってはいるが、その顔には優しい笑みが湛えられている。俺には見覚えの無い青年だった。

「誰だ、あんた？」

然して何も考えずにそう口走った俺を、ジンが慌てた様子で窘め

る。

「何を言ってるんだディーン！ この方は現在のテルノアリスを統治する元老院の一人、ハルク・ウエストイン様。俺が厚意にしてみらっている王族の方だ！」

「……、ええっ!？」

ジンが口にした言葉の意味を理解するのに数秒の時間を要した俺は、思わず盛大に叫んでしまった。

この、何かヒョロツとした感じの大人しそうな奴が、元老院の一人!？

辛うじてその言葉は飲み込んだ俺だったが、それでも驚きが隠せない。王族って言うからもつと威厳のあるおっさんを想像してたのに、見事に予想を裏切られた。しかも服装も白い長袖のシャツに黒い革のズボンなんて格好で、豪華さが微塵も感じられない。いいのかよ、貴族がこんな地味な服装でても……。

「って言うか、あんた随分のんびりしてんな。さっさと避難しないと、ここにも敵が攻めてくるかも知れねえぞ？」

「おいディーン！ 口の利き方を」

「良いよ、ジン。いつも言ってるだろ？ ボクに気を使う必要はないって」

「は、はあ……」

敬語を使おうとしない俺をジンが咎めようとすると、ハルクは笑って止めに入った。どうやら貴族だからと言って、変に威張り散らしている人間じゃないみたいだ。

ぼんやりそんな事を思っていると、ハルクはニコリと笑って、俺に声を掛けてきた。

「キミがディーンくんだね。ジンから色々聞いてはいたけど、まさかあの『英雄』の弟子がキミのように若い人だなんて思わなかったよ。とりあえずよろしくね、ディーン・イアルフスくん」

「……はあ」

何だか掴みどころの無い感じがして、俺は生返事をするしかなか

った。こんな奴が貴族ねえ……。

「ところでハルク様。今仰った地下とはどういう……」

呆けていた俺の代わりに、ジンがハルクに畏まった様子で尋ねた。何かこんなジンの姿を見る事になるなんて複雑な気分だ。

「この街の地下には、随分昔に、戦乱時の避難場所として造られた壕があるんだよ。今はもう使われていないけど、出入り口は街のあらゆる場所にある。恐らく敵兵たちは、そこに潜んでいたんじゃないかな？」

「この街の地下にそんなモンが？ でも、仮にそうだったとして、何で奴らがそんな物の存在を知ってるんだ？」

俺が疑問を投げ掛けると、ハルクは急に真剣な顔付きになった。さつきまでの少し頼りない雰囲気が一瞬で消え去る。

「キミも知ってるの通り、今回の戦乱の首謀者である男、アーベント・デイベルグは元貴族だ。さつき言った壕の存在は一部の王族のみが知っていてね。奴もその一人だったという訳さ。だから確証を得る為に、既に何人か兵を調査に向かわせてる。アーベントがそこに残っているとは思えないけど、放つとく訳にもいかないしね」

ハルクの話の聞く限り、敵が突然現れた理由はそれで説明がつきそうだった。

だけど肝心の、アーベントの野郎の行方がわからない。あいつを見つけて出して捕まえない限り、この戦いが終決したとは言えない。

「……ってそうだ！ 俺、ちょっと確かめたい事があるんだ」

漸くここに来た目的を思い出し、俺は我ながら自分の間抜けさに肩を落とす。こんなに話し込んでる場合じゃないんだよ。

俺は二人に事情を説明し、ハルクに城への入城を許可してもらった。

ここへ来る途中に見たあの紅い光。

あの光が一体どこから発生しているのか、それを確かめられないといけない気がする。

俺は聳え立つ城を見上げ、少し不安な気持ちになった。

「あの紅い光。街の外、丁度外壁の角の部分から発生してるんじゃないか？」

遠くに見える首都の外壁の辺りを指差して、ジンが難しい顔付きで言った。

街中で見た謎の光の発生している場所を確かめる為、俺はジン、ハルクの二人と共に、『テルノアリス城』の上層階にある、展望室へと来ていた。

地上から三十メートル程の高さにあるその正方形型の部屋には、応接も出来るようにする為か、金属製のテーブルと椅子が部屋の中に置かれている。窓以外の壁の部分には、値が張りそうな絵画や美術品らしき剣や盾が、所狭しと飾られている。まさしく俺が苦手とする、豪華な貴族の部屋だった。

この部屋からだ、街の北側の景色しか見えないが、確かに外壁の角の部分から、例の紅い光が柱となって天に昇っていくのが見える。

「おや？ あれもそうじゃないかい？」

「え？」

「ほら、あそこ」

そう言っただけでハルクが指差しているのは、ジンが指摘した方とは逆の位置にある、外壁の北西角の辺りだった。彼の言う通り、確かにそこからも紅い光の柱が伸びている。

まさか……と、俺は嫌な予感を覚えた。俺が持ち得ている『魔術』に関する知識の中に、今起きている現象と符合するものがあったか

らだ。

「この部屋と同じように、街の南側を見渡せる部屋はあるか？」

酷く焦った俺の表情を見て、ハルクは少し躊躇いがちに答える。

「あ、ああ。さっき歩いてきた廊下を逆に進めば、何部屋かあるよ」

「どうしたんだ、ディーン？」

真剣な表情で尋ねてくるジンを尻目に、俺は足早に展望室を飛び出す。身体の内側から湧き上がるような焦りに支配されていた俺は、ジンの言葉に返事をする余裕を無くしてしまっていた。

一刻も早く確かめなきゃいけない。

俺の予想通りだとしたらあいつは、アーベントの野郎はとんでもない事を考えてやがる！

ハルクに教えられた通りに廊下を進み、南側の展望室の一つに辿り着いた俺は、扉を蹴破るような勢いで部屋に飛び込み、足早に窓際に向かうと、窓辺に手を付いて外壁の方を注視する。

「……嘘だろおい。何考えてんだあの野郎！」

遠くに見える光景を目の当たりにして、俺は窓辺に拳を叩き付けた。

南側の外壁の角二カ所には、北側と同じく紅い光の柱が立ち上っている。それが意味する所を察して、俺は憤慨せずにはいられなかった。

どうやらアーベント・デibelグと言う男は、俺が思っていた以上に頭のイカれた奴らしい。

と、俺が背後を振り向くと、いつの間にかジンとハルクが後を追って来ていた。

「一体何がどうしたと言うんだ。説明してくれディーン」

俺に少し遅れる形で部屋に入ってきたジンは、難しそうな顔をしながら尋ねてくる。傍らにいるハルクも、何が起こっているのかわからないと言いたげな顔だ。

俺は眼にした事実を告げる為、ゆっくりと口を開く。

「今見えてるあの四つの紅い光は、首都を囲むようにして組まれた、

『術式魔法陣』って言う『魔法』だ。この『魔術』は、陣の内部に強力な破壊エネルギーを生み出す事で、陣内の対象物を一瞬で消し去る破壊力を持つてる。つまりアーベントは、『術式魔法陣』を発動させてこの街を、首都その物を消し去ろうとしてるんだ！」

俺が真実を告げると、ジンとハルクは言葉を失ってその場に立ち尽くした。

そうだ、これがアーベントの本当の狙いだったんだ。

敵兵の数が少ないのは白兵戦が目的ではなく、正規軍や俺たちをこの場に足止めして『術式魔法陣』で一掃する為。恐らく駅を爆破したのも、街の中に注意を向けさせるのが目的だったんだろう。だからどれだけ探してもアーベントの行方が掴めなかったんだ。

そりゃ探しても見つからない訳だ。あいつは最初から、この街の中にはいなかったんだから。

「……という事は、アーベントは初めから、あの仮面の人物たちも犠牲にするつもりだった、と言うのかい？」

ハルクは信じられないといった様子で、俺に語り掛けてくる。

俺はゆっくりと頷いて、答えとなる言葉を紡ぐ。

「今思えば似たような事があったんだ。『ディケット』に着く途中で起きた列車テロ。あの事件の時も、実行犯たちは騙されて囿に使われていた。多分あの計画を考えたのも、アーベントだったんだ」

俺はもう一度窓の外に眼を向けた。

紅い光は徐々にだが、その光の強さを増しているように思う。恐らく『術式魔法陣』が発動するのも時間の問題だ。その僅かな時間で、この街の人全てを避難させるのは不可能だろう。

「止める手立てはあるのか？」

背後から聴こえた強い決意を感じさせる声に、俺はもう一度振り返る。

声の主であるジンは、真っ直ぐに俺の方を見ていた。その眼を見つめ返して、俺は冷静に言葉を紡ぐ。

「『術式魔法陣』は破壊力がある反面、組み上げて発動するまでに

相応の時間が掛かる。況して首都全体を囲む程の陣となれば尚更だ。時間が無いのは確かだけど、まだやれる事はある」

「具体的にはどうすればいい？」

「多分あの光の柱の下に、『魔術師』が一人ずつ配置されてるはずだ。『術式魔法陣』を安定させてるその『魔術師』を倒せば、陣の発動を邪魔出来る」

「だけどこれは、あくまでも俺の個人的見解であって、確定事項って訳じゃない。もしかしたら、配置されてる『魔術師』は一人じゃないかも知れないし、『魔術師』を倒しても、陣が発動してしまう可能性だってあるかも知れない。どれも絶対に無い事だとは言い切れなかった。」

すると、そんな俺の弱気な心の内を読み取ったかのように、ジンは可笑しそうにフツと笑う。

「自信を持って、デイーン。俺はお前の言葉を信じてる。『英雄』ミレーナ・イアルフスの、たった一人の弟子であるお前の言葉をな」  
「！」

励ますようなジンの言葉に、俺は少し照れ臭さを感じた。

……全く、ジンの言う通りだ。今更何を迷ってるんだ俺は。昨日エリーゼに会った時、決意したばかりじゃないか。どんな事があっても、もう迷わないって。

「ありがとな、ジン」

「礼なんていらさないさ。それよりも早く、その『術式魔法陣』とやらの発動を止めよう」

「ああ、もちろん。……でも悪い。陣を安定させてる『魔術師』の討伐は、お前が実行してくれないか？」

俺の突然の申し出が意外だったのか、ジンは若干眼を丸くしながらも、躊躇いなど無さそうに首を縦に振る。

「それは構わないが、お前はどうするんだ？」

「やらなきゃいけない事が残ってるから、それを果たしに行く。それから、ハルクは『魔術師』討伐の為に、ジンの補佐と



して割ける人員を選出してくれ。数は出来るだけ多い方がいい」

「わかった、任せておいてくれ」

二つ返事で了承してくれたハルクは、「ところでキミは何をしにどこへ行く気なんだい？」と言って、不思議そうに俺に尋ねてくる。ジンとハルク、二人から怪訝な視線を浴びながら、俺は悪戯っぽくニヤツと笑ってみせた。

「決まってるだろ。アーベントの野郎をブツ飛ばしに行くんだよ！」

「さて、そろそろ時間だな」

あちこちから煙を上げる首都の街並みを眺めながら、アーベントはそう呟いた。ニヤリとした笑みを湛えたその表情は、勝利を確信しているように見える。

「これ以上何が起るって言うの？」

疑問に思ってたあたしが尋ねると、アーベントは勝ち誇ったような顔で口を開く。

「『術式魔法陣』という『魔術』を知っているか、化物？」

「……」

あたしは黙り込んで答ええない。素直にわからないというのもあつたし、『化物』と呼ばれている事への抵抗感から、反抗したくもなっていた。質問したのは自分だけど、返事をしてしまうと、自分が『化物』だと認めてしまうような気がしたから。

あたしの沈黙をどう受け取ったのか知らないけど、アーベントは愉快そうに説明を始める。

「『術式魔法陣』とは、簡単に言えば『限定空間破壊』だ。『魔法

陣』を設置した限定空間に、陣を安定させる役割を持った『魔術師』  
数人の力を流し込み凝縮する事で、莫大な破壊エネルギーを生み出  
すと同時に対象物を瞬時に消滅させるのさ。『倒王戦争』の頃には、  
敵軍を罠に嵌める際に用いられた事もある『魔術』だ」

どの辺りを簡単に言ってくれてるのかさっぱりだけど、とにかく  
この人は、それを使って首都を消滅させようとしてるって事？

「今あの街には、あなたの仲間だっているはずでしょ？ それなの  
に」

「仲間？ 笑わせるな」

あたしの言葉をすぐさま遮ったアーベントは、忌々しそうにフン  
と鼻を鳴らす。

「奴らはただの部下であって、仲間などというものではない。目的  
を遂行する為だけに集めた人間だ。言っただろう？ その辺に  
いる人間の命など、俺には全く興味が無いと。誰が死のうと生きよ  
うと知った事ではないと」

そう言っただけで冷笑するアーベントの表情を見た瞬間、この人には人  
間らしさというものが酷く欠落しているように思えた。

相手に対して何も感情を抱かない。大勢の人が死ぬかも知れない  
今の状況になっても、顔色一つ変えない。

本当に、悪魔みたい……。

「大体、貴様は人の心配が出来る立場では無いだろう？ 貴様には  
これから、俺が強くなる為の生贄になってもらわなければならん  
だからな」

「……！」

アーベントの言葉が意味する所を察して、あたしは身体を強張ら  
せた。一刻も早くこの人の傍から離れたい。離れなきゃいけない！  
ただどあたしの身体は拘束されていて、その自由を奪われている。  
成す術の無いあたしのすぐ傍まで、アーベントはゆっくりと歩み  
寄ってくる。

「貴様の身体に流れる『妖魔』の血。それを貴様の身体から一滴残

らず絞り出し、俺の『魔術』の増幅剤として使わせてもらう。クク……、人間一人分の血液の総量を知っているか？」

アーベントはニヤリと笑って、黒いマントの内側からナイフを取り出し、その刃を唾液に塗れた舌でペロリと舐める。たったそれだけの事で、言い表せない嫌悪感と恐怖があたしの身体中を駆け巡った。

「安心しろ。貴様一人が死んだ所で、悲しむ者などどこにもいない。所詮貴様は人ならざるもの。『化物』も同然なんだからなあ！　クハハハハハハ！」

「……ッ！」

悔しくて、悲しかった。

こんな最低な人に『化物』呼ばわりされて、何も出来ない自分が。何も言い返せない自分が。

それはきつと、心のどこかで自分でも認めてしまっていたからだ。あたしは人とは違う。『妖魔』という魔の力を持った一族の生き残りで、人間だけど人間じゃない。

だから今までにも、あたしの正体を知って離れていった人はたくさんいた。

本当に悔しくて、本当に悲しかった。

いつの間にか瞳に溜まっていた涙が、ゆっくりと頬を伝っていくのがわかる。

きつとこの人の言う通り、あたしは誰にも悲しまれる事無く、惨めに死んでいく運命なんだ。

「そいつは『化物』なんかじゃねえよ」

突然聴こえたその声に、あたしは驚きの余り眼を見開いた。聴き間違いかと思っただけ、そうじゃない。

その声は、あたしが忘れかけていた懐かしい声だった。

ほんの一日ぐらいいしか経っていないはずなのに、本当に懐かしく

感じる、温かい声。

あたしはゆつくりと、声のした方に視線を向ける。

そこには、炎のように紅い髪を生やした、あたしと同年ぐらいの男の子が立っていた。

私がよく知っている、少し無愛想な、紅い髪の少年が。

「そいつは『化物』なんかじゃねえ。『リネ・レディア』って言う、立派な名前があんだよ」

紅い髪の少年は、ディーンは、そう言うって快活に笑ってみせる。

その表情は、まるで太陽のような温かさを感じられるものだった。

俺が笑ってみせると、リネは涙で顔をクシャクシャにしながら、ゆつくりと口を開いた。

「ディーン……。もうっ、来るのが遅いよ」

「何だあ？　まるで待ってたみたいない草じゃねえか。自分からいなくなったくせに、随分勝手な奴だな」

「だって……。だつてえ……。ッ！」

リネはまるで子供みたいに、大粒の涙をポロポロ零しながら話す。知り合ってまだそんなに経ってないけど、こういう一面もあるんだなと、俺は内心で驚いていた。

「あゝもう、わかったから泣くなって。心配しなくてもすぐに助けてやるから、そこでジツとしてる」

俺がわざと面倒臭そうに言うと、リネは黙ったままコクンと頷いた。あいつには色々と言いたい事や聞きたい事があるけど、今はとりあえず後回しだ。

俺は気を引き締め直すと、拘束されているリネの傍らにいる男をキツと睨み付けた。

するとアーベントは、それに答えるかのようにリネの傍から離れ、数歩俺の方へと歩み寄ってくる。

「よう、元貴族さん。こんな所で何やってんだ？」

「フン。皮肉のつもりか未熟者。よく俺がここにいるとわかったな」  
少々不愉快そうなアーベントは、射抜くような鋭い眼付きのまま佇んでいる。

そう、俺がこいつの居所に予想を付けられたのは、二つの理由があるからだ。

その二つとは、『検疫所から逃げ出した兵士』と、『術式魔法陣』だ。

俺たちが今いるこの場所は、街の北側にある第二検疫所を抜けて北に二キロメートル程進んだ地点。ここには、北へ向かう鉄道の警備を行う為の正規軍の詰所がある。が、今は兵士らしき者の人影は見当たらない。

そんな場所に、こうしてアーベントがいる理由。検疫所の兵士がグルだった事を踏まえると、アーベントはこの戦いが始まる直前、第二検問所を潜って北に逃げていたんだろう。『術式魔法陣』の発動を目論んでいる点から見ても、こいつが街の中に残っていないのは当然の事だ。

そして街の北側から、首都の様子を確かめられる場所となれば、自ずと範囲は絞り込まれてくる。

だから俺は、ハルクからこの詰所の存在を聞き、無駄足になるかも知れないとわかっていて、ここを訪れた訳だ。

結果として、それは功を奏したらしい。

実際に今眼の前にアーベント、そして拘束されたりネがいるのだから。

「あんた意外と単純そうだからな。必ずどっかで、今の首都の状況を嘲笑いながら見てると思ったよ」

「ほう……。どうやら未熟者とは言っても、それなりの観察眼はあるようだな」

大して感心している訳でもない事は、ニヤついたあいつの表情を見ればわかる。ホントにムカつく野郎だな。

と、何がそんなに可笑しいのか知らないが、アーベントは突然、身体を大きく揺らして高らかに笑い始める。

「クハハハハハ！ 結局貴様とは、俺自らが戦う必要があるという事か。面倒な話だが相手をしてやろう、イアルフスの弟子！」

そう言っただけでアーベントは、右手に持っていたナイフを捨て、黒いマントの内側からロングソードを引き抜いた。そして不敵な笑みを浮かべたまま、俺に語り掛けてくる。

「貴様がここにいるという事は、『術式魔法陣』の存在が見破られたという事なんだろう？」

「ああ。今頃あの光の下には、ギルドメンバーや正規軍の腕利きたちが集結してるはずだ。直に『魔術師』たちも討伐される。あんたの目論見は失敗に終わるんだよ」

俺は対峙するアーベントの顔を見据えつつ、最後通告のつもりで言い放つ。

「大人しく投降しろ。あんたにはもう、勝ち目は無い」

そうだ、これで漸く終わるんだ。

首都に齎された破壊の渦が。

このバカらしい戦乱の全てが。

内心で安堵し掛けていた俺は、しかし一向に不敵な笑みを崩さないアーベントを見て、妙な不安に駆られた。

この状況に於いて、奴には追い詰められている様子が全く無い。

それどころか、再び身体を揺らし、心底愉快そうに高笑いを始める。

「クハハハハハ！ 失敗に終わるだど？ 勝ち目が無いだど！？」

全く……。何を根拠にそんな戯言を言っている？

「！？ どういう意味だ？」

「こつという意味さー！」

アーベントが不敵に呟いた瞬間だった。乾いた大地に罅が入る程、地面が激しく揺さ振られ、俺とアーベントの間に割って入るかのように、地中から何かが這い擦り出て来る。

バランスを崩しそうになりながら、後退する俺の眼に映ったのは、瓦礫と砂塵に塗れながらゆっくりと起き上る、ますはな枳花色をした人型の巨体だった。

『魔術兵器』、『ゴーレム』。 。  
ついさっき、街中で遭遇した『魔術師』が操っていた物とは違い、全身を鋼鉄で固めているその姿は、まるで鎧を纏った騎士のようだ。岩の塊のように巨大な顔の部分には、淡く明滅する双眸のような物がある。

「貴様は本当に、あの光の下にいるのが『魔術師』だけだと思ったのか？」

「！」  
呆然と『ゴーレム』を見上げていた俺の耳に、嘲笑うかのようなアーベントの声が響く。

「あの光の下には術式を安定させる『魔術師』と共に、その護衛を務める『ゴーレム』が三体ずつ配置されている。討伐に向かったという貴様の仲間たちは、果たしてそれらを退ける力を持った人間なのか？」

「くっ……！」  
どこまで用意周到なんだこの男。俺も予想しなかった訳じゃないが、まさか各場所に三体も『ゴーレム』を配置してるなんて……！  
これじゃあいくらジンがいるって言っても、術式発動までの僅かな時間で、『ゴーレム』と『魔術師』を倒すのは無理がある。

最悪の展開だ……！

「文字通り、万事休すと言った所だな。      だがそんな貴様に一つ、  
逆転のチャンスをくれてやるう」

「！？」

状況が指し示す最悪の事態に俺が顔を顰めていると、アーベント

が涼しげに提案してきた。

何をするつもりなのかと身構える俺に、アーベントは悠然と言いつつ放つ。

「今、首都を囲んでいる『術式魔法陣』が有している属性は……、

『炎』！」

「！」

「俺が言おうとしている事がわかるだろう？」

アーベントは挑発するようなニヤリとした笑みを、硬直する俺に向けてくる。

「そう、貴様が『フレイム・リーディング紅の詩篇』を発動出来さえすれば、首都を守る事が出来るかも知れん、と言う事だ」

愕然とする俺の背後、遙か彼方にある首都を囲む四つの紅い光が、その輝く強さを徐々に増していく。

突き付けられた事実<sup>に</sup>歯噛みする俺を、愉快げに見据えるアーベント。

奴の耳障りな高笑いが、辺りに響き渡った。



## 第八章 護る者と壊す者（前書き）

もう少しとか前話の前書きで言っておきながら、テルノアリス編あともう少し続きそうです（苦笑）  
飽きずに読んで頂けたら幸いです。

## 第八章 護る者と壊す者

あの紅い光、『術式魔法陣』の光を見た時から、俺には確信に近い予感みたいなものがあつた。

『術式魔法陣』の属性は『炎』。

今まさに首都を消滅させようとしている力の正体は、俺が操る『魔術』と同じ、『炎』。

それはつまり、俺が『フレイム・リーダー紅の詩篇』を使いこなす事さえ出来れば、首都を消滅の危機から救い出せる事を意味している。

だけど今の俺にはその力が無い。  
首都を守れるだけの力が、無い。

アーベントの耳障りな高笑いが響く中、俺は『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』を構え、暴れ回る『ゴーレム』と対峙していた。

巨大な鋼鉄の腕を振り回し、その巨大な拳を振り下ろす『ゴーレム』の右脇腹の辺りに、俺は炎剣の一撃を浴びせる。

その瞬間、爆炎によって『ゴーレム』の強固な装甲が弾け飛ぶ。

俺は続け様にと身を翻し、虚空に十字の炎を出現させる。

『バーニング・クロス烈火の十字爆撃』

殴り付けた十字の炎が『ゴーレム』に向かって飛来し、その巨大な背中の上で紅い爆発を起こした。

前のめりに揺らぐ『ゴーレム』の巨体から眼を離し、俺は首都の方角を一瞥する。

首都を囲むように配置された四つの紅い光は、さっき見た時よりも確実にその光の強さを増している。わかり切っている事だが、恐らく発動までもう時間がない……！

今更のように俺は焦りを覚え、右手に持ったままだった『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』を消滅させた。

そして再び発生させた炎を、自分の頭上に塊として集束させる。

『クリムゾン・レイン  
深紅の流星』発動の予備動作だ。

炎を凝縮させ、力が充分に蓄えられた所で、俺は目標物に右手を差し向ける。

「行け！」

その動作で炎の塊は弾け飛び、無数の火球となつて『ゴーレム』の身体に飛来した。

身体のうちちに飛来した火球は、次々と連鎖的に爆発を起こし、その装甲を砂糖菓子のようにボロボロと削り取っていく。

するとその時。俺と『ゴーレム』の戦いを笑いながら見ていたアーベントが、感心したような声を漏らした。

「なるほど。『フレイム・リーディング紅の詩篇』を使えない未熟者とはいえ、やはり『深紅魔法』の使い手。曲がりなりにも『ゴーレム』を倒せるだけの力は持っているという事か」

俺はアーベントの言葉を無視するように、再び虚空に十字の炎を出現させる。そして、ほとんど骨組みだけとなった『ゴーレム』の身体を中心に向けて、『バーニング・クロス烈火の十字爆撃』を放った。

紅い光を放つ爆発はいとも簡単にその骨組みを破壊し、辺りに鉄の破片を撒き散らす。辛うじて屹立していた残りの骨組みも完全に機能を停止し、鋼鉄の巨人は辺りに轟音を響かせながら地面に伏した。

俺はそれを見ながら、乱れた息を整える。ここまでの戦闘で、俺自身かなり体力を消耗している。限界が近いというのが正直な所だ。するとそんな俺の様子を見て、アーベントは愉快そうに言う。

「どうした？ 息が上がっているぞ。そんな状態で『フレイム・リーディング紅の詩篇』を使う事が出来るのか？」

嫌味にしか聞こえない事を平然と口にしゃがって……。てめえにだけは言われたくない台詞だ。

口には出さず悪態をつき、俺は正面からアーベントを睨み付ける。「前にあんた言ってたよな。何かを変える事が目的じゃない。戦う

事に意味がある、って。それはつまり、あんたにも守ろうとしてるものがあるって事だよな？」

「守る……？　クク、相変わらずだなあ未熟者。そうやって愚かな発言を繰り返す辺り、成長の兆しが全く見られないようだ」

俺の言葉を嘲るように切り捨て、アーベントは続ける。

「俺は『守る』為に戦っているんじゃない。『壊す』為に戦っているんだ。　言っただろ？　『倒王戦争』の生き残りである俺は、

所詮戦う事でしか自身の『存在意義』を見出せない。人を殺す事しか出来ない、歪み切った存在である『魔術師』と同じようにな」

クク、と笑って俺を見つめるアーベントに、俺は心底嫌気が差した。ここまで考え方が違う人間に会うのは、多分初めての事だと思う。

「あんたみたいな人間と一緒にすんじゃねえよ。『魔術師』はそんな存在なんかじゃねえ」

「ならば聞くが、貴様はなぜ『魔術師』になった？　人を殺したかったからではないのか？　何かを破壊したいと思ったからではないのか？　力を求めるが故に、『魔術』に縋ろうとしたのではないのか？」

何でそんな決めつけて話すんだよ？　あんたが一体、俺の何を知ってるって言うんだ。

俺は忌々しさを全開にした表情で、アーベントの言葉を突き放す。

「だから一緒にすんなって言うてんだろ。俺が『魔術師』になったのは、『魔術師』が誰かを守る存在なんだと証明する為だ。ミレーナとしたその約束を、俺自身が果たそうと思ったからだ」

「ククク……、クハハハハハ！　約束だと？　詭弁だなあ、イアルフスの弟子！　そんな戯言を吐ける『魔術師』が存在するとは信じられん！　何とも滑稽な話だ！」

……そういえば、さっき街中で戦った『魔術師』も、俺の事を滑稽だと言ってバカにしていた。

どうしてこいつらは、『魔術師』と言う者の存在を、枠に嵌めて

決めつけたように話すんだろう？　なぜ否定的で、猜疑的な言葉しか並べられないんだろう？

そんな疑問を、俺は頭から拭い去る事が出来ない。

だから俺は言葉を止めない。思った事をそのまま口にする。

「ギヤーギヤーうるせえんだよ。俺はあんたとは違う。俺には守りたいものがあるから。守ろうと思えるものがあるから、だから戦えるんだ」

「フン……。本当に愚かだなあ、貴様は」

やれやれと言いたげな様子で、アーベントは肩を竦める。そして右手に持つロングソードの切っ先を、背後にいる十字架に拘束されたりネに突き付けた。

殺傷出来る鋭い凶器を向けられたせいだろう。身動きの取れないリネの表情が、一瞬で強張った。

「そんなものの為に命を賭けると言うのか？　こんな『化物』一人を助ける為に、わざわざ貴様は俺の前に現れたと抜かすつもりか！　笑わせるな！　所詮貴様は――  
限界だった。

『その言葉』を口にするアーベントの台詞を聞き続けるのは、もう我慢の限界だった。

気付けば俺は、右手に炎を生み出すと、それを何の躊躇も無く、アーベントに向けて投げ付けていた。

奴の言葉を遮るつもりで放った炎の塊は、奴の顔面ギリギリの真横を掠めて、背後の乾いた地面に飛来し、爆発を起こす。どうやら寸前の所で、アーベントは回避を選んだらしい。

「いちいちうるせえんだよてめえは……。何遍も同じ事言わせんな」  
不意打ちを仕掛けた俺に対し、アーベントはかなり不満そうな表情を見せているが、気にするつもりは無い。

俺は怒りで顰めた顔を奴に向けて、怒号を浴びせるように叫んだ。  
「言っただろ。そいつは『化物』じゃねえ……。『リネ・レディ  
ア』だ！」

辺りに響き渡る程の大声で叫んだ、その時だった。

遙か後方にある、『テルノアリス』の街並みを囲む四つの紅い光が、これまで以上に輝きを増し、正方形の街並みを囲む巨大な紅い円と、『魔術』的な意味合いを持つ不可思議な形の文字列が、地面に出現した。

それらが意味するものは、つまり。

『術式魔法陣』の発動。

その光景を目の当たりにして、アーベントは強烈な笑みをその顔に湛えて高らかに笑う。

「クハハハハハハ！ どうやら時間切れのようだなあ、未熟者！

くだらない問答をしているからこうなるんだ！ 貴様に首都は救えない！ 所詮『魔術師』は、誰かを守る事など出来はしないのさ！」

紅い光に包まれていく首都の街並みを背に、それでも俺は前を見続けた。眼の前に立つ、アーベントを睨み続けた。

今の俺には力が無い。

首都を守るだけの力が、無い。

だけど俺は誓ったんだ。

もう二度と、迷う事も、立ち止まる事もしない、と。

アーベントを睨み続けていた俺はその表情を一旦崩し、奴の傍らにいるリネに眼を向けた。

そして俺は、リネにフツと優しく笑い掛ける。すると彼女は、酷く驚いた表情をした。こんな状況でなぜ笑えるのかと言いたそうな表情だった。

そのリネから視線を外し、俺は再びアーベントを見据えた。そして俺は、ゆっくりと奴に言い放つ。

「よく見てろ、アーベント。これがあんたに見せる、最後の『魔術』

だ！」

俺は両手を胸の前に翳し、静かに『あの魔法名』を口にする。

「『フレイム・リーディング紅の詩篇』」

それが俺の発動した、最後の『魔術』だった。

「意気込みは認めるけど、あんたが進もうとしてる道は険しいものだよ？」

それは俺の師匠となってくれたミレーナが、『魔術』の訓練をしている時に不意に口にした言葉だった。

突然過ぎて何の事だか分らなかった俺に、ミレーナは呆れたような表情で諭す。

「あんたが自分で言ったんでしょ？ 『魔術師』が誰かを守れる存在だって証明するって。全く……、こんな調子で大丈夫なのかねえ、うちのバカ弟子は」

深々と溜め息をつくミレーナを見て、俺は慌てて姿勢を正した。

この状態のまま放つとくと、ミレーナは「教えるの止めた」とか言い出すから始末が悪い。まあ、冗談だってわかってるからいいんだけど。

「いいかい？ この世の中に定着してる『魔術師』って言う存在は、平気で人を殺せる人間だと思われてる事が常なんだ。私の事を『英雄』と呼ぶ人間もいれば、『ただの人殺し』だと切り捨てる人間もいる。……まあ私自身、そっちの方が正しいと思ってるけどね」

ミレーナは少し悲しそうに笑い、自虐的な事を言う。

俺はそんなミレーナを見るのが辛かった。彼女は本当に、『魔術

師』である自分自身を嫌っていた。出来る事なら『魔術』自体を捨ててしまいたいとも思っていたようだ。

だけど彼女は捨てなかった。

自身の存在を否定する程嫌っていた『魔術』を、決して捨てようとはしなかった。

否定する程嫌いなら、なぜその力を捨ててしまわないのか？

ある時俺がそう尋ねると、ミレーナは俺の頭を軽く小突いて、真剣な表情でこう言った。

「バカな質問をするんじゃないよ。私はね、『魔術師』で居続けなければならぬという業を背負ってるんだ。私は『魔術』を使つて人を殺した。たくさんの人を命をこの手で奪つたんだ。私がこの罪から逃れる事は、多分永遠に出来ないだろう。そんな私が、自分の意志で『魔術』を捨てたら、『魔術師』である事を止めたら。それはただ、自分が背負つたものを捨てるに等しい、愚かな行為なんだよ」

真剣な表情で語っていたミレーナは、俺の頭を優しく撫でると、少し切なさの混じつた笑みを浮かべて続けた。

「だからデーン。誰かを守る存在になりたいと言うなら、あんたもその業を捨てちゃいけないよ。世の中に定着した、『魔術師』は『人殺し』という概念を塗り変えたいなら、死ぬまで『魔術師』であり続ける事だ。あり続けて、誰かを守り続ける。そうすればきっと、それがあんたの『存在意義』になる」

そう言つて最後は、俺の髪をグシャグシャして笑つてくれた。

あの頃の俺にとっては、ミレーナの笑顔こそが、守りたいと思うものの象徴だった。



自分自身の力が未熟なのは、俺が一番よくわかってる。

ミレーナが容易く扱っていた『フレイム・リーディング紅の詩篇』と言う『魔法』が、いかに高度で難しいものかというのも充分知ってる。

精神論でどうにかなる問題じゃないって事も、理解出来ている。

だけど俺はそんなに諦めが良くない。

例えバカだと、未熟者だと、愚かだと言われようと、俺は立ち止まる訳にはいかないんだ！

誰かを護る『魔術師』であり続ける事。それがミレーナとの約束だから！

両手を胸の前に翳し、俺は力を集め続ける。それ以外、俺に出来る事は無かった。

そんな俺を嘲笑うかのように、アーベントは高らかに叫ぶ。

「貴様如きが何をしようと無駄だ！ 所詮貴様は未熟者！ ミレー

ナ・イアルフスのようには」

と、そこまで言い掛けて、アーベントは突然言葉を止め、硬直したようにある一点に視線を向けた。するとその顔が、まるで信じられない物でも見ているかのように、徐々に強張っていく。

「バ……、バカな……ッ！」

俺はアーベントの言葉の意味する所が、何なのかわからなかった。

だが次の瞬間。俺は背後に、強大な力の気配を感じ取った。

肩越しに振り向くと、そこには俺自身も眼を疑うような光景が、

確かに存在していた。

遙か後方で『術式魔法陣』の炎に吞まれていく、『テルノアリス』の街並み。

だがどういう訳か、いつまで経っても、首都はその姿を消そうとはしない。それどころか、陣を形成していた四つの炎の柱が、何か

に引き寄せられるかのように、次々と俺の遙か頭上目掛けて集まってくる。

炎はやがて奔流となり、波濤となって、舞い踊るかのように一点に集束し、巨大な炎の塊を形成していく。

まさか、と俺は思った。

自分自身で行なった事なのに、すぐには信じられなかった。成功するはずがないと、心のどこかで思っていたからだ。

炎の奔流が、波濤が、巨大な塊が意味するもの。その答えを、俺はいつの間にか呟いていた。

「『フレイム・リーディング紅の詩篇』が、成功した……？」

なぜだ？ その疑問が俺の頭の中を駆け巡っている。テルノアリス城の『修練場』で訓練していた時は、全くと言っていい程成功の兆しは見えなかったのに……。

俺自身も驚いているが、眼の前の男、アーベントはさらに驚愕していた。

呆然と言った様子で佇み、やがて荒々しく叫ぶ。

「バカな！ 一番遠い炎の発生源は、二キロも離れているんだぞ！？」

確かに奴の言う通り、『テルノアリス』の外壁は、東西南北に二キロは続いている。その外側に配置されている『術式魔法陣』の点となる光の柱の部分は、この位置からだと言ったと遠い所は二キロを超えている事になる。

「フレイム・リーディング紅の詩篇』が強力な術だと言っても、それだけ離れた所にある炎を従属するのは無理があるはずだ。

だが現に今、俺はそれを実行している。

不可能なはずの従属を。

発動出来なかったはずの術を。

「！ 炎が……！」

頭上を見上げていた俺は、集束の終わりを見逃さなかった。

遙か頭上には、直径五百メートルはあるつかという炎の塊があり、

肩越しに振り返ると、『テルノアリス』の街並みは全く被害を受けていなかった。

見間違いなんかじゃない。『術式魔法陣』は、失敗に終わったんだ！

「ふ……ざ、けるな……ッ！」

ふと前方に視線を戻すと、アーベントは酷く顔を顰めていた。ここに来て漸く、奴の顔にも焦りの色が見え始めているらしい。

俺はここぞとばかりに、強烈な笑みを作ってアーベントに告げる。

「あなたに選ばせてやるよ。大人しく投降するか、未熟者が扱おうフレイム・リーディング。紅の詩篇』の炎に焼かれて戦闘不能になるか。愚か者じゃないあんななら、どっちが正解かはわかるはずだよな？」

「貴様アアアッ！！」

その歯が砕けそうな程歯噛みして、アーベントは忌々しそうに言う。

すると突然、奴はロングソードを手に、拘束されたりネの傍に足早に歩み寄った。

「！ 何をやる気だ？」

訝しく思い問い掛ける俺に、アーベントは引き攣った表情で告げる。

「貴様は知っているか未熟者！ この『化物』の女の内に流れる血。『妖魔』の血液には、『魔術』の力を飛躍的に高める効力がある事を！ 『史実』によれば『魔術戦争』時代から行なわれていた、『妖魔』の生き血を啜る行為！ それを今、貴様に見せてやる！」

「！ 止め」

制止しようとする俺の声は届かず、また遅かった。

アーベントが振るったロングソードの鋭利な刃が、リネの右の二の腕辺りを深く斬り付けてしまう。

「ああああッ！」

斬り付けられたリネは苦痛にその表情を歪め、痛々しい叫びを上げた。

それを意に介した様子も無く、アーベントは剣に付いた血、そしてリネの腕から流れる血を、まるで水でも飲んでるかのような軽々しさで、容易く啜り取った。

腕を舐められたリネは、痛みと嫌悪感からか、苦悶の表情をより一層深めている。

「クハハハハハ！ この女の血があれば、どれだけ貴様が足掻こうと俺を倒す事など出来ん！」

そう言って、唇の端から生々しい紅い液体を垂らしつつ、アーベントは再び高らかに笑う。

「ただ俺にはもう、そんな台詞を聴いている余裕は無かった。」

この野郎はあるう事か、抵抗出来ないリネの腕を斬り付けた上に、俺が呼ぶなと言った言葉で、またリネの事を呼び捨てにしやがった。

「そう、『化物』と！」

「アアアベントオオオツ！！」

俺は腹の底から怒号を上げ、遙か上空に静止していた直径五百メートルの炎の塊に向けて、勢い良く右掌を突き出した。

するとその瞬間。その動作に合わせるかのように、巨大な炎の塊は炎の帯となつて、俺の右手目掛けて飛来してくる。

まるで蛇のように蠢く炎は、俺の右掌に集束すると同時に、新たな炎として形を成していく。

「な……ッ!?!」

驚愕しているアーベントを尻目に、俺は右手に形成された新たな炎を、強く握り締めた。

それは俺の身の丈の二倍はあるうかという、巨大な片刃の炎の剣。

柄も、鍔も、刀身も、全てが紅い炎で出来た大剣。

『フレイム・リーディング 紅の詩篇』フレイム・ロンゲン によって造り出されたこいつは、言わば『フレイム・ロンゲン 紅蓮の爆炎

剣』の強化版だ。

火の粉を撒き散らしながら剣を振るい、俺はその切っ先をアーベントに差し向ける。

『フレイム・アスカロン 大紅蓮の炎帝剣』

威圧するように巨大な炎剣の名を告げ、俺はキツとアーベントを睨み付けた。

「リネから離れる。さもないと俺は、あんたを殺してしまいそうだ」  
ギリツと、炎剣の柄を力強く握り締めながら、気付けば俺はそんな言葉を口にしていた。

するとアーベントは、まるで俺を揶揄するかのようニヤリとした表情で言う。

「おや？ いいのか？ 俺を殺すという事は、ミレーナ・イアルフスとの約束とやらを破る事になるんじゃないのか？」

「ああ、そうなるな。だから必死で自制してるんだ」

炎剣を握る俺の右手は、怒りを必死に抑えている事で微かに震えている。

アーベントなんかに言われるまでもない。『魔術』で誰かを殺めれば、その瞬間俺は、ミレーナとの約束を破った事になる。そんな事になるのだけは御免だ。

例え眼の前に、殺意を抱いてしまう程の存在がいたとしても。

「ククク。甘いなあ、イアルフスの弟子。だから貴様は未熟者だと言うんだ！」

刹那。叫ぶアーベントが俺に向けて左腕を突き出した。

奴の左腕の鎧には、『魔術』の力を発生させる特殊な記号が刻み込まれている。それによって、奴は『魔術』の素質が無いにも拘らず、その力を操る事が出来る。

奴が操る力は、俺と同じ『炎』。

アーベントの左腕から発生した大量の火球は、上下左右に分かれて俺に降り注いでくる。

俺は回避するよりも、攻撃する方を選んだ。

『大紅蓮の炎帝剣』を両手で握り、そのまま上段に高々と掲げる。

「はあああああつ！」

激しい風切り音と共に、俺は炎剣を勢い良く振り下ろした。

その瞬間、『大紅蓮の炎帝剣』の刀身部分から炎の波濤が生まれ、

アーベントの放った火球と衝突し、空中で次々と連鎖爆発を起こす。爆煙が辺りに吹き荒ぶ中、俺はアーベントの動きを見逃さなかった。

奴はすでにリネの傍らから離れ、爆煙に紛れて俺に奇襲を掛けようとしている。

次の攻撃は、右から来るはずだ！

俺は瞬時に反応し、炎剣を横一文字に振り抜いた。

だが。

「!?!」

炎剣の衝撃波が爆煙を吹き飛ばし、視界が開けた先にアーベントの姿は無かった。

しまった、と思う暇も無く、俺は背中に悪寒が走るのを感じた。

「隙だらけだ未熟者！」

振り返ろうとした俺の背中に、アーベントの言葉と共に巨大な火球が飛来した。

俺はまともにその一撃を受け、前のめりに数メートルもの距離を吹き飛ばされてしまう。

「がっ！」

地面を擦って身体が止まった所で、俺は背中に痛みを感じた。さすがに自分の眼で確かめる事は出来ないが、恐らく軽い火傷を起こしているようだ。

炎の『魔術』を操る俺の身体は、同系統の攻撃に対して、ある程度の耐性を備えている。

だがそれはあくまで耐性であって、絶対的な防御となり得るものじゃない。今のように炎の威力が強ければ強い程、それに応じてダメージは増えていく訳だ。

「あの野郎……！ リネの血を吸った事で、『魔術』の威力が増してるって言うのか？」

アーベントの言う『史実』の事は、奴が口にした時になって漸く、ミレーナから聞いていた事を思い出した。

だけど実際の所、俺はその『史実』自体を半信半疑の眼で見ている。血を飲むだけで『魔術』の力が増すなんて、いくらなんでも都合が良過ぎる。疑って掛かった方が正しいように思っていた。

だが今のアーベントの一撃は、『テルノアリス』の路地裏で戦った時よりも、何倍も強くなっている感覚があつた。

これは『史実』を認めるしかないのかも知れない。と、そんな事を考えていた時だった。

「考え事とは余裕だな、イアルフスの弟子！」

「！」

思考に走っていた事で、完全に警戒を怠っていた。

気付くと俺の周囲に、一瞬で五つの巨大な火球が出現し、一斉に俺の身体に衝突してきた。

「ぐあああああつ！」

激しい炎に撒かれ、俺は思わずその場に片膝をついてしまう。

アーベントはさつきから、俺に向けて惜し気も無く炎を乱発してきている。

間違いない。やっぱりあいつは『フレイム・リーディング紅の詩篇』の弱点を知ってるんだ！

「炎を操る相手に対しては無敵」。

『フレイム・リーディング紅の詩篇』を知っている人間は大抵そう言うが、何も弱点が無い

という訳じゃない。強大な能力には、その強さに応じて制約や弱点が付くのが当たり前というものだ。況してそれが、人間が作り出した技術なら尚更。

『フレイム・リーディング紅の詩篇』の弱点。

それは、『一度従属する炎を指定すると、その炎を解くかエネルギーを消費し切るまで、別の炎を従属する事は出来ない』という点だ。

今も俺がアーベントの炎を従属出来ずにいるのは、『フレイム・リーディング紅の詩篇』で造り出した『フレイズ・アスカロン大紅蓮の炎帝剣』を使用し続けているからだ。

アーベントの炎を従属しようとするなら、『フレイズ・アスカロン大紅蓮の炎帝剣』を

消滅させる他に道は無い。

「ただ俺の頭には、その選択肢は最初から無かった。」

『フレイム・リーディング紅の詩篇』が成功したあの瞬間から、俺はこの力でアーベントを倒すと決めたからだ。

「バカと言われようと、愚かだと言われようと、この思いだけは譲れない。」

俺はこの力で首都を、そして、リネを『護る』と決めただから！

俺は全身に力を込め、地面に付いていた膝を持ち上げて、もう一度立ち上がった。

するといつの間にか、俺の立っている位置から五メートル程の距離を開けた前方に、アーベントが屹立していた。

「どうやら奴は、次の一撃で俺を仕留めると決めたようだ。強烈な笑みをその顔に浮かべ、ロングソードを構えて突っ込んでくる。」

「何度も言うが貴様は未熟だ！ 未熟な理性で感情を押し殺し、未熟な力で炎を操る。それが愚行だとわからん貴様のような人間に、

『魔術師』でいる資格など無い！」

俺の許に突貫しながら、アーベントは左腕の鎧から発生させた炎を、俺と同じように掌に集束させ、炎のロングソードを左手に造り出した。

その炎の激しさは、以前戦った時の物とは比べ物にならない程強い。間違いなく、先程口にしたリネの『妖魔』の血が、奴の『魔術』の力を底上げしている。

だが俺は動じない。アーベントを強く睨み付けたまま、巨大な炎剣を水平に構え、振り抜く体勢に持っていく。

「何度も言っただろ。あんたに言われる筋合いはねえってな」

すでに奴との距離は、三メートルにまで縮まっていた。

俺は自分から動く事はせず、突貫してくるアーベントを引き付ける方を選んだ。



勝負は一瞬。お互いの身体が交差する瞬間。

「死ねえ！ イアルフスの弟子イイツ！！」

上段に構えたロングソードと、中段に構えた炎剣を振るいながら、アーベントは叫ぶ。

俺はそこまで奴を引き付けた所で、漸く身体を前進させる。

一秒にも満たない刹那。俺とアーベントの身体は、すでに交差していた。

左肩の辺りに鋭い痛みを感じる。確認するまでもなく、俺の左肩は斬られていて、血が流れているんだろう。

そんな事を、俺が察した瞬間だった。

「ぐわあああああああつ！！」

巨大な炎剣を水平に振り抜いた俺の背後で、全身に激しい炎を纏ったかのように燃える、アーベントの姿があった。

炎に包まれたままアーベントは力無く膝を折り、荒野にその身体を沈める。

俺は『フレイズ・アスカロン大紅蓮の炎帝剣』の威力を抑えなかった。手にしていた炎の威力をそのままに、アーベントの身体を斬り払った。

地面に倒れ、未だに身体を燃やされ続けている男に向かって、俺は静かに言い放つ。

「あなたには一生わからねえよ。俺が『魔術師』で居続ける意味も、『魔術師』で居続けるっていう業を背負った、ミレーナの覚悟もな」

「リネ。大丈夫か？」

その後すぐ、拘束されているリネの枷を外し、二の腕の傷の応急

処置をした俺は、具合の悪そうな彼女に向けて言った。大丈夫じゃない事は百も承知だが、こういう時他にどう言えばいいのか俺にはわからない。

するとリネは、額に汗を浮かべながらも、弱々しく微笑んだ。

「うん……、傷が少し痛いけど大丈夫。デインこそ……、身体中怪我してるんじゃないの？」

リネは俺の身体に視線を向け、心配そうな声を出した。

全く、お前は俺の怪我の心配出来る立場じゃないだろ？

俺は少々呆れながら、持っていた布切れでリネの額の汗を拭ってやる。

「お前に心配されるような怪我じゃねえよ。少し休んだら、一緒に首都に戻るぞ」

俺が面倒臭そうに言うと、リネはまた弱々しく微笑んで、黙ったままコクンと頷いた。

と、リネは急に俺とは違う方向に視線を巡らせ、そしてゆっくりと呟く。

「……死んでるの？」

リネが見つめているのは、荒野に伏したまま動かないアーベントだった。

俺はリネと同じように視線を奴に向け、複雑な思いのまま口を開いた。

「死んじやいないさ。あいつが着てるあの紫の鎧は、多分『導力石』で出来た特注品だ。『魔術』に対する耐性を持つてるから、俺の攻撃にもある程度耐えられたはずだ。……まあ、全く無事って訳にはいかないだろうけどな」

そう、俺はアーベントが守りを固めている事を見越して、敢えて全力で『大紅蓮の炎帝剣』フレイズ・アスカロンを撃った。怒りに後押しされていたというのも多少はあったが、それでもあれぐらいの威力でないと、アーベントを戦闘不能に追い込むのは難しかっただろう。

とにかく俺は奴を殺さなかった。道筋はどうあれ、それは事実だ。

俺は僅かに視線を落とし、妙な疲労感から浅く溜め息をつく。

と、その時だった。

「クハハハハハハ！　クツハツハツハツハツハツ！」

「！」

何の前触れも無く響き渡った、盛大な笑い声。その主は信じられない事に、地面に伏しているアーベントだった。

正直、奴のしぶとさには舌を巻かずにはいられない。あれだけの攻撃を受けた後で、一体どこにそんな高笑いをする体力が残っていたんだろう。これも『導力石』を用いたあの鎧のおかげって事なのか？

俺は気を引き締め直して、奴の動きを注視する。何か反撃があったとしても、すぐに対応出来るようにする為だ。

「何がそんなに可笑しいんだ、アーベント」

俺が静かに声を掛けると、アーベントは地面に倒れたまま、首だけを動かして俺の方を見た。

だがやはり、身体のダメージが大きいらう。多少動きがぎこちないように見える。

「クク……。いや、何。結局俺はまた、イアルフスに邪魔をされたのかと思うと、腹立たしくて逆に笑えてくるのさ。あの女め……。全く忌々しい事この上無い」

口では恨み節のように語っているアーベントだが、その表情はどこか清々しい気がする。それに俺には、今の言葉のある部分が引っかけかっていた。

「『また』？　あんた一体、ミレーナとどういう関係なんだ？　あの『倒王戦争』で、ミレーナとの間に何があつたんだよ？」

ずっと疑問に思っていた。こいつは以前、『倒王戦争』中に戦場でミレーナと顔を合わす事があつたと言っていたが、それにしても『深紅魔法』にやたら詳しいし、ミレーナの事を深く知っているような印象を受ける。

不思議に思っつて尋ねる俺に、アーベントはニヤリと笑って言う。

「あの女とは『倒王戦争』が始まる以前から、『テルノアリス城』で何度も顔を合わせる事があったんだよ。貴様も知っている通り、俺は元貴族だ。当然城に住んでいる身。その頃に奴は、後にクーデターを起こす王族の連中に会いに来ていたのさ」

……なるほど。そこでミレーナは王族たちと、前テルノアリス王を倒す算段を話し合ってたって事か。

俺が一人納得している間にも、アーベントは続ける。

「その頃からあの女は腕利きの『魔術師』として知られていたからな。俺は興味本位で、奴に決闘を申し込んだ事がある」

「！ あんたが、ミレーナに？」

何だか意外な事実だ。ミレーナと暮らしていた頃、俺は極力『倒王戦争』の事を口にしないようにしていたから、当然ミレーナからそんな話を聞く事も無かった。

十数年一緒に暮らしていたとはいえ、まだまだ俺には彼女の知らない部分がたくさんあるみたいだ。

「結果は、どうだったんだ？」

俺が少し躊躇いがちに尋ねると、アーベントはフンと鼻を鳴らして顔を逸らした。

「完敗だったよ。奴に傷一つ付ける事は出来なかったし、手加減されていたという事もわかった。その経緯があったからこそ俺は力を磨き上げ、そして戦争中、戦場で何度も奴と戦った。借りを返す為に戦い続けた。だが」

アーベントはそこで、憤慨するかのように顔を顰めて言葉を切った。

俺には、奴の言わんとした事が何なのか、大体の察しがつく。

そう、決着を付ける前に、『倒王戦争』は終決してしまっただ。前テルノアリス王軍の、敗北という形で。

つまりこいつは、ミレーナとの決着がつけられなかった事に不満を持っていたという事だ。

そしてそれが意味するもの。

俺はこの戦いに関わる発端となったあの噂が、ここに繋がっているような気がした。ある程度の確信を持って、俺はアーベントに尋ねる。

「なあ。もしかして、ミレーナがテロリストと密会していたって言う噂を流したのは……」

「ああ、察しの通りこの俺だ。そういう噂を流せば、それに釣られて奴が姿を見せると踏んでいたんだが……。どうやらその目論見の方は外れたらしい。俺の前に現れたのは、奴の弟子だと言う未熟者の方だったという訳だ。なあ？ イアルフスの弟子」

そう言つて、アーベントは俺に不敵な笑みを見せた。

首都を崩壊させ、今の王族たちから政権を奪い取る。それがアーベントの表の望みとするなら、裏の望みはミレーナとの決着をつける事だった、って訳か。

執着。きつとそれが、こいつの行動理念だったんだろう。本人が気付いているのかどうかは俺にはわからないが、こいつはきつと過去の栄光に、ミレーナと言う存在に、執着し、固執していたんだ。だからこいつは、首都襲撃という行動を起こした。その満たされない思いを消し去る為に、何人も人間を犠牲にして……。

「しかしまあ、貴様のような未熟者に負ける事になるとはな……。所詮俺も、ここまでの存在だったという事か」

自分を嘲笑するかのような言葉を吐いて、アーベントは徐に、左腕の鎧の隙間から何かを取り出した。

「？ 何を」

する気なんだと問おうとして、俺はアーベントが右手に握っている物の正体に気付きハッとする。

奴の右手に握られているのは一枚の白い札。縦に長い長方形のカードのような形の札には、『魔術』の記号が書かれている。

円を中心に波を打ったような線が四方に伸びる、独特な模様の記号。

それが意味するのは、『爆発』。

「あんた何考えてんだ！ 自爆するつもりかよ！？」

驚愕する俺の声を聞いても、アーベントは意に介さない。涼しげな顔で淡々と答える。

「その通り。 言っただろ？ 俺は『壊す』事しか出来ない人間だ。このまま軍に捕えられ、牢獄で何も出来ずに生涯を閉じるぐらいなら、自らの手で『破壊』を選ぶまでだ」

「ふざけんな！ そんなのただの自己満足だろ！ それは罪を償おうとしてるんじゃない！ 背負ったものを捨てようとしてるだけだ！」

ミレーナは言っていた。背負ったものを捨てるのは、愚かな行為だと。

それにあんたは、俺と違って未熟者でも愚か者でもないんだろ？ だったら自分のけじめぐらいちゃんをつけろよ！

「勘違いするな。俺は罪の意識など感じていない」

憤慨する俺の言葉を聞き流すかのように、アーベントは不敵に笑って告げる。

「俺が死を選ぶのは、『破壊』こそが俺の『存在意義』だからだ！ 叫ぶと同時に、アーベントは右手に持った札を思い切りグシャリと握り潰した。

その瞬間。アーベントの身体の周りに、爆発を生む為の破壊エネルギーが集束していく。

「よく見ておけ！ イアルフスの弟子！ これが『アーベント・デibelグ』と言う男だ！ クッハッハッハッハッハッハッ！」

「止めるー！ー！ー！ー！」

もう遅いとわかっていて、それでも俺は手を伸ばそうとした。だが当然、その手はあいつに届く事は無い。

膨らんだ破壊エネルギーが爆発となって弾け飛び、奴の身体を肉片に変える。

そこにはもう、アーベントの姿は無かった。



## 第九章 新たなる出発（前書き）

と言う訳で第九章です。

長くなりましたが、この次の終章でテルノアリス編完結となります。助長だとは思いますが、ここまで読んでくださった方はせっかくでするので、もう少しだけお付き合いください（笑）



## 第九章 新たなる出発

あたしが眼を覚ますと、そこは見覚えの無い部屋だった。

柔らかいベッドの上で横になっていたあたしは、ゆっくりと上半身を起こす。

周りを見回すと、石造りの四角い部屋の中には、四角い金属製のテーブルと一人用のソファアが四つ。壁際には豪華な装飾のされた金属製の棚が二つという、何だか貴族の人が使っているような部屋だった。

「ってあれ？ 貴族……？」

少しぼんやりする頭で、あたしは自分で思ったそのキーワードに引つ掛かる。そして何となく、事実っぽい結論に辿り着いた。

「もしかしてここ、『テルノアリス城』……なのかな？」

なぜ自分はこんな所にいるんだろう？ と考えた所で、漸くあたしの頭が眼を覚まし始めたらしい。今まで起こっていたあらゆる出来事が、記憶の奔流となつてあたしの頭の中を駆け巡った。

街の外でアーベントに囚われていたあたしの所に、颯爽と駆け付けてくれたデイン。

彼は力強い口調で、あたしに助けてやると言ってくれた。

あたしの事を『化物』と揶揄するアーベントに、怒りの言葉で否定して立ち向かってくれた。

最初に出会った頃のデインからは想像出来ない、優しくとてども頼りになる姿だった。

「……そういえばあたし、みっともないぐらいに泣いちゃったんだっけ」

今思い出してみても、恥ずかしくて身体中が熱くなってくる。でも、それだけデインが助けに来てくれた事が、あたしは物凄く嬉しかった。

ただどあたしの記憶は、最後の方が曖昧になっている。

アーベントに受けた傷の痛みで意識が朦朧としていたから、結局あたしはどういう風に助けられたのかハッキリと覚えていない。いつの間にか気を失ってみたいだし……。

あたしが気を失った後、一体何が起きたんだろう？ と、そんな風に考えている時だった。

部屋の扉が外側から数回ノックされる。そのすぐ後、扉が開いて見覚えのある男の子が入ってきた。銀髪碧眼の少年、ジン・ハートラーだ。

何だかデイン以上に、その顔を久しぶりに見る気がする。

と、彼は起きているあたしを見て、驚いたように眼を丸くした。

「リネ！ 眼が覚めたのか」

「うん、今さつきね。眼が覚めたらこんな豪華な部屋だったから、驚いちゃった」

そんな風にあたしが笑って言うと、ジンは安心したように優しく微笑んでくれた。

「何か久しぶりだね、こうしてジンと話すの」

「そうか？ たった一日ぐらいいしか顔を合わせていないはずなんだがな」

苦笑するジンの表情は、以前よりも少しだけ晴れやかな感じがした。その顔を見ながら、あたしは少し躊躇いがちに尋ねてみる。

「あのさ、ジン。デイン、どこにいるか知ってる……？」

「ん？ ああ、あいつなら」

と、どこか可笑しそうに話しながら、扉のノブを持ったまま部屋の入口に立っていたジンは、あたしの位置から死角になる方へ視線を向ける。

するとそれに答えるみたいに、

「さつきからここにいてっつーの」

と言っ面倒臭そうな声が響いてきた。

やれやれといった表情を見せるジンの後ろから、とても目立つ炎のような紅い髪の男の子が現れて、同じく面倒臭そうな顔で、あた

しに声を掛けてきた。

「ったく、いつまで寝てる気だったんだ？ 呑気でいいよなあ、お前は」

「……フフ。相変わらず酷い言い方だね、ディーン」  
意地悪っぽく言われてるのに、あたしは不思議と笑ってしまっていた。

そんなあたしの様子に、ディーンは酷くバツが悪そうな顔をして、わざとらしくそっぽを向いた。

「そっか。じゃあ、あのアーベントって人は……」

「ああ……。俺の目の前で自爆した。最後まで勝手な奴だったぜ……」

リネを見舞う為に訪れた『テルノアリス城』の一室で、俺は目覚めていたリネと、見舞いに同行していたジンを交えて状況の整理を行っていた。

尤も状況の整理と言っても、そのほとんどは、意識を失っていたリネに対して行なっているようなものだった。

と言うのも、俺はすでに、ジンから粗方の状況を伝え聞いていたからだ。

粗方の状況とはつまり、今回の件の顛末。

ジンの話だと、俺が『フレイムリーディング紅の詩篇』を成功させたあの瞬間から、『術式魔法陣』の安定を行っていた『魔術師』たちは戦意を喪失し、逃げる者と大人しく投降する者の二組に分かれたらしい。後は残っていた『ゴーレム』を何とか退け、ジンや他のギルドメンバー、そ

してハルクに選抜された正規軍兵士たちは、一旦街の中に戻ったそう  
うだ。

すると街の中でも、外の『魔術師』と似たような事が起きていた  
という。

つまりは、仮面の人物たちの戦意喪失。

俺の『紅の詩篇』<sup>フレイルム・リーディング</sup>が間に合った事で、『術式魔法陣』の犠牲には  
ならなかった仮面の人物たちは、ほとんどの者が戦う意志を無くし、  
投降する意志を示したそうだ。だが、それでも一部の者たちは抵抗  
を続け、戦いが沈静化するのはいづ時間が掛かったらしい。

まあ、戦う意志を無くすのも無理からぬ話だよな。自分たちの指  
導者だと思っていたアーベントが、実は最初から自分たちを囿に使  
つて、『術式魔法陣』を発動しようとしてたなんて。裏切られたと  
思うのも当然だ。

「そんで、気を失ってるお前を担いで首都に戻ってた所で、ジンと  
合流したって訳だ」

「そうだったんだ。ごめんね、迷惑掛けちゃって……」

少し落ち込んだ様子で、リネは伏し目がちにそう言った。

俺自身、別に迷惑を掛けられたなんて思っていない。むしろリネの  
存在があったからこそ、俺は戦う意志を固める事が出来た部分もあ  
る。そういう意味では、感謝の念を述べるべきなのは俺の方な気が  
する。

「……だけど、それを素直に認めるのが、何か悔しいんだよなあ。」

全く、我ながらこの捻くれた感じが恨めしい。アーベントと対峙  
してた時は、素直に思った事を口にしていた気がするんだけど……。  
今みたいにリネやジンがいる状況だと、どうしても素直に気持ち  
が言えない。俺ってこんな面倒臭い奴だったっけ？

「あたしが四歳くらいの時だったんだ」

「え？」

一人意味も無く悶々としていた俺は、突然リネが何の前触れも無  
く切り出したその言葉に、疑問の声を上げるしかなかった。傍らに

いるジンも、彼女の突然の発言に戸惑いを隠せないでいるようだ。  
「何の話をしているんだ？」

神妙な面持ちで尋ねるジンに、リネはいつか見せた切ない笑みを混せて答える。

「二人にまだ話してなかったでしょ？ あたしの過去。『妖魔』一族の事」

「！」

リネの口から出た『妖魔』という言葉に、俺とジンは僅かに顔を見合わせた。

今まで俺たちに語ろうとしなかった事を、彼女は今口にしようとしている。それは一体どういう心境の変化なんだろう？

「辛いなら話さなくていいんだぞ？」

話の流れを押し止めようとするかのように、ジンが素早く先手を打つ。

だがリネは、首を横に振ってそれを拒んだ。どうやら俺やジンが思っている以上に、彼女の決意は固いようだ。ゆっくりと、その口で言葉を紡いでいく。

「あたしの生まれ育った村はね、ここから西の方角にある、『ブラウズナー溪谷』って言う谷の、少し入り組んだ場所にあつたんだ」  
リネの言ったその谷の名なら、俺も以前聞いた事がある。確か溪谷に連なる山岳地帯が険し過ぎて、未だに未開拓の土地が残ってるって言われてる場所だつたはずだ。

そういえば彼女は、俺と初めて会った時、「どこから来たのか？」という質問に対して、「西の方から来た」と答えていた。

あの時は、漠然とした方角しか言わないリネに付き合っるのがバカらしくて相手にしていなかったが、一応彼女なりに真面目には答えていたようだ。

ただ、詳しい場所を言えば、そこから自分の生まれや正体が知られる事を恐れて、わざと口にしなかったんだろう。

今になって俺は、少し反省せざるを得ない。いつぞやにジンが言

つていた通り、俺はもう少し彼女の事を気に掛けてやるべきだったんだ。

そんな事をぼんやりと考えている間にも、リネは言葉を紡いでいく。

「そこは人里から離れてると、周りの山岳地帯が険しいって事もあって、滅多に人なんか寄り付かない場所だったんだ。だけど」  
「だけど、ついに事は起きた。起きてしまった。」

かつて『魔王』と呼ばれていた前テルノアリス王の命によって、危険分子と見なされた『妖魔』一族の大量虐殺が。

「ある日突然、軍の大部隊が攻め込んで来て……、みんな殺された。お父さんも、お母さんも、友達も、隣の家のおじさんやおばさんも、みんなみんな……」

リネは微かに震えながら俯いて、それでも話す事を止めようとはしなかった。俺とジンは、そんな彼女から眼が離せなくなっていた。本当に辛そうだった。いや、辛いんだろう。

「あたしは隠れる事しか出来なくて……。それで軍が去った後……。あたしは自分の力を使って、必死にみんなを治そうとした。血塗れになって……。眼を見開いたまま動かないみんなを……。何度も何度も揺さぶりながら」

「もういい、リネ。充分だ。もう……。話さなくていい」

気付けは俺は立ち上がって、ベッドに座るリネの肩に手を置いていた。

「そうだ、もう充分だ。」

苦しい思いも、辛い気持ちも、今はもう思い出さなくていい。俺もジンも、リネが傷付く事を望んでいる訳じゃないんだから。

「でも、いいの？」

制止する俺をゆっくりと見上げ、リネは震える声でそう呟く。その大きな黒い瞳には、薄らと涙が溜まっている。

「あたし……。二人とは違うんだよ？ 『化物』なんだよ？ あたしの正体を知って、離れていく人はいっぱいいたんだよ……。？」

れなのにどうして二人は」

「あの時も言っただろ」

俺はリネの言葉を遮って告げた。出来るだけ優しい雰囲気を出せるように、ゆっくりと。

「お前は『化物』じゃなくて、『リネ・レディア』だ、ってな」

そう言っただ俺は笑う。快活な笑顔をリネに見せる。

リネは少し驚いた顔をして、その後すぐ、また顔を涙でクシャクシャにして頷いた。

幼い子供のように泣きながら、それでもどこか嬉しそうに、何度も何度も頷いていた。

「少し気分を変えられる話をしようか」

リネが落ち着くのを待っていた時、不意にジンがそんな言葉を切り出した。

窓辺から外の景色を見ていた俺は、ベッドで鼻を嚙っていたリネと、ほぼ同時にジンの方を向いた。

「何だよ？ 朗報でもあるような言い方だな」

俺が冗談っぽく笑って言うと、ジンは意外にもコクリと頷く。

「ああ、その通り。これは朗報と言っていい情報だ。まあどちらかと言えば、完全にデインにとっての朗報だな」

「俺に？」

何だよ、相変わらず勿体ぶった言い方をする奴だな。ハッキリ言えハッキリ。

「何なの、朗報って？」

なぜか俺よりも先にリネが問い掛けると、ジンは可笑しそうに笑って口を開く。

「お前の師匠、ミレーナの居所が掴めそうだ」

「！！ ホントか!？」

おいおい、それは俺にとって朗報どころの騒ぎじゃねえぞ！

俺は思わず窓辺から離れ、ジンの傍へと歩み寄る。自分で言うのも何だが、物凄くわかりやすい反応の仕方だった。

「で？ どこにいるんだ？」

「その前に。以前俺が話した、ミレーナを目撃したという者の事を覚えてるか？」

「ああ。確か、『ツエペル』って言う街から噂が流れ始めたんだよね？ でもあの噂は……」

そう。あの噂は、アーベントがミレーナを誘き出す為に流した偽の情報であって、本当の事じゃなかった。俺としては、ミレーナの無実が証明されて嬉しい限りなんだけど……。

「確かに、あの噂は偽物だったらしい。だが、全てが嘘という訳ではなかったようだ」

「え？」

意外な話の展開に、俯き掛けていた俺は顔を上げ、思わず眼を丸くした。

その間にも、ジンは淡々と事実だけを積み重ねていく。

「あるギルドメンバーから報告があったんだ。そのミレーナを目撃したという人物に事情聴取を行なった所、流した噂は偽物だが、ミレーナ本人に会ったのは間違いないそうなんだ。しかもその者の証言によると、彼女は会った時、『アジュール・ファウンテン紺碧の泉』へ向かう途中だと言っていたらしい」

「お、おい……、嘘だろ？」

ジンの口から語られた事実を、俺は信じられない気持ちで聞いていた。なぜならそう、昨日の夜、とある占い師が提示した占いの結果と、ミレーナが向かったとされる場所が全く同じだったからだ。



エリーゼ、やっぱりあんたは只者じゃねえよ……。これから先、あなたの占いなら信じてみてもいいかもな。

内心で舌を巻いている俺に、ジンはどこか嬉しそうな表情で言うてくる。

「どうだ？ 朗報だっただろう？」

「あ、ああ、もちろん！ 知らせてくれてありがとな。恩に着るよ！」

「良かったね、ディーン。次の行き先決まったじゃない」「えっ？ ああ……、そうだな」

こちらも、なぜか嬉しそうな表情のリネが、何気無く発したその言葉に、俺は若干違和感を覚えた。

以前の彼女なら、「じゃあこれから頑張って探さないかね」みたいな、付いて来る気満々の台詞を吐きそうなものなのに、今の台詞からは、そういった感情が全く受け取れなかった。

何て言うか、酷く他人事のような感じで、関わりうとしている気が一切無いように思える。俺の考え過ぎなんだろうか？

「じゃあ、リネ。俺はこの辺で失礼するよ」

俺がぼんやりと考え込んでいると、ジンは突然そんな事を口走った。彼の発言に対して、ベッドに腰掛けているリネは「え、どうして？」と言って、少し眼を丸くしている。

おいおい。まさか俺を置いて行く気じゃないだろうな？ と、一人で勝手な事を思っていた俺だったが、意外にもジンは、そんな俺の予想を裏切ってみせる。

「まだ色々と事後処理が残っているんだ。ディーンにも手伝ってもらえると助かるんだが、頼めるか？」

「え？ ああ、もちろん」

呆気に取られている俺の背中を押しながら、ジンは随分足早に部屋を出て行くこうとする。何だかその様子は、普段から冷静な彼にしては、少し異質なものに見えてしまった。

「後でまた様子を見に来るから、それまでキミはゆっくり休んでて

くれ」

「うん、わかった」

ジンとリネはそんな風に短く言葉を交わし、俺はジンに背中を押されるまま部屋を後にした。

「何か俺に用があるんだろ？」

リネのいた部屋を出た後、そこから少し距離が開くのを待って、俺は隣にいるジンに尋ねた。

するとジンは、城の長い廊下を歩き続けながら、少し神妙な面持ちで言葉を切り出す。

「実はな……、リネの事なんだ」

「！」

ある程度予想はしていたが、やはり来たかという感じだった。

少し抵抗したい気持ちを、俺はあえて顔には出さず、すでに予想していた結論を口に出す。

「……軍が身柄を預かる、って事か？」

俺が淡々と告げると、ジンは少々驚いた顔をした。気付いているとは思わなかった、と言いたげな顔だ。だから俺は、苦笑して言葉を掛ける。

「ある程度予想はしてたさ。今回の件で、あいつは『妖魔』の生き残りだと王族にもバレちゃったんだろ？　しかもその『妖魔』の『血』は、『魔術』の力を飛躍的に高める効力を持つてる。それを野放しにしておけば、今回のアーベントみたいに利用しようとする奴が出てくるかも知れない。ならいっそ、軍で身柄を保護して管理下

に置いておけば、自由に歩き回らせるよりは安全だ。リネにとつても、王族たちにとつてもな。だろ？」

俺はジンの台詞を奪い取るつもりで、予想していた事を全て打ち明けた。

ジンは少し啞然とした後、浅く溜め息をついて躊躇いがちに言う。「……お前はそれでいいのか？ 一度軍の管理下に入れば、そう簡単に会う事は出来なくなるんだぞ？」

「いいも何も、元々俺は一人で旅をしてたんだ。そりゃあ、あいつには感謝してる部分もあるけど、それとこれとは話が別だろ？ それに俺一人が守るより、軍全体であいつを守った方が王族たちも納得するんじゃないか？」

「それは……、そうかも知れないが……」

言い淀むという事は、ジンも内心では理解しているという事だ。

ただ、こいつも結構お節介な奴らしい。理解は出来ても納得は出来ない。そう言いたそうな顔だ。

責めるようなジンの口調を躲しつつ、俺は苦笑しながら返す。

「心配すんなよ。リネには別れの挨拶ぐらい、ちゃんとしに行くからさ」

不満そうなジンに笑って告げた俺は、わざとらしく歩調を速める。多分勘の鋭い彼なら、今の言葉で気付いただろう。

俺がリネに、挨拶しに行く気が無い事を。

それから三日後。

事後処理や街の復旧の手伝いと、これからの旅の準備などを済ま

せた俺は、漸く出発の日を迎える事が出来た。

その間俺は、エリーゼにも礼を言っておこうと思い、何度か『ライム』を尋ねたのだが、結局一度もエリーゼに会う事は出来なかった。

まさか今回の事件で……、なんて縁起でもない事を考えていた俺に、ジンは涼しげな顔で「俺は二回程会ったぞ？」と言ってきた。これじゃあ、何だか俺がエリーゼに避けられてるみたいだ……。

「まあ、また今度首都に来た時にでも探してみるか」

そんな風に独り言を呟きながら、俺は『テルノアリス』を出る為、北門の方へ向かって大通りを歩いていく。

街は未だに、復旧作業に追われる人たちで慌ただしい。

復旧作業が終わっていないという事は、当然鉄道の修理も完了していない。つまり俺は、ミレーナが向かったとされる『紺碧の泉』アシユール・ファウンテン

まで、徒歩で行く事になる。馬を使うという手段もあるにはあるが、旅の資金を節約する為にも、ここは我慢しておくべきだろう。

が、首都から北東に位置するとされる、その『湖上都市』までは、歩くとなるとかなりの距離だ。果たして俺がその街に辿り着く頃に、ミレーナはまだその街にいるのだろうか？

せっかく有力な情報を手に入れたというのに、正直肩を落とさずにはいられない。でもまあ、それでも行くしかねえよなあ。

と、ぼんやり考え事を続けていた俺は、気付けばすでに北門の検疫所付近まで辿り着いていた。

これでこの街ともお別れか……。何だかゆっくりする暇が無かったから、少し名残惜しい気もする。

検疫所に近付きつつ、一人そんな事を思っていた時だった。

「随分辛気臭い顔してるわね、お兄さん」

どこかで聞いたような台詞に俺が顔を上げると、検疫所の傍に見覚えのある人間が立っていた。

顔を銀色のベールで隠した、翡翠色の瞳が印象的な女性。迷っていた俺の背中を押してくれた、ある意味恩人のような存在。

俺は思わず声を弾ませ、その女性の許に駆け寄った。

「エリーゼ！ 無事だったんだな！ 戦いが終わった後も見掛けなかったから心配してたんだ」

俺が安堵しつつ言っていると、エリーゼはベールの下でニコリと微笑む。

「ごめんなさいね。ジンには何度が会って、あなたの事を聞いてたんだけど。でもあなたも無事で良かったわ。これから『紺碧の泉』アシユール・ファウンテンに発つんでしょ？」

「ああ、そうだけど、何で知ってるんだ？ ……まさか占いで？」

「違う違う、ジンに聞いたのよ。だから見送りだけでもしようと思つてね。 あ、ジンなら検疫所の外で待ってるわよ。私も見送り

するから、一緒に行きましょう」

「え？ あ、ああ」

ジンも待つてたのか？ でもだったら何でエリーゼと一緒に街の中にいないんだ？

俺は疑問に思いながらも、先導するエリーゼに続いて検疫所に入った。

体格の良い兵士二人に色々調べられ、数分の時間を掛けて外壁の外に出ると、エリーゼはなぜか可笑しそうに笑いつつ、手招きして俺を呼び寄せる。

そして外壁の袂に辿り着いた所で、漸く俺は全てを理解した。

「あゝ、なるほど。こういう状況だったって訳ね」

俺はやれやれと頭を抱える。もう少し早く気付くべきだった。

視線の先、高々と聳える外壁の袂には、確かにジンが待っていた。だが一人じゃない。彼の傍らには、俺が良く知っている人物が連れ立っている。

黒髪の少女、リネ・レディアが。

「やつほゝ、デイン。久しぶり！ 元気だった？」

この呑気ちゃんめ……。何がやつほゝだ。どうしてお前がこんな所にいるんだよ？

俺は無言で、ジトツとした眼付きのままジンを見つめる。説明し

るよこの状況を、という意味を込めて。

すると俺の意志を悟ったのか、ジンは若干眼を泳がせつつ、苦笑しながら答える。

「ま、まあそんな顔するな。実は王族、と言うか、元老院から許しが出たんだ。彼女の身柄は軍に預けず、ディーン・イアルフスの旅の同行者を一任する、とな」

「一任なんてしなくていいっつーの！　って言うか体の良い押し付けじゃねえか！　大体元老院の許しって、誰がそんな勝手な事言い出したんだよ！？」

「ハルク様だ。軍の見知らぬ人間が彼女を守るより、リネと親しい仲にあるお前の方が適任なんじゃないかと仰ってな。もちろん反対する人間もいたそうだが、最終的にこういう結論に達したらしい」  
随分勝手だなあの野郎……！　貴族じゃなかったらブン殴ってやるのに！

そんな事を思いながら拳をブルブル震わせている俺に、ジンはやれやれといった様子でこう告げた。

「それにな、ディーン。何よりもお前の旅に同行したいと言ったのは、彼女なんだぞ？」

「！　えっ……？」

俺は拳を解いて、思わずリネの方を見た。

リネは少し恥ずかしそうに、右手の人差指で頬を軽く掻いている。「えつとね……。あたし、今回の事でディーンに凄く感謝してるんだ。ディーンはあたしに居場所をくれた。あたしを『化物』じゃないって言ってってくれた。それが凄く嬉しかったの。だからあなたの旅に同行して、その恩返しをしたいんだ」

「……」

「それにも言ったでしょ？　あたしもミレーナさんを探すの手伝う、って」

「……」

「……ダメ、かなあ？」

「……」

って言うか、さつきから一部始終を見てるジンとエリーゼの視線が痛い。しかも何でちよっと責めるような眼付きなんだよ？ 頼むから止めてくれて。

二人からの痛い視線を浴びつつ、俺は軽く溜め息をついた。

ここで断つたりしたら、いつぞやと同じようにストーキングされそうな予感がバシバシする。それにジンとエリーゼから、どんな言葉を浴びせられるかわかったもんじゃない。そんな展開になるのはさすがに御免だ。

若干脅迫観念に駆られつつも、それでも俺は、どこか嬉しさのようなものを感じていた。

無意識に、自然な笑みが零れる程に。

「……よっぽど暇人なんだな、お前」

冗談っぽく呟いて、俺は明るくりネに言う。

「そんなに暇なら、一緒に行こうぜ」

## 終章 二人の旅路

テルノアリスを出て数時間。

もう既に、首都を囲む巨大な外壁の姿は遙か彼方に霞んでいる。

乾いた荒野をゆっくりと踏み締める俺の隣には、酷く浮かれた様子の子の少女がいる。

俺はミレーナを探す為に旅を始めてから、一人で過ごす時間が多くなっていた。

それは一人旅をしていれば仕方の無い事で、俺自身もその事を、別段寂しいと思った事は無かった。それがずっと当たり前前になっただけだ。

ただ今。俺の隣には、旅の同行者となった少女がいる。

好奇心旺盛で、子供っぽくて、意外と泣き虫だった少女。

彼女の名前はリネ・レディア。少し特殊な力を持つてはいるが、それ以外はどこも普通の人間と変わらない、普通の十代の少女だ。

「? どうしたの、ディーン?」

リネは俺の視線に気付き、不思議そうな顔をして首を傾げる。

「何でもねえよ」

少し照れ臭かった俺は、それがバレないように平静を装う。

するとリネはまた不思議そうな顔をした。と、その表情が突然変わる。何かを思い出した、と言いたげな顔だ。

「ねえディーン。やつぱりディーンは、『英雄』って言われてるミレーナさんの弟子なんだから、『通り名』みたいなのがあったらかつこいいんじゃない?」

「あん? 何だよ突然?」

「前に『炎』を使って戦ってるディーンを見てて思い付いたんだ。結構かつこいいと思うよ、この『通り名』」

リネは眼をキラキラさせながら、俺の顔を覗き込んでくる。



仕方が無いので、俺は観念して尋ねる事にした。

「はいはい。どんな『通り名』なんだ？」

俺が尋ねると、リネは誇らしげにフフンと笑って高らかに宣言する。

「『フレイム・ウォーカー炎を操る者』ってどう？」

「……却下」

「ええ〜っ!? 何でえ？」

「『通り名』なんて必要ねえよ。大体ああいうのは自分で考えるモンじゃなくて、誰かが勝手に付けて広まってくモンだろ？ 自分で

『通り名』を名乗るバカがどこにいんだよ」

「ん〜、かつこいいと思うんだけどなあ……」

かつこいいかどうかはともかく、話の内容としては面白かったよ。そんな話を話しながら、俺はもう一度背後を振り返った。

首都の姿はもうほとんど見えなくなっている。あの首都が俺の『魔術師』としての、新たな出発点となったんだ。

「デーン！ 早く行こうよ！」

「おう！」

リネに呼び掛けられ、俺は再び前を向いた。

目指すは『アッシュール・ファウンテン紺碧の泉』。

そこに、俺の師匠がいるはずだ。

## 終章 二人の旅路（後書き）

この厨二病と呼ばないで（笑）

え、と言う訳でフレイム・ウォーカー、テルノアリス編いかがだったでしょうか？

当初の予定より長くなり過ぎてしまい、小説全体の文字数見た時自分で驚きました（汗）

所々に厨二病を思わせる言葉やらなんやらが目立つ今作品ですが、今後も楽しんでもらえたら幸いです。

次章、魔女の森編始まります！

……つて『アシユール・ファウンテン紺碧の泉』編じゃねえのかよ！（笑）

## 序章 What's your name? (前書き)

と言う訳で魔法の森編スタートです。ではここであらすじ紹介。

ミレーナが向かったとされる湖上都市『アジュール・ファウンテン紺碧の泉』を目指していた  
デイーンとリネは、『魔法伝説』なる言い伝えが残る広大な森林地  
帯、『ゴルムダル大森林』に辿り着いた。そこで二人は、風を操る  
『魔術師』と遭遇するのだが。

森林地帯と言う慣れな場所で戦う事を余儀なくされるデイーン。  
果たして二人は、無事に森林地帯を抜ける事が出来るのか？

## 序章 What's your name?

草木が鬱葱と生い茂る森林地帯。遠くからギヤアギヤアと、野鳥の鳴き声が響いてくる。

道無き道を走り抜ける度、足下から聴こえる草を踏み付ける音。立ち止まる暇も無く走り続ける俺のすぐ横を、その時、一陣の風が吹き抜けた。

ただの風じゃない。

心地良い風でもない。

突風と呼べるその風は、自らの行く手を阻む木々を次々に切断していく。

これは自然現象として生まれたかまいたち鎌鼬なんかじゃない。そこにあるのは人を殺す為の力、『魔術』だ。

俺に向けられた殺意の一撃は、辺り一面の草や木を根こそぎ削り取っていく。

隠れる事は多分無意味だ。俺の髪は炎のように紅い色をしている。普段でもかなり目立つ色のそれは、森の中だと、周りに緑が多過ぎる余計に目立ってしまう。

と、その景色の中に、俺は一人の少女の姿を見付けた。

殺傷する為の風を生み、俺に敵愾心を向けてくるその少女の正体を、俺はよく知っている。

彼女は俺と同じで、『魔術』の力を操る者。

人は俺たちのような存在を、総じてこう呼ぶ。

『魔術師』、と。

「お前、一体何者だ？」

少女の正体が『魔術師』だと理解していて、それでも俺は問い掛けた。俺が知りたいと思っただ部分はそこじゃない。

「あんたこそ、どこの誰よ？」

少女は怪訝な顔付きで、静かに問い返してくる。

俺たちの出会いは、そんな会話から始まった。

## 序章 What's your name? (後書き)

始めましたが例の如く、まだ全然どういつ展開にするかとか決めてません(汗)

なので更新が遅れるかも知れませんが、最後まで読んで頂けるとこれ幸いです。

## 第一章 魔女との出会い

「お客さん。悪い事は言わないから、あそこを通るのだけは止めときな」

眼の前に数多く並べられた、林檎や梨などの果物の山から視線を外し、俺は声の主、この商店の店主の顔を見た。

男の店主は、今眼の前に並べられている林檎のように、丸々としたその顔を心配そうに歪め、どこことなく戦々恐々としている。

なぜこんな展開になったのか。その理由が、俺にはいまいちよくわからない。

そもそも事の発端は、俺が自分の行き先をこの店主に告げ、どのようにしてそこまで行くかを説明したからだった。

俺はある目的の為に、今いる街『アジュール・ファウンテンファレスタウン』から北にある湖上都市、『アジュール・ファウンテン紺碧の泉』を目指そうとしている。その二つの街の間には、広大な森林地帯が連なっていて、『アジュール・ファウンテン紺碧の泉』へ行くには、どうしてもその森林地帯を抜けていく必要がある。

唯一、その森林地帯を大きく迂回する形で線路が伸びているのだが、『とある事情』によつて北へ向かう列車は運行していない。となると必然的に、『アジュール・ファウンテン紺碧の泉』へ行く方法は、徒歩で森林地帯を抜けるという方法に限られてくる。

だからこそ俺は、特に何の意識もせず、店主にその事を説明した。で、この顛末という訳だ。

正直俺には状況がよく飲み込めていない。店主は一体、何をそんなに警戒しているんだろう？

「止めときなつて、何か不味い事でもあるのか？」

俺が素直に尋ねると、店主は待つてましたと言わんばかりに、俺に顔を近付けて小声で話し掛けてきた。

「不味いなんてもんじゃないよ。あの森は危険だ。何せ『魔女』が住んでるって言われてるんだから」

「『魔女』？」

……何だそりゃ？ 昔からよくある言い伝えか何か？

呆けている俺を尻目に、店主は聞いてもいない事まで饒舌に語り始める。

「何でも森の奥深くに住み付いてるらしくてな。あんたみたいな旅人が、誤ってその『魔女』に遭遇しちゃって、無残にも食い殺されたなんて話もあるんだよ。現にあの森に入って、行方不明になったまま帰って来ない人間が大勢いるって話だからなあ」

「なあ。それって『魔女』じゃなくて、『魔術師』の言い間違いなんじゃないのか？ 大体何で『女』だつてわかるんだよ？」

「いやいや、『魔術師』なんて高尚な存在じゃないさ。だつて人を食い殺すような奴だぞ？ まあ『女』だつてわかるのは、その『魔女』に襲われて何とか逃げ切った旅人が言つてたからなんだよ。長い牡丹色の髪をした女だつた、つてな」

「ふん……」

俺は然して興味も無かつたので、適当に相槌を打つておいた。

それにしても『魔女』と来たか。まあ『魔術』の知識が全く無い一般人にしてみれば、女の『魔術師』を『魔女』と呼んでしまう気持ちもわからなくはない。

俺は品物を選んで代金を支払い、早々にその商店を後にした。

俺が店を離れるその時まで、店主は「あの森には近付くなよ」なんて口走っていた。あんたはそれでいいかも知れねえけど、こっちはそういう訳にもいかないんだよ。

食料を荷物の中に詰め、俺は街の出口に向かって軽快に歩く。旅の同行者である、とある少女と合流する為だ。

俺が出口の辺りに辿り着くと、意外にもその人物は、俺より早くその場所に着いていた。

「遅いよ、デーン。何してたの？ 買い物は出来た？」

俺の名を呼び、矢継ぎ早に質問を浴びせる黒髪の少女。艶のある首の付け根辺りまでの長さの髪を揺らしながら、少女は少し不満そ



うな顔を俺に向けてくる。

彼女の名前はリネ・レディア。

この街に着く以前、首都『テルノアリス』で起きた『とある出来事』をきっかけに、俺が旅をする羽目に、もとい俺と旅をする事になった少女だ。

その『とある出来事』が何なのかは、説明が面倒臭いので省略しておこう。

とにかく俺たちは、ここから北にある湖上都市、『アジュール・ファウンテン紺碧の泉』を目指している途中という訳だ。

「とりあえず買物物は終わったよ。面倒臭い連中に何度か絡まれはしたけどな」

「え、何？ 喧嘩でもしたの？」

少し驚いた様子のリネに、俺は呆れて言い返す。どんな想像してんだよお前は？

「そうじゃねえよ。品物を買う度にその店主に絡まれたただだ。『あの森は危険だ』とか、『魔女が住んでる』とか。ったく、耳にタコが出来るっつーの」

やれやれと思いつながら、俺は溜め息を吐いた。この街の人間はどうやら本気で、その『魔女』だか何だかの存在を信じているらしい。さつきも思った事だが、もしも本当にそんな存在がいるんだとすれば、それは単なる言い間違いなんじゃないだろうか。

俺自身がそうしているからわかる事だが、『魔術』を操る人間は基本的に、男だろうと女だろうと『魔術師』としか呼ばれない。たまたま相手の事を揶揄して、『化物』だの『人間兵器』だの、『魔女』だのと呼ぶ輩もいるが、今回の場合、それとは少し意味合いが違っているようだ。

人を簡単に殺せる力を持った人間は、間違いなく『魔術師』を於いて他にはいない。まあさすがに、人を『食い殺す』なんて『魔術師』の話は聞いた事が無いが……。

それに考えてみれば、『魔女』だの何だのを抜きにしても、今か

ら向かう森には、何かしらの危険な存在が待ち構えている可能性がある、という事だ。

が、幸いこの街には『ギルド』がある。

街の人間がこれだけ騒いでいるんだから、恐らく『ギルド』の人間たちも対策を講じている事だろう。旅人襲撃の犯人も（そんな存在が本当にいればだが）、彼らが努力すればその内捕まるんじゃないだろうか。

と、俺がそんな事を考えている傍で、リネは自分にも心当たりがあると言っような顔をする。

「ああ、それならあたしも言われたよ。今から行く森林地帯って、『魔女伝説』が残ってるんでしょ？」

「『魔女伝説』？」

リネの何気無い言葉で、俺の頭に疑問符が浮かんだ。何か、俺が聞いた話とは少し違ってないか……？

「それ、どんな伝説なんだ？」

俺が問うと、リネは大して困った様子も無く切り出す。

「あたしが聞いた話だと、この森林地帯のどこかに、『魔術戦争』時代に造られた遺跡があるらしくてね。そこを守る役目を負った『風守り』って呼ばれる一族が、数百年経った今でも遺跡を守り続けているって話だったよ。どうして『魔女』って呼ばれてるかって言うと、その『風守り』の一族は、女性だけが『魔術師』になる役目を担ってる一族だったんだって」

「はあ、だから『魔女伝説』って訳か。でも伝説って呼ばれてるって事は……」

「うん。実際にその遺跡があるのかどうかはわかってないし、そういう一族が実在したっていう明確な証拠は無いんだってさ」

なるほどねえ。まあ実際、伝説なんてどれもそんなモンだろ。本気で確かめようとする奴なんて、数が限られてるだろうしな。

「とにかく伝説は伝説だ。俺達には大して関係無い事だし、先を急ごうぜ」

俺は適当に話を流して、リネにそう催促する。  
彼女の方も別段気にした様子も無く、俺たちは揃ってその街を後にした。

食料調達の為に寄った『ファレスタウン』と、アジュール・ファウンテン『紺碧の泉』の間にある広大な森林地帯は、『ゴルムダル大森林』と呼ばれている。

俺も購入した周辺地図を見て初めて知った事だが、確かに範囲が半端なく広い。つい数日前まで過ごしていた首都『テルノアリス』の街並みが、軽く二十個ぐらいは納まるんじゃないかという程とにかく広い。こんなに広い森を抜ける為には、かなりの労力と時間を要するはずだ。

「……ねえデイン」

「何だよ？」

「今更だけど、本気でこの森を抜けるつもりなの？」

「……どういう意味だ？」

森の入口（らしき場所）で立ち尽くしていた俺たちは、そんな風に会話をし始めた。

眼の前はすでに鬱葱とした草木に覆われていて、陽の光が上手く届かないせいか、森の奥の方は若干薄暗くなっている。まさに魔の巣窟、と言った感じだ。

すると突然、首の骨が折れるんじゃないかというような勢いで、リネは俺の方に悲痛な表情を向けてくる。

「だって見るからに怪しい森だよ？ しかもすっごく広いんだよ？ 抜けるのに何日掛かるかわからないんだよ？ 何が出てくるかわ

からないんだよ!? それに、さっきディーンが言ってた『魔女』さんに遭遇したら、一体どうするつもりなの!?」

「だあああつ! もう、うるせえな! 俺だってそんな事わかってんだよ! でも仕方ねえだろ!? 列車を使いたくても、どっかのバカが首都に停車してた列車を、駅ごと爆破しちまったんだから!」

今にも継り付いてきそうなりネから離れながら、俺は叫ぶ。叫ばずにはいられない。

そう。その『どっかのバカ』のせいで、現在ジラータル大陸を走る列車の約四割が、正常に運行出来なくなっている。

首都を発着する列車は無し。だから俺たちは、こうして歩く羽目になっていく訳だ。何度でも言うけど、『どっかのバカ』のせいで

「とにかく! 『紺碧の泉』<sup>アジュール・ファウンテン</sup>へ行くって決めた以上、俺は歩いてでも行く! 森を通るのが嫌だって言うなら、お前とはここでお別れだ!」

「酷いよディーン! あたしの事嫌いになっちゃったの!?!」

「そういう話をしてんじゃねえええつ!?!」

話をいきなり脱線させんな! 大体何でそんな結論に達するんだよ!?!

俺は思いつ切り深く溜め息をついた。本来なら俺は一人旅の身であるはずなのに、どういう訳かこの少女と一緒に旅をする羽目になった。

いやまあ、どういう訳も何も、流れるにそうなってしまったんだから仕方が無い。今更文句を言ってもどうにもならない事だ。……

いや、そうでもないのか?

「わかったよお、わかりましたよお……。行けばいいんでしょ行けば……」

リネは酷く不貞腐れた様子でそんな事を言ってくる。つてか、何で俺が悪者みたいになってんだよ?

俺はもう一度溜め息をついてから、眼の前に広がる広大な森林地

帯に足を踏み入れる。

色々長い道のりになりそうだと、という不思議な予感みたいなものを、この時俺は、心の隅に感じていた。

もちろん、すでに弱々しい足取りになっているリネには、言う気になれなかったが。

多分一時間近く歩いた頃だろう。

不意に後ろを歩いていたりネが、ペタンと地面に座り込んだ。前を向いていた俺だったが、草を踏み締める音や気配で、どうにかそれに気付く事が出来た。

「何だ？ 疲れたのか？」

俺は振り向いて、草の生えた地面にすくま蹲るリネに声を掛けた。すると案の定、非常に弱々しい声が返ってくる。

「……ディーンは疲れてないの？」

「この程度の道のり、一人旅してりゃあ日常茶飯事だからな。今まで歩いてた荒野が森に変わったってだけの話だ。疲れる理由がどこにあんだよ？」

「……いいよね、ディーンは。まさに怖いもの無しって感じだよ」

……何だよ。もしかして喧嘩売ろうとしてんのか？

少タイラツとしながらも、俺はすくま蹲るリネの傍まで近寄り、膝を付いて視線を同じにする。

「疲れたんなら無理に歩けとは言わねえよ。背負って行ってやるから、どこか休憩出来そうな場所を探して、そこで一旦休もうぜ」

「……」

「……リネ？」

何だかりネの様子がおかしい。俯いたまま顔を上げない。

おいおいまさか、何か変な毒を持った虫に、刺されたか噛まれたかしたんじゃねえだろうな！？

俺はそんな風に焦りを覚え、彼女の肩に触れようとした。

と、その時。

「……フフ」

忍び笑いみたいな微かな声が聴こえて、俺は思わずキョトンとなる。

声を出しているのはもちろん、眼の前にいるリネだ。彼女は笑うのを必死に堪えているかのように、その華奢な身体を小さく小刻みに揺らしている。

と、ついに我慢出来なくなったのか、リネは勢い良く立ち上がると、大声で笑い始めた。

「アハ、アハハハハハハ！」

どうしたんだ、この女。笑いが止まらなくなる毒キノコでも食べたのか？

狂ったように笑い続けていたリネは、やがて啞然としている俺を見て、苦しそうな顔で謝ってくる。

「ご、ごめんごめん。別におかしくなった訳じゃないよ。ただね」

そう言っつてリネは呼吸を整えながら、目尻に溜まった涙を軽く拭いて続ける。

「デーンがあんまり心配そうに話し掛けてくるから、可笑しくなっちゃって。それに嬉しいっていうのもあったんだ。普段は結構冷たいけど、いざって時は優しいんだなあってね」

そう言っつてリネは笑う。本当に嬉しそうな笑顔を見せる。

俺はそんな彼女の笑顔を見て、フツと優しく笑い返した。  
。 訳が無かった。

「バカかてめえええはああああっ！！」

俺は膝の骨が砕けんばかりの勢いで立ち上がって、大声で叫んだ。またもや叫ばずにはいられなかった。

俺の大絶叫に、今度はリネがキョトンとした顔になる。

良い雰囲気か台無しなのは充分承知してる。って言うか、そんなモン俺の知った事か！

「こっちは本気で心配して、本気で気を遣ってたんだよ！ それが何だ！？ 心配そうに話し掛けてくるのが可笑しくてだ！？ バカにしてんのかてめえは！？」

「だ、だって」

「だってモクソもあるかあああああつ！！」

リネの反論も絶叫で封じる。聞いている余裕は今の俺には無かった。ぜえぜえと息を切らす俺を見て、リネは漸く自分の立場を理解したのか、急にしょぼんとした顔になった。

「……ごめんなさい」

子供が親に叱られて、それでもまだ納得がいつていないと言いたげな不貞腐れた感じで、リネは呟いた。ちよつと唇を尖らせている辺り、やはり反省はしていないと思われる。

以前にも何度か思った事だが、本当にこいつは、振る舞いやら何やらが子供みたいな奴だ。

「つたく、無駄な体力使わせやがって。何ともないんならさっさと行くぞ」

「はあ〜い」

と、間延びした返事を返すリネ。やっぱり反省してねえなこの野郎

……。

俺は顰めっ面のまま、再び前を向いて歩き出そうとした。

だが、その時。

「！」

不意に俺は、何かの気配を感じ取って、踏み出そうとしていた足を止めた。俺の動作があまりにも突然だったせいか、後ろでリネが身体をビクツと震わせるのが、気配でわかった。

「ど……、どうしたの、ディーン？」

「静かにしてる」

俺は短くりネに返し、辺りに意識を集中させる。

何かがいるのは間違いない。ただ、それが人なのか獣なのか、細かい所まで判別出来ない。判別は出来ないが、向こうはどうやら俺たちに狙いを定めているらしい。

そう、狙いを定める。

つまり今、何者かに向けられているのは、凄まじいまでの殺気だった。

気配の主を探していた俺は、不意にさっきの街で聞いた『魔女』の事を思い出した。人を食い殺すとか伝説の一族がどうか知らないが、この森に何かがいるのは確かなようだ。

「出来れば穩便に済ませたいんだけどな　！」

瞬間、俺は後ろに立っていたリネの手を握って、一目散に走り出した。

「ちよっ、ちよつとディーン！　何、突然！？」

「何かよくわかんねえ奴に狙われてんだよ俺たちは！　殺されたくないなら黙って走れ！」

「こ、殺すつて……」

かなりの衝撃を受けているらしいリネの言葉を無視して、俺は走る速度を徐々に上げる。

相手の正体は何なのかはわからない。が、殺気を向けられている以上、逃げ出す理由としては、それだけで充分だよな？

すると、その時。鋭く風を切るような音が聴こえたかと思っただ瞬間、俺とリネの足下に何かが飛来して、地面を易々と吹き飛ばした。「なっ……！！？」

俺とリネの身体は宙を舞い、数メートル程飛んだ後、長い草が生い茂る草むらへと叩き付けられた。

受け身を取る暇なんて無かったが、幸いな事に、草が落下の衝撃を和らげてくれたらしい。そのおかげで、俺たちは怪我を負う事は



無かった。

「くっそ……！ おい、リネ。大丈夫か？」

「う、うん……、何とか」

「いいかりネ。少しの間ここに隠れてる。身を屈めてジツとしてるんだぞ。いいな？」

俺はリネに告げると、返事も聞かずに草むらを飛び出した。相手は何者なのか未だにわかんねえけど、これ以上好き放題されてたまるか！

リネのいる草むらから十分な距離を取る為、俺は森の中を、右へ左へ乱雑に走り続ける。

だいぶ距離も稼いだ所で、俺は走りながら、右手に炎を集束させようとした。

が、しかし。その動作の途中で重大な問題がある事に気付き、炎自体を生み出すのを止める。

さて問題です。炎の『魔術』を操る事を得意とするこの俺、ディーン・イアルフスは、一体今どこを走っているでしょう？

自分自身に問うてみたその問題の答えは、しかし簡単なものだった。

俺の周囲一面には、青々とした草木が鬱葱と生い茂っている。

そんな自然豊かな場所のど真ん中で、今俺は何をしようとした？

「こんな所で炎を生んだら、あつという間に火事になっちまうじゃねえか！」

声に出して確認する辺り、俺にはまだ若干余裕があるらしい。自分で言うのも何だけど、さすが数々の死線を潜り抜けてきただけの事はあるよなあ。

……なんて感心している場合じゃなかった。

思わず立ち止ってしまっていた俺のすぐ傍を、一陣の強い風が走り抜けた。と思った瞬間、鬱葱と生い茂っていた草木が、鎌や鉞で刈り取られるみたいに、あっさりと切り刻まれていった。

「ただの風じゃない！ かまいたち 鎌鉞……！？」

未だに俺に向けられている殺気。そして、自然現象とは考えられない殺人的な風。

これらが意味する、襲撃者の正体は。

「『魔術師』か！」

俺は鎌鼬かまいたちが飛んできた方向から、相手の位置を瞬時に割り出した。するとそこに、何者かの姿があった。

見えたのは、俺と同じぐらいの年代の、落ち着いた雰囲気のある少女。その少女の容姿を見て、俺はもう一度『魔女』の事を思い出した。

『ファレスタウン』の商人たちが、口々に言っていた『魔女』の容姿。俺が見た少女は、その容姿と瓜二つだった。

牡丹色の長い髪。『魔女』を連想させるのにピッタリな黒いマントの内には、同じく黒い布製の服。丈の短いスカートからは、色白く細い足が二本伸びている。

落ち着いた雰囲気がある、その薄紅色の瞳に吸い寄せられ、俺は思わず少女の顔を見入ってしまう。

お互いの距離は五メートル程。だがすでに、辺りに生えていたはずの草木は、鎌鼬かまいたちによってそのほとんどが薙ぎ払われている。俺と少女を隔てる物は、何一つ無い。

「お前、一体何者だ？」

牡丹色の髪の少女が、『魔術師』だろうという事は予想出来ている。

俺が知りたいのはそこじゃない。彼女の存在その物だ。

「あなたこそ、どこの誰よ？」

落ち着いた口調で尋ね返してくる少女。ただどその薄紅色の瞳から放たれる光は、鋭い殺気を含んでいた。

と、俺の質問に質問で答えた少女は、その右手を僅かに動かさそうとする。

その瞬間。俺は危険な臭いを嗅ぎ取って、思わず少女を制止した。「ま、待ってくれ！ 誤解だ！」

「……！」

何が誤解なのか俺自身わかっていないのに、両手を前に出してそう叫ぶと、意外にも少女はピタッと動きを止めてくれた。

しかしどうする？ 彼女の動きを止められたのはいいけど、次の言葉が見つからない。おまけに彼女の眼からは未だに殺気が消えていない。警戒心全開だ。

「何が？」

「え？」

不意に少女の方が声を掛けてきた事で、俺は思わず呆けた返事をしてしまう。すると少女は、念を押すかのように繰り返した。

「何が誤解なの？」

「ごもつともな意見だー！ ツッ！ そりゃあ気になりますよねえ！俺は内心で絶叫しながら、身体中に冷や汗を掻く。

何か言葉を探さなきゃいけない。黙っているとまた攻撃されそうだ。

「いや、その、だから、つまり……」

言葉が完全にしどろもどろになっている。それに少女の眼光が徐々に強くなり始めているのは、決して気のせいなんかじゃない。答えを間違えたら殺される！

「お前が俺を狙う理由だよ。そう、それ。俺はお前に危害を加えるつもりはない、本当だ。俺は『紺碧の泉』アジュール・ファウンテンへ向かう途中で、たまたまこの森に入っただけなんだ」

「『紺碧の泉』……？」

お？ ちょっと反応あり？ 少し警戒心と殺気が和らいだ気がするの。気のせいかな？

まあどっちにしろ、全く話を通じない相手って訳でも無いようだ。それなら遠慮なくやらせてもらおう。

レッツコミュニケーション！

「俺の名前はディーン・イアルフス。ディーンって呼んでくれ。お前の名前は？」

意気揚々と名乗ってから、セカンドネームを口にしたのは不味かったかとも思ったが、どうやら少女の方は特に意識していないらしい。何の反応も見せる事無く、俺の質問に答えてくれた。

「シャルミナ・ファルメ」

と、自分の名前らしき言葉だけを紡いで、少女はジッと俺の方を見ている。

よし、どうやら会話は成立しそうだな。この調子でドンドン行くう。

「シャルミナは『魔術師』なんだよな？」

「そうだけど……、だったら何？」

「あ、いや。何となくその辺りに、俺を狙った理由があるような気がしたからさ」

「理由？ ……そうね。私があんたを狙った理由は、『近付いてほしくない』からよ」

「……は？」

『近付いてほしくない』？ 近付くって、一体何にだ？

告げられた言葉の真意を打破出来ず、首を傾げる俺を尻目に、少女シャルミナは真剣な表情でこう言った。

「ここから先に進んだら容赦無く殺すわ。それが嫌なら引き返さない、デーン」

## 第一章 魔女との出会い（後書き）

と言う訳でノリと思い付きで始まったこの魔女の森編。

一体全体どうしたらいいもんかと思いつながら、どうにかこうにか進めて行くことと思おちよります。

## 第二章 The encounter was a bad thing

「どういう事だよ、それ？」

容赦無く殺す、という物騒極まりない言葉を平気で口にするシャルミナに、俺は少々不満なようなものを感じた。

妙な敵愾心を向けられている俺からすれば、事情がさっぱり呑み込めない。

彼女はなぜ、これ以上進んだら殺すなどという、脅迫染みた台詞を口にするんだろう？

例えばの話だ。眼の前に一本の道があったとして、そのど真ん中に立っている一人の兵士が、『ここから一步でも先に進んだ奴は容赦無く殺す』、なんて口にしたとしたら、不思議に思わない奴はいないんじゃないだろうか。

何で進もうとただだけで殺されなきゃいけないのか、とか、進むなど言うならじゃあこの先には一体何があるのか、とか。思う事は色々あるだろう。

「答えるつもりはないわ。あんたには関係の無い事だし、知る必要も無い事よ」

訳がわからず問い掛ける俺に、しかしシャルミナの反応は冷たい。取り付く島が一切無いと言った感じだ。

……いや、待てよ？ 確か彼女はさっき、『近付いてほしくない』と口走ったよな？

この森の中で近付いてほしくないもの。或いは近付いてほしくない場所。

まさか……、と俺は思う。

『ファレスタウン』でリネが聞いたという、『魔女伝説』と呼ばれる『風守り』の一族の話。

それによると、この森林地帯のどこかに『魔術戦争』時代に造られた遺跡があり、それを守る役割を持った一族がいる、という話だ

った。そしてその一族は、女だけが『魔術師』になる役目を担っていた、と。

近付いてほしくない。

先へ進んだら殺す。

もしもこの二つの言葉が、この先にある何かを守るうとしているが故に、発せられたものだったとしたら。

牡丹色の髪の少女、シャルミナ・ファルメ。

まさか、彼女の正体は……。

「なあ、お前もしかして」

推測から導き出した結論を、口に出そうとした瞬間だった。

鋭い風斬り音が響いた直後、俺の爪先数十センチの辺りが弾け飛び、草の生えていた地面が抉り取られた。

と同時に、発生した爆風が俺の身体を横切り、背後の木々の間を通り抜けていく。

ふと気付くと、五メートル程先に佇むシャルミナが、いつの間にか右手を前に翳かざしている。

その光景を眼にした事で、俺の頭が遅れて状況を理解した。今の爆発は、シャルミナが俺の足下目掛けて鎌鼬かまいたちを放った為に、引き起こされたのだと。

「余計な詮索はしなくていいわ」

今の攻撃で僅かに硬直している俺に、シャルミナは殺気を孕んだ眼差しを向けつつ、尚も冷たい口調で言い放つ。

「あんたに残された選択肢は二つよ。大人しく引き下がるか、私に反抗して細切れになるか。さあ、どうする？ どちらか片方、お好みの展開を選ばせてあげるわ」

「……ッ」

獰猛な光を放つ薄紅色の瞳が告げている。

後者を選べば本気で殺す、と。

険呑な眼付きのまま行く手を阻む少女。『魔術師』として並々ならぬ覇気を感じさせるその姿に、俺は素直に驚嘆させられた。

そんな、ある意味堂々とした少女の振る舞いを眼にしたせいか、不思議と俺の頭が急速に冷やされていく。

さっきまで感じていた焦りや緊張感が、徐々に形を失い、気付けば俺は溜め息をついていた。

やれやれ、という意味が込められた溜め息を。

これは随分前から自覚していた事だが、どうも俺は、他人と比べてトラブルに巻き込まれやすい性質らしい。

数日前まで関わっていた『テルノアリス』襲撃の件にしたってそうだ。あれも元はと言えば、俺が乗った列車がテロリストに占拠されてしまった事が、事件に関わるきっかけだったように思う。

今でさえ、こうして妙な『魔術師』の少女に絡まれている訳だし、我ながらしんどい役回りを演じさせられてると思う事頻りだ。

自分自身の運の無さを妙に可笑しく感じてしまい、思わず俺は笑みを零してしまう。

すると、その笑みをどういう意味に受け取ったのか、相対しているシャルミナが少々顔を顰めた。気に入らない、と言いたげな表情をしている。

「何が可笑しいのよ？」

「いや、別に。ただちよつと自虐的な事考えてただけだよ。ま、それはそれとして」

覚悟は決まった。第一、この森を進むのを諦めたつもりは最初から無い。俺は何が何でも、自分の目的を果たさなきゃいけないんだ。師匠を、ミレーナ・イアルフスを探し出す事を。

「悪いけど、こっちも大人しく引き下がる訳にはいかねえんだ」

瞬間、俺は右手に炎を生み出し、それを一つの形へと造り変えていく。

俺の掌で起こる現象を目の当たりにした途端、終始険呑としていたシャルミナの表情が、一瞬で驚きに満たされた。



「！ あんたまさか……、『魔術師』なの？」

「ああ、そうさ。もう一度自己紹介しとこうか？ 俺は名前はディーン・イアルフス。『深紅魔法』の使い手だ」

言いつつ俺は、右手に造り上げた『魔術』の力から成る武器を握り締める。

それは、柄も鍔も刀身も、全てが紅い炎によって形成された剣。

『深紅魔法』の技の一つ、『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』だ。

煌々と紅い光を放つそれを構えながら、俺は自分の周囲を一度見回した。

青々とした草木に囲まれた自然豊かな森の中で、こうして炎の力を扱うのは、俺自身初めての事だ。もちろん危険な行為だという事は百も承知だが、相手が『魔術師』である以上、どうやら今は、その危険を冒す必要があるらしい。

ただ幸いな事に、シャルミナがかまいたち鎌鼬で周りの草木を薙ぎ払っている為、ある程度の炎の力を使う事は出来る。まあそれでも、大技を使うのだけは止めておくべきだろうが。

と、そんな思考を続けていた俺は、不意にシャルミナと眼が合った。

彼女の表情からはいつの間にか、他者を威圧する殺気が消え去り、まるで信じられないものでも眼にしているかのような、驚愕の色が濃く滲み出ている。

「『深紅魔法』に、イアルフス……！？ どういう事？ 何であった、あの『英雄』と同じ『魔術』と名前を持つてる訳！？」

シャルミナは、その薄紅色の瞳でジッと俺を見据え、理解不能だと言わんばかりに声を張り上げる。

何だか意外な反応だ。ついさっきフルネームで挨拶した時は驚かなかったから、てっきりミレーナの事は知らないのかと思っていたが、どうやらそういう訳でもないらしい。

ここまで来てしまえば（口を滑らせたのは俺自身だが）、もう素性を隠す意味は無いだろう。

観念、と言うか、むしろ納得した俺は、要点だけを掻い摘んで説明する。

「簡単な事さ。『英雄』ミレーナ・イアルフスは、俺の『魔術』の師匠なんだよ。それと同時に、『倒王戦争』で親を失った俺を育ててくれた、義理の親って訳」

「あんたが……？」

俺の経歴が余程意外なものだったからなのか、シャルミナは僅かに言い淀むと、まるで言葉を失ったかのように、静かにその場に立ち尽くしてしまふ。

一方の俺はと言えば、驚いた表情のまま硬直している彼女を見て、何だか出端を挫かれた気分になった。身体は戦闘態勢に移行しようとしていたのに、さて、この状況はどうしたモンか。

「……なあ、シャルミナ。とりあえず一時休戦にしねえか？俺も色々、お前に聞きたい事があるからさ。なっ？」

「……」

何とか膠着状態を打破出来ないかと思い、提案してみた事だったが、シャルミナは無言のまま答えようとしない。その表情は、何かを逡巡しているようにも見える。

彼女の意志がハッキリしない以上、俺も完全に警戒を解く訳にはいかない。右手に握ったままの『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』が、戦わせると叫ぶかのように紅く煌めいた。

と、その時だった。

「見つけたーーーーーっ!!」

「!？」

天から降ってきた妙に明るさを感じさせる声に、俺とシャルミナが同時に顔を上げると、空を覆っていた木々の隙間から落下してきた何者かが、俺たちの丁度真ん中辺りの地面に、ダンツと草を踏み付ける形で着地した。

俺に背を向けたまま片膝をついて屈んでいるその人物は、どうやら女性らしい。

後頭部で馬の尾のように纏められた、天色あまいろの長い髪。布地の動きやすそうな半袖と短パンに身を包んだその服装は、あまり女性らしさを感じさせない。

一体何者なんだと思っていた俺の眼に映ったのは、女性が両手で水平に抱えている、自身の身長と同じ程の長さの薙刀なぎなただった。

と、女性は即座に立ち上がるなり、シャルミナに向かって薙刀を差し向け、どこか楽しげな声で告げる。

「こんにちは、『風守り』の一族さん。また会う事が出来て嬉しい限りだよ。どうだい？ そろそろ観念してもらえると、こつちも有り難いんだけどねえ」

「あんたもしつこい女ね。そういえば、今日は一人なの？ いつつも連れ立ってる大事な相方さんは、道にでも迷ったのかしら？」

「う、うるさいな！ あんたに関係ないだろ！」  
あからさまに口籠るって事は、多分凶星を突かれたって事なんだろう。

……って言うか、さっぱり状況が飲み込めねえ。また会った？ 観念？ 今日は？ 相方？ 俺は完全に蚊帳の外って事ですか？

頭の中が疑問符だらけの俺は、対峙する女二人を前に間抜けな顔をして呆けているしかない。

と、突然シャルミナの方が、天色の髪の女性をわざとらしく避けるようにして、俺に声を掛けてきた。

「デーン、悪いわね。余計な邪魔が入ったから、話はまた今度にしましょ」

「うえ！？ あ、何？ また今度ってどういう意味だよ？」

その言い方だと、まるでもう一度俺の前に現れるつもりでいるように聞こえるぞ？

思わず間抜けな声で俺が聞き返すと、間に立っていた天色の髪の女性がくるりと振り返って、訝しげな顔をする。どうやら彼女は、

今漸く俺の存在に気が付いたようだ。

「……って言うか、あんた誰？」

こっちの台詞だバカ野郎。お前こそこの誰なんだよ。

俺は鬱陶しく思いながら天色の髪的女性を一瞥した後、再びシャルミナの方に視線を投げた。

ところがいつの間にか、彼女の姿はどこにも無く、彼女が立っていた辺りに生えている草花が、僅かに吹き抜ける風で優雅に揺らされているだった。

「あー！ーっ！！ また逃げられた！！」

俺と同じ方向に視線を戻した天色の髪的女性は、そんな風に叫んで、悔しそうに薙刀の石突き部分を地面に叩き付ける。

何だか訳がわからないままだが、とりあえず戦闘は免れたと判断した俺は、右手の『紅蓮の爆炎剣』フレイム・ロングソードを静かに消滅させた。

正直、眼の前の女性が現れなければ危なかったかも知れない。

シャルミナは俺と話すのを迷っているようだった。もし彼女が思い直して、再び俺に襲い掛かって来ていたら、俺は森のと真ん中で炎を使って戦わなければならなくなっていた。

俺自身、旅をし始めて長くなるとはいえ、こんな不慣れな場所で『魔術師』相手に戦うとなれば、簡単に勝つ事は出来ないだろう。

況してシャルミナの方は、俺よりもここでの戦いに慣れているみたいだったしな。

……それにしても、シャルミナが残した最後の言葉が気に掛かる。あいつまさか、本気でもう一度俺の前に現れようとしてるってのか？

「あんたあの女とどういう関係なの？ って言うかどこの誰？」

思考に走っていた俺は、少々乱暴な口調で発せられた言葉にハツとする。

気付くと天色の髪的女性は、いつの間にか俺のすぐ傍に立っていた。透き通った青藤色の瞳が、真っ直ぐ俺を見つめている。なぜか少々威圧的な感じのする眼差しだ。

俺は女性の迫力に思わず圧倒され、数歩後退りながら口を開いた。

「えっと……、俺の名前はディーン。自分で言うのも何だけど、別に怪しい人間じゃない。北に向かう旅の途中でこの森に入って、偶然さっきの女に遭遇したただけだ」

「ふう〜ん。でもさっき名前呼ばれてたじゃん」

何だよ、結構鋭い所を突っ込んでくるじゃねえか。少し、どころかかなり真剣にシャルミナとの関係を疑われているらしい。

別にやましい事がある訳でもないのに、俺は背中の辺りに嫌な汗を掻きながら弁明する。

「あれは単純に自己紹介したからで、って言うかその前に、あんなこそ一体何者なんだよ？」

弁明ついでに反撃の糸口を見つけた俺は、これ見よがしにすぐさま聞き返した。

すると天色の髪の女性は、俺と違って大して焦る様子も無くすんなりとこちらの質問に答える。

「アタシかい？ そうだね、じゃあまず自己紹介から始めようか。アタシの名前はレイミー・リゼルブ。大陸の各地を転々としてる、しがないトレジャーハンターさ」

「トレジャーハンター？」

それって確か、遺跡とかに入って金品を強奪する……っつていや、あれは墓荒らしか？ 生憎俺には、その辺の知識が全く無いからよくわからない。

まあ何にしる、初対面からあんまり良い印象を持ってない感じだ。

また妙な奴と知り合いになっちまったなあ……。

「それで？ そのトレジャーハンターさんがこんな所で何してんだよ？」

適当に考えつつそんな質問を俺がぶつけると、レイミーは少し困った様子で、頭を掻きながら言う。

「まあ……、その、色々。連れを探して森の中をうろついてたら、さっきの女を偶然見つけてね。それでとっ捕まえようとしたって訳よ」

「はあ？ 捕まえようとして、あんた一体、さっきから何の話を

と言いつけて、俺はふとある事に気付いた。何かとても重要な事が、頭の隅に引つ掛かっている気がする。

何だっけ？ としばらく考えてみた俺は、レイミーが口走った台詞のある部分から、その答えを導き出す事に成功した。

「あー！ーっ！！」

俺の最大の忘れもの。

頭の隅に引つ掛かっていた、とても重要な事。

全ての点が一本の線で繋がった、という感じだった。どうして今の今まで忘れていたんだろう？

俺にも一人、旅の連れがいるという事を。

「な、何？ どしたの突然？」

絶叫する俺を随分驚いた様子で見つめ、レイミーは首を傾げている。

そんな彼女を尻目に、俺は思いつ切り肩を落として一人弱々しく  
呟く。

「リネの奴と別れたのって、どの辺りだったっけ……？」

辺り一面、どこもかしこも似たような感じで草や木が生い茂っている。犬並みの嗅覚でも無い限り、リネと別れた草むらへ戻るのは、恐らく不可能だろう。

彼女と逸れるという、いつぞやにも体験した覚えのある展開に、俺は頭を抱える事しか出来なかった。

ここに隠れてる。そう言ってディーンが飛び出して行つてから、もう随分経つた気がする。

なのに一向にディーンが帰ってくる気配は無い。周りから絶えず聴こえるのは、野鳥の鳴き声や風が草木を揺らす音。人の足音らしきものは全然聴こえてこない。

「……もしかしてディーン、あたしを置いて先に行つちやつたのかなあ？」

不安な気持ちを口に出したせいで、あたしは余計気落ちしてしまふ。自分の事ながら、随分と単純な精神構造をしてるよね、あたしつて。

森の入口でディーンに言われた言葉が、頭の中で繰り返し再生される。

『お前とはここでお別れだ』

彼は多分、冗談のつもりで言ったんだろうけど、あたしは結構本気にしてしまつていた。なぜならそれと似たような台詞を吐いて、あたしの前から姿を消した人は何人もいたからだ。

あたしは普通の人とは違ふ、ある特殊な『力』を持っている。

その『力』のせいで、今までにあたしは、謂れの無い迫害を受けてきた。

生まれた時から持つていたその『力』を見て、あたしの事を気味悪がり、『化物』と罵り、揶揄し、離れていく人は大勢いた。

もちろん、そんな人ばかりだつたつて訳じゃない。それでも多分、自分の事を受け入れてもらえなかつた事の方が多いと思う。

だけどあたしは、ここ何日かの中に、きっと生涯忘れる事の出来ないような経験をした。

ディーン・イアルフス。

『英雄』ミレーナ・イアルフスの弟子である彼に出会つた事で、あたしの人生は大きく変化したと思う。

何もかもが衝撃的だつた。

あたしの事を『化物』と呼んだ人に、全力で立ち向かつてくれた

事。

自分の居場所を探して彷徨っていたあたしに、安らげる居場所をくれた事。

こんなあたしと一緒にいてくれた事。

普段は結構冷たくて無愛想だけど、あたしはちゃんと知っている。ディーンは本当は、凄く心の優しい人なんだって。

そんな彼がいたからこそ、あたしは今、こうして存在する事が出来ている。

だから。

「そうだよ。ディーンを疑うような事考えちゃダメ。信じなきゃ、ディーンを」

意識して口に出し、彼への思いを強くする。たったそれだけで、何だか少し元気になれた気がする。やっぱりあたしって単純だなあ。

自分に対して苦笑しながら、蹲すくまっていたあたしは立ち上がった。

ディーンには隠れてるって言われたけど、待ってるだけじゃダメだよ。あたしも彼の事を探さなくちゃ！

彼もきつと、あたしを探してくれていると信じて。

慎重に辺りの様子を窺いながら、あたしはディーンが走っていった方向に歩き出そうとした。

すると、その時。

「止まれその女！」

「！」

突然背後から、怒鳴り声に近い威圧的な言葉を浴びせられて、あたしは思わずビクツとした。聴こえてきたのは男の人の声みたいだけど、相手は明らかにディーンじゃない。

あたしが恐々振り返ると、そこに立っていたのは胡桃色くるみいろの髪を生やした眼付きの鋭い青年だった。男の人にしてはやや長めのその髪は、癖っ毛なのか少々波打っている。

さつきからあたしの事を睨んでいる男性は、両手に鋼鉄の籠手を装着していて、まるで格闘家みたいな構えを取ったまま、また鋭い



声を張り上げる。

「答える！ てめえ、一体どこで何してる？」

「え、え〜っと……」

何してるって言われても、ディーンと逸れて迷子になってます！  
なんて言っても伝わらないよね？

どう説明したらいいか迷っていると、胡桃色の髪の青年は構えを解いてツカツカとこつちに歩み寄ってきた。そしていきなりあたしの胸倉を掴んで、怒鳴るように言う。

「答えるって言うてんだろ！ ここで何してんだ！？」

「そ、そんな態度じゃ説明しようって気になれないよ！ そもそもどうしてあたしが、顔どころか名前も知らない人に状況の説明をしなきゃいけないの？」

あたしがムツとしてそう言い返すと、青年は拍子抜けしたような表情になって、あたしの胸倉を掴んでいた手を離れた。

「チツ、仕方ねえな。じゃあまずオレが自己紹介してやるから、てめえもてめえ自身の事を話せ。いいな？」

あたしから数歩距離を取って偉そうに命令してくる青年に、あたしは思いつ切り不満な顔をしてみせる。

でも青年の方は、それを気に留めるでも無く、また気付いている様子すら無く、どこか自慢げに胸を張りながらこう言ってきた。

「オレの名前はジグラン・グラニード。この森のどこかにあるはずの古代遺跡を探してる、ちょっとは名の知れたトレジャーハンターだ」

誰のせいかという話をするならば、今回ばかりは間違いなく俺のせいだろう。

いくら『魔術師』に襲撃されて焦っていたとはいえ、長い間リネの事を忘れていたのは事実だし、彼女を一人置き去りにしてしまったのは他でも無い俺自身だ。それは弁明のしようも無い。

とにかく今は、リネを探し出す事に意識を傾けるべきだ。一緒に旅をすると決めた以上、そう簡単に見放す訳にはいかねえしな。

……とは言うものの、一体どうやって探せばいいものか。しつこいようだが、この森の面積は途轍も無く広い。手掛かりも無いまま無闇矢鱈に探しては、こっちの体力まで無くなってしまう。

「それにしてもお互い災難だね。こんな森の中で連れと逸れるなんてさ」

思索していた俺は、僅かに苦笑しているその声で我に返った。

俺が視線を向けると、レイミーは持っていた鉄製の薙刀の長い柄の部分で、等間隔に三つに折り畳んでから、腰の辺りにあるホルダーに仕舞う。どうやら彼女が持つ薙刀は、可変式に設計された特別な作りの物らしい。

「俺の場合、災難って言うか自業自得って感じだけだな」

さっきの顛末からこっちの事情を察したらしいレイミーに、俺は自虐的な言葉を返す。トレジャーハンターだと名乗る彼女の方も、その口振りから推測する限り、どうやら同行者と逸れてしまったようだ。

が、レイミーはこれからの方針を模索している俺と違って、今のこの事態をさほど深刻に捉えていないらしい。どこか余裕を感じさせる彼女の表情が、それを大いに物語っている。

「まあそう悲観的になりなさんなって。確かこの辺りには、人が住んでる集落があつたはずだからね。あんたの連れも運が良ければ、そこに辿り着いてるかも知れないよ？」

「集落？」

妙に自身ありげなレイミーの発言に、俺は内心で首を傾げた。こ

の森に入る前、『ファレスタウン』で購入した周辺地図には、集落があるなんて記載されてなかったはずだけど……。

「あんだこの森の地理に詳しいのか？」

「ああ。この森には何度も足を運んでるからね。まあさすがに細かい位置までは把握出来てないけど、何が有って何が無いのかぐらいはわかるよ」

疑っている訳じゃなかったが、思わず尋ねてしまった俺に対し、しかしレイミーは気にした様子も無くそう答えた。

……そういえば、レイミーはシャルミナと対峙していた時、互いの事をよく知っているみたいなお口振りだった。って事はつまり、彼女はこの森やシャルミナ・ファルメと言う少女の事について、詳しく語れる人間なのかも知れない。

そんな風に思っ、俺はすぐさまレイミーに提案を持ち掛ける。

「なあ、レイミー。ちょっと聞きたい事があるんだけど……」

「いいよ。こつちもあんだに聞きたい事があるからね。とりあえず歩きながら話そうか」

そう言っであっさりと承諾してくれたレイミーは、森の奥に向かって足取り軽やかに歩き出す。

何か同じ女だけど、リネとはまた随分と性格が違うな。年齢に差がある（多分彼女は二十歳を越えていると思う）からなのかも知れないけど、レイミーは頼れる姉御肌って感じた。

そんな事を思っ、唸っていると、レイミーは俺を置いてズンズン先に進んでいく。俺は少々慌てて後を追、彼女の右隣に歩み寄る。「じゃ、まずあんだから質問させてあげるよ。何が知りたいんだい？」

俺が傍らに追い付くと、レイミーは前を向いたまま躊躇う様子も見せずにそう言っ。

俺はしばらく考えて聞きたい事を頭の中で纏め、もう一度口を開いた。

「あんださっき、シャルミナと顔見知りみたいな会話してたけど、

あいつとは前にも会った事があるのか？」

「シャルミナ……？　シャルミナって、もしかしてさっきの女の名前？」

「他に誰が　、ってあなた、あいつの名前知らなかったのかよ？　てつきり知ってるものだとばかり思っていた俺は、意外な答えが返ってきた事で出端を挫かれた気分になった。

思わず呆れ顔を作ってしまう俺を見て、レイミーはどこか申し訳無さそうに苦笑する。

「あなたと違って自己紹介なんてした事無いからねえ。そう言われると、確かに今までも名前を聞く機会はあつた気がするなあ」

随分呑気な発言だな、おい。こんな奴に話を聞いたりしてホントに大丈夫なのか……？

内心でもう一度呆れてみる俺を尻目に、短い草の生えた地面を踏み締め続けるレイミーは、どこか楽しげな口調で語り出す。

「で、何だっけ？　ああ、思い出した。一応あの女……、シャルミナだっけ？　とは顔見知りだね。会った回数は多分、もう十回を超えてるかなあ？　あの女には個人的な理由で、ちょっとした用があるんだよ」

「個人的な理由？」

含みを持たせたような言い方に俺が首を傾げると、レイミーは悪戯っぽくニヤリと笑ってみせる。

「あなたは知ってるかい？　この森林地帯に古くから伝わる、『魔女伝説』の事を」

「まあ、話ぐらいなら聞いた事はあるけど」

「そうかい、なら結論を言おう。あの女はね、その『魔女伝説』に出て来る、『風守り』の一族の生き残りなんだよ」

「！」

心底面白そうな表情のレイミーの言葉で、俺は漸く確信を得る事が出来た。

これはシャルミナと会話していた時にも考え付いた結論だった。

もしかしたら彼女の正体は、『風守り』の一族なんじゃないか、と。一人納得している俺の横で、レイミーは続ける。

「アタシらトレジャーハンターにとって、伝説っていうのは中身のわからない箱と同じでね。そこに入ってるものが何なのかを調べ、確かめる事に生き甲斐を見出していくものなのさ。もちろん、中身が空だったって結末もあつたりはするが、それでも何かを見つけた時の感動は計り知れないものがある。今回もそれと同じさ」

一度言葉を切ると、レイミーは青藤色の瞳を天真爛漫な子供のように輝かせながら、辺りの景色に忙しなく視線を投げる。

「この森林地帯のどこかにあると言われてる古代の遺跡。『魔術戦争』時代に造られたとされる、歴史的な宝。それをずっと守り続けてきた存在が、他でも無いあの『風守り』の一族の生き残りなんだ。だからアタシはあいつから、その遺跡の正確な位置を聞き出す為に、ずっと行方を追い続けてるって訳さ。……まあ運良く遭遇しても、毎度毎度捕まえる前に逃げられちゃうけどね」

と、若干悔しさを滲ませながら締め括ったレイミーは、ポカンとしている俺を見て僅かに苦笑した。

それにしても、彼女が目的としている内容は、トレジャーハンターと聞いて俺が勝手に想像していた下劣な内容と、少し違っているように思う。

少なくとも、どこか楽しそうに語るレイミーの表情からは、遺跡を見つけて歴史的価値のある物品を盗み出そう、というような邪な考えは微塵も感じられない。ただ純粹に、発見する事に意義があると、そう言っているように見える。

俺は内心で先入観に囚われていた自分の考えを改めつつ、しかしふと、気になる事を思い付いた。

「あれ？ 捕まえようとしたって事は、あんたってひょっとして、シャルミンと戦った経験があるんじゃないか？」

「そりゃ当然あるに決まってるだろ？ あの女は頑として口を割ろうとしないんだから。それがどうかしたの？」

「あ、いや、『魔術師』相手によく今まで無事でいられたな、と思つてさ」

俺と違って、レイミーは何の能力も持ってないただの人間のはずだ。

それこそ、俺の友達である銀髪の少年ぐらい強ければ話は別だが、レイミーはただの（という表現が正しいのかわからないが）トレジャーハンターだ。こう言うと反感を買いそうだが、とても『魔術師』と互角に戦えるとは思えないんだよな……。

俺がそんな風に思っていると、レイミーは少々、豊かな膨らみのある胸を自慢げに張りながら言う。

「アタシだって伊達に修羅場は潜って来てないからね。それなりの実戦経験は積んでるつもりだよ。それにあの女、確かに殺気は凄いが、本気でこっちを殺そうとはしてないみたいだし」

付け足すように言ったレイミーの最後の方の言葉が、俺の耳に強く引つ掛かった。

殺そうとしてない、だって？

「えっ……？ ちょっと待てよ。それっておかしくないか？ だって近くの街で聞いた話だと、この森に入った旅人が何人も殺されてるって言われてたぜ？ その『魔女伝説』の『魔女』に」

俺が真顔で異議を申し立てると、レイミーは有り得ないと断言するかのように、俺の言葉を笑い飛ばす。

「殺す？ まっさかあ！ あの女は遺跡に人を近付けないのが目的であつて、殺すのが目的じゃないはずだよ。多分、遺跡に近付こうとするアタシみたいな人間を、殺気を放つ事で威嚇してるだけなんじゃない？」

「……？」

どういう事だ？ 『ファレスタウン』で聞いた話だと、旅人を食ひ殺したと言われていたのは、牡丹色の髪の女だったはずだ。そして俺が遭遇したシャルミナは、確かに牡丹色の髪だった。

……いやちよつと待て。街で伝説を聞いた時も思つた事だが、そ

もそもシャルミナは『魔術師』だろ？ 『魔術』で人を殺すならまだわかるが、『食い殺す』ってのはどういう事だ？ それじゃあまるで獣みたいじゃないか。

何か話が噛み合っていない気がする。それとも伝説だか噂だかがゴツチャになつて、余計な尾鰭おひれが付いてるだけなのか？

考え込む俺を他所に、レイミーは軽快に歩きながら明るい声を掛けてくる。

「じゃあ今度はこっちの番だ。ディーンともう一人のお連れさんは、何で旅をしてるんだい？」

正直、考えがまとまっていけない時に話し掛けてほしくはないんだけどな……。

若干不服に思いながらも、俺は思考を中断し、聞かれた事に答える。

「一年ぐらい前に行方不明になった、俺の師匠を探してるんだ。最近手に入れた情報だと、その師匠が『紺碧の泉』アジュール・ファウンテンに向かったらしくてな。で、後を追う為にこの森に入ったって訳」

「へえ〜、『紺碧の泉』アジュール・ファウンテンにねえ。あそこは綺麗な街だよ。紺碧色こんぺきいろの湖の上に立ち並ぶ街並みが何とも言えない気分させてくれる」

まるで見て来たかのような口振りに、俺は少し驚きを覚える。

「行った事あるのか？」

「まあ、一部では人気の観光名所だからね。逆にディーンは行った事無いのかい？」

「あ、ああ。大陸の北側の方は回った事が無いんだ」

人気の観光名所ねえ……。『テルノアリス』で情報を手に入れた時にも思ったけど、今のレイミーの説明で余計わからなくなった事がある。

もそもミレーナは、そんな観光名所になるような場所に、一体何をしに行ったんだらう？

まさか俺を置いていったのって、ただ一人で観光がしたかったから、みたいな理由じゃねえだらうな……。

「そりゃ勿体無い。じゃあその師匠を探す為にも、是が非でも『紺碧の泉』に辿り着かなくちゃね」

俺の心の葛藤を知るはずの無いレイミーは、楽しげに笑いながらそんな言葉を掛けてくる。

俺は適当に「ああ、まあな」と相槌を打っておいた。まあ、その辺の理由は、本人を探し出して直接聞けばいい。俺の旅はその為のものでもあるんだから。

などと考えていた俺に、レイミーは無邪気な顔でこう問い掛けてきた。

「それはそうと、その師匠さんて、ディーンに何を教えてくれた人なんだい？」

「えっ？ え〜っと……。なんて言うかまあ、色々」

結構深く掘り下げてくるな、こいつ。色々って言ってるんだからそれでもいいじゃねえかよ。

出来ればこの話を膨らませたくない俺ではあったが、こっちを見つめるレイミーの眼力に圧され、根負けして一言呟いた。

「『魔術』、とかかな」

ミレーナに教わった事は他にも挙げればいくつがあるが、最たるものはやはりこれに尽きるだろう。

と、俺がその言葉を口にした途端、今まで軽快に歩き続けていたレイミーが、ピタリとその場で立ち止まった。

あまりにも突然だったので、俺は彼女を少し追い抜かしてしまう。「ど、どうした？」

「……って事はディーンって、『魔術師』なの？」

「ああ、一応。炎系統の『魔術』を使える」

例によって、俺は自分の素性をあまり人に大っぴらに伝えない。なぜなら俺の師匠ミレーナ・イアルフスは、名前を知らない者はほとんどいないと言われるかなりの有名人だからだ。

そんな彼女からその姓と、『深紅魔法』と言う『魔術』を受け継



いだ俺としては、素性を明かした時に騒がれるのが凄く苦手だ。シヤルミナにはうっかり話してしまったが、俺はこういう風にして詳しく伝えない事が多い。

まあミレーナを尊敬してるって言うのは確かなんだけど、こればかりは許容出来そうにないんだよね……。

「やったあつ！　なんて巡り合わせなんだろ！　こんな所で『魔術師』に出会えるなんて！」

あれこれ考えていた俺を差し置いて、レイミーはその場で嬉しそうにピョンピョン跳び跳ねている。

さあ！　こういう展開になったらもう嫌な予感しかしないぞ！

「あのさ、デイン！　あんたに頼みたい事があるんだ！」

「……『風守り』の一族を捕まえるのを手伝ってくれ、って言いたいのか？」

「さつすがあつ！　よくわかってんじゃん！」

出来ればわかりたくなかったけどな。何で良い予感って当たらねえのに、悪い予感は当たるんだろう？

レイミーに背中をバンバン叩かれながら、俺は深く溜め息をついた。

多分断ろうとしても結果は同じだ。俺がうんと言つまで、レイミーは俺に纏わり付いてくるだろう。初めて会った時の、今ここにはいないあの迷子さんみたいに、な。

「わかったよ。協力」

する、と渋々言い掛けた俺は、思わず言葉を詰まらせた。

台詞を噛んだ訳じゃない。爽やかな風が軽く吹き抜けた時、妙な臭いが俺の鼻先を掠めたからだ。

会話が途切れる事を悪いと思いながらも、俺はすぐ傍にいるレイミーに問い掛ける。

「なあ、レイミー。何か今、変な臭いがしなかったか？」

俺が尋ねると、意外にもレイミーもその臭いに気付いていたようだ。黙ったままコクンと頷き、進行方向右側の方を指差した。

「風は向こうから吹いてる。多分臭いの元は向こうにあるはずだよ」  
「……………」

俺は黙ったまま、レイミーが指差した方向に向かって歩き出した。レイミーも俺の後に続いて、黙ったまま歩き始める。

五メートル程進んだ。臭いはさつきより強くなっている。

十メートル程進んだ。臭いはさつきより酷くなっている。

十五メートル程進んだ。辺りを何匹もの蠅はえが跳び回っている。臭いはキツイなんてものじゃなかった。手で鼻を覆っても誤魔化せるような臭いじゃない。

と、ほんの数メートル程前方の草木が、なぜか黒く変色していた。不思議に、そして不気味に思い、ゆっくりとそこに歩み寄って、黒く変色しているものの正体を確認してみる。

十秒程の時間を掛けてそれを観察した俺は、恐らく当たりと思われる答えを、誰に伝える訳でも無いのに口に出した。

「血…………、だよな」

黒く変色して草木を覆っているものの正体は、辺りに飛び散った後、乾いて黒く変色して固まった、夥おびただしい量の血だった。

まさか、と思う。少し離れた位置にいるレイミーは、俺とは違う方向に視線を向けて、石像のように固まっている。その表情は暗く険しく、とてつもなく気分が悪そうだった。

俺は彼女の視線を追うかのように、同じ方向を見つめた事で、漸く原因となっている物を探し当てた。

悪臭となっている物の、根源を。

「何だよ…………、これ……………」

良い予感は当たらない。

悪い予感は当たってしまう。

視線の先にあったのは、黒く変色して固まった大量の血の海に沈む、腐敗した人間らしきものの肉片だった。

第二章 The encounter was a bad thing (後書)

書いていたら、何となく今後の展開みたいなものが見えてきた気が  
しました。

まゝた長くなりそうだなあ……。

### 第三章 森の中の集落

「はあ〜ん、なるほどね。それでその連れと逸れちまったって訳か」  
少し前を歩く胡桃色くるみいろの髪の青年ジグランは、あたしがここに来た経緯を話すと漸く納得したような声を上げた。

どうもあたしは、彼の『同業者』として怪しまれていたらしい。  
あたしが自分の事を話す前に、ジグランは彼自身の事を（聞いてもないのに）色々教えてくれた。

彼はトレジャーハンターという仕事（になるのかな？）をしていて、歴史的価値のある古代遺跡なんかを探す上で、ライバルとなる『同業者』が何人もいる、という話だった。だからあたしの事を、その競争相手の人たちと勘違いして、さっきのような荒々しい態度を取っていたみたい。

あたしとしては、誤解が解けて良かったって素直に言いたい所なんだけど……。彼はあたしが事情を説明している間、一つ話し終える度に「それは本当か？」とか、「嘘ついてんじゃねえだろうな？」とか言つて、何度も会話を中断させた。

彼が納得という結論に辿り着くまでに、一体どれぐらい時間が掛かったんだろ？ ……まあ、知りたいとも思わないんだけどね。

それに彼には、あたしと同じように逸れてしまった仲間がいるらしい。そしてその人と一緒に、あたしが『ファレスタウン』で聞いた『魔女伝説』に関わる事を調べているそうだ。

何だか途方も無い事を調べてるんだなあ、なんて思っていると、ジグランはやけに自信たっぷりぷりに口を開く。

「こんな森で一人つきりになって心細かっただろ？ だけでもう心配いらねえぞ。この森に詳しいオレがいりゃあ、てめえの連れもきつとすぐに見つけられるからよ」

「……自分だって仲間と逸れてるくせに」

「あん？ 何か言ったか？」

「ううん、何も言ってますん」

ほとんど消えそうな声で言ったつもりだったのに、ジグランは物凄く速さであたしの方を振り向いた。とんでもない地獄耳だなあ、この人。

彼の態度には色々不満が残るけど、あたしはとりあえず彼の後に付いていく事にした。今は他に頼る術がないし、何より黙って彼に付いていった方が賢い選択のような気がする。

森の奥へと進みつつ、あたしは何気無く口を開く。

「ジグラン……さんは、さっき言ってた『風守り』の一族に会った事があるんですか？」

敬語を使うかわからないかを判断しかねながら問い掛けると、ジグランはもう一度こちらを振り返り、意外にも快活な笑顔をあたしに見せた。

「敬語を使う必要はねえよ。そんなしゃべり方されると逆に肩がこつちまう」

「はあ……」

「そんで何だ？ 『風守り』の一族に会った事あるかって？ そりゃあるとも。あの女はこの森に入る度に何度も遭遇してる。毎回すぐに逃げられてはいるけどな」

「……そういえば『風守り』の一族って、女性だけが『魔術師』になる役目を担ってるんだっけ？」

早速敬語を外して話すあたしに対し、ジグランは気にするどころか、逆に嬉しそうな顔で話し掛けてくる。

「おうよ。どうも今残ってる『風守り』の一族は、あの女一人らしくてな。オレともう一人の連れはあの女をとっ捕まえて、遺跡がある正確な位置を聞き出そうとしてるって訳だ」

「一人って……。じゃあその女の人は、一族の唯一の生き残りって事？」

「さあな。だがここに何度も足を運んでるオレたちでさえ、あの女

以外の一族の人間を見た事がねえんだ。たった一人だったとしても  
おかしくはねえだろ」

「……」  
こんな広い森の中に、ずっと一人で住んでいる。それは一体どんな気分なんだろう？

一族のたった一人の生き残り。その境遇があたしには嫌という程理解出来る。だってあたしも、『妖魔』と言う一族のたった一人の生き残りだから。

あたしが一人になったのは、『倒王戦争』で前テルノアリス王に一族を抹殺されたからだ。

だけど彼女は、どうして一人になったんだろう？ あたしと同じように、何か明確な理由があるのかな？

……そっか。じゃあもしかしたら、さっきあたしとディーンを襲撃したのは、その『風守り』の一族の少女だったのかも知れないんだ。って事はディーンは、今その女の子と、この森のどこかで戦ってるんだよね。

ディーン、大丈夫かなあ？ いきなり攻撃された事を不満に思ってたみたいだったし、問答無用でやり返してる、なんて事になっくなきゃいいんだけど。

それにあたしには、その子に対して個人的な興味がある。別に同情しようとしてる訳じゃない。ただ同じ境遇の身として、単純に話してみたいと思った。彼女の事を知りたいと思った。

「……話してみたいな」  
心の中で思っていたはずなのに、あたしはいつの間にか、それを声に出していた。

するとまたもやジグランが、その強力な地獄耳っぷりを発揮して、あたしの方に視線を向ける。

「話したい？ 話したいって一体誰とだ？」

「え？ ううん、何でもないよ」

「……お前まさか、まだ何か俺に隠してる事があるんじゃないやねえだろ

うな？」

「な、何も無いよ！ それに今更隠し事をする意味なんて、あなたにもあたしにも無いでしょ？」

「……ま、別に構わねえけどな。とにかく今は集落を探さねえといけねえ。もしかしたらお前の連れも、先にそこへ辿り着いて休んでるかも知れねえしな」

どこかまだ納得してないような感じで、ジグランはプイツとそっぽを向いた。その態度が不貞腐れてる子供みたいで、あたしは何だか可笑しくなってしまった。

彼にバレないように注意しながら、声を殺してクスツと笑う。

何だか、思ってたよりも意外と親しみやすい人なのかなあなんて、そんな事を感じた。

眼の前の悲惨な光景に、思わず身が竦み、その場に硬直してしまっ  
いそうだった。

恐怖や不安、気持ち悪さと言った色々な感情が渦巻く中、それでも俺は一番最初にこう思った。

リネがいなくてよかった、と。

あいつは過去に、あるトラウマを抱えている。その影響からあいつは、人間の血や、人の死というものに対して、過剰な反応を見せる事がある。

俺でさえ立ち眩みを覚える凄惨な現場なのに、あいつがいたらどうなってしまうていたかわからない。

そんな事を考えながら、俺は眼の前の惨状に改めて意識を集中さ

せる。

眼の前にいくつも転がっている、腐った死体の肉片。俺は、すぐにもこの場を立ち去りたいという思いと格闘しながら、腐敗した肉片の一部の傍に歩み寄り、屈んでそれを注視した。

グチャグチャになった肉の断面には、小さく蠢蠢き回る虫が数多く集り、元の形を失い掛けている為、これが人の物かどうかですらすぐには判別出来ない。

鼻が曲がりそうな異臭のせいか、胃がキリキリと締め付けられ、同時に吐き気も襲ってくる。

「……検死と出来るの？」

俺と同じく酷く気分が悪そうな顔をして、レイミーは俺に尋ねてくる。

「ある程度知識は持つてるけど、ここまで酷い状態のヤツを見るのは初めてだ」

どれぐらい前の事だったか定かじやないが、俺はミレーナとの修行の最中、たまたま立ち寄ったとある遺跡で、『ゴーレム』に襲われて死んだらしい、無残にも潰された人間の遺体を見つけた事があった。もちろんその時は、今と違って思いつ切り吐き気に負けてしまったが、そういう経緯から、俺はミレーナに検死のやり方を少しだけ学んでいる。

俺は言葉を返しながら、辺りに散らばる肉片を一つ一つ観察していく。何度も気が狂いそうになったが、何とか必要な情報は手に入る事が出来た。

俺はどうにか立ち上がって、気分が悪そうなレイミーと共に、一旦その場を離れる。

「腐敗が進んでるせいで確実な事は言えねえけど、恐らく死後一カ月ぐらい経過してる。それにあの血の量。襲われたのは一人じゃない。多分数人いるはずだ」

「数人って……。まさか、この森で行方不明になった人？」

「そこまではわからねえ。服の切れ端みたいなのはほとんど無かつ



たし、当然身元がわかるような物も落ちてなかったよ。肉片の方はこれでもかかってぐらい多かったけどな」

俺がそう言うと、レイミーは殊更嫌そうな顔になった。多分あの惨状を思い出して、また気分が悪くなっただろう。

そんな表情のまま、レイミーはある推論を口にする。

「……まさかあれをやったのって、シャルミナとか言うあの『風守リ』の女じゃないでしょうね？ あいつが使う『風』の『魔術』なら、人間を細切れにするのなんて簡単なんじゃない？」

「確かに俺も、一瞬レイミーと同じ事を考えたさ。だけど、何か妙な感じがするんだ」

「妙な感じ？」

否定する俺を不満げに見つめるレイミーに、俺は自分の感じた意見を述べる。

「あいつが使ってた『風』の『魔術』にしては、切断面が汚過ぎる。あの死体は『斬り裂かれた』って言うより、獣の牙とか爪みたいな物で、無理矢理『引き千切られた』って感じなんだ」

「じゃあ何？ あの死体は、全部獣の仕業だって言うの？ だけど腐敗が進んでたんだろ？ ならそのせいで、切断面が腐って変形したとも考えられるじゃないか。大体『風守リ』の一族が旅人を殺したって言う話を出したのは、他でもないディーン自身じゃんよ」

「それは……」

確かにそうだ。俺自身その話の方を信じていたから、『シャルミナは相手を殺す気がない』というレイミーの見解に疑問を持ったんだ。

だけど何か腑に落ちない。すでに何度も思った事だが、仮に犯人がシャルミナだった場合、『魔術師』である彼女が『魔術』を使わず、あんな獣みたいなやり方で人を殺すとは考え難い。

だがそれなら、この森の中で、他にだれがあんな悲惨かつ凄惨な事をし得ると言うのか。

何か、パズルのピースが一つ欠けているような気がした。

「とにかく今は、レイミーの言ったこの森にある集落に行こう。そこに行けばある程度人が住んでるだろうし、その人たちに頼んで、遺体の埋葬を手伝ってもらおうぜ」

「それはいいけど、でもどうする？ あの集落には『ギルド』も軍の詰所も無いよ？ 事件にしる事故にしる、あの集落には報告出来る役所なんて存在しないんだ」

「それは仕方ねえさ。いくら役所が無いからって、あの死体をあのままにしとく訳にもいかないだろ？」

「……まあ、そうだね」

レイミーは躊躇いがちに言って、俺たちがさっきまでいた方向を見つめた。

すると彼女は、視界の端に何かを見つけたのか、前方を指差して言う。

「どつやら運が回ってきたみたいだ。このまま真っ直ぐ行けば、すぐ集落に着けそうだよ」

俺はレイミーが指差す方向を訝しく見つめる。

するとその方向の遠方に、民家の煙突から漏れている感じの柔らかい白煙が、ゆっくりと上がっているのが見えた。

しばらく歩くと、今まで鬱葱と生い茂っていた草木の風景が徐々に拓けていき、木造の民家が立ち並ぶ小さな村が姿を現した。

あまり人が住んでいないのか、昼間だと言うのに人気はほとんどない。やはりこんな森の中だと、活気が出なくなるのも当然なんだろうか？

「何かあんまり賑やかかって感じの村じゃないな。ずっと前からこんな感じなのか？」

村に入っつてすぐの場所で、俺は隣のレイミーに尋ねた。彼女は軽く首を捻り、顎に手を添えて思い出そうとするかのような仕草を見せる。

「うーん、まあ前からさほど賑やかかって感じの村ではなかったかなあ。でも……」

「でも？」

「何か変な感じなのよ。前に来た時はもう少し、人気も活気もあつたような気がしてね……。気のせいかな？」

腑に落ちないと言いたげな顔をしながらも、レイミーは村のとある民家に向けて歩き始めた。

とりあえず村長に挨拶に行こうと言うレイミーの提案で、俺は大人数しくそれに付き合う事にした。道すがら、レイミーの隣を歩く俺は、もう一度村の中を観察してみる。

民家はさほど多くない。村の中心を横切る道の両側に、五、六軒ずつ建てられたそれは、どれも木造二階建て。村全体の面積も、森に囲まれているせいかなり広くない。民家の中に人の気配は感じるが、外に出ている人間は少ないようだ。

歩いている最中、二、三人の村人と擦れ違つたが、余所者の俺たちを見ても特に驚きもせず、また挨拶を交わす事も無く通り過ぎていった。

以前レイミーがここを訪れた時の状態を俺が知る術は無いが、やはり活気があるとは言えない感じだ。暗い、と言つた方が正しいかも知れない。

「着いたよ。ここが村長の家だ」

そう言いつつ立ち止まつたレイミーは、一件の民家を軽く見上げた。俺も彼女の動作に倣い、なら眼の前の建物を見上げてみる。

他の民家と同じ木造二階建ての造りだが、やはり村長の家と言うだけあって、周りの物と比べると若干だが大きいようだ。家のすぐ

横にある小さな庭園は手入れが行き届いていて、鮮やかな色合いの花が多く植えられている。

それらを眺めている俺を尻目に、レイミーは古めかしい造りの玄関の前に立つと、数回ドアをノックした。コンコンと言う、木製の物を叩いた時の音が響く。

「すみません。以前にも伺ったレイミー・リゼルブと言う者ですが、村長さん、いらっしゃいますか？」

丁寧な口調でレイミーが声を掛けると、微かに屋内から人の足音のようなものが聴こえてきた。すると、少し遅れて玄関の鍵が外れる音がして、外開きのドアが静かに開く。

そうして姿を現したのは、五十代半ばと見える小豆色あずきいろの髪を生やした男性だった。やや白髪が混じった髪は綺麗に整えられていて、常に清潔感を保っている様子が窺える。

「お久しぶりです、村長さん。お元気でしたか？」

「おお、これはこれは。こちらこそお久しぶりです、レイミーさん。ええ、まあ何とか元気にやってますよ。そちらもお変わりないようで。おや？ 今日はお連れの方が違うんですね」

レイミーと話していた村長は、彼女の少し後ろに立っていた俺に気付いて不思議そうな顔をした。

初対面という緊張感から、気の利いた台詞を紡げずあたふたしている俺の代わりに、レイミーは苦笑しながら答えを返す。

「まあ、色々と事情がありました……。そうだ、紹介しておきますね。彼の名前はディーン。行方不明になったお師匠さんを探して、旅をしているそうなんです」

「初めまして、ディーンです。よろしく」

にこやかな笑顔のレイミーに軽く肩を叩かれ、俺は一礼しつつ定番と言える台詞で挨拶した。

すると村長の方も、これまた定番と言えそうな畏まった様子で、その顔に優しい微笑みを湛えつつ一礼する。

「これはこれは、どうも初めまして。私はこの村の村長をしております

ます、ダンテと言つ者です。さあさあ、こんな所で立ち話も何ですから、どうぞお入りください。温かい紅茶でもお入れしますよ」

そう言つて手招きするダンテに促され、軽く会釈するレイミーの後に続いて、俺は家の中に足を踏み入れた。

招き入れられたのは、玄関からすぐの所にある応接室のような部屋だった。入口に仕切りとなる扉は無く、部屋の中央には木製の丸テーブルを囲むようにして一人用のソファーが四つ置かれていて、足下の床には、高価な絵画を思わせる細かい刺繍の入った絨毯が敷かれていた。

窓から差し込む柔らかな陽の光を浴びながら、俺はソファーの一つに腰を下ろした。ふと視線を巡らせると、部屋の壁に飾られている銀色の額縁が眼に留まった。中に収められているのは、どうやらどこかの雪山を写した風景写真らしい。

と、それに見蕩れていた俺の耳に、横合いから優しげな声が届く。「その写真は私の友人が撮影した物ですね。確かこの大陸の北にあるどこかの山だったんですが、どこだったか忘れてしまったんですよ。全く、歳は取りたくないものですね」

ティーセット一式を持って現れたダンテは苦笑しながら、ソファに座る俺とレイミーの前に、湯気の立つ紅茶が入った白いカップを置いた。そして自身も空いている席に座り、ニコリとした微笑みを俺たちに向けてくる。

「ところで、今回はどういったご用件でしょう？」

「ああ、実はですね」

「

ダンテに尋ねられたレイミーは、ここに来るまでに起きた事の経緯を掻い摘んで説明し始めた。

彼女自身が同行者と逸れてしまった事。その途中で出会った俺も同じ状況である事。

そして、眼を覆いたくなるような凄惨な物を発見した事。

その間およそ五分程。俺は何度か紅茶を口に運びつつ、二人の会話を黙って聞いていた。

「そうですね。この近くでそんな事が……」

レイミーが事情を話し終わると、ダンテはそう言って顔を曇らせた。恐らく彼も、辛そうに顔を顰めるレイミーを見てどんな状況だったのかを察したのだろう。

尤もあんな凄惨な現場、直に見た者じゃないとそのおぞましさを理解する事なんて出来ないだろうけど。

「ええ。ですから彼と相談して、この村の方に埋葬を手伝ってもらおうと思えます。もちろん無理には言いません。アタシの眼から見ても、酷い有様でしたから……」

「……なるほど、事情はわかりました。そういう事でしたら、こちらとしても協力は惜しみません。私から村の若い者に説明して、手伝いに行かせるとしましょう。もちろん私も同行させてもらいますよ」

「ありがとうございます、村長さん」

レイミーはそう言って、申し訳なさそうに深く頭を下げた。

少々呆けていた俺は、彼女から数秒遅れる形で、慌てて頭を下げる。何だか大人の対応が出来ていない自分を、我ながら情けなく思ってしまう。

内心で己の不甲斐無さに肩を落としていると、不意にダンテがこんな提案を持ち掛けてきた。

「ところでお二人とも。お連れの方を探しに行かれるのであれば、今日はこの村でお休みになられてはどうでしょうか？ この村に宿はありませんが、幸い使われていない小屋ならいくつかありますので」

「そんな、気を遣わないでください。前にも来たって言うレイミーはともかく、余所者の俺なんかがいたら、集落の人たちに迷惑が掛かると思うんで……」

「心配には及びません。困っている旅人を無下に追い出そうなどと誰がそのような真似出来ましようか。それにこんな森の中で野宿などしようものなら、それこそ獣の餌食になりかねない。気遣う必要が無いのはお互い様ですよ。もしかしたらお連れの方々も、その内ここを見つけて訪れるかも知れませんからね」

遠回しに断ろうとしている俺を、ダンテは矢継ぎ早に捲し立てる事で封殺しようとしているらしい。親切心は素直に有り難いと思うけど、ここまで頑なに勧められると正直やり辛いんだよなあ……。

ニコリと微笑んでいるダンテには、どうやら引き下がるつもりが無いようだ。隣にいるレイミーはと言えば、最初から泊めてもらうつもりだったのか、何も言わずに俺の顔を見つめている。

「あ……、じゃあ、お言葉に甘えて泊まらせてもらいます」

結局、先に折れたのは俺の方だった。さっきから本当に、自分の対応が情けない感じがする。もっとミレーナに、戦闘技術以外の事も教わっておけばよかったかも知れないな。

なんて、そんな事を思った時だった。

「すみませ〜ん。村長さんいらっしやいますか〜？」

妙に間延びした若い男の声が、さっき潜ったばかりの玄関の方から聴こえてきた。

するとその途端。今まさに紅茶の入ったカップを口に運ぼうとしていたレイミーの動きが、まるで石像にでもなってしまったかのようになりピタリと止まる。

「あれ？ この声……」

「ん？ どうしたんだ？」

俺が問い掛けには答えず、レイミーはテーブルにカップを戻すと無言でサツと立ち上がった。そして対応の為玄関に向かおうとしていたダンテを強引に追い抜かすと、まるで自分がこの家の家主だと

言わんばかりに、素早い動作で玄関のドアを開けた。

「あ、村長さ」

「どこ行つてたのよあなたはー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

問答無用。即断即決。

玄関先に立っていた胡桃色の髪くるみいろの男が言葉を紡ぎ切る前に、レイミーが放った華麗な上段蹴りが、吸い込まれるかのように男の顔面に炸裂した。

「ほぶツ！ー！」

一体何事かと玄関の方に駆け付けた俺とダンテを尻目に、妙な奇声を発して後ろに倒れ込んだ男を見下ろして、レイミーは鬼のような形相で怒鳴る。

「毎度毎度何であんたは気付くといなくなつてんのよ！？ あんたはあれか！？ 自分から迷子になろうとしてる大バカ野郎なのか！？」

「ふえ……、ふえいみー……！」

多分レイミーと言いたかつたのであろう、髪にやや癖のある男は、上半身を起こして鼻の辺りを押さえている。

一方の俺とダンテは、眼の前で突然起きた傷害事件にただ呆然とするしかない。もしかしてこの男が、レイミーが逸れたと言っていた連れなんだろうか？

と、内心で首を傾げていた時だった。

「あーっ！ デー！ーん！」

「！」

聞き覚えのある声がして玄関の端の方に眼をやると、俺が逸れてしまったはずの黒髪の少女が、当たり前のようにそこに立っていた。かなり驚いた様子でこっちを見ているリネは、しかし眼の前で起きている傷害事件を全く気にも留めていないらしい。

「よかつたあ〜！ こんなに早く合流出来るとは思つてなかつたよ〜！ ……で、何でここにいるの？」

「……さあ、何でだろうな」



って言うか凄いなお前。この一連の出来事は完璧無視かよ？  
妙な形での合流ではあったが、俺はリネが無事だった事を素直に  
喜んでいた。

もちろんそんな事、顔にも言葉にも一切出さなかったが。

リネと共に現れた胡桃色くるみいろの髪の青年は、ジグラン・グラニードと  
言う名前のトレジャーハンターで、古くからの付き合いであるレイ  
ミーと一緒に、伝説級の代物を探して大陸の各地を忙しく回って  
いるそうだ。しかも今までに数多くの歴史的発見をしている事から、  
貴族様方に度々賞されていて、二人共その筋では結構名の知れた有  
名人らしい。

……のだが、俺もリネもそっち方面の知識はさっぱりだったので、  
自分たちの事を自慢げに話す二人に対して、微妙な反応を返す事し  
か出来なかった。

「でもホントよかったよねえ。こうやってすぐに合流出来たし、泊  
めてもらえる所も見つかつたし。偶然だったとはいえ、引き合せて  
くれたレイミーとジグランに感謝しなくちゃ」

「……お前はこの状況を見て何とも思わねえのかよ？」

「え？ 何が？」

「……」

すつとぼけた顔をして首を傾げるリネを見て、俺は盛大に溜め息  
をついた。どうやら本当に事の重大さが理解出来ていないらしい。

今俺たちは、ダンテに宛がわれた村の一角にある小屋の中にいる。  
木造一階建ての一部屋しかない小屋。玄関開けたらすぐリビング、

みたいな感じの間取りだ。

そんな場所に、年頃の男女二人が寝泊まりする羽目になったというこの状況。

こういう場合、普通女の方が異議を申し立てて騒ぎになるはずなんだが、どういう訳か眼の前の少女は、意に介した様子が全く無い。今も一つしかないベッドの上に座って、なぜか楽しそうに身体を揺らしている。

「……レイミーと小屋変わってもらおうかな」

「えっっ！ 何で？」

ボソツと呟いたつもりだったが、リネは不満そうな顔をして頬をプクツと膨らませる。ダメだ、やっぱこいつ全然わかってねえ……。

とりあえずリネの事は放っておこうと思い、俺は小屋の窓から見える、少し離れた位置にある別の小屋に視線を向けた。あの小屋に宛がわれたレイミーとジグランは、今この村の中にはいない。ある作業を行なう為、村を出払っている。

ある作業とはつまり、俺とレイミーが発見した死体の後片付け、だ。

本当は発見者の俺自身がその作業を手伝うつもりだったが、まだ俺とまともに会話していないはずのジグランがレイミーから経緯を聞き出し、「オレが代わりに行ってやる」と言っただけを申し出たのだ。

そしてレイミーとジグラン、ダンテとダンテが連れてきた村人数人のグループは、レイミーの案内であの死体のあった場所まで行く事になった。

隔して、何だかよくわからない内に除け者にされた俺は、こうしてリネと共に小屋の中にいるという訳だ。

「……ディーンが見つけたその死体って、一体どこの誰なんだろうね？」

ぼんやりと考え込んでいた俺は、少し沈んだリネの声で我に返っ

た。振り向くと、リネは不安そうな顔で床を見つめている。

「さあな。どこの誰にしる、あんな状態になってるなんてただ事じゃない。多分この森の『魔女伝説』とやらが、それに関わってる気がするんだけどな」

「……でも本当に、ディーンが見たっていう『風守り』の女の子が犯人なのかな？」

リネが口にした言葉からは、疑問というより、むしろ違っていてほしいという願いのようなものが感じられる。どうやら彼女は、俺とはまた違った観点から『風守り』の少女、シャルミナの事を気にしているようだ。

「どういう意味だ？」

「だって信じられないんだもん。いくら遺跡を守る為に人を遠ざけたかったからって、旅人を襲って殺すなんて……」

確かに、あの『風守り』の少女シャルミナと何度も顔を合わせているレイミーは言っていた。あの女は、殺気は凄いが本気で相手を殺そうとしていない、と。

考えてみれば俺がシャルミナと遭遇した時、彼女は一度たりとも俺自身に攻撃を仕掛ける事は無かった。その気になれば、手傷の一つでも負わせられたにも拘らず、だ。あの行為自体が威嚇だったとするならば、レイミーの見解にも説明がつく。

だがそれなら、集落へ来る途中で発見したあの死体は、一体何なのか？

『ファレスタウン』で聞いた噂と、俺が実際に会ったシャルミナ。一体どちらが本当の彼女なんだろう？

窓辺に背を預けて考え込んでいた俺は、不意に視界の端に気になる物を見つけた。

四角い間取りの室内。俺が立っている窓辺から、丁度対角線上の位置に置かれている背の低い木製の本棚。

そこに収められている十数冊の中の一冊。紅い背表紙に、金色の文字で書かれているある言葉が、俺の視線を釘付けにする。

「『ウエアウルフ』……？」

俺は窓辺から離れ、本棚に近寄ってその紅い本を取り出した。分厚い辞書のような本の表紙には、背表紙と同じ金色の文字で『we re wolf』と書かれている。

「『人狼』、って意味だよな？」

本には著者の名前らしきものが書かれていない。とりあえず俺は本を開き、目次を飛ばして一頁目を声に出して読んでみた。

「『人狼』とは、その名の通り狼に変身する能力を持った人間の事である。『魔術戦争』の時代からこの大陸に存在した人獣の一族であると言われているが、実際にその姿を見た者はいない。一説には、『魔術』によつて普通の人間が後天的に狼への変身能力を得たのが、『人狼』の起源であるとも言われている。　　って、何なんだこの本？」

俺は一旦文面から目を離した。『人狼』……なんてものがこの世界に、と言うかこの大陸に存在してるつてののか？　それこそこの森の『魔女伝説』ぐらいに胡散臭い話だ。

「デイン、何読んでるの？」

頁をペラペラと捲りながら俺が顔を顰めてみると、横合いからリネが本を覗き込んできた。黒真珠のような彼女の双眸が、記述されている文字の羅列を追っていく。

「そつえば……と、俺は改めてリネの顔を見た。

彼女もこの大陸に存在していた『ある一族』の生き残りで、『特殊な力』を持っている人間だ。そう言った意味では、もしかしたら彼女の方がこういう話に詳しいかも知れない。

俺は試しにと思って、とある頁の挿絵を興味深げに見つめているリネに問うてみた。

「なあ、リネ。『人狼』って言う名前に心当たりねえか？」

「『人狼』？　さあ……？　そんな名前、今初めて聞いたよ」

「そつか……」

やはり彼女でも知らないか、と肩を落としそうになった時だった。

不意にリネが、何かを思い出したような顔付きになる。

「……あ、でも待つて。確かアタシが住んでた『ブラウズナー溪谷』の周辺地域で、獣に変身する能力を持った一族がいたって噂なら聞いた事あったかも。狼かどうかまではわかんないけど」

「！ ホントか!？」

「う、うん……」

話に食い付いた俺を、リネは意外そうな顔で見つめる。

「でもあたしが聞いたのは単なる噂だから、本当かどうかなんてわかんないよ?」

「それでいいんだよ。狼だろうが何だろうが、要はそういう噂になるような一族がいたって事が重要なんだから」

「? どういう事?」

訝しげな顔をするリネを尻目に、俺はもう一度紅い本に視線を落とした。

もしかしたら、と俺は思う。

『ウエアウルフ人狼』。もし本当にこんな存在がいるとすれば……。

そして俺が森で見つけたあの死体。腐敗していたとはいえあの死体は、まるで獣に襲われたみたいに爪や牙で無理矢理引き裂かれた状態だった。これがもし、その『ウエアウルフ人狼』の仕業だったとしたら……。

俺の頭の中で、ずっと引つ掛かっていた疑問が解消されていく。

この広大な森を舞台とした、『魔女伝説』が絡む不可解な事件。その真実の一端が、俺には漸く掴めた気がする。

「多分間違いない。この森には『魔女』の他に、別の何か潜んでいるんだ!」

俺は素早く頁を捲り、紅い本から必要としている情報をいくつ引き出した。そして本を元の場所へと戻しつつ、すぐ隣で訝しげな表情をしているリネに声を掛ける。

「リネ」

「は、はい!」

呼び掛けたのが突然過ぎたからか、リネは驚いたように声を張り

上げ、かなり畏まった感じで返事をした。

「お前に頼みたい事があるんだ」

「え？」

俺の言葉を聞いた途端、リネは少々戸惑ったような表情になった。……ああ、そうか。よくよく思い返してみれば、俺の方から彼女に何かを頼むのは、これが初めての事だったかも知れない。だからこそリネは、驚いたように眼を丸くしているんだろう。

そんな彼女の反応を、僅かにだが微笑ましく思ってしまった俺は、無意識に笑みを溢してしまう。

と、その時。

突然、巨大な何かが崩れ落ちるかのような轟音が響き渡り、小屋の中にいる俺たちの耳にまで聴こえてきた。

「きゃっ……！ 何、今の音？」

身を竦ませて硬直するリネを尻目に、俺は音源を確かめる為、すぐさま小屋の外へと飛び出した。

辺りの風景に眼を凝らすと、村から東の方角にあたる森の一角から、高々と土煙が舞い上がっているのが見えた。

まさか、という嫌な予感が脳裏を過る。

「ねえ、デーン。あっちの方角って確か……」

いつの間にか俺の横合いに立っていたリネが、不安そうな面持ちで言葉を濁す。彼女が何を言いたいのかは簡単にわかった。俺も全く同じ事を考えていたからだ。

「ああ。間違いなくレイミーたちが向かった方角だ！」

叫ぶと同時に、俺は一目散に駆け出していた。

急がなきゃいけない。多分あそこには『彼女』がいる。

『風守り』の一族の少女、シャルミナ・ファルメが！

### 第三章 森の中の集落（後書き）

おかげさまで3000PV突破しました！

なんとなくアクセスした方も、（いたらだけど）読んで下さってる方もありがとうございます！

これからもどうにか続けて行こうと思うのでよろしくお願いします！

……にしても更新が少し遅れ始めてる。

が、頑張らねば！

## 第四章 風守りの一族

鬱葱とした木々や草花が生い茂る広大な森、『ゴルムダル大森林』

この森はその広大さから、地形全体を完全に把握出来ていない為、長い間人の目に触れずにいる場所も多くあるそうだ。

だからこそ、『風守り』の一族が守っているという数百年前に造られた遺跡も、未だに発見されていない。

しかしその一方で、遺跡自体が存在しないのではないかと言う説を唱える者もいる。何しろ明確な証拠や文献などが残されている訳じゃないんだ。伝説や夢物語に過ぎないと言われるのも無理はない。だが、俺とリネが知り合った一組の男女は、そんな伝説や夢物語を追い続ける、トレジャーハンターと呼ばれる者たちだった。

レイミー・リゼルブと、ジグラン・グラニード。

彼らは『ジラータル大陸』の様々な地域に残る伝説や噂を頼りに、これまで数多くの歴史的発見を行ってきたらしい。非現実的だと笑っていた者たちの鼻を明かした事も、幾度となくあったそうだ。そして恐らく、今回も彼らは新たな発見をする事になるだろう。

シャルミナ・ファルメ。

『風守り』の一族の生き残りとされる、彼女の存在自体が告げている。

この森に、古くから守り続けられた遺産が隠されているという事を。

「止める、シャルミナ！」

土煙が立ち昇る荒れ果てた風景の中に、牡丹色の髪の少女は悠然とした様子で立っていた。

轟音が響いてきた場所へ駆け付けた俺とリネの眼に映ったのは、ほとんど根元から斬り裂かれて倒れてしまった大木の数々と、土煙の中に蹲る数人の人影だった。レイミー、ジグラン、そしてダンテ



と数人の村人だ。

ダンテや村人たちに怪我は無いようだが、レイミーとジグランは別だった。恐らくダンテたちを庇ったのだろう。程度は軽いが腕や脚、額にも切り傷による出血が見られる。

「レイミー！ 大丈夫か!？」

「デーン……。心配しなくても平気だって。アタシもジグランもこれぐらいでへこたれるようなタマじゃないんだからさ」

強がりのようにレイミーが言うと、傍らにいたジグランも、「おうよ!」と力強く言って賛同した。

二人の怪我の具合を見ているリネの横で、俺は攻撃者の方を見やる。

やはり予感は当たっていた。またしても嫌な方だった。

「シャルミナ、お前……」

「やっぱり来てくれたのね、デーン。丁度今探しに行こうと思ってたのよ。あんたに少し用があったから」

そう言ってシャルミナは、場違いな程優しい笑みを俺に向けてくる。なぜこの緊迫した状況で、彼女はあんな表情を浮かべられるんだ？

俺はシャルミナを見つめたまま、背後のレイミーに声を掛けた。

「レイミー、一体何があった?」

「作業を終えて帰る途中だったんだ。あの女がいきなり現れて、デーンはどこだって聞いてきて……」

「それで攻撃されたのか?」

「ああ、ほとんど問答無用でね。正直舐めて掛かってたよ。この女にはアタシたちを殺す気が無いと思ってたから……。でもさっきのはさすがに背が震えたね。本当に殺されると思ったよ」

「……」

俺は無言で警戒心を強くした。

シャルミナは何らかの理由で俺を探していたようだが、レイミーの言葉通りなら、そのやり方は数時間前に遭遇した時とは、明らか

に異なっている。今度こそ本当に、相手を殺す気で『魔術』を使ったという事だ。

まるで自分の邪魔となる者を、徹底的に排除するかのよう。

「……リネ。レイミーとジグラン、それからダンテさんたちを連れて村に戻ってる。あと出来たらでいいから、怪我をしてる二人の『治療』を頼む」

俺は一切振り向かないまま、背後のリネにそう声を掛けた。すると案の定、顔の見えないリネの口から、戸惑っているかのような吐息が漏れる。

「えっ……？ でも、ディーンはどうするの？」

「決まってるだろ。ここに残ってあいつと話す。どうやら相手に用があるのは、向こうも同じみたいだからな」

俺は前を見据えたまま、立ち去る気が無い事を静かに告げた。

ところが、そう言ったにも拘らず、リネは中々動き出そうとしない。どうやら俺が思っている以上に、彼女は俺の身を案じて、このまま立ち去る事に躊躇いを覚えてしまっているようだ。

何かもう一声掛けてやるべきか、と思っていると、今の状況を見かねたらしいレイミーが、諭そうとするかのように口を開く。

「アタシが言うのも何だけど、ここはディーンに任せた方がいいんじゃないかい？ 多分あんたが一緒に残っても、手助け出来る事は何一つ無いと思うよ」

「……」

少々厳しい言葉を浴びせられたリネは、しかし一切反論しなかった。やがて観念したかのように、彼女は俺の背後でダンテたちを誘導し始める。

するとその途中、背を向けたままにいる俺に向かって、レイミーが深刻な口調で告げる。

「気を付けなよ、ディーン。話を通じると思って油断しない方がいい。今のあいつは、充分危険な存在だよ」

「ああ、わかってる」

忠告されるまでも無く、今のシャルミナを見ていれば、嫌でも警戒心は強くなる。

短く返事を返すと、背後の気配が遠ざかり始めた。と、一瞬の間を置いて、相変わらず心配症である黒髪の少女から、躊躇いがちな声が放たれる。

「デーン……、無茶しないでね」

「わぁーかってるって。そっちの事はよろしく頼んだぜ、リネ」

俺はやれやれと思いつつ、背中越しに手を振ってリネの動作を促した。それをどう受け取ったのかはわからないが、漸くリネの気配も、徐々にこの場を離れていく。

少々時間が掛かってしまったが、これで舞台に残った役者は、俺とシャルミナの二人だけだ。

「悪い、待たせたな。で、一体俺に何の用だ？」

俺が静かに切り出すと、シャルミナは神妙な面持ちでそれに応じる。

「あなたに一つだけ、頼みたい事があるの」

「……別に頼みがあるって事自体に驚きはしねえけど、何で俺なんだよ？ 顔見知りのレイミーやジグランを無理矢理追いつめてまで、どうして俺を選んだんだ？」

「……多分あなたにしか出来ない、あなたになら簡単にこなせるはずの事だから、かな」

「……？」

俺は真剣な表情を崩さないシャルミナを見て、僅かに違和感を覚えた。

『今度こそ本当に殺す気だ』と、そう思ったにも拘らず、今のシャルミナからは、以前感じた危なげな殺気が微塵も感じられない。何か、身体の一部が抜け落ちてしまったかのようだ。

多少疑問は残るが、とにかく危害を加えられる心配が無いのなら、ここはこちらの言い分を聞いてもらう絶好の機会だろう。

「お前の頼みとやらは聞いてやる。だけどその前に、俺の質問に答

えてくれないか」

「質問？」

率直に問い掛ける俺に対し、シャルミナはやや首を傾げてみせる。今の彼女を見ていて何となくわかった。やっぱり彼女は、人を殺せるような人間じゃない。

『魔術師』は『人殺し』、なんて揶揄する連中も多くいる訳だが、少なくとも彼女は違う。俺やここを通る旅人に見せていたあの凄まじい殺気は、レイミーが言っていた通り、演技として形作られた偽りのものだ。

そう確信を持って、俺は何の迷いも無く尋ねる。

「この森で旅人を襲って殺したのはお前か？ この森に住む『魔女』は、お前なのか？」

俺の問いに返された答えは、数秒の沈黙。だがそれは決して、自らの心中を誤魔化そうとしているが故の沈黙では無かった。

シャルミナは俺から一切視線を逸らす事無く、やがて静かに口を開く。

「……『魔女』って言うのが何なのかはわからないけど、私は誰も殺してない。『魔術』を使って人を追い払う事はあっても、殺したりなんかしてない。……なんて言っても、信じてもらえないだろうけどね」

彼女はどこか諦めたような口調で苦笑し、僅かばかり眼を伏せた。恐らく、否定されると思っていたんだろう。自分の存在が、この森を訪れる人々にとって脅威となっっている事を、充分自覚しているからこそ。

だが俺は否定しない。

そんな彼女の思いを見抜いたからこそ、そんな言葉は使わない。そもそも俺は、そんなくだらない事をする為に、今の質問をぶつけた訳じゃない。確信があったから質問したんだ。

彼女は『魔女』と恐れられている存在なんかじゃない、と。

「わかった。お前の言う事を信じるよ」

「……随分簡単に信用するのね。今日会ったばかりの人間に対して、そんな簡単に心を許すなんて、ちよつと考えが甘いんじゃないの？」  
「何と言われようが、俺はお前の言葉を信じる。例えお前が、お前自身を疑ったとしてもな」

「……」

シャルミナは酷く驚いた顔をして、ジツと俺の顔を見つめ返してくる。彼女はまだ何か不満を並べたそうにしていたが、俺はそれを待たなかった。ついさつき、彼女が口にしていた事が気になったからだ。

「ところで、その頼みたい事ってのは何なんだ？ 『俺にしか出来ない』なんて、そんな大層な事が本当にあんのかよ？」

俺が意識して笑みを込めつつ言っていると、シャルミナは硬い表情を崩し、やや苦笑した。そしてそのまま、頭を垂れるかのように軽く俯く。その姿は、何かを躊躇っているようにも見えた。

「？ どうしたんだ？」

「あなたにこんな事を頼むのは、きっと筋違いなんでしょうけど……。それでも、お願いさせてほしいの」

微かに唇を動かし、小声だがしっかりと口調でそう呟いたシャルミナは、俯かせていた顔を上げ、何かを決意したかのようにこう続けた。

「私が守ってるこの森の遺跡を、あんたの手で破壊してほしいの」「！？」

それは、耳を疑いたくなるような頼み事だった。

「あなた、あの『妖魔』一族の生き残りなの……！？」

あたしは『治療』を行なう為に、自分の正体が『妖魔』一族の生き残りである事を二人に明かした。

酷く驚いた様子のレイミーとジグランは、まじまじとあたしの顔を見つめている。興味深げな二人の視線に、何だか少し恥ずかしさを感じてしまったあたしは露骨に俯いてしまう。

ディーンに言われた通り村に戻ってきたあたしは、まず怪我をした二人の治療から始める事にした。

二人がダンテさんに宛がわれた小屋の中で、あたしは自分の固有能力である『治療』の力を使って、二人の身体の傷を同時に治していく。

傷口に向かって手を翳す<sup>かざ</sup>だけという、これ以上無いくらい簡単な治療の過程を、二人は椅子に腰かけた状態で物珍しそうに観察している。やっぱり初めて見る人にとっては、かなり不可思議な現象なんでしょうなあ。

小屋の中に溢れる光は、ディーンが言うには柔らかく<sup>あった</sup>て温かいらしい。

あたしは自分の力で自分の傷を癒せないから、そういう感覚を得る事が出来ない。だからそんな風に言ってもらえると、やっぱり嬉しく思う。……少し照れ臭いっていうのもあるけど。

「こうやって誰かに話すと、絶対驚かれるんだよね。やっぱり生き残りがいるなんて誰も考えないんだろなあ」

あたしはつい最近まで、人前で『治療』の力を使う事を恐れていた。この『治療』の力を見て、あたしを蔑むように『化物』と呼び、避けていく人が何人もいたからだ。

そんな経験を何度も繰り返したあたしは、いつの頃からか『孤独』を恐れるようになっていた。

だけど今はもう大丈夫。あたしには、居場所と呼べるものが出たから。

あたしの正体を知っても、ディーンは始めて会った時と変わらな

い態度で接してくれている。そんな彼がいるからこそ、あたしは恐れを抱く事無くこの力を使えるようになったんだ。

「それにしても凄い偶然だわ。『倒王戦争』の『英雄』の弟子と知り合ったかと思えば、その弟子の同行者が『妖魔』一族の生き残りだなんて……。ねえ、ジグラン？」

「そうだよなあ。もしかしてオレたち、もう人生の運全部使い果たしちゃったんじゃないか？」

大袈裟なジグランの物言いが可笑しくて、あたしは思わずクスツと笑ってしまった。彼やレイミーとは今日初めて会ったばかりなのに、自分でも驚く程心を許してしまっている。きつと二人の適度に緩い言動が、自然とそうさせてくれてるんだと思う。

そんな明るい性格の二人に、あたしは治療をしながらディーンの事を尋ねられた。

彼のフルネームと、彼の師匠の名前。それを打ち明けた時は、レイミーもジグランもかなり驚いている様子だった。

「ディーンは凄く強いんだよ！ なんとって『炎を操る者』フレイム・ウォーカーなんだから！」

「『炎を操る者』？ 何それ？」

「ディーンの通り名だよ。あたしが考えたんだ！」

「へ、へえ、そうなんだ……」

「？」

少し自慢げにディーンの通り名を披露したあたしを、レイミーはなぜか苦笑いして見つめてくる。ジグランに至っては「何言ってるんだお前？」、と言いたそうな顔で呆然としてるし……。何か可笑しな事言っただけかなあ？

と、そんな会話を続けている間に、二人の怪我は完治していた。あたしは『治癒』の力を使うのを止め、外していた手袋を着け直しつつ立ち上がる。

「さてと。じゃああたしも、ディーンに頼まれた事を始めるとしますか」

「？ 頼まれたって一体何を？」

不思議そうに首を傾げるレイミーとジグラン。まるで同調してるみたいに、二人の動作は首を傾げる方向から動きの速さまで、完璧に一致している。

そんな二人を見て、あたしは少し可笑しく思った。やっぱり長年コンビを組んでるだけあって、息がピッタリなんだなあ。

なんて思いながら、あたしはある場所へ向かう為に小屋から出た。するとあたしの用事が気になったのか、レイミーとジグランも意気揚々とあたしの後に付いてくる。

あたしは特に意識せず、二人を引き連れて真っ直ぐある民家に向かった。

その民家とは、村長であるダンテさんの家。

レイミーとジグランが宛がわれた小屋からダンテさんの家までは、五分程度の短い道のりだ。

色鮮やかで綺麗な花が多く咲いている庭園を横目に見つつ、玄関の前まで辿り着いたあたしは、ゆっくりとドアを二回ノックする。

しばらく沈黙が続いた後、玄関のドアが静かに開き、少し物憂げな表情のダンテさんが顔を出した。

「ああ、リネさんでしたか。それにレイミーさんとジグランさんも。……おや？ もう怪我の方はよろしいのですか？」

「ええ、何とか。ワタシたちより、村長さんこそさっきの事で怪我されませんでしたか？」

「私は大丈夫ですよ。……ですが、あのディーンさんという方が心配です。相手が少女とはいえ、あんな危険極まりない人間を止める為に、たった一人で残るだなんて」

「ダンテさん」

あたしはダンテさんとレイミーの会話に割り込む形で声を出した。黙り込む二人に悪いと思いつつ、あたしはゆっくりと切り出す。

「少し、ダンテさんにお聞きしたい事があるんです。構いませんか？」



村を出る前、あたしはディーンからある事を頼まれている。それを果たす為に、あたしはここを訪れたんだ。

ゆっくりと告げたあたしに、応対したダンテさんは神妙な面持ちで答える。

「……ええ、構いませんよ。どうぞ」

ダンテさんはあたしが何を聞こうとしているのか、薄々勘付いてるように見えた。

それとは対照的に、あたしに付いて来たレイミーとジグランは、互いに顔を見合わせて不思議そうな顔をしている。何を話すつもりなのかわからない、と言いたげな表情だ。

居間に通されてソファアに腰を下ろしたあたしは、対面に座ったダンテさんの顔を静かに見つめる。するとそれだけで、ダンテさんは観念したかのように口を開いた。

「……その様子だと、どうやらお気付きになっているようですね。この村……いや、この森で一体何が起きているのか」

「気付いたのはあたしじゃありません。ディーンが気付いて、あたしに任せてくれたんです。ダンテさんから真実を聞き出す役を」

あたしが真剣な表情でそう言っていると、ソファアの後ろに立っていたジグランが訝しげな顔で尋ねてくる。

「なあ、リネ。お前一体村長に何を聞くつもりだ？ あの連れの紅髪は、何に気付いたってんだよ？」

「……さっきジグランたちが埋葬してきた死体。その場所で殺されてしまった人たちを襲撃したのは」

ジグランとレイミーが静かに会話を聞き入っている中で、あたしはゆっくりと告げる。ディーンが気付いた、真実を。

「ここに住んでる村の人たちなんですよね？」

「！ なっ……！？」

「違いますか、ダンテさん？」

絶句してダンテさんを見つめるジグランとレイミー。その視線の先にいる当人は、辛そうに顔を顰めている。どうやらディーナが提示した推測は当たっているみたいだ。

だけど彼から話を聞かされたあたし自身、まだ信じられないという気持ちの方が強い。例え端から聞いていたとしても、かなり荒唐無稽な話である事には変わり無いんだから。

黙ったまま返答を待っていると、やがてダンテさんは静かに口を開いた。

「……もう耐えられない。私にはどうする事も出来ないんです……。お願いです！ この村を、私たちを助けてください！ お願いします！」

まるで神様に許しを請うかのように、ダンテさんは涙を流しながら頭を下げた。

ふと気付くと、居間の窓から見える空は、眩し過ぎる程の鮮やかな燈色に染まり始めている。

村に夕暮れが迫っていた。

眩い橙色の光が、西の彼方に沈もうとしている。そんな中、徐々に暗くなりつつある周囲に気を配りながら、俺は落ち着いた歩調で少し前を歩くシャルミナの背中を、ジッと見つめた。

『私が守り続けた遺跡を破壊してほしい』

真摯な表情で俺にそんな願い事を呟いた後、シャルミナは遺跡へ案内すると言って静かに歩き出した。

なぜ彼女はあんな台詞を口にしたんだろう？ 自分が守り続けた、

一族の宝とも言える物を壊してほしいなんて、俺にはどうしても納得出来ない。それじゃあまるで、彼女が今まで受け継いで来た一族の存在理由そのものを、自分自身で否定してるようなもんじゃないか。

一体シャルミナは何を考えているんだ？ と、そんな事を考えている最中だった。

「デインは『風守り』の一族の事、どのくらい知ってるの？」

不意に、前を歩いていったシャルミナが背を向けたまま、歩調を緩める事無く尋ねてきた。特に質問の意図を探ろうとも思わなかった俺は、殆ど反射的に答えを返す。

「確か、『魔術戦争』時代に造られた遺跡を守り続ける為に、一族の中で女だけが『魔術師』になる役目を担ってるんだろ？」

「ええ、その通りよ。じゃあどうして、女性だけがその役目を背負わされたんだと思う？」

「それは……」

思わず首を傾げてみるが、もちろん考えた所で答えなんてわかる訳が無い。そもそも俺は今日この森を通ろうとするその時まで、『風守り』の一族どころか『魔女伝説』の存在すら知り得なかったんだ。そんな無知人間が一族の深い事情に関する問題を出されて、「わかりました！」と即答出来たら勲章ものだと思う。

が、自称負けず嫌いなこの俺デイン・イアルフスは、それでもああでもないこうでもないと考えを巡らせてみる。

すると、まるで「時間切れです残念！」と言わんばかりに、シャルミナは立ち止まって俺の方を見た。

「女性は子供を産む事が出来るから、よ。この森で生き続ける一族が子孫を残し繁栄する為には、女性に遺跡を守る役目を負わせ、この森から出ないようにしなければならなかった。だから私たち一族の中で、『魔術師』になるのは女性だけだったのよ」

結局答えさせてくんねえのかよ、と若干不満に思ってしまった俺ではあったが、ふとある疑問が脳裏を過る。

「ん？ でも森から出ないようになって言っちゃって、そんなの個人の勝手だろ？ いくら一族の役目だからって言っちゃって、みんながみんなそれを守るとは限らねえんじゃねえのか？」

「……あんたの言う通りよ。例え役目を背負わされた身だったとしても、人間の好奇心つてもものは、そう簡単に抑圧出来る感情じゃない。現に私が生まれるずっと以前から、一族の中には外の世界に憧れを抱いて、自らの役目を放棄する者が何人もいたそうよ。だから、そんな一族への背信行為を防ぐ為に、一族の長たちはある手段を用いる事にしたの。……一族の役目と掟を重んじる彼らが、『私たちに一体何をしたのか。デイン、あんたにはわかる？』

悲嘆に暮れているかのようなシャルミナの表情を、俺は黙って見つめ返す事しか出来ない。単純に質問の答えがわからなかったというのもあるし、彼女の表情が切な過ぎて、眼を逸らすのが憚られたというのもあった。

だけどなぜだろう。彼女の薄紅色の眼は、俺を捉えていないように思う。まるで記憶の彼方にいる誰かを虚空に映し出して、ジッと見据えているかのようだ。

いや……もしかしたら、シャルミナが今現実に転写している人物は、その一族の長つて奴なのかも知れない。と、そう思い至った時だった。

彼女は突然、徐に自分の服の胸元辺りを掴んで強引に引き下ろした。

何の前触れも無くその行為を見せ付けられた俺の頭は、何が起きたのかを理解するのに数秒の時間を要したらしい。やや硬直し掛かっていた俺は、反射的に両手を動かして顔を覆い、無理矢理視界を遮断させる。

「なっ、何してんだよいきなり!？」

慌てて眼隠ししてはみたものの、実はすでに手遅れだった。俺の脳内には、シャルミナの白くてきめ細かくて柔らかかそうな肌が、鮮明な映像としてこれ以上無いくらいバツチリと焼き付いてしまっ

いる。

一瞬で跳ね上がってしまった鼓動は治まる気配が無い。にも拘らず、シャルミナは続け様にこう言ってきた。

「これを見てデイン。見てくれたら、それでわかると思うから」「ッ!？」

今の台詞から察するに、どうやらシャルミナはさっきの格好を保ち続けているらしい。って言うか何なんだこの状況! まさか誘惑でもされてるのか!?

顔を手で覆ったまま悶々としている俺を、しかしシャルミナは静かに待っているようだ。こうなるともう、彼女の言葉に従うしかないだろう。このままずっと、シャルミナに妙な格好させとく訳にもいかないしな。

意を決した(何に対してなのかは自分でもわからないが)俺は、恐る恐る両手を退けて、彼女の方を注視する。

「ごめんシャルミナ! ……」と訳のわからない謝罪を心の中でした俺は、ふと視界の中に異様なものを見つけて眉根を寄せた。

「! お前、それ……」

視界に捉えたのはシャルミナの左胸。丁度鎖骨の下辺りにある、刺青のように身体に彫り込まれているらしい何かの記号のような物。それが何なのか、『魔術師』である俺にはすぐわかった。

「『印術』、だよな」

俺たち『魔術師』は『魔術』の力を発動させる手段の一つとして、紙や札、武器や防具と言った物に特殊な記号を刻み付け、ある程度の『魔術』的な力を発揮させる技術を用いる事がある。

それが、『印術』と呼ばれる手法だ。

シャルミナの左胸にある刺青のような記号も、『印術』を用いた『魔術』の一種であり、その形は明確な意味合いを持っている。

「これこそが、『風守り』の一族をこの森に縛り付けてる『呪い』よ」

そう言って、シャルミナは服に出来た皺を丁寧に直しながら、や

や俯き加減で悲しげに笑う。

今はもう服の下に隠れてしまったさっきの記号。あれは『印術』の中で、『風』に分類されるものだったはずだ。

『魔術』的な記号を用いる『印術』に於いて、その用途や『属性』は様々ある。

例を挙げるとすれば、以前テルノアリスで戦ったアーベント・デイベルグ。奴も『魔術』的な力を操る為に『炎』の記号が刻み込まれた籠手を使い、自爆する際には『爆発』の記号が刻まれた札も使っていた。

もちろんそれ以外にも、今までに何度か『印術』を眼にする機会はあった。だが彼女のように、身体に直接『印術』を彫り込んでいくというのは見た事が無い。

それに彼女は言った。これは『呪い』だと。

「どういう事だよ、シャルミナ？」

記号の意味が理解出来ても、それがどういった効力を発揮するのかまでは俺にもわからない。が、シャルミナ自身が『呪い』と称するような代物である以上、『魔術』が殺傷に特化した技術である以上、その答えは自ずと導き出せてしまう。

シャルミナは伏し目がちな表情で、どこか弱々しく吐露する。

「この『印術』……、『呪い』のせいで、私はこの森から出る事が出来ないの。多分一種の結界のような物なのかな？ 遺跡を中心にして一定範囲内から外れようとすると、この『呪い』は私を剣で斬り殺そうとするみたいに容赦無く傷付ける。もし私が完全に森の外に出たとしたら、その瞬間私の身体はバラバラになるでしょうね」

「そんな……」

シャルミナの言葉に俺は絶句した。遺跡から、森から離れようとしただけで、『印術』が対象者を殺そうとするだつて？ 錠を守らせる為に、一族の長たちはそんな危険な代物を彼女の身体に刻み込んだつてののか？

言葉を失う俺を尻目に、シャルミナは悲しそうに続ける。

「だけど実際、この『呪い』を刻み付けられても、外の世界に憧れる人は後を絶たなかったわ。死ぬのを承知で遺跡を離れて、帰って来なかった人たちは何人もいた。しかもその内、何の因果か一族の中で酷い疫病が流行ってね。一族は私を残して誰一人いなくなっただわ。『呪い』という呪縛だけを、私に残してね……」

シャルミナは悲しげな表情のまま、俺を真っ直ぐに見つめてくる。「だけど私にもまだ、救いの道が残ってた。デーン・イアルフス偉大な力を持つ『英雄』の弟子であるあんたなら、きっとあの遺跡を壊せるだけの力を持つてははず。そう思ったから、私はあんたを呼びに来たの。私をこの地に縛り付けてる『呪い』から、解放してもらおう為に」

「……………」  
シャルミナの悲痛な言葉を聞いて、俺はしばらく黙り込む事しか出来なかった。

確かに彼女の境遇は不幸だと思う。俺なんかの力で助けられると  
言うなら、いくらだって力を貸してやりたい。

しかし、いいんだろうか？ 彼女の思いを、頼みを、願いを叶える為とはいえ、今ここで何の躊躇いも無く首を縦に振ってしまったって、本当にいいんだろうか？

一人の少女を助ける為に、とある一族が何百年も守り続けた遺跡を破壊する。何だかそれは、身勝手な破壊行為にもっともらしい理由を付けて、行動そのものを正当化しようとしているだけなんじゃないだろうか。

悩む俺を尻目に、シャルミナは踵を返して再び歩き始めてしまう。  
ここで立ち尽くしている訳にもいかず、俺は仕方無く彼女の後を追った。

不意に前方の視界が拓けてきたのは、森の奥へと進み続けて十分は経ったかと言う頃だった。シャルミナの後に続いて、乱立する木々の隙間から抜け出た俺は、眼の前の光景を見て息を飲んだ。

神秘的、という言葉は多分、こういう時にこそ使うものなんだろう。

そこはまるで庭園のようだった。

恐らく正円を描く格好で開拓されているその場所の至る所には、紅梅色や董色すみれと言った、色鮮やかな花卉を付けた花々が咲き乱れている。そんな花々の絨毯から視線を外すと、次に眼を引いたのは、中央に聳えるやや灰身掛かった石造りの遺跡だ。正方形型と思われる遺跡の一辺の幅は、大体一〇〇メートルぐらいだろうか。高さは周囲の木々とほぼ同じくらいである為、俯瞰で見ない限り、森の奥にこんな建物があるとは誰も気付けない事だろう。遺跡の外壁は、何百年も経っているとは思えない程古びた様子が無く、所々に立つ石柱や不可思議な形をしたモニュメント群は、西の彼方に沈みつつある陽光を受けて、神々しくも儂げな輝きを放っている。

「ス、ゲエ……。綺麗だ……」

上手い言葉が見つからない自分を責めたくなくなってしまっ程、眼の前の光景は美しい。そんな景色を見たからこそ、俺は余計に抵抗感を覚えた。

シャルミナを助けてやりたいと思ったのは事実だが、俺個人の勝手な判断で、この優美な景色を瓦礫の山へと変えてしまう事に、どうしても納得がいかない。

「どうしたの、デーン？」

遺跡の隅から湧き出している、普段は青く透き通っているはず泉は今、沈み掛かった太陽の光で橙色に染まっている。

その畔に佇み、迷いで若干顔を顰めている俺に、追い打ちを掛け



るかのようなシャルミナの声が聴こえた。

多分彼女は気付いているんだろう。俺が、遺跡を破壊する事を躊躇っている。

「……悪いシャルミナ。やっぱり俺には、この場所を破壊する事なんて出来ない」

彼女が落胆する表情を見なくなかった俺は、わざと水面に視線を落としてそう言った。

すると案の定、シャルミナは少し曇った口調で問い掛けてくる。

「どうして？ デイーンは……、私を助けてくれないの？」

「そうじゃない！ 俺だって助けてやりたいと思ってるさ！ ……だけど」

「だけど？」

「お前はどっと思ってるかわかんねえけど、『風守り』の一族が何百年も守ってきたこの遺跡は、今日たまたま通り掛かった俺が勝手な気持ちで壊していいような物じゃない気がするんだ。それに見てみるよ」

俺はシャルミナを正面から見据えつつ、彼女の視線を促すつもりで、遺跡の風景に手を差し向けながら続ける。

「この景色、お前は綺麗だとは思わないか？ 神秘的だと思わないか？ お前にとっては辛い場所なのかも知れねえけど、でもここはお前が生まれ育った場所でもあるはずだろ？ ……だから俺には出来ない。そんな大切な場所を、お前が存在したっていう証が残ってる場所を壊す事なんて、俺には……」

シャルミナは沈黙を守ったまま、静かに俺の言葉に耳を傾けていた。彼女の薄紅色の双眸に、情けない顔をした俺の姿が薄らと映り込んでいる。

助けてくれないのなら用は無い。そう言って突き離される可能性だってあっただろう。

だけど俺は意見を曲げなかった。だってそれが、俺の素直な気持ち

ちだったからだ。

神妙な思いでシャルミナが話し出すのを待っていた俺は、しかしそこで思い掛けないものを眼にした。

俺のすぐ目の前にいる彼女が、どこか可笑しそうにクスツと笑ってみせたのだ。森に入った直後、凄まじい殺気を放っていたシャルミナからは想像も出来なかった、自然な笑みを。

若干唾然とする俺を他所に、シャルミナは優しげに笑いつつ口を開く。

「優しいんだね、ディーンは。何だかこうしてあんたと話せてるのが、凄く新鮮な感じがする。外の世界の人間と話す機会なんて、それこそあのレイミーとかジグランぐらいだったから、余計そう思うのかな」

「シャルミナ……」

「やっぱり頼むべきじゃなかったよね、こんな事。一族とは関係の無いディーンを巻き込んでまで、叶えるような事じゃないんだよ、きつと……」

そう言っただけでシャルミナは軽く俯いた。彼女はもう、助かる事を諦めてしまっているようだ。

……ああ、俺だって充分わかってる。自分が優柔不断な事を言っているのは。だけどそれでも、どちらか片方を選ぶなんて事、俺には出来そうにない。

だからこそ考えるんだ。

新たな糸口を。

どちらか一方を選ぶのではなく、どちらも失くさなくて済む、そんな夢みたいな解決策を。

……そういえば気になった事が一つある。シャルミナを縛りつけているあの『印術』は、『風守り』の一族の長たちが、まだ生きていた頃に彼女に刻み込んだ物だ。とすると、『印術』を刻み込んだ張本人は、すでにこの世には存在していないという事になる。

ではなぜ、あの『印術』の力は発動し続けているのだろうか。

術者がいなくなつたにも拘らず、その効力を発揮し続けている理由。

まさか……！ と、思考していた俺は一つの可能性を思い付いた。仮にこの考えが正しいものだとするならば、シャルミナを自由の身にする事は可能なはずだ。そしてその為には、俺自身が行動を起こす必要がある。

内心でそう結論付け、俺はすぐさま行動に移ろうとした。が、しかし。

『ククク……。実に下らん慣れ合いだ。反吐が出る程にな』

「……」

異変を察知し、俺とシャルミナは同時に辺りを見回した。

不意に遺跡の敷地内に響き渡つたのは、愉快そうに低く笑う男の声。遺跡の壁に反響しているからなのか、男の耳障りな声はあらゆる方向から木霊してくる。

「誰！？ どこに隠れてるの！？」

頻りに辺りを見回すシャルミナを他所に、俺は右手に炎を集束させて『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』を造り出す。

こうなる前から俺には、確信に近いある予感があった。

シャルミナに付いていけば、今回の一件に関わる何か、例えば事件の黒幕に遭遇する事が出来るんじゃないか、と。

どうやらその予感は当たつたらしい。俺は自分の右側、六メートル程離れた位置にある石柱の陰に向かつて、視線と言葉を投げ掛ける。

「そこにいるんだろ。隠れてないで出て来いよ」

俺が語気を強めると、しばらくして石柱の陰で何かが動いた。するとそれに合わせて、傍らにいたシャルミナが警戒するような仕草を見せる。

「クク……。その言い草、どうやら俺様の存在に気付いていたらし

いな。さすがはミレーナ・イアルフスの弟子と言った所か？」

短い草の生えた地面を踏み締めつつ、まるで揺らめく陽炎のようにゆっくりと姿を現したのは、全く見覚えの無い男だった。

軽く癖の付いた長い黒髪。身体の肉付きはあまり良くないらしく、顔の頬骨が浮き出ている。シャルミナと同じく、闇に溶け込んでしまっような黒いマントに身を包むその姿は、ただ見ているだけで、安易なまでに死神を連想してしまう。

一体どこで聞いていたのか知らないが、眼の前の男はどうやら俺の素性を知っているらしい。俺は顔を顰めつつ、ニヤリと笑う男に向けて、炎剣の切っ先を差し向けた。

「人の話を盗み聞きするなんて、あんまり趣味がいいとは言えないぜ、『魔術師』さんよ！」

「えっ……、どういう事？ 何であいつが『魔術師』だってわかるの？」

傍らで驚いた表情を見せるシャルミナに向かって、俺は快活に笑って言うてやる。

「どうもこうもねえよ。人を食い殺すって言う噂になってる『魔女』の正体。あいつこそが、この森で旅人を襲ってた張本人だ！」

#### 第四章 風守りの一族（後書き）

いつの間にやらユニークの方も1000を突破しておりました（笑）  
アクセスしてくれた皆さま、本当にありがとうございます！

ところで今回のお話、伏線が多くてかなり読み辛いかも知れませんが、未だにバトルらしいバトルも起きてないですし……。うーん、今回の魔女の森編は色々詰め込み過ぎたかなあ……。

## 第五章 満月の夜（前書き）

だいぶ遅くなりました。

ようやく魔女の森編、第五章開始です！

## 第五章 満月の夜

小屋で見つけた『人狼』<sup>ウエアウルフ</sup>の本。そして、リネが言っていた獣に变身する能力を持った一族がいるという噂。それらを一つに纏めた時、俺には今回の一件の真実が見えた気がした。

以前俺はミレーナに聞いた事があった。『ある属性』の『魔術』の中には、人を獣化させ操る事が出来る『魔術』がある、と。

その『魔術』の『属性』とは、、『闇』。

つまり俺が考えた今回の一件の真実はこうだ。

この森で旅人を襲い、食い殺していたのはシャルミナではなく、『闇属性』の『魔術』を使って人間を獣化させ操っていた『魔術師』の仕業なのではないか、という事だ。

そして獣化させられていた人間とは、あの集落に住む村人。レイミーが言っていた村の雰囲気が変わっているというのは、恐らく気のせいなんかじゃない。現実に村人の数が減っていたんだ。人間を獣化させる『魔術』を使う『魔術師』の手によって。

だから俺は村を出る前、その真偽を確かめる為、リネに頼み事をしていた。

それは、今回の一件について何かしらの事を知っているであろう、あの集落の村長ダンテに真実を問い質す事だ。

俺とリネが宛がわれたあの小屋にあった、『人狼』<sup>ウエアウルフ</sup>の事を記した本。

あの本は、小屋の本棚にあった他の本と比べると真新しかった。つまりあの本だけは、他の本よりも後にあそこに置かれた事になる。そこで問題になるのが、一体誰があの本を置いたかという事だ。ここで一つの仮定が生まれる。

もしこの森で起きている出来事の原因に気付いた誰かが、俺に真

実を知らせる為にわざと置いたんだとしたら、そんな行動を取って怪しまれない人物は誰か？

それはあの集落の村人。しかも、俺が泊まる小屋を知っていた人物。

例えば、村長のダンテ。

彼なら村の中をうろついても特に怪しまれる事はないだろうし、俺とリネが小屋に行く前に、『ウエアウルフ人狼』の本を持っていく事は可能だろう。

そう仮定した時、俺には真実の端が見えた気がした。

もしかしたらダンテは、この森で起きている騒動の元凶を知っているんじゃないか、と。

今頃リネは、ダンテから真実を聞きだしている頃合いだろう。だからこそ俺も、眼の前の人物を問い質す事で、真実に近付かなければならない。

俺は炎剣を握り直し、『魔術師』を強く睨んだ。

「あんたが今回の、いや、この森で起きてる旅人襲撃事件の元凶って事でいいんだよな？ 人を食い殺す『魔女』さんよ」

遺跡の石柱の影から現れた『魔術師』は、軽く癖の入った黒い髪を揺らしながら、不満そうな顔を見せた。

「俺様の名はリシド・ベイワークだ。『魔女』なんて汚らしい名前ですんでもらいたくはないね」

自分の事を様付けで呼ぶリシドと言う男。少し痩せ型の身体に、闇に溶ける黒いローブと、傍はたから見ればその姿は、『魔女』と呼べそうな格好の『魔術師』だ。

そんなリシドの口から出た、『汚らしい』という言葉に、俺は軽い憤りを覚えた。

「あんたがこの森の『魔女伝説』を隠れ蓑に使ってたのは事実だろ？ それにわざわざシャルミナの近くに身を潜めてたって事は、殺



人の現場で牡丹色の髪の水が目撃されてたのも偶然じゃねえよな？  
あれはあんたがそうなるように仕向けたんだ。自分の犯行を、シャルミナに擦り付け<sup>なす</sup>る為にな」

『魔術師』リシドは、俺の指摘に顔を顰めた。どうやら俺に看破された事が気に食わないらしい。

だがリシドはすぐ表情を変え、ククツと低く笑ってみせた。

「感心したよ。どうやら思っていた以上に洞察力があると見える。

……その通りだ。俺様は自分の目的の為に、そこにいる『風守リ』

の女の存在を利用させてもらった。その女のおかげで、俺様の存在は誰にも知られる事がなかった。実に動き易かったよ」

リシドに視線を向けられ、シャルミナは一瞬肩をビクツと震わせた。奴の眼差しに、底知れない悪意を感じたのかも知れない。

シャルミナはリシドに警戒心を向けながら、傍らの俺に声を掛け  
てきた。

「どういう事なの、デーン？」

「今言った通りさ。あの野郎は自分の目的の為に、お前の陰に隠れてこの森で旅人を襲ってたんだ。わざわざお前の近くで殺人を行なつて、お前に疑いの目が向くように仕向けてな」

「そんな……！でも目的って一体何なの？何の為にそんな事を？」

「……多分あいつの目的は、『人体実験』だ」

「……？」

俺が言った言葉で、シャルミナは信じられないといった顔をした。俺自身も信じられないという思いはある。だが状況が告げているんだ。今この森で起きている事は真実だ、と。

「あの野郎が行なっている『人体実験』は、人を自由に操る為のものだ。しかもただ操るんじゃない。あいつ自身の『魔術』で人間を『獣化』させて操ってるんだ」

「『獣化』……！！？」

「フン。まるで見ていたような言い方だな」

俺の言葉を聞いていたリシドは、不満げに鼻を鳴らした。

「貴様の言う通り、俺様は『ある一族』の魂を『魔術』によって肉体から取り出し、それを他の人間に憑依させ、『獣化人間』として操る為の実験を行なっている」

「その一族つてのが『人狼』<sup>ウエアウルフ</sup>だった、つて訳か？」

俺が先を読んだように話すと、リシドは感心したような声を漏らした。

「ホウ、そこまで知っていたか。　そう。俺様は『魔術師』としての実験の過程で獣の魂の抽出方法、そして『人狼』<sup>ウエアウルフ</sup>の存在を知った。俺様は以前から、人間を操るといふ能力というものに興味を持っていた。だからやってみたくなっただよ。本当に人間を操る事が出来るのか、獣の魂を人間に憑依させる事は出来るのか、という事をな」

「そんな……、そんな理由で人を襲ってたつて言っの？」

まるで信じられないものでも見るかのような顔付きで、シャルミナは身体を軽く震わせながら言った。

「だがリシドは全く意に介さず、それどころか愉快そうに笑いながら言葉を返した。

「ああ、そうとも。だが貴様に俺様を責める権利など無いだろう？」

一族が残した遺跡を守るなどという下らない理由の為に、人を襲っていた貴様にはな」

「それは……ッ！」

反論しようとして、それでもシャルミナは反論しなかった。いや、出来なかつたんだろう。

形はどうあれ、シャルミナが遺跡から人を遠ざけようとしていたのは事実で、その為に危害を加えていたのも事実だ。それは彼女自身が、一番よくわかっている事だろう。

だが俺には納得がいかない。言葉は確かに正しいのかも知れないが、少なくともそれは、眼の前の男が指摘出来る事じゃないはずだ。悔しげに唇を噛んで軽く俯く彼女を見て、俺はリシドに対して感

じた憤りが、益々強くなるのを感じた。

「……てめえはどうしようもねえクス野郎だな。今まで色んな『魔術師』を見てきたけど、その中でもてめえは下の下に値あたすんぜ」

そう吐き捨てるように俺は言った。こいつは今まで会った奴の中で、間違いなく最低に値する奴だ。以前戦ったアーベントの野郎の方が、まだマシウチウチに思えてくる。

だがリシドは飄々とした様子で、余裕たっぷりウチウチにニヤリと笑ってみせる。

「褒め言葉として受け取っておこう。で、そんな最低に値する俺様をどうするつもりなんだ？ ブツ殺してやるとでも言うつもりか？」

「殺さねえよ。俺がてめえを殺す訳ねえだろ」

俺は自分に言い聞かせるように言った。どれだけ殺意を抱いてしまっ相手だろうと、俺にはミレーナとの約束がある。『魔術師』がただの人殺しではなく、誰かを守る存在だと証明する、という約束が。その約束を果たす為には、俺は『魔術』で人を殺す訳にはいかない。

だがそれは、あくまでもそれだけの話だ。それがあいつを、リシドを許すという事には繋がらない。許す事と耐える事は全くの別物だ。

だから俺は、リシドを強く睨み付けて言った。

「ただ、再起不能になるまでぶちのめすだけだ！」

言うのが早いか、俺は『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』を構えてリシドに突貫した。するとリシドは、おもむろに懐から何かを取り出した。

「貴様にも見せてやろう。俺の実験の成果というものを」

奴の右手に握られていたのは、ドス黒い光を放つ右手に収まる程の大きさの水晶だった。その水晶を胸の前に掲げ、リシドは呟く。

「我が手中に眠る数多の魂よ。我が命によりて顕現せよ」

ドス黒い光が強さを増したかと思うと、リシドの周りに黒い何か  
が漂い始めた。

だが俺は、黒い煙のようにも見えるそれを無視して、炎剣でリシ  
ドに斬り掛かった。

「うおおおおおっ！」

上段からの斬撃。だがリシドは回避しようとする動作も見せず、  
軽く呟いた。

「噛み殺せ、『ファンク黒狼』」

「!?!」

瞬間、黒い煙のようなものが俺の身体に纏わり付いた。その時俺  
は確かに見た。黒い煙が形を成し、狼の頭部に変化するのを。

それと同時に、俺は右腕に鋭い痛みを感じた。黒い狼の頭部が、  
俺の二の腕の辺りに噛み付いたのだ。

「ぐっ!?!」

痛みによつて斬撃が逸れ、炎剣はリシドに当たる事なく空を切っ  
た。俺はそのままバランスを崩し、ゴロゴロと地面を転がった。

「くっ、そ……! 何だよ今のは?」

俺は立ち上がり、痛みの走った部分を確かめた。すると右の二の  
腕辺りに血が滲み、獣に噛まれたような傷跡が出来ている。

さっきのはやはり気のせいなんかじゃない。黒い煙が狼の形にな  
つて、俺を攻撃したんだ。

「随分と困惑しているようだな」

傷の痛みに耐える俺に、リシドは嘲笑うかのような声を掛けてき  
た。

「さっき言っただろ。俺様は獣の魂の抽出方法を得たと。今のはそ  
の獣の魂が実体化して、貴様に襲い掛かっただけの事だ」

「魂を操る『魔術』……。やっぱりてめえは、『閻属性』の『魔術』  
の使い手か……!」

「クク、その通り。魔法名は『従魂魔法』。知つての通り、獣の魂  
を人間に憑依させたり、今のように攻撃にも使用出来る能力だ。こ

んな風にな！」

リシドが叫び、水晶を高く掲げた。するとまた水晶がドス黒い光を放ち、リシドの周りを漂っていた黒い煙が狼に形を成して、俺に襲い掛かってきた。

「チイツ！」

俺は左手に炎を灯し、虚空に十字の炎を出現させた。『バーニング烈火の十字爆撃』の予備動作だ。

「行けえっ！」

虚空に静止する十字の炎の中心を、左拳で殴り付けると、十字の炎は黒い狼に向かって飛来した。直後、空中で紅い爆発が起こり、爆煙が辺りに吹き荒れた。

（今だ！）

そう心の中で叫び、俺は爆煙の中心をリシド目掛けて突っ込もうとした。

だがその時。

「掻きかむし筆むしれ、『ファンゲ黒狼』」

「！」

リシドの声が響いたかと思うと、爆煙を突き破って現れた無数の黒い狼たちが、俺の身体と交差する瞬間に鋭利な爪で引っ掻いて行った。

「ぐあっ！」

両肩と右脇腹の辺りに鋭い痛みを覚え、俺は思わず後ろへ倒れ込んだ。

その瞬間、仰向けに倒れた俺の眼に、上から襲い掛かろうとする黒い狼たちの姿が映った。

回避が間に合わない！ そう思った時だった。

『ブレイド・ウインド斬風』！」

もう聞き慣れたシャルミナの声が響くと同時に、凄まじい風が発生し、鎌鼬となって黒い狼たちを真っ二つに切り裂いた。

俺が上半身を起こすと、心配そうな顔をしたシャルミナが俺の許

に走り寄ってきた。

「デーン、大丈夫？」

「俺は平気だけど、でもお前、どうして……」

「デーンの身が危なかったからに決まってるでしょ。それ以外に理由なんてないわよ」

シャルミナは優しく微笑むと、そつと左手を差し出した。

俺は少し驚いたが、すぐに笑い返してその手を握った。再び立ち上がり、俺はシャルミナと同時にリシドの方を見た。

「シャルミナ。お前の力を貸してくれ」

「言われなくてもそのつもりよ」

そう言っつてシャルミナが右手を振るうと、それだけで突風が発生し、鎌鼬となつてリシドに向かつていった。その風の後に続くように、俺は炎剣を構えて走り出す。

すると、進む先に立つリシドがニヤリとした不気味な笑みを見せた。

「『英雄』の弟子に、『風守り』の一族。被験体としては申し分ない相手だ！」

リシドは叫び、シャルミナの放った鎌鼬を軽く身を捻るだけで回避した。

だが俺は構わず、炎剣を振りかぶる。

するとリシドは先程と同じように、水晶を高く掲げて言い放った。

「噛み殺せ、『黒狼<sup>フアンケ</sup>』」

「二度も同じ手を食うかよ！」

黒い煙が狼へと実体化する瞬間、俺は地面を強く蹴り付けて高く跳躍した。そしてそのまま、落下と共に炎剣を振り下ろす。

「馬鹿が！ 空中に逃れようと結果は同じ」

そう言い掛けて、リシドはハツとしたように俺から視線を外した。そう、奴の視線の先には鎌鼬を放つシャルミナの姿が映ったはずだ。

シャルミナの放った鎌鼬は黒い狼を両断し、今度はリシドを両断しようとする。襲い掛かる。

当然リシドはそれを回避しようと動く。だが、それは間に合わない。なぜなら。

「余所見してんじゃねえ！」

「！」

落下しながら振り下ろした俺の炎剣が、リシドの左腕にヒットした。

「ぐああああっ！」

直撃と共に発生する爆炎。それがリシドの左腕に多大なダメージを与える。

俺は着地すると体勢を立て直す為にリシドと距離を取った。

「へへっ！ 俄仕込み「わかこじ」のコンビネーションにしては上手くいったな！」

俺がわかりやすい反応をすると、シャルミナは軽く笑い返してきた。

炎剣を握り直し、俺は切っ先をリシドに差し向ける。

「さあて、このまま一気に片を付けさせてもらうぜ。それが嫌なら大人しく軍に投降するんだな」

魂を操るといふ変わった能力に戸惑いはしたが、こいつ自身にはあまり脅威を感じない。このまま二人で攻めれば勝機は簡単に見えるだろう。

そう思ったからこそ、俺は完全に油断して、失念していたんだ。

こいつの目的は俺たちを倒す事じゃない、って事を。

「ククク……。なるほど。やはり思った通り、貴様らは面倒な相手のようだ」

左腕を庇うような仕草を見せながら、リシドはゆらりと不気味に身体を揺らす。警戒心を強くする俺とシャルミナの前で、リシドはゆっくりと、すでに暗がり支配し始めた空を仰ぐ。

「今夜は満月だ。貴様らも『魔術師』なら聞いた事があるんじゃないか？ 満月の夜ってのは、『魔術』の力が一番強まるって話を」

「…………？」

リシドが何を言いたいのかわからず、一瞬俺は疑問に思った。だがすぐにハツとした。ここに至って漸く俺は、自分が失念していた事に気付いた。

「てめえまさか　！」

俺が叫ぼうとした瞬間、リシドの姿を隠すかのように、奴の周りに黒い煙が発生した。その姿が黒い煙に包まれていく中、愉快そうなりシドの声が聴こえてきた。

「知ってるか？ 『人狼』 ってのは、満月の夜にその姿を人間から狼へと変貌させるんだ」

「くそっ！」

俺は炎剣を構え、黒い煙の中に向かって走り出した。その間にも、愉快そうなりシドの声は響く。

「今夜はさぞかし、騒がしい夜になりそうだ。特にどこぞの集落なんかはな」

「リシドーーーーッ！！」

叫びと同時に振り下ろした炎剣は、リシドの身体を捉える事なく虚しく空を切った。

黒い煙が消え去ると、すでにそこに奴の姿は無かった。

「くそっ！　逃げられたか！」

「どうしたの、デーン？　何でそんなに慌てるの？」

歯噛みする俺の傍に歩み寄ってきたシャルミナは、不思議そうな顔で尋ねてきた。

俺は出現させたままだった『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』を消滅させ、必死に心を落ち着かせながらシャルミナの方を見た。

「言っただろ？　あいつの目的は人間を『獣化』させて操る事だつて。多分あいつは、その仕込みをすでに終えてるんだ。だから俺たちと戦うよりも先に、そつちを優先する為に身を引いたんだ」

「どういう事？」

正直な所わからないと言いたげな顔をしながらも、シャルミナはどこか不安を感じているようだった。俺が言わんとしている事を、



予測していたのかも知れない。

「あいつはこの森の集落に住む人たちに、『獣化』の『魔術』をすでに掛けてるんだ。今日は満月……。あいつの『魔術』の発生条件は、満月の夜だったんだ！」

やっぱり、なんてあたしが言う台詞じゃないんだろうけど、それでもデイーンの予想は当たっていた。

ダンテさんが語った、この森で起きている異変。それは、この集落の人たちを侵食するみたいに巻き込んでいた。

最初にダンテさんが『それ』を目撃したのは、三カ月前の満月の夜だったそうだ。

「私はその日、遅くまで仕事をしていて、気付いた時には真夜中近くになっていました。その頃になって漸く眠気が襲って来まして、私は眠ろうとしたんです」

ところがその時、ダンテさんは自分の寝室の窓から見てしまったそうだ。真夜中だというのに、薄着の格好のままフラフラとした足取りで村の外に出ていく、一人の村人の姿を。

その姿が妙に気になったダンテさんは、その村人の後を追ったそうだ。こんな時間に軽装で森に出て、怪我でもしたら大変だと思っ  
たらしい。

だけど、森で少しの間その村人の姿を見失い、もう一度見つけた時に、異変が起きた。

「……その者は、夜空に浮かぶ満月を見つめながら、まるで獣のよう  
に吠えたんです。するとその姿が、見る見る内に人の姿ではなく

なつて……！」

「……化物になった、って言うのかよ？」

話を聞いていたジグランが、信じられないといった表情で呟いた。ダンテさんは震えるように頷きながら、それでも語るのを止めようとはしなかった。

「最初の犠牲者は、そこに偶然通り掛かった旅人でした」

物影に隠れ、状況を見ている事しか出来なかったダンテさんの眼の前で、狼の化物と化した村人は、その旅人に襲い掛かり、そして。

「……酷い」

辛そうに呟いて、レイミーはグツと眼を閉じた。彼女はあたしと違って、その眼で死体を目撃している。だからその分、容易にその時の惨状を想像出来てしまったんだろう。

ダンテさんも、そんなレイミーの心中を察したのか、酷く辛そうな顔をして眼を伏せた。

「それから毎月、満月の夜になると同じような事が起こり、その度に村の者が行方不明になっていきました。何度も『ギルド』や正規軍に助けを求めようと思ったのですが、人が獣になるなんて話を信じてもらえる訳がないと、こうして黙っている事しか出来ませんでした」

「……ちよつと待てよ」

「？ どうしたの、ジグラン？」

ダンテさんの言葉の中から、ジグランは何かを拾い上げたみたいに、やや首を傾げて言葉を紡いだ。

「オレの勘違いかも知れねえけどよ。満月の夜って……、今夜なんじゃねえか？」

「！」

そういえば、と思い、あたしも窓から見える夜空を見上げた。

すると確かに、空には丸々とした神秘的な光を放つ月が、優雅と言える様子で浮かんでいた。

その月を見て、あたしが何だか嫌な感じを覚えた時だった。

あたしと同じように窓の外に眼を向けていたレイミーが、不意に口を開いた。

「ダンテさん。この後、村の人たちと集会を開く予定とかあります？」

「？ いえ、ありませんが……」

訝しげな顔をして言葉を返すダンテさんに、レイミーは笑顔を見せた。けどその笑顔は、嬉しさや楽しさから出る笑顔じゃなかった。完全に、不味い状況に置かれた人が見せる引き攣った笑顔だった。

「そうですか。じゃあ多分、今メチャクチャババい状況に置かれますよ、アタシたち」

「どういう事ですか……？」

相変わらず顔を引き攣らせたままのレイミーに、ダンテさんは首を傾げた。

と、その時。窓辺に立って外の様子を窺ったジグランが、怒鳴るように言った。

「くそっ！ いつの間にか囲まれてやがる！」

「え？ ええっ！？」

状況が飲み込めず混乱している様子のダンテさんを尻目に、あたしはジグランと同じように窓辺に立って外を見た。するとそこには、異様な光景があった。

「村の人たちが、この家を囲んで……！」

あたしが感じた嫌なもののは正体はこれだったのだろうか？

ダンテさんの家を囲む村の人たちの表情は、眼が虚ろで、身体を力無くダランとさせて、不気味に軽く左右に揺らしている。そう、まるで自分の意志じゃなく、何かに操られてるみたいに。

「まさか……！」

あたしはハッとして、傍らのジグラン、そしてレイミーを見た。

二人も同じ事を考えているらしく、軽く頷いて口を開いた。

「多分アタシたちの予想通りなら」  
「村の奴ら全員が、化物に変貌するって事だ！」

## 第五章 満月の夜（後書き）

この章に来て、ようやくバトルらしいバトルが描けたかな？という気がしています。

この調子でチャツチャと魔女の森編終わらせたいですねえ（笑）

## 第六章 You guys are beast?

『ウエアラフ人狼』が姿を変貌させるのは、満月の夜。

知識として得ていたはずのその情報を、俺は油断から完全に見落としていた。

リシドの言っていた通り、満月の夜という状況は、『魔術』に關しても重要な役割を持っている。

つまりは、『魔術』の力の増幅。

俺たち『魔術師』の中でも、それは有名な話だった。満月の夜に『儀式』や『術式』といった『魔術』的な物事を行うと、飛躍的にその力が増大する、というものだ。

なぜ力が増すのかという疑問は、『魔術』が生まれて何百年と経つこの世界でも、未だ解明されていない。

一説には、月には魔の者が住んでいて、満月の夜にその魔の者たちが地上に降りてくるからだ、なんて言われてる事もある。

月に魔の者が住んでいるなんて、『魔術師』の俺からしても何とも荒唐無稽な話だ。それに、今はそんな話をしている場合じゃない。とにかく、今はその満月の夜だ。

あのリシド・ベイワークと言う『魔術師』は、この日が来るまでに何らかの方法であの集落の人間に『獣化』の『魔術』を施したんだ。後は時が来れば、勝手にその『魔術』は発動する。

「でも、だったら何であいつは退いたの？ 『魔術』が勝手に発動するなら、あたしたちの相手をしてもらいたくないはずでしょ？」

森の中を駆け抜けながら、俺の見解を聞いていたシャルミナは、そう言っつて首を傾げた。俺は走りながら、横合いのシャルミナに言葉返す。

「多分あいつ自身が近くにいて、何らかの調節を行なったりしなきゃいけないんじゃないかな？ そもそも人を操るっていうのは、言葉で言う程簡単な事じゃないんだ。だって操られる人間自身が、操

るうとする人間とは全く違う意志の下に動いてるんだぜ？ 宗教やら何やらで思想が纏まってるならまだしも、今回の場合はそれとは全然違う訳だしな」

「確かに、そう言われると納得出来るわね。……だけど、あの集落の人たちを解放出来ると思う？ あのリシドって男が行使してる『従魂魔法』ってヤツから」

不安そうに語るシャルミナを見て、不謹慎だと思いつつも、俺はどこか安心していた。

彼女にとってあの集落に住む人間は、全くと言っていい程接点のない、言わば赤の他人だ。その人間の身を案じているという事は、彼女も普通の感情を持った普通の人間なのだ。

その事が改めて確認出来た気がして、俺は少し嬉しかった。

自然と口元を緩ませていると、案の定訝しく思ったのか、シャルミナが声を掛けてきた。

「何よ？ 何でちよつと嬉しそうな訳？」

「いや、何でもねえよ」

俺はクスツと笑い返してから、すぐさま気持ちを切り替えた。

「解放する事自体は出来るはずだ。シャルミナも見ただろ？ あの

野郎が使ってた、ドス黒い光を放つ水晶を。あれには多分、『人狼<sup>ウェアウルフ</sup>』

一族の魂が閉じ込められてるはずだ。あれを破壊して、その魂たちを解放してやる事が出来れば」

「操られてる人たちも元に戻る、って事？」

「その可能性は高いと思うぜ？」

リシドの扱う『従魂魔法』というものの全てを解説出来る訳ではないが、俺にはリシドが持っていた水晶が、奴自身の『魔術』の核として成り立っているような気がしてならない。

とにかく今は一刻も早く、あの集落へ向かう事が先決だ。集落に辿り着きさえすれば、その辺りの事もはっきりするだろう。

「急ごう。これ以上、余計な犠牲者を出さない為にも……！」

俺の言葉に、シャルミナは無言で頷いた。

森の中を駆け抜ける俺たちを、夜空に浮かぶ満月の光が静かに照らしていた。

ダンテさんの家を囲む村の人たち。その様子に困惑しているあたしたちの眼の前で、異変は突如として起きた。

一番最初に異変が起きたのは、家のすぐ傍に佇んでいた体格のいい男の人だった。

突然、身体を小刻みに震えさせ始めたかと思うと、服から露出している部分の肌が、見る見る内に銀を思わせる毛に覆われ、手の爪が猛禽類もうきんるいのように伸び、顔と呼ばれる部分にあるのは、もう人間のものじゃなかった。

「狼……！」

窓辺からその変化を見つめていたジグランが、信じられないといった様子で呟いた。

その間にも、異変は止まらない。

その男の人の傍にいた細身の男性が、その男性の後ろにいたショートカットの女性が、ダンテさんの家を囲む村の人たち全員が、連鎖反応でも起こすかのように次々とその姿を変貌させていった。

低く唸り声を上げ、獐猛な鋭い目付きでこつちを睨んでいるその姿はまさしく、『人狼』。

「ああ……ッ！ ああ、なんて事だ……！ この村は……、化物の巣になってしまったのか!？」

眼の前の異様な光景に、ダンテさんは顔を真っ青にして叫んだ。確かに、眼の前で起きている出来事は信じられない事だ。でもな



ぜか、あたしの興味は全然別の所に向いていた。

それは、眼の前にいるダンテさんだ。

もし本当に、この村の人間全員が『獣化』の『魔術』に支配されているんだとしたら、どうして眼の前にいる彼だけは、未だにその兆候が見られないんだろう？ 今この家を囲んでいる村の人たちは、間違いなく一人残らず変貌しているのに……。

だけど、あたしはその謎を解消する暇は無かった。

「リネ、伏せる！」

「……！」

突然横合いにいたジグランが、あたしの身体を引っ張るような感じで、無理矢理床に押し倒した。

するとその直後。ガシャアン、という音と共に、家の窓ガラスを突き破って『人狼』と化した村人が飛び込んできた。

あたしが身体を起こすと、『人狼』はその鋭い眼を、あたしたちにギロリと向ける所だった。

「ボサツとしない！ 逃げるよ！」

ダンテさんを庇っていたレイミーの掛け声で、あたしたちは一目散に家から飛び出した。

だけど、当然向かった先には『人狼』の群れが待ち構えている。

『魔術』によつて獣と化した村の人たちは、全員が獲物を求めるような眼であたしたちの姿を捉えた。

「この……ッ！」

苛立つたような声を上げ、レイミーが腰にある折り畳み式の薙刀を構えようとした時だった。あたしはほとんど反射的に、彼女の腕を取つてその動きを制止した。

いきなり腕を掴まれたレイミーは、驚いた様子であたしに言う。

「なッ、何すんのよ、いきなり!？」

「戦つちやダメ！ この人たちはただ巻き込まれただけの、普通の人たちなんだよ!？」

「そんな事言つてる場合!？ 話を通じる状況じゃないわ！ 戦わ

なきや、こつちが殺されんのよ!？」

「それでもダメ!!! もし万が一相手を殺しちゃったら、あたしの力じゃ治せないんだよ!？」

「だからって　!」

レイミーがそう言い掛けた時、一体の『人狼』が彼女に飛び掛かっってきた。

多分あたしもレイミーも、しまったと思っただろう。

だけどその鋭利な爪と牙は、レイミーに届く事は無かった。

「何しようとしてやがんだゴルアアツ!!!」

物凄い巻き舌と共に、横合いから間に入ったジグランの放った右拳が『人狼』の顔面に炸裂して、その身体を後方へ吹き飛ばした。

呆気にとられるあたしたちの前で、ジグランは軽く息を吐き、右腕をストレッチするみたいにブラブラさせた。

「要するに、殺さなきや何の問題もねえんだろ?　ならお前らは引つ込んで。体術使いのオレの方が、相手を殺す確率は結構減るしな」

そう言っただジグランは両手をそれぞれ握り拳にして、向かってきた二体の『人狼』を、それぞれ右ストレート、左アッパーで軽く吹き飛ばした。

すると、まるで休憩を挟むみたいに、彼は一旦その場で二、三度軽くジャンプして、着地と同時に『人狼』の群れに飛び込んだ。

「オラオラオラオラー!!!　死にてえ奴から掛かって来いやあああつ!!!」

その、周りへの配慮を一切考えていない鬼みたいな戦いつぶりに、あたしは苦笑しながら隣に立つレイミーに尋ねた。

「ねえ、レイミー。ジグラン……、さっきあたしが言った事ちゃんとわかってるのかな……?」

「……まあ、こうなったらもう、そう願うしかないわね。こんな事言うのアレだけど、多分この件が終わったら、あんたたくたくたになるまで『治癒』の力を使う事になるよ」

それはつまり、怪我人が多くてそれを治す為に、という意味なんだろう。その時の事を考えると、あたしはただ苦笑して状況を見守る事しか出来なかった。

と、その時だった。

「ホウ……。この村の『人狼』たちを使って、呆気なく邪魔者を消すつもりだったんだが……。どうやらそう簡単に行きそうもないな」

「！」

ジグランの戦いに気を取られていたあたしたちは、不意に頭上から聴こえた声に振り返った。

見ると、ダンテさんの家の屋根の上に、黒いローブに身を包んだ怪しげな男が立っていた。その男の漆黒の眼が、あたしたちを蔑むあはげすかのように見つめている。

「誰!？」

レイミーは警戒心を露わにして、瞬時に薙刀を構えた。

すると男は、口元にニヤリとした笑みを湛えて、軽い調子で答えた。

「俺様はリシド・ベイワーク。その化物どもを操ってる『魔術師』さ」

「! あんたがこれを……。!？」

レイミーは表情を険しくして、屋根の上に立つ男リシドを睨み付けた。だけどリシドと言う男は気にした様子がない。それどころかわざとらしく、怯えるようなポーズを取った。

「お〜お〜、怖い顔だな。折角の美人が台無しだぞ？」

「ふざけるんじゃないよ。あんた一体何がしたいんだ。この集落の人を化物に変えて、それが一体何になる？」

レイミーは薙刀を構える手にギリツと力を込めた。眼の前のリシドと言う男に対して、憤りを感じているのが見ていてわかる。

そんな彼女の様子に気付いているはずのリシドは、それでも表情一つ変えずに言う。

「これは全て実験なんだよ。俺様の研究の成果を実現させる為のな」

「……実験？ あんたまさか、そんな理由で関係ない人を巻き込んだって言う気!？」

「貴様は、俺様がその問いに答える事を望んでいるのか？ ……なら答えてやるう。その通りだ、とな」

レイミーを見つめ、リシドはこれ以上ないという程口角を上げ、強烈な笑みを作って言った。

それが完全に引き鉄になった。

「ふざけんなっ!！」

レイミーは強く地面を蹴りつけて、屋根の上にいるリシドと同じ高さまで跳躍した。そしてそのまま、構えた薙刀を真横に振るった。だけどその一撃は虚しく空を切った。

リシドは軽く飛び退いただけで、別の民家の屋根の上へと逃れていた。そして再びニヤリと笑い、レイミーを一瞥した。

「クク、本当に怖い女だな。さすがはレイミー・リゼルブ。あの『風守り』の女と何度も交戦しているだけの事はある」

「!?!? あんた、何でアタシの名前を……!？」

「知ってるさ。貴様らの事は前から知ってる。レイミー・リゼルブに、ジグラン・グラニード。貴様ら二人の姿なら何度も見たからな。遺跡を発見する手掛かりを得る為に、『風守り』の女と戦っていたんだろ?」

「見てたのか、アタシたちの事を……!?!？」

「まあ、俺様もある意味、『風守り』の女には世話になったからな。あの女の傍にいれば、嫌でも貴様らの事は知る事になる」

「シャルミナに世話になっただつて?」

首を傾げるレイミーの代わりに、あたしはディーンが気付いていた事をリシドに向けて言った。

「あなたが、シャルミナさんの影に隠れて殺人を行なってたんでしょ? そしてその罪を擦り付ける為には、シャルミナさんの傍にいる事が一番だつた。そういう事だよな?」

「おやおや、誰かと思えばあの紅髪あかがみが連れてたお嬢ちゃんじゃない

か。その推論は、あの野郎から聞いたって訳かい？」

リシドが言った紅髪あかがみという言葉に、あたしはわかりやすく反応した。この男は、もうディーンと遭遇してる！

「ディーンに会ったの？」

「ああ、ついさっきな。あの紅髪あかがみにはしてやられた。妙な炎剣の攻撃で、左腕が使い物にならなくなったよ」

そう言っただけでリシドは、左腕を庇さすうように摩こすってみせた。暗くてよくわからないけど、多分その腕をディーンの攻撃で焼かれたんだと思う。

「ただどあたしには、それよりも気になる事があった。それはもちろん、ディーンの安否だ。」

「ディーンはどこ！ 無事なの！？」

「一応は、な。今頃血相変えて、この集落に向かっているはずだ。何せこの集落の人間が化物になって、残った『普通の』人間を喰らおうとしてるんだからなあ！」

「！」

リシドの言葉が意味するもの。それはつまり、あたしたち以外の人は、みんな『人狼』になっちゃってるって事だ。そんな異様な空間の中で、未だにあたしなんか生きていられるのは、ジグランがその『人狼』と戦ってくれてるからだ。

その事を再認識したあたしは、不意にリシドが、ダンテさんの方に目を向けた事に気付いた。

「その男」

「ヒイツ！」

リシドに呼び掛けられて、屈んでいたダンテさんはビクツと身体を震わせた。多分この異様な状況が、怖くてたまらないんだろう。

そのダンテさんに追い打ちを掛けるみたいに、リシドは平然とした口調で言う。

「貴様はどうやら俺様の存在、もしくはこの騒動の一部始終を知っちゃまってたみたいだからなあ。貴様も『獣化』して操ってやるのか

とも思っただが、変身していない間に妙な事をされても厄介だ。だからこいつら三人と一緒に、口封じの為にここで殺しておく事にした」

「そ……、そんな……!!」

「悪く思っただよ。恨むんなら、余計なものを見ちまった自分自身を恨むんだな」

そうか。だからダンテさんだけは『獣化』の兆候が見られなかったんだ。

あたしは、ダンテさんの不安な気持ちを少しでも和らげようと思つて、屈んで彼の肩にそつと手を置いた。

すると、あたしと同じようにダンテさんを安心させようと思つたのか、屋根の上にいたレイミーが強い口調で言った。

「そんな事させると思つ？」

その言葉と、明らかに敵意を含んでいる鋭い眼差しを向けられたリシドは、それでも悠然とした様子で口を開く。

「さあ、どうだろうな？ 貴様がどれだけ勇ましくても、向こうはそうはいかないようだ」

「？」

レイミーが訝しげな顔をした、まさにその時だった。

「ぐあつ……!!」

「!! ジグラン!!」

屈んでいたあたしのすぐ隣に、地面を滑るようにしてジグランが倒れ込んできた。彼の身体には、引つ搔かれたみたいなきずがいくつも付いている。

「くっそ……!! このオレが高が狼なんぞに……!!」

悔しそうな顔をするジグランの視線を追って、あたしはパツと顔を上げた。

するとそこには、ジグランと激しい戦闘を繰り広げていた『人狼』たちが、身体に痣を作りながらも、未だ一体として倒れる事なくあたしたちに迫ろうとしていた。

「そんな……、気絶すらしてないなんて……」

あたしが眼の前の状況に愕然としていた、その時だった。

「噛み殺せ、『黒狼<sup>フレンジ</sup>』」

「あああああつ!!」

突然屋根の上から悲痛な叫び声が聴こえて振り向くと、レイミーの身体に無数の黒い狼が噛み付いていた。

「レイミー!!」

痛みで足が纏<sup>もっ</sup>れたんだろう。レイミーは屋根の上から転げ落ち、下にいたあたしたちのすぐ傍まで倒れ込んだ。

慌てて彼女の様子を見ると、案の定身体には酷い傷が刻まれている。

「レイミー、待ってて! すぐに」

治療するから、とは言えなかった。なぜなら『人狼』の群れが、すぐ傍まで迫っていたからだ。

「さあて。少々手間取ったようだが、漸くこれで終幕だ」

頭の上から声が聴こえて見上げると、さっきまでレイミーが立っていた位置に、いつの間にかリシドが立っていた。その彼の右手には、不気味な黒い光を放つ水晶が握られている。

「今宵は月に一度の祭りだ。 さあ『人狼』ども。存分に喰い散らかせ」

リシドはそう言って、あたしを見下ろしながら不気味な笑みを見せた。

背筋が凍り付いたような気がした。

冷や汗で額が湿っているのがわかった。

死というものが、すぐ眼の前まで迫っているのを嫌という程感じるのに、あたしにはそれに抗う力が無い。

怪我をした人は治せても、死んだ人は治せない。それと同じだ。

あたしには、死に抗える力が、無い。

「主役を差し置いて随分楽しそうじゃねえか」

たった一言。

そのたった一言で、あたしは暗い闇の中から救い上げられたような気がした。

あたしは泣きたくなる気持ちを必死に抑えて、声のした方を見た。その声は屋根の上。リシドの背後から聴こえた。

「いい加減終わりにしようぜ、リシド。その下らない実験ってヤツを！」

紅い髪の少年は、そんな風に笑って言った。

正直な所、あと少しでも集落に着くのが遅れていたら、リネたちは『人狼』の群れに食い殺されていたかも知れない。それが今の状況を見て思った事だった。

本当は、リシドの事なんてどうでもいい。リネたちさえ無事ならそれでいい。俺はこの場所に辿り着くまでの間、心の底からそう思っていた。

だが。

「主役を差し置いて随分楽しそうじゃねえか」

そう口にした時、俺は見てしまった。

視界の端で、傷付き倒れているレイミーとジグランの姿を。

そして、泣き出してしまうのを必死に堪えようとしている、リネの表情を。

多分、いやきつと、それが引き鉄になったんだと思う。

俺は自分の内から溢れてくる怒りで、一瞬思考回路がブツ飛んで



しまつたらしい。

「いい加減終わりにしようぜ、リシド。その下らない実験ってヤツを！」

眼の前にいるリシドに対して激しい怒りを感じているのに、口から出たのは意外と冷静な言葉で、しかも俺は笑ってしまっていた。

恐らく、今の俺には全くと言っていい程余裕が無い。ミレーナとの約束を破る事だけは御免だというのに、自制心が利かなくなっている。

「随分早い到着だな、ディーン・イアルフス。あと少し遅れてくれていれば、全てが上手く処理出来ていたんだがなあ」

俺の心中の葛藤を知るはずもないリシドは、わざとらしく挑発するような言葉を掛けてくる。

「シャルミナのおかげさ。この森に詳しいあいつがいたから、全然迷わずに進む事が出来たんだよ」

「ホウ、それはそれは。で、そのガイド役の女はどこにいる？」

「！」

俺がリシドの背後、リネたちに迫ろうとする『人狼』の群れを指差した時だった。

「『サークル・ウインダ旋風』！」

突然、群れの中心から竜巻が発生し、強風によって『人狼』たちが四方八方に吹き飛ばされた。

竜巻の渦の中心となった位置には、余波で起こった風に牡丹色の髪を靡なびかせる、シャルミナの姿があった。

「いつの間に……！」

背後を振り返り、驚きの声を上げるリシド。

その一瞬の隙を、俺は見逃さなかった。

屋根の上を疾走して瞬時に奴との距離を詰め、それに気付き振り返ろうとしたリシドの顔面に、速度を乗せた右拳を思い切り叩きこんだ。

「おぐつー!!」

俺の放った一撃は、リシドの身体を軽く吹き飛ばし、屋根の上から殴り落とす形になった。

ドシャツという音を立て、リシドが地面に倒れ込んだ所で、俺は鈍い痛みを感じた右手を軽く振ってから、襲われる寸前だったリネたちの許に跳躍して降り立った。

「リネ、怪我は無いか？」

「うん、あたしは平気。でも二人が……」

俺に安堵したような表情を見せた後、リネは自分の傍らに蹲るレイミーとジグランを心配そうに見つめた。

確かに二人とも怪我が酷い。リネの能力を使えば簡単に治る傷だろうが、だからと言ってそれで済む話でもない。

俺はその場に屈んで、視線を二人と同じにした。

「悪いな、二人とも。俺がもう少し早く着いてれば、余計な怪我させずに済んだかも知れないのに……」

伏し目がちに言うと、苦悶の表情を浮かべていたレイミーが、弱々しく笑って俺の額を小突いてきた。

「あんたが気にする必要ないだろ。これはアタシが油断してたから付いた傷だ。傷の程度を心配される事はあっても、謝られる通りは無いさ」

「レイミー……」

「それでも気が済まないって言うなら……、そうだな。あたしたちの代わりに、あのクソ野郎をブツ飛ばしてくれよ、フレイム・ウォーカー『炎を操る者』」

「……。それ、リネから聞いたのか？」

俺は浅く溜め息をついて、チラリとリネを見た。

彼女は「何か悪い事言った?」、なんて言いながら首を傾げている。全く……、自分で考えた通り名を自分で人に披露するなんて、彼女らしいと言うか何と言うか……。

「わかった。あの野郎をブツ飛ばす役、交代させてもらっぜ」

そう言ってレイミーたちをリネに任せ、立ち上がるうとした時だ

った。

「デーン！ リシドが！」

シャルミナの叫び声で俺はハッと顔を上げた。視線の先には、ドス黒い光を放つ水晶を握り、黒い煙を周囲に漂わせるリシドの姿があった。

奴の顔面的一部分。俺の右拳が入った辺りに、紫色の痣が出来ているのが辛うじて見えた。

「クク……、カハハハ。どこまでも邪魔な野郎だなあ。ええ？ 俺様の思い通りにならない人間程、ブツ殺してやりたくてたまらなくなる」

不気味な笑みを湛え、リシドは殺意の籠った眼で俺を見つめていた。

俺は不快な気分になりながらも、右手に炎を集束させ、フレイム「紅蓮の爆炎剣」を造り上げた。

奴の表情に怯んでいる訳にはいかない。ここでこいつを止めるんだ。これ以上、余計な犠牲を出さない為に。

「退かねえつもりなら容赦はしない。徹底的に叩きのめすぞ」

「ククク……。やってみやがれエエエツ！」

リシドが怒号を上げ、右手に握った水晶を高く掲げた時だった。

俺たちの周囲。シャルミナが竜巻で吹き飛ばした「人狼」たちの身体に異変が起きた。

痙攣けいれんするかのように身体を激しく揺らしたかと思うと、身体から黒い煙が出現し、それがリシドの許へと集まっていく。

後に残ったのは、獣に変貌していた姿を元の人間の姿に戻した、集落の人々だった。

「！？ 何をする気だ、リシド！」

叫ぶ俺をよそに、リシドはまたニヤリとした不気味な笑みを見せた。

「集え、集えよ数多にも。纏え、纏えよ幾重にも。我が魂の法の下、今こそ顕せその姿」

謎の言霊をリシドが詠唱し始めると、黒い煙が一カ所に集まり始めた。

リシドの言葉通りなら、あの黒い煙は、その一つ一つが抽出された獣の魂という事になる。それがまるで漂うように、何かを求めるように集束し、一つの存在として形を成していく。

「……！？ 何なの、あれ？」

獣の魂たちの集束が治まった時、そこには全く新たな存在が出現していた。

全身を黒く塗り潰す、闇に溶けるかのような毛並み。蛇の身体を思わせるような、根元で二つに分かれた長い尾に、四足歩行で屹立するその存在は、頭部にある紅い三つの眼で、鋭く俺たちを睨み付けた。

「黒い……、狼……！」

屈んだ状態のリネがそう呟くと、黒い狼は体長五メートルはあるうかという身体を軽く揺さ振り、鋭く太い牙の並んだその巨大な口を開け、天の満月に向かって咆哮した。

「グオオオオオオオオオオツツ！！！」

「ッ！」

大気を震わせる程の咆哮で、俺は一瞬顔を顰めた。

大きさが似ていても、すでに見慣れてしまった『ゴーレム』とは訳が違う。意志を持って動いているとはいえ、『ゴーレム』は生物ではない。物体と言った方が正しいだろう。

だが眼の前にいるこいつは違う。

『魔術』で、しかも無数の獣の魂で作りに出されたこいつは、物体なんかじゃない。

一つの生物として、生きている存在だ。

「全く、『魔術』というものはこの上なく面白い技術だ」

クク、と笑いながら、リシドは愉快そうに続ける。

「人間を殺す。誰かを殺す。許せない相手を殺す。憎い相手を殺す。気に食わない相手を殺す。殺すという行為の為なら、こんな化物す

らも創り出す事が出来る！ 『魔術』とは最高に面白い技術だ！

『魔術師』とは最高に愉快な存在だ！ なあ！？ デイーン・イアルフスツー！！」

『魔術』とは、人を殺す事のみの特化した技術。ゆえに人を生かし、また活かす事は出来ない。

その言葉が、俺の頭の中で繰り返し再生された。

第六章 You guys are beast? (後書き)

今回の章、展開的に仕方ないとはいえ、リネさんの語りがかなり長くなっています。

一体誰が主人公なんだと突っ込みたくなりますが、まあ大目に見てやってください(笑)

第七章 報いを受ける者（前書き）

またもや遅くなりました！（汗）  
魔女の森編、第七章開始です！

## 第七章 報いを受ける者

闇夜に浮かぶその姿は、まさしく化物と呼ぶに相応しいふさわと思った。ミレーナを探して一年間、一人旅を続けてきた俺は、行く先々で様々な事を経験した。言葉では言い尽くせないような戦いの場面に遭遇し、それなりの場数を踏んできたという自負もある。

だけど今の状況は、そんな俺でさえ異質な状況だと言わざるを得ない。

巨大な黒い狼の化物。そんなものに遭遇する機会なんて、一度たりとも無かつたんだから。

「……いくら『魔術』が人を殺す事に特化した技術だからって、こんなモンまで創り出せるなんて反則だろ」

低く唸り声を上げる狼の化物を見つめ、俺は独り言を呟いた。

微かに身体が震えている。恐怖心が全く無い訳じゃないが、この震えは恐れから来るものじゃない気がした。多分俺は、心のどこかで歓喜しているんだ。自分にとって未知なる存在が、眼の前に現れた事を。

「さあ始めよう！ 貴様らが平穏を取り戻すか！ それとも俺様が大笑いするか！ 勝負だ！！」

リシドは高らかに叫び、右手の水晶を掲げた。

それに呼応するかのようには、水晶からドス黒い光が放たれた。

「喰い散らかせ、『キメラ・ファンゲ混合黒狼』」

「グオオオオオオオオオオオッ！！」

リシドが命じると、黒い狼は再び大気を震わせる程の雄叫びを上げ、俺たちに襲いかかってきた。

「リネ！ レイミーたちを連れて下がってる！」

俺は返事も聞かずに『フレイム・ロンゲソード紅蓮の爆炎剣』を構えて走り出した。それ



だけで、黒い狼は標的を俺に定めたようだ。俺が走る方向に向けて併走してくる。

俺はチラリと、リシドの方を一瞥した。奴の右手に握られた水晶は、相変わらずドス黒い光を放ち続けている。

(あれを破壊する事さえ出来れば……！)

自分が狙うべき物に、ほんの一瞬気を取られた俺は、それだけで充分な隙を作ってしまった。いた。

「デーン！ 危ない！」  
「！」

完全に虚を衝かれた俺が、シャルミナの叫びに気付いた頃には手遅れだった。黒い狼の鋭く太い爪を備えた前足が、俺の身体を引き裂こうと振り下ろされた。

俺の身体の肉が抉られ、辺りに鮮血が飛び散る、事は無かった。

突然巻き起こった一陣の風によって、俺はあらぬ方向へと吹き飛ばされたのだ。

「どわあああぁっ!？」

数秒の間、無重力を体験した俺は、数メートル飛んだ先で盛大に地面を転がった。漸く身体が停止した所で、俺はガバツと起き上がって牡丹色の髪の少女を睨んだ。

「おいシャルミナ！ 助けるつもりならもっとソフトにお願いします！」

「死に掛けてたんだから文句言わない！」

「それはそうだけどゴメンの一言すらねえの!？」

これなら普通に攻撃されてた方がよかった気がする。……もちろん冗談だけ。

と、回避された事に憤慨したかのように、黒い狼は短く吠え、今度は俺を噛み千切ろうと、巨大な口を開けて突っ込んできた。俺の位置からだ、生物らしい血の通った口腔内が丸見えだ。

「俺を餌にすんのは止めといた方がいいと思うぜ？」

逃げる事はせず、俺は真正面から黒い狼に向かって駆け出した。黒い狼の巨大な口が、すぐ眼の前まで迫る。

その瞬間。俺は黒い狼の顔を飛び越える為に、地面を蹴って前方に高く跳躍した。飛び退いた先で下を見ると、巨大な口がガチンと閉じる所だった。

「おらあつ！」

俺は空中で身を翻し、炎剣の一撃を黒い狼の首筋辺りに叩き込んだ。

炎剣の切っ先が触れた瞬間、爆発を伴って炎が噴き出した。

「グガアアアアアッ！！」

苦痛の叫びを上げる黒い狼を背に地面に降り立った俺は、瞬時にシャルミナに呼び掛ける。

「シャルミナ！」

名前を叫んだだけで、彼女は全てを察してくれたらしい。痛みに悶える黒い狼に向けて、追い討ちを掛ける風を生み出した。

「『斬風』！！」

放たれた鎌鼬が、黒い狼の身体を切り裂き、赤黒い鮮血が噴水のように吹き出した。

その一撃で耐えられなくなったのか、黒い狼はその巨体を地面に沈めた。

轟音が辺りに響く中、俺は『フレイム・ロンゲソード紅蓮の爆炎剣』を消滅させた。

「この村の中なら、大技を使っても問題ないよな！」

草木に覆われた森の中なら大技を放つのは危険だろうが、村の中ならある程度拓けていて、周りへの被害も少なく済むはずだ。

即決した俺は、新たな炎を生み出し、それを頭上に集束させた。

黒い狼はシャルミナの一撃で動けなくなっている。大技を叩き込むなら今が絶好のチャンスだ！

「『クリムゾン・レイズン深紅の流星』！」

標的を定め叫んだ瞬間、炎の塊が弾け飛び、無数の火球と化した。その全てが、傷付いた黒い狼の身体に次々と降り注いだ。

「グギャアアアアツ!!」

無数の連鎖爆発を起こし、黒い狼は身体から煙を上げながら沈黙した。

俺はそれを確かめた後、軽く息を吐いて気持ちを切り換えた。

「てめえの実験の成果とやらも、この辺が限界らしいな、リシド」  
視線を移し、俺は暗闇に佇むリシドを見つめた。奴の表情はこの距離からだを読み取り辛い、恐らくもう奴にこれ以上の手はないはずだ。

後はあの水晶を破壊すれば、それで全てが終わる。

そう気を抜き掛けた時だった。

「ククク……、カハハハハハ！」

「!?!」

リシドは唐突に笑い始めた。まるで、自分はまだ負けていないと口にしているかのようなのだ。

「何が可笑しい？」

「甘いなあ、デイン・イアルフス。甘過ぎて笑いが込み上げてくる。まさかもう終わったなんて思ってるんじゃないだろうか？」

「何……？」

訝しく思い尋ねた所で、俺はハツとした。

奴の右手。そこに握られている水晶からは、未だにドス黒い光が放たれている。それが意味するもの。

「まさか……！」

嫌な予感がして振り返ろうとした、まさにその時だった。

「グオオオオオオオオオオツ!!」

大気を震わせる巨大な咆哮。俺の視線の先には、さっき与えたはずの傷が完全に癒えた状態の黒い狼が、獲物を見つめるような眼で俺を睨んでいた。少し離れた位置には、俺同様に驚いた表情をしたシャルミナの姿があった。

「ククク、辟易へきえきしたか？ 『キメラ・ファンゲ混合黒狼』は実体があるとはいえ、そ

の存在の源は獣の魂そのものだ。貴様らがいくらダメージを与えた

所で、倒す事など不可能なんだよ」

勝ち誇ったように、暗闇の中にリシドの愉快そうな顔が浮かび上がる。

だが俺は不快な気持ちに囚われなかった。むしろリシドの言葉が、俺にある確信を齎もたらした。

奴の『従魂魔法』の核となってるのはあの水晶。つまりあれを破壊すれば、奴の『魔術』は消えて無くなるはずだ。

だがリシド自身を狙う為には、『混合黒狼』キメラ・ファンゲとか言うあの化物を先に何とかしなければならぬ。全く、厄介なものを呼び出しやがって……！

「考え事とは余裕だなあ、デイン・イアルフス！」

「……！」

思考に囚われていた俺は、『混合黒狼』キメラ・ファンゲが動き出している事に気付くのが一瞬遅れた。黒い狼は既に俺のすぐ眼の前まで迫り、鋭く太い爪を備えた右前足を振り下ろそうとしていた。

しまった……！ そう思った瞬間だった。

「サイクル・ウインド  
旋風」！！

一体いつから動き出していたのか、俺と黒い狼の間に割って入ったシャルミナが、暴風の壁を作り、黒い狼の一撃を受け流そうとした。

「シャル」

俺が名前を呼ぼうとしたその瞬間、受け切れなかった爪撃がシャルミナの身体を引き裂き、鮮血が俺の視界を紅く染めた。

攻撃の余波で後ろに飛ばされたシャルミナを受け止めた俺は、彼女と共に地面を転がった。数メートル転がってから上半身を起こし、俺は抱えているシャルミナの身体を見た。

「シャルミナ！ 大丈夫」

彼女の胸元に視線を落とした俺は愕然となった。黒い狼の攻撃を真正面から受けたせいで、彼女の胸部は斜めに肉が抉られ、夥しい量の血が流れ出ていた。意識を失っていない為、彼女は苦悶の表情

を浮かべている。

「ッ！ リネ！」

俺は少し離れた位置でレイミーたちの傷を治療しているリネの方を振り返り、シャルミナの身体を抱えて立ち上がるうとした。

だが。

「ガアアアアアアアアアアッ！」

俺の行く手を阻もうとするかのように、『キメラ・ファンク混合黒狼』はこっちに向かつて突進してくる。

「邪魔すんじゃねえッ！！」

吐き捨てるように叫び、俺は瞬時に虚空に十字の炎を出現させ、

その炎の中心を殴り飛ばした。『深紅魔法』の技の一つ、『烈火の十字爆撃』。その炎で『キメラ・ファンク混合黒狼』の額に爆撃を与えた。

「グギヤアアアアアアッ！！」

黒い狼が痛み悶えている間に、俺はシャルミナを抱えてリネの許へ走り寄った。

「リネ、治療を頼む！ このままじゃシャルミナが死んじゃう！！」

「わかった！ こっちは任せて！」

血塗れのシャルミナを見ても、リネは以前のように気絶する事は無く、すぐさま行動を起こしてくれた。

俺はシャルミナをリネに預け、再び戦場に舞い戻った。『烈火の十字爆撃』の一撃で怯んでいた『キメラ・ファンク混合黒狼』は、既に体勢を立て直している。

「おいおい、随分と良心的だな。あの女の怪我は応急処置でどうにかなる傷じゃない。処置する暇も無く、あの世行きだ」

『キメラ・ファンク混合黒狼』の足下に立つリシドは、ククツと笑いながらこっちを見つめていた。

「さあどうだろうな？ 世の中には、てめえの知らない事も多分たくさんあると思っぜ？」

「……何？」

怪訝な顔をするリシドを相手にせず、俺は黒い狼とリシドの手に

ある水晶を交互に見つめた。

シャルミナの『斬風』フレイド・ウイング、そして俺の『深紅の流星』クリムゾン・レインを受けてもほぼ瞬時に復活する黒い狼。こいつを抑える為には、生半可な力じゃダメだ。

そしてあの水晶。あれがリシドの『魔術』の核になっているのは間違いない。あれを破壊する為には、こっちの攻撃を確実に叩き込まないといけない。

なら、やるべき事は一つ。

俺は両腕を水平に構え、両掌に松明のような炎を発生させた。

すると、恐らくさっきの『深紅の流星』クリムゾン・レインを見たからだろう。リシドは警戒するかのように顔を顰めた。

だが俺はニヤリと笑ってみせた。この動作は、『深紅の流星』クリムゾン・レインを放つ為の予備動作じゃない。

俺は炎の灯った両手を、そのまま胸の前で合掌するみたいに合わせた。そして静かに言い放つ。

「『フレイム・チェイン 紅蓮の縛鎖』」

俺が言葉を放った瞬間、足下から無数の炎の波濤が発生し、それが徐々に形を成しながら『混合黒狼』キメラ・ファンゲの許へ向かっていく。

「なっ!?!」

声を詰まらせ、その場を離れるリシド。その表情は驚きに満ちていた。

「炎の鎖だと……!?!」

奴の言った通り、俺の放った無数の炎の波濤は紅い鎖に姿を変え、暴れ回ろうとする『混合黒狼』キメラ・ファンゲの身体の至る所に撒き付き、その動きを封じ込めた。

「フン。何をするかと思えば、ただ動きを封じただけとはな。『深紅魔法』と言うのは、この程度のものなのか?」

「この程度つてのはどういう意味だ?」

「……何?」

「見てりゃわかるさ。『深紅魔法』は、てめえ如きが知った気にな

るような『魔術』じゃねえってな！」

叫ぶと共に、俺は足下から伸びている炎の鎖の根元に、右手に出現させた『紅蓮の爆炎剣』の刀身を勢い良くぶつけた。

その瞬間、炎の鎖が紅い光を放ちながら、『混合黒狼』の身体を炎と共に締め上げていく。

「グ、ガア、アアアアッ！」

「なっ……！？ 貴様何を」

「弾け飛べ、『紅蓮の縛鎖』」

それが発動の合図だった。

『混合黒狼』の身体を締め付けていた炎の鎖たちは、激しい炎の奔流となって黒い狼の身体を燃やし尽くしていく。

魂そのものだろうが、何度も再生しようが関係ない。『紅蓮の縛鎖』は『紅蓮の爆炎剣』の刀身との接触によって、撒き付いた対象物が消失するまで、その紅蓮の炎で焼き尽くす技だ。

これで文字通り、『混合黒狼』は封じ込めたも同然だ。

「クツ、ソがああああっ！ ふざけるなよ、デイン・イアルフス！ こんなもので俺の『魔術』を破ったとでも言うつもりか！？」

「イチイチうるせえんだよ、リシド・ベイワーク」

俺は炎剣を構え、咆えるリシドとの距離を瞬時に詰めていた。

狙うのは、奴の右手にある水晶。

「！ 止め」

「容赦はしねえって言ったはずだ！！」

逃げ出そうとするリシドの右手目掛けて、俺は『紅蓮の爆炎剣』を勢い良く振り下ろした。

爆炎と共に、何かが砕け散る音が聴こえた。

あたしは治療を終えると深く息を吐いた。

正直な所、『治療』の力を乱発した事で、だいぶ身体が疲労してる。レイミーの言っていた通り、あたしは既にくたくたに近い状態だった。

だけど彼女の傷は、そんな弱音を吐いていられない程酷かった。シャルミナ・ファルメ。

『風守り』の一族の生き残りと言われている女の子。

意識を失って横になっっている彼女を、あたしは改めて見つめてみた。こうして見ると、歳はあたしやディーンと同じくらいに思える。綺麗な牡丹色の髪が、夜風に靡なびいて揺れている。

「……綺麗な人だな」

気付いたら、あたしはそんな風に呟いていた。

でも確かにその通りだと思う。眼の前で横になっっている彼女を見ていると、可愛い女の子と言うよりも、落ち着いた雰囲気のある綺麗な女性、と言った方が正しいように感じた。

ところが、そんなシャルミナさんから目を離さないでいたあたしは、突然近くで巻き起こった炎の奔流に、ハツとして顔を上げた。

見ると、さつきまでディーンと対峙していたはずの黒い大きな狼が、激しい炎の渦に撒かれて悶え苦しんでいた。間違いなくあの炎は、ディーンの『魔術』によるものだ。

「あの狼を、あんな簡単に封じ込めるなんて……」  
「炎を操る者」フレイム・ウォーカー って通り名もピッタリだと思うんだけどなあ。

なんて、今の状況に対して少し不謹慎な事を考えながら、あたしは紅い髪の男の子の方を見た。彼は地面に倒れたりシドに視線を向けて、何かを喋ってるみたいだった。

そのディーンの許に駆け寄ろうと思った所で、あたしはふと視線を戻した。



「え？」

そこには本当に、可笑しい状況が巻き起こっていた。

「シャルミナさん……？」

視線の先に横たわっていたはずの彼女の姿が、いつの間にか消え去っていた。

「『魔術』の核になってた水晶は砕けた。てめえの負けだ、リシド。もう諦めろ」

愕然とした様子で砕けた水晶を見つめるリシドに、俺は警告するつもりで言った。これで終わりだ。この森で起こった、不可解な『魔女伝説』騒動の全てが。

だが、どうやら俺の考えは甘かったらしい。もう少し、早く気付くべきだった。

地面に膝を付いているリシドの様子に、不気味な程の異変が起きている事を。

「が……ッ、ああ……、がッア……ッ」

「？ おい、リシド……？」

それは、膝を付いて苦しそうに悶えるリシドの肩に、右手を伸ばそうとした瞬間だった。

突然リシドの身体中から、獣の魂であるあの黒い煙が、辺りに飛び散るかのよう吹き出した。

「なっ!？」

警戒心を解き掛けていた俺は、一瞬奴の『魔術』の罫に嵌はまったのかと冷や汗をかいた。

だが違う。これは罫なんかじゃない。

これは、この現象は！

「リシドの『魔術』が、暴走し始めてる……！」

俺たち『魔術師』は自分の操る『魔術』を熟知し、理解し、構成する事で『魔術』そのものを制御している。

だが何か引き鉄になってそのバランスが崩れると、『魔術』は容易く暴走を起こす。

バランスを崩すきっかけになる要因は色々ある。感情の起伏、体力や精神力の低下、もしくは、『魔術』を構成している核となるものが壊れた場合だ。

俺がリシドの水晶を破壊した事で、奴の『魔術』のバランスが崩れてしまったんだろう。

だがリシドが本当に優れた『魔術師』であるなら、核そのものを破壊された程度で『魔術』が暴走するはずがない。『魔術師』とは、そんな簡単に崩壊を起こす存在じゃない。

可能性があるとすれば、奴の『魔術』そのものに原因がある。

「獣の魂を抽出して操るなんて『魔術』が、そんなに簡単にいくはずない。要は掌握し切れてなかったって事だ。人だろうと獣だろうと、魂つてもものは簡単に操れる代物じゃねえんだよ」

苦しみ悶えているリシドに、俺の言葉は届いているだろうか？

俺は心の隅に若干の哀れみを覚えながらも、それでも思う。この結末は必然だ。リシド自身の、行動が招いた結果だ。単なる自業自得でしかない、と。

『紅蓮の爆炎剣』を静かに構える俺の前で、リシドの身体が変貌していく。

文字通り、化物へと。

「ぐがあああああああつ……！」

この村の人間に起きていた現象と同じ物が、リシドの身体にも表

れていた。

つまり、『人狼』への変異だ。

服から露出している部分の肌は、銀を思わせる毛に覆われ、手の爪が猛禽類もうきんるいのように伸び、狼の頭部を備えた姿。『人狼』の顕現だった。

「デイ……、イア、フス……」

辛うじて言葉を発したりリシドは、著しく言語機能が低下していた。恐らく俺の名前を呼んだんだろうが、上手く聞き取れなかった。

「……今のあんたはどっちなんだ？ 人間か？ それとも、化物か？」

この状況、俺は一体どうするべきなんだろうか？

『魔術』で人を殺さない。これはミレーナとの約束だ。俺自身それを守りたいし、これからもそれを貫くつもりでいた。

だけど今、眼の前にいる存在に対して、俺は決断を下せずにいる。

『人間』として『倒す』べきか。

『化物』として『殺す』べきか。

『従魂魔法』と言うものを、一番理解していたリシド自身がこうなつてしまった以上、俺には元に戻す方法なんてわからない。思い付く事も出来ない。

「ごあああああああつ！！」

「！！」

迷いは人の動きを鈍らせる。

昔ミレーナに言われた通り、迷っていた俺は手痛い一撃をリシドから喰らった。左側頭部に入った掌底で、俺はノーバウンドで二メートル程吹き飛ばされた。最早腕力が、人間のそれとは比べ物にならないなくなっている。

地面に伏した俺は、すぐさま立ち上がった。

だが、視界がグラリと揺れる。頭の左側に痛みを感じて手を添えると、ヌルリとした感触があった。恐らく掌底を受けた際、あの鋭い爪で若干引き裂かれたんだろう。

「くそ……っ！ 迷ってる暇は無いつてか！」

痛みを堪えて、頭を軽く振った時だった。頭上に何かの気配を感じた。

「！」

見上げるよりも飛び退く事を選んだ俺は、前方に向かって身体を投げ出した。

その瞬間。上空から落下してきたリシドが、両腕を振り下ろして地面を砕き、爆発のような轟音が響き渡った。

俺が身体を起こすと、土煙の中から、まさしく獲物に飛び掛かる狼のような速さで、リシドが猛然と突っ込んできた。

「チイツ！」

舌打ちしながら、俺は振るわれたリシドの右腕を屈んで回避し、身体が交差する瞬間を狙って、リシドの胴体に炎剣を叩き込んだ。

『フレイム・ロンゲソード紅蓮の爆炎剣』の能力によって、リシドの身体から爆発と共に炎が噴き出た。

「ごがあああああああっ!？」

悶えるリシドの背に立った俺は、続け様にと虚空に十字の炎を作り出した。

が、俺の動きはそこで止まる。戦闘モードに移行していた俺の感覚が、一気に引き戻された。

この状況に及んで尚、俺は決断出来ずにいた。

『倒す』べきか、『殺す』べきか。

まるでシャルミナが自分の身体に刻まれた『印術』をそう呼んでいた時のように、俺は思わず苦笑した。

「……これじゃあまるで、呪いみたいじゃねえか」

虚空に静止していた十字の炎が、俺の意志に呼応するみたいに消えた。それと同時に、俺は強く唇を噛んだ。

「ちくしょう……!! どうすりゃいいんだよ!？」

叫んでも、答えをくれる相手はいない。そんな事は自分でもわかりきってる事だ。

「ただ俺は、叫ばずにはいられなかった。答えを求める俺の心が、無理矢理そうさせていた。」

と、その時。

「ぎ……っ、がああああっ！」

痛みに悶えていたリシドが一声叫びを上げたかと思うと、突然森の方向へ向かって走り出した。まるで俺の隙を付いて、逃げ出したみたいだった。

「ヤバイ！ 森に逃げ込まれたら、他にも被害が……！」

答えは出ていない。

「けど今度こそ本当に、迷っている暇は無かった。あの状態のリシドを放っておけば、また今までみたいな被害が出るかもしれない。奴が言葉の通じない化物になっていいるなら、尚更だ。」

リシドの後を追おうと、走り出そうとした時だった。

「デーン、待って！」

背後から呼び止められ振り返ると、そこには酷く慌てた表情のリネがいた。俺が立ち止まったのを確認すると、突進するみたいな勢いで駆けてきた。

「何だよ？ 今ゆっくり話してる時間は」

「シャルミナさんがいなくなっちゃったの！」

「ああ！？」

静けさを取り戻し始めた村の中に、俺の叫び声が響いた。俺はリネに掴み掛かりそうな勢いで尋ねる。

「いなくなっただって、あいつ大怪我してんだぞ？ 『治療』はもう終わったのか？」

「う、うん……。だけど、あたしの『治療』の力が弱まり始めてたから、完治してる訳じゃないの。それなのに今動いたりしたら、また傷口が開いちゃうかも知れない……」

「ッ！ くそ！ シャルミナの奴、この忙しい時に輪を掛けやがって……！」

シャルミナの行方は心配だが、今はここでもたもたしている訳に

もいかない。こうしている間にも、リシドはどんどん村から離れて行ってるはずだ。

リシドとシャルミナ。今、俺が追うべきなのはどちらか。 。  
だが、こっちの決断は迷わずに済んだ。

俺は顔を上げ、リネに指示を出す。

「とにかく、リネはこの辺りを探してみてくれ。完治してないんなら、そう遠くへは行けないはずだ」

「わかった！ デイーンはどうするの？」

「俺はリシドを追う。あのままにしとく訳にはいかねえからな！」

俺はリネと同時に頷き、彼女とは別の方向に向かって走り出した。

月明かりの下、俺の視界に再び草木が生い茂った。

## 第七章 報いを受ける者（後書き）

更新遅れてすいませんでした。

楽しみにして下さった方がいるなら本当に申し訳ない限りです。

とりあえず、更新が遅れた理由は活動報告の方で話したいと思いません。

## 第八章 命と魂（前書き）

このお話で『フレイム・ウォーカー』が20話目になりました！  
この調子で目指せ30話目！（笑）



## 第八章 命と魂

『倒す』べきか、『殺す』べきか。

リシドの後を追う今になって、俺は冷静さを取り戻し、少し考えを改め始めていた。

そもそもその二択に絞らなければならない理由は何なのか？

絶対にその二択じゃないとダメなのか？

別に今回の一件は、誰に指示された訳でもない。

俺が勝手に関わって、勝手に行動した上で起きている事態だ。だから最後まで選択権は俺にあるはずだ。どれだけ自由にやっても誰にも文句は言えないはずだ。

「『倒す』でもなく、『殺す』でもなく、『止める』んだ。これ以上被害を出さない為には、俺がリシドを『止める』んだ」

へ理屈だと言われるかも知れない。

単なる理想論に過ぎないと、笑われるかも知れない。

だけどそれがどうした。

理屈だろうが理想だろうが、誰にも文句は言わせない。俺は俺のやりたいようにやる。

思えば俺は、ミレーナとの約束を果たすと決めた時からずっとそうしてきたんだ。

「とまあ、心の整理は出来た訳だけど」

俺は森の中に立ち尽くし、満月の浮かぶ未だ暗い空を見上げて呟いた。

「どうやってリシドの野郎を探せばいいんだろ？」

リシドの後を追って森に入った時点で、既に奴の姿はどこにもなかった。ここまでの漠然と前に突き進んできただけの俺は、今更のように現実を受け入れるしかなかった。

手掛かりがない。

それどころか、今は夜だ。

空には雲一つなく、満月が浮かんでいる為光源がないという事はないが、それでも昼間に比べれば暗いという事に変わりはない。

この状況下の森の中で手掛かりなく誰かを探すというのは、不可能に近いんじゃないか？

「くそ。あそこでリネに捕まってさえなけりゃ、もう少しまともに後を追えてたかも知れねえのに……」

別にリネの行動に不満がある訳じゃない。彼女を責めても何の解決にもならない。

そもそもリネが俺を呼び止めた原因を作ったのは、シャルミナ・ファルメと言う一人の少女だ。

いなくなる直前に大怪我を負い、応急処置程度の『治療』しか受けていないってのに、シャルミナは突然姿を消したらしい。リネの慌てぶりから察するに、本当に突然いなくなっただろう。

「リネの奴、シャルミナを見つけたかな？」

なんて言っている俺も、未だにリシドの奴を見つけ出せていない。いなくなったシャルミナと逃げ出したりシド。

二人に付随している問題はどちらも、人の命が掛かってる、という事だ。

シャルミナの場合は、自分自身の命。

応急処置しかしていない身体で動き回れば、また傷口が開く恐れがある。あの重傷でそんな事になれば、間違いなく出血死だ。

そしてリシドの場合は、他者の命。

暴走した『魔術』によつて『化物』になつたりシドは、いつ人を襲つても可笑しくない状態のはずだ。そんな奴を放っておけば、間違いなく余計な死人が出る。

どちらも命が掛かってる以上、早急に解決しなければならぬ。

のだが……。

「この状況で『早急に』ってのは無理があるって！」

誰にでもなく不満をぶつけ、俺はガクリと肩を落とした。こんな事してる場合じゃないってのに……。

「ん？」

そこでふと顔を上げた俺は、暗闇の中にあるものを見つけた。月明かりに照らされた、薄暗い森の中。

前方五十メートル程先だろうか？　そこにポツリと、弱々しい小さな青い光が明滅を繰り返しているのが見えた。

「……？　何だ、あの光？」

早くリシドを探し出さなければならぬというのに、俺の足はなぜか吸い寄せられるようにその光へと向かって走り始めていた。

暗い洞窟の中から外の明るい光を目指すみたいに、俺は草木が生い茂る道なき道を進み続けた。

進んだ先にあつた青い光の正体は、見覚えのあるものだった。

「これ……、リシドが持ってた水晶の欠片、だよな」

呟いた後で俺はハツとする。集落での戦いで俺が砕いたはずの水晶。その欠片がここに落ちていたという事は……！！

「リシドの野郎、この辺りにいるのか？」

俺は反射的に『フレイム・ロンゲソード紅蓮の爆炎剣』を出現させ、臨戦態勢を整えた。

周囲に気を張り巡らせ警戒する。炎剣の紅い光が、暗闇に包まれた森の中を明るく照らす。

と、その時だった。

突然横合いの草むらから何かが飛び出し、俺の方に迫ってきた。

不意を突かれた俺は炎剣を構える暇も無く、何者かの突進をもろに喰らい、短い草の生えた地面に倒れ込んだ。

「くっそ！　何　、がッ！」

状況を確認め直そうと上半身を起こし掛けた俺の胸の真ん中に、重たい一撃が叩き込まれた。胸を圧迫され、地面に押し付けられた俺は、息苦しさを感じながら襲撃者の方を見た。

「リ……ッ、シド……！」  
俺を押さえ付けているのは、紛れも無く『化物』と化したリシドだった。

だがその姿は、村で戦っていて時と比べると若干変化している。いや、この場合は『変化し切れていない』と言った方が正しいかも知れない。

リシドの姿は、身体の左半身だけが中途半端に『獣化』していた。服から露出している腕や足はもちろん、顔の部分も左側だけが銀色の毛に覆われた獣、狼の顔をしている。

まるで狼と人間の身体を、半分に割って繋げたような状態だ。

「ク、かハハははあ。よくもヤツテくれたなあ、でいーン・イアルふスウウ。オカげで俺様自身モ化物になっちまったじゃねエカアアア。エエ？」

その口から怨嗟えんさのような台詞を吐きながら、リシドは人間の方の眼で俺を蔑あはんでくる。

俺は自分の身体を押さえ付けている獣の足首の辺りを掴んで、苦し紛れに睨み返した。

「そんなもん、自業、自得だろ……！ 人の命や、獣の魂こゝろを弄もてあそんだ、結果がこれだ。自分の責任を……、人に、押し付けてんじゃねえよ！」

ギリギリと胸を圧迫され、俺はそれでもどうにか言葉を発した。するとリシドは、人間の方の口でニタアッと笑った。不気味としか表現出来ないような、人間であって人間じゃない笑顔だ。

「弄もてあそブ、ねエ。確力ニその通りダ。俺様は命ト魂を、玩具とシてしか見てイナかつた。その俺様が、今度ハそいつラに玩具にサレルとはナアア。何トも滑稽ナ話だ……！」

リシドは突然感情を高ぶらせ、獣の方の足を振り払い、俺の左脇

腹に強烈な蹴りを叩き込んだ。

「がはっ！」

あまりの衝撃で俺の身体は一瞬地面から離れ、数メートル程蹴飛ばされる格好になった。痛みで集中力が途切れ、『フレイム・ロンゲソード紅蓮の爆炎剣』が消滅する。

「ダカラヨオオオ、滑稽ナ俺様ハ、この身体を使ツテ貴様をブツ殺しテヤロウって決メタんだよオオ。ワザワザ貴様一人をここまデ誘おびキ出したのモソノ為だア。有り難く思エエえッ！！」

痛みに悶えていた俺の身体に、リシドはもう一発、強烈な一撃を叩き込んだ。避ける暇も無かった俺はその一撃をもろに喰らい、再び数メートル蹴り飛ばされた。

リシドの力が半端じゃない。一撃一撃が途轍もなく重い。あと何発も喰らっていれば、それだけで身体の骨を砕かれてしまいそうだ。反撃するしかない。ただ防御に回るだけじゃこつちが不利になるばかりだ。

攻撃こそ、何にも勝る最大の防御だ！

「うおおおおおおおおおっ！！！」

自分を奮い立たせる叫びを上げながら、俺は猛然とリシドに突っ込んだ。

奴は俺に向けて獣の左腕を振るうが、俺は軽くステップを踏むような動作でそれを躲し、右拳を奴の顔面に叩き込んだ。

「ごハッ！」

後ろに仰け反るリシドの胴体に、俺は走り寄っていた勢いを殺さず、今度は飛び蹴りを喰らわせた。

リシドが二、三度地面を転がる間に、俺は再び『フレイム・ロンゲソード紅蓮の爆炎剣』を出現させ、奴が体勢を立て直す前にと、炎剣を構えて追おい絶すがる。

「おらあああああああっ！」

右上段から放った一撃を、だがリシドは地面を這うようにして飛び退き回避した。

俺は前のめりになってバランスを崩し掛けるが、その勢いを利用

して右足を前に踏み出し、地面を蹴り付ける力に変えて高く跳躍した。

「逃がすか！」

地面を這うようにして移動していたリシドの顔面目掛けて、俺は上空から落下しながら炎剣の一撃を放った。

だがリシドも黙って待つてはいない。

顔を狙った俺の一撃を、その獣の左腕で鷲掴みにした。

「なっ!?!」

驚く俺を尻目に『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』が自身の能力を発動して、炎と爆発を発生させる。

ところが、リシドはそれでも手を離さなかった。

ニタアつとした笑みを一瞬見せ、人間の方の拳で俺の腹の中心を思いつ切り殴り付けた。

「がはあっ！」

とんでもない腕力が俺の身体を吹き飛ばし、俺は背後にあった巨木に背中から衝突した。肺から息が無理矢理吐き出され、一瞬呼吸出来なくなる。

「力はははははハハハははハッ！」

妙な笑い声と共に、リシドは俺がしたように、獣の左足を使った飛び蹴りを放ってきた。

硬直し掛かっていた身体を無理矢理動かし、俺は何とか右に転がる。

その後。

ズドンという固い物同士がぶつかるような音が響き、さっきまで俺の背後にあった巨木にリシドの左足が突き刺さっていた。回避を選んではなかったら、俺の頭部は間違いなく粉々に飛び散っていたはずだ。

俺は息を荒げながら何とか立ち上がった。するとリシドも巨木から足を引き剥がし、獣の方の眼でギロリと俺を睨み付けた。

「かハハは。楽しい、楽シイなア、おい。こんな化物ノ姿にナッて

シマツたガ、今俺様は猛烈に享樂してイル。楽しくて仕方ナイ！」  
狂ったように叫びながら、リシドは獣の左腕を一直線に突き出した。

俺はそれを前進しながら身を少し屈める形で回避する。

交差する瞬間、奴の爪が左肩を掠め少量の血が飛び散った。だが俺は気に留めず、炎剣の一撃を横振りに放った。

直後、再びリシドの身体から炎と爆発が噴き出す。

「グがアアああアアアツ！」

苦しみ悶えながら、リシドは交差した直後の俺に、横薙ぎに振った獣の左腕を正確に叩き込んだ。

反応出来なかった一撃によって、俺は数メートル飛ばされて再び木にぶつかつた。全身を鈍い痛みが駆け抜ける。

「こッ、の……、馬鹿力が……ッ！」

苛立ち紛れに吐き捨ててみたが、どうも身体の方が言う事を聞かない。続け様にダメージを受け過ぎた。

「かはハッ！ もう終わりか、デーン・いあルフス！ まだまだコンなモンじゃ足りねエエゾオオオ！」

フラつく俺を本当につまらなそうに見つめ、リシドは高らかに叫び声を上げた。

マズイ……。こっちは『魔術』で応戦してるとはいえ、そもそも  
の身体能力に差があり過ぎる……。！ こっちの攻撃を受けても平気で反撃してくるんじゃ、ダメージを与えてる意味がない！

俺は右手に握る『紅蓮の爆炎剣』に視線を落とした。今のリシドを黙らせるには、もっと威力のある一撃を与えないとダメだ。

その為には大技を放つ必要があるが、今俺の周りには多くの草木がある。そんな場所で大技、例えば『深紅の流星』でも放とうものなら、周りへの被害が尋常じゃなくなる。今でさえ、『紅蓮の爆炎剣』を扱うのは充分危険な状況なんだ。

とはいえ、このままだとこっちが戦闘不能に陥るのは時間の問題だ。のんびり構えてなんかいられない。

何か打開策は無いかと、俺が思案していた時だった。

「『斬風』」

「!!!」

背後から聴こえたその声に俺が振り返る暇も無く、爆風が俺のすぐ横を走り抜けた。

その直後。

「グギアアがあああアアアアツ!!!」

リシドの獣の左腕が根元から斬り飛ばされ、盛大な血飛沫ちしびぎが俺の目の前を紅く染めた。宙を舞っていた獣の左腕が、少し遅れてドンツと地面に落ちてきた。

攻撃者は言うまでもない。例えようがないであろう痛みに苛さいなまれ、地面に伏すリシドと正反対の位置。俺から五メートル程の離れた背後に牡丹色の髪の少女、シャルミナが立っていた。

「シャルミナ！ お前」

言葉を紡ごうとした俺の目の前で、彼女はその身体をガクンと揺らし地面に倒れ込んだ。

「お、おい！ しっかりしろ！」

慌てて駆け寄り、俺がその身体を抱き起そうとした瞬間だった。

唐突に、彼女の身体から血が噴き出した。

「なっ!?!」

何が起こったのかわからなかった。

一瞬、リネが『治癒』の力で塞いだ傷が開いたのかとも思ったが、違った。彼女の血はそこは全く別の場所、右足の膝辺りから出血していた。

だがそれだけじゃない。

シャルミナの身体の至る所から、次々と血が噴き出していく。まるで、刃物のようなもので斬り付けられていくみたいに。

「! そうか！ これがシャルミナの言ってた『呪い』!」



彼女は『風守り』の一族の長たちが残した『印術』の影響で、遺跡からある程度の距離を離れようとする、その身に理不尽な攻撃を受けてしまう。

つまり今シャルミナは、超えてはいけないラインを超えてしまっているって事だ！

「何でお前まで追ってきたんだ！？ お前がここまでする必要ねえだろ！？」

彼女は何かを言おうとしていたが、俺は聞く耳を持たなかった。とにかく彼女を早く安全な場所、例えばさっきの集落まで運ばなければいけない。

あの集落にいた時はシャルミナの身体に異変はなかった。つまりあの集落までなら、シャルミナの身体は『印術』の影響を受けずに済む。

適当に当たりをつけ、俺はシャルミナの身体を抱えようとした。すると、その時。

「クソがああああアアアッ！！」

腕を斬り飛ばされたリシドが、怒り狂ったかのように雄叫びを上げ、踵を返して森の奥へと駆け抜けていった。

「お、おい、リシド！ 待てよ temeエ！ リシドーーーーッ！！」

俺の制止の叫びを無視するように、リシドの姿は再び闇の中へと消えた。

あたしは灯りも持たずに森の中へ飛び込んだ事を、すぐに後悔し

た。シャルミナさんの事を心配し過ぎたせいで、そこまで頭が回っていないかった。

「月明かりがあるから真っ暗って訳じゃないけど、それでも灯りも無しに誰かを探すのってちょっと無理があるよね」

独り言を呟きながら、あたしは辺りをキョロキョロと見回した。

けど当然、そんな事でシャルミナさんが見つかるはずがない。

「どうしよう……。一度あの集落に戻った方がいいかな？」

誰に聞いてるつもりなんだろうと、あたしは自分の事ながら苦笑する。

と、その時だった。

「グギアアがあああアアアアッ！！」

「！？ な、何！？」

突然どこかから、何かの雄叫びのようなものが聴こえて、あたしはビクツとなった。人間の悲鳴みたいに聴こえなくもなかったけど、なんだか嫌な感じがしてあたしは両腕を抱えるように抱いた。怖くて不気味で、何だったのかを確かめる気になれない。

すると今度は、

「クソがあああアアアアッ！！」

という男の声が聴こえて、続けて、

「お、おい、リシド！ 待てよテメェ！ リシドーーーーッ！

」！

という、あたしがよく知ってる男の子の声が聴こえてきた。

「……………今の、デーインの声だよね」

あたしは声のした方向を確かめようと、もう一度辺りを見回した。すると前方の少し離れた所に、何かの灯りが灯っているのが見えた。あたしは不思議に思いながらも、ゆっくりと足を運び始めた。

いつの間にかその歩調は速くなって、気付いた時にはあたしは走り出していた。煌々と灯る灯りに向かって。

そして漸く視界が拓けた所で、あたしは息を飲んだ。

そこにあっただのは辺りに飛び散った夥おびただしい量の血と、斬り離され

た獣のような腕。そして悲痛な表情で何かを抱えているディーンの様だ。

「！ リネ！ 助かった、ちょっと手を貸してくれ！」

「えっ？ う、うん！」

この惨状を眼にしてもあたしが卒倒しなかったのは、多分ディーンがいてくれたからだと思う。そうじゃなかったらあたしは、前みたいに気を失ってたかも知れない。

出来るだけ血と腕は見ないようにしながらディーンに近付いた所で、あたしは漸く彼が何を抱えているのかに気が付いた。

正確には『何か』じゃなくて、『誰か』だったんだ。

「シャルミナさん！？」

あたしは驚いて、彼女を挟み込む形でディーンの正面に膝をついた。彼女の身体は血塗れで、今も身体のおちこちから血が流れ出している。

「何？ 何があったの！？ どうしてシャルミナさん、こんな事に……！」

「今は説明してる時間はねえ！ とにかくリネは、シャルミナを連れて集落に戻ってくれ！ そうすれば、とりあえずこの現象は治まるはずだから」

「とりあえずって……」

言い淀むあたしの肩に、ディーンは軽く手を置いて続ける。

「状態が治まったら、悪いけどまた『治療』を頼む！ 今こいつを助けられるのは、リネだけなんだ！」

ディーンは真剣な眼差しで、あたしに訴え掛けてくる。

もしかしたら、ディーンにここまで頼られるのは、今回が初めてかも知れない。今までは、いつもあたしが頼ってばかりだったのに。「わかった。シャルミナさんの事は任せて！」

あたしが力強く答えると、ディーンは安心したように笑って頷いてくれた。そしてそれ以上は何も言わず、立ち上がって森の奥に向かって走り始めた。

デインが走り去っていく所で、あたしは今まで辺りを照らしていたのが何なのか、漸く気付く事が出来た。

それは彼が右手に握っていた炎。

『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』と言う、『魔術』で造られた炎剣が発する紅い光だった。

あたしが見つめる背中では、その紅い光と一緒に、徐々に遠退いて行った。

土壇場でリネに会えたのは幸運だった。

何しろ俺には傷を治す特別な力なんてないし、何よりリシドの奴を追わなくちゃいけない。シャルミナの事は、リネに任せておけばとりあえず安心だ。

「とにかく今はリシドを追う。それが先決だ！」

俺は『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』を握ったまま、森の中を走り抜ける。

さっきとは違って俺の足取りに迷いはない。なぜなら今は、リシドには『足跡』が残っているからだ。

森の奥に向かって点々と伸びるそれは、リシド自身の血痕。腕を斬り飛ばすという、シャルミナの一撃によって生じた大量の出血が、奴の足取りを追う為の目印になっていた。

それにあの出血だ。いくら『魔術』で身体が『獣化』しているとはいえ、血が底をつけば動く事も、況してや生きている事すら出来ないだろう。

どっちにしても終わりが近い。今度こそ、本当に。

点々と続く血の足跡。と、走り続けていた俺は、ふと気付いた。

「この先つて、もしかして」

俺がほんの何時間か前にいた場所。

シャルミナが案内してくれた場所。

神秘的だと、俺が感じた場所。

つまり、『風守り』の一族が守り続けていた、遺跡がある場所だった。

視界が拓けた先で、俺は速度を緩めて立ち止まった。

満月の明かりに映えるその景色は、やっぱり俺が壊していいようなものじゃない。それを俺に、もう一度確かめさせてくれた。

それに……。

「解放してやらなきゃな。この遺跡に縛り付けられたままの、シャルミナを」

そう口に出して確かめた俺は、視線を巡らせ、遺跡の泉の畔ほとりに膝をつく人物を見つめた。

「もう戦う力は残つてねえだろ。今ならまだ、てめえの傷を治してやれるかも知れねえ。投降しろ、リシド」

膝を付いていたリシドは、首だけを巡らせて俺の方を見た。出血の影響だろう。その顔からは、生気がかなり抜け落ちている。急がないと本当に死んでしまう。

「聞いてんのかよ！ てめえ、まさかこのまま死ぬつもりじゃ」

「生きてなんニナる？」

「……何？」

言葉の真意が見えず困惑する俺に、リシドは淡々と言葉を紡ぐ。

「こんな姿で生き続けてナンになる。貴様の言ウ通り、コレ八俺様の自業自得で起きた結果なんダロウ。その俺様ガ……、こんな化物二なった俺様ガ、コレ以上生き続けテ何の意味があるんだと聞イテるんだ」

リシドは全てを放り出したような表情で、俺から視線を外した。

もう完全に諦めてしまっている。それが尋ねるまでもなくわかってしまった。

「ただ俺はそんな結末じゃ納得出来ない。」

こいつには償うべき罪が、受けなくてはならない罰があるはずだ。「甘ったれた事言ってるじゃねえよ。てめえはもう罪を背負ってる。それを捨てようとするなんてのは俺が許さねえ。背負ったものを自分で捨てるのは、愚かな行為なんだ」

昔ミレーナは言っていた。背負ったものを捨てるのは、愚かな行為だと。業は自らが背負い続けなければならないものだ。

「同情なんかしない。さつきも言った通り、てめえがそうだったのは自業自得だ。てめえもそれがわかってんなら、自分の業は自分で最後まで背負え。あんたは仮にも、『魔術師』なんだろう？」

「……」

リシドは答ええない。ただ俯いたまま、ピクリとも動こうとしない。さすがにヤバいのかも知れないと思い、俺はその肩を掴もうと一歩踏み出した。

その時だった。

「がは……ッ、あく……、があ……ッ！」

「!?!」

突然リシドが痙攣し始め、その身体に異変が起きた。

斬り飛ばされた左腕以外の左半身に残っていた獣の身体が、見る見る内に元の人間のものに戻り、完全に消え去ったかと思うと、集落の時と同じように黒い煙が噴き出した。

つまり、獣たちの魂が、リシドの身体から離れ出したんだ。

「どうなってんだ……!?! まさか、まだ『魔術』が暴走してるのか!?!」

リシドの身体から噴き出した黒い煙は、空中に集束して一つの塊になっていく。

その途中で、ドサリという音が俺の耳に届いた。

見ると、今まで苦しんでいたはずのリシドが、眼を見開いたまま地面に倒れ込んでいた。

「リシ」

「

声を掛けようとして、俺はすぐに無駄だと悟った。奴はもう、死んでいる。

「……くそ。こんな結末……、納得出来るかよ」

歯噛みして俯き掛けた俺を戦わせようとするかのように、空中に静止していた黒い煙の塊が、徐々に形を成していく。

顕現したその姿は、あの集落で見た『キメラ・ファンゲ混合黒狼』と似た姿だったが、大きさが全く違った。

精々二メートル程度の大きさの黒い狼。その狼は低く唸り声を上げ、俺に敵愾心てきがいしんを向けてくる。

「そうか。『お前たち』も、解放してやらなきゃならなかったんだよな」

俺は右手に握ったままだった『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』を握り直し、構えを取った。

黒い狼は鋭い雄叫びを上げ、俺に飛び掛かってくる。

「……ごめんな」

小さく呟き、俺は炎剣を振るう。

その直後、爆炎が辺りを一瞬明るく照らした。

## 第八章 命と魂（後書き）

という訳で、第八章でした。

今回も敵さんは死んでしまつたというオチだった訳ですが、実際話の結末としてアリなんですかね？

作者もその辺よくわかってないのにテルノアリス編に続いて今回も、そんなオチになってしまいました（汗）

うーん、もっと構成力つけないといけないなあ……



第九章　そして森には朝が来て（前書き）

いよいよ魔女の森編も終わりです！

ここまで読んで下さった方にこの上ない感謝を！ m ( ) m

## 第九章　そして森には朝が来て

ふと眼を覚ますと、あたしはベッドの端にうつ伏せに凭れ掛つて  
いる状態だった。

自分でも気付かない内に眠ってしまったみたいだ。窓の外から柔  
らかい日の光が差し、鳥の鳴き声も聞こえてくる。

「……朝になつてる。『治療』の力を使い過ぎて、疲れてたのかな  
……」

あたしは軽く欠伸をしながら、ベッドに横になっている女の子に  
視線を向けた。

「シャルミナさんの傷も治せてよかった。一時はどうなる事かと思  
つたけど」

昨日森でディーンと別れた後、あたしは彼女を連れて村に戻って、  
早速『治療』を始めた。

ディーンの言つてた通り、シャルミナさんの身体を傷付けていた  
謎の現象は、村に着くと自然と治まっていた。この事に関して、デ  
イーンは何か知つてみたいけど、昨日は状況が状況だけに説明  
を受ける暇がなかった。

今あたしがいるのは、あたしとディーンが泊まる事になつた村  
の小屋だ。小屋の中を見回しても、あたしとシャルミナさん以外は  
誰もいない。

そう、誰も。

「ここにいないって事は、まだ帰って来てないって事だよな」

あたしはディーンの顔を思い浮かべながらぼんやりと呟いた。

彼は今、どこで何をしてるんだろう？　もしかして、帰って来ら  
れない理由でもあるのかな？

「無事、だよな？　ディーン……」

声の調子を落としてあたしが呟いた時だった。

「……う、う……ん」

微かに息遣いが聴こえて、あたしは顔を上げた。

見るとシャルミナさんが微かに目を開けて、自分の周囲を見回していた。

「シャルミナさん、気分はどうですか？」

まだ頭がぼんやりしてるみたいで、シャルミナさんは少し間を開けて返事をした。

「……ええ、何ともないわ。それより、あなたは確か、ディーと一緒にいた……」

「リネ・レディアです。こうして話すのは初めてですよ。シャルミナさんの事は、ディーやジグランたちから聞いて知ってます」

「そう……。あなたが、私の傷を治してくれたのよね？ その力って……」

シャルミナさんは不思議そうな眼であたしを見つめてくる。彼女と話せる事を嬉しく思いながら、あたしは自分の事を話す事にした。

「シャルミナさんは、『妖魔』一族ってご存知ですか？ あたしはその一族の、唯一の生き残りなんです」

「……！ あの、『治癒』の力を持つてるって言われてた一族の？」

「はい。シャルミナさんも、『風守り』の一族の生き残りなんですよ。だから、ずっと話したいと思ってたんです。あたしと同じ境遇の人がいるなんて、思った事なかったから」

「……」

シャルミナさんに無言で見つめられて、あたしは漸くハツとする。なんて一方的な事を話してるんだろう！

「あ、ごめんなさい。こんな同情するみたいな事、簡単に言うべきじゃないですよ。わかったような口利いちゃって……」

「ううん、違うの。その、私も嬉しいのよ。私と気持ちを理解し合える、共有出来る人がいるって事が。今まで唯一の生き残りって事を辛く感じる事が多かったけど、リネに出会えた事でそれが少しは報われた気がするわ」

「シャルミナさん……」

あたしが眩くと、シャルミナさんは優しく微笑んでくれた。その表情は本当に安心して見たいに感じられた。

「ところで、ディーンはいないの？」

その一言で嬉しい気持ちに包まれていたあたしは、まるで石像みたいにピシツと身体が固まるのを感じた。

何だかとても言い出し辛かったけど、それでもあたしはどうにか言葉を紡いだ。

「それが……、昨日森で別れてから、朝になっても帰って来ないんです」

「え？ まさか、何かあったって事……！？」

「……わかりません」

あたしはそう言っただけ、ただ俯く事しか出来なかった。ディーン、お願いだから無事でいて！

「あつた。これだ！」

漸く目的のものを見つけて、俺はフウツと息をついた。

昨日の夜から俺は集落に帰らず、ずっとこの遺跡の中で『ある物』を探し回っていた。

その『ある物』とは、シャルミナの『呪い』の『核』となっている物だ。

なぜ彼女の身体に『印術』を施した一族の長が死んでいるのに、彼女の身体の『印術』はその効力を発揮し続けているのか？ それ  
が俺にはどうしても不思議だった。

だけどそれと同時に、俺の頭にはある一つの仮説が思い浮かんだ。

シャルミナの身体に施された『印術』はもしかしたらリシドの『魔術』と同じで、『核』となる物がどこかに存在しているんじゃないか、と。

そしてその仮説を証明する要因になるのが、シャルミナの証言だ。あいつは『遺跡から一定の距離を離れると、印術が私の身体を傷付ける』と言っていた。それはつまり、この遺跡の中に『印術』の『核』となる物が存在している事を示している事になる。

そう確信して、夜通し遺跡の中を探し回っていた俺は、朝になって漸くその『核』を見つけたという訳だ。

「まさかこんな時間に時間が掛かるとは思わなかったけどな……」

俺は今いる場所は、遺跡の中心部。五メートル程の高さの四本の石柱に囲まれた、三メートル程の三角柱型のモニュメントが屹立している所だ。

そのモニュメントの根元に当たる部分。隠し扉のようなものが設置された壁の内側に、その『核』はあった。

石で出来たゴブレットの上に固定された、翡翠色の球体。淡く光を放つその表面には、シャルミナの胸にあった『印術』の記号と同じものが無数に刻み込まれていた。

「『導力石』を用いた、『印術』の半永久的『魔術』って所か。製作者がいなくなってるのに発動し続けるなんて、どんだけ強力な『魔術』なんだよ」

目的の物は見つけたが、本番はここからだ。この『核』を破壊する事が出来れば、シャルミナは晴れて自由の身になる。失敗する訳にはいかねえ！

俺は短く息を吐くと、右手に『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』を出現させた。

「悪いな、『風守り』の一族さん。長であるあんたたちがどう思ってたかは知らねえけど、シャルミナは解放されたがつてるんだ。だから」

俺は炎剣を握り締め、もうここにはいないはずの存在に向けて叫んだ。

「破壊させてもらっぜっ！」

叫ぶと同時に振り下ろした炎剣は、爆炎と共に『印術』の『核』を破壊するはずだった。

だが。

「!?」

炎剣の刀身部分が『核』に触れた瞬間、『魔術』の力同士が闘せめぎ合い、激しい抵抗の力が生まれた。どれだけ力を入れて炎剣を振り切ろうとしても、同じ程の力で押し返される。と同時に、稲妻のような光が生まれ、辺りを眩しく照らしていく。

「ぐ、ぎ……ッ！　ぐっ、がああああああッ！」

俺が炎剣を握る手に、より一層の力を込めようとした時だった。

バアンという、何かが弾けるような音が響き、俺は身体ごと後ろに弾き返された。『核』が生み出していた抵抗する力が、俺の『紅蓮レイム・ロングソードの爆炎剣』の威力を上回ったんだ。

「痛つてえ……。どんだけ頑丈に造つてあるんだ。傷一つ付いてねえなんてアリかよ？」

俺は尻餅をついた状態で『核』を改めて見つめてみた。こうしてただ見てる分には、綺麗な翡翠色の球体なんだけども……。これがシャルミナの身体を傷付ける原因なんだと思うと、自分の眼を疑いたくなる。

「ま、だからって諦めるつもりはねえけどな！」

俺はもう一度立ち上がって炎剣を構える。そして勢いを付けて、再び炎剣を振り下ろした。

その直後、稲妻のような光が生まれ、右手の炎剣を介して、激しい抵抗の力が俺の全身を駆け巡った。

「こッ……、のッ！　これで……。っ、ダメだつてん、なら……。ッ！」  
俺は左手に新たな炎を発生させ、それを武器の形へと造り変えていく。

そこに出来たのは、もう一本の『紅蓮レイム・ロングソードの爆炎剣』。俺自身、滅多に使わないが、元々『紅蓮レイム・ロングソードの爆炎剣』を二本造り出す事は不可能じ

やない。

「これなら……、どうだあああつ!!」

俺は左手に握った炎剣を、抵抗の力が生まれている接触部分へと叩き込んだ。

その直後。

「あッ! うぐッ!」

「? シャルミナさん……!?!」

突然左胸の辺りを押さえて、シャルミナさんが苦しそうな表情を見せた。

あたしは驚いて、ベッドに横になっている彼女の枕元に近寄った。

「どうしたんですか!? 苦しいんですか!?!」

「ッ!」

シャルミナさんは苦しそうに胸を押さえるだけで、あたしの質問に答えてくれない。と言うか、そんな余裕が無いんだと思う。

「ごめんなさい、シャルミナさん!」

一言謝って、あたしは彼女の服の胸元を、強引に下にずらした。

するとそこには、不思議な形の刺青いれずみのようなものがあつた。それが熱を発してるみたいに、赤く淡い光を放っている。

これってもしかして、『魔術』なの?

「だとしたら、あたしにはどうしようも」

ない、と言い掛けた時だつた。

またも突然に、その刺青いれずみみたいなのが、強く二、三度明滅したかと思うと、そのままスゥーと消えていった。

……って言うか、今の何？ 一体何が起きたの？

困惑していたあたしは、ベッドで横たわるシャルミナさんに声を掛けるのを忘れていた。彼女はもう、苦しそうに表情を歪める事もなく、ぼんやりと小屋の天井を見上げている。

「あの、もう大丈夫なんですか？」

恐る恐るあたしが尋ねると、シャルミナさんは急に両手で顔を覆った。

あたしはすぐに気付いた。理由はよくわからないけど、シャルミナさんは今、泣いてるんだ、って。

「約束……、果たしてくれたんだね。ありがとう……、デイン」  
彼女がそう呟いたのを、あたしは確かに聞いた。

本当に嬉しそうな、泣くのを堪えようとするみたいな声で。

「やつ、た……」

俺は二本の『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』を消滅させると、その場にバタリと倒れ込んだ。

視線だけを巡らせて、自分の足下を見る。そこには粉々に砕け散った、元は球体だった物体の残骸が散らばっている。

『印術』の『核』だった物。

『導力石』で造られていた物。

シャルミナを、この森に縛り付けていた物。

それを俺はどうにか破壊する事が出来た。

俺は視線を戻して空を見上げた。憎らしい程青い、透き通った青空を。



「終わったぁー！ーっ！」

腹の底から出た言葉が、遺跡の壁に反響して木霊する。

多分俺がこの森ですべき事はこの瞬間に、漸く終わりを告げたんだ。

「しっかし遅いねえ、あの紅髪あかがみ。ホントに探しに行かなくていいのかよ？」

小屋での出来事から数時間経った頃、あたしは集落の入口付近で、地面に転がっていた丁度いい大きさの岩に腰を下ろしてデイーンの帰りを待っていた。傍らにはレイミーとジグランもいる。

「そんな事しなくても、デイーンは絶対帰って来てくれるもん」

「いやだからオレが言ってるのはそういう事じゃなくて、あいつの事が心配じゃねえのかって聞いて」

「帰って来るの！」

「……あ、ハイハイ。オレが悪かった」

あたしが不満そうな顔を見ると、ジグランは面倒臭そうに手をひらひら振って会話を終わらせた。そんな彼の隣にいるレイミーは、ずっと、右手で顔を覆うようにして笑ってるし……。何が面白いのかわからないけど、嫌な感じ。

「何が可笑しいの、レイミー？」

「いや、ごめんごめん。ジグランが女の子相手にあたふたするなんて珍しいから、ついね。……フフ」

「お前な……」

恨めしそうな眼でレイミーを見つめた後、ジグランは集落の奥、

ダンテさんの家の方向に視線を向けた。

「それにしても、村長は大丈夫なのか？ 一晩経ったとはいえ、まだシヨックが抜け切れてねえはずだろ？」

「まあ、状況が状況だけにね。自分の村の人間が化物になって旅人を襲ってたなんて、信じたくても信じられないでしょ。今回の一件を仕組んだ張本人は、未だ帰らぬデーンが追ってるとはいえ、自分に責任感じちゃってるのよ、きつと。何でもっと早く対処出来なかったんだ、ってね」

レイミーはやれやれといった様子で、軽く溜め息をついた。

確かに昨日全部が終わった後、村の人たちを集めて話してるダンテさんは、かなり疲れた表情をしていた。多分レイミーの言う通り、ダンテさんは自分の事を責めてるんだと思う。

「実際、そこまで気にする必要ねえと俺は思うけどな。経緯はどうあれ、悪さをしたのはあのリシドとか言う『魔術師』なんだ。あいつをどうにかしちまえば、それで万事解決って事でいいじゃねえかよ」

「そんな簡単な話じゃないのよ。自覚が無かったとはいえ、この村の人間は旅人を襲って殺してるんだ。無闇に真実を話せば混乱が起きるのは眼に見えてる。村長さんもその辺りを理解してるんだよ」  
そう、自覚が無い。

リシドに操られていた村の人たちは、『人狼』になっている間の記憶が全く残っていなかった。

だから誰一人として、自分が化物になって人を殺した事なんて覚えていない。それを幸いと言うべきなのかどうかは、正直あたしにはわからないし何とも言えない。

彼だったら、デーンだったらどう思うんだろ？

よかったって言うかな？ それとも不幸だっけ言うかな？

デーンと話したい。早く、声が聴きたい。

「大体あんたはデリカシーが無さ過ぎんのよ。もう少しくう、深く考えるとかそういう事出来ない訳？」

「うるせえな。考えんの苦手なんだよ俺は」

「苦手なんじゃなくて考えようとしてないだけでしょ、あんたは！」

「何をオツ!？」

「ちょ、ちよつと、止めなよ二人とも！」

「そうそう。頼むからギャーギャー騒がないでくれよ、こっちは疲れてんだから」

「！」

背後から聴こえた声で、あたしとレイミー、ジグランの三人は一斉に振り返った。

するとそこには全身ボロボロの格好をしたディーンが、面倒臭そうな顔をして立っていた。多分あちこち怪我してるんだと思う。何だか動きがぎこちなかった。

「ディーンっ!！」

「は? ええっ!?!」

あたしはほとんど無意識で、思いつ切りディーンに抱き付いていた。

勢いが付き過ぎて彼はヨタついたけど、倒れる事なくあたしを受け止めてくれた。

「もう! 遅過ぎだよ、帰ってくるの!!!」

「……悪かったな」

少しバツが悪そうに顔を逸らしたディーンに、あたしはクスツと笑い掛けた。

何て言うか、凄く意外な出迎えだった。

リネの奴が心配性なのは、まあわかってた事だったけど。まさかここまで心配されてるとは思わなかった。

正直抱き付かれてドキツとしたのは事実だし、リネが客観的に見ると可愛い女の子だって事も事実だ。……まあわかってても、そんな事絶対本人には言わないけどな。調子に乗られても癪<sup>しゃく</sup>だし。

で、そんな状態の俺たちを見れば、当然面倒臭い事になるのは明らかかな訳だ。

「……何見てんだよ。つーか何だその眼は」

俺はさっきから何か言いたそうな眼でこつちを見ているレイミーとジグランに、これまた面倒臭く思いながら声を掛けた。

「いや、別に。ただ何とも仲がよろしい事だなあ、と思ってねえ。ねえ、ジグラン？」

「ホントにな。いや、いいじゃねえの。年頃の男女が仲いいってのはさ」

「……」

完全に喧嘩売ってやがんなこいつら。今は疲れてるからあれだけど、体調が戻ったら炎剣持って追い掛け回してやるうか……。

なんて思っている、急に真面目な顔付きになって、ジグランが俺に尋ねてきた。

「で、リシドの野郎はどうなった？」

「！……『魔術』が暴走を起こして、その副作用で、……死んだ」  
「……そう」

俺が静かに告げると、レイミーだけじゃなくジグランとリネも若干眼を伏せた。その胸中を俺が知る術はないけど、多分こんな結末になった事を、みんな納得なんかしてないんだろう。

俺は気分を変えようと、無理矢理に話題転換を図った。

「ところで、シャルミナはどこだ？ あいつの怪我の具合は？」

「もう大丈夫。今は小屋でゆっくり休んでるよ。あ、でもさっ

き、一度胸を押さえて苦しがつてた事があつたけど」

「ホントか？　なあ、あいつの左胸の辺りに、刺青いれずみみたいな模様がなかったか？」

「え？　う、うん、あつたよ。でもしばらくしたら、突然その刺青いれずみも消えちゃって……」

「そつか。つて事は、成功したんだな。よかった……」

リネの言葉を聞いて、俺は漸く安心する事が出来た。シャルミナの『呪い』は、確かに消し去る事が出来たんだ。あとであいつの顔も見に行ってみるか。

「ねえ、ディーン。どうしてシャルミナさんの左胸の部分に、刺青いれずみがあるつて知つてたの？」

「え？」

リネに尋ねられてから、俺は随分遅れて不味いと思った。そういえば森の中でシャルミナに『印術』の跡を見せられた時、俺は一人だつたんだ。

「確かにそんな所にある刺青いれずみなんて、服を脱がしでもしない限りわからないわよね？」

レイミーさん余計な事言わなくていいからあああつ！　そんな事言つたら余計な誤解が生まれるでしょうよ！？」

なんて思った時にはすでに遅かつた。隣にいるリネが、何だか物凄く不機嫌そうな顔で俺を見ている。

正面に立っているレイミーに至つては、してやったりみたいな顔をしてニヤニヤしている。くそっ！　覚えとけよレイミーの野郎！　「皆さん、ここにおられたんですか」

俺が拳をブルブルと震わせていると、横合いから男の声が掛かつた。見るとそこにいたのは村長のダンテで、俺の顔を見るなり酷く安堵したように溜め息をついた。

「ディーンさん、ご無事でしたか！　あなたのおかげで、この村の者は救われました！　本当に感謝しております！」

「いや、俺は別に……」

「それに皆さんにも、本当に感謝しています。今回の一件が解決しないまま時が過ぎていたら、どうなっていた事か。想像しただけで恐ろしくなります……」

ダンテはそう言って、辛そうに目を伏せた。そしてゆっくりと続ける。

「今回の一件。私は多くの真実を村の者に告げていません。恐らく本当の事を告げれば、村の者は皆苦悩するでしょう。しかし、そんな事を起こす訳にはいきません。村長として、私には村の者たちを守る責任があるんですから……」

「あのね、デーン。実は……」

「村の人たちは何も覚えてない、って事なんだろう？」

「！ デーン、気付いてたの？」

先読みしたような俺の発言に、リネは少々驚いた顔をした。

俺は軽く頭を掻きながら、その発言に付け足すように言葉を発した。

「確証があった訳じゃないけどな。何となく想像はしてたよ。知る必要のない事まで、わざわざ教える必要ないだろ。特に今回の場合はな」

俺の発言に、その場にいた全員が驚いた顔をしていた。俺はその視線を適当に流しながら、改めてダンテの顔を見つめた。

「その代わりって言ったらなんですけど、実は村長さんをお願いした事があるんですよ」

「は？ ……はあ」

生返事を返すダンテに、俺は悪戯っぽく笑ってみせた。

「遺跡を守る？ この村の人たちが？」

「ああ。もう村長にも許可を取ってきた。村の人全員でお前の代わりに、あの遺跡を守っていくって約束してくれたよ」

シャルミナが休んでいる小屋を訪れた俺は、目覚めていた彼女に事のあらましを説明した。

俺がダンテに提案したのは、今回の一件で少なからず責任を感じているのなら、『風守り』の一族が守り続けたあの遺跡を、村の人たちで守ってほしい、というものだ。

もちろん今回の一件は全てリシドが仕組んだ事だ。ダンテや村の人たちが気にする事は何一つないと俺も思う。だがそれではダンテの心が晴れないと言うのならと、そう思っただけの提案だった。

ダンテによるとこの集落に住んでいる者は皆、『風守り』の一族の存在を古くから知っていたそうだ。詳しい遺跡の位置まではレイミーたち同様に知らなかったそうだが、それでも俺が言い出した半ば取引のような提案を、ダンテは優しく笑って快く引き受けてくれた。

これで間違いなく、シャルミナ・ファルメをこの森に縛り付けていたものは、完全に無くなったと言えるだろう。

「これでお前は、本当に自由の身になったんだ。だからこれからどうするかは、お前が決めた方がいい。誰も文句は言わないし、止める権利もない」

「……」

シャルミナはしばらく無言のまま、ぼんやりと虚空を見つめていた。もしかしたらあまりに突然の事で、彼女自身どうしたらいいのかわからなかったのかも知れない。

するとその時。

「どうするか迷ってるなら、アタシたちと一緒に行かないかい？」

その言葉はまるで助け舟みたいに、シャルミナの耳に届いたんだろう。驚いて顔を上げる彼女に合わせて、俺も背後を振り返った。

するとそこには、いつの間にかレイミーとジグランが立っていた。二人はベッドの傍まで歩いてくると、優しく笑ってシャルミナに言う。

「これからこの森での調査報告とリシドの件を、首都の正規軍まで伝えに行くんだ。あんたさえよければ、アタシたちに同行しない？」  
笑って告げるレイミーに続いて、ジグランも快活に笑ってみせる。  
「お前が付いて来てくれりゃあ、『風守り』の一族が実在したって  
いう証明にもなるしな。どうだ？ シャルミナ・ファルメさんよ」  
「レイミー……。ジグラン……」

シャルミナは二人の顔を見つめた後、眼を丸くしたまま今度は俺に視線を向けてきた。

俺は二人と同じように笑って、ゆっくりと頷いた。

「正直になっていいと思うぜ。お前を縛り付けてるものは、もう何もないんだからな」

それから一日経った頃。俺たちは集落の人間とダンテに別れを告げて、森の中の遺跡へ来ていた。

俺としては、あの後すぐにでも『アージュール・ファウンテン紺碧の泉』に向かいたかったのだが、俺自身、リシドとの戦いで疲弊していたのもあったし、リネに関しても『治癒』の力の使い過ぎで同じ事が言えた為、一日間を開けて出発する事にした。

その時になって、まだ遺跡を見ていないリネ、レイミー、ジグランの三人の為に、シャルミナが遺跡へと案内してくれた訳だ。

「綺麗ね……。本当に」



「ああ、そうだな」

「うん。ディーンの言ってた通り、失くしちゃいけないものだよ、これは」

遺跡の神秘的な風景を眺めて、リネ、レイミー、ジグランの三人は感嘆したように呟いた。多分この遺跡を初めて見た時、俺もリネたちみたいな顔をしてたんだろうな。

それから物思いに耽<sup>ふけ</sup>る事数十分。

俺たちは、自然と二組に分かれ、それぞれの道を歩き出そうとしていた。

「この泉から、森の奥に向かって川が流れてるでしょ？ これを辿っていけば森の北側に抜けられるはずよ」

川の流れていく方向を指差して、シャルミナは笑顔で教えてくれた。

と、彼女はリネに歩み寄って、ゆっくりとその両手を繋いでこんな事を言った。

「一族の唯一の生き残りっていう境遇は辛いかも知れないけど、負けちゃダメよ。あなたは一人じゃない。同じ境遇の私だっているし、それに今はディーンもいるんでしょ？」

「はい！ シャルミナさんも元気でいてください！ またいつか、必ず会いましょう！」

「そうね。必ず！」

……はて？ この二人、一体いつの間に仲良くなったんだ？

二人の様子を見つめてボーっとしていると、シャルミナが今度は俺の正面に歩み寄ってきた。

「本当にありがとね、ディーン。あんたのおかげで、私は自由の身になった。本当に本当に、感謝してる」

「そんな念を押し必要ねえよ。大した事した訳じゃない」

俺が顔を逸らして言うと、シャルミナは可笑しそうにクスツと笑った。笑って、俺の方を見つめた。

「じゃあね、ディーン。またどこかで会いましょう」

彼女がそう呟いた時だった。

気付くといつの間にか、彼女の唇が俺の右頬に触れていた。柔らかい感触が一瞬して。

「は？」

何？ 今何が起こった？ あまりにも一瞬の事で状況が掴めてないんですけど！？

困惑する俺を可笑しそうに見つめた後、シャルミナは華麗にターンしてレイミーとジグランの傍へと駆けていった。

三人は何かを話した後、揃って俺とリネに手を振った。

俺とリネも、それに答える形で手を振り返す。俺は短く、リネは結構長く。

その後、三人は俺たちに背を向けて、草木が生い茂る道を歩いて行く。

……気のせいだろうか？

シャルミナの足取りが、今までよりも随分と、軽く感じられたのは。

## 第九章　そして森には朝が来て（後書き）

という訳で、魔女の森編は次の終章で終わりと相成ります。

最近は超えないように気を付けてたつもりなのに、気付くと一萬文字超えてました……（汗）

毎回毎回長過ぎんだよ、というツッコミは甘んじて受けようと思いません（笑）

## 終章 幕が下りる頃に

「なあ、さつきから何でちよつと膨れっ面なんだよ？」

隣を歩くディーンに声を掛けられても、あたしは黙ってそっぽを向く。すると顔の見えないディーンが、ハアッと軽く溜め息をついたのがわかった。

別にあたしは本気で怒ってる訳じゃない。

ただ何となく、今はディーンと話するのが嫌なだけだ。

別れ際にシャルミナさんが取った行動には、あたしも結構な衝撃を受けた。

だつてキスだよ？ 頬つぺただつたけどキスなんだよ？ シャルミナさん大胆過ぎ！ って言うかポーっとした顔でシャルミナさんを見つめてたディーンが何かムカついた！！

頭の中であれこれ考えていると、いつの間にか隣を歩いていたディーンは、さつさと前の方を歩いていった。

「ちよ、ちよつと待つてよ」

結局口を利用してしまったあたしは、ズンズン先へ進むディーンの隣に追い付く。すると彼は、面倒臭そうな顔でチラリとあたしの方を見た。

「何不機嫌になつてんのか知らねえけど、ボサツとしてたら置いてくぞ。それでなくても色々あつて時間割かれてんだ。俺はさつさとアシユール・ファウンテン『紺碧の泉』に辿り着きたいんだからな」

取り付く島もない感じのディーンに、あたしはまた膨れっ面になった。

「それはそうだろうけど、何でディーンってあたしに言う事がイチイチ冷たいの？ もしかして思春期？」

「いッツツツツつも子供っぽい言動が目立つ誰かさんには、言われたくない台詞だな」

「何それ？ もしかしてあたしの事言ってるの？」

「……意外だな。自覚あんのか」  
「あゝっ！ 酷い！ だから何でそんな冷たい言い方するの!？」  
「おい、話ループしそうになってんぞ」  
相変わらず普段は冷たいディーンとあーだこーだ言い合いながら、  
それでもあたしたちは一緒に歩き続けた。  
もうすぐ『紺碧の泉』アジュール・ファウンテンに辿り着く。  
そこにはまだ、ミレーナさんがいるのかな？

まだ少し薄暗い闇が空を支配している頃、俺はテルノアリス城の廊下を歩いていたら、早朝と呼べる時間帯に、ハルク様から呼び出しを受けたからだ。

ディーンとリネが『テルノアリス』を発ってから数日。未だ首都は復興作業に追われているものの、あの二人が旅立った日から比べれば、幾分か街はかつての活気を取り戻しつつある。

そんな折にあった、ハルク様からの突然の呼び出し。

正直な所、俺は若干だが不安を覚えていた。

何か、不吉な事が起ころうとしているような、そんな不安が。

「ジン・ハートラー、入ります」

謁見の間に繋がる鉄製の両扉を軽く押し、俺は室内へと足を踏み入れた。

壇上にある椅子にはすでに、ハルク様が腰を下ろして待っていた。

「やあ、おはようジン。朝早くに呼び出してすまないね」

「いえ、構いません。それで、俺に用と言うのは？」

「ああ、うん。実はね」

ハルク様が目配せすると、傍らにいた付き人の一人が書類の束のような物を手にして、俺の方へと近付いてきた。

「少々厄介な事が起きているらしいんだよ。全く、アーベントの起こした一件の事後処理がまだ済んでいない状況で、これ以上厄介事が起きてほしくはないんだけどね」

「どういう事ですか？」

疑問に思いながらも、俺は付き人の男から書類を受け取った。書類は全部で三枚あり、左上部に紙を纏める為のピンが付けられている。

俺は視線を落とし、一枚目に目を通した。

そして、その内容を読んで固まった。不安に思っていた事が、現実のものになった気がした。

「これは」

「ジェイガ・デイグラッド」

書類に目を通していた俺は、ハルク様のその言葉で顔を上げた。

「三カ月程前から、大陸の各地で暴れ回っている、流れの『魔術師』なんだけどね。今までその行動には何の目的もないとされてたんだが、どうやらそうじゃないという事が判明したんだ」

「と、言つと？」

「うん。どうもそのジェイガと言う者の狙いは、かの『英雄』たちにあるみたいなんだ」

「……！」

言葉の意味する所を察して俺は黙り込んだ。まさか、と思う。当たってほしくない予想ではあったが。

「つまり、かつての五人の『英雄』たちの命を狙っている、という事ですか？」

俺の言葉に、ハルク様は軽く頷く。

「詳細な理由はわからないけどね。彼に襲撃を受けた正規軍兵士の証言によると、彼は五人の『英雄』たちの居所を探っていたらしい。まあこちらにも、人探しなら勝手にやってくれたまえと言いたい所な

んだが、今回の場合、各地で正規軍兵士やギルドメンバーに危害を加えている人間が、『英雄』たちの居所を探っているんだ。何かあると思うのが自然だろう」

ハルク様はやれやれといった様子で浅く溜め息をつきつつ、

「現在、五人の『英雄』たちの中で所在を突き止められているのは、ランザ・ダルベスとバルベラ・スプリートの二名だ。だが残りの三名については、正規軍でも『ギルド』でも、居所が掴めていない」

そう言っただけ軽く頭を抱えた。だがすぐに、何かを思い出したように言葉を続ける。

「その三名の内の一。ミレーナ・イアルフスに関しては、キミの友人のデイン君が行方を追ってるんだよね？」

「はい。彼女が『紺碧の泉』アジュール・ファウンテンに向かったという情報を手に入れて、今はそこへ向かっている途中だと思えます」

「そうか。ならキミにも、『紺碧の泉』アジュール・ファウンテンへ向かってもらいたいんだ。今回の一件の事を、出来るだけ早くデイン君にも伝えておいた方がいいからね」

「わかりました。この後すぐにでも、出発の準備に取り掛かろうと思えます」

「よろしく頼むよ」

俺はハルク様に軽く一礼し、謁見の間を後にしようとした。すると、その時。

「ああ、そうだ」

忘れていた、と言いたそうなハルク様の言葉に、俺は足を止めて振り返った。

「キミも一応、ジェイガ・ディグラッドの人相を確かめておいてくれ。もしかしたら、遭遇する機会があるかも知れないからね」

そういえば俺自身、そのジェイガという男の顔を確認していない。ハルク様に言われて、俺は渡されていた書類の束の最後の紙を捲めくった。そこには写真が一枚挟まっただけで、一人の男が写り込んでいる。

年齢は俺と同じくらい。青紫の少し尖った髪に、蛇のような鋭い目付き。灰色のマントを羽織った男の手には、その身の丈と同じ程の大きさの鎌が握られている。

「ジェイガ・ディグラッド……」

死神のように見えるその姿を見つめ、俺は男の名を呟いた。

何かが始まるうとしている。

それは予感から、現実のものへと変わろうとしていた。



## 終章 幕が下りる頃に（後書き）

今回の魔女の森編、みなさんはいかがだったでしょうか？  
作者的には色々反省点も多く、改善していかなければという思いが強いのですが、楽しんで頂けてるのなら幸いです。

次回から、いよいよ紺碧の泉編が始まります！  
頑張って書くぞぉ〜！

## 序章 湖上都市（前書き）

お待ちせしました！

『フレイム・ウォーカー』 紺碧の泉編、始まります！  
ではあらずじを。

『ゴルムダル大森林』を抜け、ついに師匠・ミレーナがいるとされる『アジユール・ファウンテン紺碧の泉』に辿り着いたディーンとリネ。観光地としても有名なその街で、二人は情報を集めながら、一時の休息を得る。自分たち<sup>。</sup>に迫る、謎の存在にも気付かず<sup>。</sup>。そして二人はある人物と出会い、それによってディーンは、念願のミレーナとの再会を果たす。だが　！？

## 序章 湖上都市

倒王暦〇〇一二年。

一年前のある日、突然俺の前から姿を消した師匠、ミレーナ・イアルフスを探して、俺は広大なジラータル大陸を一人で旅していた。旅の途中、俺は『テルノアリス襲撃事件』という戦いを経験し、同時に旅の同行者になる少女、リネ・レディアと出会う。

その事件の際、俺はミレーナが首都の北東に位置する街、アッシュユール・ファウンテン『紺碧の泉』に向かったという情報を手に入れた。出所から考えると、この情報はかなり信憑性の高いものだ。

その情報を頼りに先を急ぐ俺とリネは、進行ルート上にある森林地帯『ゴルドダル大森林』で、『魔女伝説』が絡む事件に遭遇した。そこでも様々な人間と出会い、数々の謎の解明や戦いを経て、事件は何とか解決を迎えた。そして広大な森を抜けた俺たちは、ついに目的の地、アッシュユール・ファウンテン『紺碧の泉』へと辿り着く。

到着してすぐの頃、正直な所、俺は緊張していた。アッシュユール・ファウンテン『紺碧の泉』にミレーナが向かったのは間違いない。例え彼女がもう街にいなかったとしても、何かしらの手掛かりが残されているはずだ。それを手に入れる事が出来れば、これからの行動が起こしやすくなる。

何の手掛かりも無く探し続けていたこの一年間に比べれば、格段に探しやすくなるはずだと、そう思っていた。

少なくとも、街に足を踏み入れるまでは。

紺碧色の泉を思わせる巨大な湖の上に浮かぶ、湖上都市。

観光地としても有名な、優雅な街並みを揃える、湖上都市。

その街並みを見ていると、何だか安らかな気分になってしまう。

だから先に言っておこうと思う。

今回の結末は、決して幸福な結末なんかじゃない。  
俺はこの街で。

今度こそ、本当に。

大切なものを、失った。

## 第一章 陽射し無き空

見飽きたと言える程の長い間、俺の視界を埋め尽くしていた、背の長い草や幹の太い木々。それが徐々に拓けていき、俺たちは漸く森林地帯を抜ける事が出来た。

『ゴルムダル大森林』。

その名の通り、半端なく広い森林地帯だ。『とある一族』が守り続けた遺跡から森を抜けるまで、結局丸二日掛かってしまったんだから、どれぐらいの距離を歩いているのなんて想像したくもない。曇天の空の下、俺は今の空模様のような重苦しい気持ちを、必死で振り払おうとしていた。

「……ったく。まさか、こんなに時間が掛かるとは、思わなかったぜ……」

少々息を切らしながら、俺は森の出口から続く草原を歩き、前方の小高い丘を目指す。ふと隣を見ると、同行者の少女も、俺と同じように息を切らしていた。

「ホント……、広かったよね、あの森。抜けられたのが、嘘みたい……」

一旦フウツと息をつき、リネは腰に提げていた水筒を掴むと、ゴクゴクと水を飲み始めた。

「ぶはっ。ハア、生き返った。デーンも水飲む？」

そう言っただけで彼女は無邪気な顔で、自分が今の今まで口を付けていた水筒を俺の方に差し出してくる。俺が自分の分の水筒を持っているにも拘らず、だ。

「何でわざわざお前のを差し出すんだよ。俺だって自分があるし、別に喉だって乾いてない」

「ムウ……」

俺があしらうと、リネは唇を尖らせて渋々水筒を元の位置に戻した。相変わらず言動が子供っぽいし、何が目的なのかイマイチわか

らない奴だ。

俺は歩きながら、背後の森林地帯をチラリと一瞥した。

あの森で起きた事は、丸二日経った今でも鮮明に思い出せる。

『風守り』の一族の少女、シャルミナ。

その筋では有名なトレジャーハンター、レイミーとジグラン。

集落の村長、ダンテ。

そして、あの森林地帯で不可解な事件を起こしていた『魔術師』、  
リシド。

全く、『魔女伝説』やら『ウエアウルフ人狼』やらと、我ながら妙な事件に首  
を突っ込んでたもんだ。

別に悪い事ばかりがあつた訳じゃない。でもその事件のおかげで、  
目的の街に着くのが遅れてしまつてるんだから、自分の節操の無さを  
呪いたくなる。

と、歩き続けていた俺とリネは、いつの間にか草原の丘の頂上に  
到達していた。ここからなら、レイミーに聞いていた目的地の街並  
みが見えるはずだ。

だがそこから望む景色は、レイミーから聞いて想像していたもの  
より、遥かに美しいものだった。眼下に広がる景色に、俺は思わず  
息を飲む。

「これは……」

「凄い……！ 綺麗〜！」

この街の名も、まさにその姿そのものだと思つた。

『アジュール・ファウンテン紺碧の泉』。観光地としても有名な湖上都市。

少し崩れた円形に広がる湖の色は、曇天の空の下でも青々として  
いて、まさしく紺碧の名に相応しい色合いだ。

湖上に浮かぶ白い煉瓦造りの街並みに向かって、湖の岸から十字  
に橋が架けられている。橋一本の長さは三百メートル程で、幅が大  
体二十メートルといった所だろうか。その上にいくつもの出店らし  
きものが立っているのが、ここからでも見える。

今が晴天でさえあれば、その街並みはより美しく見えていた事だ

る。

「……ミレーナさん、まだあそこにいるかな？」

ふいに呟くように隣のリネが言い、俺はゆっくりと天を仰いだ。空には灰色の分厚い雲が掛かっていて、いつ雨が降り始めてもおかしくないような空模様だった。

「とにかく、行ってみないとわからないさ。雨も降りそうだし、宿の確保だとしておきたいしな」

「うん、そうだね」

リネは頷くと、俺より先に、眼下の湖の畔ほとりに向かって歩き出した。俺はもう一度街並みを眺めた後、少し下の方で手招きしているリネに倣って、丘をゆっくりと下り始めた。

「うわ、凄いよデーン！ 出店がいっぱいある！」

橋の入口に着くなり、楽しそうな声を上げるリネ。

どうやらさっき俺が言った事を、眼の前の少女は早くも忘れてしまっているらしい。リネは橋の上に立ち並ぶ数々の出店に目を奪われているようで、さっきから忙しなくキョロキョロしている。

「お前さ、俺がこの街に何しに来たのか知って」

「あ！ あれ何だろ!？」

「って聞けよ人の話！」

前方にある一件の出店に向かって、一目散に駆けていくリネ。俺は腹の底から盛大な溜め息をついた。ホント、何でこんな奴と旅する事になったんだろ？

出店の前ではしゃいでいるリネの背中を見つめて、俺はふと物思

いに耽<sup>ふけ</sup>った。

俺の師匠、ミレーナ・イアルフスが消息を絶ったのは、今から一年前の事だ。

そのミレーナを探して、大陸の各地を回っていた俺は一週間程前に、ミレーナがこの『紺碧の泉』アジュール・ファウンテンに向かったという情報を手に入れた。

その目的は未だに不明だが、彼女がこの街に向かったというのは間違いないらしい。

だがその目撃情報だって、一カ月以上前のものだ。俺はここに辿り着くまでに、何だかんだで時間を潰しまくっている。例えばミレーナがここに立ち寄ったのが事実でも、彼女がここにいるという保証はない。むしろいない確率の方が高いだろう。

だからこそ俺は、すぐにでもミレーナの情報を集めたい所なんだが、眼の前の少女は、そんな俺の心情を少しでも理解してくれてるのか？

……いや、あのはしゃぎっぷりじゃあ望み薄だな。だってリネだもん。

「一体何見てんだ？」

少々、どころかかなり呆れた感じで、俺はリネに声を掛けた。

彼女は出店の一つ、指輪やネックレスといったアクセサリーを並べている出店の前で、眼をキラキラさせながら品物を見ていた。こんなモン、全部安物だろうに……。

「ねえねえ、デイン！ あのネックレス綺麗だよ！」

リネは俺の服の袖をグイグイ引っ張りながら、出店の中央に飾られているネックレスを指差した。

削り貫<sup>ぬ</sup>かれた星型の中央に、紅い宝石がくつついたデザインのアクセサリー。値段から考えても、真ん中の紅い宝石は造り物だというのがわかる。

正直、俺はこういう物に全く興味が湧かない。どう反応すればいいのかもわからない。



「……そうだな」

適当に相槌を打つと、リネはクルツとこつちを向いて、

「綺麗だよね！」

と繰り返した。もちろん、眼をキラキラさせたままで、だ。

「……」

何かもう、次に言われる事が簡単に予測出来たので、俺は財布から代金を取り出し、店主に品物を指定してそのネックレスを買い取った。そしてリネの右手を無理矢理握り、その手にネックレスを押し付けた。

「これで文句ねえだろ？」

「やったあ！ ありがとう、デーン！」

その場で嬉しそうにピョンピョン跳び跳ねた彼女に、いつぞやと同じく抱き付かれそうになったので、俺はそれをヒョイッと躲して街の方に向かって歩き始めた。

背後でリネが不満そうな声を上げるが気にしない。

「ったく、呑気なモンだよな。お前はどうか知らねえけど、こっちは遊びに来てんじゃねえんだよ」

彼女が俺に追い付いてきた事を確認した後で、俺はそう言った。

すると案の定、リネは少ししょぼりした顔になる。

「それはあたしだってわかってるけど……」

「けど？ けど何だよ？」

「あんまり根詰め過ぎるのも良くないと思ったから、リフレッシュになればと思つて……」

「……！」

何だ、意外と考えて行動してたんだな。つて言うか、そのリフレッシュの為に俺はネックレスを買わされたのかよ？ 何か矛盾してねえか？

気の使い方を間違っているように思うが、それでも一応、彼女なりに俺の事を心配してくれているらしい。軽く溜め息をついた後、俺はチラリとリネの方を振り返った。

「……そのネックレス、失くすなよ」

「……！ うん！」

俺が言っているとリネは嬉しそうに笑って、早速ネックレスを自分の首に掛けた。余程嬉しいのか、自分の首に掛かったネックレスを右手で触りながら、ジーっと見つめている。

「置いてくぞ〜」

「あっ！ 待ってよディーン！」

リネを置いて歩き出しながら、気付くと俺は軽く笑っていた。

いつの間にか俺も、このやり取りを楽しむようになっていたみたいだ。

湖に架かる橋を渡り終え、俺たちはいよいよ『アジユール・ファウンテン紺碧の泉』の街の中に入った。

白い煉瓦造りの建物が立ち並ぶ街の中は、商店や住宅があらゆる所に混在しているようだ。その辺り、商業区や住宅区と区分けしている、首都の『テルノアリス』とは違っていているらしい。

行き交う人の数はやはり『テルノアリス』には劣るが、それでも有名な観光地と言うだけあって、中々多いように思う。

石畳の道を歩きながら、俺は周囲を見回した。

「さて。宿を探すのが先か、それとも聴き込みが先か……」

「あたしはどっちでもいいよ。って言うより、ディーンはすぐにも聴き込みしたいんでしょ？」

まるで俺の心を見透かしているみたいに、リネは悪戯っぽく笑って言う。確かにその通りだけど、リネに指摘されるとなんか悔しい

んだよな……。

「じゃあ聴き込みを先に始めるけど、ホントにいいんだな？」

「うん。頑張つてミレーナさんを探そーっ！」

ニコニコ笑いながら、リネは元気よく右手を振り上げる。さっきのネックレスの一件の効果なのか、妙に機嫌いいな、こいつ。……まあ変に邪魔が入るよりはマシか。

適当に考えながら、とりあえず俺は眼についた近場の商店に歩み寄り、店主に声を掛けた。四十代くらいの男の店主から、「いらっしやい！」という元気のいい声が返ってくる。

「突然で悪いんだけど、この写真の女に見覚えはないか？」

そう言つて俺は例の如く、マントの内側から一枚の写真を取り出し、店主の方に差し出す。もう十年くらい前に撮つた、ミレーナとの思い出の写真だ。

店主は俺から写真を受け取ると、マジマジとそれを見つめた。

「もう十年くらい前の写真だから、雰囲気少し変わつてるかも知れねえんだけど……」

この言葉も俺にとっては、もう何度も繰り返してきた言葉だ。

俺はあと何度この言葉を繰り返せばいいんだろう？ と、そんな思いが頭を過ぎつた時だった。

眼の前の店主から、今までとは違う意外な答えが返ってきた。

「おや？ これミレーナさんじゃないか」

その言葉に、俺は眼を見開いた。

「えっ！？ ミレーナを知つてるのか!？」

俺が身を乗り出すと、店主は特に驚いた様子も見せず、軽い調子で口を開いた。

「知つてるも何も、よくここに品物を買いに来てくれる常連さんだよ。ログの奴と一緒に暮らしてるからな」

「……は？」

この店に来る常連？ ログの奴と暮らしてる？

この店主は一体何を言ってるんだ？

「本当にこの写真の女に間違いないのか？」

「ああ、間違いない。ミレーナさんはウチの常連さんの中ではとびつきの美人さんだからな。見間違える訳ないよ」

「……？」

「どういう事だ？ 仮にミレーナ本人だったとしても、何で彼女がこの街で暮らしてるんだよ？ しかもログとか言う奴と一緒に暮らしてるだって？ 一体誰なんだよそいつ？」

疑問符が頭の上に浮かんでいる俺に、リネが顔を近付けてコソコソと話し掛けてくる。

「もしかして、ミレーナさんにそっくりの別人さんなんじゃない？」

「……まあ、考えられなくはねえけど」

言い淀む俺から顔を離し、今度はリネが店主に声を掛けた。

「すみません。その、ログさんって言うのは？」

「ああ、本名はログハイムってんだ。随分前からこの街に住んでる歴史学者だよ。それがいつの間にか、あんな美人の女性と暮らし始めててな。いや、驚いたもんだよ」

「はあ……。そのログハイムさんの家はどこにあるんですか？」

「ああ。この通りを真っ直ぐ進んで、二本目の十字路を左に曲がった所に住んでる。家の軒先に花壇が設置してあるから、すぐにわかると思うよ」

と、そこまで俺たちに教えた所で、店主は少し不審そうな眼で俺たちを見た。

「……ところでお前さん方、ミレーナさんの知り合いか何かなのかい？」

店主の声の調子で怪しまれていると悟った俺は、無理矢理話を終わらせる事にした。

「まあ、そんな所だ。教えてくれてありがとな。ああ、そうだ。

そこにある林檎五つくれ」

「はいよ！　ありがとね！」

品物を買う事で、店主の気を逸らす事には成功したらしい。俺は代金を払って林檎の入った紙袋を受け取り、リネと共に商店から離れた。

「……どういう事なんだろうね？　本当にディーンを探してるミレーナさんなのかな？」

とりあえず教えてもらった方向に歩く俺の横で、リネが不思議そうに首を傾げた。

確かに俺も、訳がわからないというのが本音だ。ミレーナが何も言わずに俺の前から消えた事も謎の一つなのに、その上この街で別の誰かとのんびり暮らしてるなんて、何かの冗談にしか思えない。

聞いた相手が悪かったのかも知れないと思い、俺とリネはとりあえず、進行方向上にあるいくつかの商店で聴き込みを繰り返した。

だが返ってくる答えは、どれも概ね最初に聴いたものと同じだった。

『ログと一緒に暮らしているミレーナさん』。

それがこの周辺の共通認識になっているようだ。

「……訳わかんねえ」

結局、導き出した結論はこれだった。しかも聴き込みを繰り返しながら進んでいる間に、目的の家の近くまで辿り着いてしまった。

最初の商店の店主が言っていた通り、前方の少し離れた位置に、白い煉瓦れんがで出来た二階建ての家が一軒建っていて、その軒先に小さな花壇がある。

通りの隅で立ち止まった俺とリネは、遠くからその家を観察した。って言うか、今の俺たち絶対怪しい奴らだよな。

「あの家だよな、教えてもらったのって」

「ああ、多分な」

「でもどうする？　人違いかも知れないけど、一応尋ねてみようか？」

「……そうだな。確かめてみない事には、何とも言えない訳だし」  
俺は意を決して、目的の家の方向に向かって歩き出した。チラリと後ろを見ると、リネが少し不安そうな顔で付いて来ている。

確かに俺自身の胸も、妙な不安で押し潰されそうになっている。本人にしる人違いにしる、ちゃんと確かめないとこの不安は治まりそうにない。

そうして俺が、もう一度前を向いた直後だった。

もう数メートル先まで迫っていた花壇のある家の扉が、突然開いた。

あまりにも突然で、俺は思わずビクツとして立ち止まった。そして次の瞬間、俺は自分の眼を疑いそうになった。

「……！」

家の中から現れた、金色の髪の女性。腰の辺りまでありそうな長い髪を揺らしながら、花壇の方へ歩いて行く女性の手には、花に水をやる為の如雨露ウツロウが握られている。

俺はその女性に見覚えがあった。

いや、それどころの話じゃない。一年間会っていなかったとはいえ、見間違いようがなかった。

「ミレーナ……！」

俺は思わず叫んで走り出していた。

数メートル程の距離を一気に駆け抜け、少々驚いた様子の彼女の正面に立った。

漸くだ。漸くミレーナを見つける事が出来た。心臓がこれ以上ないぐらいに高鳴っている。

「元気だったか、ミレーナ？俺、あんたの事ずっと探してたんだ！」

通りに響きそうな程大声を出している事に、俺は内心で気付きながらも、それでも止める事が出来なかった。

落ち付け。そう自分に言い聞かせながら彼女の顔を見た時、俺は疑問に思った。

「……？ ミレーナ？」

彼女は少々驚いた表情のまま、俺を見つめて固まっている。俺と一緒に暮らしていた十数年の内で見せた事がないような、そんな表情だ。

「あの」

漸く彼女が口を開いた事に、俺が安堵したのも束の間の事だった。

「あなた、どちら様ですか？」

「え？」

一瞬、俺は何を言われたのかわからなかった。彼女は、ミレーナは今、何と言った？

「……お、おい。冗談やめろよ……」

俺の心臓が、さつきとは違う意味で高鳴っている。

そんなはずない。有り得ない。そう叫んでいるみたいに。

「俺だよ……！ あんたの息子で、弟子でもあるディーンだ！ 忘れちゃったのかよ！？」

「ちよ、ちよつと待ってディーン！」

あまりの事にミレーナに掴み掛かりそうになった俺を、横合いからリネが止めに入った。

と、その時だった。

「どうしたんだい、ミレーナ？」

家の玄関の方から男の声が聴こえて振り向くと、そこには三十年代後半の男が立っていた。短く整えた黒髪に、楕円形の眼鏡を掛けた男。こいつが商店の店主が言っていた、ログハイムだろうか？

「ログ。それが……」

言い淀むミレーナの表情は、驚きから不安へと変わっているように見えた。まるで見ず知らずの人間に、突然声を掛けられた時みたいな表情だ。冗談でやっているにしても、ここまでリアルな表情を出せるものだろうか？

困惑している俺に視線を向けてきたログと呼ばれた男は、俺の容姿、特に髪の方を見てこんな事を言った。

「紅い髪……。もしかしてキミ、ディーンと言う名前なんじゃないかい？」

「！ え？ 何で俺の名前を……」

驚く俺を尻目に、眼鏡の男は一人納得したように頷いた。そして優しく微笑むと、不安そうな表情のままのミレーナに言う。

「大丈夫だよ、ミレーナ。彼らはボクの知り合いだから」

ミレーナの肩にポンと手を置いた後、眼鏡の男は俺の方に歩み寄ってきた。すると突然、その表情が真剣なものになった。

「詳しい事は中で話すよ。ディーン・イアルフス君」

「！」

少し警戒する俺に再び優しい笑顔を見せ、眼鏡の男はミレーナを家の中へと連れて行く。その間もミレーナは、眼鏡の男に全く警戒する素振りすら見せていなかった。

「……どうするの、ディーン？」

「……そんなモン、決まってるんだろ」

不安そうに尋ねてきたリネに短く返し、開けっ放しだった玄関へ、俺はゆっくりと歩き出す。

一瞬視界に映った空の色が、さっき見た時よりも黒くなっているような気がした。



## 第二章 喪失 - deletion - (前書き)

という訳で、紺碧の泉編第二章です。

例によってまた長くなっていますが、楽しんで頂けると幸いです。

## 第二章 喪失 - deletion -

この世界での『魔術師』たちは、『魔術』を行使する際、基本的に呪文の詠唱をしない。

全ての『魔術』の基本となるのは、『事象そのもののイメージ』であり、これ自体が詠唱という行為と同義だ。

ただし例外もある。

強大な力を持つ『魔術』や、制御の難しい『魔術』などには、詠唱が必要となるものもあり、例えば『術式魔法陣』なんかがそれに該当する。

『魔術師』になる為にはまず、最初に行なうべき重要な事柄がある。それは、自分の『属性』を知る事だ。

これは『導力石』を用いた専用の『儀式』によって判別されるもので、これによって『魔術師』は自分の『属性』を知り、それに沿った『魔術』を極めていく事になる。俺の場合は、それが偶然にもミレーナと同じ『炎』だったという事だ。

自分の『属性』を知った後、『魔術師』は最初の段階では、『導力石』を介して『魔術』の行使を行なう。そうして『魔術』そのものに術者が慣れてくると、次第に『導力石』を用いなくても、『魔術』が使用出来るようになってくる。

基本的に『魔術師』は、自分の『属性』の『魔術』のみしか扱えない。

だがこれに関しても、二つの例外が存在する。

一つは、『導力石』を用いる『印術』を行使する事。

そしてもう一つは、この大陸に存在する『魔術師』の中で唯一、二つの『属性』の『魔術』を操る者がいる事。

その人物はミレーナと同じ、『反旗軍』の中核メンバーにして、『英雄』の一人である男。

そいつの名前は 。

「　　ディーン、大丈夫？」

ボーっとしていた俺は、心配そうなりネの声で我に返った。隣を見ると、やはり予想した通りの表情をしたリネがこっちを見ていた。「……………ああ、何ともない」

俺は苦笑してそう言った。……………もちろん、そんなの嘘に決まっている。痩せ我慢もいい所だった。

今俺とリネは、眼鏡の男に招き入れられた家のリビングにいる。木製のテーブルに椅子が四つ。その片側を二人で占領するように座って、俺たちはジッと眼鏡の男の事を待っている。

あの男は俺たちをここに招くと、「少し待っていてくれ」と言っ、ミレーナを連れて家の奥へと消えて行った。

それからしばらく、俺は色んな事を思い出していた。

それはミレーナと過ごしていた頃に起きた、思い出と言える出来事。

自分の『属性』がミレーナと同じ『炎』だとわかった時、ミレーナが驚いていた事。それが俺自身も、とても嬉しかった事。

初めて『魔術』を行使した時、失敗して自分の着ている服を燃やしそうになった事。それをミレーナに、凄じ剣幕で怒られた事。

『導力石』を用いなくても『魔術』を行使出来るようになった頃、俺一人で『ゴレム』を倒して、ミレーナに褒めてもらえた事。彼女と笑い合っていた事。

本当に、色んな事を思い出した。

だけどそんな思い出が、彼女の放った一言で、音を立てて崩れたような気がした。

『あなた、どちら様ですか？』

我ながら、なんて脆い作りの心なんだ。そのたった一言で、ここ

まで感情が沈んでしまうなんて……。どうやら俺は自分で思っている以上に、彼女の事を心の拠り所に行っているみたいだ。

そんな事を考えていると、家の奥から漸く、さっきの眼鏡の男が姿を現した。まあ漸くと言っても、それ程時間は掛かってないはずなんだけどな。

「待たせてすまないね。ミレーナには、少し席を外してもらおうと思つて、無理矢理用事を押し付けてきたんだ」

そう言つて優しく笑つてから、眼鏡の男はテーブルを挟んだ俺の正面の椅子に腰を下ろした。そして優しい表情のまま、再び口を開く。

「自己紹介が遅れたね。ボクの名前はログハイム・ベスカ。友人からはよくログと呼ばれてるよ。この街で歴史の研究をしてる。キミの名は、デイン・イアルフス君、でいいんだよね？」

「……はい」  
「よろしくね。　　と、そうだ。そつちのキミは何と言う名前なんだい？」

ログハイムは、リネを見つめて思い出したように言った。すると慌てた様子でリネが答える。

「あつ、はい。リネ・レディアつて言います。よろしく」

「リネさんか。こちらこそよろしくね」

また優しく微笑んだ後、ログハイムは表情を少し厳しいものに変えて、ゆっくりと口を開いた。

「キミたちが聞きたい事はわかつてるつもりだ。だから、単刀直入に言おう」

ログハイムは少し間を開けて、そして厳しい口調で言った。

「彼女、ミレーナ・イアルフスは、記憶喪失になっている」

「　　ッ！」

ある程度は予想していた言葉だった。

さつき家の前でミレーナが俺に見せた表情。あれは演技や冗談なんかじゃなく、本気で俺の事がわからなかったんだ。自分が覚えていない見ず知らずの人間に声を掛けられた事で、ミレーナは驚き、怯えていたんだ。

見ず知らずの人間、か……。そういえばいつか、俺はそんな事を想像してたな。ミレーナが俺の事を忘れてしまっているんじゃないか、って。

「どうしてそんな事に？」

俯き掛けていた俺の耳に、真剣なりネの声が響いてきた。俺が顔を上げると、リネの言葉にログハイムは軽く頷く。

「順を追って説明するよ。……事の始まりは、今から二カ月前の事だ」

ログハイムはテーブルの上で両手を組むと、真剣な表情で語り始めた。

「その日ボクは、この街で強盗に襲われてね。持っていた荷物を奪い取られて、逃げられそうになったんだ。それを助けてくれたのが、他にもないミレーナだった」

本当に一瞬の出来事だったらしい。

強盗に荷物を奪われたのも。その強盗を、横合いから現れたミレーナが取り押さえたのも。

その強盗を『ギルド』の人間に引き渡した後、ログハイムは、ミレーナにお礼を言うと、言って酒場に案内したそうだ。

まるでその時の事を鮮明に思い出しているかのように、ログハイムは続ける。

「彼女の名前を聞いた時は、本当に驚いたものだよ。あの『英雄』と話が出来るなんて想像した事もなかったから、ボクは年甲斐もなく興奮してね。本当に色々な事を聞いたよ。『魔術』の事。『倒王戦争』の事。戦争時の情勢の事。他の『英雄』たちの事。そしてもちろん、キミの事もね」

ログハイムに視線を向けられ、俺は少し緊張した。ミレーナが話

していた俺の事とは、一体どんな事だったんだろっ？ そう考えると、俺の事を話してくれている事を嬉しくも感じたし、また怖くも感じた。

「炎のように紅い髪をした、出来の悪い馬鹿弟子でもあり、馬鹿息子でもある、大切な存在。そんな存在が私にもいる。そんな風に語ってたよ」

「……へっ。ミレーナが言いそうな台詞だ」

俺が軽く苦笑すると、ログハイムも一瞬だけ表情を緩めた。だがすぐにまた、表情を厳しいものに変える。

「それからしばらく語り合った後、彼女はまたどこかへ旅立っていた。それから一月程経った頃だよ。ボクが他の街から『紺碧アジュールの泉フラウンテン』に帰ってきた時、湖の畔ほとりで倒れている彼女を発見したのは「酷い有様だったんだろっ。ログハイムの表情は、まるで自分の事のように辛そうだった。」

彼によると、ミレーナは何者かに襲われた後のように、ボロボロの状態だったらしい。一体何が起こればそんな状態になるんだと、俺も思う。

彼も俺と同じ事を思ったからこそ、そんな彼女を放っておけず、自宅で介抱する事にしたそうだ。

それから二日程ミレーナは眠り続け、そして目覚めた時には。

「彼女は、自分の名前さえも覚えていない状態だった」

ミレーナに何があったのか？ それをログハイムが知る術はなかった。医者にも見せたそうだが、記憶喪失の原因はわからず、また治るかどうかもわからないという事だったそうだ。

「だからボクは、彼女の身を保護しようと思った。長い間連絡が付かなければ、いずれディーン君、キミが彼女を探しに来るだろうと踏んで、彼女とずっと一緒に暮らしていたんだ」

「……」

俺はどう答えるべきなのかわからなかった。

「ありがとうございます、と感謝するべきなのか。迷惑掛けてすみません、と頭を下げるべきなのか。それとも、もっと他の何かを言うべきなのか。」

いずれにしろ、俺は言葉を紡げなかった。

「そのせいだろうか？ 俺たちの間に、長い沈黙が訪れた。」

「あの写真の女性は？」

長い沈黙を破ったのは、リネのそんな一言だった。いつの間に写真なんか見つけたんだと思い、俺はリネが見ている方向に目を向けてみる。

そこには皿やカップを仕舞う硝子戸ガラスの付いた戸棚があり、その中に写真立てが一つ、食器類に混じって飾られていた。その写真にはログハイムと一緒に、長い茶髪の女性が写っていて、二人は本当に幸せそうに笑っている。

「ボクの妻だよ。三年程前に、流行病はやりやまいで亡くなったんだ」

「え……」

俺とリネは、ほとんど同時にログハイムの方を振り向いた。彼は少し寂しそうに笑いながら、自分たちが写った写真を見つめている。「元々身体が弱かった人だね。長い闘病生活が続いていたんだけど、残念ながら打ち勝つ事が出来なかったんだ」

「その……、ごめんなさい。余計な事聞いちゃって……」

申し訳なさそうにリネが俯くと、ログハイムは慌てた様子で首を横に振った。

「気にしなくていいよ。彼女が亡くなった事は確かに悲しいけど、今はもう大丈夫だから。それに、妻の事があったから余計にだるうね。記憶を失ったミレーナの事を、放っておけないと思ったのは」

そう言ってログハイムは、また優しい笑顔を見せる。

彼のそんな言葉を聞いたからだろう。このままじゃいけないと思っただ。

ミレーナが記憶喪失になっている事は確かに悲しいが、いつまでも感傷に浸っている場合じゃない。今までミレーナの身を守ってくれていたログハイムの為にも、彼女が記憶を失った原因を探らなくちゃいけない。

俺は気持ちを何とか切り換え、ログハイムに告げる。

「ログハイムさん。記憶を失う前、ミレーナは何か言ってますでしたか？ その、記憶を失う原因になるような何かを……」

「……そうだな」

しばらく考え込んだ後、不意にログハイムは、何かを思い出したように顔を上げた。

「そういえば酒場で話してた時、ボクが歴史学者だと言ったら、彼女が妙な事を聞いてきたんだ」

「妙な事？」

「『デス・ベリアル』という言葉聞いた事があるか、とね」

「『デス・ベリアル』？」

「デイン、何の事だかわかるの？」

「いや……」

リネに尋ねられたが、残念ながら俺の知識の中に、それに該当するようなものは見つからない。今のを言葉通りに受け取るんだとすれば、意味は『死を齎す悪魔』って事だけだ。

『デス・ベリアル』……。一体何の事なんだ？

人の名前だとは思えないし、地名だとも思えない。なら考えられるのは、何かの『魔法名』か、もしくはそれを操る『魔術師』の『通り名』。

いずれにしろ、これだけじゃ手掛かりが少な過ぎる。もしかしたらミレーナと暮らしていた時の事で、何か俺が見落としているものがあるのかも知れない。

すると、その時。



「ログ。書斎の整理終わったわよ。あ」

家の奥から現れたミレーナは、俺の顔を見てまた少し不安そうな顔をした。彼女のその表情を見ると、何だか胸の辺りが重苦しくなる。

すると俺の内心を察したかのように、ログハイムは笑顔でミレーナに言う。

「警戒しなくても大丈夫だよ、ミレーナ。少し話があるんだ。ここに座ってくれないか？」

ログハイムに手招きされ、ミレーナは渋々といった様子で、開いていた椅子に腰を下ろした。

こうして見ていると、その大人しい感じが以前のミレーナからは想像も出来ない。俺と暮らしていた時の彼女は、『魔術』に関して負い目があるものの、もっと明るくて活発で、たまに冗談や毒を吐く事もあつて。

「……話つて？」

ミレーナの不安そうなその声で、俺は我に返った。それに気付いた様子もなく、ログハイムは続ける。

「うん。キミが記憶喪失だって話は、以前にもしただろ？ 今眼の前にいる彼らは、いや、紅い髪の彼は、キミが記憶を失う前、キミと一緒に暮らしていた少年なんだよ」

「！ え……？」

本当に信じられないと言いたげな表情で、ミレーナは俺の方を振り向いた。彼女と眼が合った瞬間、一気に気不味い空気が流れる。

それにしても、なんて話の振り方をするんだ、このログハイムって奴。いくらなんでも突然過ぎて、こっちだって心の準備が出来てない。

俺は何を言うべきか迷ったが、とりあえず本当の事だけを口にすることをにした。

「え〜っと……、俺の名前はディーン。あの……、あんたは覚えてないだろうけど、俺は戦争孤児だったんだ。それをあんたに拾われ

て、名前を付けてもらって、十何年かぐらい、一緒に暮らしてたんだ」

「……私が、あなたと？」

「信じられねえだろうけどな」

俺が自嘲気味に苦笑してみせると、ミレーナは驚いてこそいたが、それでもさつきよりは幾分か、警戒心が弱まったような気がした。

それから俺は、自分が覚えているミレーナとの思い出を、彼女に長くならない程度に話して聞かせた。

リネもログハイムも、俺が話している間、静かに俺の話を聞いていた。

「まだ宿を決めてないんなら、この家に泊まっていけばいい。幸い、部屋なら空いてるからね」

自分でも少し語り過ぎたかと思う程語り終えた頃、宿を決めていない話をする、ログハイムは笑ってそう提案してくれた。

別にこつちとしても、それを狙って言った訳じゃない。

第一、今のミレーナは記憶を失っていて、俺とは初対面と言っている状態だ。そんな連中がいきなり家に泊まる事になれば、誰だっ てあまりいい気はしないだろう。と言うか、俺の方が色んな意味で気不味過ぎる。

ところがここで、当のミレーナが意外な事を口にする。

「ログが構わないなら、私も反対しないわ。ディーンくん、リネさん。どうぞゆっくりして行ってね」

記憶を失っているミレーナからすれば、あっさり拒絶してもいい

場面だろうに、それどころか彼女は優しい笑みを浮かべてそう言った。その表情に、家の前で見せた不安な様子は微塵も感じられなかった。

もしかしたら俺のした思い出話が、警戒心を解くという意味で意外と功を奏したのかも知れない。

「……それにしても、まさかミレーナに『くん付け』で呼ばれる日が来るとはな」

意外な展開、どころかそんな想像すらした事がない。

ログハイムに宛がわれた二階の部屋の一室。ベッドの角に腰を掛けて、俺は一人苦笑を漏らす。ミレーナが記憶を失っている事にシヨックを受けてはいるものの、どうやらまだ笑う力が残ってはいるようだ。

まあ前向きに考えるなら、記憶は無くても、彼女の身は無事だった訳だし……。

俺は立ち上がって、部屋の窓辺に向かった。もうすぐ昼になる時間帯だが、窓の外の空模様は、相変わらず重たい色をしている。雨が降っていないのが不思議なくらいだ。

「『デス・ベリアル』、か」

窓の外を見つめながら、俺は独り言を呟いた。

ミレーナが記憶を失う前に、ログハイムに尋ねたというその言葉。

『死を齎す悪魔』。

仮にその言葉が、本当に悪魔の名前を差しているものだとすれば、ミレーナが俺の前から姿を消した理由は、その悪魔を探し出す為だったんだらうか？

だけどちよつと待てよ。悪魔だぞ、悪魔。俺だつて一応『魔術師』ではあるけど、それにしただって存在を信じられるものには限度がある。

『ゴルムダル大森林』で多少関わってた『ウエアウルフ人狼』のような、ある意味人種的なものならまだしも、悪魔とかになつてくるとさすがにキツイものがある。

いやまあこの世界にも、そういう存在を信じる説はいくつかある。

例えば、『精霊』。

よく『魔術師』の間では、『炎』、『水』、『風』、『地』。この四つの『属性』を『四大属性』という括りで表す事がある。

この『四大属性』が、この世の万物を生み出しているものだと考えられていて、それぞれの『属性』には、それぞれの力の『象徴』と言える存在があるとされる。

それが、『精霊』だ。

俺も『魔術師』の端くれである以上、『精霊』に関しては実在する存在かどうかは別としても、力の『象徴』として考えられるのはわかる。

だが六つある『属性』の中の残る二つ。『光』と『闇』に関しては、その力の『象徴』として捉えられている存在が、どう考えても納得出来ないのだ。

その存在とは何を隠そう、『天使』と『悪魔』だ。

なぜ『精霊』を認められて、『天使』や『悪魔』を認められない？ と思われるかも知れないが、いくら『魔術師』の俺でも、その二つに関しては首を傾げざるを得ない。

さっき言った『四大属性』がこの世の万物を生み出している、と言うのは、これはまだ理解出来る。実際人間は火や水を使って生活するし、何かを作り出す事にも活用する訳だしな。

だが『光』と『闇』はどうだ？ 別にそれ自体が何かを作り出す訳じゃないだろう？

別に『精霊』の存在を信じてる訳じゃない。でもだからと言って、それが『天使』と『悪魔』の存在を信じる事に繋がる訳でもない。『魔術師』なのにこんな事を言う俺は、充分可笑しな存在なんだから。

うけど。

まあ話を戻すと、なぜミレーナがそんな存在の不確かなものを探して旅をしていたのか、という事だ。しかも一緒に暮らしていた俺に、何一つ告げる事なく。

馬鹿にされるから、なんて理由じゃないのは確かだろう。

現にミレーナは発見された時、ボロボロの状態だったんだ。もしかしたら、それだけヤバい事に関わっていたのかも知れない。

とにかく、比喩にしろ何にしろ、この『デス・ベリアル』という言葉のみが、今の所重要な手掛かりって事だ。

この言葉を探って旅を続けていけば、いずれミレーナが記憶を失う原因になった何かに遭遇する確率が高い。そうすれば、彼女の記憶を元に戻す事も可能なんじゃないか？

そんな結論に至った時だった。

「　　ディーン、ちよつといい？」

部屋の扉がノックされ、少し躊躇いがちなリネの声が聴こえてきた。

俺は返事をするよりも先に扉に向かい、ドアノブを回して扉を開ける。

「どうしたんだ？」

「あ、えつと……。大した用は無いんだけど、ディーンと話したいなあと思って」

俺が返事もなく扉を開けた事に、リネは少々驚いたようだ。かなり慌てた様子でそんな事を言い、あちらこちらに視線を投げている。

「そうか。まあ入れよ」

人の家の一室だというのに、まるで自分の部屋に招き入れるみたいな物言いだ。我ながら、結構図々しい言動だよな。

そんな事を思いながらリネを部屋に入れ、俺は再び窓辺に戻る。

対してリネは、おずおずといった様子でベッドの端に腰を下ろした。

「で？ 何だよ、話したい事って？」

「えつと、その……」

……？ 何か妙に齒切れの悪い感じだな。言いたい事があるならハッキリ言えハッキリ。

「何だよ？ そんなに言い出しにくい事なのか？」

「そうじゃないよ。ただね……、ディーン大丈夫なのかな、って思  
って」

「……は？」

言葉の意味がわからず困惑する俺を尻目に、リネは少し俯いた感  
じで続ける。

「だって一年だよ？ 一年間もずっとミレーナさんを探し続けて、  
それで漸く会えたのに、ミレーナさんは記憶を失ってる。そんな悲  
しい事ってないじゃない。……悲し過ぎるよ」

「いやでも、お前がそんなに気にする事じゃ」

「気にするよ！」

「！」

顔を上げ、語気を荒くして叫んだリネの眼には、薄らと涙が溜ま  
っている。洒落や冗談で流せるような様子じゃなかった。

「気にするに決まってるよ！ だって、自分が大切に思ってた人が、  
自分の事を忘れちゃってるんだよ？ それなのにディーンは、ミレ  
ーナさんの前で思い出話とか始めて……！ 可笑しいよ。何でそん  
なに冷静でいられるの！？ 悲しいって思わないの！？」

「……」

そうか。傍から見ると、今の俺はどうやらそんな風に見えるらし  
い。

他人事のように冷静で、悲しんでいるように見えない。

そう見えているなら、どうやら俺は人を欺あざむく事が上手くなったよ  
うだ。

もちろん、そんなのは全部まやかした。取り繕とってるだけだ。

冷静でいられる訳ない。

悲しいと思っていない訳がない。

何が前向きに考えれば、だ。

ミレーナが記憶を失っている。そんな事実を、一体どうすれば前向きに考えられるって言うんだ。

全部わかってる。誰かに指摘されるまでもない。本当は、自分でわかってるんだ。

今の俺は、本当に無力だ、って事が。

「心配してくれてありがとな、リネ」  
でも。だけど。

俺には泣いてる暇なんて無いんだ。立ち止まる事なんて出来ないんだ。

そんなのは全部、後回しにすればいい。

「俺なら心配いらねえよ。だから、お前が気にする必要なんてないんだ」

俺は今、一体どんな表情をしているんだろう？ 全部わかってると言ったが、それだけはわからなかった。

「ッ！」

そんな俺の顔を見て、リネは一瞬怒ったような顔をした。そして立ち上がると、俺が呼び止める暇もない程素早く、部屋を飛び出して行った。

今のはやっぱり不味かったんだろうか？ もしかしたら彼女を傷付けてしまったかも知れない。

リネの後を追おうか逡巡していると、開けっ放しだった部屋の扉の所に、いつの間にかログハイムが立っていた。

「少し話があるんだけど、いいかな？」

ログハイムはそう言って、優しくニコリと笑ってみせた。

この街に着いた直後は、あたしは嬉しい気持ちでいっぱいだった。デイーンがあたしに買ってくれたネックレス。無理矢理買わせた感じになってたけど、それでもデイーンは「失くすなよ」と言っただけで渡してくれた。

だからあたしは、子供みたいに喜んで、幸せな思いを噛み締めていた。

本当に、嬉しかった。

だけど今は、物凄く悲しい。

漸く見つける事が出来たミレーナさんが、記憶を失っている事が、じゃない。

一番辛いはずのデイーンが、冷静なままにいる事が、でもない。

デイーンがあたしを頼ってくれなかったのが、何よりも一番悲しかった。

お前が気にする必要なんてない。

彼が言ったその言葉が、いつまでも心の中に響いていた。

まるで、お前の事なんか必要としてない。頼りになんかしていない。そう言われてるような気がして、気付くとあたしは部屋を飛び出して、ログハイムさんの家からも飛び出していた。

目頭が熱い。視界が滲んで上手く走れない。

「うっ……」

全速力で走っていたはずなのに、いつの間にか小走りになって、徐々に歩く速度になって、最後には立ち止まっていた。両眼から、涙が溢れていた。

一番辛いのはあたしじゃない。デイーンのはずなんだ。

そう思うのに、涙は止まらなかった。止まってくれなかった。



昼間の通りで人目も憚はまからず、あたしは一人ですつと泣き続けた。

## 第二章 喪失 - deletion - (後書き)

この章も気付くと一万文字近く書いてました(汗)  
文字数を減らす努力はしているつもりなんです、それが結果として現れてない……。

そういえばこの話で、この世界における『魔術師』の設定が漸く明るみに出た気がします。

しかも『精霊』やら『天使』やら『悪魔』まで(笑)

この章に書かれているのは、あくまで作者個人の設定でありますので、「ん？何かおかしくないか？」と思ってもあまり気にしないでくださいw

第三章 襲撃者 - attacker - (前書き)

一週間ぶりの投稿です。

いよいよ『あいつ』が出て来ます！ (笑)

不思議な感じがする少年だった。

炎のように紅い髪。歳相応以上に落ち着いた雰囲気のある彼は、まだ十代中頃らしい。若い見た眼に反して、『魔術師』としてその外見からは想像も出来ないような、豊富な経験を持っているみたいだ。

彼はディーン・イアルフスと言う名前で、随分昔から私の事を知っているらしい。それどころか私は、彼と一緒に暮らしていたそう  
だ。

なぜこんな曖昧な表現になるかと言うと、私が彼の事を全く覚えていないからだ。

そう、なぜなら今の私は、自分自身の記憶を失っているのだから。とはいえ、イアルフスと言うセカンドネームの事を、私は他人事のように思う訳にはいかない。イアルフスと言う名は、私自身の名前でもあるからだ。

ミレーナ・イアルフス。

それが、記憶を失う以前に私が名乗っていた名前だそうだ。

もちろん私は自分の名前さえも覚えていない。記憶を失った私を助けてくれたログが、ミレーナと言う名をそのまま使っていただけだ。

だからログから教えられた事実が、私には未だに信じられない。

自分がこのジラータル大陸の歴史を変えた、『倒王戦争』の『英雄』だなんて。

だけど、あの紅い髪の少年、ディーンくんが話してくれた彼の思い出話は、私の胸に不思議な感情を齎した。

懐かしい、と言うべきなのか。

思い出を話していた時のディーンくんは、本当に優しく嬉しそうな表情だった。その表情を覚えているような気がしないでもないが、それでも明確な事は何も言えない。

何も、思い出せない。

「私は一体、何者なんだろう」

ログと暮らしていた一カ月の間、何度も繰り返し考えていた事を私は声に出して呟いた。記憶を失う前の私がミレーナ・イアルフスなら、今ここにいる『私』は、一体誰なんだろう？

まあ、そんな事考えたって答えが出る訳ないんだけど。

「あら？」

ログに頼まれた買い物を終えて、石畳の通りを歩いている時だった。ふと顔を上げると、前方に見える十字路の角の部分に、黒髪の少女が蹲っているのが見えた。

首の付け根辺りまである髪に、ちよつと男勝りな服装。

確か彼女は、ディーンくんと一緒にいた。

「リネさん」

蹲っていたあたしは、頭の上から聴こえた声にゆつくりと顔を上げる。するとそこには、買い物袋を両手で抱えたミレーナさんが、不思議そうな顔をして立っていた。

「どうしたの、こんな所で？ ディーンくんは一緒じゃないの？」

「……あ、えつと」

どうしよう。ディーンとケンカして家を飛び出して、一人でずっと泣いてました……なんて言えないし。それにケンカって言うか、

あたしが一人で勝手に泣いてただけだし。

どう返事したらいいか困っている、ミレーナさんが急にしゃがんで、目線をあたしと同じにした。

「もしかして、泣いてたの？」

「！」

ミレーナさんに指摘されて、あたしは思わずドキッとした。多分今、あたしの眼は赤くなってるんだと思う。だから泣いてたのがバレバレなんだ。

何だか急に恥ずかしくなってきた、あたしは何とか誤魔化そうと、勢い良く立ち上がった。

「何でもないです。ちょっと歩き回り過ぎちゃって疲れたから、休憩してただけで……」

「そうなの？ ……ならいいんだけど」

まだ少し心配そうな顔付きのまま、ミレーナさんも立ち上がった。彼女の目線は、あたしよりも少し高い。

すると、立ち上がった彼女の金色の瞳が、あたしの胸元の辺りに注がれる。

「さつき見た時も思ったけど、そのネックレス可愛いわね」

「え？」

指摘されたあたしは、彼女の視線を追うように視線をゆっくりと下げた。

そこにあつたのは割り貫かれた星型のネックレス。真ん中に紅い宝石が付けられた、あたしの宝物。

「？ ……リネさん？」

心配そうな声でミレーナさんに呼び掛けられて、あたしはハッと  
する。

いつの間にかあたしの眼から、また涙が溢れていた。

ログハイムに提案され、俺は居間に戻っていた。階下に降りると俺とログハイム以外、家の中には誰の姿も見当たらない。俺が二階の部屋にいる間に、ミレーナはどこかへ出掛けたようだ。

いや、恐らくまた彼の仕業だろう。俺と話をする為に、何らかの理由を付けてミレーナを外に出したんだ。

外に出るといえば、リネはどこへ行つたんだらう？

階下へ降りる時、一応リネが宛がわれた部屋を覗いてみたが、当然彼女の姿はなかった。やっぱりさっきの会話で、彼女に何かしらのシヨックを与えてしまったんだらう。

探しに行こうかとも思ったが結局は止めた。今俺が後を追つても何だか逆効果な気がするし、何よりログハイムに話があると呼び止められている。俺としてもこの人とは一度、二人だけで話したいと思っていた所だったんだ。

……って何だかこれじゃあ、リネを追う事を止める為の言い訳みたいだよな。

「いきなりで申し訳ないね。ボクとしては、一度キミと話し合っておきたかったんだ」

ぼんやりと考え込んでいた俺は、ログハイムの声でハツとする。俺は今の椅子に腰を掛けながら、キッチンへ向かう彼に言葉を返した。

「いえ、それは俺も同じですから」

「そうなのかい？ それは嬉しいね。……ところで、キミを呼び止めたボクが言うのも可笑しい事だけど、リネさんの事、追い掛けなくていいのかい？ 何かあったんだらう？」

キッチンの方から聴こえてくるログハイムの口調は、俺やリネの事を心配しているように思えた。多分彼は、部屋を飛び出していく

リネの姿を目撃したんだろう。

俺は出来るだけ平静を装って、静かに言葉を返した。

「ちよつとした口喧嘩ですよ。そんなに深刻な事じゃないんで大丈夫ですけど、今はそつとしておきたいんです」

「……そうか」

彼は短く返すと、それ以上何も言わなかった。もしかしたら俺の嘘を見破ってるのかも知れない。

しばらくしてキッチンの方から、ログハイムはティーセットを持って現れた。テーブルに紅茶の入った白いカップを置き、俺の前へと差し出す。俺は彼が対面に座るのを待ってから、カップを口に運んだ。

「キミはミレーナの事が好きかい？」

いきなりの事だった。

予想もしていなかった唐突な質問に、俺は盛大に紅茶を噴き出した。

さっきも思ってた事だけど、この人はどうも話の振り方が突然過ぎる。多分違うとは思うけど、いやそう思いたいけど、狙ってやっているとしたらとんでもない奴だぞ。

「ああ、ごめんごめん。ちよつと気になって聞いてみただけなんだ。すまなかつたね」

そう言いながら、ログハイムは立ち上がるとテーブルの傍にある戸棚から新品らしい白い布巾を取り出し、俺の方に差し出す。俺はそれを受け取り、汚してしまった部分を拭き取りながら答えた。

もちろん、かなり答えにくい質問だったけど。

「そりゃまあ、嫌いではないですよ。俺を拾って育ててくれた、言わば恩人みたいな人だし、『魔術』の師匠でもあるわけだし」

「そうだよ。嫌いだったら、一年も掛けてミレーナの事を探し出そうなんて思わないよね」

「……？」

冗談のつもりで聞かれたのかとも思ったが、どうやらそうでもな



いらしい。俺の答えを、ログハイムは椅子に腰掛けながら満足気に受け取っているみたいに見えた。

一体どういう意図の質問だったんだろうと、俺が首を傾げそうになった時だった。

「デイーンくん。キミに一つ頼みたい事があるんだ」

「え？」

「……いや。これはそもそも、ボクが頼むような事じゃないんだろ  
うね。図々しいお願いだ」

一旦苦笑して眼を伏せた後、ログハイムは真剣な表情で俺を見つめ、そして告げる。

「ミレーナをこの街から連れ出してくれないか？ もちろん、彼女の記憶を取り戻す為に、という意味でね」

「！」

それは意外な申し出だった。俺としては、ミレーナを連れ出す事をこつちから頼むつもりでいたんだが、まさか彼の口からそれが出るとは思っていなかった。

「どうして、ログハイムさんがそんな事を？」

「さっき話したボクの妻の事、覚えてるかな？」

問い掛ける俺に質問返しをして、ログハイムはテーブルの横にある戸棚の方に視線を向ける。

硝子戸ガラスの向こうに食器類と一緒に仕舞われている、一枚の写真。

そこに写っているのは、ログハイムと彼の妻だった女性だ。

「記憶を失ったミレーナを見た時、ボクは真つ先に妻の事を思い出した。辛そうな表情で床に伏せているミレーナの姿が、妻と被って見えたんだ。だからボクは彼女を守りたいと思った。妻を守る事が、助ける事が出来なかったボクだからこそ、今度こそ絶対に！

……ってね」

ログハイムの表情は真剣だった。見ている俺の方が、彼の強い感

情に圧倒されてしまいそうな程に。

俺が驚いた顔をしたからだろう。自分を宥めようとするみたいにログハイムは、急にフツと笑みを漏らした。

「それにミレーナと過ごしたこの一カ月は、ボクにとって夢のような時間だったよ。とても楽しかった。本当に、本当に幸せだった。まるで妻が生き返ったような気がしたくらいだ」

「……ミレーナの事、好きなんですか？」

一瞬の間の後、自分がされた質問を今度は俺が返していた。

俺自身、少し照れがあつて答えにくい質問だった。だがログハイムは、驚いた表情を見せる事なく笑つて頷く。

「ああ。好きだよ。とても大切な存在だ。キミがミレーナを慕う気持ちに、負けなくらいのものだと思つてる」

真つ直ぐな言葉だった。それと同時に、彼は優しい光を湛えた瞳で真つ直ぐ俺を見ていた。

その瞳は嘘も偽りも打算もないと、なぜか確信出来るものだった。「だからこそ、キミに頼みたいんだ。ミレーナの過去を知っているキミなら、きつとボクよりも上手く彼女を助ける事が出来るはずだよ」

そう笑つて言うログハイムの表情は、それでもどこか切なそうに見えた。

多分彼自身、心のどこかにミレーナと別れる事を拒否したい気持ちがあるんだろう。この一カ月、ミレーナの事を守り続けたのは間違いなく彼なんだから。

そう。守っていたのは、俺じゃないんだ。

ふと気付くと、俺は黙り込んでしまっていた。何かを言わなきゃいけないと思ひ、俺が口を開こうとした、その時。

外の方から何か弾け飛ぶような轟音が聴こえ、地震でも起きたのかと思う程、家具類が大きく揺れた。

「なっ!? 何だ、地震?」

驚いた様子でログハイムが立ち上がると、ほぼ同時に揺れの方は治まった。

ただと俺は、地震のような揺れよりも、その前に聴こえた爆発音のようなものが気になった。

俺は即座に椅子から立ち上がり、家の玄関を目指す。扉を開け、外の景色に目を向けて、俺は自分の予想が当たっていた事に強い憤りを覚えた。

俺の視線の先。街の一角から、黒い煙のようなものが立ち上っているのが見える。間違いない何か起きた証拠だ。

「あれは……、何かあったのか?」

いつの間にか俺の隣にいたログハイムが、遠くに立ち上る黒煙を見つめて呟く。俺は咄嗟に彼の肩を掴み、こう言った。

「俺が様子を見てきます。ログハイムさんはミレーナと、それから出来ればリネのヤツを探して、見つけたら一緒に避難してください。多分ずっとここにいたら危険だ」

「危険って……、一体何が起こってるって言うんだい?」

「わかりません。だけど俺の勘がヤバイって言ってるんです。だから二人の事を頼みます!」

軽く頭を下げた後、俺は黒煙の立ち上る方向へ向けて走り出した。背後でログハイムが何かを叫んだようだが、俺の意識は別の所に向いていた為、聴き取る事が出来なかった。

結局あたしは、ミレーナさんに本当の事を言えなかった。

ディーンとの事を思い出してまた泣いてしまったあたしに、ミレーナさんは「何があったの？」と尋ねてきた。

「だけど詳しい理由なんて言える訳がない。」

ミレーナさんが関係してる事です、なんて本人に対して告げるのはとても酷い事だと思う。

感情が昂<sup>たかぶ</sup>つてはいたものの、その点だけは感情に歯止めを掛ける事が出来た。それに関しては自分でもちよつと自慢出来るかな。

だからあたしは、「ただちよつと言い合いになっただけです」と言つて無理矢理会話を打ち切った。まあ当然、ミレーナさんは納得していない様子だったけど。

その後、湖に架かる橋の所までミレーナさんと歩いてきたあたしは、橋の欄干に凭<sup>もた</sup>れ掛かつて、ぼんやりと紺碧色の湖を眺めた。ゆらゆらと揺らめく水の中を、綺麗な魚が優雅に泳いでいるのが見える。

「少しは落ち着いた？」

あたしの隣であたしと同じように橋の欄干に寄り掛かったミレーナさんが、まだ少し心配そうな表情で尋ねてきた。

まだ暗い気持が拭い切れてないけど、あたしは必死に自分の心に嘘をつく。

「はい、もう大丈夫です。ごめんなさい、心配掛けちゃって」

「いいのよ。女同士なんだから、いくらでも相談に乗るわ」

あたしの言葉を信じてくれたのかはわからないけど、ミレーナさんはニコツと微笑んでくれた。

それにしても、ミレーナさんは本当に綺麗だ。腰のあたりまで伸びた金色の髪が、北からの風を受けて小さく揺れる。たったそれだけの事なのに、その姿がとっても優雅に見える。スタイルだってあたしより全然いいし、それに黙つてもどこか知的な感じがする。

言葉足らずなあたしだと上手な表現が見つからないけど、とにかく綺麗な女性なんだよねえ。この街に着いた時に商店のご主人が言つてた事は、あながち間違いないのかも知れない。

ミレーナさんの横顔を見つめながら、ぼんやりとそんな事を思っていた時だった。

何かが弾けるような轟音が街の方から響き、地震を思わせるような揺れがあたしたちを襲った。

「何、今の音？ 爆発？」

ミレーナさんは驚いた様子で街の方を見つめる。それに倣<sup>なま</sup>って同じ方向を見つめたあたしの眼に、不吉さを感じさせるものが映った。街の中心に近い辺りから、モクモクと立ち上る黒い煙。

あたしにはそれが、何かの始まりを告げているように見えた。

黒煙が立ち上る方向へ駆けて行くと、街の人たちが俺とは逆の方  
向へ走り去っていく。どうやらみんな、危険を感じて街の外へ避難  
を始めているらしい。

賢明な判断だと思う。さっきこの街を歩いていた時に思った事だ  
が、どうやらこの街には『ギルド』も、正規軍の詰所も無いようだ。  
つまりこの街には、有事の際に対処出来る役所が無いという事だ。  
役所が無ければ対応出来る人間もいない。あの黒煙が何者かの手  
によって引き起こされたものなら、相手は強盗かテロリストって事  
になる。

そうなれば、まず戦闘は免れない。

俺の他に運よく、戦える人間がこの街にいるとも考えられない。

つまり俺しかない。

今ここで、この街を守るのは！

俺は速度を上げ、石畳の通りを疾走し続けた。そして漸く目的の

場所に辿り着いた。

そこで俺は、眼の前の景色に愕然とする。

「これは……」

酷い惨状だった。

綺麗に整備され、細かく造り込まれていたはずの石畳の道が、碎かれ、抉られ、原形を留めない程に破壊されていた。しかも周りにある商店のいくつかは壁が碎け、倒壊し、中には火の手が上がっている所もある。

この街に着いた時に見たあの美しい光景とは、全くかけ離れたものに変化している。

「くそ……っ！ 一体誰がこんな」

その時だった。

怒りをぶちまけそうになった俺の視界に、あるものが映った。

前方に見える、火の手を上げている商店の真上。黒煙の中に紛れて、人影のようなものが見える。

逃げ遅れた人かとも思ったが、俺はその考えを即座に否定した。

なぜなら黒煙の向こうに見えるその人物は、笑っていたからだ。

面白そうに。

愉快そうに。

その顔に、ニヤリとした笑みを湛えていた。

「おい！　そこで何してやがる！？」

俺が怒鳴り声を上げると、その人物は漸く俺の存在に気付いたようだった。黒煙を迂回するように移動すると、その人物の容姿が俺にもハッキリと見えた。

青紫の少し尖った髪に、蛇のような鋭い目付き。灰色のマントを羽織った、俺より少しだけ年上に見える少年。もしかしたらジントと同じ年ぐらいかも知れない。

そいつは俺の顔を見ると笑みを消し、気だるそうな声で言い放った。

「あア？　何してるか、だと？　そんなモン決まってるだろ。人探

「しだよ、人探し」

「何がどう決まってるってんだ。人探しの為に街を破壊する奴がいるなんて、俺は今初めて知ったぞ。」

「俺の表情から何かを悟ったのか、青紫の髪の少年はまた気だるそうな声を出す。」

「何だよ、文句がありそうな顔だなア？ まあ聞いてやらなくもねエが、その前にこっちの質問に答えてもらうぜ？」

「こっちが何も言っていないにも拘らず、少年は獰猛な眼付きで俺にこう尋ねてきた。」

「ミレーナ・イアルフスって名前に、心当たりはあるか？」

「!？」

「驚く俺の表情を見て少年がまた、ニヤリとした笑みを見せた。」

### 第三章 襲撃者 - attacker - (後書き)

今回初となる、ミレーナさん視点がありました。キャラの書き分け出来ていますでしょうか？

ディーンとリネ以外の視点を書く時は毎回不安なのですが……。じゃあやらないじゃん、って訳にもいかないんですね(笑)

そしてとうとう出て参りました、ジエイガくん。

まだこの時点でディーンは彼の名前を知りませんが、次回からバトル展開が待っております。

それではお楽しみに！ノシ



第四章 二人の弟子 - Crimson vs. Black - (前書き)

おかげさまでユニークが3000人突破しました！  
読んで頂いてる皆さんにこの上ない感謝を！

ミレーナ・イアルフス。

俺の『魔術』の師匠でもあり、育ての親でもある、大切な存在。

その彼女は今、自分自身の記憶を失っている。

それが、何かの事件に巻き込まれたせいで起こった事なのかは、俺にはわからない。何が起きているのかなんて、俺には全くわからないんだ。

それなのに。

「ミレーナ・イアルフスって名前に、心当たりはあるか？」

眼の前に現れた青紫の髪の少年は、平然とそんな言葉を口にした。その言葉はまるで、俺と同じように彼女の行方を追っていたかのような口振りだった。

「何だア？ とりあえずと思って聞いてみたら、どうやら見事的中したらしいな」

驚く俺の表情から、少年は簡単に悟ったらしい。

俺がミレーナの事を知っている、という事を。

「知ってるなら話は早エつてもんだ。奴は今どこにいる？」

獯猛な眼付きで俺を見下ろす少年の表情は、俺の警戒心を強めるのに充分なものだった。

深く考えるまでもない。こいつにミレーナの事を教えちゃダメだ！

「何の事を言ってるのかわからねえな。人探しなら他を当たれよ」

俺はなるべく平静を装って、軽い感じで答えた。

だが、どうやら俺の考えは甘かったらしい。俺を見つめる少年の眼が、鋭い眼光を放ち始める。まるで俺の嘘を見破っていると言っているかのよう。

「そんなくだらねエ嘘で俺を誤魔化せるとでも思ったか？ こつちはミレーナ・イアルフスがこの街に来たって情報を手に入れた上でここにいるんだ。余計な事考えずにさっさと本当の事を話せ。捻り

潰すぞ？」

「……………」

語気を荒くする少年に、俺は少し威圧感を覚えた。

こいつは只者じゃない。少なくとも、その辺にいそうな強盗やら何やらの類じゃない。確実に俺と同じ側、戦う力を持っている側の人間だ。感覚としては、以前戦ったアーベントと対峙した時と近い感じがする。

それにこれ以上誤魔化すのは無理だろう。こいつは俺と同じで、ミレーナがこの街にいるという情報を手に入れてるんだ。下手にこいつを刺激して被害を出す訳にもいかないしな。

「確かにお前の言う通り、ミレーナはこの街にいる。だけど、どこにいるのかまでは教える気になれねえな。気に食わねえんだよ、お前」

「ハッ。こつちは話を聞くだけで見逃してやるうとしてんのに、随分な物言いだな。 ならしょうがねエ。望み通り、捻り潰してやるよ」

少年が動き始めようとした所で、俺は右手に炎を発生させ、それを武器の形へと造り変えていく。もうすでに使い慣れた技、『フレイ紅蓮の爆炎剣』だ。

炎剣を構え、俺が臨戦態勢を整えた時だった。

唐突に、少年の顔が驚きに満ちる。

「！ その炎の剣……。まさか、『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』か？」

「！？」

少年の口から出た言葉に、今度は俺の方が驚いた。何で今会ったばかりのこいつが、この炎剣の名前を知ってるんだ？

「『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』を操れるって事は、『ディープ・レッド深紅魔法』だよなア？」

「……待てよ？ 『ディープ・レッド深紅魔法』に、その紅い髪。もしかしてテメエ、ディーン・イアルフスディーン・イアルフスカ？」

「お前、何で俺の名前を……………」

俺が疑問の声を上げると、少年は面白そうに顔を歪めた。

「ハッ！ ハハッ！ やっぱりそうか！ 妙な偶然だなア、オイ。まさかミレーナ・イアルフスを追って来て、その弟子に遭遇する事になるなんてよオ」

「どういう事だ！ お前、何で俺の事を知ってる？」

俺が声を荒げると、少年は鬱陶うつとうしそうに顔を逸らした。まるで説明するのが面倒臭いと言っているみたいだ。

「そう怒鳴るなよ。テメエが俺を知らなくても無理はねエ。俺が一方的に、『あの野郎』からテメエの存在を聞いてたってだけだ。とはいえまさか、こんな所で会う事になるとは思わなかったけどよ」

「『あの野郎』？」

「俺の師匠さ。テメエの師匠、ミレーナ・イアルフスとは随分前から知り合いのはずだぜ？ なんとってこの大陸の歴史を変えた『英雄』同士なんだからよオ」

「！ まさか……」

まさか、ミレーナと同じ、『倒王戦争』を終決させた『反旗軍』の中核メンバー？ 残りの四人のうちの誰かが、こいつと知り合いつて事か？

いやちよつと待て。それよりも前に、気になる台詞がある。

『俺の師匠』だって？

その言葉がこいつの口から出て来るって事は……！

「俺の師匠の名は、ノイエ・ガルバドア」

「！ 何……！？」

「テメエがこの名前を知らねエ訳ねエよなア？」

そう、その名前はミレーナと同じく、この大陸の歴史に刻まれている名前。

このジラータル大陸に存在する『魔術師』の中で唯一、二つの『属性』の『魔術』を操る事が出来た者。

『反旗軍』の中核メンバーにして、リーダー的な役割を担っていたという、『英雄』の一人である男。

そいつの名前は、ノイエ・ガルバドア。

俺も随分昔に、一度だけ顔を合わせた事がある。

額の右側に傷がある、寡黙にして聡明な『魔術師』。二つの『属性』を操る、唯一無二の存在。

そんな男の弟子と名乗る、眼の前の少年。師匠が『魔術師』である以上、その弟子だという少年は必然的に『魔術師』であると言える。

「仕方ねエ。モノはついできてヤツだ。テメエにも見せてやるよ」  
そう言つて少年は胸の前で両手を合わせると、それをゆっくりと左右に離していく。すると両手の間に黒い稲妻が生まれ、それが徐々に形を成し始めた。俺の『紅蓮の爆炎剣』と色は違うものの、同じようにその全てをある一色で染め上げられた大鎌。

つまりは、漆黒。

そして身の丈程ある大鎌の刃の根元には、少年の髪と同じ青紫色の玉が埋め込まれている。

バリバリと音を立てながら変化していくそれを右手に握り、少年は俺を見下ろしながら言い放つ。

「俺の名は、ジェイガ・デイグラッド」

自身の名を告げ、生み出された巨大な黒い鎌を少年、いや、ジェイガは悠然と肩に掛けた。

俺にはあれに見覚えがある。

あれは、あの『魔法』は！

「ノイエの野郎から『黒煉魔法』を受け継いだ、ただ一人の弟子。よろしくなア、あかがみ紅髪」

嫌な予感がしていた。

あたしは不安な気持ちを抱えながら、ミレーナさんと一緒に街の中に戻って来ていた。避難する街の人たちと擦れ違いながら、あたしたちはログハイムさんの家を目指す。

するとその途中、黒煙の上がっていた辺りからまた別の爆発が起こった。

「ッ！」

さつきより爆心地に近付いているせいか、爆発による振動が直に伝わってくる。よるめいた事であたしは一旦立ち止まってしまい、黒煙の上がる方向を見つめる形になってしまった。

さつきから胸の辺りが締め付けられるような感覚がある。

あそこに何かがある。

あたしの心を不安にさせる、何かが。

「ミレーナ！ リネさん！」

自分たちの名前を呼ぶ声が出て振り向くと、焦った様子のログハイムさんが駆けてくる所だった。

「よかった、一緒だったんだね。とにかく避難しよう。何が起きてるのはわからないけど、ここにいたら危険だ」

ログハイムさんに促されそうになって、あたしはピタリと足を止めた。ログハイムさんが避難してきたという事は、当然一緒にいるはずの『彼』の姿がない。

「待ってください。デーンは？」

立ち止まるあたしの方にログハイムさんは振り返ると、難しい顔で口を開いた。

「彼は爆発の原因を確かめに行った。多分彼は、この爆発が人為的なものだと確信してたんだろう。ボクやミレーナ、それにリネさんを避難させる為に一人で残ったんだ」

「そんな……！」

あたしの不安は的中してたんだ。ディーンは今、あの黒煙の下で誰かと戦ってる。多分あたしたちを守る為に、自分の身を犠牲にして。

お前が心配する必要なんてない。

確かに彼はそう言ったけど、考えてみればそんなのあたしには無理な話だ。

あたしはディーンに必要とされていないのかも知れない。でもあたしは、それでもディーンの力になりたい。彼を助けてあげたい。

ずっと孤独だったあたしに居場所をくれたのは、他でもない彼自身なんだから。

「ログハイムさんはミレーナさんを連れて安全な所へ避難してください。あたしはディーンを助けに行きます」

「助けについて……。キミは彼と違って『魔術師』じゃないんだろう？ 戦う力がある訳じゃ」

「それでもあたしは行きたいんです。黙って見てる事なんて、あたしには出来ません」

「……」

「ミレーナさんの事、頼みます」

制止の言葉を失っているログハイムさんに、あたしは軽くお辞儀をしてその場を離れた。

走り出すあたしの視線の先で、また別の爆発が起こるのが見えた。

黒い大鎌の刃の部分から出現した黒い衝撃波が、通りの商店を簡単に吹き飛ばした。

何とか回避出来た俺の目前に、死神のようなシルエツトが現れる。  
「オラアツ！」

鋭い風切り音と共に、漆黒の刃が横薙ぎに振るわれる。

俺はその場に屈んで大鎌の一撃を回避し、立ち上がる勢いを利用して地を蹴った。一度後方に距離を取ると、再び地面を強く蹴って、今度は前進する為の力に変える。

右手の炎剣を下段に構え、斜め上に一気に振り上げる。

直後。炎剣の一撃を、ジェイガは大鎌の長い柄の部分を使って受け止めた。

『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』はその特性上、触れた物に対して爆発と炎を齎すはずだった。

だがその触れた物が、『魔術』の力を帯びている物だと話は別だ。ジェイガが握る黒い大鎌は、『黒煉魔法』によって生み出された物だ。どういう特性があるのか俺にはわからないが、この大鎌には間違いなく『魔術』の力が凝縮されている。『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』の特性が働かないのも当然だ。

罅迫り合いのような状態で拮抗する俺たちは、至近距離で睨み合った。

「何でお前がミレーナの行方を追ってる？ 一体ミレーナに何の用だ？」

「ああ？ 俺は別にミレーナ・イアルフスの行方を追ってた訳じゃねエ。俺が狙ってるのは別のヤツだ」

「何？」

会話の途中で、ジェイガは炎剣を下に弾き、がら空きになった俺の顔面に頭突きを叩き込んできた。

「がっ！」

痛みで視界が明滅する。その一瞬の隙を突かれた。

「ボサツとしてんなよあかがみ紅髪イ！」

フラついた俺の腹の中心に、大鎌の石突きの部分が一直線に叩き込まれた。



「ぐほおっ！」

多分横から見れば、俺の身体はくの字に折れ曲がっていた事だろう。地面から足が浮く感覚がして、俺は後ろ向きに数メートル突き飛ばされた。

再び地面に接触して止まった頃に、漸く鈍い痛みが俺の腹を中心にして全身を駆け巡り始めた。

「ぐっ、おごお……」

胃の中の物を吐き出さなかったのは幸運と言うべきか。俺は腹の部分を押さえながら、ゆっくりと立ち上がる。

それを待っているかのように、ジェイガは右手に握った身の丈程ある大鎌を、器用に片手で回転させている。随分と余裕じゃねえかこの野郎……！

「ミレーナ・イアルフスには聞きたい事があるんだよ。俺が狙ってるヤツの行方についてな」

「ミレーナが、そいつの行方を知ってるってのか？」  
こいつが狙ってるヤツの行方？ 何だかいかにも不穏な空気が漂ってるな。

俺が訝しい思いを顔に出すと、ジェイガは大鎌を肩に掛けてニヤリと笑う。

「知ってても可笑しくはねエだろ。『あの野郎』と最後にあつたのは、『英雄』たちの内の誰かなんだからな」

「！ おい、ちょっと待て。まさかお前が狙ってる相手ってのは……」

「決まってるんだろ。ノイエ・ガルバドアだ」

「はあ!？」

何言ってるんだこいつ？ 今が言葉の通りだとすれば、こいつは自分の師匠の命を狙ってるって事だぞ？

何でそんな事する必要がある？ いや、それ以前に。

「ちょっと待てよ！ 可笑しいじゃねえか！ お前はノイエ・ガルバドアの弟子なんだろ？ ノイエの命を狙ってるのが本当なら、何

「でお前は自分が命を狙ってる奴の弟子になってんだよ？」

「殺したい相手に教えを請う。そんなの普通に考えれば絶対に許容出来ない事のはずだ。なのにこいつは平然と口にした。」

「殺したい相手の下に付いていた、と。」

「だがジエイガは俺の疑問を意に介さず、鼻で笑って答える。」

「簡単な事だろうが。ヤツを殺せるだけの『力』を手に入れる為だ」

「……あ？」

「『魔術師』を殺す為には、そいつと渡り合えるだけの『力』が必要だ。テメエだって『魔術師』ならわかってるはずだろ？ 『魔術』を使える者とそうじゃねエ者の間には、決定的な力の差があるって事を」

「それは確かにそうだ。『魔術師』と何の力も無い常人の間には、一線を画すると言っても過言でない程の力量の差がある。」

「例えば常人の側が高度な戦闘能力を持っていたとしても、『魔術師』たちにとっては脅威となり得る程の存在じゃない。それは確たる事実だ。」

「だけ。」

「じゃあ何か？ お前は、その為だけに自分が狙ってる奴に弟子入りしたつてののか？」

「俺としても不本意な展開だったがな。それが一番手っ取り早い方法だったつて訳だ」

「……何だよそれ。いくら殺したい相手と対等の存在になりたいからつて、そんな方法で力を手にしようとするなんて俺には全く理解出来ない。」

「別に理解してもらうつもりはねエよ」

「！」

「俺の心を読んだみたいに、ジエイガは心底つまらなそうにそう言い放った。癡猛な眼付きで俺を睨み付け、憎しみの籠った声で続ける。」

「俺にとって『魔術師』つてのは憎しみの対象でしかねエんだよ。」

その『魔術師』を殺す為なら、俺は何だつてする。確かに一番の標的はノイエの野郎だが、奴を殺した所で俺の気が晴れる事はねエ。

『魔術師』と名のつく存在を自称する野郎は、一人の例外も無く捻り潰す！ テメエもその一人だ紅髪イ！」あかがみ

ジェイガは叫び、黒い大鎌を高く掲げた。すると大鎌の刃の部分が、怪しげな光を放ち始める。

「『漆黒の大鎌』」ダーク・デスサイズ

大鎌の名を告げ、ジェイガは大鎌を振り下ろす。

するとその動作に合わせて、大鎌の刃の部分から眼に見える黒い衝撃波が生まれ、とてつもない速さで俺に襲い掛かってきた。

「くっ！」

俺は右に転がって、何とかそれを回避する。すると俺の背後にあった商店が、いとも容易く吹き飛ばされ爆発を起こした。

さつき見た時にも思ってた事だが、あの大鎌から放たれる黒い衝撃波は、ジンが使っている『黒裂剣』こくれつけんから放たれる『黒閃』こくせんに似ている。

だが『黒閃』こくせんに比べると、射程距離がとんでもなく長い上に、速度が桁違いだ。回避するタイミングを間違えれば、それだけで大怪我を負う羽目になるだろう。

「避けるので精一杯かア？」

嘲笑うかのように、再びジェイガは黒い衝撃波を生み出した。

だが今度は同時に二発。左右から俺を挟み込むように向かってくる。

「舐めんな！」

俺は地を蹴り、前進すると同時に二発の衝撃波を躲す。技を放った事で無防備になったジェイガの身体に、炎剣を叩き込もうとした。だが。

「！？ ぐあああああ！」

背後に何かの気配を感じた時には手遅れだった。

俺は背中に激しい衝撃を受け、そのまま前のめりに倒れ込んだ。

背中に走る痛みと共に、微かに布が焼け焦げたような臭いがする。何が起こったのかわからなかった。

「随分驚いてるようだなア」

地面に伏したまま顔を上げると、数メートル前方に立つジエイガが余裕たっぷりの笑みを浮かべていた。

俺が睨むと、ジエイガは軽く鼻を鳴らす。

「回避出来たと思って油断しただろ？ 生憎だったなア。これが俺の『漆黒の大鎌』<sup>ダイク・デスサイズ</sup>の特性だ。刃の部分から生み出した衝撃波は、目標を定めるとそいつを追尾する性質がある。例えテメエがどんなに上手く躲そうと、この衝撃波はどこまでもテメエを追いつけるって訳だ」

追尾性能のある衝撃波を生み出す、黒い大鎌。

それが『漆黒の大鎌』<sup>ダイク・デスサイズ</sup>。

以前俺は、ミレーナに連れられてノイエ・ガルバドアに会いに行った事がある。その時彼は、『黒煉魔法』を俺に見せてくれた事があつたが、詳しい能力についてまでは教えてくれなかった。

会ったのはその一回きりだし、彼は根無し草で色々な場所を渡り歩いている人だった。だからそれ以降、この『魔術』を見る機会は無かった訳だけど……。

改めて思う。

やはりかつての『英雄』たちが有していた『魔術』は、どれもこれも強力なものばかりだ。

『魔術』とは、人を殺す事のみに特化した技術。

ゆえに人を生かせず、活かせない。

今眼の前にいるジエイガが行使する『黒煉魔法』は、ノイエ・ガルバドア本人から受け継いだ『魔術』。彼程に操れているのかどうかは未知数だが、それでも強力な力を持っている事に変わりはない。「どうしたア？ もう終わりかよ、『深紅魔法』の使い手」

心底屈そうな台詞だな、この野郎。

俺は炎剣を握る手に力を込め、ゆっくりと立ち上がる。その動作

の途中で、背中に何度もズキズキとした痛みが走る。

「……お前の目的は何なんだ」

「あん？」

「お前の目的は何なんだって聞いてんだ」

自分の身体が、徐々に熱を発している。それは背中に受けた傷のせいだけじゃない。

多分、いや間違いなく、俺はジェイガに憤りのようなものを感じているんだ。

「これだけの力を手に入れる為に、自分が憎しみを抱いてる人間の弟子になる。そうまでしてお前がノイエ・ガルバドアを、『魔術師』を殺そうとする理由は何なんだ？ お前は一体、何の為にその力を使ってるんだよ！？」

「……そんなモン、決まってるだろうが」

ジェイガは激しく顔を顰めると、獰猛な眼付きで俺を見つめて告げる。

「復讐の為だ」

告げた瞬間、ジェイガは地を蹴って一瞬で俺の懐まで入り込んできた。

何とか反応し、炎剣を振るおうとした俺の右手首の辺りを左手で掴み、俺の腹に左膝蹴りを叩き込んだ。

「がはあっ！」

鋭い痛みで集中力が途切れ、俺の右手から炎剣が霧散する。

そして腹を抱えそうになった俺の耳に、ジェイガの冷たい声が響いてきた。

「消え失せろ」

その一瞬、無慈悲と言える表情のまま、ジェイガが大鎌を横薙ぎに振るうのが見えた。

直後。

俺の胸の辺りに、凄まじい痛みが走った。

#### 第四章 二人の弟子 - Crimson vs. Black - (後書き)

活動報告にも書きましたが、今回の『紺碧の泉編』に関しては、一カ月以内に全話書き終えるというルールを自分の中に科しております。

あと何話続かわかりませんが、全身全霊全筋肉 (by ハガレン) をもって執筆を続けますので、応援して頂けると幸いです。

それではまた次の章で！ノシ

第五章 それぞれの戦い - complication - (前書き)

という訳で第五章です。

楽しんで頂けると幸いです、……ってなんか毎回同じ事言ってる気がする(笑)



このまま逃げてしまっていていいのだろうか？

不思議と私は、そんな思いを拭えずにいた。

今の私には記憶がない。自分が『魔術師』として存在していた頃の記憶がない。自分がそんな存在だった事も信じられないのに、況して『魔術』を使って戦う姿なんて想像も出来ない。

何の力も無い今の自分があそこに戻っても、出来る事なんて何も無いはずだ。

それなのに。

私の胸はざわめいて仕方になった。

まるで私の中の何か、あそこへ戻れと言っているみたいだ。恐らくあの紅い髪の少年が戦っているであろう、戦場へと。

湖に架かる橋の中程辺りまで来た所で、私はついに自分の足を止めた。

先導していたログが、それに気付いて立ち止まる。なぜ立ち止まるのかとその顔が告げていた。

「どうしたんだ、ミレーナ？」

「……ログ。私行かなくちゃいけない」

「行く？ 行くなってまさか、ディーンくんの中へかい？」

私が無言で頷くと、ログはこれ以上ないくらいに顔を顰めて私の両肩を掴んだ。今までに見た事ない程、ログが焦っているのがわかる。

「そんな事をして何になる？ キミは記憶を失ってるんだ。『魔術』を使う事だって出来なくなっているだろう？ そんなキミがあそこへ戻ってどうすると言っただい？ キミの身が危険に晒されるだけだ！ ディーンくんだって、絶対にそんな事を望んじやない！」

ログの表情は真剣だ。それはきつと、私の身を案じてくれているだけじゃないからだろう。

あの紅い髪の少年、ディーンさんの事を考えて、私を制止してくれている。

ありがとう、ログ。  
でも。

「確かに今の私には何の力も無い。だけど、それでも私はあそこに戻らなきゃいけない気がするの」

「気がするって……、そんな理由だけでキミ一人を行かせられない！」

「ログ……」

「どうしても言うなら、ボクも一緒に行く！」

危険なのはわかってるはずなのに。

あそこへ戻っても、何も出来ない事も知ってるはずなのに。

それでもログは、強い意志の感じられる瞳で私に言ってくれた。

私は今日まで、どれだけ彼に守られてきたのだろうか？ 救われてきたのだろうか？

こんな時にまで、私の我が儘に付き合わせる事になるなんて、本当にどれだけお礼を言っても足りないと思う。

「巻き込んでごめんね、ログ」

「そんな事これっぽっちも思っていないさ。　そうと決まれば急

ごう。キミに何か出来る事があるとすれば、それはきっとディーンくんを助ける事だ」

「ええ！」

私たちは踵を返し、黒煙が上がり続ける街へと舞い戻る。

胸のざわめきが、僅かに和らいだ気がした。

俺は斬られた衝撃で背中から地面に倒れ込んだ。

胸の辺りから、全身を駆け巡る鋭い痛み。俺の脳裏に、テルノアリスでアーベントに斬られた時の映像が蘇る。

あの時は完全に致命傷だったが、今回はどうやら致命傷を避けられたようだ。熱を帯びる激しい痛みがあるものの、身体が動かせない程じゃない。

俺はゆっくりと立ち上がり、大鎌を振り抜いた体勢で固まっているジエイガを睨み付けた。

「チツ。どうやら躲すのだけは上手いらしいな。完全に捉えたと思っただが、浅かったか」

不満そうに漏らすジエイガは、軽い動作で大鎌を構え直す。

俺は意識をジエイガから外さないように注意しながら、再び右手に『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』を造り出した。

それにしても身体が焼けるように熱い。全身から刺すような汗が噴き出している。胸の傷が致命傷じゃない事は確かだが、それでも戦闘が長引けばこっちが不利になる。

つまり今、俺が取るべき行動は、先手必勝！

「ッ！」

身を低くすると同時に俺は駆け出した。身構えていたジエイガが一瞬驚いた顔をするが、すぐさまニヤリと笑みを浮かべ直す。

「そう来なくつちなア、あかがみ紅髪イ！」

叫ぶと同時に奴も走り出した。このまま進めばものの数秒で、俺たちは再び衝突する事になる。

俺の頭に浮かんだ選択肢は二つ。

上と下、どちらから攻めるか。

だが俺はほとんど迷わずに選択する。

上だ！

接近するジエイガが再び大鎌を横薙ぎに振るおうとした瞬間、俺

は前進に使っていた力を跳躍の力に変え、高く跳んだ。

そしてそのまま、右手に握った炎剣を上段から振り下ろす。

「ハッ！ 何をするかと思えば、単調な攻撃だな！」

叫びながら、ジエイガは当然のように大鎌を両手で水平に握り、

空中からの俺の一撃を受け止めた。

当然、爆発も炎も吹き出さない。

だが俺はそれで止まらなかった。

炎剣を軸にして空中で回転した俺は、左手に新たな『フレイム・ロング紅蓮の爆炎剣』を生み出した。

「なっ！？」

驚くジエイガを尻目に、俺は左手の炎剣をがら空きになったジエイガの右肩の辺りに叩き込む。

直後、ジエイガの身体から爆炎が噴き出した。

「ぐああああああっ！」

よろめくジエイガと擦れ違う形で着地した俺は、再び胸の傷の痛みに襲われ、倒れ込みそうになった。

だが、そんな事が許される状況じゃなかった。

「クッソがあああああああっ！！」

「！」

振り返りざまに迫ってきた大鎌の一撃を、俺は左右の炎剣で何とか受け止める事が出来た。とてつもない力に押されて、踏ん張っていたはずの足が数十センチ後ろに下がる。

再び鏑迫り合いのような格好になった所で正面を見ると、ジエイガの獰猛な眼がすぐそこにあっただ。

「炎剣を二本使うとはやってくれるじゃねエか。エエ？」

「誰も一本しか使えないなんて言った覚えはねえよ」

怒りの籠った表情で告げるジエイガに、俺は平然と言い返した。

それにしても、間近で見るとホントに眼付きの鋭い奴だ。その辺の強盗とかなら、こいつが一度睨んだだけで簡単に逃げ出すんじゃないか？

「オイ、紅髪」あかがみ

妙な所に思考が向いていた俺は、ジェイガの言葉で我に返った。つて言うかこの野郎、さっきから人の事を髪の色でばっか呼びやがって。俺の名前知ってるんじゃないのかよ？

「何だ青紫」

子供みたいな発想でこいつの髪の色を言い返してみたが、ジェイガは無反応のまま続ける。

「とりあえずテメエにも聞いとく。ノイエの野郎の行方を知ってるか？」

「随分昔に一回だけ会った事があるだけだ。今はどこでどうしてんのかすら知らねえよ」

俺の返答を信じたのかどうかはわからないが、ジェイガはそれ以上追及して来なかった。

その代わり、殺気の籠った眼でこう言った。

「そうかい。じゃあもうテメエに用はねえな」

何勝手に終わらせようとしてんだ、こいつ。

俺はジェイガが何かし始める前にとまって、即座に言葉を投げ掛ける。

「俺の質問にも答えろよ。お前さっき『復讐』って言ったよな？

ノイエ・ガルバドアがお前に一体何したってんだ？」

「そこまでテメエに教える義理はねえよ」

俺の言葉を簡単にあしらひ、ジェイガは眼差しをより鋭くする。

その瞬間、鎧迫り合いの状態だった大鎌から、怪しい光が放たれ始めた。

「！」

「邪魔だクソ野郎」

防御する暇も、況して回避する暇すら無かった。

ジェイガの言葉が聴こえた直後、真っ黒な光が俺の視界を埋め尽くした。

それは爆心地から程近い所まで辿り着いた時だった。

今までよりも大きな爆発と衝撃が唐突に走り抜け、あたしは思わず転びそうになる。

何とかバランスを取り戻したあたしは、顔を上げた所で固まった。前方から上がる黒煙が、さっき見た時よりも一段と大きくなっている。

その場所で見えていなくてもわかる。断続的に続いていた今までの爆発より、もっと大きな破壊があの場合所で引き起こされたんだ。

それがデインによるものか、それとも戦ってる相手によるものか。

どっちにしても急がなきゃ。さっきから不安な気持ちが一向に治まろうとしない。

まだ何とか被害を受けずに済んでいる石畳の上を、あたしは自分に出せる限りのスピードで駆け抜ける。

黒煙の上がる爆心地に向かつて。

あたしにとつて大切な存在である、紅い髪の少年の許へ向かつて。そうして走り続けていたあたしは、黒煙が流れてくる曲がり角を右に曲がった。

直後、あたしは絶句して立ち止まった。

酷い、なんてものじゃない。

景色が変わっていた。まるで別世界だった。

白い煉瓦造りの家や商店が立ち並んでいたはずの、街の中心から北側へ抜ける通りの一帯が、白い瓦礫の山と化していた。

「何……、これ」

一体どんな力が働けばこれだけの規模の破壊が可能なんだろう？  
逃げ遅れた人が生き埋めになってたりしないよね？

って、そうだよ！

「デインは……？ デインはどこ！？」

漸く思考が追い付いた所で、あたしは瓦礫の山に向かって歩み寄った。

辺りに人影らしきものは見当たらない。

誰もいない。

どこにもいない。

あるのはただ、白い瓦礫の山ばかりで。

「ッ！ デイン！ どこにいるの！？」

あたしは気付くと、半泣きの状態で必死に叫び声を上げていた。

親と逸れた子供が、不安や寂しさから泣き叫ぶみたいに。一人に  
しないでほしいと泣きじゃくるみたいに。

泣いたってどうしようもない。とにかく彼を探さなきゃ。そう自

分に言い聞かせながら歩いていて、その時だった。

近くにあつた割と小さな瓦礫が不自然に崩れ落ちて、粉塵を辺りに  
撒き散らした。ハツとして眼を向けると、その瓦礫に凭れ掛かる  
ようにして、チラツと紅い色をした何かが見えた。

それが特徴的な色をした髪の毛だと気付くのに、そう時間は掛か  
らなかった。

「デインー！！」

あたしは瓦礫の正面に回り込むように近付いて、座り込んでいる  
デインに声を掛ける。すると、酷く疲れたような声が返ってきた。

「リネ……。お前、何でここに……」

「そんなの……ッ、デインが心配だからに決まってるじゃない！」  
「……………」

無意識にそう叫んだあたしの顔を、デインは驚いた様子で見つ

め返してくる。

彼の姿は本当にボロボロだった。

彼がいつも使っている萌葱色のマントは、原形を留めない程に裂けたり破けたりしていて、内側に着ている黒いシャツや胡桃色の革の長ズボンも、似たような状態になっている。

ほぼ全身に切り傷や擦り傷があつて、一番酷いのは胸の辺りにあるほぼ真横に付けられた大きな傷だった。多分テルノアリスでの戦いの時のように、剣か何かで斬られたんだと思う。

「とにかくジツとしてて。今すぐ治すから！」

あたしはすぐさま両手の革の手袋を外して、『治療』を始めようとした。

だけどディーンは、それを制止するみたいにあたしの肩に手を置いた。

「いや、今は全身の傷を治してる場合じゃねえんだ。とりあえず、胸の傷の止血だけしてくれ」

「止血だけって、それじゃあまた傷口が開いちゃうかも知れないよ？」

「構わねえ。とにかく今は時間がないんだ！……そうだ。ミレーナはどこにいる？」

「え？ 多分、ログハイムさんと一緒に街の外に避難してるはずだけど……」

突然話題を逸らされて戸惑うあたしを尻目に、ディーンはあたしが告げた言葉を頭の中で反芻しているようだった。だけど満足のいく答えを導き出せなかったみたいで、顔を顰めて僅かに首を横に振る。

「いや、ダメだ。街の外に逃げるだけじゃ足りない。あいつはミレーナを狙ってる。ミレーナがこの街にいる以上、あいつは血眼になつても見つけようとするはずだ」

「あいつ？」

一体誰の事だろう？ それにミレーナさんを狙ってるってどうい



う事？

あたしがその疑問を口にするよりも早く、ディーンはあたしの肩を掴む手に僅かに力を込めた。

「だから頼む、リネ。今ミレーナを守るのは、俺しかないんだ！」

「……わかった。少しの間ジツとしててね」

未だに状況が理解出来なかったけど、とにかくあたしは応急処置程度の『治療』を始める。

……それにしても、ミレーナを守るのは俺しかない、か。

力を使いながらあたしは、何だかその言葉に少しだけ寂しさを感じた。

今ディーンが守ろうとしてるのは、あたしじゃなくてミレーナさんなんだな、って。

さつき見えた一際大きい爆発は何だったんだろう？

自分からディーンくんの所へ戻ると決めた私だったけど、正直不安な気持ちを抑えられずにいる。

恐怖、と言った方がもいいかも知れない。

自分の知らない、得体の知れないものが目前に迫っている。

いや、私は本当は知っているはずなんだ。今はただ、『それ』を忘れてしまっているだけなんだ。私がミレーナ・イアルフスだった頃の、存在の証明となるもの。

そう。あれは多分、『魔術』によって引き起こされている。

未だにディーンくんが姿を見せないのは、破壊活動を行なう『魔

術師』に苦戦しているからなんだと思う。

急がなきゃいけない。

今の私に、記憶のない私に、戦う力の無い私に、何が出来るかわからないけれど。

「漸く見つけたぜ、ミレーナ・イアルフス」

唐突に頭の上から声が聴こえて、私は思わず立ち止った。少し後ろを走っていたはずのログが、私の隣で同じように立ち止まる。

すると、まるで私たちの行く手を阻むみたいに、見覚えの無い青紫の髪の少年が商店の屋根から飛び降り、私たちの前に静かに着地した。

「……誰？」

少年と五メートル程の距離を取って対峙した私は、そう問い掛けた。

私には見覚えは無いけど、向こうは私の事を知っているらしい。

もしかしたら、私が記憶を失う前に会った事がある人物なのかしら？

「あん？ 何だよ。ノイエの野郎から俺の事は聞いてねエのか？」

まア、別にテメエが俺の事を知らなくても構いやしねエけどな」

「ノイエ……？」

少年は不敵に笑いながら、ゆっくりとこっちに歩み寄ってくる。

そこで私は初めて気が付いた。

コツコツと足音を響かせながら近付いてくる少年の右手に、死神をイメージさせる黒く大きな鎌が握られている。

私は思わず後退った。素直に身の危険を感じる事が出来た。

少年の瞳に。

その身体を覆う気配に。

「何とぼけた顔してやがる。ノイエだよ、ノイエ・ガルバドア。まさか覚えてねエでも言うつもりか？ オイオイ、頼むぜ『英雄』さんよオ。こっちは漸くテメエを見つけられて興奮してんだ。くだ

らねエ冗談は止めてくれよなア。それとも何か？ あの紅髪同様、  
師弟揃って俺をバカにしようって魂胆なのかよ？ アア？」

矢継ぎ早に言葉を紡ぐ少年の眼は、私以外何も捉えていないよう  
だ。

まるで獲物を見つめる狩人のように、その瞳から鋭い光が発せら  
れている。

逃げなきゃダメだ。そう思うのに身体が動こうとしない。

「おいキミ。何者かは知らないが、一体何の事を言ってるんだ？」

その声であたしはハツとする。見ると私の数歩前に立ったログが、  
割って入るかのように少年の行く手を阻んでいた。

そんな彼を制止しようと私が手を伸ばした時だった。

少年の瞳に、声に、怒りの色が強く現れた。

「部外者は黙っとけ。テメエに用はねエんだよ」

「もしかして彼女の事を知ってるのかい？ もしそうなら今彼女は

—

「黙ってるつつつてんだよ！」

一瞬の出来事だった。

少年が右手に握っていた大鎌を振るった瞬間、ゴツツと言う鈍い  
音がして、ログの身体が右に薙ぎ払われた。

数秒遅れて視線を向けると、ログは気を失って地面に倒れていた。  
注視するまでも無く彼の頭からは血が流れていて、楕円形の眼鏡の  
フレームが拉げ、レンズに罅が入っている。

「ログッ！」

彼に歩み寄ろうとした私は、少年が眼の前まで接近している事に  
気付くのが遅れた。

次の瞬間。突然の息苦しさと共に、身体がふわりと浮く感覚がし  
た。

少年の左手が私の首を掴み、身体ごと私を持ち上げたのだ。

「か……ッ、はあッ」

「今度は俺を無視しようってか。随分舐めた真似してくれるなア、

ミレーナ・イアルフス。こっちはテメエに聞きたい事があるんだ。  
俺の質問に答えてもらうぜ？」

「……ッ」

この少年が私に聞きたい事？ 何の事なんだろう？ なんて考える余裕は無かった。

息が出来ない。

苦しい。

このままじゃ質問とやらが始まる前に、私の方が死んでしまう。  
足をバタつかせても、両手で少年の左手を押さえても、首を圧迫する力は一向に弱まる気配がない。

もうダメ……。そう思った時だった。

肌身を焼き焦がしそうな強力な熱を持った何かが、私のすぐ横を通り過ぎた。

それとほぼ同時に、息苦しさと宙に浮いている感覚が失われる。

地面に尻餅をついた私は激しく咳<sup>せき</sup>込んだ。失われていた酸素が肺に注入されて、徐々に息苦しさが無くなっていく。

「ミレーナに何してやがる……！」

私のすぐ傍にいる青紫の髪の少年とは違う声がして、私は声のした方をゆっくりと振り向いた。

そこで私は漸く思い至った。

さつき感じた強力な熱の正体。あれは、炎だったんだ。

視線の先にいるあの少年の髪と、多分同じ色をした熱い炎。

深い深い、紅い色。

「消し炭にすんぞてめえ！！」

デインくんは憤怒の表情で、炎のように熱い叫び声を上げた。

第五章 それぞれの戦い - complication - (後書き)

前回から引き続いてバトル展開……、になってますかね？(笑)  
各キャラを動かそうとすると、やっぱりバトルが薄味になるなあ…  
…。

しかし『テルノアリス編』や『魔女の森編』に比べると、バトル挿入の箇所が多い気がする作者的にはしてるんですがどうでしょう？

まあ色々バトらせながら探り探りやっていきます(笑)

第六章 紅の詩篇 - r e t u r n - (前書き)

お待たせしました、第六章です！  
今回もバトル展開だ〜！w

復讐。

ジェイガが『魔術師』を狙う理由はその一点に尽きるらしい。

俺はあいつの事を全く知らないし、何があつて『魔術師』を恨むようになったのかなんてわかる訳もない。

ただ一つ言える事は、あいつが『魔術師』と呼ばれる存在を見境なく狙おうとしている以上、俺には黙つて見ている事なんて出来ない。なぜなら、今は記憶を失つてるとはいえ、『英雄』と呼ばれているミレーナも『魔術師』と言う部類に当て嵌まるからだ。

俺はミレーナを侮辱する奴を許さない。

それと同様に、彼女に危害を加えようとする奴は、誰であっても容赦しない。

守る事。

それが、『魔術師』としての俺の存在意義だ。

だから俺は許せない。

俺が守りたいと思う存在を傷付けた野郎が。

ジェイガ・ディグラッドが！

こいつが『魔術師』を狙う理由とか何があつたかとか、そんな事どうだっていい。俺の知った事じゃないし、今は理解する気にもなれない。

だから、今の俺の思考はこの一点に尽きる。

全力でブチのめしてやるってな！

「ミレーナから離れる」

俺はこれ以上ないくらい力の力を込めて握り拳を作った。まずはジェイガの野郎の顔面に一発ブチ込まないと気が済まない。

「何だよ、もう追い付いてきたのか？ 思つてたよりしぶとい奴だなア、あかがみ紅髪。そんなに俺に殺されてエのか」

「てめえ程度に殺されるような鍛え方してねえよ。どうでもいいか

らさつさとミレーナから離れる、クソ野郎」

「ハッ！ 大層な口の利き方だな。一体どつからそんな自信が出て来やがるんだア？」

どうやら思っていた以上に、ジェイガの奴は挑発に乗りやすいタイプのようだ。正直今の体勢のままミレーナを人質に取られていたら、俺には手を出す事が出来なくなっていたと思う。こいつがわかりやすい奴で助かったぜ。

内心で安堵した俺は、それを表情に出さないように注意しながらジェイガと睨み合った。

その傍ら、地面に座り込んでいるミレーナは、少し驚いた顔でこつちを見ている。そしてその隣には、地面に倒れ込んで動く気配の無いログハイムさんの姿がある。

彼の事だ。きつとミレーナを守ろうとしてくれたんだろう。

ジェイガに何をされたのかまでは俺にはわからないが、そんな経緯はどうだつていい。

俺がやるべき事はただ一つ。

あのふざけた野郎を叩きのめす事だ！

「何ボサツとしてやがる！」

僅かに意識を逸らしていた俺の許に、ジェイガは大鎌を構えて突っ込んでくる。

俺は少し腰を落として身構えると、そのまま奴を引き付けた。

その場から動かず、『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』も生み出さず、ただ奴を引き付ける事だけに集中した。

そうすれば、ミレーナやログハイムさんを助ける事が出来る。

俺ではなく、『彼女』が

！



「大丈夫ですか？」

あたしは物影から一斉に飛び出すと、座り込んでいるミレーナさんの許に素早く走り寄った。彼女に声を掛けると、悲痛な声が返ってきた。

「私は何ともないわ。でもログが……ッ！」

ミレーナさんは地面に倒れて動かないログハイムさんを、ゆっくりと抱き起こした。彼の左頭部からはかなりの血が流れていて、顔の左側だけが真っ赤に染まっている。知的な雰囲気醸し出していた楕円形の眼鏡は、何かの衝撃で壊れてしまっている。

とりあえずあたしはその眼鏡を取り、彼の傷の具合を確かめた。

「酷い怪我ですけど安心してください。あたしがすぐに治しますから」

「治すって、一体どうやって？」

「まあ見ててください」

あたしはミレーナさんに笑い掛けてから手袋を外し、右掌みぎてのひらをログハイムさんの傷口に翳かざした。

するとあたしにとっては見慣れた光景が、自分の周囲に現れる。

淡い光があたしの身体から溢れ、ログハイムさんの身体を包んでいく。

「！ 何、この光？」

ミレーナさんは酷く驚いた様子であたしを見ている。

そっか……、記憶を失ってるから、『妖魔』一族に関する知識も無くなってるんだ。

「あたしは『妖魔』って言う一族の生き残りで、相手の傷を癒す『治癒』の力が使えるんです。だからログハイムさんの傷も、すぐに治す事が出来ますよ」

「そっ、なの？」

眼を丸くしたまま、ミレーナさんは『治癒』の光を見つめている。

あたしは力を使いながら、チラリと『彼』の方を見た。

見覚えの無い青紫の髪の少年と、一対一で戦っているデイン。彼の表情はいつになく真剣で、怖いぐらいに鋭い眼をしている。

ここに着く直前、もしもミレーナさんたちが怪我をしている状況だったら、自分を囷にしてミレーナさんたちの治療に向かってくれ、と彼は言った。

それを制止する事も、拒否する事も、あたしには出来なかった。デインの表情がそれを許さないくらいに真剣だったから。

「デイン、無茶だけはしないで……！」

危なげな戦いを続ける彼を見つめて、あたしはそんな事しか口に出来なかった。

ジェイガの大鎌による攻撃を右に左に躲しながら、俺はミレーナのいた方から淡い光が発するのをチラリと確認した。どうやらリネが治療を始めてくれたらしい。これで一先ずは安心だ。

「あん？ 何だア、あの光は？」

攻撃者のジェイガの方も治療の光に気付き、怪訝な顔で呟く。

と、その時だった。

「！？」

唐突にジェイガの動きが止まった。すぐ傍に俺がいるにも拘らず、大鎌を握る両手を力無くダランと垂らし、淡い光が発せられている方向をジッと見つめている。

……？ 何だ？ まさかこの状況でまだミレーナを狙ってるのか？俺は不思議に思い、ジェイガの視線を追った。だが奴の眼は、ど

うやらミレーナを捉えていないようだ。奴の視線は光を発している主、リネの方に注がれている。

「嘘だろ……。何で、あいつが……」

「？」

俺はジエイガの口から漏れた言葉を聞き逃さなかった。

こいつまさか、リネの事を知ってるのか？

思考が妙な方向に逸れそうになった所で俺はハツとした。今この瞬間、ジエイガは無防備になっている。隙を衝くなら今だ！

思うが早いか、俺は右拳を力いっぱい握りしめ、呆然と立っているジエイガに一気に詰め寄った。

そして次の瞬間、俺の右拳が見事にジエイガの左頬を捉え、彼の身体を後方に吹き飛ばした。余りにも綺麗に入ったせい、右手がズブズキと痛みを発している。

「ボサツとしてんのはそっちの方だったな、『黒煉魔法』の使い手」  
地面に伏して動かなくなったジエイガに、俺は嫌味のつもりで吐き捨てた。

けどこの程度で終わるなんて思っていない。奴が握ったままの黒い大鎌が消え去らないという事は、『魔術』を行使しているジエイガ本人の意識が断たれていない事を意味している。

俺はすぐさま右手に『フレイム・ロンクェント紅蓮の爆炎剣』を出現させて構えを取った。と、その時だった。

ジエイガの身体がピクリと動き、まるで揺らめく陽炎のように立ち上がったかと思うと、見る者を圧倒しそうな怒りの籠った表情で俺を睨み付けてきた。

「調子に乗ってんじゃねエぞクソ野郎がア……ッ！」

ジエイガは鋭い眼光を放ったまま、ガシャツと言う音を立ててゆつくりと大鎌を高く振り上げた。

その一連の動作に、俺が不穏な空気を感じ取った瞬間だった。

大鎌の刃の部分から黒い光が発生し、それが一カ所に集束し始める。まるで俺が使っている『クリムゾン・レイン深紅の流星』と同じような予備動作だ。

つてオイ、まさか！

「『ダイクネス・レイ漆黒の光刃』」

俺の予感は的中した。黒い光の球体が軋むような音がした瞬間、球体から無数の黒い衝撃波が雪崩のように発生した。

しかもそれだけじゃない。ジエイガの放った攻撃は一点集中型の攻撃ではなく、辺り一面に襲い掛かる攻撃。

つまり、黒い衝撃波による全方位無差別攻撃だ。

前だろうが後ろだろうが、右だろうが左だろうが、射程範囲内に入った物を悉く吹き飛ばす。

その対象は俺だけじゃない。

この白い煉瓦造りの街並みも。

リネも。

ミレーナも。

ログハイムさんも。

俺が守ろうとしたもの全てを巻き込んだ。

辺り一面で次々と起こる爆発と爆風に吞まれ、何も出来ないまま、俺の意識はそこで一度途絶えた。

どれだけ気を失っていたかはわからない。

一瞬だったかも知れないし、結構長い時間だったかも知れない。それでもどうにか、俺は意識を取り戻す事が出来た。

「ぐ……ッ！」

地面に伏していた俺は、身体を起こそうとして失敗した。全身に鋭い痛みが走る。

「あれだけの破壊に巻き込まれたんだから、無事な訳ねえか……」  
身体に痛みはあるものの、四肢のどこかが吹き飛ばされた訳ではないらしい。

いや、そんな事より他のみんなはどうなった？  
リネは？ ミレーナは？ ログハイムさんは？  
うつ伏せの状態から顔を正面に向けた所で、俺は言葉を失った。

意識を失う少し前まで存在していたはずの街並みが、いつの間にか姿を消していた。

さつき戦っていた北側の大通りの方も酷い壊され方をしていたが、こっちはその比じゃなかった。瓦礫らしい物もほとんどない。砕けた石畳の道が辛うじて残っているだけで、後は文字通り焼け野原と化している。

「あの、野郎……ッ！」

何なんだよこれは？ なんて事しやがったんだあいつ！

辺りには所々炎が燃え盛っている場所があつて、他のみんなの姿は見えない。と言うより、みんなよりも先に俺は見つけてしまった。破壊の跡の中心に悠然と立つ、死神のような姿の少年を。

「ジェイガアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

気付くと俺は瞬時に『フレイム・ロンクソード紅蓮の爆炎剣』を二本造り出し、猛然と突き進んでいた。

身体の痛みも消えていた。いや、忘れていた。

突き進む俺に気付き、ジェイガは愉快そうに大鎌を構える。

「ホントにしぶてエなア！ あかがみ紅髪イ！」

待ち構えているジェイガに向けて、俺は両手の炎剣を同時に振り下ろした。大鎌で防御するジェイガと睨み合う格好になった所で、俺は怒りに任せて叫んだ。

「そんなに『魔術師』が憎いのかよ？ 街をメチャクチャにして、関係ない人間まで巻き込んで！ 何が復讐だ！ てめえはただ自分

の力を誇示して暴れたいだけだろ！」

俺は大鎌を力任せに下に払い除け、ジェイガの腹の真ん中に右足で蹴りを叩き込んだ。

後ろへ数歩下がるジェイガに追い打ちを掛ける為、俺は炎剣を構え直して斬り掛かるが、ジェイガも黙ってはいない。

「ハッ！ テメエみたいな『魔術師』に説教される覚えはねエ。俺には力があればいい。何を壊そうと、誰を殺そうと、力を振るうのは俺自身だ。それをテメエが止める権利はねえだろうがア！」

叫びと共にジェイガが大鎌を斜めに振るうと、その動作に合わせて黒い衝撃波が生まれた。

俺は炎剣を胸の前で交差させ、防御の構えを取る。

その瞬間。破壊の波が俺の視界を覆い、炎剣を介して凄まじい衝撃が伝わってきた。

「ぐうっ！」

俺のすぐ眼の前で、炎剣と衝撃波の相殺エネルギーが**せめ**ぎ合っているのが目視出来る。

弾き返す事はもとより、逸らす事さえ出来ない。

それなら、受け切るしかない！

「あああああああつ！」

前方から俺を吹き飛ばそうとする破壊の波を、俺はその場に踏み止まって受け続けた。

だが。

「耐え切る事なんて出来ねエよ！」

「ッ！？」

ジェイガの声が聴こえた瞬間、炎剣から伝わる衝撃がより大きくなつた。

踏み止まる足により力を込めようとした時、地面の方が破壊の衝撃に耐えられなくなつたらしい。ビキツと言う音と共に足場が崩れ、俺はバランスを失った。

「ぐあああああああつ！！！」

激しい痛みに苛さいまれながら、俺は自分の視界が二転三転するのがわかった。

その次に俺を襲ったのは、全身を強く叩き付けられるような鈍い痛みだった。どうやら背中から地面にぶつかっただらしい。ふと気付くと当然のように、両手に握っていたはずの炎剣が消滅していた。痛みで集中力が途切れたんだ。

「くっ、そ……！」

痛みで明滅する視界を、頭を振って覚醒させ、俺はどうにか起き上がろうとした。その瞬間、胸の中心に何か叩き付けられた。

「がっ！」

視線を向けると、俺を踏み付けにして、ジェイガがニヤリとした笑みを浮かべている。

「てめえ……！」

「どれだけ足掻こうが無駄なんだよ。テメエは俺には勝てねエ。結局『深紅魔法』じゃ『黒煉魔法』には勝てねエだよ。どうだ？ 命乞いするなら、テメエは見逃してやってもいいんだぜ？ 確かに『魔術師』は全員憎しみの対象だが、本命はやっぱノイエの野郎だからなア」

「残念ながら、てめえみたいな奴には絶対下手に出るな、って師匠から教わってるモンでね。受ける訳にはいかねえんだよ。それに

「

会話を続けながら、俺は胸の前に両手をゆっくりと翳かきす。怪訝な顔をするジェイガには、この動作の意味がわかっていないらしい。

「まだ負けた訳じゃねえ！」

「！」

俺に意識を向けていたジェイガの顔を掠めるように、激しく舞う炎が飛来した。回避を選んだジェイガは俺の身体から足を離し、軽い足捌きで後退する。

俺が直接炎を放った訳じゃない。

誰かが援護してくれた訳でもない。

俺が発動した『魔法』によつて、周囲で燃え盛っていた炎が操られたんだ。

フレイム・リーディング  
『紅の詩篇』。それがこの『魔法』の名だ。

俺が立ち上がると、忌々しそうな口調でジエイガは言う。

「なるほど。そういや一度、ノイエの野郎に聞いた事があったな。

『深紅魔法』の技の中には、周囲の炎を従属して操る『魔法』があるんだっけか？」

ジエイガはそこで一旦、ゆっくりと辺りを見回した。その間にも、俺の周囲には炎が集まり続ける。

「確かに今俺たちの周囲には炎がある。つまり今この場所は、テーマにとつての独壇場つて訳か」

「ああ。これが『紅の詩篇』だ。能力だけじゃなくて名前も覚えとけ！」

俺は両腕を水平に構え、集めた炎と俺自身が生み出した炎を混ぜ合わせ、三つの巨大な炎の塊を造り上げる。

これは『紅の詩篇』を応用した、『深紅の流星』の強化版。

その名も。

フレイズ・プラスト  
『大紅蓮の流星群』」

名を告げると同時に、俺は右手をジエイガに差し向けた。

その瞬間、三つの巨大な炎の塊はそれぞれ弾け飛び、鏃型の無数の炎となつて標的に襲い掛かる。

炎の鏃の数は、『深紅の流星』の火球の数と比べても段違いに多

い。なぜならそれは『紅の詩篇』によつて強化されているからだ。

「ハッ！ 数で押せばどうにかなるとでも思ったか？ 甘エんだよ！」

流れ行く炎の鏃を見つめ、ジエイガは大鎌を大きく三度振るつた。その動作に合わせて現れる、三つの黒い衝撃波。

紅と黒。

その二つが空中で衝突し合い、次々と連鎖爆発を起こした。

「くっ！」



ダイク・デスサイズ

やはり『漆黒の大鎌』から放たれる衝撃波は威力が高い。俺の視界を埋め尽くす程あった炎の鏃が、一瞬で相殺されてしまった。

それを悔しく思いながら、前方で起きる爆発に俺が眼を細めた瞬間だった。

爆煙を突き破るように現れたジェイガが、大鎌を振り上げニヤリと笑っている。

「！」

「もう一発喰らうとけエ！」

すでにジェイガの大鎌の刃には、黒い光が蓄えられていた。

次の動作が間に合わない！ そう思った瞬間。

ジェイガの背中に突然、炎の鏃が炸裂するのが見えた。

「ぐがあああああああああっ！」

彼にとつても完全に想定外の攻撃だったんだろう。受け身を取れずに地面に倒れたジェイガの手から、黒い大鎌が砕け散るようにして消え去った。集中力が途切れた証拠だ。

「だけど。」

「何だよ、今の……？」

俺は自分の眼の前で起きた現象が信じられない。

いや、と言うより理解出来なかった。

そもそも今の攻撃、『大紅蓮の流星群』フレイズ・プラストはジェイガの黒い衝撃波

で完全に相殺されていたはずだ。

なのになぜ炎の鏃が残っていたんだ？ 俺は全弾をジェイガに向けて放っていた。残していたものなんて一つもない。

これじゃあまるで俺の意志に反して、炎が操られたみたい。

「！ 炎が、操られた……！？」

俺は思考していた事を声に出して繰り返していた。

『他者の炎を操る』。

その能力を俺は知っている。『深紅魔法』最大の能力にして、最

も扱うのが難しいとされる技。

「まさか、『フレイム・リーディング紅の詩篇』!?!」

もしそうだとしたら、一体誰が俺の炎を操った？

その答えに辿り着く直前、街の一角で燃え盛っていた炎が、突然激しい火柱を上げた。

俺はゆっくりとその方向を見る。火柱は一度強く燃え上がると、まるで静けさを取り戻すみたいにその勢いを弱めていった。

その炎の中心に、悠然と立つ誰かの姿が見える。

「……何で」

そうだ、そんなはずない。彼女は今記憶喪失で、『魔術』を使えなくなってるはずだ。

その彼女があんな所に立っているはずがない。そんな事ありえない。

もし見間違いじゃなければ、俺にとっては喜ぶべき事のはずなのに、不思議と俺はその考えを否定しようとしていた。

だけど眼の前の事実は告げている。

間違っているのは俺の方だ、と。

「ミレー、ナ？」

弱まっていく炎の中心に立っていたのは、かつての『英雄』。

金髪金眼の炎の『魔術師』、ミレーナ・イアルフスだった。

「……………」

いつの間にか気を失っていたあたしは、ゆっくりと眼を開けた。

そしてボーっとする頭で考える。どうしてあたしは気を失ってた

んだらう？

確かログハイムさんを治療した直後に、ディーンと戦ってる人が使った『魔術』みたいなものに吹き飛ばされそうになって、それから……。

と、そこまで考えてあたしは思考するのを止めた。何だかさつきから自分の周りがやけに熱い。

何でだらう？ と思って周りを見て、あたしはギクツとなった。

あたしやログハイムさんが倒れている場所を中心に正座な円を描くように、真っ赤な炎が燃え盛っている。火事の起きた家の中に取り残されたら、多分こんな感じなのかな？

驚いたのもそうだけど、でも不思議にも思った。どうしてあたしたちがいる所だけ炎が近付いて来ないんだらう？

「！ えっ……？」

周りの様子を確かめていた所で、あたしはその疑問を解決する答えを見つけた。

あたしとログハイムさんのすぐ傍に、綺麗な長い金色の髪の女性が悠然と立っている。その人はいさつきまで、あたしと一緒にディーンとの戦いを眺めている事しか出来なかったはずの人だった。

周りの炎は間違いなく、彼女を中心にして燃え盛っている。

「ミレーナ、さん？」

あたしがポツリと呟くと、突然周りの炎の勢いが弱まり始めた。

徐々に視界から炎が無くなって、白い瓦礫が辺りに見えるようになってきた。

するとその視界の中に、驚いた表情でこっちを見ているディーンの様子があつた。

あたしは安堵して声を掛けようとしたけど、結局躊躇った。彼はあたしの事を見ていない。傍らのミレーナさんに釘付けになっている。

その表情を見ればわかる。多分ディーンも、ミレーナさんの様子が変わった事に気付いてるんだと思う。

「リネさん」

「！ハ、ハイ！」

突然ミレーナさんから声を掛けられて、あたしは思わずビクツとなる。その声は冷静そのもので、今の状況に全く動じている感じがなかった。

「ログをお願い」

「えっ？」

何かを尋ねる暇もなく、ミレーナさんは歩き始める。

前方に佇むディーンの方を、真っ直ぐ見据えながら。

第六章 紅の詩篇 - r e t u r n - (後書き)

という訳で第六章だった訳ですが、次の話でフレイム・ウォーカーも30部目となります。

いや〜早いもんですね、実際。

『魔女の森編』書いてた時は「30なんてまだ先だ」なんて考えてましたが、いやはや(笑)

一応、ビジョンとしてこんな展開に持っていきたいなあ〜ってのはあるんですが、そこに行きつくのに一体どれぐらい掛かる事やら…。

とはいえ、読んで下さってる皆さんがいる事が、ホントに励みになってます！

それではまた次回！ノシ

第七章 撤退 - e s c a p e - (前書き)

お待たせしました、第七章です！  
思ったより時間が掛かってしまって申し訳ないです。

何が起こったのか、自分でもわからなかった。

今起きている現象は、間違いなく自分が引き起こしているものなのに、私にはそれを説明する術がない。

私の周囲を踊るように舞い続けているのは、紅い髪の彼が操っていたものと同じ、炎。

説明する術がない。それでも私には漠然と、この力の正体がわかる。

この力は間違いなく、『魔術』だと。

なぜ私が急に操れるようになったのか？ その答えはわからない。だけど今。私の意志とは別の何かが、私の身体を勝手に動かしている。

炎を操る『魔術師』として。

そして恐らく、『本来の』ミレーナ・イアルフスとして。

周りの炎を従えながら、私はゆっくりと歩く。

二人の『魔術師』が戦っている、戦場へと向かって。

俺は眼の前の光景が未だに信じられない。

周りにまだ僅かに残っている、燃え盛る炎を従属しながら悠然と歩いてくるその姿は、俺が昔何度も見る事があった姿だった。

「ミレーナ……、まさか、記憶が戻ったのか？」

その姿を見ていると、不思議と鼓動が高鳴ってくる。

本当はこれが、彼女の本来の姿のはずなんだ。

炎を操る金髪金眼の『魔術師』にして、『深紅魔法』の使い手。

『倒王戦争』を終決させた『英雄』の内の一人。

ミレーナ・イアルフス。

かつての『英雄』が、顕現した瞬間だった。

「チイ……ッ！ 不意打ちとはやってくれるじゃねエか。今頃参戦とは大層な御身分だなア、『英雄』さんよオ！」

倒れていたジェイガはゆっくりと立ち上がると、聴いているだけで激怒しているとわかる声で叫ぶ。

だがミレーナには動じた様子がない。

真つ直ぐ、静かな瞳でジェイガを見据えている。

「答えてもらうぜ。ノイエ・ガルバドアはどこにいる？ 奴と親しかったテメエなら、居所を知ってんじゃねエのか？」

「……」

ミレーナは答えない。ただ無言のまま、ゆっくりとこちらに近付いてくる。

周りの炎を従属しながら、ジェイガを威圧するかのよう。

「ふざけやがってエ……ッ！ 何とか言いやがれクソ野郎！」

激昂したように吠えるジェイガの姿は、荒々しさを纏った獣のようだ。

不意打ちをされた事で完全に、ジェイガは頭に血が上っているらしい。瞬時に大鎌を造り出すと、猛然とミレーナに襲い掛かる。

「ミレーナ！」

俺は咄嗟に叫んでから、ミレーナの方へ足を向けようとした。

逃げなきゃダメだ！

その思いから叫んだ言葉だったのに、彼女は全く聴き入れた様子がない。迫るジェイガに右手を差し向けると、その唇が僅かに動いた。

「フレイム・リーディング  
『紅の詩篇』」

それは一瞬の出来事だった。



彼女が『魔法名』を告げた瞬間、従属されていた周りの炎が唐突に動きを変え、炎の波がジェイガの行く手を阻んだ。

「なっ!?!」

驚きの声を上げるジェイガを尻目に、ミレーナは左手で別の場所  
で燃えていた炎を従属し、それを無数の火球に造り変えてそのまま  
放った。

ジェイガがそれを回避しようと後退すると、今度は右手で炎の渦  
を操り、ジェイガの行く手を阻む。

「チイツ! ウザってエんだよ!」

ダーク・デスサイズ

叫ぶと共にジェイガは『漆黒の大鎌』を振るい、黒い衝撃波を発  
生させる。

衝撃波はミレーナの放った無数の火球を簡単に吹き飛ばし、彼女  
の方へと襲い掛かる。

だがミレーナは躲そうとはしなかった。

その場から全く動く事なく、炎の渦を利用して壁を造り、ジェイ  
ガの攻撃を難なく防御する。

かと思えば、その動作の途中で生み出した火球ですかさず反撃を  
加え、攻め続けようとするジェイガの体勢を崩しに掛かる。

まるで指揮者のような手振り  
で炎を操るミレーナは、たったの一  
歩すらジェイガを近付けさせない。

右手で炎の渦を操ってジェイガの動きを制限し、左手で操った炎  
で火球を作り出し攻撃する。

流れるような動作で少  
しずつだが、ミレーナはジェイガを翻弄し  
始める。

「……凄い」

眼の前の華麗とも言える戦い方を見ながら、俺は思わず呟いてい  
た。

修行時代、ミレーナに『フレイム・リーディング紅の詩篇』を見せてもらった時にも思っ  
た事だが、彼女はやはりその能力を完璧に使いこなしている。

テルノアリスでの戦いを経て、俺も『フレイム・リーディング紅の詩篇』を扱えるように

はなつたが、それでも今の彼女のように、左右の手で違う従属の仕方をすることは出来ない。一体どんな集中力があればあれだけの動作が行なえるんだ？

「クツ、ソがア……ッ！」

忌々しげな声を上げながらも、ジェイガは反撃の糸口を掴めないでいるようだ。

徐々に追い詰められていく悔しげなジェイガの姿を見ながら、俺は自分の力の無さを改めて痛感した。

俺が戦っていた時とは全く違う。俺は『深紅魔法』のあらゆる技を使っても、ジェイガにあんな顔をさせるのは不可能だったのに……。

「……  
『フレイム・リーディング紅の詩篇』を扱えるようになってから、俺は心のどこかで自分の力を過信していたのかも知れない。

もう『深紅魔法』は操れる、と。

これでミレーナに追い付いたんだ、と。  
だけど、そんなのは全くの見間違いだったみたいだ。

俺と違ってミレーナは大技を放つ事なく、あのジェイガを圧倒している。これが『倒王戦争』を戦い抜いた、『英雄』の真の実力なのか。

このまま行けば俺が加勢する必要もないし、元よりそんな隙も全くと言っていい程無い。

ミレーナがいなくなつてからの一年間、一体俺は何をしてたんだろ……。

そんな事を思った時だった。

唐突に、ミレーナが地面に片膝をついた。

「!?!」

何が起こつたのかわからなかった。

突然崩れるように膝をついたミレーナは、激しい頭痛にでも苛ま

れているかのように顔を顰め、右手でこめかみの辺りを押さええている。

その動作で、俺は直感した。

まさか、また記憶が　！？

「何だア？　休憩でもしてんのか『英雄』さんよオ」

ミレーナが『フレイム・リーディング紅の詩篇』を使えなくなった事で、ジェイガは完全に息を吹き返していた。ニヤリと笑い、大鎌を軽く握り直す。

まるでミレーナに死神が歩み寄ろうとしているような光景だ。

「ミレーナ！」

俺は咄嗟にミレーナに駆け寄り、彼女の顔を覗き込んだ。

すると、俺の顔を見た彼女の唇が微かに動く。

「デーン」

「！」

俺の名前を読んだ後、ミレーナはフツと微笑んでみせた。

その雰囲気は、さっきまで俺の事を『くん付け』で呼んでいた時と明らかに違っていた。

俺の知っている、記憶喪失になる前の本来のミレーナだ！

「ミレ」

俺がもう一度呼び掛けようとしたその時、ミレーナはまたも唐突に意識を失い、俺の方へと倒れ込んだ。

彼女の身体を何とか抱き止め、俺は彼女に強く呼び掛ける。

「ミレーナ！　しっかりしろって！　ミレーナ！」

突然『魔術』を使い出したかと思えば、今度は意識を失う。一体ミレーナの身に何が起きてるって言うんだ？

だけど俺がその答えを解消する暇は無かった。

彼女の身体を支える俺の耳に、絶望を齎す声が響く。

「どうやらかの『英雄』様は体調が優れないらしいなア。まア当然、そんな事俺にはどうでもいいがよオ」

ジェイガは大鎌を構え、今にも斬り掛かって来そうな状態で続ける。

「ノイエの居所を吐かねエなら仕方ねエ。『魔術師』ミレーナ・イアルフスにはこの世界から消えてもらおう」

「てめえ……！」

「安心しろ紅髪<sup>あかがみ</sup>。二人まとめて楽にしてやるからよ」

「最悪だ……！　いくら何でも、この状況でミレーナを守りながら戦うのは無理がある。」

はつきり言うのは悔しい事だが、ジェイガの力は確実に俺より上だろう。そんな相手と、誰かを庇いながら戦うのは至難の業だ。

だからってミレーナの事を放ってなんておける訳がない。

どうすればいいんだよ……！

「消え失せろ、『魔術師』どもがア！」

ジェイガは大鎌を振り被り、俺とミレーナを斬り裂こうとする。

咄嗟に俺はミレーナを庇うように、彼女の身体を強く抱き寄せて眼を瞑<sup>つむ</sup>った。そんな事をして何の意味もないと理解した上で、それでも気付けばそうしていた。

きつとあと数秒もしない内に、大鎌の一撃によって俺の身体は斬り裂かれる。多分例えようのない程激しい痛みを伴って。

と、そう思っていたのに、なぜかいつまで経ってもそうはならなかった。

不思議に思い、俺はゆっくりと眼を開く。

すると俺の視界は、見覚えのある背中<sup>せなか</sup>で覆われていた。俺たちとジェイガの間に割って入るかのように立つその背中<sup>せなか</sup>は、華奢な体格をした少女のものだった。

首の付け根<sup>くび</sup>辺りまである黒髪に、ちよつと男勝りな服装。

間違はなく、リネの背中<sup>せなか</sup>だった。

「バカ野郎！　お前何して」

と、叫び掛けた俺は違和感を覚えた。

これだけ長い間<sup>ま</sup>があつて、どうしてリネはジェイガの奴に斬り裂

かかれていないんだ？

訝しく思い視界を巡らせると、眼の前の光景の中に答えはあった。ジェイガの持つ黒い大鎌。理不尽に放たれたはずの一撃は、リネの身体に届く寸前の所でピタリと止まっている。

まるで何かを躊躇うように。

彼女を斬る事は許されないと云うかのように。

「何、だ？」

俺が疑問の声を上げると、突然ジェイガは大鎌を引き戻し、後退して距離を取った。

あまりにも突然の事で状況が上手く理解出来ない。

一体どうなってるんだ？ いやそもそも、何で今あいつはリネを斬る事を躊躇した？

「……何でお前がここにいる」

「！」

いくつもの疑問符が頭に浮かぶ俺は、ジェイガの言葉でハツとした。奴の態度は先程とは打って変わって、まるで別人のように大人しくなっている。

「……何でお前は、そうやって俺の前に立ち塞がる」

何言ってるんだこいつ？

俺に……じゃなく、リネに対して言ってる？ さっきも思った事だが、やっぱりこいつはリネの事を知ってるのか？

「あなたは」

と、リネが何かを呟き掛けた、その時だった。

街の入口の方から、石畳を叩く何かの音が響いてきた。

音の響いてくる方向を見て、俺は眼を睜みはった。その方向からは、かなりの数の人間が馬に跨り、颯爽さつそうとこちらに駆けて来ている。その人物たちの手にはそれぞれ、剣や槍といった武器らしきものが握られている。

「！もしかして、正規軍か？」

いや、よく見るとどうやら兵士だけではない。正規軍の軍服を着

ている人間の中に混じって、違う服装の人間が何人かいる。兵士と一緒にいるという事は、恐らく『ギルド』の人間だろう。

それに街の外から来てるって事は、避難したこの街の人間が、軍の詰所や『ギルド』のある近郊の街まで救助を求めに行ったのかも知れない。

すると俺と同じ事を思ったのか、ジェイガが軽く舌打ちをする。

「チツ……。また邪魔者どものお出ましか」

「いたぞ！ あの青紫の髪の男がジェイガ・ディグラッドだ！」

轟音を響かせながら近付いてきた所で、部隊の中の誰かがそう叫んだ。彼らは馬を停止させると軽い動作で次々に地面に降り立ち、俺たちを庇うようにジェイガの前に立ちはだかった。

「貴様がジェイガ・ディグラッドだな。大陸の各地での正規軍人に対する傷害、及びこの街での破壊行動を罪とし、貴様を拘束する」

軍服を纏った兵士のリーダーらしき男が、強い口調でジェイガに詰め寄る。

だがジェイガは大して気にした様子もなく、フンと鼻で笑ってみせた。

「テメエら程度がこの俺を拘束するだと？ ハッ、面白エ。出来るもんならやってみろよ」

これだけの人数を前にして、ジェイガは未だに余裕だ。それどころか挑発するような事まで言い放つ。

ジェイガを取り囲む正規軍と『ギルド』メンバーは、それぞれが武器を構え始める。

するとその時。

「と言いたい所だがよオ」

まるで取り囲む彼らの出端を挫こうとするかのように、ジェイガは酷く気の抜けた声を出した。彼は軽く大鎌を振り回した後、気だるそうな声で続ける。

「さすがにこの人数を相手にすんのは面倒臭エからな。今回は退かせてもらおうとするぜ」

「逃げる気なのかよ？」

兵士たちの間から俺が声を掛けると、ジェイガはニヤリと笑ってこっちを見た。

「ああ、そうだ。正直テメエらに固執する必要はねえんだ。その女以外にも、ノイエを探す手掛かりはある訳だしなあ」

俺が抱えているミレーナを一瞥してジェイガは言う。

「そうか。こいつはミレーナを襲ったように、他の『英雄』たちの事も！」

「逃がすものか！」

ジェイガを取り押さえようと兵士たちが動き出した所で、ジェイガは大鎌を振るい、黒い衝撃波で地面を吹き飛ばした。

「ぬおっ！」

兵士たちは直撃すら免れたものの爆風に煽られ、その場から一歩も動けなくなる。

爆風と爆煙に俺が眼を細めていると、どこからともなくジェイガの声が聴こえてきた。

「俺の事を覚えとけよ、あかがみ紅髪」

晴れ始めた爆煙の向こうで、ジェイガが不敵に笑って立っているのが見える。

「テメエがその女と同じ『魔術師』である以上、俺は必ずまたテメエの前に現れる。そして必ずテメエを殺す。まア精々今の内に休んどけ。俺がもう一度現れて、テメエを殺すその時までな！」

ジェイガは強く叫ぶと、もう一度地面に向けて黒い衝撃波を放った。

再び巻き起こる爆風と爆煙。

その全てが過ぎ去った後、ジェイガの姿はすでにそこに無かった。まるで一陣の風のように、俺の前から姿を消していた。

攻撃者が去り、破壊の爪痕が残った街には、漸く静けさが訪れる。俺はミレーナの身体を抱えたまま、フウツと息を吐いた。

戦いの終わりを悟り、緊張していた俺の身体から力が抜ける。

「ジエイガ・ディグラッド、か」  
あいつとはまた、必ず会う事になる。  
不思議と俺には、そんな予感があった。

戦いの最中に現れた正規軍と『ギルド』メンバーの連盟部隊によつて、あたしたちは何とか事無きを得る事が出来た。

正直、さっきまでのあの状況が続いていたらと思うとゾツとする。彼らの到着があと少しでも遅れていたら、多分あたしもディーンも今頃……。

なんて、嫌な想像をし掛けていた時だった。

「おい、リネ」

正規軍の兵士や、『ギルド』の人たちが街中で忙しく動き回っている中、意識を失ったままのミレーナさんを抱えて、ディーンはログハイムさんを介抱しているあたしの所に歩み寄ってきた。

「お前、怪我とかしてないか？」

「え？ うん、平気だけど。何で？」

「何ではこつちの台詞だ！ 何で俺たちの間に割って入ったりしたんだよ？ あんな危ない真似して……、死んでたかも知れねえんだぞ！？」

ミレーナさんを一旦その場に下ろしながら、ディーンは屈んであたしと視線を同じにした。

確かに、怖くなかったって言ったら嘘になる。

ディーンたちの前に立った時、あたしは思いつ切り眼を瞑つむってたし、身体だって震えてたと思う。



「だけど、それでも。」

「何でって言われても、あの時はただ必死だったから。それにディーンがミレーナさんを守るうとしたように、あたしだってディーンを守りたかっただけだよ。まあ確かに、危ない事には変わりないけどね」

「……」

あたしが苦笑しながら言うと、ディーンは複雑そうな表情であたしから視線を外した。

「何だかディーン、ちょっと怒ってる？」

「そ、それより、ミレーナさんは？ 意識が無いみたいだけど、大丈夫なの？」

その場の空気を変えようと思って、あたしは無理矢理話を変える。ディーンは何も言わず、ミレーナさんの方をチラリと振り返った。「一応、怪我はしてないみたいだ。何で意識を失ったのか、よくわかんねえけどな」

「……さつきミレーナさんが使ったのって、『魔術』、だよな？」  
あたしが尋ねると、ディーンは渋々といった感じで首を縦に振った。その顔からは、困惑しているような様子が窺える。

「……あの時ミレーナは、記憶を取り戻してみたいなんだ。俺の事を呼び捨てにして、微笑んでた」

「えっ!?!」

ディーンの言葉で、あたしは思わずミレーナさんの方を見た。彼女は相変わらず気を失ったまま、目覚める気配が無い。

「じゃあミレーナさんは元に戻ったって事なの？」

「わからねえ。それを確かめようにも、ミレーナが気を失ったままじゃ無理だしな」

「そう……、だよな」

一体ミレーナさんの身に何が起きたんだろう？ ディーンの為に、眼が覚めた時に記憶が戻ってほしい物だけ……。

「ところで、ログハイムさんの容体は？」

ディーンに呼び掛けられてあたしはハツとする。

そしてあたしは不思議に思った。ログハイムさんの傷はあたしの『治癒』の力でとつくに癒えてるはずなのに、彼は一向に眼を覚まさない。

彼が意識を失ったのは、もうだいぶ前のはずだ。戦いが終わるまでに色々な衝撃が彼の身体を襲ってるはずなのに、いくら意識が無いからって全く反応しないなんて事があるのかな？

「ログハイムさん？ 聴こえますか、ログハイムさん！」

彼の耳元で話し掛けても、反応はない。どれだけ肩を強く叩いても、応答はない。

一体どうして……？

「……まさか」

嫌な予感がした。

彼が負った傷は、頭部への外傷。顔を真っ赤に染める程の血が流れる、かなりの重症だった。

もちろんその傷の方は、あたしの力で問題無く治癒している。

けどもし、あたしの力が働かないダメージを受けてるんだとしたら……？

「おい、リネ。もしかして……」

傍らのディーンがポツリと呟く。多分あたしと同じ、最悪の展開を想像しながら。

言葉が紡げない。

事実を口にする事が出来ない。

その場で固まるあたしたちを嘲笑うみたいに、空から水滴が零れ落ちてきた。

暗雲の空の下、この街に漸く雨が降り始めようとしていた。

## 第七章 撤退 - e s c a p e - (後書き)

という訳で、恐らく次の章で『紺碧の泉編』は完結となります(多分)。

もうすぐ11月が終わろうとしています、何とか今月中に出版するように頑張ります！

第八章 いつか再びこの場所で（前書き）

何とか間に合いました！（笑）

『紺碧の泉編』第八章、そしてこの次が終章です！

## 第八章 いつか再びこの場所で

街中での戦いから、二時間ぐらい経った頃。あたしは一人で、ログハイムさんの家の一室にいた。

ベッドに腰を掛けて、ふと窓の外に目を向ける。

外は今まで降らなかったのが嘘みたいな程、強い雨が降り続けている。

何だか陰鬱な気分が晴れない。でも、それは仕方のない事だ。

あたしはゆっくりと立ち上がり、自分が宛がわれていた部屋を後にする。

この家の二階には、もう一つ寝室がある。そこには今、眠るよう意識を失ったままのミレーナさんがいる。多分、今もあの部屋にはデーンがいるはずだ。

だけどあたしが目指している部屋はそこじゃない。あたしの目的の部屋は、一階の寝室。そこはログハイムさんの部屋だ。

階段を下って階下に降りて、リビングを通り過ぎて家の奥へと向かう。

ログハイムさんの部屋の前で立ち止まったあたしは、とりあえず数回扉をノックする。だけど当然、返事は返って来ない。

それもそのはずだよな。

だって彼は今。

「リネ、ここにいたのか」

「！」

背後から声を掛けられて、あたしはゆっくりと振り向く。そこには複雑な表情をしたデーンが立っていた。

「ミレーナさんは？」

「まだ眼が覚めないみたいだな。あとでもう一度様子を見に行こうかと思ってる」

「そっか……」

あたしが躊躇いがちに眼を伏せると、ディーンは少し間を開けて尋ねてきた。

「……入らないのか？」

「あ……、うん」

ディーンに促される感じで、あたしはドアノブに手を書けて扉を開いた。

部屋に入ると窓際にベッドがあり、その上にはログハイムさんが横になっている。

ただし彼の場合、ミレーナさんと違って意識が戻る事はない。

彼は頭部に受けた傷が原因で昏睡状態に陥っている。

あの後すぐログハイムさんとミレーナさんをここに運んでから、この街のお医者さんを探して、ログハイムさんを診てもらった。そのお医者さんが言うには、脳に激しいダメージを受けでもしない限りこんな状態にはならない、という事らしい。

そして、意識が回復するかどうかもわからないそうだ。

脳へのダメージ。

それは間違いなく、頭部に受けたあの傷が原因なんだろう。

あたしの『治癒』の力で怪我自体を治す事は出来ても、彼の意識を復活させる事が出来なかった。

「どうしてあたしにはディーンみたいな力が無いんだろ？」

「……リネ？」

眠り続けるログハイムさんを見つめて、あたしは俯きながら呟いた。

傍らのディーンが、ジツとあたしの方を見ている。

「あたしミレーナさんに約束したんだ。必ずログハイムさんを治します、って。それなのに、あたしが出来た事っていえば傷を治す事だけ。これじゃミレーナさんが起きた時、どんな顔して会えばいいのかわかんないよ……」

こんな所で自分の気持ちを吐露しても、何の解決にもならない。あたしの力が増す訳でもないし、ログハイムさんが意識を取り戻す訳でもない。

それでもあたしは、自分の無力さが情けなかった。

デイーンが戦ってる時だって今だって、あたしはずっと無力なままだ。

「そんな事ねえよ」

「え？」

暗い気持ちに支配されていたあたしは、デイーンの声で顔を上げた。彼は真剣な眼差しで、あたしの事を見つめている。

「お前は俺が凄い力を持つてるって思ってるのかも知れねえけど、全然そんな事ない。買ひ被り過ぎだ。俺はいつだって自分に出せる範囲の力で、自分出来る事やってきただけだ。そんなのは褒められるような事でも、決して自慢出来るような事でもない。だけさ、俺はお前の事は凄いと思ってるぜ？」

「……あたしが？」

「ああ。確かにお前は戦う力を持ってないかも知れねえけど、それでもお前はログハイムさんの傷を治してくれた。俺とミレーナを庇って、ジェイガの前に立ち塞がってくれた。それは充分凄い事さ。

大体、テルノアリスで死に掛けた俺を救ってくれたのは、助けてくれたのは、他でもないお前だろ？ お前がいなかったら、俺は今ここに立ってない。お前がいたから、俺は大切なものを守る為に戦えてるんだ」

「……」

「……まあその、さっきは悪かったな。俺の事心配してくれたのに、お前には関係ないみたいない方して」

そう言っつてデイーンは照れ臭そうに頭を掻いた。

何だか嘘みいだった。

デイーンがこんなにあたしの事を頼ってくれてたのが。必要としてくれてたのが。

きつとあたしは、ディーンに甘えてたんだと思う。自分が必要とされてる事を、今みたいに口に出して言ってほしかったただけなんだと思う。

我ながら嫌な子だよね、あたしって……。

「ありがとね、ディーン。そんな風に言ってもらえるなんて嬉しいよ」

「別に、っておい！ 何泣いてんだよお前!？」

「なっ、泣いてないよ。嬉しいのに泣く訳ないじゃん!」

「……心の汗とかベタな事言っつなよ」

「言わないよ!」

気付くといつの間にか、あたしはディーンと普段通りに会話していた。

一方的な物言いになるけど、あたしはこの時漸く、ディーンと仲直り出来た気がした。

眼を覚ますと私の視界に、四角い形をした白塗りの天井が映った。自分の身体を仰向けに支えている柔らかく温かい感触。どうやら私は、ベッドで横になっているようだ。

若干頭痛を感じるが、どうにか私は上半身を起こす。そしてよくよく周りを見てみると、そこは自分が普段使わせてもらっている、ログの家の一室だった。

どうして私はここで寝ていたんだろう？

そんな風に思ってから、私は自分の記憶を辿ろうとする。

「痛……ッ」



けれどそうしようとする、酷い頭痛に襲われて思考が無理矢理中断されてしまう。何かがあったはずなのに、何も思い出す事が出来ない。

まるで記憶の箱に、何重にも鍵が掛けられてしまったような感覚。私がそれを外そうとすると、頭痛という邪魔者が私の行動を阻害する。それが何だかとても苛立たしい。

「……そうだ。ログはどこだろ？」

モヤモヤしたものを抱えながらも、私はとりあえず思考するのを止める。と、その時だった。

部屋の扉が数回ノックされ、私がそれに応えるよりも早く内開きの扉が開け放された。

すると視界に、見覚えのある紅い髪の少年と黒い髪の少女が映り込んだ。

「ミレーナ！ 眼が覚めたのか！ よかった……」

「もう起きても大丈夫なんですか、ミレーナさん？」

私の顔を見るなり、二人は心配と嬉しさが混じったような表情で声を掛けてくる。

とりあえず二人を安心させようと、私は軽く微笑みながら口を開いた。

「ありがとう、ディーンくん、リネさん。もう大丈夫よ」

そう言葉を掛けると、一瞬二人の表情に陰りが差した。それを不思議に思った私は、大して気にもせず二人に聞いてしまう。

「あら……？ 私、何か変な事言った？」

「……ミレーナ。やっぱり、何も覚えてないのか？」

「え？」

彼の、ディーンくんの暗い雰囲気を纏う言葉で、私は今更のよう後悔した。

多分尋ねるべきではなかったんだ。

どうやら私は初めて会った時と同じように、今彼の事を傷付けている。そんな自分が許せなくて、情けなくて、私は黙り込む事しか

出来なかった。

「私が、『魔術』を……？」

リネと共に再びミレーナの部屋を訪れた俺は、ベッドに座るミレーナに事情を説明した。

俺の説明を聞いている間、ミレーナはただただ驚いた表情ばかりを見せていた。その度に俺は、何度言葉に詰まりそうになったかわからない。

俺の思った通り、彼女の記憶は戻ってなどいなかった。

それどころか自分が『魔術』を操りジエイガを撃退した事も、俺に微笑み掛けてくれた事すらも覚えていないようだ。

一体彼女の身体に、記憶に、何が起きてるんだ？

「……ごめんなさい。何も覚えていないなんて、無責任な事よね」

「ミレーナが誤る事じゃねえよ。それに、謝るのは俺の方だ」

「え？」

不思議そうにミレーナが尋ねてきた所で、傍らにいたりリネが慌てた様子で口を挟んでくる。

「デーン！ それはあたしが」

「いいんだ、リネ。さっきも言った通り、お前はよくやってくれた。だからいいんだ。俺が直接話すから」

「デーン……」

落ち着いて制止する俺を、リネは切なそうな眼で見つめてくる。

そう、彼女のせいなんかじゃない。ミレーナを、そしてログハイムさんを守れなかった責任は俺にある。

全て俺が弱いせいだ。俺がもつと強ければ、ジェイガを足止めする事なんていくらでも出来ただろう。ミレーナとログハイムさんが襲われる前に、ジェイガを倒す事だって出来たはずだ。

今この街でみんなを守れるのは自分しかない。そう息巻いてたのは他でもない俺自身じゃないか。

だけど蓋を開けてみればどうだ。俺は終始ジェイガに翻弄され、拳句の果てには守ろうとしたミレーナやリネに、逆に俺が守られていた。

情けなさ過ぎる。

弱過ぎる。

俺はやっぱり、心のどこかで自分の力を過信していたんだ。

誰にも負けるはずなんてない、と。

「ミレーナ。今から俺がする話を、落ち着いて聞いてくれ」

俺は不安そうな顔でこつちを見ているミレーナに向けて、事実だけを告げた。

恐らく今の彼女にとっては、一番辛いであろう事実を。

「 ログはあなたに何か言ってた？ 」

ベッドに横たわったまま動かないログハイムさんの頬を、ミレーナは優しく撫でながらそう言った。

ログハイムさんの事を告げた後、ミレーナは彼の顔を見たいと言って一階の寝室に降りてきた。もちろん俺とリネもそれに付いて行き、俺たちは今、ログハイムさんの部屋に来ている。

「ミレーナをこの街から連れ出してほしい、って。彼女の記憶を取

り戻す為に力を貸してやってくれって、頼まれたよ」

「そう……」

「それにこうも言ってた。ミレーナの事が好きだ、って。自分にとつてとても大切な存在だ、って。笑って俺に言ってくれた」

「……」

俺はベッドの傍らに屈んでいるミレーナの背中に向けて、ありのままを伝えた。

今この言葉はログハイムさんの言葉として、ちゃんと彼女に届いているんだろうか？

そんな事を考えていると、屈んでいるミレーナの肩が、少しだけ震えている事に気付いた。彼女は軽く鼻をすすって、微かに震える声で呟く。

「ありがとう、ログ。私なんかの事を大切にしてくれて……。あなたがいなかったら、私はどうなっていたかわからないわ……。本当にありがとう」

ミレーナはゆっくりと、動かないログハイムさんの右手を両手で優しく握る。

「私もあなたが大好きよ。それから、巻き込んでごめんね」

「ッ！」

俺は両手を固く握り締めた。爪が肉に食い込むんじゃないかと思う程、強く。

ミレーナにこんな思いをさせてるのは誰だ？

彼女を大切に思っていたログハイムさんをこんな姿にしたのは誰だ？

その答えは決まってる。

ジェイガの野郎は確かに許せねえけど、それ以上に許されない人間がいる。

それは俺自身だ。

全ては俺の弱さが招いた事だ。

守りたいものを守る力を持っていなかった、俺の無力さが全ての元凶だ。

だけど俺は、泣いて立ち止まってる訳にはいかない。悲しみを乗り越えてでも進まなきゃいけない。

ログハイムさんは俺に言った。

ミレーナの事を頼む、と。

彼女の記憶を取り戻してほしい、と。

俺は自分の守りたいものを守り切れなかった。だからこそ彼とのその約束だけは、絶対に守り切らなきゃいけない。

俺に今出来る事は、やらなきゃいけない事は、それだけだ！

「ログハイムさん。あの時返せなかった言葉を、今更だけど返させてください」

俺は真つ直ぐに彼の顔を見つめ、誓いの言葉を口にする。

意識のない彼に、それでも届く事を信じて。

「必ずミレーナの記憶を取り戻して、もう一度彼女をここへ連れて来ます。だから……、それまで待っていてください！」

返事はない。それでも俺は構わない。

彼との誓いを果たす。それが俺に出来る、たった一つの事なんだから。

「やつ、止めてくれ！ これ以上あんたの事を追ったりしないから！ もう俺たちは戦えないんだ！」

地面に這い蹲はつくばって泣き言をほざく野郎の首筋に、俺は大鎌の刃を

突き付けた。それだけで眼の前の野郎は、「ヒッ！」なんて情けない声を出しやがった。

「随分身勝手な言い草だなア、オイ。意気揚々と俺に喧嘩売ってきやがったのはテメエらの方だろうがよオ？」

今俺の眼の前にいる連中は、俺の後を追ってきた『ギルド』の間だ。

大した腕も持ってねエくせに俺を捕縛するなんて抜かしやがってしかもたった三人だぞ？ 舐めてんのかって言いたくなるぜ。

現に他の二人は、俺が身体のおちこち斬り付けただけでギヤーンギヤーン喚いてあつさり気絶しやがった。これならまだ、あの紅髪あかがみの方が齒応えがあるってモンだ。

「悪イが俺は今イラついてんだ。大した事口に出来ねエんならさつさと気絶でもしやがれクソ野郎」

そう言つて俺が大鎌を動かそうとすると、男は慌てて口を開きやがった。

「まつ、待て！ あんたが知りたがってる情報を教える！ ある『英雄』の居所だ！ それで見逃してくれ！」

「！ あん？」

俺は思わずその言葉に聞き入った。余計な事ばつか口走る野郎かと思つたが、どうやらそうでもねエらしい。

「その『英雄』ってのは誰の事だ？ ノイエ・ガルバドアか？」

「い、いや、違う。『流衝魔法』ってのを操る、フォード・ヒースクライムって奴だ」

「！ ハアーン、なるほどなア。『魔法名』まで知ってるって事は、どうやら嘘じゃあねエようだ。で？ そいつはどこにいる？」

「あ、あんた、『パビリオン・オブ・グラマリー』って知ってるか？」

「……舐めてんのかテメエ？ 俺は仮にも『魔術師』だぞ？ 知らねエ訳ねエだろうがア！」

「ヒイツ！」

このクソ野郎の言う『パビリオン・オブ・グラマリー』ってのは、文字通り『魔術の館』って意味だ。本来は長つたらしい正式名称があるらしいが、大体の奴、特に『魔術師』どもは『魔術の館』と呼ぶ事が多い。

「『サランドロ』っつー街にある、文献なんかを集めた書庫だろ？  
それがどオしたア？」

「そ……、その『サランドロ』だよ。最近『ギルド』の中で噂になつてんだ。その街の近郊で『英雄』の一人を見掛けたつてな。仲間の情報だと、それがフォード・ヒースクライムって奴らしいんだ」  
俺が声を荒げた事にビビりながら、男はそんな事を言いやがった。チツ、よくこんな野郎が『ギルド』メンバーになれたモンだな。民間組織の人間つてのはこの程度のモンなのか？

それにしても、フォード・ヒースクライム、か。どいつもこいつも肝心のノイエの行方を知らねエとは難儀なモンだぜ。

ミレーナ・イアルフスにしたつてそうだ。結局肝心な事は何も聞き出せなかつた訳だしなア。

それにしてもあの女、少し様子がおかしかった。俺の質問に上の空だったかと思えば、いきなり攻撃を仕掛けてきたりしやがつて……。第一ああやって戦えるなら、何で最初から紅髪あかがみと協力して掛かつて来なかつた？ あの状況で戦う気が無かつたとしても言うつもりかよ？

……そついや、あの紅髪あかがみと一緒にいた女。余計な事してくれたぜ全くよオ。

何でよりもよつて。

「お、おい。もういいだろ？ あんたの知りたがつてた事は教えたんだからよ」

「あん？ ……ああ、そついやそつだつたな」

妙な方向に思考が逸れてた俺は、這い蹲る男を見下ろして言った。確かにこいつの言う通り、いつまでもこんなくだらねエ事してられねエな。

「悪かったなア。じゃあ望みどおり解放してやるよ」  
俺がそう告げた瞬間だった。

あからさまにホツとした顔をする男の首筋、大鎌の黒い刃の部分に、俺の『魔術』の力が集束していく。

眼に見える黒い光。それを眼にした途端、男の表情が固まる。

これが俺の見慣れた、恐怖の表情だ。

「おつ、おい！ 話が違うじゃねえか！ 俺の知ってる事は全部教えただぜ！？」

「俺は約束なんかした覚えはねエぞ？ テメエが勝手にベラベラ喋っただけじゃねエか」

「そ、そんな！」

「失せる」

瞬間、『漆黒の大鎌』ダーク・デスサイズから放った黒い衝撃波が、這い蹲っていた

男を軽々と吹き飛ばした。

激しい爆発で土煙が舞い上がり、俺の視界を埋め尽くす。

俺は大鎌を消滅させ、さっさとその場から歩き出した。男の生死なんてモンを、いちいち確認する気もねエしな。

しかし『パビリオン・オブ・グラマリー』か。『ギルド』で噂になつてゐる事は、その情報はいずれ正規軍の方にも届くだろう。

そうなるに護衛やら何やらがフォードの行方を追つて、『サランド口』に集まってくる事は間違いないエ。

まア軍人どもなんぞ簡単に捻り潰せるが、今回みたいに余計な真似されると面倒だからな。早めに動いた方がいいのは確かだ。

俺の本来の目的はノイエの野郎を殺す事だ。それ以外の事は、俺にとつてただの障害でしかねエ。

奴だけは殺す。

俺の手で必ず殺す。

……おつと。そついやアもう一人、俺の殺意の対象になる奴がいたなア。

「デイン・イアルフス、だっけか？ まア呼び方なんて紅髪あかがみで充



分だろ」

あいつは他の『魔術師』とは、ある意味一線を画す野郎だ。  
気に食わねエって所がなア！

「いずれテメエも殺してやるよ。精々その時まで無駄に生き延びて  
やがれ、紅髪<sup>あかがみ</sup>」

次の目的地は決まった。後はただ向かうだけだ。  
ノイエの野郎を探し出す、その手掛かりを掴む為に。

## 終章 三つの歩み

ジェイガの襲撃から一日が経った頃。

アジュール・ファウンテン

日の出と共に『紺碧の泉』から旅立った俺たちは、短い草の生えた草原を一步一步踏みしめながら歩いている。

その歩みは三つ。

俺とリネ、そしてミレーナだ。

昨日の夜、正規軍の人間に事情聴取を受けてから旅の支度を始めた俺に、ミレーナは改めて同行の意志を示してくれた。

彼女自身、色々思う所はあるだろうけど、それでも彼女は俺に言ってくれた。

私を守ってくれたログの為にも記憶を取り戻したい、と。

「ねえ、デーン。これからどうするつもりなの？」  
隣を歩いていたりネが、少し心配そうな顔で尋ねてくる。

俺は彼女を少しでも安心させようと、出来るだけ落ち着いた表情で自分の考えを口にする。

「とりあえずここから東。ジラータル大陸の東端にある港町、『サランドロ』に向かってみようと思う。そこにある、『魔術の館』へ行ってみたいんだ」

「『魔術の館』？」

「ああ。正式名称は『王立・歴代魔術文献管理書庫』って言うんだ。人によって『パビリオン・オブ・グラマリー』って言ったり、『魔術の館』って呼んだりするんだけど、そこにはこの大陸で起きた様々な出来事が文献として数多く残ってるんだ。もちろん大半が『魔術』に関する事んだけど、そこに『例の言葉』が載ってないかと思っただけ」

「『例の言葉』って、『デス・ベリアル』の事？」

首を傾げながらそう口にするリネに、俺は首を縦に振って答える。「記憶を失う直前、ミレーナはログハイムさんが歴史学者だって事

を知ってから、『デス・ベリアル』って言葉を口にした。って事はもしかしたら、『デス・ベリアル』は歴史に関係してる言葉なのかも知れない。確証なんて無いけど、今はそれに賭けてみようと思う。そう言っただけ俺は一旦立ち止まり、ゆっくりと背後を振り返った。傍らを歩いていたりネとミレーナも、それに倣うように振り返る。

紺碧色の泉を思わせる巨大な湖の上に浮かぶ、湖上都市。

観光地としても有名な、優雅な街並みを揃えていたその都市は、文字通り半壊という大きな爪痕を残している。

今回の結末は、決して幸福な結末なんかじゃなかった。

俺はこの街で大切なものを失った。

それはミレーナの記憶と、彼女を守ってくれたログハイムさんという存在。

どちらも大切に、何としてでも俺が守らなきゃいけなかったはずのものだ。

失ったものは大きい。

けどまだ、全てが終わった訳じゃない。

俺には果たすべき誓いが出来た。

もう手遅れだとしても、それは俺が絶対に成し遂げなきゃいけない事なんだ。

だから俺は進む。自分の進むべき道を。

俺は再び前を向き、リネ、ミレーナと共に歩き始める。

次なる目的地は『サランドロ』。

大切なものを取り戻す為の手掛かりは、『デス・ベリアル』！

## 終章 三つの歩み（後書き）

という訳で、『紺碧の泉編』終了です。

いかがだったでしょう？

前二編に比べ一章少なく、また内容も作者的には一番辛い終わり方だったかな、という気がしています。

それに今回は、色々伏線が多い回でした。

ジエイガがノイエを狙う理由とは？

なぜジエイガはリネを知っているようだったのか？

一体ミレーナの身に何が起きているのか？

そして『デス・ベリアル』とは何なのか？

読者の皆さまそれぞれ思う事はあるでしょうが、これらはいずれ明らかにするつもりです。

さあ、作者も次の章書くのが楽しみになってきましたよ！（笑）

それではまた次のお話で！ノシ

## 各章登場キャラクター集？（前書き）

タイトル通り、キャラクターの紹介ページです。  
著休め的なものだとお考えください。

話が進んで登場人物が増えてきたので、ここらでちょっと整理しようかと思って作ってみました。  
ちなみに名前だけしか出ていないキャラは載っていませんので悪しからず。

それと、出来れば先に本編を読んでからこれを見た方が、ネタバレがなくて助かると思います（笑）

## 各章登場キャラクター集？

テルノアリス編 登場人物

デイン・イアルフス

言わずと知れた主人公。炎のように紅い髪が特徴の十六歳の少年。その目立つ髪のせいか、トラブルに巻き込まれやすい。普段は冷たい印象だが、実はかなりの熱血漢。『倒王戦争』の際に両親を失っており、戦争孤児だった所をミレーナに拾われ、育てられた。彼女に教えられた『深紅魔法』を使う炎の魔術師。

リネ・レディア

銃使いである黒髪の少女。歳はデインと同じ。性格は明るく人懐っこい、好奇心旺盛で何でも知りたがる、など歳の割に子供っぽい言動が目立つ（本人にも多少自覚あり）。『倒王戦争』時代に滅ぼされた一族『妖魔』の生き残りで、存在しないとされているはずの『治癒魔法』を使う事が出来る。

ジン・ハートラー

銀色の髪をした、『ギルド』に所属している二刀流の剣士。歳は十八歳。沈着冷静だが、デインと違って無愛想ではない。デインとは以前、『ギルド』関連の仕事を通じて知り合っているので、彼の過去や師匠の事など色々知っている。二本の剣を所持しており、それぞれ『白滅剣』はくめつけんと『黒裂剣』こくれつけんという名がある。

## アーベント・デibelグ

『倒王戦争』のきっかけを作った『魔王』の側に付いていた人物。『倒王戦争』を経験しており、また数少ない生き残りでもある。その為、ミレーナとは戦場で何度か顔を合わせている。彼自身に『魔術』の素質は無いが、『印術』や『導力石』を利用した鎧を使って戦う。テルノアリス編の最後で自爆し、自殺した。

## エリーゼ・スフィリア

銀色のベールを纏った、不思議な雰囲気のある女性。テルノアリスで占い師をしている、ジンの古くからの友人。その占いの的中率はかなり高く、王族の間でも占ってもらおうとする者が後を絶たない程である。

## ハルク・ウエストイン

若竹色の長い髪を後ろでまとめ、眼鏡を掛けた青年。その見た眼からはあまり想像出来ないが、テルノアリスにおいて、現政権の運営をしている元老院の一人であり有名な貴族。ジンとは以前から交流があり、仕事や任務の依頼を頼んだりする事が多い。

## 魔女の森編 登場人物

### シャルミナ・ファルメ

牡丹色の長髪をした17歳の少女。ゴルムダル大森林の奥地に残る遺跡を守る役目を背負った、『風守り』の一族の生き残りであり

『魔術師』。使用魔法は『烈風魔法』。近郊の街の人間には『魔女』と恐れられており、その地域に残る『魔女伝説』の『魔女』と同一視されている。だが実際は遺跡を守っていただけで、人を殺してはいない。外の世界に憧れを抱いており、森林地帯を離れたいと思っている。

#### レイミー・リゼルブ

天色のポニーテールが特徴的な女性。ジグランと行動を共にするトレジャー・ハンター。三つに折り畳める薙刀が武器。ゴルムダル大森林のどこかにあるとされる遺跡を探し、ジグランと共に何度も森林地帯に足を踏み入れている。冷静に物事を判断出来る女性で、暴走しがちなジグランを宥める役である。

#### ジグラン・グラニード

癖のある胡桃色の髪をした青年。レイミーと行動を共にするトレジャー・ハンター。両手に鋼鉄の籠手を装備し、体術を使って戦う。その実力はかなりのもので、『獣化』した大勢の村人と、一人で互角に渡り合う程。ディーンのことを『紅髪』と呼ぶ。

#### ダンテ・ヒーリム

ゴルムダル大森林の奥地にある集落の村長。ディーンとリネが村を訪れる三カ月程前から、村人が獣化して旅人を襲っている事に気付いていたが、自身ではどうする事も出来ず悩んでいた。

#### リシド・ベイワーク

ゴルムダル大森林で旅人を獣化した村人に襲わされていた張本人。



『闇属性』の『魔術』である『従魂魔法』を行使し、獣の魂を人間に憑依させて操る事得意とする。人間を操る人体実験を行なう為『魔女伝説』とシャルミナの存在を隠れ蓑に使っていた。物語の終盤で、自身の『魔術』が暴走を起こし絶命する。

## 紺碧の泉編 登場人物

### ミレーナ・イアルフス

腰の辺りまである長い金髪に金眼の女性。ディーンディーンの育ての親であり、『魔術』の師匠でもある。『倒王戦争』の際、『反旗軍』の中核メンバーだった『魔術師』の一人。ゆえにファーストネームを聞けば大抵の者が知っている程の有名人。ディーンと同じく『深紅魔法』を得意としているが、現在は記憶喪失になっている。物語の始まる一年前に、突然ディーンの前から姿を消した。

### ログハイム・ベスカ

短く整えた黒髪に、楕円形の眼鏡を掛けた歴史学者。現在三十五歳。ミレーナが記憶喪失になる前、『紺碧の泉』アジュール・ファウンテンで出会っていた人物。三年前に妻を亡くしており、記憶を失ったミレーナに妻の影を重ねて、彼女を保護していた。『死を齎す悪魔』デス・ベリアルという謎の言葉を、記憶を失う前のミレーナから聞いている。

### ジェイガ・デイグラッド

蛇のような鋭い目付きが特徴的な、青紫の髪の少年。『英雄』の一人であるノイエ・ガルバドアから、『黒煉魔法』を受け継いだ。

魔術師』。自身の師匠であるノイ工の行方を追って、他の『英雄』  
たちから居所を聞き出そうとしていた。ある理由から、ノイ工を含  
めた全ての『魔術師』を憎んでいる。

## 序章 銀の追跡者（前書き）

お待たせしました、新章『鉱山都市編』スタートです！

では例の如くあらすじを。

ミレーナの記憶を取り戻す手掛かりを求め、『サランドロ』を目指すデイーンたち。ところが人数が増えた事もあり、徐々に旅の資金が不足し始めていた。

資金問題を解決する為に立ち寄ったとある街の『ギルド』で、デイーンはある人物と不運な再会を果たす。

そして結果的に、その人物と共に引き受ける事になった仕事。

それは、『導力石』採掘場の警備だった。

## 序章 銀の追跡者

俺が辿り着いた時には、すでに手遅れだった。

ジェイガ・ディグラッドなる人物が『英雄』たちの命を狙っている。

ハルク様からの受けた情報をディーンに知らせようと先を急いだのだが、どうやら俺は一足遅かったらしい。

観光地として有名な湖上都市『紺碧の泉』アジュール・ファウンテンは、その優美さを様変わりさせる程破壊され尽くしていた。

何があつたのかは容易に想像出来る。

己の師匠、ミレーナ・イアルフスの行方を追つて、俺の友人、ディーン・イアルフスはこの街を訪れていたはずだ。

あいつがもし、この街でミレーナ・イアルフスと合流し、その際にジェイガ・ディグラッドと遭遇したのだとしたら。言うまでもなくあいつは、ミレーナの身を守ろうと戦つたはずだ。

そして街のこの現状。

勝つたにせよ負けたにせよ、ここであいつが激しい戦闘を行なつたのは確かだろう。

全く、どうしてあいつはこうもトラブルに巻き込まれやすいんだ？ あいつの行く先々には必ずと言っていい程、大なり小なり破壊の痕跡が残る。何か良くないものにもとり憑かれてるとしか思えないぞ……。

いやそんな事より、とにかく今は情報を集めるのが先だ。

ディーンとリネの行方。

そして、ジェイガ・ディグラッドの所在。

あいつらが今危険な眼に遭っていると言つのなら、手を貸してやるのが俺の役目だ。

「『ギルド』所属ナンバー〇六四、ジン・ハートラーだ。元老院ハルク・ウエストイン様からの命で、ジェイガ・ディグラッドと言う『魔術師』の足取りを追っている。ここで何があったのか教えてくれないか？」

俺は半壊した街の中に足を踏み入れ、事後処理に当たっている『ギルド』の人間に声を掛けた。

男に、表面に剣と槍と斧が交差した金の装飾がされたバッジを差し出す。『ギルド』で支給されている、ギルドメンバーである事を証明する為の物だ。

男はそれを確認すると、『ギルド』特有の敬礼をしてから口を開いた。

「あんた、元老院からの直々の命で動いてるのか？」

「ああ、そうだ」

「へえ。だったらここに来たのは正解だ。ここを襲った犯人は、どうやらそのジェイガ・ディグラッドって奴に間違いないらしいぜ？俺はその時現場にいた訳じゃないからわからないが、手配書で見た容姿と仲間が口にした容姿が一緒だったからな」

やはりそうか……。

俺は内心で納得しつつ、男からさらに情報を聞き出す事に専念する。

「街が破壊された事以外に、被害は？」

「ああ、確か民間人に一人被害が出てたな。名前はログハイム・ベス力。事情聴取したかったんだが、生憎その人は昏睡状態に陥ってる」

「何……？」

会話の端に不穏な気配が漂う。俺は眼の前の男の言葉により耳を傾けた。

「どうもその、ジェイガって奴に襲われたのが原因らしくてな。一緒に連れ立ってた紅い髪の少年が、そう証言してくれたよ」

「！ 紅い髪の少年だって？」

「ああ。炎みたいな紅い髪をした十代中頃の少年だよ。確か名前はデインって言ったな。もしかして知り合いか？」

「ああ、恐らくな」

これで間違いない。デインはここでジェイガと遭遇して、戦ったんだ！

自分の考えが正しかった事を再確認しながら、俺はふと街の風景を眺めた。

石畳の道も、通りの商店も、これ以上ない程に破壊され尽くしている。今は正規軍や『ギルド』の人間の手によってある程度片付けられ、家を破壊された者たちの為に仮設テントなども設置されているが、それでも街に残った爪痕は大きい。

一体どれだけの規模の戦闘がここで行なわれたんだ？ 『テルノアリス』の時でさえ、ここまで酷い事にはならなかっただろうに……。

これこそが、『魔術師』の成せる仕業という事か。

「それにしても肝の据わってる奴だったぜ。最近噂になってる『炎を操る者』と、容姿もそっくりだったしなあ」

男はどこか感心した様子で何度も頷きながら言う。俺はその言葉の、ある一点が引つ掛かった。

「『炎を操る者』？ 何の事だそれは？」

「あれ？ 知らないのか？ ここ最近噂になってんだよ。『テルノアリス襲撃事件』の時に人知れず活躍した、『炎を操る者』って呼ばれる紅い髪の『魔術師』がいる、ってな」

「……！」

噂だと？ しかも妙な『通り名』を付けられてるものだな、あいつも。

しかしやはり、ある程度噂にはなってしまうか。

あの事件の後、関係者以外にはあいつの事を話さなかったはずなんだが……。あの時は民間人も大勢いた訳だから、その中の誰かがこういう噂を流したとしても可笑しくはない。人の口に戸は立てら

れない、という事だな。

さて、こうなるとあいつの足取りが気になる所だな。

「すまない。その少年は、これからの行き先について何か言っ  
てなかったか？ もし俺の知り合いだとしたら、そいつは旅をしてるは  
ずなんだ」

「ん？ ああ、そういえば、調べたい事があるから『サランドロ』  
に行くと言ってたな。どうやらそこにある、『王立・歴代魔術文献  
管理書庫』に用があるらしい」

「！ 『魔術の館』か！」

あいつがそこに向かったというなら、恐らくミレーナ・イアルフ  
スに關係する事だろう。

何が起きているのかはわからないが、俺もそこに向かってみるか。  
ジェイガの事が無かったとしても、あいつの力にはなってやりたい  
からな。

俺は男に礼を言い、『アジュール・フアウンティン紺碧の泉』を後にした。

俺の足取りに迷いはない。

ジェイガ・ディグラッドがディーンと遭遇したのなら、尚更放っ  
ておく訳にはいかない。

行き先は『サランドロ』。

俺は自分自身の意志で、そこへと向かう道を進む。

今尚、何かしらの騒動の中心にいるであろう紅い髪の少年と、再  
会する為に。

## 序章 銀の追跡者（後書き）

新章の序章なのにジンくんの話……。

第一章にはディーンくんたちが出ますからご安心を！（笑）



## 第一章 邂逅（前書き）

大変遅くなりました！

今回は第一章と第二章、同時掲載です！

## 第一章 邂逅

窓の外を流れていく緑の木々や草原を見つめながら、俺は窓辺に頬杖を突いていた。

俺は……いや、俺たちは今、三人で旅をしている。

首筋の辺りまで伸びた艶のある黒髪が特徴的な少女、リネ・レデイア。

腰の辺りまである長い金髪に、知的さを備えた金色の瞳を持つ女性、ミレーナ・イアルフス。

この二人が、俺の旅の同行者だ。

ちなみに唯一の男である俺の外見的特徴は、炎のように紅い髪。これまた余談だが、俺はこの髪の色が気に入ってなかったりする。

男一人に女二人。傍から見ればなんてハーレム状態な旅なんだと思われるかも知れないが、残念ながらそんな色気のあるモンじゃない。……いや、だからって別に残念がつてる訳じゃねえけど。

数日前に湖上都市『紺碧の泉』アジュール・ファウンテンを後にした俺たちは、現在『ラノツト』と言う街から列車に乗って移動している最中だ。

行き先はジラータル大陸最東端の港町、『サランドロ』。

なぜ俺たちがそこに向かっているかと言うと、それには結構切迫した理由がある。

それは旅の同行者、ミレーナに関わる事だ。

彼女は『本来』なら、『魔術師』である俺の師匠であり、同時に戦争孤児だった俺を育ててくれた義理の親でもあり、このジラータル大陸の歴史を変えた、『英雄』と呼ばれる『魔術師』でもある人だ。

だが彼女は今、それらの事実を一切忘れてしまっている。

なぜならそう、彼女は記憶喪失になっているんだ。

一年程前のある日、彼女は一緒に暮らしていた俺の前から突然何も言わずに姿を消し、先日俺とリネが訪れた『紺碧の泉』アジュール・ファウンテンで再会した時には、すでに記憶を失った状態だった。

原因はわからない。彼女の身に何かがあった事は確かだけど、それを俺が知る術はなかった。

だけど、彼女の記憶に関して手掛かりが一つだけある。

『デス・ベリアル』。

記憶を失う直前、ミレーナがある人に尋ねたその謎の言葉が、彼女の記憶喪失に関わっているんじゃないかと俺は考えた。

しかもその言葉は、歴史に関係している可能性がある。

その真偽を確かめる為、俺は『サランドロ』にある、通称『魔術の館』とも呼ばれる『王立・歴代魔術文献管理書庫』を直指そうと決めた。

その書庫には、この大陸で起きた歴史や『魔術』に関する出来事が、膨大な量の書物となって保管されている。その中にもしかしたら、『デス・ベリアル』という記述があるかも知れない。

俺がその答えにまで辿り着けたのは、そこへ向かうヒントをくれた人がいたからだ。その人は、記憶を失ったミレーナを一カ月もの間保護してくれた、俺にとっても恩人と呼べる人だ。

ログハイム・ベスカ。

彼は今ある理由から、『紺碧の泉』アジュール・ファウンテンで昏睡状態に陥っている。

その理由とは、ある『魔術師』の存在。

ジェイガ・ディグラッド。

とある『英雄』の弟子だと名乗るその男の手によって、ログハイムさんはあんな状態になってしまった。

あのジェイガと言う『魔術師』に関しても、色々と謎が残っているのは確かだ。

だけどそんな事、今はどうでもいい。

結果的に、俺はジェイガの魔の手からログハイムさんを守る事が出来なかった。彼はその身を呈<sup>て</sup>して、記憶を失ったミレーナを守ってくれたというのに。

だからせめて、彼との約束を果たす為にも、俺は必ずミレーナの記憶を取り戻さなきゃいけない。その為にはまず『サランドロ』へ向かう事が、何よりも優先されなきゃいけない事なんだ。

それなのに。

「何でこんな時に資金不足に陥るんだよ……」

俺は独り言を呟いて、ハアツと溜め息をついた。

そう。我ながら情けない限りだが、旅をする上で必要不可欠な物である『資金』が底を突き掛けているんだ。

別に贅沢してたつもりはない。

一人旅をしていた時はある程度何とかなっていたけど、最近になって急に旅の同行者が増えたからな。多分その辺りが一番の原因なんだと思う。

そんな事情から『サランドロ』までの切符代を用意出来なかった俺たちは今、『サランドロ』の五つ程手前の駅、『ワーズナル』と言う街に向かっている。

この列車に乗っているのだから、金銭的には結構ヤバイ。

最近は『ゴレム』狩りもやってなかったし、『ギルド』で換金する為に使う『導力石』のストックもない。

幸か不幸か、次の街『ワーズナル』には『ギルド』があるらしい。現状の資金不足を解消する為には、そこで手頃な仕事を見つけて金を稼ぐしかないって訳だ。状況が状況だけに、今回はかりは『ギルド』に近付きたくないなんて言ったらねえしなあ……。

「ねえ、デイン。写真見せて」

「は？」

外の景色をボーッと眺めながらあれこれ思案していた俺は、そんな呑気な声で我に返った。

客車の一角。片側に二人座れる座席が、向かい合って配置されて

いる車両内。その片側に一人で陣取っていた俺が正面を見ると、妙にニコニコした顔のリネがこっちを見ながら右手を差し出している。「……何の話だ？」

「あれ？ 今の話聞いてなかったの？ ホラ、デインがいつつも持つてるあの昔の写真。今その写真の事を話したら、ミレーナさんが見てみたといって言ったの。だから見せてほしいなあ〜と思って」「まあ、別にいいけど……」

何でそんな嬉しそうに頼んでくるんだよ？ 相変わらず行動の意図が読めない奴だな。

リネに催促され、俺は自分の服の内ポケットを探る。

俺が普段から持ち歩いている、十年程前にミレーナと一緒に撮った一枚の写真。

もう宝物と言ってもいいくらいの物だからだろうか？ 今みたいに見せると言われると、少し抵抗したい気持ちになる。

すると、リネと同じく俺の向かい側に座っているミレーナが、申し訳なそうに苦笑した。

「ごめんなさいね。あなたと暮らしてた頃の私はどんな風だったのかなって、何だか急に気になっちゃって」

「いや、気にしなくていい。ミレーナを探してた時にも、散々色々な奴に見せたからな」

俺は内ポケットから写真を抜き取り、それをリネに渡す。

リネは写真を受け取ると、ミレーナと身体を寄せ合って写真を覗き込んだ。

「相変わらず可愛いよね、この時のデインって」

「うるせえよ。悪かったな」

俺が冷たくそう言うと、リネは写真から視線を外して不満そうな顔で俺を見つめてくる。

「もう、またそういう言い方する〜。別に悪いなんて言っていないでしょ？」

「お前に言われると嫌味にしか聞こえねえんだよ」

「……何て言うか、ディーンっていつつもそうだよねえ。あたしに  
対しては冷たくて無愛想でケンカ腰で取り付く島が無くて」

「すみませんねえ。どうにも子供の相手をするのが苦手なモンで」

「もう！ ディーンのパカ！」

そう言ってリネは頬をプクツと膨らませる。だからそういう所が  
子供だつってんだよ。

軽く溜め息をついてからミレーナの方を見ると、彼女は軽く微笑  
みを湛えた顔でジーツと写真を眺めている。

「どうかしたのか、ミレーナ？」

俺が尋ねると、ミレーナはハツとしたように顔を上げて言う。

「いえ、何でもないわ。ただ、幸せそうな顔をして写ってるなあ  
と思っつてね」

確かに彼女の言う通り、写真の中に写る俺たちは憂いなんてもの  
とは無縁の、幸せそうで楽しそうな笑顔をしている。

多分あの頃のミレーナは、本当に幸せだったんだろう。実際に俺  
もそうだったしな。

「……ミレーナ？」

少し曇りがちな彼女の表情が気になり、俺は再度声を掛けた。

するとミレーナは、まるで声を出す事を躊躇っているかのよう  
に、ゆっくりと口を開く。

「やっぱり覚えていないって事は辛い事ね。生きているのに思い出  
を共有出来ないなんて、これ以上悲しい事があるのかしら？」

両手で持った写真を悲しそうに見つめた後、ミレーナは軽く眼を  
伏せる。

彼女のそんな姿を目の当たりにして、俺は何も言えなくなった。

やっぱり彼女自身、記憶がない事に心苦しさを感じているんだろう。  
ふと気付くと、傍らのリネもさっきまでとは打って変わって辛そ  
うな表情をしている。普段の子供っぽい雰囲気はない。こういう時、  
リネは一番敏感にその場の空気を察知するんだよな。

そんな彼女たちを見て俺は考える。

今、俺がすべき事は何なのかを。

「大く丈夫だつて。ミレーナの記憶は、何が何でも俺が取り戻す。これはその為の旅なんだからな」

俺は暗い雰囲気を打ち消す為、敢えて笑って彼女たちに言う。例え安請け合いの言葉だとしても、暗い気分のまま旅を続けるなんて俺には出来そうもない。

「……ええ、そうね。ありがとう」

思いが上手く伝わったのか、ミレーナはそう言って軽く微笑むと、写真を大事そうに握った。

するとそれを見つめた後、隣のリネが俺に尋ねてくる。その顔にはもう、さっきまでの憂いの表情はなくなっていた。

「でも今、あたしたちって『サランドロ』に向かつてる訳じゃないんでしょ？ これからどうするつもりなの？」

急に現実的な話に戻されて、俺は内心でギクツとなる。結構痛い所突いてくるよな、お前。

リネに対する文句を口には出さず、俺は当面の目的を提案する。

「とりあえず、今は旅の資金を調達するのが先決だ。だから次の駅、『ワーズナル』って所で降りて、『ギルド』を探そうと思う。そこで適当な仕事見つけて俺が金を稼ぐから、リネとミレーナは街に着いたら宿を探してゆっくりしてくれ。金が少ないって言っても、まだ宿代くらいは払えるからな」

「そんな……。デインだけに押し付けるなんて出来ないよ。あたしも手伝う！」

「リネさんの言う通りだわ。私にも協力させて。デインくんだけにやらせる訳にはいかないもの」

「いやまあ、気持ちは有り難いけど……」

結構なやる気を見せてくれる二人を前に、俺は少々言い淀む。

報酬の高い安いに拘わらず、『ギルド』で引き受ける仕事は危険なものが多い。俺一人が仕事を請け負うなら全く問題ないんだが、三人一緒となると話は別だ。

正直な所、俺は二人に危ない真似をさせたくない。特に、今のミネーナには。

だけど、眼の前の二人には退くつもりが無いようだ。今もやる気満々って感じの眼で俺を見てるし。

どうしようかと逡巡していると車窓越しに次の駅、『ワーズナル』の街並みが見えてきた。

それを確認してから正面の座席に視線を戻すと、二人は真剣な表情で俺の返答を待っていた。……… ったく、こっちの気も知らねえで

「……… 仕方ない。とにかく三人で『ギルド』に行くか」

俺が渋々そう言つと、リネとミネーナはほとんど同時に笑って頷いた。

列車は間もなく、『ワーズナル』に停車する。

駅に停車した列車から降りた俺たちは、整備された石畳のホームを歩き、改札口まで辿り着いた。

すると石畳の地面が続く改札から出てすぐの所に、鉄製の二本の柱がアーチ状の看板を支えるように設置されていて、看板の部分にはこう書かれている。

『Welcome to Wirznull mining town!』

何だか観光都市の入口とかに飾られてそんな歓迎の言葉だな。文字が金色って所にも、歓迎の度合いが強そうな気配が漂ってるし……。

「鉾山都市『ワーズナル』へようこそ、だって。ディーン、この街



の事何か知ってる？」

俺と同じように、三メートル程頭上にある看板を見上げていたり  
ネが、頭に疑問符が浮かんでいるような顔で尋ねてくる。

って言うか、そんな事に聞かれても知ってる訳ねえだろ？ こ  
の街に来るのは初めてなんだから、っていや待て。鉾山都市？  
不意に頭の隅に思い当たる知識が浮かび、俺は無意識の内に声に  
出して説明する。

「ああ、そういえばどっかで聞いた事があったな。確か街の近郊に、  
正規軍が管理してる『導力石』の採掘場があるって」

「へえ〜。 あっ！ あれの事かな？」

俺の言葉を聞いて辺りを見回していたリネが、何かを見つけて遠  
くの方を指差した。

その方向に視線を向けてみると、確かに街並みから少し外れた東  
の方角に、山が一つだけポツンと屹立しているのが見える。あれが  
『導力石』の採掘場になってる山なんだろうか？

「じゃあここは、『導力石』の採掘を商業にしてる街なのかしら？  
だとしたら『導力石』を管理してる正規軍の詰所も、どこかにあ  
るはずよね？」

俺とリネの横で、ミレーナが考え込むようにして呟く。そんな彼  
女に視線を向けられ、俺は首を縦に振って頷いた。

「ああ。鉾山都市って銘打ってるぐらいなんだから、多分そうなん  
だろ。それにもしかしたら、街全体の運営を軍が行なってる所なの  
かも知れねえな」

俺たちはアーチ状の看板の下を通り抜け、街の中へと足を踏み入  
れた。

街の様子を見る限り、『アジュール・ファウンテン紺碧の泉』のような観光中心の街じゃな  
いらしい。通りに面している建物は、ほとんどが宿屋や酒場、食堂  
なんかで埋め尽くされていて、とても観光客を呼び寄せようとして  
いる風には見えない。どっちかと言うと、鉾山で働いていた人間が  
休憩や仕事終わりに立ち寄る街、と言った方が正しい気がする。

「まあ、街の雰囲気なんてこの際どうでもいい。とにかく今は、『ギルド』に寄って資金調達だ」

俺が先に歩き出すと、リネとミレーナもその後についてくる。やっぱり手伝う気満々らしい。

そして五分程歩いた頃。

俺は通りの右手に、周りの宿屋や酒場より少し小さめの建物を見つけた。予想通りその建物の上部には、『GUIDE』の看板が設置されている。

灰色をした石造りの建物。一階建てで、扉の無い長方形型の入口。まるで洞窟の穴のようにぽっかりと開いた入口を潜り、俺たちは静かに中に入る。

するとそこには、拍子抜けする景色があった。

奥行きが六、七メートル程の正方形に区切られた部屋の奥に、仕事の請け負いや『導力石』の換金所となるカウンターがあるだけで、他には眼につく物が一切ない。チームで仕事の内容を相談する時に使う椅子やテーブルといった物がなく、また人の数も随分疎<sup>まば</sup>らだ。俺たち三人を除いても数人しかない。

今までに何度か見る機会があった『ギルド』の内装と違い、何と云うか酷く寂れている印象を受ける。

「何だよ。もつと活気があるのかと思ってたけど、そうでもないのか？」

「ホントだ。前に寄った『ディケット』の街の『ギルド』は、もつと賑やかだったよな」

ボソツと呟いたつもりだったのに、俺の隣にいたリネがそんな風に付け足す。

まあ活気なんてあってもなくても関係ない。要はここには金を稼ぎに来ただけなんだからな。

俺たちは店の奥のカウンターへと近付き、何かの資料らしき物に目を通している男に声を掛けようとした。

するとその時。

「おいおい。見覚えのある紅い髪だと思ったらやっぱりだ。久しぶりだなあ、デイン・イアルフスくんよお」

「……？」

背後からそんな言葉が聴こえて、俺はまず疑問を感じ、そして不思議に思いながら振り返った。そこで俺は自分の身体がガチッと硬直するのを感じた。

入口の辺りに立ってニヤニヤと笑いながらこつちを見ている、二十代中頃の茶髪の男。

俺はその人物に心当たりがあった。左耳に、逆さになった三角錐型のピアスを付けているという若干の変更点さえあるものの、茶髪の男と俺は顔見知りだ。

そいつは出来れば出会いたくない人物で、俺が『ギルド』に極力近寄らないようにしている原因になった男。

この男の名前は。

「アルフレッド・ダグラス……」

「ハン、意外だな。お前は俺の事なんてすっかり忘れてるもんだと思ってたんだが……、フルネームで覚えてくれてたなんて光栄な事だぜ」

アルフレッドのニヤニヤした顔を見ればわかる。そんな事、これっぽっちも思っていないなんて事は。

やっぱりまだ『あの時の事』を根に持つてるって訳か。ま、当然って言えば当然だ。

「ねえ、デイン。あの人、知り合いなの？」

俺の内心なんて知るはずもないリネが、不思議そうに尋ねてくる。だが彼女も、アルフレッドの言動に無意識に警戒しているんだろう。いつもより声のトーンが若干小さい。

「ああ、一応な」

俺がリネにそう返事を返すと、アルフレッドが「ククッ」と笑い

ながらこつちに歩み寄ってきた。

「知り合い？ ハン、そんな生温いもんじゃねえだろ？ 俺たちは互いに相手の事を気に食わねえと思いつてる仲だ。今こうして普通に会話出来る事が不思議なぐらいだぜ。なあ？ 優秀な『魔術師』さんよお？」

「別に。俺は気に食わないなんて思ってたねえ」

「見え透いた嘘つくなよ。お前は背後からいきなり、俺に炎をぶつけてきた張本人なんだぜ？ 俺の事を何とも思ってたねえ奴がそんな事する訳ねえだろ」

「！ えっ……？」

ニヤニヤと笑いながら話すアルフレッドの言葉に、リネとミレーナがほとんど同時に反応し、俺の方に視線を投げた。

全く……、こいつは相変わらず、人の神経を逆撫でするのが上手い奴だ。自分にとって都合のいい部分だけを切り抜いて話しやがって……。

とはいえ今のアルフレッドの言葉に、嘘がある訳じゃない。

以前俺は、とある『ギルド』において引き受けた仕事で、こいつとチームを組んだ事がある。

その仕事内容は、『ゴーレム討伐作戦』。詳しく話すと長くなるが、俺がジンの奴と知り合うきっかけにもなった作戦だ。

その作戦の際、確かに俺は、アルフレッドの無防備な背中に向けて炎の一撃を放った。

ただそれにはちゃんとした理由がある。

当然だ。ミレーナとの約束を重んじる俺は、『魔術』を無闇矢鱈に使ったりはしないんだから。

「あなたの方こそよく覚えてんな。あなたの名前は辛うじて覚えてたけど、そんな事はとつくに忘れてたぜ」

「……！」

嫌味のつもりで返した言葉で、明らかにアルフレッドの眼付きが変わった。

獲物を射殺すような、鋭い眼付き。

「どうやら俺の挑発は思っていた以上に効力を発揮したらしい。アルフレッドはニヤニヤとした笑みを消し、その瞳で真つ正面から俺を睨んでくる。」

「それにしてもいい御身分だな。女二人引き連れて仲良く『ギルド』にお散歩か？ 人を小馬鹿にした態度は相変わらずだ。」

「……あんたには関係ねえ。ここへは仕事を探しに来ただけだ。」

「ハン！ 女引き連れて仕事探したあ？ ハハハッ！ 女の連れがないと仕事の一つも探せねえってか？ 少し見ねえ間に随分か弱くなったもんだな、デインくん？」

「……あ？」

本当に、自分でもなんて馬鹿な真似をしてるんだろって思う。こつちから挑発しといて自分が挑発され返してたら世話ないって事もわかってる。

「だけど、残念ながら俺も我慢強いタイプの間じゃない。売られた喧嘩は買ってやる！」

「いいぜ。そこまで言うなら証明してやろうじゃねえか。今ここで仕事を引き受けて、それを俺一人で終わらせてやる！ 口ばっかで無能なあんたは黙って見てろ！」

「ッ！ 上等だ！ ただしその仕事には俺も参加させてもらう！ お前のヘタレっぷりをこの眼で見なきゃいけねえからな！」

俺はアルフレッドと間近で睨み合った後、ポカンとした顔で経緯を眺めていたカウンターの方の男の方に振り向いて叫んだ。

「今すぐに引き受けられる仕事は何だ！？」

「気付くと俺とアルフレッドは、全く同じセリフを同時に叫んでいた。」

カウンターの男は、苦笑いをしたまま資料を集め始める。

張り詰めたような空気の中、妙な展開で資金稼ぎが始まるうとしていた。



## 第二章 罫に落ちた少年

俺とアルフレッドが引き受けた仕事。

それは、『導力石』採掘場の警備兼護衛というものだった。

『ワーズナル』から東に二キロメートル程進んだ所にある『グレッグス鉱山』。そこが『導力石』の採掘場になっているらしい。

『ギルド』で受けた説明によると、どうやら最近、その採掘場の周辺で怪しい人物たちが頻繁に目撃されているそうだ。

この件は正規軍からの依頼という、非常に珍しいケースの仕事だった。

『導力石』。

ジラータル大陸の一部の地域で採掘する事が出来る、不思議な波動を生み出す鉱石。その用途は数多く、俺たち『魔術師』が『魔術』において使用する事もあれば、大陸内を走る列車、或いは船や飛行船といった移動手段に使う乗り物の動力、さらには夜の街を照らす街灯など、本当に多岐に渡る。

なぜこんな力を持った石が存在するのかという謎は、『倒王暦』以前から学者たちの間で研究が進められているらしいが、未だに答えが見つかっていない。

俺たち『魔術師』の間では、『精霊』が創り出している物だ、なんて説が出回ってたりもする。

が、『精霊』の存在をうやむやに考えている、自称異端の『魔術師』であるこの俺・デイン・イアルフスは、もちろんそんな説を信じたりはしていない。

いつの日かきつと、お偉い学者さんたちが謎を解明してくれるんだろう。とか、そんな風に考えている。

まあ話は逸れたが、とにかくその不思議な力を有している『導力石』は、その特異さゆえに色々な連中に狙われている。

例えば、不法な取引を行なう為。

またはいつぞやの首都を狙ったテロリストのように、特殊な武器を製造するのに利用する為。

今のご時世、本当に色々な連中が正規軍の管理場所から『導力石』を奪い取るうとする。しかもどれだけ捕まえても盗もうとする奴は後を絶たない。

恐らく今回の仕事も、そういう奴らが関わってる事なんだろう。

まあ盗みに入らなくても、その辺にいる『ゴーレム』を倒す事が出来れば、誰でも『導力石』を手に入れる事は出来る。

だけど『ゴーレム』退治ってものは、口で言う程簡単なものじゃない。あんな巨大な鉄の塊を相手にしていれば、常に大きな危険が伴う事になるのは自明の理だ。

その点採掘場を狙っていけば、軍に捕まる可能性こそあるものの、『ゴーレム』を相手にするよりは格段に危険度が下がる。そういう理由があるからこそ、盗もうとする奴が後を絶たない訳だ。

とは言ってもなあ……。どれだけ不思議な力を持ってようと、所詮はただの石ころなんだぜ？ 高が石に振り回されてるって思うと、何だか虚しくなってくるのは俺だけなのか？

と、そんな事を考えている時だった。

「呑気に考え事か？ 随分余裕だな『魔術師』さんよお」  
「……………」

思考していた俺は、そんな耳障りな台詞で一旦我に返った。

だいぶ目前に近付いて来た『グレッグス鉱山』を見つめながら、俺とアルフレッドは二メートル程の距離を開けて、『ワーズナル』から続く荒野の道を歩いている。

現在、太陽は一番高い空へと昇りつつある時間帯だ。

『ギルド』での経緯から、リネとミレーナは『ワーズナル』でお留守番である。今頃宿でも見つけてのんびりしている頃だろうか？

まあとりあえず、ムカつくピアス野郎の戯言は適当に聞き流して



おこうと思ひ、俺は目的地向けて歩調を速めた。

全く、成り行きとはいえこいつと一緒に仕事をする羽目になるなんて最悪の展開だ。……って感じで、多分向こうも同じ事思ってるんだろうけど。

そんな事を考えながら歩調を速めていた俺は、ふとある事を思い付いた。

そういえばこいつは、『ワーズナル』に何をしに来ていたんだろう？ たまたま通り掛かったとかそういう理由なんだろうか？

別段気になる訳でもないが、目的地向くまでまだ若干の余裕がある。

試しにと思ひ、俺は少し後ろを歩くアルフレッドに声を掛けた。

「なあ。あんたは何で『ワーズナル』に来たんだ？ 前に一緒だったチームの連中はどうしたんだよ？」

「お前にも関係ねえだろ。無駄口叩いてる暇があったらさっさと歩け」

「……」

なぜこんな奴に話し掛けようなんて思ってしまったんだろう……。自分自身を激しく嫌悪しつつ、一時でも芽生えてしまった好奇心みたいなものを内心で跡形もなく粉々に破壊する。やっぱりこいつなんかと話すべきじゃなかったんだ、いやマジで。

「おい、『魔術師』」

「何だピアス野郎」

「またも癪に障る呼び方をされ、俺は思わずそんな風に返してしま

う。だがアルフレッドの方は然して気にした様子もなく、淡々と俺に言葉を掛けてくる。

「今回の依頼の件、お前は どう思う？」

「あ？ 何が？」

「さつき『ギルド』で説明受けただろうが。この先にある軍の詰所から警備の依頼が来るのは、今月に入ってもう十三回目だつてよ。

いくらなんでもペースが早いと思わねえか？」

こつちの質問には答えねえくせに自分は質問して答えを求めてく  
んのかよ？　　ったく、なんて勝手な奴なんだ。

アルフレッドの言動に不満を感じながらも、一応俺は思考してみ  
る。

確かにさつき『ギルド』で受けた説明は、彼の言う通りのものだ  
った。

現在『グレッグス鉱山』は完全に正規軍の管理下に置かれていて、  
鉱山の坑道入口には軍の詰所が設置されている。

その詰所付近で怪しい人物たちが目撃されるようになったのは、  
一カ月程前かららしい。

今まで確認された人数は四人。

主に男二人で、時折女二人の場合もある、というものだ。

いずれも人相まではハッキリしていない。『ギルド』に依頼が  
あつたのは今回で十三回目だが、そいつらが目撃されたのは三十を  
超えるらしい。

そいつらは奇妙な事に、目撃されたその三十数回の内、たったの  
一回すら詰所の兵士たちに手を出そうとしなかったそうだ。

何をするでもなく、ただ詰所を遠巻きに見つめているだけ。

何かを企んでいるのかと思ひ、兵士たちが近付こうとすると、そ  
の怪しい人物たちはすぐに逃げ去ってしまうらしい。

何が目的なのかはわからないが、『導力石』の採掘場周辺に現れ  
ている以上、それを狙っている者たちだと思われる為、こうして毎  
回『ギルド』に応援要請が来ているそうだ。

そんな奴ら、首都の正規軍から応援を寄こしてもらって一網打尽  
にすればいいじゃねえか、と俺とアルフレッドは口にしたのだが、  
どうやら首都の元老院の連中は、こんな小さな案件に人員を割くつ  
もりがないらしい。だからその代わりとして、『ギルド』に依頼を  
回しているって訳だ。

　　ったく、ハルク・ウェスタインの野郎……。こんな時こそあんな

の出番だろつに、何やってんだよ。他の元老院に会った事ねえからわかんねえけど、どいつもこいつもやる気あんのか？

……おっと。こんな余計な事考えてると、またジンに説教喰らう羽目になりそうだ。

適当に思考を中断すると、俺はアルフレッドと同様に淡々とした言葉を返す。

「早かるうが遅かるうが、怪しい連中がいるってのは確かなんだろ？ だったらそいつらを捕まえて白状させればいいだけの話だ。そんな面倒臭い事いちち考えてられるか」

「……ハン。お前なんか聞いた俺が馬鹿だったぜ。こつちは少しでもまともな意見が聞けるかと思って期待してたつてのによお」

「なら最初つから俺に聞くな。……つてそうか。それがわかんねえ馬鹿だったから俺に聞いたんだよな。悪い悪い、俺もあんたが馬鹿だつて事をすっかり忘れてたよ」

「てめえ……」

俄かにアルフレッドの声に怒気が混じる。ホント、相変わらずキレやすい奴だなこいつ。まあ、そのキレやすい奴にわざわざ突っ掛かる俺も俺だけ。

今にも後ろから攻撃されるんじゃないかと、ある意味身構えながら歩き続けていると、前方三十メートル程先に鉾山の入口らしきものが見えてきた。

多分すぐ近くに軍の詰所もあるはずだと、俺が眼を凝らした時だった。

その景色の中に、違和感を感じた。

「……！？ 何、だ？」

思わず俺が立ち止まると、俺の傍らに追い付いたアルフレッドも、同じように立ち止まる。

「あ……？ おい、どうなってんだよこりゃ……！？」

俺たちの前方五メートル程の辺りから突然、景色が可笑しな事になつていた。

荒野の道が続くその至る所に、直径三メートル程の巨大な丸い凹みがいくつも出来ていて、それがまるで巨人の足跡のように鉸山入口の辺りまで続いている。

それを辿るようにして眼を向けた先で、俺は息を飲んだ。

正規軍の詰所と思われる、茶色い煉瓦で出来た二階建ての建物。

その建物の真ん中から半分が、まるで砲撃でも受けた後のように、粉々に吹き飛ばされていた。

ディーンがあたしたちを置いて『グレッグス鉸山』に向かったから、一時間くらいが経った頃。

あたしとミレーナさんは『ワーズナル』の一角にある宿屋で休憩を取っていた。

「ディーン、ホントに大丈夫かなあ？ 結局一人で仕事を引き受けちゃうし、あたしたちの事も放って行っちゃうし……」

「確かに、あそこまで頑なに付いていく事を断られるなんて、私も思わなかったわ」

あたしとミレーナさんは宿の一室で、お互いに少し戸惑っていた。それはさつき見たディーンの状態。

結局、あのアルフレッドと言う人と同じ仕事を引き受ける事になったディーンは、あたしとミレーナさんが付いて行こうとすると、それを断固として拒否した。

『いいからお前らは宿でも探してろ！』

そんな感じで怒鳴り声を上げて、さっさと街を出て行ってしまった。

拒否と言うより、何だか拒絶されたみたいなのがする……。

「『ギルド』で会った、あのアルフレッドという彼と過去に何かあったみたいね。少し気になる事も言っていたでしょ？」

内心で少し落ち込んでいたあたしは、ミレーナさんの問い掛けである事を思い出した。

「……ディーンが後ろから炎をぶつけた、って言うてましたね」

一体ディーンとあの男の人との間に、何があったんだろう？

こういう時、ディーンは自分の事を何も語ろうとしてくれない。

ただ不機嫌そうに顔を歪めて、「何でもねえよ」って言うばかりだ。ディーンと初めて会ってから『テルノアリス』を目指していた時も、しばらくそんな感じだったし。

彼は何も語らない。

それでも、あたしは簡単に信じる事が出来る。

何の理由もなく、ディーンがそんな事するはずない。知ったような口を利くつもりはないけど、それでもあたしは、ここまでディーンと一緒に旅をしてきた。

だからわかる。普段は冷たい彼だけど、本当は凄く優しい人なんだって事が。

「何があつたのかわからないけど、大丈夫ですよ。ディーンは何の理由もなく人を傷付けたりしませんから。まあ、普段が冷たい感じだから誤解を受けやすいんですよえ、きつと」

最後の方に自分で付け足した言葉に、自分でクスツと笑ってしまふ。こんな事ディーンの前で言ったらまた、「悪かったな」って言うって不機嫌そうな顔するんだろうなあ。

あたしはベッドに腰を掛けたまま、何となく足をプラプラさせる。すると、窓辺に凭もたれるようにして立っていたミレーナさんが急に近付いて来て、あたしの隣に腰を下ろした。間近でミレーナさんの綺麗な金色の瞳を見ると、何だかドキドキしてしまう。

「ねえ、リネさん。一つ聞いてもいいかしら？」

「はい。何ですか？」

「初めて会った時から気になってただけ……、もしかしてあなた、デイーンくんの事好きだったりするの？」

「はっつ！？」

え？ 何？ 凄く意外な所から凄く意外な質問が飛んで来たから困惑してるんだけど！？ ええつと、好きか嫌いかって聞かれたらもちろん好きって答えたいけどでもそれってどういう意味での好きなんだろうとか考えた事ないし。

「ああ、ごめんなさいね。別に深い意味はないのよ？ ただちよつと気になっただけだから。どっちにしても、こんな質問答え辛いわよね」

「え、え〜つと……」

あたしが一人で混乱してる間に、ミレーナさんは笑って会話を打ち切っていた。

一体どういう意図の質問だったんだろう？ と、あたしが首を傾げそうになった時だった。

「ねえ、リネさん。折角だし、二人で街の中を色々見て回ってみない？ 多分デイーンくんも、そんなすぐには帰って来られないはずでしょ？」

長い金色の髪を揺らしながらミレーナさんはスクツと立ち上がり、あたしにそんな提案を持ち掛けてくる。

もちろん断るつもりはない。あたしもミレーナさんとは、もっと色々話してみたいし。

「いいですね。あたしも賛成です」

あたしが勢い良く立ち上がると、ミレーナさんは嬉しそうに微笑んでくれた。

無残にも破壊され尽くした鉱山入口の正規軍詰所。

最早廃屋と化してしまつた建物の内部やその周辺には、残骸と共に夥おびただしい量の血が吹き飛び、身体のおちこちを硬い何かで押し潰された状態の正規軍兵士たちが、死体となつて転がっていた。

「……何があつたんだ、一体」

辺りに散乱している瓦礫には、血と一緒に兵士のものと思われる肉片がこびり付いていたりする。

眼の前の光景に、ただただ気分が悪くなるばかりだ。やっぱり、リネとミレーナを連れて来なくて正解だつたな。

「どいつもこいつも身体中を押し潰されてやがる。犯人は巨人か何かか？」

グチャグチャになつた兵士の死体を調べながら、冗談っぽくアルフレッドは言う。

だが強あながち冗談とも言い切れない。

辺りに出来ている直径三メートル程の巨大な丸い凹みや、硬い何かで圧殺されている兵士たち。これらを繋ぐと、犯人像は否が応でも巨大なものを想像してしまう。人かどうかも怪しい所だ。

それにこの現状からわかる事がもう一つある。

それはここが襲撃された時間だ。

辺りに飛び散っている大量の血液は、まだ完全に乾き切っていない。つまりここが襲撃されたのはつい最近つて事になる。もしかしたら、まだ一時間も経っていないんじゃないか？

「確か『ギルド』内で受けた説明だと、依頼があつたのは俺たちが『ワーズナル』に着く少し前だつたはずだ。おい、アルフレッ

ド。あんた時計持つてるか？」

俺が真剣な表情で尋ねると、アルフレッドは茶化す事なく自分のズボンのポケットを探り、銀色の鎖が付いた懐中時計を取り出した。「今は昼の十二時を少し過ぎた頃だ。俺たちが『ワーズナル』を出

たのは、確か午前十一時ぐらいだったはずだぜ？」

「つまりこの一時間の間に、誰かがここを襲撃したって事か」

細かい時間まではさすがにわからない。丁度一時間前かも知れないし、あるいは十分前かも知れない。

とにかく言える事は、ここを襲撃した犯人は、『ギルド』に報告のあった怪しい連中の可能性が高いって事だ。しかもそいつらは、恐らくまだこの近辺にいる。

例えば、鉾山内部。

「警備どころの話じゃなくなったな。どうやらブツ飛ばさなきゃいけない奴が、鉾山の中にいるみたいだ」

入口の方を見つめて俺は拳を握り締めた。どこの誰だか知らないが、こんな光景を作り出すような奴を放ってなんておけない。

すると横合いから、妙に陽気な声が割り込んでくる。

「お〜お〜。随分熱い台詞吐くじゃねえか？ てっきり怖気づいたのかと思ってたんだけどなあ」

「いつまでふざけてる気だ。俺はもう、あんたとの勝負とやらはどつでもよくなった。この騒動の原因を突き止める気がないなら、さつさと街に帰れよ」

俺がそう言っただけでアルフレッドの方を一瞥すると、彼は少々不満げな顔でこつちを睨んでいた。多分今も、気に食わない奴だと思っ  
ているんだろう。

何だか急に相手にするのが馬鹿らしくなった俺は、彼に背を向けて鉾山の入口に足を向ける。

「……クソが」

背後で彼が忌々しそうに呟き、俺の後に付いてくるのが気配でわかった。



高さ五メートル、幅七メートル程の坑道内の天井には、所々に『導力石』を利用した灯りがぶら下がっている。

正方形型に加工した『導力石』の側面に四角い穴を四つずつ開け、そこに硝子ガラスを嵌め込んで作られる、『橙灯』と呼ばれる照明器具だ。その箱の中に火を入れて蓋ふたをすると、なぜかその火がいつまで経っても消えずに、鮮やかな橙色の光を放って燃え続ける。だからこの器具は『橙灯』と呼ばれているそうだ。

当然の事ながら、坑道内は日の光が差さない為、真夜中のように暗闇に閉ざされている。天井部分からぶら下がっている『橙灯』の灯りはそれ程強い光を発している訳じゃないが、奥へ進む上で非常に役立つ。

その灯りを頼りに、俺とアルフレッドは相変わらず少し距離を開けた状態で、坑道内を進んでいる。

自分で言うのも何だけど、俺たちって一向に打ち解ける気配がないよな……。まあ、別に仲良くなりたいたとも思わねえけど。

時折右に左に緩く曲がる道を歩き続けながら、そんな事を考えていた時だった。かれこれ十分程黙りっぱなしだったアルフレッドが、急に口を開く。

「おい、デイン・イアルフス」

「あん？ 何だよ？」

俺はアルフレッドから声を掛けられた事に、然して興味を持たなかった。後ろを振り返る事もせず、返事だけして歩き続ける。

「今更な事を確認するけどよ。お前は『魔術師』なんだよな？」

「ホントに今更な質問だな。あんただって前に俺が『魔術』を使ってる所を見た事あっただろ？ 大体さつき俺の事を『魔術師』って

呼んでたじゃねえか。　で？　それがどうかしたのか？」

「知つての通り、ここは『導力石』の採掘場だ。今俺たちが歩いてる道の床、壁、天井の至る所に『導力石』が埋まつてる。元々『導力石』つてのは、多かれ少なかれ常に不可思議な波動を発してんだ。それは土の中に埋まつたとしても例外じゃねえ」

「……？　おい、さっきから何が言いたいんだよ？」

いい加減、アルフレッドの長い話を聞き続けるのが嫌になった俺は、立ち止まつて後ろを振り返る。

するとアルフレッドは、『橙灯』の灯りに照らされながら不敵に笑っていた。

「その不可思議な波動が密集してる地帯に『魔術師』が入り込むと、一体どうなると思う？」

「！　何だと？」

奴の言葉に不穏な空気を感じて、俺が身構えようとした瞬間だった。

徐に、アルフレッドがズボンのポケットから何かを取り出す。奴の手に握られていたのは、黒くて丸い鉄の塊のような物。上部には何かの留め金のような銀色の物体が付いている。

「って、おい！　あの形、まさか手榴弾か！？」

「あんた一体何する気」

言葉の途中で、アルフレッドは手榴弾の留め金を外し、爆発物を天井に向かって軽く放り投げた。

咄嗟に俺は、アルフレッドから距離を取った。

だけどその判断は間違っていた。

天井近くで炸裂した手榴弾は、坑道の上部を抉り取り、俺とアルフレッドの間に大量の土砂を落下させた。爆風に煽られながら何とか逃げる俺の背後で、轟音を響かせながら次々と土砂が落下してくる。

そう。俺が歩いてきた鉱山の入口から続く道を、遮断する形で。

爆煙と土煙、そして轟音が治まった所で、土砂の壁を眼の前にして漸く俺は理解した。

「あの野郎……！ 妙に俺の後ろにばっか張り付いてると思ったら、最初から俺をここに閉じ込めるのが目的だったのか!?」

俺は齒噛みして土砂で埋まった坑道の先を睨んだ。あの壁の向こうでは、今もアルフレッドの野郎が大笑いしてるに違いない。

全く、何考えてんだあの野郎！ ……いや、それだけ俺が以前奴にした事を根に持ってたって事か。

「けどな。俺がこのまま、黙って引き下がるとでも思ってたのかよ！」

アルフレッドの野郎に聴こえているかどうかもわからないまま、俺は強く叫んだ。そして両腕を水平に構え、『魔術』の発動と予備動作を行なう。

退路を断つ眼の前の土砂の壁は分厚そうだが、『深紅魔法』の大技なら破壊も可能なはずだ。

『深紅の流星』。この『魔術』の一撃で突破してやる！

俺の意志に呼応するように周囲で発生した炎の渦が、俺の頭上に集束されていく。

だが、そこで異変が起きた。

一点に集束していたはずの炎が突然、何の前触れもなく霧散するように消え始める。まるで俺の意志に逆らうみたいに、どれだけ集中しても炎たちは霧散と消滅を繰り返す。

「……!? どうなってんだ？ まるで『魔術』が使えなくなったみたいだ」

そこまで口に出して俺はハッとした。

さっきアルフレッドが言っていた台詞が、頭の中で再生される。

『元々『導力石』ってのは、多かれ少なかれ常に不可思議な波動を発してんだ。それは土の中に埋まってたとしても例外じゃねえ。その不可思議な波動が密集してる地帯に『魔術師』が入り込むと、一

体どうなると思う？』

……なるほど。アルフレッドの野郎、ここまで計算して俺を生き埋めにしたって訳か。

『導力石』には色々な用途がある。

その内の一つ。『魔術』的なものに対する『耐性』。

以前『テルノアリス』で戦ったアーベント・ディベルグは、『導力石』が持つ『魔術』に対する『耐性』を利用した剣や鎧を使って俺と対峙していた。

あの一件と、さっきのアルフレッドの言葉から導き出される答え。そう。『導力石』から発せられている波動は、『魔術』の力を阻害する効力を持つているんだ。だから俺の『深紅魔法』も、その力に邪魔されて上手く発動しないんだろう。

つまり今、この鉱山全体が、『魔術師』である俺を閉じ込める為の牢獄になってるって事だ。

「ちくしょう。道が塞がれた上に、『魔術』まで発動出来なくなるなんて……」

おまけに今この鉱山内部には、表の正規軍詰所を襲撃した犯人が潜んでいる可能性まである。

もしそいつと遭遇して、戦う羽目にでもなったら。

「最悪過ぎる……」

俺は土砂の壁に背を預け、坑道の奥に目を向けた。

視線の先には、天井にぶら下がった『橙灯』の灯りが点々と続いている。

『奥へ進め』

まるで俺に、そう命令しているかのように。

## 第二章 罌に落ちた少年（後書き）

という訳で、『鉾山都市編』第一章及び第二章いかがだったでしょうか？

外伝の方にも書きましたが、今回の話は外伝の『過去話』とリンクしてる作りになってます。

両方読むのメンドクせエって方の為に、外伝の方を読まなくても楽しめるような作りにはするつもりですのでご安心を（笑）

それではまた次の章で！ノシ

### 第三章 暗躍する者たち（前書き）

今回は今まで以上に時間が掛かってしまい、申し訳ないです（汗）  
という訳で、『鉾山都市編』第三章スタートです！

### 第三章 暗躍する者たち

俺が初めてアルフレッドと出会ったのは、七カ月前の事だ。

その頃俺はミレーナを探す旅の途中で、丁度今みたいに資金不足に陥っていて、『ケルフィオン』と言う街の『ギルド』で金を稼ごうとしていた。

そこで出会った二人の人間。

その片方がアルフレッド・ダグラスであり、もう片方が後に俺の友人となる、ジン・ハートラーだった。

俺たち三人がチームを組む事になった『ゴーレム討伐作戦』。それはとある遺跡に大量に配置された『ゴーレム』を、一体残らず破壊するというものだった。

話だけ聞くと簡単そうに思うかも知れないが、一つだけ誤算があった。

それは当時の俺の心境。

その頃の俺は、ミレーナが一向に見つからない事。『フレイム・リーディング 紅の詩篇』を操れていなかった事。それらの不満がゴツチャになって、少々冷静さを欠いていた。

それ故に俺は一人で勝手な行動を取り、その結果チームの連携が崩れ、俺と別行動を取っていたアルフレッドたちが、遺跡の罠に掛かった。

あの時のアルフレッドは大量の『ゴーレム』に襲われた事で、最早冷静な判断力を失っていた。にも拘らず、彼は無理に戦いを続けようとして、それを止めようとしたジンにまで手を出した。

ジンがアルフレッドに殴られる場面を眼の前で見た俺は、咄嗟に炎を放ってアルフレッドを攻撃していた。

彼を止める為、と言えば聞こえはいいかも知れないが、そんなのは結局後付けでしかない。

その後『ゴーレム』の群れは俺一人で何とか破壊出来たものの、

チームの損害は大きく、勝手な行動を取った俺はそれを咎められる結果になった。

恐らくアルフレッドは、未だにその時の事を恨んでいるんだろう。確かにあの時の俺は、勝手な行動を取り過ぎていた。

だけど俺はあの一件に関して、自分が間違った事をしたとは思っていないし、後悔をしている訳でもない。

俺を恨みたいなら恨めばいいし、嫌っているなら嫌ったままでいい。そう思っているのは確かだ。

でもだからって、相手の行動全てを許容出来る程、俺は心の広い人間じゃない。

「あの野郎……。ここをどうにか脱出したら、とりあえず一発ぶん殴ってやる……！」

まあそれもこれも、無事にここから出る事が出来ればの話だけど。結局俺は鉱山の奥へと進む事にした。さっきの場所で何もしないままジツとしているよりは、別の出口がある可能性に賭けて色々探してみた方が、確実に有意義だろう。

とはいえ、別の出口があるかも知れない場所に、アルフレッドが俺を閉じ込めるとも思えねえけどな。こんな事なら、『ギルド』でこの鉱山内の詳細な地図を買っとけばよかつたぜ……。

内心であれこれ考えながら、俺はひたすら奥に進み続けた。

奥に進むに連れ坑道の幅と高さは徐々に広がり、今ではもう十メートル以上の大きさになっている。

相変わらず道導みちのりとなるのは『橙灯』とうひの明かりのみで、奥の方には暗闇しか見当たらない。

「くそ……。まさにお先真つ暗つて訳か。嫌な予感しかしねえぞ」  
こんな所で生き埋めになったまま、最悪死ぬ事になったりするかもなんて冗談じゃねえ！俺にはまだやらなきゃいけない事が残ってるんだ！

弱気になりそうな心を奮い立たせながら、俺は何とか立ち止まる事なく歩き続けた。



それから十分程歩いた頃だろうか？ 不意に坑道の幅と高さがいれまで以上に広がり、鉋山内の拓けた場所に辿り着いた。

幅も高さも三十メートル程ある空間。周りには二、三メートル程の段差があちこちに出ていて、俺の立っている場所が一番低い所のようにだ。

回りをよく見渡すと、作業用の鶴嘴じゅっはしやスコップがいくつか転がっていて、掘り出した石を運ぶ為の台車なんかも置かれている。どうやらここは、『導力石』を採掘している鉋山の最深部らしい。

「ここまでは一本道だったよな。って事は、ここから別の所に繋がってる道があるかも」

もう一度辺りを注意深く観察してみると、あちこちに出来た段差の上に、空洞のような穴がぽっかりと開いている所がいくつもある。ここからだか暗くてわからないが、恐らくあの中も坑道になっているんだらう。

道が複数ある以上、そのどれかが出口に繋がっている可能性はある。どうやらまだ希望を捨てるのは早いみたいだ。

俺は気を引き締め直し、再び歩き出そうとした。  
だが。

「ツハハア！ おいおい、こりゃあ一体どういう事だあ？」

「ツ！？」

いきなり暗闇から妙に弾んだ感じの聲がして、俺は思わずビクッとした。声のした方を見ると、俺のいる位置より三メートル程高くなった段差の上にぼんやりと輪郭が見え、誰かが立っているのがわかった。

って、ちよつと待て。今ここで遭遇し得る人物って言えば……！

「妙な音がしたから何事かと思って見に来てみれば、ガキが一人でお散歩中ってか。 おいガキ。お前さん、一体ここで何してやがる？」

妙な音というのは多分、さつきアルフレッドが爆発させた手榴弾の爆発音や坑道が崩れる音だろう。俺の方から声の主の顔を見る事は出来ないが、恐らく相手は男だ。

それに俺以外の人間がここにいるって事は、こいつが軍の詰所を襲った犯人って事になる。『魔術』が使えない状況で襲撃犯と遭遇っていう、一番懸念してた事が現実になるなんて最悪だ！

「おい。何ボーツとしてやがる？ こっちの質問無視して考え事か？」

向こうからは『橙灯』の明かりの下にいる俺の表情が読み取れるらしく、そんな風に男は不満そうな声を漏らす。

俺は少しでも戦闘が起きるのを回避しようと思いい、敢えて男と会話する事にした。

「あんたこそこんな所で何してんだ？ 『導力石』でも盗みに来たのか？」

「ツハハア。相手の事が気になるのはお互い様って訳か。仕方ねえ。好奇心旺盛なお前さんに、特別に俺から自己紹介してやるよ」

そう言うと、男は段差の上から軽い動作で跳び下り、『橙灯』の明かりの下まで歩いてきた。そうする事で、漸く男の姿が露わになる。

橙色のバンダナを頭に巻いた二十代後半の男。その男の右頬には、十字架のような特徴的な形の刺青がある。

こいつが軍の詰所を襲った犯人、なのか……？

眼の前にいる男は、どう見ても体格的に俺とほとんど差がなかった。

身体の筋肉が異常に発達してる訳でも、身長が異様に高い訳でもない。巨人と呼ばれるのとは無縁の、至って普通の人間の姿だ。

果たしてこんな奴に、直径三メートルもの巨大な丸い凹みを作ったり、兵士たちを圧殺したり、詰所の建物を粉々に吹き飛ばしたりする事が出来るものなんだろうか？ とてもじゃないが、俄かには信じられない。

半信半疑で身構える俺を前に、男はニヤリと笑いながらこう続けた。

「俺の名はガラム・ドラゴドム。とある闇組織、『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』の一員だ。よろしくな、紅い髪の少年」

鉦山都市『ワーズナル』の街並みは、今までに見てきたどの街の風景とも違っていた。何て言うか、活気があるけど特に目を引く物が見当たらない、って感じ？ 本当に鉦山で働いた人たちが休む為だけに造られたような街なんだよね。

ミレーナさんを連れ立って街の中を色々歩き回りながら、あたしは内心でそんな風に結論付ける。

しばらく歩いていたらあたしは、通りの前方に噴水を見つけてそこに歩み寄った。

白い円形の噴水の中心には三段重ねの噴出口があり、そこからゆっくりと水が流れ落ちている。噴水に溜まっている水は意外と透き通っていて、水底を見通す事が出来た。

「ちよつと休憩しましょうか？」

あたしは噴水の端を指差して、隣のミレーナさんにそう提案した。「そうね。もう街の中はほとんど見て回った訳だし、そうしましよ  
う」

ミレーナさんは軽く微笑むと、噴水の縁にゆっくりと腰を下ろす。あたしもそれに倣って、ミレーナさんの右隣に腰を下ろした。

それにしても、何だか不思議な気分なんだよね。ディーンの師匠でもあるミレーナさんと、こうして二人きりで一緒にいるって事が。

青い空を見上げながら、あたしは何となく思う。

多分こうして彼女の隣にいたいのは、他でもないディーン自身なんだろうな……。

「……ただ待ってるだけっていうのも、何だか落ち着かないわね」

「え？」

不意にミレーナさんが眩き、あたしは少し驚いて彼女の方に視線を向けた。その表情は言葉通り、どこか焦燥に駆られているような気がする。

「ディーンの事が心配なんですか？」

あたしが何気なくそう尋ねると、ミレーナさんは少し躊躇いがちに答える。

「確かにそれもあるけど、それだけじゃないわ。……リネさんも知ってる通り、今の私には過去の記憶がない。自分でも取り戻したいと思ってるし、その為には私自身が動かなきゃいけない事もわかってる」

ミレーナさんはそこで一旦言葉を切ると、雲一つない青空を見つめてからゆっくりと続ける。

「……でもね。私の事を守ろうとしてくれるディーンくんを見てると、どうしても気持ちが悪く焦ってしまうの。何かしなきゃいけない、でも何をすればいいんだろう？ って。今の私は記憶を失っていて、『魔術』を使って戦う事すら出来ない。私を守ろうとしてくれるディーンくんにはばかり、辛い思いをさせてる。それが悔しくて、情けなくて、焦る気持ちを抑える事が出来ないの……」

「ミレーナさん……」

記憶を失っているミレーナさんにも、失くしているからこそ感じる思いがある。それをあたしは、改めて思い知らされた気がした。

多分あたし自身、心のどこかで高を括っていたんだと思う。

ミレーナさんの事はディーンに任せていれば大丈夫だ。彼ならきっと、ミレーナさんの記憶を取り戻す事が出来る。そんな風に思っていた。

「ただどそれはあたしが思っていただけの事で、当事者であるミレーナさんには、彼女にしかわからない焦りや不安があったんだ。

相手に守られてるばかりじゃなくて、自分も相手の事を守ってあげたい。助けてあげたい。」

その気持ちだが、あたしには何となく理解出来る。

ミレーナさんと同じように、あたしもディーンを守りたいと本気で思うから。

「ごめんなさいね。急にこんな事言い出して」

我に返ったみたいに、ミレーナさんは申し訳なさそうな顔であたしに謝ってきた。

ミレーナさんは本当に優しい人なんだなあ。この優しさを、弟子のディーンもちやんと受け継いでる気がするんだよね。

「気にしないでください。ミレーナさんが感じてる焦燥感みたいなもの、あたしもわかりますから。自分が何もしてあげられないって思うと、辛いですよね……」

そう言っって苦笑してみせると、ミレーナさんは優しい感じで微笑みながらこんな事を言った。

「フフ。やっぱりリネさんは、ディーンくんの事が大好きなのね」

「えっ!?! いやあの、そういう意味じゃなくって、って訳でもないんだけど、じゃなくて! ああ、え〜っと……」

あたしは露骨にあたふたしてしまふ。何だかミレーナさんからかわれてる気がするんだけどなあ。

恥かしさを紛らわそうと思っって、あたしはミレーナさんに別の話題を振ろうとした。

するとその時。

「もう、しつこいなあ〜。だから知らないっって言っってんじゃ〜ん」

「とばけんな! てめえに間違いなえはずだ!」

不意に間延びした女の子っぽい声が聞こえたかと思うと、その後

に男の人の怒鳴り声が聴こえて、あたしは思わず声のした方に眼を向けた。

あたしたちから五メートル程離れた所。裏路地に繋がっている通りの入り口の所に、その声の主たちはいた。

黒と白の縞模様が入った長袖のシャツに、紺の短いスカートを履いた十代前半の女の子が、三人の男の人に囲まれて面倒臭そうな顔をして立っている。

その子は周りの男の人たちに、何かを問い詰められているみたいだ。

「何だろう？ 喧嘩、かな？」

大の男数人が、あんな女の子一人を相手に……？ もしそうなら放っておける状況じゃないよ！

「どうも雲行きが怪しいわね」

あたしと同じように女の子の方を見ていたミレーナさんが、心配そうな顔付きで言う。

確かに周りの男の人は、今にも女の子に詰め寄ろうとしている。何を揉めてるのかわからないけど、止めないと大変な事になるよね。そう思ってたあたしが立ち上がった時だった。

「ウザいなあ、もう」

気だるそうにそう言って、女の子はスカートの腰の部分に付いている長方形型の革のケースの中から、白いカードの様な物を一枚取り出した。そしてそれを人差し指と中指で器用に挟んで、周りにいた男の人の一人に向けて放った。

白いカードが男の人の身体に触れた、その瞬間。

「ぎゃあああああああつ！」

「！？」

突然男の人の身体から激しい勢いで炎が噴き出し、男の人の絶叫が響き渡った。火だるまになった男の人は、<sup>もが</sup>？き苦しむように地面に倒れ込んで動かなくなる。

「う……、うわあああああ！」

その様子を見ていた残りの二人が、裏路地の方へ逃げ込もうとした時だった。

路地の奥から、右手に白い布に包まれた長めの物体を抱えた桔梗色の長髪の女性が現れて、男の人たちのお腹に膝蹴りと回し蹴りをそれぞれ喰らわせて沈黙させた。

よく見ると、その女性の右頬に十字架みたいな形をした刺青がある。

「イエーイ！ ラズったらカッコいいー！」

路地の奥から現れた女性に向かって、女の子はピョンピョン跳び跳ねながら楽しそうに手を叩く。すると女性は、女の子のその様子に呆れたような表情を見せる。

「はしゃいでる場合じゃないでしょ、パーニヤ。余計な騒動を起さなうて言われていたはずよ。忘れたの？」

「だってえー、こいつらがしつこく付き纏って来るんだもん」

パーニヤと呼ばれた女の子は、不貞腐れたように頬をプクツと膨らませる。女性はその女の子の表情を見てクスツと優しく笑い、左手で女の子の鈍色の頭を撫でた。

そんな一連の経緯を見ていたあたしは、首を捻る事しか出来ない。今のは一体何だったんだろう？ あのパーニヤって女の子は、何で男の人に囲まれてたの？

それにさっきの炎。カードを使って炎を生み出すなんて、まるでデインと同じ『魔術師』みたいだし……。

「ちよつとおー。さつきから何人の事ジロジロ見てんのおー？」

「！」  
あれこれ考え込んでいたあたしは、そんな間延びした声でハツとする。

気付くとパーニヤって言う女の子が、何だか不満そうな顔でこっちを見ていた。傍らの女性も表情こそ違うものの、探るような視線をこっちに向けている。

「あら失礼。驚かせてしまいましたか？」

長髪の女性の方がそんな言葉を掛けてきたので、あたしは躊躇いながら言葉を返した。

「い、いえ、そういう訳じゃないです。ただ何があったのかなって、気になっただけで……」

あたしはそう言いながら、地面に倒れ込んで動かない三人の男の人たちに視線を落とす。火だるまになっていた男の人の身体は、まるで炭のように黒くなっている。

「あの……、その人たちはあなた方に何かしたんですか？」

「付き纏われてたんだよ。だからお仕置きしてあげただけ。ねえ、ラズ」

あたしの質問に答えた女の子は、女性の腕にくっつきながらニコニコして言う。ラズって言うのは、この女性の名前なのかな？

「何だったら、『ギルド』の人を呼びましょうか？ この通りの向こうにありますし……」

「いえ、その必要はありませんよ」

やけにキツパリと断る女性は、続けてこんな事を言った。

「だってこの三人が『ギルド』の人間なんですから」

「……え？」

一瞬言葉の意味がわからなくて、あたしは思わず固まった。

「じゃあ何？ この二人は、この男の人たちが『ギルド』の人だっ  
て知ってて危害を加えたって事？」

「いや、ちょっと待って。この人たち、さっき『付き纏われてた』  
って言ってたよね？ 『ギルド』の人に付き纏われてるって、それ  
ってつまり……」

「どうかしましたか？」

最悪な結論に辿り着いたあたしの耳に、女性の平淡の音が響く。

ふと隣を見ると、ミレーナさんの表情が明らかに険しくなっていた。  
多分彼女もあたしと同じ結論に辿り着いたんだ。眼の前のこの二



人の、正体に。

「どうやらお察しになられたようですね。……まあここまで言ってしまうと、気付くのも当然の事かと思いますが」

言葉の端に不穏な空気を感じて、思わずあたしは身構える。すると眼の前の二人は、怪しい笑みを含んでこう続けた。

「私の名前は、ラズネス・ヴィルバルトン」

「アタシはパーニャ・ロンドベル」

「私たち二人は、『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』と言う組織の者です。以後お見知り置きを。可愛らしくて綺麗なお嬢さんたち」

「『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』……？」

ガラムと言う男の口から出たその言葉は、怪しげな雰囲気を出している。自分の事を闇組織の一員だと宣言するなんて、何だか変わった奴だ。

「ああ、そうだ。俺みたいな人間と遭遇するのは初めてか？ まあお前さんのようなガキじゃあ、闇組織なんてものに関わる機会なんてないだろうから、ピンと来ないのも仕方ねえかもな」

ガラムはどこか俺を値踏みするような眼で見つめながら、苦笑するみたいに呟く。

何勝手に人の事決めつけてんだ。傲慢じゃねえけど、俺だってそれなりの修羅場は潜って来てんだよ。

そんな風に思いながら、俺は思考を巡らせる。

以前俺は、『テルノアリス』でアーベント・ディベルグが率いる『反王族軍』と言う連中と戦った。奴らは首都の王族を狙って行動

を起こしたテロリストと呼ばれる人間だが、今目の前にいるこいつは、そういう連中とは少し違う気がする。

テロリストとは異なる別の何か。それにアーベントの場合は、その行動の目的に何となく見当がついたけど、こいつの場合は目的がわからない。

状況から見て、表の正規軍詰所を襲ったのはこいつに間違いないだろう。けどその目的は何なんだ？ 単に『導力石』を奪う為か？ いや違う。俺の勘が告げている。こいつの目的はもっと別の所にあるはずだ、と。

「ところで少年。俺はさつきからお前さんが何者かって事が気になってんだけどなあ。だってそうだろ？ この鉱山は、ただのガキがフラツと立ち寄れるような場所じゃないんだぜ？」

「……ッ！」

「それにお前さんが歩いてきたその坑道の入口には、馬鹿な兵士どもの死体が転がってたはずだ。あの惨状を平気な顔で乗り越えて来るなんて、ただのガキとは思えねえな」

俺が歩いてきた背後の坑道の方を指差しながら、ガラムは探るような視線を投げてくる。

不味い……！ こいつ、俺が正規軍か『ギルド』に関わってる人間だって勘付いてるみたいだ！ こっちには今、まともに戦える手段がない。こんな状況で戦闘になったら……！

「どうした？ 答えにくい質問だったか？ ならしようがねえ。答えられるようにしてやるよ」

言葉の端に不穏な空気を感じて、俺は瞬時に身構えた。  
その直後。

ビュゴオツという風斬り音が聴こえたかと思うと、俺の身体のスグ横を何かが通り過ぎ、背後の岩盤に轟音を上げて突き刺さった。

「なっ……！！？」

何が起きたのかを確かめる為、俺は僅かに後ろを向いた。

背後の岩盤に突き刺さっていたのは、直径七十センチ程の黒い鉄

球だった。その鉄球には同じく黒い鎖が取り付けられていて、ガラムの手元まで黒い蛇の身体ように繋がっている。

岩盤を易々と粉碎するその鉄球を見て、俺はさっきの表の惨状を思い出した。

まるで硬い何かに押し潰されたようにグチャグチャになっていた兵士たちの身体。あれは間違いなく、この黒い鉄球によって引き起こされた現象だ。

それにしてもこのガラムって男。俺と大して変わらない体格のくせに、見るからに超重量のこんな凶器を扱うなんて、とんでもない腕力をしてやがる……！

「ボーっと考え込んでんなよ、少年」

ガラムの言う通り思考していた俺は、奴が鎖を引いて鉄球を自分の手元に戻している事に遅れて気付いた。

驚いて身構えようとした俺に、ガラムはニヤリと笑って告げる。

「あんまり余所見していると、粉々にするぜ？」

言葉と共にガラムの右手から、黒い鉄の塊が信じられない速度で投擲される。

逃げる暇など、俺には無かった。

### 第三章 暗躍する者たち（後書き）

今回新たに三人のキャラが出て来ました。

デイーンの側はまあまだ何とかなってますが、女性陣の側、言葉使いを使い分けるのが結構大変です（笑）

こんな事言ってますが、次の章ではまた一人新しいキャラが出て来ます。

次は遅れないように努力したいと思います！

それでは！ノシ

#### 第四章 全てを破壊する為に(前書き)

あけましておめでとうございます！

そして遅くなりました！m(\_\_\_\_)m

あとどれぐらい続くかわかりませんが、今年も『フレイム・ウォーカー』をよろしく願います！

それでは、『鉦山都市編』第四章スタートです！

## 第四章 全てを破壊する為に

回避する暇がなかったのは事実だ。だから俺は、咄嗟に『魔術』を発動していた。

『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』。触れたものに対して爆発と炎を生み出す、紅い炎剣。

今の一瞬で防御出来たのは、本当に幸運としか言えない。もし『魔術』が発動していなかったら、俺の身体は外の兵士たちのように肉片に変わっていただろう。

炎剣を握る手に、黒い鉄球の一撃が起こしたとんでもない衝撃が走り抜ける。

自分の腕の骨が、ミシミシと軋んでいるのがわかった。

「ツハハア！ こりや面白い！ 何者なのかと思えばお前さん、『魔術師』だったって訳か！」

手元に鉄球を引き戻しながら、ガラムは心底面白そうに叫ぶ。それとほぼ同じタイミングで、形を成していた『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』が俺の意志に反して霧散するように消え去る。

恐らく『導力石』の波動の影響なんだろう。咄嗟とはいえ発動出来たからこの技なら使えるのかと思っただけ、やっぱりそう上手くはいかないみたいだ。

それにしてもヤツが使ってるあの黒い鉄球。『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』の刀身部分に触れたつてのに、傷一つ付いてないなんて……。あれもまさか、『導力石』で出来た武器なのか？

思考する俺を他所に、ガラムは俺の容姿をまじまじと見つめて不意に呟く。

「んん？ 待てよ？ 炎を操る紅い髪の『魔術師』……？」

小声でブツブツと呟きながら、ガラムは顎に手を当てながら考え込むような仕草を見せる。そして何かを思い出したように言う。

「もしかしてお前さん、最近噂になってる『フレイム・ウオーカー炎を操る者』って奴か

「？」

「……は？」

「何だ、知らねえのか？ 結構な噂になってるはずだぜ？ 『テルノアリス襲撃事件』の時に影で活躍した炎を操る紅い髪の『魔術師』がいるってなあ。『炎を操る者』フレイム・ウオーカーってのはその『魔術師』の『通り名』らしい。それがお前さんの事なんじゃないのか？」

「！」

噂になってるだって？ 『炎を操る者』フレイム・ウオーカーって『通り名』が？

あれはリネが勝手に付けた『通り名』であって、俺自身が名乗った事は一度もない。一体どこから広まったんだ？ ……まさかりネと同じ発想をした奴が他にもいたってのか？

「どうなんだよ、少年？」

「……多分俺の事で間違いない、と思う」

躊躇いがちな俺の言葉を聞いて、ガラムは不思議そうに首を傾げる。

「んん？ 何で自分の事なのにハッキリしねえんだ？」

「仕方ないだろ？ 俺は自分で一度もそんな風に名乗った事なんてないんだ。他人が付けた渾名あだなみたいなモンに興味なんてあるかよ」

しかもその『通り名』にしたって、俺はリネの意見を即座に却下したんだ。リネは相変わらずその『通り名』で俺を呼ぼうとする時があるけど、そういう呼ばれ方をするのは正直言って迷惑だ。俺にはミレーナに付けてもらった『デイン』デインって言うちゃんとした名前があるんだからな。

「ツハハア。お前さん、中々面白い奴だな。少し興味が出てきた。お前さんさえ良ければ、名前を教えてもらいたいねえ」

俺の心中を察しているかのように、ガラムはそんな言葉を投げ掛けてくる。

毎度の展開通り、俺はフルネームを明かすのを一瞬躊躇ったが、『通り名』の件を払拭したいと思って敢えて口に出す事にした。

「デインだ。デイン・イアルフス」

俺はガラムの眼を真っ直ぐ見て、強くそう言った。

さて、この名を聞いて眼の前の男は一体どんな反応を見せる？  
内心でそう探っていた俺に対し、ガラムは愉快そうに笑って口を開く。

「イアルフス……？ ツハハア！ 何てこった！ お前さまさか、ミレーナ・イアルフスの弟子か！？」

「ああ、そうだ」

何だ、今までとほとんど同じ反応か。いい加減この反応にも飽きてきたよな……。

と、そう俺が思い掛けていた時だった。

「ハハツ！ マジかよ？ まさかあの女の弟子にこんな所で遭遇するとはな！」

「！ あの女？」

ガラムが付け足すように言ったその言葉が、俺の耳に引つ掛かる。ちよつと待て。その口振りだと、ミレーナの事をよく知ってるみたいに聞こえるぞ？

「あんだ、ミレーナの知り合いなのか？」

俺がそう問い掛けると、ガラムは驚くべき言葉を口にする。

「ああ、よく知ってるぜ。記憶喪失なんだろ、あの女？」

「！ あんだ、何でその事を……！」

またもや俺は自分の耳を疑った。

俺はミレーナの件を誰一人、事情聴取を受けた『ギルド』の人間にすら話していない。なのに何でこいつはその事を知ってるんだ？ 疑問に思う俺を他所に、ガラムは面白そうに笑って告げる。

「しかしまさか、『炎を操る者』フレイム・ウオーカーの正体がミレーナ・イアルフスの弟子だったとはな。良かったじゃねえか、デイン・イアルフス。

お前さん、師匠と同じで結構な有名人になれたみたいだぜ？」

「そんな事どうでもいいんだよ！ 答える！ 何であんたがミレー



ナノ記憶喪失の事を知ってる？」

「ッハハア。そりゃ知ってるさ。あの女は俺たち組織の標的でな。

俺と同じ『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』のメンバーが、あの女を追い回してたんだ

よ」

「なっ……！？」

標的？ ミレーナが、こいつらの？

そう考えた時、俺は一つの結論に辿り着いた。俺はその事実に関わる事をすでに知ってる。

『アジュール・ファウンテン紺碧の泉』でミレーナがログハイムさんに発見された時、彼女は

ボロボロの状態だった。その原因を作ったのが、こいつら『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』だったんだ……！

「まさか、てめえらがミレーナの記憶を……！」

俺は怒りで歯を食い縛りながらガラムを睨んだ。するとガラムは、左手をヒラヒラと振って俺を宥めようとするみたいに告げる。

「おいおい。そりゃあ濡れ衣ってモンだぜ。俺は現場にいなかったから詳しくは知らねえが、追い掛け回してたメンバーが言うには、あの女はそんな時すでに記憶喪失だったらしいぜ？」

「何だと？」

「まあそれに気付いたのは、奴をズタボロにした後だったらしいがな」

「！ てめえ……！」

再度睨み付ける俺に、ガラムは不敵な笑みを見せる。

仮にガラムの言う事が本当だとしたら、ミレーナが記憶を失った原因はこいつらに襲われたせいじゃない。もつと他に、別の要素が絡んでるって事だ。

だけどこれ以上、一体何があるって言うんだよ？

「てめえらがミレーナを追ってた理由は何なんだ！ 何の為にミレーナを……！」

吠えるように俺が叫ぶと、ガラムは突然冷めた眼付きになった。

まるで俺の問い掛けを受け流そうとするみたいに、淡々とした口調

で言う。

「あの女が余計な事を知っちゃまった可能性があったからだ。そういう可能性の芽は早めに潰す必要がある。だからウチのボスが、あの女に刺客を差し向けたのさ」

「ボス……？ てめえの親玉って事か」

「ああ、そうだ。まさに組織のやり方って感じで面白いだろ？」

口ではそう言うものの、ガラムの表情は全く面白そうには見えない。ただ淡々と、機械的に言葉を返しているだけのように見える。

「そいつの名前は？」

俺がそう尋ねると、ガラムはその表情をより平淡なものに変えた。「そこまで教える訳にはいかねえな。こっちにも色々都合ってモンがあるんでね。 そんな事より、よく考えてみるよデーン。何で俺が自分たちの事を、ここまでペラペラとお前さんに話して聞かせたと思う？」

「……あ？」

「ここでお前さんを殺すからに決まってるだろうがあっ……！」

「！」

叫ぶと同時に、ガラムは再び黒い鉄球を投擲してきた。俺はそれに何とか反応し、跳び込むように右に回避する。

その直後、轟音を上げて岩盤が叩き割られ、岩の破片が飛び散り、土煙が舞い上がる。

それを視界の端に捉えながら、俺はガラムから距離を取ろうと走り出した。

「ツハハア！ 俺の相棒、『鉄碎』<sup>てっさい</sup>から逃げ切れると思うなよ！」

ガラムは一度鉄球を自分の元に引き戻すと、鎖を介して鉄球を大きく回転させ始めた。

鉄球に繋がられた鎖がジャラジャラと音を立て、回転させられる鉄球が鋭い風斬り音を発生させる。

「どらあっ……！」

回転によってさらに速度の乗った鉄球の一撃が、一直線に俺の方

へと向かってくる。

「くっ！」

それをさらに避ける為、俺はその場に瞬時に屈んだ。すると俺の視界の端で、またも轟音を上げて岩盤が破壊される。あれだけの破壊力を持った超重量であろう武器を、ガラムは平然と振り回している。俺と大差のない細身の体格だったのに、一体どこにこれだけの腕力が蓄えられてるんだ？

だけど驚いてばかりもいられない。このままじゃなぶ蹴り殺しにされるのがオチだろう。

何とかして状況を打開するんだ。その為にまずやるべきは！

「ここは逃げるが勝ちってな！」

ガラムが鎖を引き戻すタイミングを見計らって、俺は体勢を立て直して一目散に走り出した。

目指すは別の場所に繋がっているであろう、五メートル程前方にある坑道の入口。場所を移動すれば、もしかしたら上手く『魔術』を発動出来る所があるかも知れない。

だがその時。希望にすが縋ろうとする俺の背後から、嘲笑うような声が聴こえてきた。

「だから逃げ切れると思うなって言ってるんだろ！」

「！」

再び投擲された鉄球の一撃が、風を斬りながら俺の背後に迫り来る。

こうなったら一か八かだ！

「『パーニング・クロス 烈火の十字爆撃』！」

俺は逃げながらも、何とか右手で空中に十字の炎を作り出す。すると案の定、その炎は容易く消えてしまいそうになる。

だけどそれはわかりきっていた事だ。これを発動したのは攻撃する為じゃなく、ガラムの攻撃に一瞬の隙を作り出す為だ。

迫り来る黒い鉄球は、空中に静止させた十字の炎と衝突して爆発を起こす。

その爆発によって起きた爆風に煽られながら、俺は転がるように新たな坑道の入口に掛け込んだ。

「くそ……！ 眼眩ましに使うのがやつとか！」

俺は吐き捨てるように叫びながら、坑道の奥を目指した。

あの程度の間隙じゃあ、ガラムはすぐにでも追い付いてくるだろう。この道がどこに繋がっているかはわからないが、それでも立ち止まっ  
つてはいる訳にはいかない。

『とうひ橙灯』の灯りに照らされる坑道内。

俺は背後に迫る脅威から逃れる為に走り続ける。

この道の先に、何が待っているかもわからずに。

自分たちの名前を名乗った眼の前の二人は、決して穏やかじゃない。特にパーニヤと言う女の子の方は、さっき見せていた危ない感じの眼でこっちを見ている。

「ラズどうする？ やっぱりこいつらも黙らせとこうか？」

少女の無邪気な口調が、逆にあたしの恐怖心を煽った。何だか彼女の心の内に潜む底知れない悪意が、一瞬顔を覗かせたような気がする。

「ただど意外にも、そんなパーニヤをラズネスの方が制止する。」

「ダメよパーニヤ。余計な騒ぎを起こす必要はないの。さっき言ったばかりでしょ？」

「え？ でもこいつら見逃してもいいの？」

「わざわざ相手にする必要もないでしょう。彼女たちは明らかに『ギルド』の人間じゃない。戦う力も持っていない者に構っている暇

はありませんよ」

何気なく言われたその言葉に、あたしは思わず唇を噛んだ。

『戦う力を持っていない』。

確かにその通りだけど、簡単に見破ったみたいに指摘されたのが悔しかった。

あなたじゃ何の役にも立たない。そうハッキリと言われたみたいで。

「あなたたちは一体何者なの？」 『ゴースト・コンダクター  
精霊指揮者』 って、一体何？」

突然横に立っていたミレーナさんが、そんな風に強い口調で言い放った。

思わずドキッと驚くあたしとは対照的に、ミレーナさんの表情は真剣で強い意志に満ちている。

「それを知りたいのなら、私が名乗ったその組織名をしつかりと覚えておく事です。いずれあなた方も、『全て』を知る時が来るでしょうから」

食い下がろうとするミレーナさんをあしらうみたいに、ラズネスは意味深な言葉を残して、桔梗色の長い髪を華麗に翻した。

「さあ、行くわよパーニヤ。 それでは名も知らぬお嬢さん方。急ぎの用があるので私たちは失礼しますね。ごきげんよう」

あたしたちに背を向けて裏路地の奥へ歩いていくラズネス。それに倣うように、パーニヤも渋々といった様子で歩き出す。

「仕方ないか。じゃあねお姉ちゃんたち。 バイバイ」

拍子抜けしそうな明るい声で手を振って、少女パーニヤもラズネスの後を追うように小走りで駆けて行く。

呼び止める事なんて出来なかった。

彼女たちが闇組織の人間だからと言って、戦う事なんて出来ない。そんな力なんて持っていない、あたしには。

どれぐらい走り続けた頃だろうか？ ゴツゴツとした地面が続く坑道内。その視界の先で、進んでいる道が二手に分かれているのが見えた。坑道の先はどっちも暗がり、奥の方まで見通す事が出来ない。

「どっちかが出口に通じてればいいんだけどな……」

そう呟きながら俺はとりあえず、二手に分かれた坑道の右手の道に掛け込もうとした。

だがその時、俺は何かの気配を感じて思わず足を止めてしまう。

「……？」

俺が進もうとしていた道の方から、誰かがゆっくりとこっちに向かってくるのがわかった。

坑道に響く何者かの足音。地面の細かい砂利を踏み付けるその足音と同時に、重たい何かを引き摺っているような音が響いてくる。

一体誰だ？ と思ってから、俺はある事を思い出した。

『ワーズナル』の『ギルド』で聞いた情報によれば、『グレッグス鉱山』入り口付近に現れる不審者の数は、男女四人だったという事を。

つまり今接近しつつある者は、ガラムの仲間？

「てめえも『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』の人間か？」

俺が暗がりに向けて言葉を掛けると、それに応じるみたいに闇の中から長髪の男が現れた。

歳や背格好はガラムと同じくらい。平坦な表情で感情が読み取りにくそうなその男の右腕には、青色と銀色で螺旋状に装飾された分厚い籠手が嵌められていて、手の甲に当たる部分に、何かの噴出口のような穴がある。

と、男の容姿を観察していた俺は、彼の左手が何者かの襟首を掴

んで持っている事に気付いた。

左耳に付けられた、逆さになった三角錐型の特徴的なピアス。

「アルフレッド!？」

俺がそう叫ぶと、寡黙な男は僅かに反応するみたいに眉を動かす。男に襟首を掴まれているアルフレッドは、身体を力無く投げ出している、所々に裂傷や打撲痕のような怪我をしているようだ。意識が無いのか、俺の声に反応を見せない。

「けどどういう事だ? 何でアルフレッドの奴がこんな所に……」

「まさか、あんたがその男を襲ったのか？」

「……」

俺の問い掛けに男は答えない。ただジッと俺の方を見つめているばかりだ。

すると突然、寡黙な男はアルフレッドの服の襟首から左手を離した。そして身体の正面で右腕を勢い良く斜めに払う。

するとその動作に合わせて、手の甲の辺りにある籠手の噴出口から、薄く透き通った青色の刃が飛び出した。男の脛<sup>すね</sup>辺りまで伸びた刀身は両刃のようで、刃先に進む程細く尖っている。

「……行くぞ『蒼牙』」

まるで戦闘開始の合図のように呟き、男は地面を蹴って俺に突進してきた。

「くっ!」

俺は思わず『魔術』を発動し、『<sup>フレイム・ロングソード</sup>紅蓮の爆炎剣』を出現させる。

男は瞬時に俺と距離を詰め、籠手型の剣による連続突きを放ってきた。

俺はその勢いに圧され後退しながらも、炎剣の刀身で突きの軌道を僅かに逸らすようにして何とか回避する。

だが異変は突如として起こった。

十数度目の突きを受け流した直後、『<sup>フレイム・ロングソード</sup>紅蓮の爆炎剣』が霧散するように消え去る。

「しまっ」

俺が叫ぶより早く、絶好の機会とばかりに男は素早く突きを放ってくる。

炎剣が突然消えた事でバランスが崩れた俺の左肩の辺りを、薄青色の刀身が裂いた。

「ぐあっ！」

紅い鮮血が軽く飛び散ると同時に、鋭い痛みが俺の身体を駆け巡る。

俺は地面を強く蹴って、男と距離を取った。左肩に受けた傷は深くはないみたいだが、ズキズキとした痛みのせいでじわりと汗が噴き出してくる。

それにしても、どうにか出来ないのかこの状況……。

さつきから周りの岩盤に埋まつてる『導力石』の波動に邪魔されて、まともに戦えない！

追い詰められた状況に歯噛みしていると、眼の前で異変が起きた。男が装着している籠手型の剣。その刀身部分で激しいうねりを上げながら大量の水が生まれ、掌に収まる程の大きさの塊が無数出来上がった。

「！ 刀身から水を生み出すって……、まさか『魔剣』か……！？」  
男が口にした『蒼牙』というあの籠手型の剣は、恐らくジンが使っている二つの剣と同じ、『魔剣』と呼ばれる武器だ。

『魔剣』とはその名の通り、『魔術』を武器に介して殺傷能力を高めた希少な武器の事だ。

製造の段階から高尚な『魔術師』と高い技術を持った『刀鍛冶』が共同で造り出していく『魔剣』は、強力な分製造するのが難しく、希少な物となっている。

この大陸にも数種類しかないと言われている『魔剣』。その能力は、剣によって様々な『魔術』の力が宿っているとされる。

今眼の前の男が扱っている『魔剣』は、水を生み出し操る事が出来るって訳か！

「……四肢を砕け。水流砕弾」  
ウォーター・バレット



呟くように男が言い放ち右腕を振ると、空中に静止していた無数の水の塊が弾丸のように俺の許に降り注いで来る。

すぐさま右に回避すると、俺が立っていた所の地面が水弾によって簡単に抉られた。

まるで鉄の塊がぶつかったみたいだ……。あの攻撃、見た目はある意味優雅だけどかなりの威力があるな。まともには喰らったらヤバイ……！

思考しながら後退する俺の視界の中で、男はさらに右腕を動かそうとする。

その瞬間、俺の身体に悪寒が走った。何か良くないものが近付いてると、そう思った時だった。

「ッハハア。ようやく追いついたぜ」

聞き覚えのある声の後に、鉄同士がぶつかるような音が聴こえ、続いて鋭い風斬り音が響いてきた。

「ッ！」

その方向を振り返る事なく、俺は素早く跳躍して地面から離れた。直後、暗がりから飛来した巨大な黒い鉄球が轟音を上げて地面に突き刺さる。

俺が空中で軽く身を翻し再び地面に着地した所で、暗がりから攻撃者が姿を現した。

橙色のバンダナを頭に巻いた、ガラム・ドラゴドムと言う男が。

「もう鬼ゴッコはお終いか？ てつきりもつと逃げてるもんだと思つて」

俺の顔を見ながらそう言い掛けたガラムは、少し離れた位置に立っている男を見て眼を丸くした。

「何だよ。お前がディーンを足止めしてたのか。なら逃げられなかったのも仕方ねえな」

納得したように告げ、ガラムはニヤニヤしながら男の事を見つめ

ている。

どうやら俺の思った通り、この寡黙な男もガラムの仲間らしい。警戒心をより強めていると、ガラムが妙に弾んだ声で話し掛ける。

「一応紹介しとくぜデイン。そいつの名はシグード・ファン。言うまでもねえが俺と同じ『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』の一員だ。ほとんど口を利かねえから、いつも俺が紹介してやってんだよ。面倒臭え奴だろ？」

少々馬鹿にしたようなガラムの発言にも、寡黙な男シグードは反応を返さない。ただ黙って俺の方を見つめているだけだ。

「だけど、どうする？ こいつら『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』が何を企んでるのは知らねえけど、追手が二人になった今の状況は窮地どころの話じゃない。『魔術』が上手く使えないんじゃ、正面切って戦うのも難しい。」

俺はここで終わりのか……？ まだ何も成し遂げてないのに……。「さあて、もういいだろ？ 無駄な足掻きは止めて大人しく殺されとけよ、デイン」

負の気持ちに支配され掛けている俺の耳に、ニヤリとした顔のガラムの言葉が響き渡る。まるで俺の戦意を、徹底的に削ぎ落そうとするみたいに。

さらにシグードも、容赦しないと云っているかのように右腕を構えている。

もう逃げ場はない。と、そう感じた時だった。

シグードの姿を眼に捉えていた俺は、その視界の端に倒れている人物を見つけた。

そいつの名はアルフレッド・ダグラス。俺をこの鉱山に閉じ込めた張本人。あいつが余計な事をしたせいで、俺はこんな状況に陥ってるんだ。

……ちよつと待てよ。そもそも俺がこの仕事を引き受けたのは、あいつの鼻を明かしてやる為でもあつたはずだろ？ ここで諦めた

ら、俺はあいつに負けたって事になるんじゃないか？

内心でそう考え始めると、何だか物凄くイライラしてきた。さっきまで心を支配し掛けていた絶望感が、見事なまでに晴れていく。

「……ふざけんよ」

「あ？ 何だつて？」

「ふざけんじゃねえええええつ！！」

俺が腹の底から叫び声を上げると、ガラムはキョトンとした顔になり、シグードも僅かに眉根を寄せた。

そうだ、ふざけんじゃねえ！ 何で俺が諦めなきゃいけないんだ！

俺にはまだやる事がある！

守らなきゃいけない人間がいる！

果たさなきゃいけない約束が残ってる！

今の俺には、『諦める』なんて言葉は存在しないんだ！

「いいぜ……。突破してやるうじゃねえか『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』……！」

俺は意識してニヤリと笑ってみせる。アルフレッドを含めた全員に、宣戦布告する為に。

「俺は絶対に諦めない。止められるモンなら止めてみやがれッ！！」

#### 第四章 全てを破壊する為に（後書き）

今回も気付けば文字数9000文字……。

これからも長ったらしい文章に付き合って頂ければ幸いです（笑）

## 第五章 退けない理由（前書き）

という訳で『鉦山都市編』第五章です。

何だか当初に考えていたものより、結構長くなりそうな気がしてきました。

いつになったら物語の核心に迫れるんだ……（笑）

## 第五章 退けない理由

『ゴースト・コンダクター  
精霊指揮者』。

私はこの名前に、何となく心当たりがあるような気がした。

自らをその組織の一員だと称する、ラズネス・ヴィルバルトンと  
言う女性と、パーニャ・ロンドベルと言う少女。

記憶喪失の私が言うのも可笑しい事だけれど、彼女たちに会った  
覚えはない。

それなのになぜ、私にはこの組織名に聞き覚えがあるんだろう？  
すでに立ち去ったあの二人は、私がミレーナ・イアルフスだと気  
付いた様子がなかった。という事は彼女たちも、私と会うのは初め  
てだという事だろう。

私の事に気付いていれば、恐らく『紺碧の泉』アジュール・ファウンテンで出会ったあのジ  
エイガと言う少年と同じような反応を見せたはずだ。

それがなかったという事は、私の考えが正しい事を表しているよ  
うに思う。

いずれにしろ彼女たちの存在は危険なものだ。

デーンくんのように戦う力を持っていない私たちにとっては、  
特に。

「リネさん、大丈夫？」

今リネさんは、倒れていた三人の『ギルド』の人たちを『治療』  
している最中だ。その表情が心なしか曇っているような気がして、  
私は声を掛けずにはいられなかった。

一体どうしたんだろう？ あの二人が去ってから、彼女は一言も  
口にしていない。まるで何かに打ちひしがれているような様子だ。

「……悔しいな、って思ったんです」

「！ えっ？」

『治療』を続けているリネさんが、少し俯いた状態で突然言葉を返  
してきた。

思った通り気分が沈んでいるようだ。声にいつもの彼女らしい明るさが欠けているのがわかる。

「さっきの人たちが何者なのかはわからないけど、的を射てますよね……。あたしには戦う力がない。どんなに強くディーンを守りたいと思っても、あたしは一緒には戦えない。いつも見てる事しか出来ない。その事を改めて自覚させられて、何も出来ない自分が悔しいんです……」

「……」  
「そうか……。私に焦る気持ちがあるように、彼女も自身の無力さを嘆いていたのね。」

戦う力を持ったディーンさんの傍に私より長くいた彼女だからこそ、彼を助けられない自分の存在を歯痒く感じているんだわ。

「あ、ごめんなさい。ミレーナさんにこんな事言っても困りますよね。あたしより大きな悩みを抱えてるのはミレーナさんの方なんです……」

「そんな事ないわ。大きかろうと小さかろうと、悩めるって事は凄い事だと私は思うわよ?」

私はリネさんの肩に手を置いて、彼女を安心させる為にゆっくりと声を掛けた。

するとリネさんは、少し驚いたように眼を丸くする。今の私からこんな事を言われるなんて思わなかったのかも知れないわね。

「だけど私は構わず続けた。自分の言葉を、自分自身にも言い聞かせるように。」

「ただどね、リネさん。例えあなたにディーンさんと同じような戦う力がなかったとしても、それで自分が無力だって感じるのとは違うと思う。今その人たちを『治療』しているように、きっとディーンくんにだって出来ない事はあるわ。だけど彼は、それだけの事で諦めたりしないはずよ。自分に出来ない事を嘆くより、自分にしか出来ない事を探して何事にも立ち向かう。ディーンくんならきっと、そうするんじゃないかしら?」

「自分にしか、出来ない事……」

「ただ他人任せにするって訳じゃない。自分の意志で行動する事が、一番大切なんじゃないかと私は思うわ」

そう締め括って、私はリネさんに微笑み掛けた。

ちよつと説教臭かったかな？ と内心で思っていると、リネさんはゆっくりと微笑み返してくれた。その顔に、さっきまでの陰りは少しも見当たらない。普段の明るくて優しい、彼女の笑顔だ。

「ありがとうございます、ミレーナさん。ちよつと元気出て来ました」

「そう、なら良かったわ。 さてと。じゃあ私も、自分に出来る事をしようかしら」

「え？ どうするつもりなんですか？」

不思議そうに尋ねてくるリネさんから視線を外し、私は地面に横たわっている三人の『ギルド』の人たちを見つめる。

「この人たちを襲った『精霊指揮者』ゴースト・コンダクターとか言う二人組の事を、『ギルド』に知らせに行かなきゃね。もしかしたらあの二人、ディーンくんが引き受けた仕事に関係してる人間かも知れないわよ？」

対峙するガラムとシグードの二人との間合いに気を配りながら、俺はチラリと地面に倒れているアルフレッドの方を見た。

彼は相変わらず意識があるのかないのかハッキリしないが、とにかく自分の足で歩けそうな様子じゃない。こいつらから逃げる為には、俺が担いで行くしかなさそうだ。

俺はアルフレッドから視線を外し、今度は逃げる為のルートを選



折する。

俺がさつき走ってきた道と、シールドが現れた道。その二本以外にもう一つ、未知の場所へと繋がっている道がすぐ傍にある。

距離的には大体六、七メートル程前方。走ればすぐに飛び込める程の距離だ。

「止められるモンなら止めてみる、ねえ」

思考している俺の耳に、嘲笑うようなガラムの声が響く。奴に視線を向けてみると、その顔はやはりニヤついた表情になっていた。

「カッコいい台詞だなあデイン。まるで正義の味方みたいじゃねえかよ」

そこで言葉を一旦切り、ガラムは両手に握った連なる鎖を弄ぶみたいに、ジャラジャラと鳴らした。

「その自信はどっから来やがる!？」

脅すように叫ぶガラムが動き出そうとするより早く、俺は行動を開始していた。

傍らのアルフレッドを素早く右肩に担ぎ、意識を集中させて周囲に炎の渦を作り出す。

「ッハハア！ 悪足掻きは止せ！ お前さんだつてもう充分わかつてるはずだろ？ この鉱山の中じゃ、『魔術』は何の役にも立たねえって事はよ！」

「どうかな？ 何の役にも、ってのはちょっと見当違いだと思うぜ？」

「ああん？ どういう」

ガラムが言い切るより早く、俺は頭上に集束させ始めた炎を、完全に集束し切る前に無理矢理『魔法』として発動させた。

「『クリムゾン・レイン深紅の流星』！」

力の集束も標的の絞り込みも全てが中途半端なまま発動した『魔法』は、炎の塊をただ乱雑にあちらこちらへ撒き散らすだけのものになった。

だけどそれが、最初から俺の狙いだ。

つまりは大掛かりな眼眩まし。

大きさもバラバラの炎の塊は、乱雑に坑道内の壁や地面に衝突して爆発を起こし、爆煙やら土煙やらで辺りを瞬時に覆い尽くした。

「チイツ！ まだこんな小細工を！」

視界の有無がほとんどなくなつた空間で、ガラムがそう叫んでいるのが聴こえたが、俺は気にせず一目散に走り出した。

ものの数秒で目的の道に飛び込んだ俺は、後ろを振り返る事なく全速力で走り抜ける。

「くっそ……！ 重たいな！ 何であんたがここにいたのか知らねえけど、呑気に気絶なんかしてんじゃねえよ！」

肩に担いだアルフレッドに文句を言うが、当然のように返事は返って来ない。

まあいいや。別にこつちも期待してた訳じゃねえし。

とにかく今は逃げるのが先決だ。『魔術』がまともに使えないつてももそうだけど、何よりこの状態のアルフレッドをどうにかしないと、気になって戦いに集中出来ない。確かにこいつはム力つく奴だけど、眼の前で死なれたりしたらこつちが困るからな。

そんな事を色々考えながら、俺は走り続けた。

前言通り、諦めるつもりなんて毛頭ない。

随分長い事走り続けた気がし始めた頃、漸く走っていた坑道の幅と高さが広がり始め、ガラムと遭遇した場所のような広い空間が俺の前に姿を現した。

さっきの場所と違って若干天井の岩盤も低くなっていて、全体的

に狭くなっているみたいだ。と、その空間の壁際の所に、周りの岩とは様子の違う煉瓦造りの建物のような物が屹立していた。

「何で鉱山の中に建物があるんだ？」

それによく見ると建物って言うか、一階建ての小屋みたいな造りだな。

長方形型で三メートルくらいの高さの小屋。中央にぼつかりと穴が開いてるだけで、扉と呼べる物は存在しない。何だか急拵いそぎえで造った感じが否めない小屋だ。

「まあいいや。とにかく少し休憩するか。応急処置に使える物もあるといいけど……」

独り言を呟きながら、とりあえず俺は中に足を踏み入れた。

天井から吊るされている『橙灯とうひ』の灯りが照らしている小屋の中には、細々した椅子やテーブルが乱雑に置かれていて、その上には何か書かれている薄汚れた紙が何枚も置かれている。

俺は担いでいたアルフレッドを適当な場所に下ろし、額に滲んだ汗を拭う。疲労感が半端じゃなかったが、とにかく小屋の中を調べてみる事にした。

「何なんだここ？ 誰もいないし……、それに何だ？ このテープルに置かれてる紙……」

「多分この鉱山に関係する調査資料だろう。差し詰めここは、正規軍兵士が使ってる坑内係員詰所って所だ」

「！」

突然声がした為一瞬驚いたが、俺はすぐにその声の主がわかった。そう、気を失っていたはずのアルフレッドだ。見ると息を少々荒くしながら、気分の悪そうな顔でこっちを見ている。

「何だよ、いつから眼が覚めてたんだ？ 大変だったんだからな、あんたをここまで連れて来るの。大体俺が今生き埋めになつてんのは、あんたのせいなんだぜ？ ……って言うか、俺を閉じ込めたはずのあんたが、何でこの鉱山の中にいるんだよ？」

俺が矢継ぎ早に捲まくし立てると、アルフレッドは顔を逸らしながら

答える。

「この鉱山は入口が二つあったからな。てめえを閉じ込めた後もう片方を塞ぎに行った所で、あのシグードとか言う男に襲われてこのザマだ。ハンツ……。我ながら情けなくて涙が出る」

忌々しそうに吐き捨てるアルフレッドは、当然泣くような気配じやない。

と、俺はそこでアルフレッドの言葉に聞き捨てならない台詞を見つけた。

「おい、ちよつと待て。入口が二つ……？ この鉱山の入口が二つあつたなんて話、俺は聞いてねえぞ？」

「当たり前だろ？ てめえを罫に嵌める為に、俺が『ギルド』で聞いて黙つてたんだからよ」

「ああ！？」

何だよそりや！？ ったく、何考えてんだこいつは。そこまでして俺にこんな嫌がらせしたかったのか？

行動の原理が全然理解出来ない。何だか怒りをぶつけるのも馬鹿らしくなってきた。大体、入口を塞ぎに行った所で自分が襲われてちや世話ねえって。

「つておい、待てよ？ じゃああんたがシグードに引き摺られてきたあの道を辿って行けば、外に出られるんじゃない……」

「そりや無駄だ。あのシグードって野郎、俺を襲った後で自分から入口を塞いでやがった。だから俺たちは完全に、この鉱山内に閉じ込められてんだよ」

「自分で塞いだ？ どういう事だ？ 何であいつらがそんな事するんだよ？」

「俺が知るか」

「またもや吐き捨てるように言い、アルフレッドはフンと鼻を鳴らす。」

その太々しい態度にイラッとしたものの、俺はどうにか思考を開始する。その内容は当然、今俺たちの障害となっている存在である

『ゴースト・コンダクター  
精霊指揮者』の事だ。

そもそもあいつらの目的は何なんだろう？

『ギルド』で仕事を引き受けた経緯から考えて、最初は単純に『導力石』を狙ってる連中なのかと思ったけど、どうやらそうじゃないらしい。

正規軍兵士を皆殺しにしてまで鉱山に入り込んだかと思えば、自分たちの方から生き埋めになる道を選んでは。

もし入口を塞いだのが、俺たちみたいな余計な人間を侵入させない為に起こした行動なんだとしたら、そうまでして成し遂げようとしてる事ってのは何なんだ？

それに俺にとって一番重要なのが、奴らがミレーナの事を知ってるって件だ。

確かガラムは言ってたよな。奴らにとって不利になる情報を、ミレーナが知ってしまった可能性があったって。

あまり考えたくはねえけど、もしかしたらミレーナの記憶喪失には、奴ら『ゴースト・コンダクター  
精霊指揮者』が少なからず関わってるんじゃないか？

俺には奴らにとって不利になるその情報ってのが、ミレーナの記憶喪失の原因と直結してるような気がしてならない。これも充分、嫌な予感ってヤツだ。

とにかく、今は少しでも早くここから脱出しないと。黙って奴らに殺されるなんて御免だし、何より今回の事をミレーナとも話してみたい。のんびり構えてる暇はないって事だ。

俺は思考を中断し、未だ具合の悪そうなアルフレッドに声を掛ける。

「あんたの言う通りここが坑内係員詰所なら、多分この中に鉱山の正確な見取り図があるはずだ。それを探して、塞がれた二カ所の入口以外に、地上に出る為の道がないか調べてみよう。……出来ればあんたにも手伝ってほしいんだけど、動けそうか？」

「馬鹿にすんな。動けるに……ッ、決まってんだろ」

明らかに無理をしている感じで、アルフレッドはよろよろと立ち

上がる。

「やっぱ止めとけ、と声を掛けようと思ったが、すでにアルフレッドはテーブルの上の紙を調べ始めていた為、結局俺は口を噤んだ。まあ一緒に探してくれる分には有り難い。ガラムやシグードはいつ俺たちに追い付いてくるかわからないんだ。作業は少しでも早く終わらせるに限る。」

「……しっかし、意外と紙の量が多いな。何かの数値とグラフを書いた紙や、この鉱山の土壌の性質や成分を書いた紙、さらには兵士の勤務表など、俺にとってはどうでもいい資料ばかりが出て来る。明らかに地図らしい物は見当たらない。」

「何なんだよこの紙の量は？ 変なグラフやら数値やらばかりで、肝心の見取り図が……」

「おい、『魔術師』。これじゃねえのか？」

相変わらず名前で呼ぼうとしないアルフレッドの言葉に渋々振り向いた俺は、彼が指で掴んでいる物に視線を向けた。すると確かに、その紙には地図を表しているような記号や形が描かれている。

それをアルフレッドは俺の方に器用に滑らせると、テーブルの傍にあつた鉄製の椅子にドカリと腰を下ろした。

俺はその紙を掴み、全体が見えるように両手で広げてみる。

縦四十センチ、横六十センチ程の長方形型の紙の右上部には『The mine floor plan』、つまり『鉱山内見取り図』と書かれている。どうやらこれに間違いないらしい。

「え〜つと。俺たちが今いる場所が……、ここか」

見取り図の右半分の真ん中辺りに、こここの場所を表しているらしい赤い色が付けられている。そして見取り図の下の方にある二カ所の入口の表示。これが現在塞がれている二カ所の入口だろう。

「って事はこの二つ以外に、外に通じてるような道があれば。」

「あれ？」

地図全体を見回していた俺は、ある一部分に何も記号が描かれていない、広い空間のような表示がある事に気付いた。

見取り図で言うと、紙の右半分の上部。俺たちが今いる場所から結構近い所だ。

「何でここだけ何も描かれてないんだ？ この地図だと、一応道は繋がってるみたいだけど……」

何だか得体の知れない空間だが、他に出口に繋がっていきそうな場所もない。とりあえずこの所に向かつてみるか。

「よし、地図は手に入れられた。行くぞアルフレッド」

そう言っただけで俺は、詰所の外に出ようとした。

だが可笑しな事があった。それはアルフレッドだ。

彼は俺が呼び掛けたにも拘らず、全く椅子から立ち上がる気配がない。項垂れるように椅子の背凭れせもたに身体を預け、ピクリとも動こうとしない。

「おいアルフレッド。聴こえてんだろ？ それとも歩けないのか？

だったら俺が

「うるせえ。俺はもういい。脱出したけりゃ一人で行けよ」

「あ？ 何言っただあんだ？」

俺は詰所から出ようとしていた身体を戻して、アルフレッドの傍らに立った。

それでも彼は俺と視線を交わそうとせず、俯いたまま口を開く。

「ここらが潮時だっけ事さ。てめえの事を罫に嵌めようとして、俺自身がこのザマだ。自分の目的すらまともにこなせない落ち零れは、ここらで犬死にするのがお似合いつてな……」

「おい、あんたさつきから何を

「どうして俺がこの街に来たかって聞いたよな？」

俺の言葉を遮り、アルフレッドはそんな事を言う。

ああ、そういえばそんな事聞いたっけな。で、それがどうしたってんだ？

「大した目的なんてねえのさ。ただ一人で、当てもなく大陸のあちこちをフラついてるだけなんだよ」

「一人で？ いや、だけどあんたにはチームを組んでる仲間が……」

「チームの連中は俺から離れていったよ」

「！」

呟くように告げたアルフレッドの言葉が、俺にある予感を齎した。アルフレッドからチームメンバーが離れる理由。それが俺には、一つしか思い当たらない。

「……もしかして、『ゴレム討伐作戦』の事があつたからか？」  
俺が静かに告げると、アルフレッドは力無く頷いた。まるで自分の無力さを、心の底から嘆いているみたいに。

「あの作戦の後、俺とチームを組んでた連中は、作戦があんな結末で終わった責任は俺にもあると言い出しやがってな。ほとんど絶縁に近い、仲間割れをした」

「……」

俺は黙ってアルフレッドの言葉を聞いていた。

あの作戦によって、俺には失つたものが少なからずあつたように、同じくアルフレッドにも、失つたものがあつたのか。確かに俺は、そんな事考えもしなかった。

あの一件に関して言えば、俺は自分が間違つた事をしたとは思っていないし、後悔をしている訳でもない。恨みたいなら恨めばいいし、嫌っているなら嫌つたままでいい。

今でも俺は、確かにそう思っている。

だけどそれは、結局俺が見て見ぬふりをしているだけなんじゃないか？

アルフレッドたちの思いに正面からぶつかるのが怖いから、わざと眼を背けて、嫌われ役を演じて、それでいいと自分に言い聞かせて……。

「その事で俺を恨んでるんだろ？ だから『ワーズナル』の『ギルド』で俺に会つた時、恨みを晴らそうと思つたんだよな？」

「ああ、そうだ。……だが結局、それすらまともに成功させられず、俺はこうしてボロボロの状態だ。ハン……。全く情けねえつたらありやしねえ」



俯いたまま、アルフレッドは力無く笑う。その姿は、つい数時間前に『ギルド』で見せていたあのイラつく態度とは無縁の、非常に弱々しいものだった。

その場に立ち尽くしている俺に向かって、アルフレッドはさらに諦めた言葉を投げ付ける。

「オラ、さつさと行けよ。どうせ俺が死んでも困る人間なんていやしねえ。ここで大人しく、あの『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』とやらにでも殺されてやるさ。まあ安心しろ。てめえがどこに逃げたかは言わねえで置いてやるから」

「ふざけんなこの大馬鹿野郎オツ!!!」

俺はアルフレッドの頭を上から思い切り殴り付けた。かなり余分に力を入れ過ぎたせいで、俺の右手にもじんじんとした痛みが走る。一方の殴られたアルフレッドは、両手で頭を抱えてバツと顔を上げる。

俺の一撃がかなり意表を突いたんだろう。彼の眼には殴られた痛みからか、薄らと涙が溜まっている。

「なッ、にしゃがんだ、てめえは……ッ!」

「何が大人しく殺されてやるだ! そんなもんで俺に借りでも作つたつもりなのかよ? ふざけんじゃねえ! 死にたがりのあんたと違って、俺には『魔術師として人を守る』っていう存在意義があるんだ。あんたの理屈も都合も関係ない。俺の眼の前にいる以上、どれだけ死にたいって言ってる奴がいたとしても全力で助ける! それが例え、大ッ嫌いなあんたでもな!」

「……………」

俺の最大級の叫びを前に、アルフレッドはキョトンとして口をパクパクさせている。

例えここで彼が何かしらの反論をしていたとしても、俺は有無を言わせるつもりはなかった。

自分の守りたいものは自分で決める。

『あの街』で眠り続けているはずのログハイムさんのような、余計

な犠牲者を出さない為にも。

## 第五章 退けない理由（後書き）

今回もディーンくん主体のお話でした。

まあ主人公なんだから当然なんですけどね（笑）

しかし最近リネさんとミレーナさんの影が薄い気がする……。

第六章 導く力 - Glimpse of the flame - (前書き)

いよいよこのお話で『フレーム・ウォーカー』も40部目に突入です！

読みに来て下さってる方々、本当にありがとうございます！

作者はこれからも頑張って執筆続けて行きますので、応援よろしく  
お願いします！

「襲撃されてた……!? 鉦山の詰所がですか!?!」

それは『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』と名乗る謎の二人組に襲われた人がいる事を、私が一人で『ギルド』に知らせに来た直後に聞いた言葉だった。私の剣幕に相当驚いたのか、カウンターに座る男性は躊躇いがちに言葉を続ける。

「あ、ああ。ついさつき別のギルドメンバーが様子を見に行つてわかつた事だ。詰所はほとんど破壊された状態で、駐在していた兵士たちも全員死亡。しかも鉦山内部に入る為の入口二カ所が、何者かの手によつて塞がれているらしい」

「そんな……!」

「何があつたのかわからないが、とにかく今近郊の『ギルド』や首都の正規軍に応援を頼んでる所なんだ。何にせよあそこには」

「デインくんは? さつきここで仕事を引き受けて、鉦山に向かつた二人は無事なんですか?」

何かを言おうとした受付の男性の言葉を遮つて、私は早口で尋ねた。今私が一番知りたいのは、デインくんの安否なんだから。

「詰所付近に彼らの死体はなかつたそうだから、恐らく無事だとは思う。が、居所が掴めていないというのが現状だ」

「……ッ!」

「お、おい! どこに行くんだあんた!」

男性の制止の言葉も、私の耳には届いていなかった。ジツとなんかしていられない。

早くリネさんにもこの事を知らせて、デインくんを探しに行かなくちゃ!

「おい、『魔術師』」

「何だピアス」

「てめえ……、こりや一体何だ？」

妙に気に喰わなそうな声を上げるアルフレッドに、俺は涼しい感じで言い返す。

「何って……、荷車？」

「見りゃわかんだよそんな事は！俺が聞いてんのはそういう事じゃねえ！何でてめえは人の身体を、土砂を運ぶ為の台車に無理矢理押し込んでんだ！舐めてんのか！？」

アルフレッドの言う通り、彼の身体は今、土砂を運ぶ為の台車の中に仰向けの状態で納められている。ちなみにこの台車は、詰所の横に放置されていたのを俺が勝手に拝借した物だ。

その中にアルフレッドを押し込む形で入れたのだが、台車の縁取りが四角く、底があまり深くない造りの為、彼の手足は台車からはみ出していて、酷く格好が悪い。

本人は気に入らないようだが、俺としては必要な措置だ。

「別に舐めてる訳じゃねえよ。俺の体格じゃあ、あんたを担いで長い距離を走るのは無理があるからな。だからこうして、台車を使ってあんたを運んでるんじゃないか」

「だから言ってるんだろ！？俺の事を置いて行けつてよ！こんな妙な格好させられるぐらいなら死んだ方がマシだ！」

「さっきも言っただろ？あんたを見捨てるって行為は、俺の流儀に反するんだ。まあ文句言わずに黙って運ばれとけつて。あんたがどう思っつてようと、指図するだけ無駄なんだからさ」

「ぶざけやがってクソ野郎が……ッ！この怪我が治ったらブツ殺してやるから覚悟しとけよてめえ……ッ！」

「そうかい。口は達者なようで何よりだ」  
アルフレッドの不満を適当にあしらいながら、俺は力強く台車を押し続ける。

さっきの詰所で手に入れた坑内見取り図。その図の中で唯一、他の部分とは違って何も記号が描かれていない場所。俺は今、そこに向かつて進んでいる所だ。

なぜ地図に何も描かれていないのか、という疑問は残るけど、こっちは一刻も早く鉱山の外に出たいんだ。出口が存在してるかも知れない可能性があるなら、とにかくそれに賭けるしかない。とりあえず今は難しい事を考えるのは止めておこう。

だが、そんな風に考えて進み続けていた俺は、結果的に落胆する事になる。

見取り図を手に入れた詰所から、ほとんど蛇行していない坑道を進み続けて十分程。

辿り着いた大広間のような空間は、完全に行き止まりになっていた。

「おい、嘘だろ。ここまで来たのに行き止まりって、そんなのありかよ!？」

天井の高さが三十メートル程の空間は、二十メートル程の奥行きがあるものの、出口どころか先へと続く道らしきものすら全く見当たらない。

嘆く俺を尻目に、待ってましたと言わんばかりにアルフレッドが口を開く。

「だから足掻くだけ無駄だったんだよ。いい加減でめえも現実を受け入れたらどうだ？ てめえが思ってる程甘くも優しくもねえんだよ、この世界はな」

「……………」  
クソ、今の状況だと何も言い返せねえ……。まだ諦めるつもりは

ないけど、こいつが言ってる事も確かに正しい気がする。

それにしても何なんだよこの見取り図は？ 何も描かれてない場所ってのは、単に行き止まりだったって事なのか？

「まったく、それならそうとちゃんと書いとけってんだ。人を糠喜ぬかびさせやがっ。

「あれ？」

ギスギスした気持ちで見取り図を見返していた俺は、不意にある事に気付いた。

俺たちが今いるこの空間。見取り図の縮尺と比べると、何だかちよつと狭くないか？

「あん？ 何してんだてめえ？」

見取り図を片手に壁際のおちこちをうろろし始める俺に、アルフレッドが怪訝な声を掛けて来る。

「いや、ちよつと気になつて」

生返事を返しながら、壁際の上から下をおちこち調べてみる。俺の考えが正しいとしたら、多分どこかに……。

「あつた！」

それは行き止まりになっている壁のほぼ中央。俺の目線より少し下の位置にあつた。

周りの岩に似せてはあるものの、明らかに質感の違う丸く膨らんだ突起のような物。縁に若干隙間が開いてるって事は、この突起は奥に押し込む事が出来るみたいだ。

俺はその突起を、迷う事無く奥へと押し込む。すると思つた通りガコツという音と共に、突起が壁の奥へと引つ込んだ。

その瞬間だった。

重たい石像を引き摺るような轟音が辺りに響き渡り、行き止まりになっていた壁の中心がゆっくりと左右に分かれ、さらに奥へと続く新たな道が姿を現した。



「な……！ どうなってるんだこりゃあ？ 鉱山の奥に、何でこんな仕掛けがされてやがる？」

アルフレッドは酷く驚いた様子で眼の前の光景を呆然と見つめて  
いる。

もちろん仕掛けを見つけた俺自身、かなり驚きの気持ちがある。

だけどアルフレッドの言う通り、何でこんな仕掛けが施された空間が鉱山の内部にあるんだ？ この先に、一体何がある？

「とにかく行ってみようぜ。話はそれからだ」

不安な気持ちを押し殺しながら、俺はアルフレッドと共に壁の向こうへと足を踏み入れた。

不安な気持ちに押し潰されそうだった。

『ギルド』から戻ってきたミレーナさんは、酷く焦った様子であたしに教えてくれた。

今デイーンが危険な眼に遭っているかも知れない、という事実を。

鉱山に向かう道走り抜けながら、あたしは隣を走るミレーナさんに声を掛ける。

「もしかして、詰所を襲ったのはさっきの二人組なんですか？」

「その可能性はあるわね。何だか『魔術』みたいな不思議な力を使っていたようだし、口振りや『ギルド』の人間に追われてる事からも、良い人間じゃない事は確かだわ」

そう答えるミレーナさんの表情は厳しい。多分あたしと同じで、

不安な気持ちを抑え切れないんだと思う。

『ゴースト・コンタクター  
精霊指揮者』。さつき現れたあの二人組がディーンの引き受けた仕事に関係してる人たちだとしたら、今もディーンの身には危険が迫ってる可能性がある。

彼を助けてあげたい。……ううん、助けに行かなきゃ！

例え戦う力がなくなっても、それがあたしの正直な気持ちなんだから！

「急ぎましょう、ミレーナさん。あたしたちにしか出来ない事を、成し遂げに行く為に！」

「ええ！」

あたしは改めて自分の思いを奮い立たせながら、駆け抜ける足にさらに力を込めた。

鉱山の麓は、すぐそこにまで迫っている。

幅十メートル程の綺麗に均ならされた道を五メートル程進むと、突然眼の前が明るく照らし出された。

『橙灯とうひ』の灯りとは違う。眼の前の光は、ほのかに青白い光を放っている。

意を決して、俺はアルフレッドの台車を押しながら光の中へと足を踏み入れる。

するとそこは、四角い箱の中のように綺麗な平面に均された部屋になっていた。その壁や床、天井といった至る所から、青白い光を放つ水晶のような結晶が無数に飛び出している。

神々しい、という表現がピタリと当て嵌まるような、不思議な雰

困気のある空間だった。

「何なんだ、この部屋？　もしかしてこれ、全部『導力石』なのかな？」

周りの光景に息を飲みながら進むと、部屋の中央には一際大きな結晶があり、それが天井の岩盤を突かんばかりの勢いで伸びている。天井までの高さは大体二十メートル。水晶の幅は十メートルはあるんじゃないか？

「これだけ異様にデカイな。ここまでデカイと『導力石』かどうかも怪しいモンだぜ」

俺と同じように水晶を見上げていたアルフレッドが、感嘆しているような言葉を漏らす。

その数秒後だった。

「『精霊石』」

「！！」

背後から聴こえた絶望を齎すような声。俺がゆっくりと振り返る間にも、声の主は続ける。

「元々特殊な波動を生み出している『導力石』の中で、稀に群を抜いて強力な波動を生み出す石が発見される事がある。それが『精霊石』と呼ばれてる代物だ」

「ガラム……！」

いつの間にか俺たちが入ってきた入口の辺りに、不敵な笑みを湛えたガラムが立っていた。傍らには当然、シグードの姿もある。

「しっかし驚いたぜ。まさかお前さんたちの後を追って来て目的の物が見つかるなんて、思ってもみなかったからな」

「目的の物？」

俺が怪訝な声を上げると、ガラムは右手でガリガリと頭を掻いた。「仕方ねえ。ここまで来ちゃったんだ。お前さんたちにも俺たちの目的ってヤツを教えてやるよ」

少々どころかかなり面倒臭そうに溜め息をついて、ガラムはゆっくりと口を開く。

「俺たちの目的は……、『デス・ベリアル』の復活だ」

「!？」

その言葉は、俺の耳を疑わせるのに十分な言葉だった。

そうだよ。そもそも俺は、その言葉の意味を知る為に旅をしていたんだ。

「けど何でだ？ 何でこいつの口から『デス・ベリアル』って言葉が出て来る？」

「いや、それ以前に。」

「一体何なんだよ、『デス・ベリアル』って？ あんたたちは何を企んでるんだ!？」

「言っただろ？ 俺たちの目的は『デス・ベリアル』の復活だ、つてな。……いや待て。『復活』つて言うと少し語弊があるか。より正しく言うなら、『召喚』や『降臨』と表現するべきだな」

説明を続けるガラムの傍らで、シグードが僅かに『蒼牙そうが』を構える。俺はそれに警戒しながら少しだけ後退った。

「何の話をしてんだよ？」

「お前さんも『魔術師』を名乗ってるぐらいなんだから知ってるはずだぜ？ この世界では大昔から、『精霊』の存在を重んじる思想がある事を」

「!」

ガラムの言う通りそういう思想がある事を、確かに俺はよく知っている。

「ただ俺は『魔術師』でありながら、そういう思想には否定的だ。存在が不確かなものを信じるといふ行為が、俺にはどうしても理解出来ない。」

「その『精霊』がどうしたつて言うんだよ？」

相変わらず疑問の言葉しか投げ掛けられない俺に、ガラムは呆れたように溜め息をついた。

「わからねえか？ 『デス・ベリアル』 ってのは、『閻属性』の力の根源として考えられている『精霊』の名前なんだよ。まあ分類的には、『悪魔』と呼ばれたりもするんだってなあ」

「はあ!？」

「おいおい、いきなり話が飛躍し始めたぞ。『精霊』だの『悪魔』だのが関わってくるのは、俺が最も苦手とする分野の話だ。」

「ちょ、ちよつと待てよ！ 『精霊』だって？ あんたそんなものが存在してるって本気で信じてるのか？」

「何か可笑しい所でもあるか？ 『精霊』 ってのは『魔術』の力を生み出す根源とも言われてる存在だぜ？ ならこつは考えられないか？ お前さんのような『魔術師』と呼ばれる存在そのものが、『精霊』の存在を証明している事に他ならないってよあ」

躊躇う事なくスラスラと持論を展開するガラム。その表情は、あの意味愉悅に浸っているようにも見える。

「……仮に『精霊』が存在するとして、あんたたちはそいつを呼び出してどうするつもりなんだ？」

「さっきお前さんにも名乗っただろ？ 俺たちの組織名をよ」

「!」

こいつらの組織名は『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』。

『精霊』、そして『指揮者』。

つまりこの二つの言葉が意味するものは……。

「『精霊』を使役し操る者、とでも言うつもりかよ？ 馬鹿馬鹿し過ぎる！ そんな事」

「有り得ないってか？」

俺の言葉を先読みしたガラムの表情は真剣だった。自身が行なおうとしている事に一片の迷いも無いと、そう告げているみたいだ。

「信じるつもりが無いならそれでいいさ。こつちだつてお前さんと、是非の意見を論じるつもりなんてねえからな」

「……!」

「まあそれはそれとして、だ。今お前さんの背後にあるその巨大な

『精霊石』。俺たちはそれを破壊する為にここに来たのさ。全  
く苦労したぜ。正規軍の連中がひた隠しにするその石を見つけ出す  
のはよ」

「!？」

正規軍が隠してた？ この『精霊石』ってヤツを？

確かにこの空間は、まるで隠し部屋みたいに大掛かりな仕掛けを  
施されてた。坑内見取り図に何の表記も成されてなかったのも、こ  
の空間の存在を軍兵士以外の人間に悟らせない為の措置だったのか  
も知れない。

だとしたら、正規軍はなぜこの『精霊石』の存在を隠そうとして  
いたんだ？

こいつらみたいな連中に狙われる事を恐れたから、か？

いや、ちよつと待て。今ガラムは、『精霊石』を破壊しに来たっ  
て言ったよな？

「お前さんが今考えてる通りだよ」

「!」

ガラムはまるで俺の表情から心の内を読んだように、ニヤリと笑  
って告げる。

「その『精霊石』を破壊する事が、『デス・ベリアル』を呼び出す  
為に必要な第一段階なのさ。だからこうして俺たちが、わざわざ鉦  
山の奥まで潜って探し回ってたんだよ」

「おい。あんたのその口振りだと、まるで正規軍が『精霊石』を狙  
われる事を恐れてるって言うてるように聞こえるぞ」

「ああ、そうだ。否定的な考えのお前さんと違って、連中は『精霊  
の存在を信じてるって事になるな」

嘘だろ……。正規軍がそんな懸念を抱いてるって事は、首都の元  
老院全員が『精霊』の存在を信じてるって事じゃねえか。

……。何かがあるんだ。元老院が裏で関わっている、俺自身想像し  
た事も無いような何かが！

「さあ〜て、おしゃべりはここまでだ。そろそろ俺たちの仕事を完

遂させてもらおうとしよう」

「ボーっとすんな『魔術師』！」

「……！」

思考に囚われていた俺は、シグードが瞬時に距離を詰め、突きを放とうとしている事に気付くのが遅れた。

すると防御する暇の無かった俺の目の前に、まともに動く事も儘ならないはずのアルフレッドが割って入り、二本の短剣でシグードの『蒼牙』を受け止めた。

「アルフレッド！ あんた」

「てめえのお節介に付き合わされてたら、こつちも諦めるのが馬鹿らしくなって来たからな。どこまで出来るかわからねえが、抗ってやろうじゃねえか」

「……そうかい。なら、そいつの相手は任せるぜ！」

アルフレッドにシグードを任せ、俺はガラムの方へと駆け出した。

奴は既に、その手に黒い鉄球を構えている。

あの凶器を投擲される前に、奴の懐に潜り込めれば！

「ツハハア！ 俺の相手はお前さんか！ 『フレイム・ウォーカー炎を操る者』！」

面白そうに叫びながら、ガラムは黒い鉄球を勢い良く投げ付けてくる。

奴のその動作に、俺は一瞬身を退いてしまいそうになった。

だけどダメだ！ ただ避けるだけじゃいつまで経っても奴に近付けない！ 奴に近付く為には、戦う為には、後もう一步踏み込む勇氣が必要なんだ！

鉄球が迫り来る瞬間、俺は鉄球の軌道擦れ擦れの所を斜め前方に飛び込むように回避し、すぐさま体勢を立て直して駆け出した。

通り過ぎた鉄球が、背後で岩盤が何かを砕くような音を立てるが、俺は気に留めず突き進む。

右手に炎を集束させ、炎剣を造り出そうと試みる。例えすぐに消えてしまおうとしても、ガラムに一撃を与えるぐらいの間は稼げるはずだ。

「『紅蓮フレイルムの

炎剣を造り上げ、それを振り下ろそうとした時だった。

背後から俺の左肩の辺りに、硬い何かが衝突した。

「がっ、あ……ッ！」

骨が軋むような激しい痛みと衝撃で、俺は前のめりに倒れ込んだ。同時に『紅蓮フレイルム・ロングソードの爆炎剣』が、霧散するように消え去る。

「何、だ……今の衝撃……ッ!？」

肩越しに背後を振り向くと、そこには否定したくなるような光景があった。

シグードを食い止めていたはずのアルフレッド。その彼が、首を掴まれた状態でシグードに片手で持ち上げられていた。

そのシグードの右腕の『蒼牙そうが』からは水滴が零れ落ちていて、水流を生み出したような痕跡がある。どうやら今の衝撃は、シグードの放った『水流碎弾ウォーター・バレット』だったようだ。

「どうやらお前さんの相方は、満身創痍の役立たずみたいだな」  
「！」

ガラムの動く気配に反応した俺は、振り向こうとした瞬間に顔を思い切り蹴り飛ばされた。

「うぐっ！」

地面を数度転がった俺は、仰向けになった所でどうにか立ち上がるうとする。

だがその瞬間。俺の視界に大量の水の弾丸が現れ、それが矢のよ  
うな速度で俺の許に降り注いだ。

「ぐああああああああっ!!」

身体のうちこちを鉄製の物で殴り付けられるような痛みが走り抜け、一瞬意識が飛び掛けた。

口の中が血の味で満たされている。身体をまともに動かす事が出来ない。



「くっ……、そ！」

それでもどうにかして立ち上がろうとしていた俺の耳に、呆れたようなガラムの声が近付いてくる。

「いい加減、悪足掻きは止せよディーン。諦めないって心構えは評価してやるが、ここまで来るとさすがにみつともないぜ？ なあっ！」

力を込めて叫ぶと同時に、ガラムは倒れている俺の腹の中心を足で勢い良く踏み付けた。

「がほおっ！」

鈍い痛みと共に、軽い吐き気が俺を襲う。

だがガラムはそんな事なんて気に留めた様子も無く、俺を踏み付けにしたまま嘲笑うように告げる。

「『導力石』の波動の影響で、『魔術』が上手く使えねえんだろ？

さすがの『炎を操る者』様も、この状況じゃあ形無しって訳だ」

「……ッ！」

俺が怒りに任せて睨み付けると、ガラムは軽くあしらうように笑ってみせる。

「ツハハア。見上げたもんだな。そんな状態になってまだ諦める気にならないってか？ 仕方ねえ。おい、シグード！」

俺から視線を逸らし、ガラムは突然シグードに呼び声を掛けた。

「一体何をやる気だこいつら……！！？」

怪訝に思い、俺がシグードの方に視線を向けると、シグードは左手で持ち上げていたアルフレッドの身体を自分の正面に持って行き、そして右腕をゆっくりと後ろに引き始めた。

「！ おい、待てよ！ まさかてめえ！」

制止の言葉を叫ぶ暇は無かった。

素早く突き出したシグードの右腕の刃が、アルフレッドの腹に突き刺さり、そして文字通り貫いた。

「アルフレッドー！」

一瞬の間、シグードはアルフレッドの腹から『蒼牙』<sup>そうが</sup>を引き抜く。

その瞬間。腹の傷口から鮮血が溢れ出し、彼の身体を紅く染め上げていく。腹を貫かれた事で激痛を感じているはずなのに、アルフレッドは叫び声すら上げなかった。

そのアルフレッドを放り捨てるように、シグードは彼の首から手を放した。すると糸の切れた操り人形のように、アルフレッドは地面に伏して動かなくなる。

「テツメエエエエエエエエツー！」

例えようのない怒りが全身から込み上げて来て、俺はその場で激しく抵抗しようとした。

だがその俺の首をガラムが右手で掴み、地面に磔にするように押さえ付ける。

「だから言っただろ？ いい加減諦めろってな」

「ふざけんなー！ 許さねえ……！ てめえらだけは絶対に！」

「そうかよ。だけど生憎だったな。こっちはお前さんに許してもらえないなんて、これっぽっちもねえんだよ」

無表情でそう告げると、ガラムは左手で黒い鉄球を持ち上げ、振り下ろそうとする体勢に持っていく。

何とかしなきゃいけない。なのに身体は動かない。

戦わなきゃいけない。なのに『魔術』が上手く発動しない。

何をやってるんだ俺は。こんな所で死ぬ訳にはいかないのに……。

守らなきゃいけないものがあるのに……！ 俺は何をやってるんだ！

何が『深紅魔法』の使い手だ！ 『魔術』が発動出来なきゃ、何の意味もないんだ！

発動しろ、俺の『魔術』！

いつも通りに行かないって言うなら、いつも以上に強い力を！

『導力石』の波動を打ち消すだけの力を！

「じゃあな、『炎を操る者』」

ガラムが鉄球を振り下ろす動作が、なぜかゆっくりとした動きに見える。

俺はただ、強く望んだ。

戦う為の、力が欲しいと。

「貴様が『炎髪』の民か」

「!!」

どこかから、そんな声が聴こえた瞬間だった。

俺の周囲に、激しい炎の奔流が突如として発生した。

「!? 何……ッ!?」

燃え盛る炎の熱さに怯んだように、ガラムは瞬時に俺から距離を取った。その表情には、畏怖とも取れる驚きが満ちている。

「おいおい……、嘘だろ？　ここは『導力石』よりも強力な波動を生み出す、『精霊石』がある場所だぜ？　今までの坑道内以上に、『魔術』を阻害する波動は強く発生してるはずだ。それなのに俺はゆっくりと立ち上がる。」

周囲を踊るように舞い続ける炎の奔流を、まるで深紅の衣ころもみたい纏いながら。

「何でお前さんは、それだけの熱量を持った炎の『魔術』を発動してやがる……!?」

驚愕に表情を強張らせるガラムとシグード。

その二人を前にして、俺は自然と笑ってしまっていた。

見る者を際限なく圧倒するような、強烈で不敵な笑みを。

何やら色々と説明があったりして、文末に？マークの多い回でした。

W

話が少し複雑になって来ているので、読みにくくなってないかな？と不安なんですがいかがでしょう？

それにしても今回もリネさん、ミレーナさんは影が薄いな……。

次の話では何とか活躍させるつもりでいます。

そして上の二人とは対照的に、登場しているにも拘らず全く喋っていないシグードくん。

無口キャラってどこもこういう扱いなんだろうか…… (笑)

第七章 脱出 - Break the quarry - (前書き)

お待たせしました、第七章です！

毎回同じ言い訳をしてる気がしますが、気にしないで読んでもらえると幸いです(笑)

## 第七章 脱出 - Break the quarry -

不思議な感覚に囚われていた。

自分の内側から、溢れ出るような力を感じる。

自分自身が炎になったみたいに、身体がとてつもなく熱い。

鼓動が今までに聞いた事のない程、強く高鳴っている。

だけど俺は笑っていた。

自覚出来る程、強烈に。

今までにない程、不敵に。

「何なんだ、お前さんのその力は……!？」

誰かの声が聴こえる。視線を向けると、そこにいたのはガラムだった。

……ああ、そうか。確か俺は、こいつらと戦ってる最中だったんだな。

頭の中で再認識し直して、俺は邪魔者どもをゆっくりと見据えた。こいつらを倒して、鬱陶うつとうしいこの鉱山からを抜け出す。とりあえずそれが最優先だ。

そう思った時だった。

唐突に、俺の背後で何かが強く光を放ち、辺りを照らし始めた。

平面に均された狭い空間内が、強い光によって真っ白に染め上げられていく。

するとその直後。硬い何かに罅ひびが入るような大きな音が聴こえ、それが断続的に続いて辺りに響き渡っていく。

「何? 『精霊石』が……!」

驚いたようなガラムの声で、俺は漸く背後を振り向く。

そこにあつたのは、天井の岩盤を突く程に伸びた巨大な結晶。その結晶の側面に、巨大な罅割ひびれがいくつも出来ていて、結晶は今にも崩壊しようとしている。

だが俺には、その光景を見ても何の感慨も浮かばなかった。

ついさっきまでなら確実に驚いていたであろうその光景に、興味を示す事が出来なくなっていた。

どうでもいい。石が崩れるから何だっつてんだ。

それよりも俺には、やってみたい事がある。

俺の周囲で激しく燃え盛る、舞い踊るような炎。

この炎の力をあいつらに……、ガラムたちにぶつけてみたい。どれだけの力があるのか、試してみたい。

俺は周囲の炎を見つめた後、ゆっくりと振り返り、右手をガラムたちの方へと差し向ける。

今の自分の力を試す為に。

自分の前に立ちただかる邪魔者を、焼き払う為に。

「！ ガラム！！！」

俺の動作から危険な雰囲気を感じ取ったのか、シグードは叫ぶと一歩前へ進み出た。

「ウォーター・シールド  
水流防壁！」

シグードが叫び右腕を振るうと、「蒼牙そうが」の刀身から大量の水が生み出され、眼の前の二人を包む青い球体に姿を変える。

その直後。

俺の周囲に生まれた無数の炎の塊が、ガラムとシグードに向かって放たれると同時に、俺の背後にある「精霊石」が、巨大な破碎音と共に砕け散るのがわかった。

だがそれでも俺は、一切振り向かなかった。

今はそんな事、どうでもいい。

飛来していく炎の塊たちは着弾の証として、俺の視界を埋め尽くす程の紅い爆発を、連鎖的に引き起こす。

爆風と爆炎が辺りに吹き荒んだが、俺は眼を細める事すらしない。そんな事必要ないと、俺の身体が告げていた。

すると突然、爆炎を突き破って黒い鉄球が俺の許に飛来してきた。

全てを破壊する超重量の一撃。

だがそれを見ても、俺は全く焦りを感じなかった。

軽く右手を振るって炎の渦を作り出して、易々とその一撃を受け流す。自分でも驚く程冷静に、呆気なくそんな芸当を成し遂げていた。

「『魔剣』の力で炎を防いだって訳か。大層な曲芸だな」

爆煙の向こうから現れた無傷のガラムとシグードに向かって、俺はゆっくりとそう言った。

俺と相對している二人の表情は驚きに満ちている。特にガラムの方は、ここに来るまでの間に見せた事のない表情だ。

「鉄砕の一撃も簡単に受け流しやがって……。どうなってやがる？

お前さんは一体」

「何者だろうと俺の知った事か」

ガラムの言葉を遮って、俺は笑っていた。笑みを絶やす事が出来なかった。

相手を圧倒する程の、強烈な笑みを。

「そんな面倒臭え話なんかどうでもいい。何だか今、物凄く気分が良いんだ。だからちよつとばかり、俺の相手になつてくれよ」

自分の内側から溢れ出るような力が、俺を歡喜させている。

自分自身が炎になったみたいに熱い身体が、俺を愉悅させている。鼓動が今までに聞いた事のない程強く高鳴って、俺を高揚させている。

何もかもが、心地良い感触だった。

そんな感覚に支配されながら、俺はもう一度、ゆっくりと右手を前方に翳した。

眼の前の敵を焼き払う。ただそれだけを考えていた。

「燃え尽きる」

一瞬の事だった。

俺が呟いた瞬間、俺の身長を倍ほども超える巨大な炎の奔流が生まれ、そして突き進み、俺の視界を真っ赤に染め上げた。



あたしとミレーナさんが鉱山の麓付近に辿り着くと、そこには背の高い人影が見えた。雰囲気から想像すると、多分『ギルド』の人だと思う。

「……ん？ おい止まれ。何だキミたちは。ここに何し来た？」

これ以上先へ進む事は許さないと云ってるみたいで、道の真ん中に立っている男の人は告げる。

眼の前に立ち塞がる男の人は、身長があたしやミレーナさんよりもかなり高く、服の上からでもわかるくらいに、全身の筋肉がかなり発達してる。おまけにその体格から出てくる声は野太く重い感じがして、相手を圧倒するのに十分な迫力だ。

だけど怯んでる訳にはいかない。あたしは乱れた息を整えながら、厳しい顔の男の人に言い返した。

「友達が……、あたしたちの旅の仲間が、今あの鉱山にいるはずなんです」

「仲間？」

「はい。さつき『ワーズナル』の『ギルド』であそこの詰所が襲撃されたって聞いて、心配になったから様子を見に来たんですけど……」

「そうか。だが悪いな。どんな理由があろうと通す訳にはいかない。見た所、キミたちは二人とも『ギルド』の人間じゃないだろ？ その仲間とやらの事が気になるのはわかるが、『ギルド』と正規軍の人間以外誰も通すなと言われてるんだ」

「そんな……！」

あたしが食い下がるような表情を見せると、男の人は少し困ったような表情になった。体格が大きいからもつと怖い人なのかと思っただけど、案外そうでもないのかな？

すると傍らのミレーナさんが、追いつきを掛けるみたいに真剣な表情で告げる。

「私たちの仲間も、元々正式な『ギルド』の人間じゃありません。その彼が巻き込まれてるのに、私たちには黙って見てるって言ってますか？」

「いや、そうは言ってもなあ……」

ミレーナさんの強い言葉に、男の人は圧倒されたみたいに言い淀む。このまま説得を続けられれば、もしかしたら通してもらえるかも知れない。

そう思った時だった。

唐突に地鳴りのような音が響き始めたかと思うと、それに続いて微かに地面が揺れ始めた。

その揺れが徐々に強くなるに連れて、あたしは足を取られそうになる。

「なっ……、何この揺れ？」

「む？ 地震か？」

男の人が不思議そうに、僅かに首を傾げる。

その瞬間だった。

突然、男の人の背後に見えていた鉾山の山肌の一部が、狂ったような紅い爆発を起こし、巨大な轟音を上げて、大きな炎の奔流が岩盤を突き破ってきた。

「なっ……！？」

何事かと振り返る男の人の傍らで、あたしもミレーナさんも呆然とその光景を眺めていた。

まるで生き物みたいに激しく暴れ回る、真っ赤な炎の波。火山が

間近で噴火したら、きつとこんな感じなんだろう。

だけどそれだけじゃない。激しく暴れ回る炎の奔流を見て、あたしは何だか、胸が締め付けられるような不安を感じた。

「……ディーン？」

確証なんて何もないのに、その光景を見ただけで、不思議とあたしは眩いていた。

何となくあの炎から、ディーンの強い意志みたいなものを感じる。それなのに、普段彼が使っている『深紅魔法』とは何だか違う。異質で重苦しくて、そして怖い。

普段のディーンが使っている炎を、白だと表現するなら、今あたしの眼の前で暴れ回っているあの炎は、黒。

そんな風を感じてしまう程、あの炎には違和感がある。

あたしはすぐ傍で呆然としている男の人の脇を抜けて、その炎が噴き出している所に向かって駆け出していた。

「なっ？ おい、キミ！」

背後で制止するような声が聴こえたけど、あたしは無視して走り抜ける。

物凄く嫌な感じがする。

眼の前の光景に。

視界の中で暴れ回る、真っ赤な炎に。

「何が起きてるの？ 一体」

独り言を呟き掛けたあたしは、突然辺りが暗くなっていく事に気付いて、思わず足を止めた。

空が曇り始めたのかとも思ったけど、そうじゃない。あたしの遙か頭上に、太陽の光を遮る物体が浮かんでいて、それが大きな影を作っているからだった。

「飛行船？」

全長二十メートルくらいはありそうな、縦に少し細長くなった銀色の船体。その側面に鳥のような翼が二枚ずつ付いていて、船首には向かい風を突き抜ける為なのか、鏃型の突起が取り付けてあり、

船尾には大きな筒状の物体が三つ備え付けられている。

かなり低空を飛行してるその船は、何だか徐々に地上に迫って来てるみたいだ。

「もしかして、ここに着陸しようとしてるの？」

だとしたら、一体誰が操縦を……。

そんな事を考えている間にも、空に浮かぶその飛行船はあたしの頭上を通り過ぎて行く。

すると、その時。鉱山の一角に出来ていた巨大な穴から、またも大きな爆発が起きた。

爆風と熱風に煽られ、あたしは両手で顔を庇った。

さつきから起きてるこの現象が、もしもあたしの予想通り、デインによって引き起こされてるものだとしたら。こんな出鱈目な力を使ってまで、彼は一体何と戦おうとしてるんだろう？

疑問と共に胸を過ぎる不安。それを自分で振り払うつもりで、あたしは顔を庇っていた両手を下ろした。

するとその視界の中。二十メートルくらい離れた位置に、いつの間にか人が立っている。

その数は二人。遠目だからハッキリとはわからないけど、多分両方男の人だ。

だけども。

「デイン……じゃ、ない？」

淡い期待を抱いてたけど、よく見ると姿が全然違う。

片方は、橙色のバンダナを頭に巻いて、右頬に十字架みたいな刺青をした男の人で、もう片方は灰色の長い髪に、感情が読み取りにくそうな平坦な顔をした男の人。その人の右腕には、分厚い籠手型の剣が嵌められている。

一体どこから現れたんだろう？ と、そんな風に思った時だった。

「また『ウォーター・シールド水流防壁』とか言う技を使ったのか？ 防御にも使えるなんて、随分便利な『魔剣』だな」

「！」

声がしたのは鉾山の山肌の部分。見るとそこには、直径五メートルくらいの大きな穴が開いている。あたしがよく知っているその声は、その中から聴こえて来る。

「それにしてもスゲエ威力だ。まさか一発で鉾山の外にまで穴をあけられるなんてな」

大きな穴の中から、轟々と燃え続ける炎を紅い衣みたいに纏って、声の主ディーンは現れた。

よく見ると、彼は自分の左脇に、傷だらけになったアルフレッドを抱えている。かと思っていたら、そのアルフレッドを無造作に地面に放り落として、バンダナを巻いた男の方を、ニヤリと笑いながら見つめた。

そのディーンの様子を見た瞬間、あたしはより一層胸が締め付けられるような気分になった。

何だか怖い……。今のディーンは、普段とまるで違う。例えどんなに優勢な状況で戦っていたとしても、彼はあんな不敵な笑みを浮かべたりはしない。

今までディーンを見てきたからこそわかる。今の彼は、ハッキリ言って不気味だ。

「ディーン……。一体、どうしちゃったの……？」

あたしがここにいる事にすら、ディーンは全く気付いてない。

ただ不気味に笑って、あの男の人たちを見つめ続けている。

「まあ、力試しもこれぐらいでいいか。次は容赦しねえ。一撃で灰にしてやるよ」

「！？」

あたしはディーンが言い放ったその言葉が信じられなかった。

彼はいつだって、例え相手がどんな人間だったとしても、止めを刺すという行為を行なおうとはしない。

現に彼は言っていた。

誰かを守る事が自分の『存在意義』だ、って。  
『魔術』で人を殺さないと、ミレーナさんと約束したんだ、って。  
なのに今の言葉には、そんな感情や思いが一切感じられなかった。  
比喩でも何でもなく、本気で相手を殺そうとしているように聞こえた。

可笑しいよ……。こんなディーンじゃない。あたしの知ってるディーンは、そんな言葉を口にする人じゃない。

自分の誓いを否定するような事を言う、そんな弱い人なんかじゃない！

「……だめ」

ディーンが笑いながら右手を高く掲げると、それに合わせるみたいに周囲の炎が集束して、巨大な炎の塊が作り出された。

直径五メートルはありそうな炎の塊を、ディーンは無慈悲に投げ付けようとする。

「だけどそんな事、彼にさせたくない。」

「ううん、違うよ。させちゃいけないんだ！」

「ディーン！　だめえええええッ！！」

だからあたしは力強く叫んだ。

喉が潰れるんじゃないかって言うくらい、強く。

ディーンに絶対に、そんな事をさせる訳にはいかなかったから。

「……？」

何だ？ 今、誰かが俺の事を呼んだ気がした……。一体誰が呼んでるんだ？

俺は振り翳していた右手を止めて、ゆっくりと辺りを見回してみた。

すると視界の端、少し離れた位置に、見覚えのある少女が立っているのが見えた。

少女は俺に何かを訴えているみたいに、必死な表情で叫んでいる。「リ……、ネ……？」

少女の名前を呟いた瞬間、俺の身体を支配していた言いようのない愉悦感が、徐々に和らいでいくのがわかった。

それと同時に、生み出していた巨大な炎の塊も、周囲で燃え続けていた炎も、高鳴っていた鼓動も、燃え盛るような身体の熱も、自分の内側から溢れ出るような力の気配も、全てが形を失うみたいに消え去っていく。

すると入れ替わるみたいに、全身にとてつもない疲労感が押し寄せてきた。

瞼が重い……。力が抜けていく……。

視界が暗転する直前、俺は確かに見た。

悲痛な表情で俺の許に駆けて来る、リネの姿を。

「デーン！！」

突然意識を失って地面に倒れ込んだデーンに、あたしは駆け寄って必死に声を掛けた。

返事はない。全身を力無くダラリと投げ出していて、よく見ると

身体のあちこちに打撲傷がある。

それと同じように、傍らで倒れているアルフレッドの身体には、斬り裂かれたような傷がいくつもある。特に酷いのが、お腹を貫いている刺し傷だ。

「まさか、あの人たちと戦ってたの……？」

「リネさん！」

背後から名前を呼ばれて振り向くと、ミレーナさんがこっちに駆けて来る所だった。彼女の表情からも、あたしと同じように焦っている事が簡単にわかる。

「さっきの『ギルド』の人は？」

「今の爆発を見て、応援を呼んでくるって言って街に戻ったわ。それより一体何が」

そこまで言い掛けた所で、ミレーナさんはハッとしたように息を飲んだ。そしてその場に屈んで、あたしと同じように倒れている二人に声を掛ける。

「デーンくん！ それにアルフレッドさん！ そんな……。こんなに怪我してるなんて……」

二人の怪我の具合を確かめながら、ミレーナさんはまるで自分の事みたいに関心をもち、顔を覗きこむ。

「二人とも怪我が酷いわ……。リネさんどう？ 治せる？」

「大丈夫ですよ、すぐに治しますから！」

あたしは強く頷いて、両手の手袋を外そうとした。だけ。

「おいおい、マジかよ？ まさかお前さんまでここに来てたとはな」

『治療』の力を使おうとしたあたしは、その言葉で思わず顔を上げた。

見るとさっきの男の人たちがいつの間にか近付いていて、驚いたような表情でこっちを見ていた。



「ただバンダナを巻いた男の人の視線は、あたしを捉えていない。あたしの隣にいる、ミレーナさんにだけ向けられている。」

「なるほど。記憶を失ってるからこそ、『フレイム・ウォーカー炎を操る者』様と一緒に行動してたって訳か。全く、何とも奇妙な巡り合わせだな」

「あなた、一体誰なの？」

一人感心したように話すバンダナを巻いた男の人に、ミレーナさんは不思議そうな顔で尋ねる。

すると男の人は、ニヤリと笑ってその問いに答えた。

「ああ、そういえばお前さんの方は、俺たち二人に会うのは初めてだったな。自己紹介しとくぜ。俺の名はガラム・ドラゴドム。」

「こっちは相棒のシグード・ファン。俺たちは二人とも、『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』って組織の人間だ。よろしくな、ミレーナ・イアルフス」

「！ 『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』ですって？」

「驚いた声を上げるミレーナさんと同じく、あたしもその言葉に眼を睜みはつた。あたしもミレーナさんも、その組織名にはさつき遭遇したばかりなのに……。」

「あん？ 何だよ、俺たちの事知ってんのか？」

バンダナの男ガラムは、首を傾げて不思議そうに尋ねて来る。するとミレーナさんは、今まで以上に表情を硬くして答えた。

「さつき『ワーズナル』で同じ組織名を名乗る人たちに会ったわ。」

「確かラズネス・ヴィルバルトンと、パーニャ・ロンドベルと言っていたかしら」

「ああ、そういう事か。…… たくあいつら。街にいる人間には関わるなって言っただろうが」

軽く溜め息をついて頭を掻くガラム。

すると今まで黙っていたシグードって人が、ゆっくりと口を開く。…… だがガラム。彼女らも自分たちの役目は果たしている。さっきの飛行船、あれは俺たちの迎えだろ？」

「そうらしいな。ま、あいつらも仕事はきちんとしてるみたいだし、拳骨一発ずつで勘弁してやるか」

今の緊迫した状況に不釣り合いな苦笑を浮かべ、ガラムはそんな事を言った。

「差し当たつての任務は終わった。が、その『魔術師』くんは余計な事を色々知つちまつてるからなあ。本来なら殺さなきゃいけない所なんだが……」

その言葉で、ミレーナさんはすぐさま身構える。あたしもディーナの身体をどうにか抱き起して、彼を庇う体勢を取る。

「ただどガラムは、そんなあたしたちを見て、心底面倒臭そうに溜め息をついた。

「そう睨むなよ。確かに殺さなきゃいけないのは事実なんだが、こつちも鉱山内を歩き回って疲れたからなあ。さつさと帰って、ゆっくり休ませてもらうとするさ」

こつちが拍子抜けしてしまう程のんびりとした様子で、ガラムは大きな欠伸をする。

その傍らにいるシグードも特に言及しないまま、右腕の籠手から伸びている剣の刀身を、器用に収納し、あたしたちに背を向けて先に歩き始める。

その後が続くようにして歩き出したガラムは、不意に立ち止まって肩越しに振り返った。

「その黒髪のお嬢ちゃん」

「！」

急にあたしの方に視線を向けて、ガラムはそんな風に言ってきた。何か変に子供扱いされてるような気がするんだけど……。

「お前さんの名前は？」

「……リネ、レディア」

あたしが少し躊躇いがちに名乗ると、ガラムは軽く頷いた。

「リネちゃんか。悪いが、そいつが眼を覚ましたら伝えといてもらえるか？」

「え？」

「近い内にまた、お前さんの顔を見に現れるからよろしくな、って

よ

何だか妙に嬉しそうな顔で告げると、ガラムは背を向けて歩き始める。

あたしの知らない所で、一体何が起きてるんだろう？  
『ゴースト・コ精霊指  
ンダクター』と名乗るあの人たちは、何をしようとしているの？

遠ざかっていく背中を見つめてそんな風に思い、あたしは答えがほしくて視線を下ろしてみる。

腕の中で気絶しているデインから、答えが返ってくる事はなかった。

第七章 脱出 - Break the quarry - (後書き)

この章を一言で言うなら、ディーンくんトランス状態、でしょうか  
(笑)

これにもちゃんと理由があったりしますが、それはまあ追々という  
事で。

今回はリネさんの出番ありましたね。

ミレーナさんがちょっと微妙な感じですけど……。

いよいよ『鉾山都市編』も佳境だなあ。

頑張って執筆せねば！>、  
, <

という訳で、『鉾山都市編』もいよいよ終幕となります。

終章も同時掲載しておりますので、読んで頂けると幸いです。

目覚めるとそこは、見覚えのない部屋だった。

白い石造りの壁に囲まれた、四角い天井。仰向けになった俺の身体を支えているのは、柔らかいベッドだ。もしかしてここ、『ワーズナル』の宿屋か？

俺は視線を巡らせて、ベッドの傍にある嵌め殺しの窓の方を見た。外は漆黒の闇に包まれていて、星が瞬いているのがわかる。どうやらいつの間にか、夜になってるみたいだ。

「痛ッ……」

俺は上半身を起こそうとして失敗した。よく見ると身体のおちこちに、包帯が巻かれていたり湿布が貼られていたりする。

ああ、そうか。確か俺、『グレッグス鉱山』の中でガラムたちと戦ってて、それから。

……？ 何だろう？ 途中から記憶が曖昧になってる気がする。ガラムが『精霊石』って呼んでた大きな水晶がある所まで行ったのは覚えてる。だけどその後、一体何があったんだっけ？ 何か、得体の知れない感覚に囚われてたような……。

と、そこまで考えていた俺の耳に、部屋の扉が開く音が聴こえてきた。

もう一度、どうにか上半身を起こして扉の方に視線を向けると、丁度リネが部屋に入ってくる所だった。俺と眼が合うなり、その表情が驚きに満たされる。

「デーン！ ビックリしたあゝ。眼が覚めてたんだね」

「ああ、ついさっきな」

「気分はどう？ 具合が悪くなつてたりしない？」

俺の方へと足早に歩み寄りながら、リネは心配そうに尋ねてくる。俺は少し痩せ我慢して、首を横に振った。

「これくらい何ともねえよ。動かせない程じゃないしな」

そう自分で答えた所で、俺はふと疑問に思った。

いつもなら俺が怪我してると、大抵リネが『治癒』の力を使って完治させてくれる。ところが見ての通り、俺の怪我は手当こそしてあるものの、治っているとは言い難い状態だ。

少々彼女の力に頼り過ぎてる気がしつつも、俺は何となく気になつて聞いてしまう。

「なあリネ。俺の怪我、お前の力で治せなかったのか？」

身体中に施された包帯や湿布を見ながら俺が尋ねると、リネはベツドの傍にある椅子に腰掛けながら、少し困つたような顔で答える。

「あゝ、それがね……。ちよつと言い辛い事なんだけど……」

「あん？ 言い辛いつて何が？」

「デイン、覚えてない？ あたしとミレーナさんが、デインに合流した時の事」

「……いや、悪い。何か記憶が曖昧で、あんまりよく覚えてねえんだ」

しばらく考えてみてから俺が答えると、リネは「そっか……」と言つてから、躊躇いがちに続ける。

「あたしとミレーナさんがデインを見つけた時、一緒にアルフレッドさんの事も見つけてね。二人とも怪我してたんだけど、アルフレッドさんの方が重傷を負つてて……」

「！」

そうだよ、思い出した。あいつ確か、鉱山内でシグードの奴に腹を刺されたんだ！ くそ、何でこんな大事な事忘れてたんだ？

「それで、アルフレッドは？」

「ああ、心配しないで。傷は確かに酷かったけど、幸い見つけたのが早かつたみたいだから、大事になる前にあたしの力で治せたんだ。ちよつと傷跡が残ると思うけど、命に別状はないから」

「何だ……。そうなのか」

安堵して軽く息を吐いた所で、俺は自分がアルフレッドの身をかなり心配していた事に気付いた。

「まったく、俺も甘いよな。自分を罫に嵌めようとした奴の事を気に掛けるなんて。」

「ん？ ちょっと待てよ。じゃあもしかして、俺の怪我が完治してないのって……」

「う、うん……。アルフレッドさんの怪我を治すのに、あたしの力をほとんど使っちゃったから、デイーンの怪我は完全に治せなかったの……」

つまり俺は後回しにされたって事か。ちくしょう、何かあいつの身を案じてた自分が馬鹿らしく思えてきた。

俺がかなり不満な顔を見ると、リネは俺の内心を察したように慌てて弁明する。

「ご、ごめんね。正直あたしも迷ったんだけど、でもデイーンならきつと、自分より先にアルフレッドさんを治してくれって言うはずだと思つて……」

少ししょぼりした様子で、リネは身体を縮込ませる。

「って言うか、そんなあからさまに落ち込むなよ。これじゃあ何か俺が悪者みたいじゃねえか。」

俺は軽く溜め息をついて、リネの頭を右手で軽くポンと叩いた。

「別に気にしてないからそんな顔すんな。お前がいなかったら、アルフレッドは死んでたかも知れねえんだ。謝る必要なんてどこにもねえよ」

最後に付け足す感じで、俺は出来るだけ柔らかく笑ってみせる。

すると俺の顔を見たリネが、突然表情を崩して、今にも泣きそうな顔になった。

「はっ！？ お、おい、どうしたんだよ？ 何でいきなり泣きそうになつてんだお前！？」

彼女の泣きだしそうな顔を見て、思いつ切り取り乱す俺。うーん、何かリネの手玉に取られてるような気がバシバシすんだけどなあ……。

「だ、だって……。あたしが知ってる、いつも通りのデイーンなん



だもん。だから何か、安心しちゃって……」

リネが目尻を拭いながら言ったその言葉が、俺の耳に引っ掛かる。

「おい、何の話だ？ いつも通りも何も、俺は別に」

「デイン……、もしかして覚えてないの？」

「え？」

リネは拍子抜けしたような顔で俺を見つめていた。何の事を言っているのかわからない俺は、そんな彼女の表情を見つめ返すしかない。

やがてリネは口を開いた。

まるで俺を諭すかのように、ゆっくりと。

「俺が、ガラムたちを殺そうとしてた……！？」

「……うん。少なくとも、普通のデインじゃ有り得ない感じだったよ。何て言うか、別人みたいで凄く怖かった……」

しばらくの間、お互いの知っている事を整理していた俺は、リネの口から出た事実が信じられなかった。

彼女はこんな事で嘘をついたりはいしない。彼女が見たと言っただから、恐らく本当の事なんだろう。

だけどそれにしただって、俺は一体何をやってたんだ……。危うくミレーナとの約束まで破りそうになってたなんて……。

「デインは、その時の記憶が無いんだよね？」

「無いって言うか、物凄く曖昧になってるんだ。上手く言葉で言い表せねえんだけど……」

思い出せ、何かがあったはずだ。あの『精霊石』の間で、何か

……。  
必死に頭を働かせて、俺は可能な限り記憶を遡る。

そして唐突に思い出した。

アルフレッドが刺された直後、俺の頭の中に響いてきた、あの『声』の事を。

『貴様が「炎髪」の民か』

そうだ、俺の頭に響いたのは、確かにこんな言葉だったはずだ。重苦しい、雷鳴のように轟く声。あの声の主は一体誰なんだ？ それに、『炎髪』の民って一体……。

「デイン……、大丈夫？」

思考に囚われていた俺がハッと顔を上げると、すぐ傍でリネが心配そうに俺の顔を覗き込んでいた。

俺は咄嗟に、何でもない風を装う。

「ああ、心配すんなって。確かに妙な話だけど、考えても理由がわかんねえからな。今はとりあえず後回しにしとこうぜ」

「え？ う、うん……」

俺が軽い感じで言った言葉を、リネは少し納得のいってない様子で受け取る。

リネを心配させる訳にはいかない。気に掛けてくれるのは有り難い事だけど、それでもこれは俺の問題だ。

俺が自分で解き明かさなきゃいけない問題。そんな気がする。

「そうだ。そういえば、ミレーナは？」

俺が話題を無理矢理変えると、リネは特に何も言わずに会話を合わせてくれた。

「さつきから、一人で『ギルド』の人に事情聴取を受けてくれてるの。『やっぱりデインくんにだけ無理はさせられない』、って言うてね。あたしも一緒に受けるって言ったんだけど……」

「けど？」

「えっと……、デインに付いてあげて、って言われて……」

少し照れたような表情で、リネはモジモジしながら言う。今の言

葉、何か照れるような部分あったか？

「そっか。なら、俺もミレーナに任せっ切りにしとく訳にはいかないな」

俺がそう言っつてベッドから立ち上がるうとすると、リネは慌てた様子で止めようとしてくる。

「だ、だめだよディーン！ 打撲傷っつて言っつても、動いたら身体に良くない」

「何だ、意外と元気そうじゃねえか」  
「！」

リネの言葉を遮る声がして振り向くと、開けっ放しになっていた部屋の扉の所に、いつの間にかアルフレッドが立っていた。

腕を組んで壁に凭れているその身体には、俺と違って包帯や湿布のような物は見当たらない。

「何しに来たんだ？ 見舞い、な訳ねえよな？」

俺があからさまに嫌な顔を見ると、アルフレッドはフンと鼻を鳴らして、俺の方へと歩み寄ってきた。

「鉱山の中で言っただろ。『怪我が治ったらブツ殺してやるから覚悟しとけ』、つてよ。どうも俺の怪我は、この女が妙な力で治しやがったみたいだからなあ」

余裕のある笑みを浮かべて、アルフレッドはリネの顔を一瞥する。その視線が痛いのか、リネは困ったような表情で俺の方を見つめてきた。

「つたく、だから言わんこつちやない。やっぱこんな奴の心配なんてするもんじゃなかったんだ。

「で、わざわざ俺を殺しに出向いてきたって訳かよ？ そりゃご苦労なこつたな」

俺が溜め息混じりに言っつてみせると、アルフレッドは笑みを消して俺を真剣な眼で見つめてくる。

負けじと俺が見つめ返すと、視界の端でリネがオロオロしているのがわかった。つたく、緊張感の無い奴だな。

「……ま、殺しに来たつてのは冗談だが」

数秒経つてから、アルフレッドがそんな事を言つて視線を逸らし、ガシガシと頭を掻いた。そして仕切り直すように続ける。

「てめえに渡すモンがあつてよ」

「あ？ 何を」

俺の言葉を最後まで聴かず、アルフレッドは徐にズボンのポケットから革製の小袋を取り出し、それを俺に向かって軽く放り投げた。きた。

俺はそれを、零す事なく右手で受け止める。すると右手に、何やら硬い感触が伝わつてきた。

「？ 何だこれ？」

「今回の仕事の報酬だ。一応仕事はこなしたと認められたみたいだな。ついさつき『ギルド』に寄つて、もらつてきてやつたんだよ。それがてめえの取り分だ」

「俺の取り分つて……」

袋を開けなくてもわかる。仕事を引き受ける前に言われていた報酬から考えると、この膨らみは二人分に配分されてない。十割丸々が入れられてるはずだ。

「あんたの取り分は？」

俺が尋ねると、アルフレッドは不機嫌そうに顔を逸らして、まるで床に話し掛けてるみたいに口を開いた。

「……今回の件。最初に俺が余計な事をしなけりゃ、もつと簡単に事は片付いてたはずだ。てめえも俺も余計な怪我せずに済んだらうし、あの場所に閉じ込められてなきや、てめえももつとまともに戦えてたはずだしな。それにてめえの連れには、怪我まで治してもらつた」

そこまで告げた後、アルフレッドは背を向けて部屋の扉の所まで歩いていき、一旦立ち止まつてからまた口を開いた。

「俺の取り分はその代償だ。文句言わずに有り難く受け取つとけ。じゃあな」

そんな捨て台詞を残して、アルフレッドはさっさと部屋から出て行ってしまった。

……何だよ。やけにしおらしいじゃねえか。

「って言うか、何が有り難く受け取っとけだ。そもそもあいつが話をややこしくしたんじゃねえか」

「何か、思ってたより優しい人なのかもね。あのアルフレッドって人」

「はあ！？ どこが！」

軽く微笑んでいるリネから視線を外し、俺はベッドに倒れ込む。

今、改めて確認出来た事がある。

やっぱり俺は、あいつが大嫌いだ。

それからしばらくして、事情聴取を終えたらしいミレーナが、俺の休んでいる部屋を訪れた。

本当は迎えに行こうとしたんだが、リネが頑としてそれを認めようとせず、結局俺はミレーナが帰ってくるまでの間、ベッドで横になって待つ羽目になった。

「とにかく無事でよかったわ。私の事は気にしなくていいから、ゆっくり休んでね」

帰ってくるなり、ミレーナは開口一番でそんな事を言った。ホント、記憶喪失になる前のミレーナからは、想像出来ないような優しい言葉なんだよなあ……。

なんて事を心の中で思いながら、俺は彼女たちとある事を話し合う為に、スッと頭を切り替える。

そのある事とはもちろん、あの連中、『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』に関する事だ。

俺が『グレッグス鉱山』で知り得た情報は次の通り。  
記憶を失ったミレーナを襲ったのが、『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』の一員だという事。

記憶を失う前、ミレーナが奴らにとって、不利になる何かを知ってしまった可能性があった事。

奴らの目的が、『デス・ベリアル』の復活だという事。

『デス・ベリアル』とは、『魔術』において『闇』の『属性』を司る、『精霊』の名称らしいという事。

そして『デス・ベリアル』を復活させる為には、『精霊石』という特殊な石を壊す必要があって、それに関して、首都の元老院が何かを知っている可能性がある事。

俺が全てを伝えると、リネもミレーナも一旦、言葉を失ったように静かになった。

「俺だつてまだ信じられねえし、『デス・ベリアル』の事に関しては、素直に信じるつもりもない。だけどミレーナの記憶喪失には、奴ら『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』が少なからず関わってるのは間違いないと思う」

俺はそこで言葉を切つて、ミレーナの方を見る。彼女は言葉を失っているようだし、不安も感じているような表情だ。

「なあミレーナ。奴らの事に関して、何か覚えてる事はないか？  
何でもいいんだ」

俺は無理な質問だと思いつつも、それでも敢えてぶつけてみた。  
だがミレーナは当然ながら、首をゆっくりと横に振る。

「ごめんなさい。『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』って名前に心当たりがあるような気はするけど、それ以外は何も。街で組織の一員だつて名乗る人に会った時も、何もわからなかったし……」

「さつきリネが言つてた、ラズネスとパーニヤつて奴だな？」  
言いながら俺が視線を向けると、リネは僅かに頷く。

「デインは覚えてないと思うけど、デインが戦つてたガラムと

シグードって人を迎えに、大きな飛行船が飛んで来たの。今思えば、あれを操縦してたのがその二人だったんだと思う」

「……って事は、奴らの組織には少なくとも、六人の人間がいるって事だな。しかも『精霊石』の件から考えると、元老院は奴らみたいな組織の存在を前々から知ってた可能性がある」

ガラムとシグード、ラズネスとパーニヤ、それにミレーナを襲ったヤツと、ガラムの言ってた『ボス』を含めて最低六人。

こいつらの存在を、元老院が把握してるのかどうかはわかんねえけど、何かを知ってる可能性が高いのは事実だ。

俺が内心でそう結論付けていると、リネがふと思い出したように口を開く。

「そういえば、あのガラムって人がディーンに言ってたよ。近い内にまた、ディーンの顔を見に現れるから、って」

「ハッ！ 随分勝手な物言いだな」

あいつの言葉を借りるなら、俺は余計な事を知った人間の一人って訳だろうからな。口封じの為に命を狙いに来る、って言いたいんだろう。

まあ何にしる、ミレーナの記憶を取り戻す為に旅を続ける以上、奴らとまた会う事になるのは間違いなさそうだ。

「でもディーン、これからどうするの？」

リネは少し不安そうに、これからの指針を確かめようとしてくる。だからこそ俺は、一切迷いなく返答する。

「決まってるだろ。当初の予定通り、このまま『サランドロ』に向かうさ。さっきも言ったけど、俺はあいつらの言葉をそのまま信じるつもりはない。自分の目で確かめて、自分で判断する」

奴らの狙いは『デス・ベリアル』。

そして『デス・ベリアル』とは、ガラムが言うには『精霊』の名前らしい。

奴の言ってた事が本当なら、『サランドロ』にある『魔術の館』の文献の中に、それらしい記述が載ってるかも知れない。

「見つけてやるさ。何が何でも、手掛かりをな」

次の日の昼前。リネの『治癒』の力が使えるようになるのを待つて、怪我を完全に回復してもらった俺は、二人を連れて『ワーズナル』を後にしようとしていた。

駅へ向かう途中、街の風景を眺めながら、不意にミレーナが口を開く。

「一日しか滞在してないはずなのに、何だか物凄く長い時間、この街に留まっていたような気がするわ」

「まあ、確かに色々あったからな。そう感じるのも無理ないと思うぜ？」

俺とミレーナは、そんな風に言葉を交わしながら歩いていた。

すると、少し前を歩いていたリネが突然立ち止まり、肩越しに俺の方を振り返る。

「ねえ、ディーン。あそこにいるのって、アルフレッドさんじゃない？」

「え？」

リネに指摘されて俺が視線を向けると、駅のホームへ入る為の改札の所に、アルフレッドの姿が見えた。柱に身を預けて腕組みしているアルフレッドは、まるで誰かを待ってるみたいだ。

少々嫌な予感を覚えつつも、俺は二人を連れて改札に向かう。すると当然のように、アルフレッドは声を掛けてきた。

「よう。これから出発すんのか？」

「見りゃわかんだろ。で、何だ？ まだ何か用があんのか？」



早々に話を切り上げたかった俺が冷たく言うと、アルフレッドは腕組みを解いて俺の真っ正面に立ちはだかった。

「おいおい、まさか昨日の冗談を実行しに来たんじゃねえだろうな？」「お節介なてめえに付き合ってたら、俺も少し考え方が変わったもんでな。一応てめえにそれを伝えに来た」

「あ？ 何の話だ？」

僅かに身構える俺を気にした様子もなく、アルフレッドは続ける。「以前チームを組んでた連中と、絶縁に近い別れ方をしたって言うたる」

「……ああ、言ってたな」

そんな事になったのは俺のせいだ。それはもう、充分わかってる。こいつもそう思ってるから、俺に仕返しみたいな事をしようとした訳だしな。

「それがどうしたんだ？」

俺が再度尋ねると、アルフレッドは真っ直ぐに俺の眼を見て、真剣な表情でこう言った。

「そいつらを探して、もう一度キチンと話し合ってみようと思う」「！」

「どれだけ詰なられようと、忌み嫌われようと、あの時のてめえみたいに、無様に必死なこいて、悪足掻きしてみるさ」

そう言っただけでアルフレッドは微かに笑みを見せた。その表情は、俺が今までに見た奴の表情の中で、一番爽やかで、嫌味の無い物だった。

「仲間の行方に当てがあるのか？」

「さあな。まあ適当に探し回ってみるさ。『ギルド』の仕事はまだ続けてるはずだろうしな」

そう答えると、アルフレッドは俺の横を通り抜け、背を向けて歩いて行くようにする。

「アルフレッド！」

思わず俺が呼び止めると、アルフレッドは僅かにこっちを振り向

いて、悪ぶったような笑みを見せる。

「じゃあな、ディーン・イアルフス。いつか俺がてめえを殺しに行くまで、絶対に死ぬんじゃないぞ」

「ハッ！ 上等だ！」

俺が返した言葉にアルフレッドはフンと鼻を鳴らし、再び背を向けて歩き始める。

「頑張れよ、アルフレッド」

「ハン。てめえもな」

振り返らずに言葉を返し、アルフレッドは徐々に駅から遠ざかっていく。

その背中をしばらく見つめていた俺に、一部始終を見ていたリネが、不思議そうな顔で尋ねてくる。

「ねえ、今の何の話？」

「べつに。何でもねえよ」

不思議そうに顔を見合わせるリネとミレーナを尻目に、俺は快活に笑っていた。笑う事が出来ていた。

アルフレッド・ダグラス。

俺の大嫌いな、新しい仲間と呼べるかも知れない存在。

「さあ、俺たちも行こうぜ！」

あいつに新たな目的が出来たように、俺にも新たな目的が出来た。知らなきゃいけない、確かめなきゃいけない事が山程ある。

そして今度こそ辿り着くんだ。

真実が見つかるはずの港町、『サランドロ』へ。

という訳で第八章、いかがだったでしょうか？

作者自身、話の要点を上手くまとめられてるかどうか、正直不安で  
たまりません(苦笑)

どこかで矛盾が生じないように、頑張って執筆していきます！

## 終章 黒の先駆者

乾いた地面が支配する荒野を踏み締めながら、俺はあと僅かで、目的地に到着しようとしてた。

行く先の名は『サランドロ』。

その街の近郊で、俺が狙う『英雄』の一人、フォード・ヒースクライムが目撃されたらしい。

どこまで信用性のある情報かはわからねエが、他に当てがある訳でもねエ。ま、全ては街に辿り着いてからだな。

「……………？ あ？ 何だこりゃ？」

歩き続けていた俺は、不意に辺りが暗くなり始めた事に違和感を覚えた。

今はまだ昼時のはずだぜ？ それとも雨でも降りそうなのか？

そう思つて空を見上げた所で、俺はどういう事か漸く理解した。

太陽の光を遮るようにして、全長二十メートル級の飛行船が、俺の頭上を飛行してやがる。

側面に鳥みてエな翼が二枚ずつ付いていて、船尾には大きな筒状の物体が三つ備え付けられた、銀色の船体。

見覚えのねエ機体だ。しかもどういふ訳か、俺の行く手を遮るみてエに着陸態勢に入りやがった。

「チツ。また正規軍の連中か？ 相変わらず、人の邪魔するのが好きな連中だなア」

この手の奴らに追われるのは、何も珍しい事じゃねエ。正規軍やら『ギルド』やら、俺の行く手を阻もうとする連中は大勢いる。全くメンドクせエつたらねエぜ……………。

なんてあれこれ考えてる間に、銀色の飛行船は俺から三十メートル離れた位置に着陸していた。

船体の側面にある扉が開き、中から誰かが出て来やがる。しかも一人じゃねエ。四人いるみてエだ。

「ッハハア。おいおい。上空から見た時はまさかと思ったが、やっぱり見間違いじゃなかったみたいだな」

俺の方に歩み寄ってくる四人の内の一人が、妙に弾んだ声でそう抜かしやがった。

……あん？ あの顔、よく見たら見覚えのある奴じゃねエか。

「久しぶりだなあ、ジェイガ・デイグラッド」

俺と五メートル程の距離を開けて立ち止まったのは、橙色のバンダナを頭に巻いた男。確か名前は……。

「ガラム・ドラゴドム、だっけか？」

「ッハハア。一度しか会ってねえのに覚えてもらえてるなんて、俺としても光栄な限りだ」

「ねえ、ガラム様あ。こいつと知り合いなのあ？」

ガラムの奴のすぐ後ろにいた十代前半のガキが、妙に間延びした声で口を挟んで来やがった。何だこのガキ？

「あ、そっぴやお前は、ジェイガに会うのは初めてだったな。紹介しとこう。こいつの名はジェイガ・デイグラッド。ボスがお気に入りにしてる『魔術師』さんだ」

「！ ジエイガ・デイグラッドってえ、もしかしてノイエ・ガルバドアの」

ガキがそう言い掛けた瞬間、俺は『黒閃魔法』を瞬時に発動して、ダイク・デスサイズ漆黒の大鎌』の刃をガキの喉元に突き付けた。

「何も知らねエでその名を口にしない方が身の為だぜ、クソガキ」俺がそう告げても、ガキは顔色一つ変えない。どうやらただのガキって訳じゃあないらしい。

すると、その時。

「パーニヤに手出ししないでもらえますか？」

いつの間にか、俺の背後に長髪の女が立っていて、手に持った刃の広い槍を、俺の首筋に当てている。この女の方も、どうやら只者じゃなさそうだ。

「いいよラズネス。こいつ気に喰わないから殺しちゃお」

「止せ、パーニヤ、ラズネス。そいつと戦う必要はない。お前さんも、その物騒なモンを仕舞ってもらえると有り難いんだがな」  
パーニヤとか言うガキが動こうとした瞬間、ガラムが制止するよ  
うな言葉を放つ。

少々気に喰わなかったが、俺が大鎌を消滅させると、ラズネスと  
か言う女も槍を下ろし、パーニヤとか言うガキも急にニコニコした  
笑顔に戻りやがった。

「悪いな。ワザとやってる訳じゃねえんだ。勘弁してやってくれ」  
苦笑混じりに俺に言ってくるガラムの横では、シグードが無表情  
のまま突っ立ってやがる。

こいつにも以前会った事はあるが、その時もこいつは一切口を利  
かなかつた。全く、何考えてやがんのかわからねエ奴だ。

「チツ……。そんな事より、テメエらここで何してる？俺になん  
か用か？」

「いや、実は俺たちも、この辺りでちょっとした用事があってな。  
今はその帰りって訳だ」

何だそりゃ。要は偶然通り掛かっただけって事じゃねエか、くだ  
らねエ。

「そうかよ。なら寄り道してねエでさっさと帰れ。こっちはテメエ  
らの相手してる程、暇じゃねエんだよ」

元々相手する気もなかった俺は、ガラムたちを素通りして歩き始  
める。

すると、そんな俺を引き止めようとするみてエに、ガラムがこん  
な事を抜かしやがった。

「ああ、そういうえば。俺たちが用事を済ませてきた所で、お前さん  
が狙ってる『英雄』の一人を見たぜ」

「……何？」

聞き捨てならねエ言葉に、俺は立ち止まってガラムの方を振り返  
る。何が面白いのか知らねエが、ガラムの奴はニヤリと笑いながら  
続ける。

「『深紅魔法』の使い手、ミレーナ・イアルルスだよ。お前さんも当然、知ってるよな？」

「当たり前たるオが。奴には『アジュール・ファウンテン紺碧の泉』で一度会ってる。奴がそこにいるかも知れねエって情報を俺に教えたのは、他でもねエテメエらだろ」

「あゝ、そーいやそーうだったな」

ふざけやがって。何企んでんのか知らねエが、人を小馬鹿にするのが好きな野郎だ。

「で、肝心のお前さんの『本命』の居所は聞き出せたのか？」

ここぞとばかりに話を続けようとしやがるガラム。

正直相手にするのはメンドクセエが、ノイエの事を引き合いに出されると、俺も黙ってる訳にはいかねエ。

俺は仕方なく、話を続ける事にした。

「いや、途中で余計な邪魔が入りやがったから、結局確かな事は何もわからねエままだ」

「そうかい。……とところでよ。その余計な邪魔ってのはもしかして、ディーン・イアルルスの事なんじゃねえか？」

「！」

あん？ こいつからあの紅髪あかがみの話が出て来るって事は、まさか。

「とつくに気付いてるだろうが、俺たちもあいつに会ったんだよ。いやゝ、中々面白い奴だったぜ？」

「テメエらが出掛けてきた先ってのはどこだ？」

「『ワーズナル』って言う鉱山都市だ。ここから結構近い所だな」

「……！」  
まさかあの野郎、俺と同じで『サランドロ』を目指そうとしてやがるのか？

「……面白エ。何しに来るつもりか知らねエが、捻り潰す機会が出来るそつだなア」

それだけ確認出来りゃあ充分だ。こいつらとの会話も、少しは役

に立っためてエだな。

俺はそこで無理矢理会話を打ち切り、再びガラムたちに背を向けて歩き始めた。

すると背後から、ガラムの野郎がしつこく声を掛けて来る。

「お前さんも、『サランドロ』へ向かうつもりなんだろ？」

「だったら何だ」

会話の雰囲気嫌でもわかる。恐らくガラムの野郎も、俺と同じ結論に辿り着いてやがるんだ。

その証拠に、ガラムは最後にこう言った。

「今度こそ殺せよ、ミレーナ・イアルフスを。それから、お前さんの邪魔をしたディーン・イアルフスもな」

「ハッ！ テメエに言われるまでもねエ！」

ガラムの言葉を切って捨て、俺は歩調を速める。

来るなら来やがれ、ディーン・イアルフス。

今度こそテメエを、捻り潰してやる！



## 終章 黒の先駆者（後書き）

という訳で、『鉦山都市編』終了です。

ちゃんと推敲はしてるつもりだけど大丈夫かな……。

可笑しな所があれば、ドンドン指摘してもらえると助かります（笑）

次回からはいよいよ、『魔術の館編』が始まります！

お楽しみに！

## 序章 死を齎す悪魔（前書き）

お待たせしました、『魔術の館編』始動です！

では、毎度の事ながらあらすじを。

採掘場での戦いによってディーンは、自分の想像しえない何かがこの大陸で起こりつつある事を自覚し始める。

一方その頃、すでに『サランドロ』の片隅には、『魔術師』ジェイガの姿があり、彼を追うジンもまた、今まさに街を訪れようとしていた。

そうとは知らずに、『魔術の館』を目指すディーンたちは、そこで偶然、『英雄』フォード・ヒースクライムと出会う。

彼との出会いは、ディーンたちに何を齎すのか？  
今ここに、物語の役者たちが集結する。

## 序章 死を齎す悪魔

『精霊』。

それは俺たち『魔術師』の間では、何百年もの間語り継がれている、万物に宿ると言われる力の象徴にして、根源的な存在。

その存在があるからこそ、この世界には『属性』と呼ばれるものが存在し、それによって自然界のバランスが均等に保たれていると言われている。

そして、この世界に存在する六つの『属性』の内、『炎』、『水』、『風』、『地』の『四属性』が、『魔術』において『四大属性』という括りで表される。

だが残りの二つ。『光』と『闇』はこの括りから外れ、『二大属性』として、ある種の信仰的な意味合いで表される事が多い。

その理由として挙げられるのが、この二つの『属性』を成している存在が、『精霊』とは少し違った神秘的な存在だと信じられているからだ。

すなわち、『天使』と『悪魔』。

もちろんその存在を確かめられた人間は、俺の知る限りではないはずだ。

ならばなぜ、そんな存在が信じられているのか？ という疑問は俺にもあるが、残念ながらその問いに答えられる材料が無い。

それもあるからこそ、俺は『サランドロ』へ向かってみようと思っただ。

『王立・歴代魔術文献管理書庫』。  
別名、『魔術の館』。

大陸一にして唯一の『魔術図書館』。そこには、ジラータル大陸において積み重ねられてきた歴史、それに絡む『魔術』的な事象、及び各地に残る伝説といった様々な情報が、膨大な資料となつて眠っている。

俺たち『魔術師』の間では、『魔術の館』へ行けば、この大陸の全てがわかるとさえ言われていて、『魔術』研究の為に訪れる者も多いそうだ。

思わぬ寄り道で時間を喰ってしまったが、俺たちはもうすぐ、そこへ辿り着こうとしている。

探す項目はもちろん、『デス・ベリアル』。

ミレーナの記憶喪失と、何らかの関係があるはずのその言葉。

鉱山都市『ワーズナル』で遭遇した、『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』の一員であるガラムの言葉を借りるなら、それは『闇属性』の力を司る『精霊』の名称だと言う。

奴の言っていた事が本当かどうか、確かめなきゃいけない。

全ての謎を解き明かす為に。

そして、ミレーナの記憶を取り戻す為に。

## 第一章 未だ知り得ぬ集結

ノイエ・ガルバドア。

俺に『黒煉魔法』を教えた、本来なら師匠と呼ぶべきなのかも知れねエ男であり、同時に最も殺意を向けている存在。

初めてあの野郎に出くわしたのは、今から十年前。

『倒王戦争』が終結してから二年。この大陸の暦が、『倒王暦』に切り替わって間もねエ頃。大陸全土に戦争の爪痕が残り、疲弊した状態が続いてやがった頃。

事の発端は、俺が全てを失ったからだった。

全てを失った俺は、全てを呪い、全てを憎み、全てに復讐する事を誓った。

「力が欲しいか、小僧」

俺にそんな台詞を浴びせやがったのが、他でもない、あの野郎自身だった。

だからこそ俺は、そんな奴の言葉に従った。

力を手に入れる為に。

憎しみをぶつけるべき相手、『魔術師』どもを蹴散らす為に。

そしてノイエ。

テメエをこの手で、殺す為に。

「港町『サランドロ』か……。思ったたより広い所だなア」

街全体を見下ろせる小高い丘の上から、俺はじっくりと街の全体像を見渡していた。

海岸に向かって緩やかな坂になった地形の上に、段差状に並んだ『サランドロ』の街並み。

大陸内移動用の列車が発着する駅から、真つ直ぐ港まで伸びる大通りには、この位置からだとよくわからねエが、商店らしきモンも多く立ち並んでやがる。

さすが港町って言うだけの事はあるなア。コの字型に造られた港に停泊してる船の数が、大小合わせて三十は下らねエ。どうやら漁業も盛んなようだし、『紺碧の泉』アシユール・ファウンテンとはまた違った意味で活気がありそうな街だ。

それに街の南側。港から程近い位置にある丘の上に、白く巨大な建物が屹立してやがる。

周りを少し木々で囲まれた、ここから見える街並みとは雰囲気の異なる構造物。あれが、『魔術の館』か……。

だがまア、あれが俺の目的って訳じゃねエ。用があるのはあくまでも、ここらで目撃されてるはずの『英雄』様の方だ。

「この街のどつかに、フォード・ヒースクライムがいるらしい、つて事だが……。さアて、どうしたモンか」

『紺碧の泉』アシユール・ファウンテンの時は、手っ取り早くミレーナ・イアルフスを探し出す為には街を襲撃したが、今回は慎重を期した方がいいかも知れねエ。何せ今回の相手は、五人の『英雄』の中で、最も冷静沈着でキレ者だつて噂の、フォード・ヒースクライムが相手だからなア。下手に騒ぎを起こすと、裏を搔かれて逃げられる可能性もある。迂闊な事はしねエ方が身の為だ。

それにガラムの話じゃ、あの紅髪あかがみとミレーナ・イアルフスもここに向かつてるかも知れねエらしい。

あの紅髪あかがみの事だ。俺がフォードを狙つてる事を知れば、また邪魔しに来るに決まってやがる。ホントにメンドクせエ野郎だぜ……。

「まア、ここでジツとしてても埒が明かねエ。探してみるか、フォードの野郎を」

適当に考えをまとめて、俺は丘を下り始める。

妙に心地良い風が、突き進む俺を邪魔するみてエに、軽く前髪を揺らした。

金属が擦れ合うような独特の音を立てて、俺たちが乗り込んでいた列車がゆっくりと駅に停車した。

資金不足に陥るっていう、何とも間抜けな理由で余計な時間を費やしてしまったけど、どうにか『サランドロ』へ辿り着く事が出来た。

「はあ、何か列車の旅もあつという間だったね」

車両から下車しつつ軽く伸びをするリネは、少し気だるそうな声でそう言った。

するとその隣を歩いているミレーナも、少し疲れたような声で相槌を打つ。

「そうね。それでも、やっと目的地に着いた、って気もするわ。金銭的に仕方がなかったとはいえ、少し寄り道もしちゃった訳だし」  
何かこの二人、俺の知らない間にドンドン息が合って来てる気がする。まだ三人で旅を始めてから、そんなに経ってないはずなんだけどな……。やっぱり女同士っていうのは、仲良くなり易いものなんだろうか？

二人のそんな様子を横目に見ながら、俺は駅の改札を潜り、『サランドロ』の街中に足を踏み入れる。

「うお……！　こりや中々の景色だな」

早速俺たちを出迎えたのは、遠くに広がる青い大海原だった。

駅が設置されている位置から、海岸線に向かって緩やかな坂になつているらしく、ここからだと思やかな波の様子を、存分に望む事が出来る。

太陽光を反射してキラキラ輝く海の景色は、この距離からでも本当に綺麗だと思える物だ。

大通りの先にある港、それに街並みの大きさから考えても、どうやらこの街は、俺が思っていた以上に面積が広い。やっぱりこの大陸唯一の図書館がある街ってだけに、それなりの活気はあるのかも知れないな。

「うっわあ〜！ 海だ！ やっぱり広くて大きいんだねえ」

俺と同じように海の方角を見つめて、感慨深そうにリネが言う。

何だか妙に、新鮮さを感じる事の出来る発言だな。

「なあ。お前もしかして、海を見るの初めてだったりする訳？」

少々どころかかなり気になって俺が尋ねると、リネは苦笑しながら言葉を返す。

「うん、そうだよ。あたしね、生まれ故郷の『ブラウズナー溪谷』を旅立ってから、ずっと内陸の地方ばかり回ってたの。だから写真なんかでは見た事あったけど、実物を見るのはこれが初めてなんだあ」

「そう、なのか？」

「へえ〜、そういう事もあるものなのね……」

俺と同じように、ミレーナも少し驚いたような表情になる。

そういえばリネの故郷は、大陸の西側にある『ブラウズナー溪谷』だって、前に聞いた事があったな。

彼女の一族は、元々人里離れた場所で暮らしてたらしいから、こういう事が起きるのは当然かも知れない。

『妖魔』一族。『治癒』の力という特殊な能力を持っていたが故に、『倒王戦争』の頃に滅ぼされた、悲しい一族。

普段俺は、『治癒』の力を使わないリネを見ると、どうしてもその事実を忘れてしまいそうになる。

彼女はいつも明るくて、子供っぽくて、泣き虫で、そして優しい



女の子だ。特殊な力を持つてる事以外、どこも普通の人間と変わらない。

一目見ただけで、彼女が『妖魔』一族の生き残りだなんて気付ける奴は、恐らく一人もいないだろう。それぐらい、リネはごく普通の女の子なんだ。

……そういえば、彼女の持つ『治癒』の力つてのも、考えてみれば不思議な能力なんだよな。

確かに『魔術』の力に似てはいるけど、彼女は『魔術師』じゃない。その『治癒』の力だつて、元々『妖魔』一族が持ってたものだ。儀式や何かで手に入れた訳じゃない。

だとしたら、彼女が持つてるこの力は、一体何なんだろう？

今まで深く考えて来なかったけど、『魔術』でもない力を生まれただ時から有してるなんて、不思議と言えば不思議過ぎる。

……まあ、だからこそ『倒王戦争』の際、前テルノアリス王に狙われる羽目になったんだろうけど。

「……ディーン？　どうかしたの？」

リネが不思議そうな顔で首を傾げている事に気付き、俺は思わず首を横に振る。

ダメだな。すぐに余計な事はつか考えちまう。俺の悪い癖だ。

「悪い悪い、ちょっとポーっとしてた。そうか、海を見た事ねえのか」。ならこの際、思う存分見て眼に焼き付けとけ。もしまた内陸部に戻る事とかになったら、しばらく見られなくなる可能性だってあるんだからよ」

「え？　う、うん」

何一人で焦ってるの？　と言いたげなりネから視線を外し、俺は『サランドロ』の街並みに眼を向けた。

ここに来た目的は、あくまでも『魔術の館』に立ち寄る事なんだ。調べなきゃいけない事は山程ある。とにかく気を引き締めて行かないと……！

「よし！　じゃあまずは宿の確保！　それが終わってから、『魔術

の館』を探しに」

「ねえ、ディーンくん。ちょっといいかしら？」

まるで仕切り直そうとする俺の出端を挫くみたいに、突然ミレーナが言葉を被せてきた。多分彼女に悪気はないんだろうけど、それにしたって絶妙のタイミングだよな、ホント。

何だか話の腰を折られたような気分になりながら、俺はミレーナの方を振り向く。

「何ですかミレーナさん」

「あ、あら？ どうして急に敬語に？」

「いや……、何でもないですから続けてください」

「？ え、ええ。もしかしたらと思ったんだけど、『魔術の館』ってあれなんじゃないかな？」

「え？」

ミレーナが指差しているのは、街の南側の方角。その方向に視線を向けてみると、周りの街並みより少し高くなった丘の上のような場所に、白い大きな構造物が立っているのが見えた。

建物の周囲は少し木々に囲まれているが、街の中にあるどの建物よりも、その大きさがかなり目立っている。ミレーナの言う通り、あれが『魔術の館』なんだろうか？

「とにかく行ってみましょ？ もちろん、ちゃんと宿の確保をした後でね」

俺が白い建物から視線を外すと、優しく微笑むミレーナの顔が、そこにはあった。

そんなミレーナの言葉通り、街の一角で宿の確保をした後、俺たちは白い建物の前まで辿り着いた。

ここに来る途中、宿の主や街の人間に話を聞いた所、今眼の前にあるこの建物こそが、『王立・歴代魔術文献管理書庫』、つまり『魔術の館』で間違いないようだ。

街並みから少し外れた、緩やかな坂を登り切った頂上にある、白い大きな建物。高さは二十メートル程で、幅は三十メートル程って所か。

敷地の入口に当たる所にある、アーチ状の鉄製の門。五メートル程の高さのそれを潜ると、整備された石畳の道が続いている。その道から幅広の階段を三段上った位置に、閉じられた茶色い両開きの扉があり、その前には屈強な体軀をした男の門番が二人、どっしりと構えている。

「うわあ……、何かテルノアリス城に入った時の事思い出すな……。急に肩凝ってきた」

「ホント、凄い嚴重って感じだね。門番さん以外にも、見回りの人結構いるよ？」

敷地内を歩きながら、周囲の様子を見回していたリネが、少し緊張した様子で言う。

敷地内にいる見回りらしき人間は五、六人。こちらは男だけでなく女も混じっているようだが、確かにそいつらがさつきから、茶色い扉を目指して歩く俺たち三人に視線を向けている。

睨まれてる訳じゃないが、かと言って全く無視されてる訳でもない。まあ向こうも、これが仕事な訳だからな。俺たちが妙な行動を起こさないように、独特の気合を入れて見張ってるって事なんだろう。

「すみません。中でちょっと調べたい事があるんですけど」

扉の前に辿り着いた俺は、門番の一人にそう言って声を掛ける。すると意外にも、門番はすんなり言葉を返してきた。

「どのような物をお調べになりたいのですか？」

「え〜っと……」

どうしよう。『デス・ベリアル』について調べに来ました、なんて言っても通じると思えねえし……。ここは適当に答えとくか。

「歴史関係の事柄なんだけど。特に、『倒王戦争』の事とかを調べたいんだ」

「わかりました。では失礼ですが皆さん、入館の前にこれを腕に嵌めて頂けますか？」

門番はそう言っ、俺たちに人数分の腕輪を差し出してきた。

手錠のように取り外す為の鍵穴がある以外、特に何の模様も装飾も無い、瑠璃色の腕輪。

今までに眼にする機会が多かったからわかる。この腕輪は間違いなく、『導力石』を加工して作られた腕輪だ。

って事は……。

「もしかしてこれ、『魔術師』を警戒してるからなのか？」

「ええ、そうです。この資料を盗み出そうとした『魔術師』が、過去に幾度か館内で暴れた事がありました。以来ここを訪れる方には、一人の例外も無くこの『導力石』の腕輪を嵌めて頂いているんです。こうしておけば、館内で『魔術』を使われる心配がありませんから」

『導力石』には、『魔術』を阻害する力もある。それはついこの間、俺も身を以て体験したばかりだ。

とはいえ、なるほど。確かにここを訪れる人間の中に、どれくらい『魔術師』が混じってるかなんて、見た目だけじゃ判断出来ないもんな。だったら最初から、全員に腕輪を付けさせればいいって訳だ。

俺だけじゃなく、リネとミレーナにも腕輪を嵌めると、二人の門番は漸く扉を開けてくれた。

「ではお入りください。何かわからない事があれば、中に資料の管理をしている者が複数人おりますので、その者たちにお尋ねください」

「ああ、わかった」

俺たちは三人揃って、館の中に足を踏み入れる。いよいよ、『魔術の館』に潜入って訳だ。

中に入っただけで、俺たちの前に現れたのは、その辺の宿の物とは比べ物にならない、金持ちの貴族が住んでいそうな広さのロビー。俺たちが潜った扉の内側には、外と同じように男の門番が二人いて、相変わらず警備の厳重さが窺える。

「うわあ、広い。なんかお城の中みたいだね」

周りの光景に目をキラキラさせながら、リネは弾んだ声で言う。

それとは対照的に、俺は彼女みたいにはしゃぐ事が出来ない。

以前テルノアリス城を訪れた時も思ったけど、貴族とかを連想させる豪華な雰囲気は、俺が最も苦手とするものだ。

「……お前、よくはしゃいでられるな。俺にはその感覚が全然わかんねえ」

「え、そう？ あたしはこういうの嫌いじゃないけどなあ」

別に良い所の生まれじゃないのに、リネはこういう豪華な雰囲気に、変に慣れてる部分がある。気楽でいいよなあ、お前は……。

妙にウキウキしているリネを尻目に、俺は歩きながら足元を見つめた。

石造りの床は相当手入れが行き届いているのか、鏡のように俺たちの姿を薄らと映している。

二階のエントランスに上がる為の、半円状に曲がった階段。それを横目に見ながら、さらに奥へと続く通路を進む。

そして辿り着いた先で、俺は思わず絶句した。

眼前に現れたのは、傍から見ても膨大な量だとわかる資料を、所狭しと詰め込まれた、数十にも及ぶ木製の本棚の列だった。

本棚はどれも、俺の身長の高さの倍程の高さがあり、それが綺麗に整頓するように区分けされ、一定の間隔で部屋の奥まで並べられている。

見渡す限り、どこを見ても本、本、本。

もし地震が起きた時にこんな所にいたりしたら、間違いなく本の重みで圧死するぞ……。

「す、ごいわね……。資料の数が膨大だってディーンくんが言ってたけど、まさかここまで多いなんて……」

俺と同じように本棚を見つめていたミレーナが、圧倒されたように呟く。

確かに俺も意外だった。って言うか、完全に予想を遥かに上回ってる。膨大って言ったって、まさかこんなに資料があるとは思っていなかった。

こんな資料があるとなると、『デス・ベリアル』って言葉一つを探し出すには、相当手間が掛かるはずだ。一体どれくらい時間が掛かるのなんて計算したくもない。

「ディーン、どうする?」

恐らくリネも、この資料の多さに圧倒されてるんだろう。かなり躊躇った様子で尋ねてきた事から、容易に想像出来る。

いや、どうするも何も……。

「探すしかねえだろ、地道に」

「それは、そうんだけど……」

止める、それ以上言うなって。お前の言いたい事はわかってるか……。

明らかに途方に暮れているリネとミレーナを、俺は何とかして励まそうとした。

するとその時。

「何かお困りなんですか?」

突然背後から声を掛けられ、俺は思わずビクツとなる。誰だろうと思って振り返ると、そこに立っていたのは、落ち着いた雰囲気を漂わせる大人の女性だった。

歳はミレーナと同じくらいだろうか。少し癖のある撫子色の髪を、纏めて右肩から垂らしていて、銀色のチェーンが付いた眼鏡を首に

掛けている。

さっきの問い掛けから察すると、もしかしてここの管理を任されてる人か？

「ああ、いきなりごめんなさい。私、ここの館長を務めているエミリア・ヴァーンズと言う者です。何かお困りの事があるなら、遠慮なく言ってください」

「え、館長さん？ 女の人のなに？ こんなに若いのに!？」

リネが妙に驚いた感じで尋ねると、館長エミリアは少し照れたように笑ってみせる。

「わ、若いだなんてとんでもない。まあ、館長としてはまだまだ未熟者なので、至らない所は多くあると思いますけど……」

「未熟者って、まだ就任したばかりなんですか？」

「いえ、そういう訳ではないんです。実際ここの館長を任されるようになったのも、六年くらい前からです。ああ、私の事より、何かお探しだったんですよね？」

リネの質問で逸れた話題を、エミリアは強引に引き戻す。その行為が若干俺も気になったものの、とりあえず話を合わせる事にした。

「え〜っと、少し『魔術』に関連する文献を調べたいんだけど」

「『魔術』、ですか？ 失礼ですがもしかして……」

「ああ。察しの通り、俺は『魔術師』だ。そんなに意外かな？」

彼女の質問を先読みして答えると、エミリアはかなり驚いた表情になった。

「そうなんですか。私、あなたのように若い『魔術師』さんを見るのは初めてで……。あの、失礼ですがお名前は？」

「あ〜、え〜っと……」

ついに来たな、いつもの展開が……。何か俺、自ら墓穴を掘っていないか？

どういつ風に誤魔化そうかと逡巡していると、俺の隣にいたリネが、突然口を開いた。

「じゃあ紹介しますね。あたしはリネ・レディア。それからこっち

の二人は、デイーンとミレーナさん。二人とも、セカンドネームはイアルフスって言うんです」

「！ 馬鹿、お前」

俺がリネの口を押さえようとした時には、すでに手遅れだった。

ドサツという音がして俺が振り向くと、エミリアが酷く驚いた顔で硬直したまま、床に尻餅をついている。

「ええええええっ!？」

館内に響き渡る大絶叫。予見出来たはずの事態に頭を抱えながら、俺はふと思っ。

今まで名前の事で驚く奴は大勢いたけど、さすがにここまで驚く人を見るのは初めての事だな、と。

窓の外を流れていく景色から視線を外し、俺は手元の資料に眼を通した。

『テルノアリス』でハルク様から渡された、ジェイガ・ディグラッドに関する資料と写真。

それを何度も読み返してみたものの、奴がなぜ、『英雄』を狙っているのかはわからない。つまり元老院や正規軍でも、奴の目的は依然として掴めていないという事になる。

「『紺碧の泉』<sup>アジュール・ファウンテン</sup>で、デイーンが奴に遭遇したのは間違いない。だとすればあいつは、その時一体何を知ったんだ？」

奴と遭遇したデイーンが、『サランドロ』を指摘している理由。

『魔術の館』で何かを調べるつもりでいるのは、何となく想像出来る。問題は、あいつがそこで、何について調べるつもりなのか、と



いう事だ。

「ジェイガ・ディグラッドとの接触で、元老院すら把握出来ない情報を、あいつは手に入れていたという事なのか？」

だとすれば、それは一体何なのか。ハルク様からの命とは別に、個人的な私情として、俺にはその全てを知りたいという願望がある。今頃あいつはどうしているんだろう？ 既に『サランドロ』に辿り着いているんだろうか？

不可思議な高揚感を抑えつつ、俺はもう一度窓の外に眼を向けた。海岸線が徐々に近付いている。恐らくあともう少しで、この列車は『サランドロ』に到着するはずだ。

とにかく話を聞かなければ。

ミレーナ・イアルフスの事。そして、ジェイガ・ディグラッドの事。

俺が力になれる事は、必ずあるはずだ。

## 第一章 未だ知り得ぬ集結（後書き）

という訳で、『魔術の館編』第一章でした。

このお話で、物語の核心部分を少しでも明かせればと思っています。  
読んでくれている方々にこの上ない感謝を！  
それでは！ノシ

## 第二章 戦友との再会

「すみませんでした！ 急に大声出してしまつて……」

腰の骨が折れるんじゃないかと心配になる程の勢いで、エミリアは俺たちに何度も頭を下げる。そんなに謝られたら、何かこつちが悪い事したみたいない気分になるんだけど……。

俺たちは今、背の高い本棚が並べられている部屋の一角にある、作業机がいくつか設けられた場所にいる。俺とリネ、それからミレーナは椅子に座っているのに対し、エミリアはさつきからずっと、立ちっ放しで謝り続けている。

結局、あの後が大変だった。

エミリアの大声を聴き付けて現れた門番たちに、何があつたのかと問い質され、一時は俺たちを不審者として追い出そうとする門番と言ひ合いになり掛けたが、エミリアが間に入って事情を説明してくれた為、どうにか事無きを得るに至つた。

それにしても、どうしてこう俺の周りではトラブルが絶えないんだ？ 今まで事が円滑に進んだ試しなんて無いような気がする……。

「も、もういいって。別にそんな気にしてないから」

とエミリアに言いつつも、俺は内心でかなりげんなりしていた。

口では気にしてないと断言したが、さすがにそろそろ、自分の運命つてヤツを呪いたい気分になってくる。

「デインが名前を名乗らないようにしてた気持ちだが、今やっとわかつたよ……」

俺の隣ではリネがそんな風に呟いて、随分しよんぼりした顔をしている。まあお前の場合は、それに気付けただけでも少しは進歩出来てるんじゃないか？

「とにかく気にしてないからさ。もう謝らないでくれよ」

「は、はあ……」

俺が念を押すように言うと、エミリアは漸く顔を上げた。若干涙

目になつてる辺り、彼女としてもかなり責任を感じてるみたいだ。けど俺としては、あんまりこんな事で時間を浪費したくない。別にくだらない事だつて言いたい訳じゃないけど、俺にはそれよりも最優先したい事があるだけだ。

そんな俺の都合を知るはずもないエミリアは、まだ少し気にした様子で口を開く。

「本当にごめんなさい。まさか、あの『英雄』とそのお弟子さんが、二人同時に自分の前に現れるなんて、想像した事も無かつたもので……」

「そんなに仰々しいものじゃないよ。俺もミレーナの事は凄いと思つてるけど、自分の事をそんな風に思つた事一度もねえし」

「そんな事ないわ。ディーンくんだけじゃなく、私だつてそんな自覚無いもの」

俺の言葉に即座に反応し、ミレーナは首を横に振つて苦笑する。

まあ今のミレーナは記憶を失つてる訳だし、俺とはまた違った意味で、実感が持てないだけなんだろうけどな。

なんてそんな風に思っていると、エミリアが随分ボーっとした様子で、俺とミレーナの事を見つめていた。

「? どうかしたのか?」

疑問に思つて俺が尋ねると、エミリアはハツとしたように姿勢を正した。

「あ、いえ。その、何だか想像していた人物像と、随分印象が違うなあなんて思つてしまつて……。『英雄』なんて呼ばれてる方だから、もつと独特の雰囲気を持つてる人なのかと思つてたんです」

「独特の雰囲気って……」

言いたい事はわかるけど、ミレーナや他の『英雄』たちだつて、至つて普通の人間だぜ?

……あ、いや、昔一度だけ会つた事のある、ノイエ・ガルバドアだけは別かも知れない。

他の『英雄』には会つた事無いからわかんねえけど、彼はミレー

ナと違つて、何考えてるのかわからない人だったからな。寡黙つて言うか無口つて言うか、とにかく、感情の掴みにくい人だった事は覚えてる。

「あつ！ 私つたらまた余計な事を……。ディーンさんは調べ物があるんでしたよね。ええつと、『魔術』関係の文献でしたっけ？」  
「ああ、そうだ」

俺が短く答えると、自分の仕事を思い出したエミリアも、やや真剣な表情になった。

漸く本題に入れる事に一安心しながら、俺は頭を切り替える。この『魔術の館』に、知りたい情報があればいいんだけど……。

「どういった物をお探しなんですか？」

俺に問いながらエミリアは、自分の腰に下げられている、小さな手帳のような物を手に取った。

「何ですか、それ」

一連の動作を見ていたリネが、興味深げにエミリアに尋ねる。こいつの好奇心旺盛っぷりは相変わらずだな。

「ああ、ここにある資料の分類表ですよ。例えば、一括りに『魔術』関連の文献と言っても、種類が色々あるんです。歴史に関わる物、各地の伝説に絡む物。この手帳は、そう言った種類別に分けられた資料が、この部屋のどこにあるかを細かくまとめた、言わば本の目次のような物なんです」

「へえ〜。確かに、見ただけでわかるくらい、資料の数が膨大ですもんねえ〜。その手帳つて、エミリアさんが作った」

「悪いけどリネ、黙っててくれねえか？ お前が喋つてると話が先に進まなくなる」

いい加減、横槍が入るのが煩わしくなつて、俺はリネの言葉を遮つた。すると当然のように、リネは反論してくる。

「え〜？ ちよつとくらいいいじゃん」

「よくねえよ。お前、俺がここに何しに来たのか知ってるはずだろ？ 頼むから邪魔しないでくれ」

「む……。何よ、ディーンのケチ」

「……」

殴りてえ……！ 一体何様なんだこの女。

不満そうに頬を膨らませているリネを、何とか無視して、俺はエミリアに答えを返した。

「この大陸で起きた『魔術』が関連する出来事。それから、大陸の各地にある『精霊』の伝説。それを記した資料が見たいんだけど」

「わかりました。ええっと、『歴史』と『伝説』の項目だから……」  
小声で呟きながら、エミリアは手帳の頁をパラパラと捲り始める。  
と、ある頁で捲るのを止めて、サツと顔を上げた。

「案内します。付いて来てください」

先導するエミリアの後に続いて、俺たちは背の高い本棚が並ぶ通路を歩き続ける。

しかし改めて見ても、本当にとんでもない数の本棚だよなあ。

これだけ数が多いと、ここに何度も足を運んでる人間でさえ、どこに何があるのかわからなくなるんじゃないか？

「さつき、館長になって六年くらいだ、って言っていましたよね？

やっぱりこれだけ資料が多いと、管理も大変だったりするんですか？

ぼんやり考え込んでいた俺の隣で、ミレーナが先導するエミリアにそんな言葉を掛ける。

すると彼女は、肩越しに僅かに振り返りながら、苦笑して答える。  
「そうですね、仰る通りです。ここの館長を務めるようになって、

もう六年も経つって言うのに、未だに把握出来てない事の方が多いんですよ。中々、先代の父のようにはいなくなって……」

「え？　じゃあ、エミリアさんのお父さんも、この館長さんだったんですか？」

「またもや好奇心旺盛っぷりを発揮したりネが、割って入るみたいな食い付きを見せる。」

だがエミリアの方は、特に気にした様子も無く続ける。

「ええ。私が言うのも変ですけど、父は本当に立派な館長でした。だって信じられます？　父は私と違って、ここにある資料一つ一つの配置を、全て事細かに記憶してたんですよ？　父に尋ねれば、どこに何があるのかすぐにわかるぐらいでしたから」

「ここにある物、全部を……！？」

啞然とするリネとミレーナの横で、俺も思わず舌を巻いていた。

「そりゃ確かに凄い人だな……。一体どんな超人なんだよ？」

「私が持つてるこの手帳も、私に館長職を譲る際、父が持たせてくれた物なんです。未だに私はこれを見ないと、どこに何があるのか全然わからないですよね……」

そう告げるエミリアの声は、どことなく元気が無いように思える。すると、多分俺と同じ事を思ったんだろう。リネが妙に明るい声で言う。

「凄い人だったんですね、エミリアさんのお父さん」

「はい。私もそんな父の事を、心から尊敬してます。あ、ここですね」

丁度切りの良い所で、エミリアが先導する足を止めた。彼女が見ている先にあるのは、背中合わせになった本棚がズラリと並んでいる場所。

「って、おいおい。まさか……。」

「ひよっとして、ここにある本棚全部に……？」

「はい。先程仰ってた、『魔術』に関連する『歴史』と『伝説』の資料がまとめられています」

まとめられてますって、どう見ても本棚の数は十を下回ってない。こんな量の中から、目的の単語一つを探し出せってのか……。さつきより本棚の数が絞られたとはいえ、それにしたってまだかなりの量がある。

すると、またもや途方に暮れそうになっている俺に、エミリアが不思議そうに尋ねてきた。

「ところで、ディーンさんはこの中から何を探し出そうとしてるんですか？」

「え？ ああ、え〜っと……」

尋ねられて、俺は僅かに言い淀んだ。さて、素直に説明すべきかどうか。

俺が探したいのは、『デス・ベリアル』という言葉一つ。『グレツグス鉱山』で会ったガラムの言葉が本当なら、それは『精霊』の名前らしいけど、どうしても俺は素直に納得する事が出来ない。

だからこそ、自分の眼で確かめる為にここに来た訳だし、とりあえず彼女にも聞いてみるか。

「『デス・ベリアル』って言葉なんだけど、聞いた事あるか？」

「『デス・ベリアル』……ですか？ う〜ん、ちよつと待ってくださいね」

そう言っただけでエミリアは、再び例の手帳をパラパラと捲り始める。するとその動作を見ていたリネが、何かに気付いた様子でまたもや口を挟んできた。

「そつえばエミリアさんって、その眼鏡掛けないんですか？」

リネが指摘したのは、エミリアの首に掛けられた銀のチェーン付きの眼鏡。確かに彼女は、手帳を捲る際に眼鏡を掛けようとはしていない。

気になるって言えば気になるけど、今しなきゃいけない話なのか、それ？

「ええ。私元々眼は良い方なので、掛ける必要が無いんです」

「え？ じゃあどうしてそれを？」



「……父の形見なんです、この眼鏡」

「！」

首から下がった眼鏡を見つめて、エミリアは少し切なそうに呟く。意外過ぎる言葉が返ってきた為、俺たちは三人とも言葉を失っていた。形見つて事は、じゃあエミリアの親父さんは……。

「六年前に、出張先で事故に巻き込まれて……。だから私がこの仕事を継いだんです」

「その……、ごめんなさい。変な事聞いちゃって……」

リネが申し訳なさそうに頭を下げると、エミリアは笑って、首をゆっくりと横に振る。

「気にしないでください。父が亡くなった事は確かに悲しいですけど、さつきも言った通り、私は今でも父の事を尊敬してます。父はこの仕事に、揺るぎない情熱と誇りを持っていました。そんな父の背中を見て育ったからこそ、私もこの仕事を継ごうと思えたんです」  
胸を張って本当に誇らしげに言った後、エミリアは「まあ私はまだまだ未熟者ですけどね」と、付け足すように苦笑した。

父の事を尊敬している、か。何だか良い感じの言葉の響きだ。

誰かを尊敬するって気持ちは、俺にもよくわかる。俺が『魔術師』になりたいと思ったのは、ミレーナの事を心から尊敬したからだ。父と師匠。存在は全く違っても、ここまで似た感情を抱けるものなんだな。

「うーん、この手帳には、『デス・ベリアル』という記述は載っていませんね」

さつきまでの会話を、エミリアは本当に気にしていないようだ。

俺が告げた単語が見つからない事を知ると、手帳から顔を上げて、俺の方に視線を向けてくる。

「やはり一度、この中から探してみるしかなさそうです」

「そっか。まあ仕方ねえよなあ……」

俺はもう一度、並べられた本棚の方に視線を向ける。

どうやら目的の物を見つけ出すのには、相当な時間が掛かりそ

うだ。

そんな訳で、私たちは『デス・ベリアル』に関する記述を見つけ出す為、分かれて資料を探す事にした。

私たちが探し始めようとした時、親切にもエミリアさんが手伝おうとしてくれたけれど、ディーンくんはそれを断っていた。

私もそれは当然の事だと思う。エミリアさんにだって、きっと他に仕事があるはずだもの。探し出すのにどれくらいの時間が掛かるかわからないのに、無理に手伝わせる訳にはいかないわ。

「……とは言っても、ホント凄い量よね」

私は手に取った資料の頁を捲りながら、そんな風に独り言を呟いた。

今近くには、ディーンくんとリネさんの姿は無い。きっと違う場所、私と同じように資料の山と格闘してるんだろう。

こうして資料の一つ一つを、頁の端から端まで細かく調べていると、あつという間に時間が過ぎてしまう。

今眼に見える範囲に時計らしき物が無いから、正確な時間はわからないけれど、多分一時間くらいは経ったんじゃないかしら？

「ふう〜。これにもそれらしい記述は載ってないわね」

私は資料を閉じると、本棚の空いている所にそつと戻した。何だかちよつと、眼が疲れてきた気がする……。

「ディーンくんとリネさん、まだどこかで資料を探してるのかしら？」

わざとらしくまた独り言を呟いて、私は辺りを見回してみる。

そういえば、ディーンくんたちと旅をするようになってから、こんなに長い時間一人になるのは、初めての事かも知れない。

今までは必ず、誰かしらが傍にいたのよね。例えば、事情聴取してくる『ギルド』の人とか。

だけど今は、周りに人影は見当たらない。

完全に、一人きり。

「一人きり、か……」

自分で思った言葉を、口に出して反芻してみる。

なんて恐ろしい響きなんだろう。

今までずっと傍にいてくれた誰かが、突然目の前からいなくなる。

一人ぼっちになってしまう。これ程恐ろしい事が他にあるのかしら？

私は『アッシュール・ファウンテン紺碧の泉』で、大切な人を失ってしまった。

ログハイム・ベスカ。

彼は命を落とした訳じゃないけれど、意識が戻らないまま、今もきつと昏睡状態が続いてるはずだ。

記憶を失った私を助け、支えてくれた、本当に大切な人。その大切な人を、私自身の問題に巻き込み、傷付けてしまった。

胸を刺すような、深い孤独感。私はそれを抱かずにはいられない。けどそれは私だけじゃない。ディーンくんやリネさんにも言える事だ。

ディーンくんの場合は、記憶を失う前の私が、突然何も言わずに姿を消してる。

リネさんの場合は、会う人みんなが、彼女を『化物』と呼んで離れていった。

私たちはみんな、それぞれ違う形で、孤独というものを経験している。失う事の怖さを、恐ろしさを知っている。

だからこそ私たちは、一緒に旅を続けているのかも知れない。

互いが互いの寂しさを、寄り添って補い合う為に。

「……ダメね。こんな暗い事ばかり考えてたら、ログにも怒られちゃうわ」

今は余計な事を考えずに、『デス・ベリアル』について調べなくちゃ。それが私の記憶を取り戻す為に必要な事なら、私がやらなきゃいけない事だもの。

私を守ってくれたログの為に。

そして、私を守ってくれているディーンさんの為に。

私は自分の頬を両手で軽く叩いて、気合いを入れ直した。

「さてと。次は」

「ミレーナ？」

「！」

突然背後から自分を呼ぶ声がして、私は思わず振り返ってしまふ。するとそこには、見覚えの無い私と同じ年ぐらいの男性が、随分驚いた表情で立ち尽くしていた。

「……？」

誰だろう？ 翡翠色の、男性にしては少し長めの髪。整った顔立ちからは、歳相応の落ち着きと冷静さが窺える。

背中に何か担いでいるようだけど、あれは……棒？ にしては、

先端が丁字みたいな変な形をしてるけど……。

「久しぶりだな。まさかこんな所で、お前に会えるとは思っていなかったぞ」

私が困惑している事に気付いていないのか、男性は普通に会話しようとしてくる。

「えっと、あの……」

「？ どうした？ 随分驚いてるようだが……」

驚いてるって言えば驚いてるんだけど、この場合意味合いが全く違うわよね。

どうしよう……。私には覚えが無いけれど、向こうは私の事を知っているらしい。見た感じ悪い人でもなさそうだし、素直に今、私が記憶喪失だって事を教えてあげた方がいいのかしら？

でもいきなりそんな事言っても、信じてくれるかどうかかわからないし……。

徐々に頭の中が混乱し始める。あちこちに視線を巡らせて、どうしようか迷っていた時だった。

「ミレーナ」。そろそろ昼時だし、ちょっと休憩でも聞き覚えのある明るい声が近付いてきたかと思うと、丁度本棚の角の方から、ディーンくんがひよっこり顔を覗かせた。

するとその途端。私の傍にいる男性の顔を見て、ディーンくんの表情が徐々に驚きに満たされていく。

「なっ……！ フォード・ヒースクライム……！？」

彼は愕然とした様子で、そんな風に呟いた。

「ジェイガ・ディグラッドだな？」

自分の名前を呼ばれた事で、俺は思わず足を止めちまった。

俺が『サランドロ』の港付近を歩いていると、銀髪碧眼の見慣れぬエ男が、いきなり声を掛けてきやがった。背中に二本の剣を背負ってるって事は、少なくとも俺と同じ、戦う側の人間って事だな。

「……誰だデメエ？」

大して興味も無かったが、俺はとりあえず男に尋ねてみる。

すると男は、自分の服の懐を探って何かを取り出し、俺にそれを見せつけながら、馬鹿正直にこう抜かしやがった。

「『ギルド』所属ナンバー〇六四、ジン・ハートラーだ。元老院ハルク・ウエスタイン様からの命で、貴様の身柄を確保しに来た」

このジンとか言う奴が右手に持ってやがるのは、確かに『ギルド』に所属している事を表す為の、特別なバッジだ。どうやらこいつの言ってる事は本当らしい。

チツ、また『ギルド』の奴かよ。フォードの野郎を探さなきゃいけねエってのに、面倒臭エ奴と遭遇しちまったな。

正直、こんな野郎とは会話するのも面倒臭エ。だが黙って立ち去ろうとしても、こいつは俺に絡んできやがるだろう。

仕方ねえ。いつもの脅し文句でも掛けといてやるか。

「悪イが、テメエみてエな奴の相手をしてる暇はねエんだ。怪我しねエ内にとつとと失せる」

「悪いがこちらでも退く事は出来ない。元老院からの命が無かったとしても、貴様には個人的に聞きたい事があるからな」

銀髪の男は、即座にそんな言葉を平然と返してきやがる。

その言葉通り退く様子が見えねエ事が、完全に俺の勘に障った。

この野郎はどうあっても、俺の邪魔をしようって訳か。

「この俺が親切に忠告してやったのに、聞き分けのねエ野郎だな……。ハッキリ言っとくぜ。眼障りなんだよテメエ」

「なら俺もハッキリ言わせてもらう。大人しく投降する気が無いなら、無理矢理にでも跪かせるまでだ」

そう言っつて銀髪の男は、背中の二本の剣を同時に抜く。男の気に喰わねエ眼差しが、俺をここぞとばかりにイラつかせる。

なるほど。どうやらこの男、俺が思ってた以上に死にたがりの馬鹿らしい……！

「ハハツ！ 上等だクソ野郎がアツ！！！」

俺は瞬時に両手を合わせ、『漆黒の大鎌』ダイク・デスサイズを造り出した。

もうフォードの野郎に気付かれようが、俺の知ったこつちやねエ！  
眼の前の銀髪を、全力で捻り潰す！

## 第二章 戦友との再会（後書き）

という訳で、第二章でした。

いよいよ出て来ましたね、フォード・ヒースクライム！（笑）

さあ、作者もここから、より気を引き締めて書いていかなければ！

（、、）フンス！

### 第三章 解明の裏側で（前書き）

遅くなって申し訳ありません。

今回は少し、話の持って行き方に色々と悩み過ぎてしまいました。



### 第三章 解明の裏側で

今から十二年前。首都『テルノアリス』を中心にして巻き起こった、この大陸の暦を切り替える程の、歴史的な大事件。

全ての事の発端となったのは、前テルノアリス王の独裁的なやり方に、首都の一部の王族たちが不満を持ち、その玉座を奪い取ろうと反旗を翻した事から始まる。

『倒王戦争』。

俺が両親を失い、ミレーナと出会うきっかけにもなった戦争。

後にそう呼ばれるようになった争いは、『反旗軍』と言う、クーデターを起こした王族たちが率いた軍勢の勝利に終わる。

その軍勢の中に、核となる存在として王族たちに選ばれた、五人の『魔術師』がいた。

『魔術師』として類稀なる才能と力を持ったその五人は、十二年経った今でも『英雄』と称され続け、大陸の歴史を塗り替えた者たちとして、その名を轟かせている。

ノイエ・ガルバドア。

バルベラ・スプリート。

ランザ・ダルベス

ミレーナ・イアルフス。

そして、フォード・ヒースクライム。

『風属性』の『流衝魔法』を操る『魔術師』にして、五人の『英雄』中、最も頭がキレると言われている男。

そんな男が今、俺の眼の前に立っている。

ミレーナの戦友とも呼べる、偉大な『魔術師』が。

「何で、あんたがここに……」

俺は驚きのあまり、身体が石のように硬直していた。思い掛けない

い所で、思い掛けない人に会う事は今までにも何度かあったが、今回ばかりはその比じゃない。驚きの度合いが違い過ぎる。

俺は今までミレーナ自身と、ノイエ・ガルバドアを除いた残りの三人の『英雄』たちには、直接会った事が無い。

ただ以前、俺は記憶を失う前のミレーナに、彼らの事を少なからず教えてもらっている。

ミレーナが他の『英雄』たちと並んで写っている、一枚の写真。

あれが今どこにあるのかは定かじゃないが、俺もその写真を見せてもらった事があるから、英雄たちの顔をしっかりと覚えてる訳だ。でもまさか、こんな所で出会うなんて思ってもみなかつたけど。

「紅い髪……。もしかしてお前、ディーンか？」

「！俺の事、知ってるのか？」

問われた事で身体の硬直は解けたが、フォードの口から意外な言葉が出て来て、俺はまた驚く羽目になった。

呆然と彼の顔を見つめる俺に、フォードは軽く笑って言う。

「知ってるさ。お前の事は、ミレーナから何度も聞いていたからな」「何度も？」

俺が若干首を傾げると、フォードは爽やかに軽く笑ってみせる。その爽やかさは、ジンのそれよりもかなり大人びた雰囲気がある。実際、年上なのは間違いないけど。

「ところでディーン。ミレーナの事なんだが……」

フォードはゆっくりと俺から視線を外し、傍らで困惑している様子のミレーナを訝しげに見つめた。

やっぱりミレーナに聞いていた通りだ。彼は鋭い観察眼を持っているらしいから、今のミレーナの様子から違和感を感じ取っているんだろう。

もしかしたら俺が説明するまでもなく、大体の見当が付いているのかも知れない。

「とにかく、少し座って話そうぜ。あんたにも、伝えとかなきゃいけない事が結構ある」

俺が真剣な顔でそう告げると、フォードは黙ったまま頷いた。

困惑している様子のミレーナと、突然現れたフォードを引き連れ、俺は書庫の一角にある休憩場所を訪れた。

木製の長テーブルやら、座り心地の良さそうな椅子やらが設置されている場所に腰を落ち着け、俺たちは話し合いを始める。

「自己紹介、はお互いに必要ないみたいだな」

席に着くなり、そう切り出したのはフォードだった。彼は余裕のある頬笑みを湛えて、真っ直ぐに俺の事を見つめている。

「俺もミレーナから、他の『英雄』たちの事は教えてもらってたから、すぐにわかったよ。あんたはどうして俺の事を？」

「お前と似たような理由さ。以前何度か、ミレーナとは手紙のやり取りをしていた事があってな。その文面の中で、こいつが何度もお前の事を書いていたんだよ」

なるほど。さっき言ってた「何度も」っていうのは、そういう意味だった訳か。

俺の隣に座るミレーナを一瞥して、フォードは爽やかに笑ってみせる。ミレーナの事を「こいつ」呼ばわりしている辺りにも、彼女との親密さを感じられるんだよなあ。まあ、『倒王戦争』で共に戦った戦友なんだから、当然と言えば当然の絆なんだろう。

だけどやっぱり、ミレーナの方は上手く状況を飲み込めていないらしい。今も赤の他人と接するみたいなきんじで、所在無さげにフォードの顔をチラチラ見ている。

「心配すんなって。この人は俺の知り合い、って言うか、むしろミ

レーナの友達みたいな人なんだぜ？」

見兼ねた俺がその声を掛けると、ミレーナは少し納得したような顔になる。

「やっぱり、そうなの？ さっき親しげに話し掛けてくれたから、薄々そんな感じはしてたんだけど……」

ミレーナは随分戸惑った様子で、頼りない声でそう言った。

今の彼女を見てると、『アジュール・ファウンテン紺碧の泉』で再会した時の事を思い出す。

あの時すでに記憶を失っていたミレーナは、その事実を知らずに話し掛ける俺に、今と全く同じ態度で接していた。見ず知らずの人間からいきなり声を掛けられたかのような、酷く警戒した様子で。

とはいえ、それも仕方がない事だよな。何せ一時は、自分の名前すらわからない状態だったんだから。

「……説明を求めても、いいのか？」

酷く深刻な声で問い掛けられ、俺はミレーナから視線を外す。

すると眼の前のフォードの顔からは、ついさつき見せた笑顔が、煙みみたいに消えていた。テーブルに置いた両手を強く組み、真剣な表情で俺を見つめている。

「少し長くなるんだけど……」

そう前置きしつつも、俺は出来るだけ簡潔に、ミレーナに関する俺自身が今まで知り得た出来事を、フォードに話して聞かせた。

彼女が一年前、俺の前から姿を消した事。

その彼女と、『アジュール・ファウンテン紺碧の泉』で再会したが、今も記憶喪失になっている事。

そしてそれに付随する、様々な情報。

俺自身、上手くまとめて話せたのかどうかわからなかったが、それでもどうにか、事の重大さはフォードにも伝わったらしい。俺が語り終えると、彼は椅子に背を預け、顎に手を置いて考え込むような仕草を見せた。

「なるほど。確かに、謎の多い一件だな。なぜミレーナが記憶を失ったのか、というのも疑問だが、『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』という組織が

どう関わっているのか、というのも疑問だ」

「ああ。でもこの際、他の細かい事は俺にとつてはどうでもいいんだ。要はミレーナが記憶を失った原因と、それを治す方法さえ見つければ、一応俺の役目は終わる」

「……」

俺がそんな風に締め括ったからだろうか？ フォードが突然、深く考え込むように沈黙する。まるでそれは、身勝手とも言える俺の言葉を、諫めようとしているかのように見えた。

「あ、あれ……？ 何か俺、不味い事言った？」

恐る恐る尋ねてみると、フォードはゆっくりと、厳しい口調で口を開いた。

「いや、お前がどうという訳じゃない。……ただ、少し思い出した事があったな」

「思い出した事？」

彼の言葉を反復すると、フォードは背凭れから身体を離し、重心を前に掛けて言葉を続ける。

「さつき、ミレーナと手紙のやり取りをしていたと言ったろ。その手紙を最後に交わしたのが、そういえば一年程前だった」

「！ それって、ミレーナがいなくなつた時期と重なる」

「ああ。その時文面の中で、こいつはある人物に会いに行くと言っていたんだ。そいつに会って、直接話をすると」

「誰なんだよ？ そのある人物って」

俺が率直に尋ねると、フォードは一旦眼を伏せて、少しだけ間を置いた。彼自身、そうする事で落ち着こうとしていたのかも知れない。

だが次に彼の口から出た名前は、俺を落ち着かせる事など出来ない人物の名だった。

「ノイエ・ガルバドア」

「……」

驚きのあまり俺は言葉を失った。

なぜここで、彼の名前が出てくるんだろう？ 『紺碧の泉』でジ

アジュール・ファウンテン

エイガと遭遇したあの時も、俺は似たような事を思ったはずだ。

「じゃあ、何か？ あんたは、ミレーナの記憶喪失に、ノイエが関わってるかも知れないって言いたいのか？」

口から絞り出すように言葉を紡ぐと、フォードは俺の事をジツと見つめ返してくる。それがもう、肯定という一つの意志の表れだった。

「記憶喪失自体に、ノイエが関わっているかどうかはわからないが、会いに行ったのは間違いないだろう。それにもしかしたら、ミレーナが最後に会った人間はノイエなのかも知れないぞ。その手紙を最後に、ミレーナとの連絡が取れなくなっただからな」

「そんな……！ でもじゃあ、ミレーナは一体、何をしにノイエの所へ？」

当然の如く湧き上がってくる疑問を俺が口にすると、フォードは僅かに首を横に振る。

「そこまではわからない。手紙にも、『直接会って話す』としか書かれていなかった。いずれにしても、事実を確かめるには、ノイエに話を聞くしかないだろう。……が、その行方がわからない、という事なんだろう？」

「あ、ああ。フォードもノイエの行方は……」

「悪いがわからない。いつの頃からか、あいつは根無し草になったからな。今頃一体、どこで何をしているのやら……」

フォードはまるで辟易しているかのように、天井を見上げて浅く溜め息をついた。

ノイエの行方に関しては、弟子だったジェイガにすらわかっていない。だからあいつも、他の『英雄』たちからそれを聞き出そうと。

って、あれ？

「なあフォード。残りの二人、バルベラ・スプリートとランザ・ダルベスも、ノイエの行方を知らないのか？」

俺が声を掛けると、フォードは視線を戻して難しい顔を見せた。

「さあ、どうだろうな。本人たちに聞いてみないとわからないが、恐らく望み薄だろう。特にあの二人は、かなり私の強い人間だからな。他のメンバーの現状を、好き好んで知りたがるとは到底思えん」

「そ、そうなんだ……」

やっぱり戦友って言っても、全員が一枚岩で仲が良い、って訳じゃないみたいだな。記憶を失う前のミレーナも、よくバルベラ・スプリートの事を『ムカつく女』って揶揄してたし。

だけどフォードの言葉が事実だとすると、今ジェイガがやってる事は、全くの徒労って事になる。あいつがこの事知ったら、その場で即ブチキレルんじゃないか？

「ところでディーン。さっき話に出ていた、ジェイガ・ディグラッドの事だが……」

そんな風にあれこれ考えていると、フォードが突然、そんな言葉を口にした。

「え？ ああ。さっき言った通り、あいつもノイエの行方を追ってるんだ。もしかしたら、フォードの前にも現れるかも知れない」

「いや、それは別に構わないんだ」

即座に俺の言葉を否定したフォードは、俺に反論の余地を与えず続ける。

「本当に、ノイエの事を殺すと息巻いていたのか？」

「……？ どういう意味だ？」

「……いや」

そう短く告げて、フォードはまた口を閉ざしてしまふ。

最初は、自分の身が狙われている事を警戒しているのか、と思っただが、どうやら違うようだ。その疑問の表情には、どこか信じられないと言いたげな雰囲気が続いて交ぜになっている。

一体フォードは、どういう意図でさっきみたいな事を口にしたんだろう？

「ねえ、ディーンくん。そういえばリネさんは？」

不思議に思っていた俺は、隣にいるミレーナからの言葉で漸く思  
い出した。この場に一人、いつもならいるはずの少女が欠けている  
という事に。

「ああッ、そうだ！ 声掛けるの忘れてた！」

ミレーナに声掛けた後であいつも探すつもりだったのに、直後に  
フォードが現れたせいで頭真っ白になったんだ。

……なんて心の中でそれらしく言い訳しながら、俺は椅子を後ろ  
に引いて立ち上がる。

「ミレーナは、フォードと一緒にここにいてくれ。すぐ探してくる  
からさ」

「え？ で、でも……」

「気にすんなって。じゃ行ってくる」

彼女が言わんとしている事は何となくわかったが、それでも俺は  
構わず、二人を置いて歩き出す。

少し薄情な気もするけど、俺としてはフォードとの会話で、何か  
少しでも、ミレーナの記憶が戻るきっかけが出来ればいいと思っ  
ていた。

ある意味俺よりも深く、ミレーナの事を知っているはずのフォー  
ド。

彼に妙な期待感を寄せながら、俺は本棚の並ぶ通路を歩き続けた。

振り下ろされる凶刃を躲す為、俺は地を蹴って後ろ向きに飛び退  
く。

ほんの数秒遅れて、大鎌の鋭利な刃が地面に突き刺さった。躲さ



れた事への憤りからか、蛇のような眼付きの攻撃者は、苛立たしげに俺の顔を睨み付けてくる。

俺は相手との距離を測りながら、両手に握った二本の剣を、軽く握り直した。

「へエ、中々いい動きじゃねエか。どうやらその辺のギルドメンバ―とは訳が違うらしい」

地面からゆつくりと大鎌を引き抜きながら、ジェイガはそう語る。だが奴は、別に俺の事を褒めている訳ではないんだろう。今も不機嫌な様子を崩さない辺り、自分の思い通りにいかないのが相当不満らしい。

「だが悪イな。いつまでもテメエの相手をしてられねエんだよ！」  
強く踏み込み、ジェイガは猛然とこちらへ突進してくる。

俺は一瞬、両手の『黒裂剣』と『白滅剣』から衝撃波を放とうかと考えたが、寸前で踏み止まった。

ここは街の中だ。今いるこの場所が、街並みから少し外れた港付近だと言っても、こんな所でこの剣の力を使えば、周りに余計な被害を与える事になる。

それに相手は『魔術師』だ。あの鎌に何か特殊な能力がある事は、『魔術』に関して素人である俺でも容易に予想出来る。奴がその能力を使って被害を齎す前に、どうにかして、奴をもっと街並みから離さなければ、ここ『サランドロ』も、『紺碧の泉』の二の舞になつてしまう。

頭の中で最善の策を模索し続けながら、俺は横薙ぎに振るわれた大鎌の一撃を、二本の剣で受け止めた。金属同士がぶつかった時のような鋭い衝撃音が、俺の耳を瞬時に駆け抜ける。

瞬時に反撃を行なう為、俺は防御した状態からジェイガの顔面に向けて、右足で上段蹴りを放った。少々無理な体勢になり掛けたが、この程度なら問題は無い。

「チッ！」

だがジェイガの方も即座に反応し、大鎌を引くと同時に後退し、

紙一重で俺の蹴りを回避した。

俺はその場で一回転すると、その勢いを殺さず、後退したジェイガの懐に飛び込み、右手の『黒裂剣』こくれっけんを振り下ろす。

するとジェイガは大鎌を水平に構え、長い柄の部分で『黒裂剣』こくれっけんを受け止める。

だが俺の攻撃はそこで終わらない。

一撃目を防御されている状態から、左手に握った『白滅剣』はくめっけんで、ジェイガの腹に向けて一直線に突きを放つ。

『白滅剣』はくめっけんの白い刀身が、ジェイガの身体を中心に吸い込まれていく。

だがその瞬間、ジェイガは受け止めていた『黒裂剣』こくれっけんを大鎌で無理矢理右に逸らせ、俺の重心を僅かにずらした。

それにより突きの軌道が傾き、そこに生まれた隙間を縫うようにして、ジェイガは見事回避してみせる。

俺は前のめりになり掛けたが何とか踏み止まり、背後から斬り掛かるうとするジェイガと、もう一度鏢迫り合いの格好になった。

「この俺と戦いながらのんびり考え事をする余裕があるとは、随分じゃねエかよ銀髪。舐めてんのか？」

「そういつつもりじゃない。ただ出来ればもう少し、街並みから離れたいと考えていただけだ。周りに被害を齎すのは、俺にとっては本意だからな」

「ハッ！ テメエはどっかの聖人君子様かア？ 綺麗ごと抜かしやがって。悪イが応じるつもりはねエ！」

鏢迫り合いの均衡状態を軽々と破り、ジェイガは一旦、俺から距離を取った。その顔には、悪意に満ちた笑みが湛えられている。

「残念ながらここまでだ。俺の『魔術』の一撃を受けて、その辺で無様にのた打ち回ってやがれ」

死神ように構えられた大鎌の刃に、黒い光が集束していく。

明らかにあの光は、大規模な破壊を齎す為の光だ。俺の脳裏に、悉く破壊された『紺碧の泉』アジュール・ファウンテンの街並みが蘇る。この街まであんな状

態にさせる訳にはいかない。

「……仕方がないな」

覚悟を決め、両手の剣に一瞬だけ視線を落とす。すると俺の愛刀たちが、静かに頷いたように感じた。

「『漆黒の大鎌』！」

放たれた黒い光が、まるで漆黒の夜空のように、俺の視界を埋め尽くす。

「『黒白雷閃』」

俺は二本の剣を振るうと同時に、それぞれの剣の力を解放する。

直後に起きたのは、凄まじいまでの爆発だった。

その場に一人取り残された私は、内心でかなり困惑していた。どうしよう？　と言うより、どうしたらいいのかわからない、と言った方が正しい。

フォード・ヒースクライムと言う彼の方は、言うまでもなく私の事を知っている。と言うか、共に『倒王戦争』を戦い抜いた、言わば同志のような存在なんだろう。

だけど私には、そんな記憶が一切無い。自分が『英雄』と呼ばれている存在だという実感も無い。

だからこそ、眼の前にいる彼との距離感が、全くわからなかった。何だかデインくんに対しても、少し憤りを感じてしまう程に。

「心配しなくても、取って食ったりしないさ」

「！」

視線をあちこち巡らせていた私に、フォードは優しく笑い掛けて

くれた。

その表情を見ていると、何だか不思議と、焦っていた気持ちが落ち着きを取り戻し始める。懐かしい、と感じてしまうのは気のせいなのかしら？

「今のお前に、こんな事を言っても実感が湧かないだろうが……」  
「え？」

突然、フォードが口を開いて、どこか優しげに言葉を紡ぐ。

「良い弟子を持ったな、ミレーナ。見ていればわかる。あいつは心から、お前の事を大切に想っている」

「……」

優しい頬笑みを湛えて告げるフォードに、私はどう答えたらいいのかわからなかった。

確かにディーンくんは私の事を守ってくれる。だけど、彼が尊敬し、敬愛しているのは『今の』私じゃない。記憶を失う前の、『本物の』ミレーナ・イアルフスなんだ。どんなに都合よく解釈しても、きっとその事実は変わらない。

だからやっぱり、『今の』私が返事をするべきなんじゃないと思う。

今のフォードの言葉に答えられるのは、答える資格があるのは、『本物の』ミレーナ・イアルフスの方なんだから。

「ッ!？」

そんな風に思っていた時だった。唐突に、私は何か奇妙な胸騒ぎを覚えて、全身を使って背後を振り返る。

胸の内側がざわざわするような、得体の知れない不安。

ただどこか、この不安のようなものには身に覚えがあった。

「? どうした？」

「今、何か……」

「お、おい、ミレーナ!」

立ち上がって駆け出す私の背後から、フォードの動揺したような声が聴こえてくる。

だけど私は振り返りもせず、書庫の出入り口に向かって進む。そうしながら私は漸く思い出した。

この奇妙な胸騒ぎ。胸の内側がざわざわするような、得体の知れない不安。これを感じる機会はい前にもあった。

アジユール・ファウンテン  
『紺碧の泉』。戦場から遠ざかろうとする私を引き止めた、あの感覚。ログを巻き込む原因になってしまった、あの感覚。それが今また、私自身を駆り立てるかのように、胸の内側でざわめいているんだ。

いくつもの本棚が並ぶ通路を駆け抜け、書庫のロビーに辿り着き、門番に外へ出る旨を伝え、『導力石』の腕輪を外してもらって、私は一目散に外へ出た。

『魔術の館』が建つこの位置からだ、『サランドロ』の優雅な街並みを一望する事が出来る。

その景色の中から、私はすぐに『それ』を見つけ出す事が出来た。

港付近から立ち上る、火事でも起きているかのようなような黒煙。

それは間違いなく、私の心を否応なく招き寄せる、戦場の景色だった。

### 第三章 解明の裏側で（後書き）

どうにか書きたかった事をまとめられたものの、相変わらず不安の  
残る仕上がり……w

やっぱりプロットの段階から見直していかないといけないな。（一）

…（ウーン）

## 第四章 役者たちは戦場へ（前書き）

『魔術の館編』第四章です。

いつも通りの長文ですが、楽しんでいただけたら幸いです、ハイ。

## 第四章 役者たちは戦場へ

「ん、これでもないなあ……」

頭が痛くなりそうな程、びっしりと書き込まれた文字の羅列から眼を離し、あたしは浅く溜め息をついた。分厚い資料をゆっくりと閉じて、本棚の元の位置に戻しつつ、右手で軽く眼を擦る。何か夜更かした後みたいなき感じだなあ。

「読み始めて結構経ってるはずなんだけど、まだ全然って感じだよな……」

あたしは、自分が調べている本棚の資料の多さに、改めて辟易した。ザツと数えてみても、調べ終えた資料の数は、まだ全体の四分の一程度しかない。残りの四分の三を調べ終えるのに、一体後どれくらいの時間が必要になるんだろう？

当然調べ終えた資料の中に、ディーンが言っていた『精霊』や『デス・ベリアル』に関係しそうなものは無かった。全部調べ終えるまで滅多な事は言えないけど、もしかしたら、この本棚の資料自体が外れだって可能性もある。

「そうならない事を祈りたいよ……」

ディーンやミレーナさんと分かれて、一人一つの本棚を調べている今の状況。効率が良いのかどうかもわからないけど、結局は地道に続けるしかないんだよね。

「え、つと次は……」

首や肩を軽く解しながら、あたしは新しい資料に手を掛けようとした。するとその時。

「作業の方は順調ですか？」

不意に声を掛けられてあたしが振り向くと、そこにはエミリアさんがにこやかに笑って立っていた。彼女の右手には、分厚い資料がいくつ抱えられている。

「あ、はい、ボチボチって感じです。エミリアさんは何してるん



ですか？」

「資料整理の一環ですよ。今持っている資料は、文章の一部が劣化し掛けていた物なんです。ですから、その修繕が出来た物からこうして、本棚の元の位置に戻してるんですよ」

「へえ、何だか色々大変なんですね……」

変に感心してしまうあたしの顔を見て、エミリアさんはニコツと笑い掛けてくれた。そして傍にある本棚に、右手に抱えていた資料の数冊を、丁寧に戻していく。

「あの、エミリアさん」

「はい。何ですか？」

あたしが声を掛けると、エミリアさんは作業を続けながら返事をする。本当に仕事熱心な人なんだなあと思いつつも、あたしにはずつと気にしていた事があつた。

「その……、さつきはごめんなさい。あたし何も知らないで、エミリアさんのお父さんの事……」

あたしが少し言葉を詰まらせると、エミリアさんは作業する手を止めて、驚いたような顔を見せた。

「もしかして、さつきの事気にしてるんですか？」

エミリアさんに尋ねられて、あたしは思わず無言で頷く。

何も知らないからとはいえ、さつきのあたしは本当に無神経だったと思う。興味本位でなんでもかんでも質問してしまう、あたしの悪い癖だ。多分……、ううん、きつとディーンも、あたしのこういう所を迷惑に感じてるんだろうな……。

「大丈夫ですよ、リネさん。さつきも言った通り、全然気にしてません」

少し俯いていたあたしが顔を上げると、そこには本当に優しい、エミリアさんの頬笑みがあつた。

「確かに今までにも、父の事やこの形見の事を聞かれた事は何度もありました。だけど私は、それを迷惑だと思つた事は一度もありません。父に対する私の思いを皆さんに知ってもらえる事は、むしろ

誇りにすら感じられる事ですから」

エミリアさんの優しい頬笑みからは、憂いや悲しみが全く感じられなかった。

彼女は本当に、心の底から、お父さんの事を誇りに思ってるんだろ。そうじゃないと、きつとこんな笑顔を見せる事は出来ないと思う。

「強い人なんですね、エミリアさんって」

「そ、そんな事ないですよ」

あたしが微笑み返すと、エミリアさんは激しく首を横に振る。頬がちよつと紅くなってるから、多分照れてるんだろうけど、何だか仕草が可愛い人だなあ。

「あゝ、いたいた。リネ、ちよつといいか？」

そんな風に思っていたあたしの視界に、とても目立つ紅い色の髪が飛び込んできた。少し焦った様子の少年に、あたしは何気なく返事をする。

「どうしたのディーン？」

「いや実はさ、さっきそこで知り合いに会ったんだ。それで休憩も兼ねて話してるんだけど、お前も来ないか？ 一応その人にも、お前の事紹介しときたいからさ」

「うん、いいよ。でも誰なの？ その知り合いの人って」

物凄く単純な質問をすると、ディーンは悪戯っぽく笑って、どこか誇らしげに口を開く。

「そうだなあ。多分聞いたら驚くと思うぜ？ その人の名前はな

」

「ディーン、ここにいたのか」

ディーンが何かを言い掛けた時、彼の後ろからそんな声が聴こえてきた。あたしがディーン越しに顔を覗かせると、そこには見知らぬ男性が立ち尽くしている。

翡翠色の髪に、整った顔立ち。少し困ったような表情をしてるけど、どこか落ち着き払った冷静さを感じさせる雰囲気。歳は、ミレ

「ナさんと同じくらい、かな？」

「フォード。どうしたんだ？」

「いやそれが、ミレーナの奴が急にどこかへ行ってしまったんだ。少し様子がおかしかったみたいなんだが……」

「ミレーナが？」

「デインは少し首を傾げ、不思議そうな顔をした。」

「ミレーナさんがどこかへ行った、という言葉には、あたしも少しあれ？」っと思う。

「ただそれよりも強く、あたしの頭には「この男の人は誰なんだろう？」、という疑問符が浮かんでいる。」

「ねえ、デイン。この人は？」

「二人の会話を中断させるようにあたしが尋ねると、デインはふと思い出したような顔をした。」

「ああ、悪い。この人がさっき言った知り合いだ。フォード・ヒースクライムって名前、聞いた事あるだろ？」

「え！？ それじゃあ……」

「この人が、ミレーナさんと同じ『英雄』って呼ばれてる人……!？」

「思わず言葉を失っていると、翡翠色の髪の男性フォードさんが、あたしの方に視線を向けた。そして明るく、落ち着いた口調で言う。」

「初めましてだな。こいつの言う通り、俺がフォード・ヒースクライムだ。一応これでも『英雄』と呼ばれてる。よろしくな」

「あ、えっと、あたしの名前は、リネ・レディアです。　ああ、

それから、こっちはこの館長をされてる、エミリア・ヴァーンズさんです」

「少し慌てていたけど、どうにかあたしは自己紹介をする事が出来た。」

「だけど、ここで一つ誤算がある。」

「あたしの隣にいるエミリアさんは、『英雄』と呼ばれる人たちと出会う事に対して、極度に免疫が無い。その事実気付いた時には、エミリアさんは尻餅について、また大声を上げそうになる寸前だった。」

た。

「エミリアさんダメッ！」

思わずあたしは素早く屈んで、エミリアさんの口を塞いでしまう。ごめんなさいとは思うけど、またさっきみたいに門番さんのお世話になるのは嫌だからなあ。

「……………どうしたんだ、彼女？」

「ああ、あれはまあ、一種のお約束みたいなもんだから……………。それより、ミレーナはどこに？」

冷たい床の上で格闘するあたしたちを他所に、ディーンとフォードさんは会話を続ける。

「さあな。どうやら館外へ出て行ったみたいなんだが……………、追い掛けるか？」

「そうだな。フォードの言う通り様子がおかしかったんなら、尚更気になるし……………」

二人の会話が進む内に、どうにかエミリアさんが落ち着いてくれたので、あたしは彼女の口から手を離して立ち上がる。

すると、少し考え込むような仕草をしていたディーンが、あたしに声を掛けてきた。

「俺とフォードでミレーナを探してくるから、リネはここにいてくれるか？ それと休憩しながらでいいから、資料探しも続けてくれると助かる」

「え、でもいいの？ あたしもミレーナさんを探すの手伝わなくて「そんな大事じゃねえし、作業は分担した方が早く終わるだろ？」

だからこっちの事は任せとけて」

「それはそうだけど……………」

「じゃ任せた！ 行こうぜフォード」

あたしへの言付けもそこに、ディーンはフォードさんを連れて、本棚の並ぶ通路を歩いていく。

二人の姿が本棚の陰に隠れて見えなくなってから、あたしは漸くある事に気が付いた。

「……なんかあたし、都合良く押し付けられてないですか？」

「き、気にし過ぎなんじゃないですか？ デイーンさんも、相手がリネさんだから、安心して任せられたんだと思いますよ？」

あたしが卑屈っぽく眉根を寄せて言うと、エミリアさんは苦笑して否定する。

確かに彼女の言う事も信用したいけど、でも相手はデイーンだからなあ。あたしに対しては、こういう事するの慣れてるはずだし……。

「それにしても、ホントに凄い方々とお知り合いなんですね、デイーンさんって」

心の中で不満を零していると、エミリアさんは本当に感心した様子でそう呟いた。

彼女の、ある意味大袈裟な物言いに対して、あたしは苦笑して答える。

「うーん、そうなのかな？ デイーンってあんまり、そういう事深く考えてないみたいだから、あたしもあんまり実感が湧かないんですよね」

そんな大事って訳じゃない。

リネに言った通り、俺はミレーナがどこかへ行ってしまった事実を、かなり安易に捉えていた。

彼女はそんなに遠くへ行った訳じゃない。

ただちよっと、外の風にも当たりに行っただけだ、と。

それが全くの見当違いだという事を、俺はすぐに思い知る事になる。

館の入口で門番に『導力石』の腕輪を外してもらい、俺はフォードと共に外へと足を踏み出した。

館の敷地内を石畳に沿って歩き、敷地の入口となるアーチ状の門を潜り抜け、眼下に広がる『サランドロ』の街並みに視線を向けて、そこで俺は漸く、事の重大さに気付く。

俺が目撃したのは、港付近から黒煙を巻き上げている、『サランドロ』の風景だった。

「黒煙……？ 港の方から上がっているようだが、何かあったのか？」

俺と同じく、高所から『サランドロ』の街並みを見下ろして、フォードはそんな風に呟く。彼は相変わらず、冷静さを保っているようだ。

「ただ俺は、そんな彼とは対照的に、心の中でかなり焦りを感じていた。」

眼の前の景色は、幻や見間違いなんかじゃない。確たる現実の景色として、黒煙という不吉さを予感させるものが舞い上がっている。明らかに、何か異常な事態が起きているという証。

そして今、俺の近くにミレーナがいないという事実。その二つが折り重なって、俺の中で一つの結論が出ようとしている。

「まさか……」

「！？ おい、デイン！ どうしたんだ突然！？」

胸の内から湧き上がる不安に触発されて、俺は一目散に駆け出した。背後でフォードが何かを叫んだようだが、今の俺には、それを聴き取る余裕がない。

確証は無い。

断言する事だつて出来ない。

もしかしたら。そう思えるだけで充分だった。

考えられる事実は一つ。

ミレーナに、危機が迫っているかも知れない。

視界を覆い尽くす爆煙。その向こうから響いてくるのは、歡喜に満ちた強烈な笑い声だった。

「ハハハハハハハッ！ こいつはイイ！ 妙な感じの剣だとは思つてたが、まさか『魔剣』だったとはなア！ 面白エじゃねエか銀髪！」

俺が放った衝撃波と、ジエイガが放った破壊を齎す黒い光は、空中で衝突し、共に爆散した。相殺によつて生まれた爆煙は徐々に晴れ始めているが、大気を震わせた爆風の名残が、俺の耳元を掠めていく。

と、晴れ始めた爆煙の先に、悠然と立つジエイガの姿が見えた。

鋭い刃を備えた大鎌を肩に掛け、余裕の表情を浮かべている。

「何だよ、こんなに面白エ奴なら、最初から手加減する必要も無かつた訳だ。 オイ銀髪。 テメエも街に被害を出したくないだの何だの言つてねエで、戦うからには全力で掛かつて来い。俺も本気で相手してやるからよオ」

本心に深い愉悦の表情を浮かべ、ジエイガは獰猛な蛇を思わせる眼光を放つ。

この男、俺が思っていた以上に手強く、そして好戦的なようだ。

こんな奴を相手にする以上、なるほど確かに、中途半端な力の使い方ではダメなのかも知れない。

『白滅剣』と『黒裂剣』。二本の剣の力を、最大限に発揮するのは気が引けるが、もう後に引けないのも事実だ。

「……いいだろう。望み通り、全力で戦ってやる！」

「話が早くて助かるぜエ、偽善者がよオ！」

叫ぶや否や、俺たちは同時に踏み込んでいた。

風を切るように突進する俺に対し、ジエイガは身軽に空中へと跳び上がる。

そしてそのまま弧を描くように、ジエイガが大鎌を振り被った。

と同時に、刃の部分に黒い光が集束していく。

「オラアツ！」

放たれた黒い光は、ほぼ直上から落下してくる。

俺はすぐさま急停止し、左手の『白滅剣』を下段から振り上げた。

「『白雷』！」

白い刀身部分から白い衝撃波が生まれ、落下してくる黒い光と矢のような速度で衝突する。

あの黒い光は確かに強大な破壊力を持つてはいるが、『白雷』で充分対応出来るはずだ。そして相殺直後に、『黒閃』で追い討ちを掛ける！

瞬時にそう判断し、右手の『黒裂剣』を構えようとした。

だが事態は、俺の予測を簡単に裏切る結果となる。

相殺出来ると踏んでいた黒い光は、俺の放った『白雷』をいとも容易く打ち破り、真っ直ぐ俺目掛けて落下を続けてきたのだ。

「何……ッ!?!」

一瞬焦りはしたものの、俺はすぐさま頭を切り替え、回避を選んで後退する。

だが。

「甘エんだよ」

上空から、そんな声が聴こえた気がした。



瞬間。まるで俺に追い縋るかのように軌道を変えた黒い光が、俺の視界を覆い隠す。

不味い……！ そう思った時にはすでに手遅れだった。

「ぐあああああつ！」

真つ正面から黒い光の一撃を受け、俺の身体は容易く宙を舞った。二転三転、いや、どれだけ視界が回転したかわからない。気付いた時には、俺は港の各所に設置されている防波堤に、背中から激突していた。

「何、だ……、今は……？」

何が起こったのか全く分からない。完全に回避出来ていたはずの黒い光が、なぜ俺の身体を吹き飛ばしたのか？

身体を走り抜ける痛みに、顔を顰めていると、余裕のある声が眼前から響いてきた。

「回避出来たと思つて油断しただろ？ 生憎だったなア。この『漆ダ黒の大鎌』から放たれる衝撃波には、相手を追尾する特性がある。テメエがさつき放った白い光だけじゃ、俺の攻撃を止める事なんて出来やしねエんだよ」

「……ッ」

身体の痛みを引き摺りながら、俺はどうにか体勢を立て直した。

身体の数力所に擦過傷のような傷が見受けられるが、そこまで酷い物じゃない。問題無く戦える……！

「はああああッ！」

自らを奮い立たせ、俺は再びジエイガに突進を仕掛ける。

だがジエイガの方は、前進も後退もしない。ただ不敵に笑いながら、大鎌を肩に掛けて立ち尽くしている。

避けるつもりが無いのか？ そう思いながらも、俺は右手の『黒裂剣』を横薙ぎに振るう。

するとその瞬間、漸くジエイガの身体が動いた。

肩に掛けていた大鎌を、そのまま地面へと振り下ろす。鋭い斬撃音を上げて、大鎌の刃が地面に深々と突き刺さった。

その瞬間。

地面が地中から抉れるように弾け飛び、衝撃波を介して俺の身体を吹き飛ばした。

「があ……ッ！」

「ハハハハッ！」

吹き飛ばされる俺を飛び越えるように、すぐ眼の前にジェイガの姿が現れる。

再び振り下ろされた凶刃を、俺は何とか空中で防御するが、斬撃の勢いに押され、背中から地面に直撃した。

「あッ、ぐッ……！」

地面に叩き付けられた痛みで悶える俺から、数メートルの距離を取って、ジェイガは軽やかに着地する。

その腕に握られている大鎌には、すでに黒い光が集束し切っていた。

「終わりだクソ銀髪」

吐き捨てると同時に放たれた黒い光は、真っ直ぐ俺に向かってくる。

立ち上がる暇も、回避する暇も無い。

俺の意識は、そこで途絶えた。

止めと決めて放った一撃によって、銀髪野郎の身体は動かなくなった。どうやら気を失ってやがるらしい。

「チッ、こんなモンで終わりかよ。『魔剣』使いつつても、所詮はこの程度って訳かア」

大鎌を肩に掛け、俺は浅く溜め息を吐いた。

さつきまでは確かに、胸の内から湧き上がるみてエな優越感に浸ってたが、今はもうとっくに冷めちまつてる。終わっちまえば実にあつけない幕引きだぜ、つたくよオ……。

「さアて、長居は無用だ。また余計な奴が絡んで来やがるかも知れねエし、フオードの野郎も探さなきゃなんねエしなア」

銀髪野郎は放つといていいだろ。ワザワザ殺してやる義理はねエ。動けねエんならこれ以上邪魔される心配もねエ。とにかく今はフオードの野郎を。

「……！ あん？」

港付近から移動し始めようとした時、俺は不意に、視界の端にあるモンを見つけた。

いやこの場合、人物つつた方が正しいか。

その『女』は、ご丁寧に俺の視界の中に、自ら飛び込んで来やがった。

腰までありそうな長い金髪に、イラつく雰囲気を放つ金色の眼。前にも遭遇して殺し損なつた、この大陸の『魔術師』の中でも、類稀なる力を持つてる『魔術師』。

まさか、奴の方から俺の眼の前に現れてくれるとは、正直思わなかつたがなア。

「わざわざ殺されに来やがったかア、ミレーナ・イアルフスよオツ」

俺は消滅させ掛けていた『漆黒の大鎌』ダーク・デスサイズを握り直す。

どうやらまだ、俺のパーティーは終わりそうにねエらしい。

激しい頭痛に苛まれていた。

『魔術の館』を飛び出して、高台から『サランドロ』の街並みを見下ろした時から、私の頭は徐々に悲鳴を上げ始めた。

それは港に近づく度に、歩み寄る程に、私の頭を内部から激しく揺さぶる。

何かがある。自分が向かう先に、自分に関係するはずの何かがある。その不可思議な確信が、私の足を止めようとはしなかった。激しい痛みを覚える頭を、片手で覆うように抱えながら、それでも私は進み続ける。

やがて視界の中に、見覚えのある少年の姿が映り込んだ。

青紫の少し尖った髪に、蛇を思わせる獰猛な眼付き。進み続ける私に向かって、何かを叫びながら、大きな黒い鎌を両手で握り締めている。

……ああ、そうか。そうだったんだ。

『アジニール・ファウンテン』  
『紺碧の泉』  
あの少年に会った時からずっと、あの黒い大鎌を、どこかで見た気がしていた。だけどそれがどこなのか、全く思い出す事が出来ずにいた。

でも今なら、不思議と簡単に思い出せる。

私があるを眼にしたのは、アイツに会ったあの時だ。

アイツと……、ノイエ・ガルバドアと。

#### 第四章 役者たちは戦場へ（後書き）

今回は一章中での視点移動が一番多かった回かな、とっております。

読者の方々には、どれが誰の視点か上手く伝わりましたかね？

そして、本当に少しずつですが、謎が解明されようとしています。

このまま順調に、伏線を回収していきたいものですw

第五章 仮初めの力 - Fragment of memory - (前書き)

相変わらず更新速度が不明確で申し訳ないです(汗)

とにもかくにも、『魔術の館編』第五章始まります！

「あれ？ もしかしてこれ……」  
文字の羅列を追っていたあたしは、資料のある一点に視線が吸い寄せられた。

デインに押し付けられた（とあたしは思ってる）資料探しを再開させてから、数十分は経ったかな？ という頃。唐突に見つけてしまった記述を声に出しながら、もう一度初めから読んでみる。

「『六大精霊論』。この大陸において、何百年も前から論じ続けられている、「精霊」と呼ばれる存在。その存在を実際に目撃したという事実は、現代に至るまで確かめられていない。だが、この大陸の各地には、「精霊」に関する伝説がいくつか残されている』」  
傍で音読するあたしに気づき、一緒に調べてくれていたエミリアさんが歩み寄ってきた。

彼女は結局、あたしの作業を手伝ってくれている。彼女にも自分の仕事があるんじゃないのかな、と思って尋ねると、エミリアさんは笑って、「問題ありません。私の方の仕事は大体片付きましたから」と言ってくれた。

今のあたしって、かなり不甲斐ない状態だね。よりもよって、この館長さんに自分の作業を手伝わせてるんだから……。

「目的の資料が見つかったんですか？」

「はい、多分そうだと思います」

エミリアさんにそう答えてから、あたしはもう一度資料に視線を移し、続きを音読する。

「『全ての属性には、それぞれ違った「精霊」が力の象徴として考えられている。炎の力を司る「精霊・サラマンダー」。水の力を司る「精霊・ウンディーネ」。風の力を司る「精霊・シルフ」。地の力を司る「精霊・ノーム」。この四つが、「四大精霊」と呼ばれているものだ』」

丁度そこで、次の頁に文章が移っている。

あたしは頁を捲り、再び文字の羅列を追う。

「『そして光と闇の力を司る「精霊」。それが「ホーリー・ディバイン」と「デス・ベリアル」と呼ばれる存在だ。この「二大精霊」は、信仰的な意味合いの強い存在でもあり、或いは「天使」、「悪魔」と呼ばれる事もある』。これって……」

ディーンから聞いた、ガラムって人が言ってた事と一致してる、よね。

『デス・ベリアル』とは、『精霊』もしくは『悪魔』と呼ばれる存在の名前。じゃあ、あの『精霊指揮者』ゴースト・コンダクターって人たちが狙ってる事って……。

「リネさん、どうかしたんですか？」

「え？ あ、はい、何でもありません。ただ知りたかった事が漸く調べられて、ちよつと安心しちゃって」

「そう、なんですか？」

エミリアさんは不思議そうに首を傾げている。

彼女が気にしている通り、あたしは安心とは全く正反対の事を感じていた。

多分あたしも、心のどこかで『精霊指揮者』ゴースト・コンダクターたちの話を、空想や夢物語として捉えてる所があったんだと思う。

『精霊』を呼び出すなんて馬鹿げてる。現実にそんな事あり得ない、って。

だけど今、その馬鹿にしていた空想と夢物語が、急に現実味を帯び始めた気がした。

資料の文字の羅列は続いている。

あたしは不安に駆られながらも、ゆっくりとそれを追い続けた。



死神を思わせる、黒く大きな鎌。

それを構えるジェイガの姿が、不思議とアイツの姿と重なって見える。

いや、多分それは、何も不思議な事じゃないんだろう。なぜなら彼は、ノイエの弟子であって、彼が使うその『魔術』は、ノイエ自身が使っている『魔術』でもあるのだから。

そう……、今なら思い出せる。私が最後に会ったのは、間違いくノイエ・ガルバドア本人だ。

私は『あの日』、一人でアイツに会いに行つたんだ。一緒に暮らしていたデインさんに、何一つ理由を告げる事無く。

だけどもまだ、全てを思い出せた訳じゃない。

なぜ私は、アイツに会いに行つたんだろう？

なぜ私は、デインさんに何も言わずに姿を消したんだろう？

全ての疑問が解き明かされてはいない。私にはまだ、取り戻さなければならぬ記憶が残ってる。

その証拠に、私の頭を苛む頭痛は、全くと言っていい程治まっていなかった。

「どうしたどうしたア、ミレーナ・イアルフスウウツ！  
『アジュール紺碧アジュール』の時の威勢はどこにいったアツ！？」

青紫の髪の少年、ジェイガは高らかに叫びながら、黒い凶刃を右に左に振り回す。

痛みによって揺れる視界。それでもなぜか、私は自然に身体を動かす事が出来た。

攻撃が予測出来る。

回避の為の足捌きが行なえる。

相手の攻撃全てを、上手く見切る事が出来る。

記憶を失っているはずの私が。

『本物の』ミレーナ・イアルフスじゃないはずの、『今の』私が、  
だけど戦いの感覚を取り戻しただけで、私には一つだけ、扱う事  
が出来ないものがあった。

それは、『魔術』。

どんなに戦いの感覚を思い出す事が出来ても、『魔術』だけは発  
動の仕方がわからない。何をどうすればいいのかすらわからない。  
『紺碧の泉』アジュール・ファウンテンの時は『魔術』を行使していたそうだけど、私にはそ  
の時の記憶が無い。

完全に、不完全な状態。

ややこしくて矛盾しているような言い回しだけれど、これが私の  
今の状態だ。このままじゃジエイガの攻撃を避けるばかりで、攻め  
に転ずる事が出来ない。無駄に体力を使い続けるだけだ。

「オラアッ!!」

「!」

一際大きく振り下ろされた一撃を寸前で躲し、私はジエイガと距  
離を取る。その直後、凶刃が石造りの地面を容赦なく砕く。

轟音が、辺りに響き渡った。

「テムエ……、一体どういふつもりだア？」

地面から大鎌の刃を引き抜きながら、ジエイガは獰猛な眼付きで  
私を睨み付けてくる。彼の瞳は、これ以上無いくらい殺気立ってい  
た。

「なんで『魔術』を使わねエ？ 手加減してやがんのか？ それと  
も余裕のつもりか？」

「……ッ、私は……」

自分の状況を相手に、況してこの少年に教えていいものなのか判  
断し切れず、私は言い淀んでしまう。

ところがジエイガの方は、然して気にしている訳でも無いのか、  
深く言及しようとはしない。

「まあいい。まともにならなくてもいいわね。でもな」

そんな風に勝手に結論付けて、彼は話を先に進めようとする。

「ただし、テメエには答えてもらわなきゃいけないエ事がある。『紺碧の泉』の時は、余計な横槍が入って聞きそびれたからなア」

「ノイエ・ガルバドアの行方、でしょ？」

「何だよ、わかってんじゃねエか」

先手を打った私に対して、ジエイガは感心したような声を上げる。彼が言った『紺碧の泉』での出来事。そしてついさっき、ディーンくんやフォードと話した事で、私もその辺りはすでに把握している。

多分『この事実』を知らないのは、眼前にいる少年だけだという事を。

「残念だけど、私は知らない。それに私だけじゃないわ。他の『英雄』たちだって、ノイエの行方は知らないはずよ」

彼はこの事を知らなかったからこそ、『英雄』を狙うという行動に走ったんだ。それは間違いない。

だったら今、事実を知った彼はどんな反応を見せるだろう？

内心で、ある意味不安に思っている私に気付いた様子も無く、ジエイガは淡々とした言葉を返してきた。

「随分ハッキリ言うじゃねエか。だがよオ、それが嘘じゃねエって言う証拠はあのかア？」

眉根を寄せて告げるジエイガの言葉は、完全に私の事を疑っているものだった。信じようとする気配すら、全くと言っていい程感じられない。

「証拠って……」

そんな事言われても、知らないものは知らない。と言うか、私の場合は記憶喪失だから、わからないと言った方が正しい。

それに、今の言葉が嘘じゃないと証明する方法なんて無い。嘘は言っていないと、信じてもらうしか。

「本当の事を話すつもりがねエなら、別にそれでも構わねエ。知っ

ていようがいまいが、どの道俺がテメエを殺す事には変わりねエんだからなアツ！」

声を荒げ、ジェイガは再び動き出す。大鎌を構えて踏み込んでくる姿には、一切の躊躇いが感じられない。

やむを得ず私が回避行動に移ろうとした、その瞬間だった。

「痛……ッ！」

ズキズキと続いていた頭痛が突然、一際大きな痛みを放って、私の身体をその場に拘束する。まるで磔にされているような感覚だった。

無防備になり、薄眼を開けた私の視界に、大鎌を振り被ったジェイガの姿が映り込む。

回避はおるか、防御すら間に合わなかった。

私とジェイガの間に、割って入る人影が現れなければ。

鉄同士がぶつかり合うような、鋭い衝撃音が響き渡る。私とジェイガの間に入ったのは、傷だらけになった二刀流の剣士。

一瞬灰色に見えたその人物の髪は、正確には銀色だった。体格から考えて、多分男性だと思う。

それにしても、実に見事な剣捌きだ。彼は鐔の形が違う、黒と白の刀身を持つ二本の剣で、挟み込むようにしてジェイガの大鎌の刃を受け止めている。

「へエ……、もう気が付いたのか。お早いお目覚めだなア、銀髪」  
皮肉のようにしか聞こえない言葉を銀髪の剣士に浴びせ、ジェイガはニヤリと笑ってみせる。

それを合図とするかのように、銀髪の剣士はジェイガの攻撃を勢い良く押し返した。剣士とジェイガの間に、僅かながらの間合いが生まれる。

「あなたがミレーナ・イアルフス、ですか？」

「……え？」

肩越しに僅かに振り返り、銀髪の剣士はそんな風に尋ねてきた。彼の表情は厳しいものだったけれど、その顔立ちは随分若いように思う。もしかしたらディーンくんや、今戦っているジエイガと、同じ年代の少年なんじゃないだろうか？

「そうだけど、キミは？」

「ジン・ハートラー。『ギルド』に所属している者です。良かった……、どうやら本人に間違いないようですね」

「どういう事？」

再度尋ねる私に、彼は厳しい表情のまま、それでも丁寧な口調で答えてくれた。

「訳は後で話します。俺もあなたには聞きたい事が色々ありますが、今はそれ所じゃない。あの男を討つ為に、あなたの力を貸してもらえませんか」

「あ、でも……、今の私は……」

「……？」

またも言い淀んでしまった私を見て、ジン・ハートラーと名乗る剣士は、訝しそうに眉根を寄せる。

するとその時。

「おいおいテメエら。こつちの事無視して、愉快なおしゃべりしてんじゃねエよ」

無慈悲な言葉が響き、私たちの意識を無理矢理に前方へと向けさせる。見ると声の主、ジエイガが振り上げる大鎌の刃には、不気味な黒い光が集束していた。

「『漆黒の大鎌』！」

「くっ！ 『黒白雷閃』！」

眼の前の二人が、私には説明出来ない不可思議な何かを生み出し、そしてほぼ同時に放ち合う。

放たれたその『何か』は、二人の間で衝突すると激しい爆発を起こした。轟音と共に、爆風と爆煙が辺りに吹き荒ぶ。

「何か、力を貸せない訳があるみたいですね」

爆風と爆煙に眼を細めながら、銀色の髪の少年はそう告げる。

私が黙ったまま頷くと、ジンくんは悔しそうに一瞬目を伏せた。

「俺一人の力では、あの男の力に対処し切れない。申し訳無いですが、一旦後退します。あなたはすぐにここから」

「余所見してんじゃねエ！」

「！」

まるで壁を突き破るかのような勢いで、爆煙を割いて現れたジェイガが、大鎌の石突きの部分でジンくんのお腹を突き飛ばした。

「ぐがッ！」

くの字に折れ曲がって、あらぬ方向へ飛ばされたジンくんの姿を、私は最後まで見届ける事が出来なかった。あの湖上の街で遭遇した時と同じように、ジェイガの右腕が、私の喉を鷲掴みにしたからだ。

「ぐッ……、う……ッ！」

「何をどう足掻こうが無駄なんだよ。テメエの命はここで尽きる。」

この俺の手に掛かってなアッ！」

「……ッ！」

ジェイガの身体が、次の動作に移ろうとする寸前。私は左足を振り上げて、ジェイガの右肩の辺りに蹴りを叩き込んだ。

彼にとっては不意の一撃だったんだろう。蹴りの衝撃によって、

私の首を掴んでいる右手の力が、僅かに緩む。

その一瞬を見逃さず、私は彼の右手を強引に振り払った。

首を絞められる息苦しさから解放されたものの、私はバランスを崩し、地面の上を二、三度転がってしまう。

「チィ……ッ！　だアからア、悪足掻きしてんじゃねエよクソ女アッ！」

まるで獣の咆哮のような怒号を轟かせ、ジェイガは両手で握り直した大鎌を、地面に伏す私に振り下ろしてくる。

避けられない……！　そう感じて、思わず目を閉じた瞬間だった。

「危ない！」

ジェイガとは違う別の誰かの声が響き、そのすぐ後、何か柔らか

いものが裂けるような音が聴こえた。しかもそれだけじゃなく、私を狙っていたはずの凶刃が、いつまで経っても私の身を切り裂こうとしない。

疑問に思い、ゆっくりと眼を開けると、そこにはさっきの銀髪の少年が、私に顔を向ける形で立ちはだかっていた。

するとその瞬間。彼の身体が力無く崩れ落ち、私の方に倒れ込んだ。彼の背中には、斜めに大きな傷が付けられ、そこから鮮血が滲み出ている。

「そ、そんな……！　しっかりして！」

「チツ、邪魔しやがって。だがこれで、今度こそ終わりだ」

もう一度大鎌を振り上げ、ジェイガは冷たく笑う。

私は咄嗟に、ジんくんの身体を庇うように抱えた。例えそんな事をして、ジェイガの攻撃を防げるはずがないのに。

切り裂かれる……！　そう感じた瞬間だった。

鉄同士が擦れるような音が響き、何かがジェイガの攻撃を引き止めたのは。

見るといつの間にか、炎のように紅く染まった鎖が、ジェイガの持つ大鎌の刃の根元辺りに、何重にも巻き付いている。

そして遅れて聴こえてきたのは、私がよく知る『彼』の声だった。

「てめえ……、そこで一体何してやがる」

「……よオ。また会ったな、紅髪あかがみイ」

険しい表情で睨んでいる紅い髪の少年に、ジェイガはそんな風に告げ、不敵な笑みを漏らした。

争いの場に駆け付けた俺の眼に最初に映ったのは、ミレーナに凶刃を振り下ろそうとする何者かの姿だった。

俺はあの人物を知っている。青紫の髪に、黒い大鎌を携えたあの姿に、心当たりがある。

深く考えるまでも無く、俺は即座に『フレイム・チェイン紅蓮の縛鎖』を使って、無理矢理その攻撃を妨害する。そして、至極当たり前な質問をそいつにぶつけた。

「てめえ……、そこで一体何してやがる」

「……よオ。また会ったな、あかがみ紅髪イ」

俺の問い掛けに対し、青紫の髪の男ジェイガは、肩越しに余裕のある笑みで応じた。相変わらず、こっちの事を下手に見る態度は変わっていないらしい。

俺はジェイガの大鎌に鎖を巻き付けた状態で、もう一度状況を確認してみた。ジェイガの奴がここにいるって事には驚いたが、ミレーナの傍にいる人物を眼にして、俺は余計驚いてしまう。一瞬息が止まるかと思った。

「ジン……!？」

見覚えのある艶のある銀髪。勘違いなんかじゃない。ミレーナに抱えられる様にして地面に倒れ込んでるのは、紛れもなくジンだった。

何であいつがここにいるんだ!? もしかしてあいつ、ジェイガの事を追ってきたのか?

内心で疑問に思ってみたものの、よく考えれば、それは全くあり得ない話じゃない。ジンはよく、元老院の一人、ハルク・ウエストインの命に従って動いている事がある。あの男からの命令でジェイガを追っていた、なんていかにも考えられる話だ。

「一応確認しとくぜ、ジェイガ。ジンに怪我を負わせたのは、お前なんだよな?」



ミレーナに抱えられているジンの背中には、斜めに走った大きな傷がある。服が紅く染まる程の大怪我だという事は、よく見なくても簡単にわかった。

ジェイガの大鎌に撒き付いた鎖に、ギリツと力を込めながら、俺はジェイガに再度問い掛けた。

すると案の定、ジェイガはニヤリと笑ってみせる。

「あん？ テメエこの銀髪と知り合いなのかよ？ チツ、道理で似てると思っただぜ。俺をこの上なくイラつかせる所がなア」

ジェイガは若干顔を顰め、ゆっくりと俺の方に向き直りながら続ける。

「それにしても愚問だなア。こいつをやったのはお前か、と来たか。ハハツ、むしろこっちが聞きてエぜ。今のこの状況で、俺以外の誰がこいつを怪我させられるってんだア？」

「……そうかよ。クソ野郎が」

わかっていた事だが、こいつには悪びれる素振りすら無い。いい加減俺も、こいつの態度にはウンザリしてしまう。

とはいえ今、こいつが狙っているのは明らかにミレーナの命だ。

彼女を守る為にも、ジェイガをこっちに釘付けにしないと！

「とにかくミレーナとジンから離れる。戦う相手が欲しいんなら、俺が相手になつてやる」

「ハッ……。相変わらず威勢だけは良いみてエだなア、クソ紅髪あかがみがア！」

ダンツと、叩きつけるかのように地を蹴り、ジェイガは一瞬で俺との距離を縮めてくる。

俺は右手に炎を集束させ、『フレイム・ロングソード 紅蓮の爆炎剣』を造り出しながら、後方に大きく跳躍した。

そうする事で一旦距離を稼ぎ、ジェイガの大鎌に撒き付いたままだった『フレイム・チェイン 紅蓮の縛鎖』を左手で引き寄せ、落下する勢いと共に炎剣を振り下ろした。

「うおおおおおおおッ！」

「チイツ！」

俺が振り下ろした炎剣を、ジェイガは大鎌の長い柄を水平に構えて受け止める。

だが次の動作は、俺の方が早かった。

左手から生じている『フレイム・チエイン紅蓮の縛鎖』を大きく後ろに引くと、ジェイガの防御が一瞬乱れる。

その一瞬が、十分な隙だった。

フラついたジェイガの右肩を踏み台にして、俺は奴の後方へ大きく跳躍した。

「テツ、メエ……ッ！」

交差する瞬間、ジェイガは踏み台にされた事にイラついたような声を上げた。

だが俺は気にせず、地面に着地すると同時に向き直り、左手から伸びる紅い鎖に、右手の『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』の刀身を接触させる。

と同時に、叫ぶ。

「フレイム・チエイン弾け飛べ、『フレイム・チエイン紅蓮の縛鎖』！」

「!?!」

訝しげな顔をするジェイガの目の前で、紅い鎖が俺の手元の方から、まるで爆弾の導火線のように、ジェイガの大鎌の部分まで灯を上げていく。

その直後。

ジェイガの大鎌を中心に、鮮やかな紅い色の爆発が起きた。

「ぐああああつ！」

起きた爆発と共に、左手から繋がっていた『フレイム・チエイン紅蓮の縛鎖』が霧散するように消える。

俺は爆煙の向こうにいるであろうジェイガに向けて、強気な言葉を掛けた。

「いきなりで驚いたか？ この『フレイム・チエイン紅蓮の縛鎖』は、こういう使い方もある便利なものなんだ。どうもお前は『アジュール・ファウンテン深紅魔法』を舐めてるみてえだけど、生憎だったな。『アジュール・ファウンテン紺碧の泉』でお前に見せてない力

が、こつちにだってあるんだよ」

確かに俺はミレーナ程、『深紅魔法』を操れていないだろう。でもだからと言って、彼女から教えられた技術を全く活かせてない訳じゃない。俺にだって『魔術』の経験を積んできた、確かな実績があるんだ。

「ああ、そうかよ。だが、そつちも忘れてねエか？」

晴れ始める爆煙の向こうから、どこか余裕のあるジェイガの声が聴こえてくる。

「テメエの生半可な力は、『アジュール・ファウンテン紺碧の泉』で全く役に立たなかつたつて事をよオ……ッ！」

「……！」

怒りの籠った声と共に現れたジェイガは、少々傷を負っている様子はあるものの、致命傷を与えるには至っていないかった。奴は黒い大鎌を高く掲げ、その刃から発生した黒い光を集束させ、一つの球体を造り出している。

徐々に膨らんでいく黒い光の球体。そうだ、あの技には見覚えがある。

確か『魔法名』は、『ダイクネス・レイ漆黒の光刃』！ 『アジュール・ファウンテン紺碧の泉』の街並みを

半壊させた、全方位無差別攻撃だ！

「止めるジェイガ！ この街まで『アジュール・ファウンテン紺碧の泉』の二の舞にする気かよ！？」

「うるせエんだよ三下ア！ どうなるうが俺の知つた事か！」

予想通り、俺の制止を一蹴し、ジェイガは『魔術』の発動を止めようとはしない。

くそつ、どうする！？ こつちもダメもとで、『クリムゾン・レイ深紅の流星』を放つてみるか……？ だけど『ダイクネス・レイ漆黒の光刃』の威力は絶大だ。あれを完全に相殺し切るなんて、そんなの……ッ！

「チイツ！ 悩んでる暇は無いつて訳か！」

俺は両腕を水平に構え、炎の塊を生み出そうとした。

だが、すでに手遅れだった。技の発動は、ジェイガの方が圧倒的

に早い。勝利を確信したかのように、ジェイガは不敵に笑って告げる。

大破壊を齎す、最悪の『魔法名』を。

「『漆黒の光刃』！」

奴が叫ぶと、黒い光の球体が軋み、弾け、無数の黒い光刃が出現した。

前も後ろも右も左も、全てを無に帰す絶望の光。

周囲に一齐に飛来するその瞬間が、やけにゆっくりに見える。

「全く……。先に一人で突っ走り過ぎだ、お前は」

異変が起きたのは、そんな言葉が聴こえた直後だった。

どこからともなく現れた翡翠色の光が、ジェイガの周囲を正円状の壁のように覆い、飛来する光刃を悉く打ち消してしまった。

「「なっ……ッ!？」」

攻撃者のジェイガも俺と同じ声を上げ、突然起きた現象に眼を瞬かせる。

全てを無に帰すはずだった黒い光。

その一齐攻撃を難なく防いってしまった、翡翠色の光。

呆然とする俺の背後から聴こえてくるのは、やけにゆっくりとした感覚で刻まれる、誰かの足音。俺が振り返ると、さっき聴こえた声と同じものが、再び俺の耳に響いてきた。

「悪いなディーン。本当ならこんな真似はしたくないんだが、ここからは全て、俺が引き継ぐ」

フォード・ヒースクライム。

『倒王戦争』を戦い抜いた偉大な『英雄』にして、『流衝魔法』を操る風の『魔術師』。

彼が場違いな程爽やかに微笑むと、辺りに一陣の風が吹き抜けた。

第五章 仮初めの力 - Fragment of memory - (後書き)

今回はかなりバトル多めだったような気がします。

どこを読んでもバトルばっか……、って元々この作品自体、バトル要素多めかとは思いますが(笑)

さて、次でいよいよ今作品も50部目。

気合い入れて執筆していきこう！

第六章 対話 - Jade & amp; Black - (前書き)

最近一週間があっという間に過ぎてしまう気がしています。

と言うか、前回更新から既に十日以上過ぎてますが。

中々更新のペースを上げられない……。

読者の方にはホント申し訳ないですが、気長に待っていてもらえると幸いです。

という訳で、第六章スタート！

ジェイガの攻撃を容易く防いだ、翡翠色の光。聳え立つ壁そびのようなその光を見つめ、俺は思わず感嘆していた。

まるで風そのものが流れる様子が、自分の眼で可視出来ているかのような感覚。

ある意味神々しさすら感じる翡翠色の光は、今の状況に不釣り合いな程、素直に綺麗だと思える。

『ここからは全て、俺が引き継ぐ』

強い意志を感じさせる言葉を紡ぎ、フォードはいつの間にか、俺の傍らに立っていた。

「な、何言ってるんだ。あんたに全部押し付けるような真似出来るかよ。俺も一緒に」

「お前こそ何を言ってるんだ」

戦う、とまで言わせてもらえず、不満な顔をする俺を尻目に、フォードは畳み掛けるように続ける。

「あそこにいる青紫の髪の毛の男。あいつがお前の言っていた、ジェイガ・デイグラッドだろ？ 確かに今の『魔法』は『黒煉魔法』のようだな。だとすれば、あいつの相手をするべきなのは、お前じゃなくこの俺だ。さっき話した事が確かなら、あの男が狙っているのは俺の方なんだからな。違うか？」

「いや、そうだけど……。でも」

「それに今のお前には、他にやるべき事があるはずだが？」

「！」

フォードはそう言って、俺の視線を促すようにある方向を見つめる。

そこにいたのは、どこか不安げな表情を浮かべたミレーナと、傷を負い、気を失ったままのジン。

フォードが何を言わんとしているか悟った俺が、二人の方から視

線を戻すと、フォードは既に俺の方を見つめていた。

有無を言わさない、真剣な表情で。

「……わかった。一人で、大丈夫なんだよな？」

「誰に物を言ってるんだ。いいからお前は自分のやるべき事に集中している」

嫌味の無い軽い頬笑みを見せながら、フォードは俺に早く行くよう催促する。

俺は苦笑して頷き返すと、ミレーナとジンの許に走り寄った。

傷を負ったジンを抱えるミレーナの瞳は、今の状況に対する不安からか、かなり揺らいでいるように見える。

「ミレーナ、怪我はないか？」

大丈夫か、という言葉は使わなかった。どう見ても、今の彼女は大丈夫って言える様子じゃない。

「私は平気だけど、でもこの人が……」

「確かに怪我が酷いな……。リネがこの場にいれば、すぐに治してもらえるんだけど……」

俺は応急処置として、自分の着ていた萌葱色のマントを破り、それでジンの身体を、傷を覆うように縛る事にした。

その作業中、ミレーナが頼りなさに口を開く。

「デーンくん、私……」

「心配すんな。こいつは俺の知り合いだ。前から知ってる奴だけど、こんな怪我ぐらいで死ぬような奴じゃないから」

「そうじゃないの。そうじゃなくて……」

「……？」

応急処置を終えて俺が顔を上げると、ミレーナはなぜか話しくそくに口を噤む。何かを言おうとしているのは確かなのに、それを口にするのを躊躇っているようだ。

何を躊躇っているのか問い掛けようとした、その時。ジェイガの周りを取り囲んでいた翡翠色の光が、渦を巻くように上昇しながら、霧散して消え去る。



数秒後に聴こえてきたのは、悪意に満ちた声だった。

「テメエがフォード・ヒースクライムか」

問われているのはフォードなのに、俺は思わずジェイガの方を振り向いてしまう。

すると、その当の本人であるフォードは、物騒な雰囲気でも問いつけられているにも拘らず、どこか余裕のある表情で応じる。

「ほう、どうやらお前にも自己紹介は必要無いようだ。俺の事はお前の師匠、ノイエからでも聞いていたのか？」

「……俺の前で軽々しくその名前を口にすんじゃないやねエよ。何も知らねエ『英雄』気取りが」

「随分と心外な物言いだ。別に俺だって気取っているつもりはないさ。呼ばれているのは事実だがな」

挑発してる訳じゃないんだろうが、フォードの口調はやけに軽い。多分そのせいだろう。ジェイガが不満げに眉根を寄せるのを、俺は見逃さなかった。

「ところでジェイガ。そこにいるディーン・イアルフスから聞いた事なんだが……、お前はどうかやら、ノイエの行方を追っているらしいな」

「ああ、そうだ。それを聞いてやがるって事は、俺がテメエら『英雄』から聞き出そうとしてる事がある、ってのもわかってんだよなア？」

「ああ。ノイエの行方、だそうだな。だが残念だったな。ハッキリ言ってしまうば、今お前がやっている事は全くの無駄骨だ」

「あん？ どういう意味だ？」

訝しそくに眉根を寄せるジェイガに、フォードは淡々と続ける。

「『英雄』たちの中で、ノイエの行方を知っている者は誰一人いない、という意味さ。俺やそこにいるミレーナだけじゃない。残りの二人、ランザ・ダルベスとバルベラ・スプリートも、恐らくノイエの行方は知らないはずだ」

告げられた瞬間、ジェイガの眼付きがフォードを探るようなもの

に変わる。あれは明らかに、疑いの眼差しだ。

「それが嘘じゃねえって証拠はあんのか？」

「残念ながらない。証明するのも難しいな」

フォードは相変わらず淡々と、そしてやけにハッキリ言い切る。

下手に誤魔化そうとか、隠そうとかいう意志が全然感じられない。

まあ、彼の言ってる事は本当の事なんだから仕方ないけど。

だけどジェイガの方は、やっぱり素直に受け入れようとしない。

根拠のないフォードの言葉に、軽い笑みを混ぜて応じる。

「ハッ！ 証拠もねエのに、テメエのその言葉を馬鹿正直に信じる

ってか？ 生憎俺は、そこまで愚鈍な人間じゃねエんだよ」

「そうか。やはり信じられないか」

最初からわかっていた、とでも言いたげに、フォードは眼を伏せて溜め息を吐く。

そして少しだけ間を開けた後、「なら、これならどうだ？」と前置きして、彼は俺にとってとんでもない事を口にした。

「そこにいるミレーナ・イアルフス。コイツなら恐らく、ノイエの居場所を知っている」

「ッ！？」

「あん……！！？」

思い切りミレーナの方を指差して、フォードは涼しげに告げた。

その言動があっさりし過ぎていて、相対しているジェイガも啞然としている。

「っておい！ あのおっさん、いきなり何言い出してんだよ！？」

「フォード！ あんた一体何のつもり」

「だが残念ながら、今のコイツにそれを聞いても無駄なんだ」

反論しようとする俺を制止する為なのか、フォードは続けてそんな事を言った。

フォードの言葉の意図がわからないんだろう。ジェイガはまた眉

根を寄せて、訝しげな顔をする。

「どういう意味だそりゃ？」

「記憶喪失なんだよ、今のミレーナは。自分が『英雄』と呼ばれる存在である事どころか、『魔術師』である事も、弟子のデイーンの事すら覚えていない。お前が『紺碧の泉』アジュール・ファウンテンで会った時のコイツは、既に記憶を失っていた状態だったんだ」

「ああ……！？」

フォードは告げる。真剣な表情で、まるで訴え掛けるかのように。俺は、思わず黙り込むしかなかった。

彼は今、ミレーナが記憶喪失である事実をジェイガに伝える事で、何らかの活路を見出そうとしている。少なくとも、俺にはそう感じられた。

「記憶喪失だと？ テメエ……、俺をおちよくってやがんのか？」

「そんなつもりはない。これは厳然たる事実なんだ」

「ふざけ」

「嘘だと言うならこちらも聞こう。お前は『紺碧の泉』アジュール・ファウンテンでミレーナに接触した時、何か違和感を感じなかったか？ 全く感じなかったと、ハッキリ言い切れるのか？」

「！」

フォードが矢継ぎ早に質問を浴びせると、ジェイガの表情が一瞬固まる。それをフォードは、一瞬たりとも見逃さなかった。

「……どうやら覚えがあるようだな。なら、今のこの状況を見てどう思う？」

まるでジェイガの視線を促そうとするかのように、フォードは両腕を水平に広げる。

「ここまでお前に追い詰められて、コイツはなぜただの一度も『魔術』を発動しなかった？ 手加減していた、なんて一言で片付けられるのか？ 自分の身に、命に、危機が迫っていたこの状況で、そんな馬鹿みたいな理由があり得ると、お前は本当に思うのか？」

「……」

「ミレーナは確かに、ノイエの行方を知っている可能性がある。だが、今の彼女は記憶喪失だ。これが今俺に言える、真実であり事実だ」

フォードの、どこか説得しているようにも見える言葉に、ジェイガは黙り込んだ。

何だか俺は今、とてつもなく意外な光景を目の当たりにしている。『あの』ジェイガが全く反論しようとしないうちで、そんな事があり得るのか。……いや、それだけフォードの言葉が、的確に突き刺さってるって事なのかも知れない。

このまま行けば、ジェイガを上手く撤退させられるんじゃないか。そう思った時だった。

「仮に」

若干俯いていたジェイガの口から、僅かに声が漏れる。

すると次の瞬間。ジェイガはいきなりフォードに斬り掛かろうとした。

「！ フォード！」

思わず俺が叫ぶよりも僅かに早く、フォードは既に動き出していた。

ジェイガが振るった大鎌の剣線の軌道を、正確に避けて距離を取る。まるでダンスでも踊っているかのような、軽い足捌きだった。

「ジェイガ……、お前」

「仮にそれが事実だったとして、それが何だつてんだア？ そんなモンが、俺が退く理由になるとでも思ってたやがんのかアツ！？」

怒号を上げ、ジェイガは怒りを露わにする。

恐らくあいつ自身、フォードの言葉が真実であり事実だということ事に気付いているんだろう。

けどそれがあつたからと言って、あいつが退く理由にはならない。

……俺が甘かったんだ。深い事情は知らないが、あいつは『魔術師』そのものを憎んでる。ミレーナやフォードを狙ったのだから、

単にノイエの居場所を探る為ってだけじゃない。命その物も狙ってるんだ。

あいつにとつて標的になり得るのは、『魔術師』と呼ばれる人間全てなんだから。

「デイン！」

「！」

激昂するジェイガに視線を合わせていた俺は、フォードに呼び掛けられてハツとする。俺が振り向くと、彼は今まで以上に真剣な顔付きだった。

「どうやらここまでが限界だ。その二人の事はお前に任せる」

「任せるってあんたはどうするつもり、っておい！？」

俺が言い終わるよりも早くフォードは駆け出し、ジェイガに向かって突進していく。

武器も構えずに、あんな真っ正面から突っ込んで何をするつもりなんだ、と思った時だった。

フォードの駆ける動作に合わせて、彼の足下から翡翠色の光の粒子が飛び散り、尾を引いていく。

その速度は徐々に速まり、ジェイガが大鎌を構えた瞬間には、フォードの身体は既に、奴の懐に飛び込んでいた。

「なッ！？」

驚愕するジェイガの表情が見えたのは、ほんの一瞬だった。

フォードは強引にジェイガの首を掴み、地面を蹴り付ける。

その直後、翡翠色の爆風が発生し、フォードとジェイガの身体は天高く舞い上がった。

啞然と見上げる俺の視線の先で、翡翠色の光は急激に方向転換し、街の北側の林の方へと向かっていく。

その光景はまるで、翡翠色の流星のようだった。

「とにかく、ジンの怪我の手当てをしないと」

しばらくその光景に見蕩れていた俺は、漸く頭を働かせる。

ジンの怪我はどう見たって重傷だ。応急処置なんて形だけで、これじゃあ何の解決にもなっていない。一刻も早く、リネに傷を治してもらおう！

「ミレーナ、歩けるか？ 無理そうなら、ここで少し休んでもいいんだぞ？」

俺の提案に、ミレーナは無言で僅かに首を横に振る。

さつきからミレーナの様子がおかしい。このままフォードに任せっ切りにするつもりはないけど、それでも一応危機は去ったんだ。なのに彼女には、安堵した様子が見られない。

今もどこか不安そうに、俯いて眼を伏せている。

いや、不安……じゃないか？ 不安って言うより、むしろ……。

「デインくん」

「！ どうした？」

「あの……、あのね……」

ミレーナは、何度も言葉を紡ごうとしては躊躇い、結局口を噤んでしまう。何かあったのは間違いないが、それが何なのかが、今のミレーナからでは全く要領を得ない。

何があったのかは気になるけど、今はゆっくりしている場合じゃない。ジンの手当ても必要だし、フォードの事も気に掛かる。

俺はミレーナを少しでも安心させようと思い、彼女の肩に手を置いて、出来るだけ優しく声を掛けた。

「ミレーナ。話せない事を、無理に話そうとしなくていいんだ。話せると思った時に、話したいと思った時に、話してくれればそれでいい。だから焦る必要なんてない」

「ディーン、くん……」

彼女はやっぱり俺の思った通り、どこか辛そうな眼で俺を見つめ返してきた。

だから俺は、笑って頷く。

彼女が辛いと思っているのなら、少しでも、辛くなくなるように。気分が落ち着くまで、ミレーナはここにいてくれ。ジンは俺がリネの所に連れていく。フォードの事も気になるから、俺はすぐに戻って来れねえけど、リネにもミレーナの事は伝えとくから」

「……」

ミレーナはまだ少し躊躇っていたようだが、やがて無言で頷いた。俺はそれを見届けてから、意識のないジンを背負って足早に駆け出す。

だが、ほんの数メートル程走ってから、思わず俺は肩越しに振り返ってしまふ。

一人その場に残っているミレーナの姿は、何だかとても弱々しく見えた。

話せないなら無理に話さなくていい。彼は確かにそう言ってくれた。

結局私は、彼に伝える事が出来なかった。

思い出した事があるという事を。

以前の記憶が、ほんの少しだけ戻ったという事を。

けれどその戻った記憶の中に、ディーンくんの姿はない。私は彼に関する事を、何一つ思い出せていない。

それを知った時、彼はどんな顔をするだろう？

そう考えると、どうしても口にする事が出来なかった。口にすればきつと、彼を落胆させてしまうから。傷付けてしまうから。

「……何だ。こんな全然、ディーンくんの為なんかじゃないわ。結局私は、自分が彼を傷付けてしまうのが怖いだけ。私が守ろうとしてるのは、私自身の心だ……」

自分自身の身勝手さを痛々しく呟いて、私は遠ざかっていく彼の姿を瞳に映す。

怪我人を抱えて奔走する彼の姿は、とても強くたくましく見える。

その姿を見て、私は改めて痛感した。

私にはきつと、彼に守ってもらわう資格なんて、ない。

フォードの野郎の話聞いて、動揺しちまったのは事実だった。

確かに俺は、『紺碧の泉』<sup>アジュール・ファウンテン</sup>でミレーナ・イアルフスに会った時、奴の態度に違和感を感じた。

俺に命を狙われていると知って、なぜ最初から『魔術』を使って抵抗しなかった？

俺が奴にノイエの事を問い質した時、なぜ奴はとぼけたような素振りを見せた？

この疑問の答えは、たつた今ハッキリとした。

フォードの野郎の言う通り、ミレーナ・イアルフスはその時から記憶喪失だった。そう考えれば、全てに納得がいく。

最初から『魔術』を使わなかったんじゃないか。記憶がねエから使



えなかったんだ。

ノイエの事をとぼけた訳じゃねエ。記憶がねエから答えられなかったんだ。

「ふざけやがってエ……ッ」

何が記憶喪失だ。ノイエの行方を知ってる可能性があるってのに、それを思い出す事が出来ねエだと？

一体どうなつてやがる！ 俺が行動を起こそうとすると、どうしてこう余計な邪魔ばかりが入りやがるんだ！？

「どいつもこいつも俺を舐めやがってエエツ！ ふっざけんじゃねエぞクソがアアアアツ！！」

指の骨が砕けそうな程、俺は『漆黒の大鎌』ダーク・デスサイズを握り締め、刃を思い切り横薙ぎに振るつた。

その動作に合わせて、黒い衝撃波が生じる。

周りに生えた木々を根こそぎ吹き飛ばしながら、黒い衝撃波は突き進むが、フォードの野郎はそれを難なく受け止めた。

翡翠色の光を放つ、不可思議な刃で。

奴がその手に握る鉄製の細長い棍棒。奴の身長と同じ長さ程の棒の先端は、丁字みてエな形をしていて、その部分から、翡翠色に輝く刃が飛び出してやがる。

あれは棍棒じゃねエ。奴の『流衝魔法』によって刃が生み出された、槍だ！

「そっぴやノイエの野郎に聞いた事があったな。フォード・ヒースクライムは、戦争当時は有名な槍の名手だったってよオ」

俺がそう呟いた直後、フォードは俺の放った黒い衝撃波を真つ二つにするようにして打ち破り、軽い動作で槍を振って、再び構え直した。

確かにこいつも、『英雄』って呼ばれてるだけの事はある。ミレィナ・イアルフス同様、俺の『黒煉魔法』をこつとも簡単にあしら

やがるとはなア。

「お前にいくつか聞きたい事がある」

「！」

槍を構えたまま一瞬も隙を見せず、フォードはそんな事を抜かす。この状況でお喋りする余裕があるとは、随分じゃねエか。

「これ以上俺から何を聞きてエ？ どうやらまだ今の状況理解してねエようだなア、『英雄』さんよオ」

俺が今この上なくイラついてる事は、奴だつてとつくに気付いてるはずだ。

だが、それでもフォードは落ち着いた様子で、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「お前の背後にいるのは誰だ？」

「あん？」

「お前に情報を与え、ノイエや俺たちを狙うように仕向けたのは誰だと聞いてるんだ」

「！」

フォードは俺から一切視線を逸らさず、俺が口を開くのを待っている。

何だよ、エラく確信めいた事を率直に聞いて来るじゃねエか。まあ、だからって素直に答える気はねエが。

「そんなモン知らねエな。仮にそんな奴がいたとしても、俺がテメエに教える訳ねエだろ」

「……そうか。なら今から俺が言う事は、全て仮の話として聞け」  
いちいちそう前置きしてから、フォードは俺の反論も聞こうとせ  
ずに続ける。

「お前に情報を与えた人物。そいつは本当に、信用出来る人間だと思つか？」

「……何？」

「恐らくお前の事だ。そいつの事すら利用して、ノイエを狙うという自分の目的を果たそうとしているんだろう。だがもしも、お前が

相手を利用しようと思っ  
ているとしたら、これ以上信用出来ない者はいない。そうは思わ  
ないか？」

構えを解かず、フォードはそんな風に問い掛けて来やがる。

だが俺は取り合わねえ。適当に言葉を吐いて、はぐらかすつもり  
だった。

とある事実が、提示されるまでは。

「ここまでが仮定の話。そしてここで鍵となるのが、ミレーナの記  
憶喪失の件だ」

「！」

「お前はミレーナの一件を、この街で俺に会うまで知らなかったん  
だよな？」

「だったらどうした」

「デイン・イアルフス。あいつは『紺碧の泉』アジュール・ファウンテンでミレーナの記憶  
喪失を知ってから、その事実を誰にも教えないように心掛けていた  
そうだ。もちろん『ギルド』や正規軍の人間にもな。……それにも  
拘らず、デインが遭遇したある人物たちは、ミレーナの記憶喪失  
の事を知っていたそうだ」

やけに長い前置きだと思いつつも、フォードの言葉に、俺は妙な  
予感のようなものを感じた。

今こいつの口から出ようとしている言葉は、恐らく俺の知ってい  
る事だという、そんな予感を。

「そいつらは、『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』と名乗っていたらしい」

「！？」

おい、まさか……、あの紅髪あかがみが遭遇したのは、ガラム・ドラゴド  
ムか！？

確かに、あの野郎はどこぞの街で紅髪あかがみと会ったと言ってやがった  
が、あいつがミレーナ・イアルフスの記憶喪失を知ってただど！？  
俺に情報を与えた時、あいつらはそんな事一言も口にしやがらな  
かった。

まさかあいつら、この俺を……！」

「その顔は、どうやらそいつらの事を知っているようだな」

思考する俺の表情から、フォードは何かしら見抜いたらしい。そのフォードの表情が、俺には勝ち誇っているように見えた。

「お前はその『精霊指揮者』ゴースト・コンダクターたちと接点がある。なのになぜ、奴らはお前に、ミレーナの記憶喪失の事を教えなかったんだろっな？」

「……！」

ガラム・ドラゴドム。『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』。

フォードの言葉を全て鵜呑みにするつもりはねエが、それでも俺の中で、奴らに対する疑念が少しずつ膨らみ始める。

元々気に食わねエ連中だったが、もし本当に、くだらねエ情報操作で俺を出し抜こうとしてやがるんだとしたら……。

ふざけやがってエ、あのクソ野郎どもオ！

「ジェイガ、悪い事は言わない。復讐なんてものにその身を費やすな」

心の内から、『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』どもに対する憤りが湧き上がりそうな時だった。

前方から、偽善者の戯言が聴こえて来やがる。

俺を見つめるフォードの表情は、どこか切なさを感じさせる表情だった。

「ああ！？ 今度は説教かア！？ いちいちうるせえんだよ、何も知らねエ部外者がよオ！！」

「知っているさ。俺はお前の事を知っている」

「ああ……！？」

気に入らねエ台詞が鬱陶しくて、俺はこの上なく顔を顰める。

だがそれでも、フォードは口を閉ざさなかった。口を閉ざさず、俺に対してこう言った。

「昔のお前は、あんなにノイエの事を慕っていたじゃないか」

「ッ！」

俺が反論の言葉を失ったのは、投げ掛けられた言葉の意味がわからなかったからじゃねエ。

奴の言葉は、正確に的を射てやがった。

ノイエ・ガルバドア。

俺が殺そうとしている、最も憎むべき相手。

それと同時に、俺が最も慕っていた、偉大な『魔術師』だ。

第六章 対話 - Jade & amp; Black - (後書き)

今回のお話で『フレーム・ウォーカー』も50部目に到達！

記念すべき50部目に相応しい内容になっているかどうかはわかりかねますが(笑)、次第に色々な伏線が明かされて来てますね。

まあ読者のみなさんは、「ふ〜ん、そうなんだ」ぐらいの気持ちで読んでもらえればいいかと思えますw

さて、次は60部を目指して頑張って行きましょう！

それでは！ノシ

## 第七章 終幕と語られる過去（前書き）

お待たせしました、第七章です。

それと気付かない内に、アクセス数がそれぞれ、50000PV、9000ユニークを突破していました。

読んでくれている皆さん、本当にありがとうございます！

## 第七章 終幕と語られる過去

意識のないジンを背負い、俺は『サランドロ』の街中を駆け抜けていた。

港付近での騒ぎに、街の人たちも漸く気付き始めていたらしい。一人奔走する俺の姿を、擦れ違う野次馬らしき人たちの視線が射抜く。

これだけの騒ぎになっているのに、役所の人間が駆け付けて来ないって事は、どうやらこの街には『ギルド』や軍関係の施設はないらしい。『魔術の館』を警備してるのは軍の連中みただけ、さすがに自分たちの持ち場を離れてまで、様子を見に来る事はないだろうし。

ただ問題は、リネがまだ館の中にいるって事だ。

さすがにこんな怪我人を連れて中に入ろうとすれば、門前払いを喰らうのは眼に見えてる。それどころか、怪しい人物として捕えられるかも知れない。一応こうして向かってはいるけど、どうしたモンか。

「デーン！」

「！ リネ？」

思案しながら走っていた俺は、丁度進行方向からリネが駆けつけてくる事に気付いて立ち止まる。

なんで彼女が外に出て来ているのかはわからないが、何にしても好都合だ。

俺はリネを手招きして、人の目が届かない建物の陰に誘導する。

「あれ？ もしかして、ジン……？」

俺の抱えている人間を見て、リネは即座にそう言い当てた。まあジンの髪の色は、俺と同じで結構目立つからな。すぐにわかるのも無理はない。

「俺もさっき見つけて驚いたんだけど、ってそんな事より。リネ、



いつものヤツを頼む。こいつジェイガと戦って怪我してんだ」

「ジェイガって、ここに来てるの……!？」

地面にジンをそつと下ろそうとする俺に、リネは驚いた様子で尋ねる。

俺はジンの身体をうつ伏せに寝かせ、もう一度怪我の具合を見ながら、リネの質問に答えた。

「ああ。どうもフォードの行方を追って、偶然この街に来てたみたいだ。今はフォードが一人で、ジェイガと戦ってくれてる」

「ウツ……、酷い怪我……」

ジンの背中 of 傷を見て、リネは青ざめた表情になる。

俺はそんな彼女の事が少々気になった。彼女は過去のトラウマから、血を見る事に恐れを抱く傾向がある。以前はそれのせいで、気絶した事だつてあるくらいだ。今もきつと、穏やかではいられないはずだろう。

「リネ、大丈夫か？」

「う、うん……、平気。ちょっと、驚いただけだから。すぐ治療するね」

口ではそう言っているものの、無理をしているのは明らかだ。

だが、それでもリネは引かない。両手に嵌めている手袋を外し、その細い両手を、ジンの傷の上に翳す。

するとその途端、彼女の身体から淡い光が発生し、ジンの身体を包みこんでいく。

「……悪いな、リネ。お前にはつかこんな事させて」

眼の前の光景を見つめながら、俺はいつの間にかそう呟いていた。すると力を使い続けるリネが、不思議そうに俺を見つめて尋ね返してくる。

「え？ どうしたの急に？」

「俺さ、『ワーズナル』で自分の怪我が治ってなかった時、初めて気付いたんだ。自分が今までどれだけ、お前の『治癒』の力に頼ってたのかって事を。俺はお前の力に頼り過ぎてた。いつでも怪

我が治つて当たり前だつて、いつの間にかそう思つてた。でもそんなの、ただ俺がお前に甘えてるだけなんだよな。お前だつて色んな思いを抱えて、その力を使つてるはずなのに……」

「デーン……」

独白するみたいに呟いた俺は、戸惑っているかのようなリネの視線を感じて、僅かに顔を逸らした。

今更のように自覚する。俺は本当に、彼女の力に頼り過ぎている事を。

当てにし過ぎていると言つてもいい。それだけ俺は、リネに負担を強いているはずなんだから。

「そんな顔しないで、デーン」

だけどリネの口から出たのは、俺の事を労わるかのような言葉だった。

視線を合わせると、彼女は治療に専念しながらも、薄く微笑んで言葉を続ける。

「だってあたし、嬉しいんだもん。戦つてる時のデーンに力を貸せない自分が、この力を使つてる時だけは、デーンの力になれるって思えるから、凄く嬉しいの。そりゃああたしだって、この力のせいで辛い思いもしてきたけど、でも今は大丈夫。デーンが傍にいてくれるから、あたしは大丈夫」

「……」

淡い光に照らされながら微笑む、リネの姿。それを俺は、しばらくボーっと見つめていた。

やがて、その視線に気付いたリネが、また不思議そうに尋ねてくる。

「どうしたの？ あたし、何か変な事言つた？」

「へっ？ あ、いや何でもねえ」

「？」

ハツとして顔を逸らし、俺は何でもない風を装う。が、本当は鼓動が少し高なっていた。

さつきまで見つめていたリネの表情。『治癒』の光に照らされているせいか、何だか神秘的で凄く綺麗だった。

……なんて本人に言えるはずないけど。何だって俺、こんな事思っちまったんだ？

内心でモヤモヤしながらも、俺は照れ隠しの為に無理矢理話題を変える。

「ところでお前、何で館の外にいたんだ？」

「え？ あ、そうだった。実はさつき、『デス・ベリアル』に関する資料を見つけたの。ディーンには早く知らせた方がいいかと思つて、後を追つて来たんだけど」

「！ ホントか！？」

「うん。多分ディーンも自分の眼で見たいだろうと思つたから、見つけた資料はエミリアさんに預かってもらつてるよ。ディーンこそ、ミレーナさんは？」

リネに問い返され、俺はふと、港に残してきたミレーナの姿を思い浮かべる。

「ああ、ミレーナなら一人で港の方にいる。……どうも何かあつたみたいでさ。随分動揺してるみたいなんだ」

僅かに港の方角を見つめながら、俺はもう一度よく考えてみた。

彼女があそこまで動揺する理由。

言葉を紡げなくなる程、躊躇う理由。

もしかしたら……、という思いが、俺の脳裏を過ぎる。これ以外に彼女がああなつてしまう理由が、俺には思い付かない。

つまりは、記憶の回帰。

過去の記憶に関して、自身を困惑させる程の何かを、ミレーナは思い出したんじゃないのか？ そう考えれば納得がいく。

「……一人にして大丈夫なの？」

一つの結論に辿り着いた時、リネのそんな言葉が聴こえてきた。「多分な」

だが俺には、そう答える事しか出来なかった。

何かがあつたのは間違いない。だけど本人が話せない事を無理矢理問いただすのは、正直気が引ける。

気になるのは確かだけど、今は耐えて待つべきだ。

せめてミレーナの気分が落ち着くその時まで。

「なありネ。悪いけど、ジンを宿に運んだ後でいいから、ミレーナを迎えに行つてやつてくれないか？ ミレーナにはリネの事もちゃんと伝えてあるからさ」

「え？ でも、デイーンが行つた方がいいんじゃないの？ 何かあつたんなら尚更、ミレーナさんもその方が落ち着くと思うし……」

「そりゃそうかも知れないけど、でも今すぐに行く訳にはいかない。フォードはまだ、一人でジェイガと戦つてる。あの人に全部押し付けるなんて事、俺には出来ねえよ」

「……うん、わかつた」

やや小さい声で返事をしながらも、リネはどこか納得のいかない表情をしている。

「だけど俺は、それに気付いていないふりをした。」

意識して、眼を逸らしていた。

とにかく今は、フォードの所へ行くのが先だ。

例えどんなにミレーナの身を案じていても、ジェイガが近くにいる限り、完全に脅威が去つたとは言えないんだから。

「気をつけてね」

走り出そうとする俺に、リネはいつも通り、心配そうな顔で告げる。

俺はそれに、ただ無言で頷くだけだった。

なぜ俺は、そこで動きを止めちまったんだろう。  
……いや、深く考えるまでもねエ。単に凶星を突かれたからだ。

『あんなにノイエの事を慕っていたじゃないか』

言葉を失い、硬直する俺の身体。自分自身の身に起きてる事だつてのに、妙に他人事のように感じちまう。それだけ俺の心は、動揺で掻き乱されていた。

「……何、言つてやがんだ、テメエは？」

漸く絞り出せたのは、まだ悪足掻きを続けようとする見え透いた虚勢だった。

こんな言葉で誤魔化せる訳がねエ。フォードの野郎は気付いてる。いや、確信を持って俺に告げやがったんだ。

俺がノイエの事を、心から慕っていた事を。

だが一つ気になるのは、野郎がなぜそんな事を知っているのかつて事だ。

俺とフォードは間違いなく初対面のはずだ。フォードに限らず、俺の過去を深く知ってやがる奴は多くねエ。ノイエ自身が語ってるとも思えねエしな。

なら、だったら何で、眼の前のクソ野郎はさつきみたいな台詞が吐ける？

「とぼける必要はない。そんな事しても無意味だ。言っただろ？」

『俺はお前を知っている』と

「ああ……？」

俺が眉根を寄せると、フォードは深く息を吐いて、一旦構えを解いた。

一瞬、この隙に斬り掛かってやろうかとも思ったが、俺はすぐに

察知する。

フォードは構えを解いていやがるものの、全身に纏った覇気が薄れていない。それは暗に、いつでも攻撃に移れる事を俺に告げているようにも感じられた。

「お前が知らないのも無理はない。俺は昔、お前に会っているんだ。いや、覗き見ていたと言った方が正しいのかも知れない」

「何だと？」

「あれは五年程前か。当時俺は、他の『英雄』たちと手紙のやり取りをしていた事があってな。その経緯から、ノイエに呼び出された事がある。お前を目撃したのは、その時だ」

フォードはどこか、遠くを見つめているかのような瞳で言う。

「俺の事を見てやがっただと？ それに五年前って言やア、俺がノイエの弟子になったのとほぼ同じ頃だ。」

「俺の眼から見た『あの時』のお前は、本当にノイエを慕っているように見えた。俺にも弟子がいたら、こんな関係を築けるのかと思っただけにな」

「ハッ、いかにも偽善ぶった殊勝な考え方だなア。吐き気がしてくんぜ」

話の腰を折ろうと俺が軽口を叩いても、フォードは全く取り合おうとしない。

どこか悲しげに俺を見つめ、自分の思いを口にし続ける。

「だからこそ理解出来ない。お前がなぜ、あれ程慕っていたノイエに牙を剥くのか。なぜ殺意を向けるのか。……教えてくれジエイガ。一体何があった？ 何がお前をそこまで変えた？ お前が関わっている『精霊指揮者』ゴースト・コンタクターと言う連中。奴らに一体、何を吹き込まれた！

「？」

「……」

こいつは本当に、腹が立つ程勘が鋭い。

奴の言う通り、俺には『精霊指揮者』ゴースト・コンタクターから聞き出した事がある。

俺が全てを失う事になった『あの事件』。  
その原因を作ったのが、他でもねエノイエの野郎だった事を。

その事実を知った時、奴に対する俺の信頼は、悉く打ち砕かれた。信じていた人間に、裏切られた。

だから俺は奴に、全ての憎しみを向ける事にした。

俺の信頼を裏切ったばかりか、俺の大切なものをその手で奪っておきながら、それを黙っていやがったあのクソ野郎を、この手で殺す為に。

「テメエが何を見てどう思ったかなんぞ、興味もねエし関係もねエ。俺はノイエを殺す。それに変わりはねエんだからなア」

「俺やノイエの言う事よりも、『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』の言う事を信じると言うのか、お前は!？」

「何言つてやがんだ。俺は誰の事も信じちゃいねエよ。『相手を利用しようと考えてる』。偉そうに人の考え分析して、俺にそう言ったのはテメエだろうが」

そうさ、俺は最初っから誰一人信用してねエ。

眼の前のコイツだろうと、ノイエだろうと、『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』だろうと。

だからこそ今、俺には新しい目的が出来た。ミレーナ・イアルフスが記憶喪失だっつー面白エ情報を手に入れたからなア。

「くだらねエお喋りはここまでだ。悪イが一抜けさせてもらっぜ。大事な用があるからなア」

「待てジエイガ!」

制止しようとするフォードを振り切る為、俺は破壊の黒い光を自分の周囲にブチ撒けた。

凄まじい爆発によって爆風が起こり、俺の視界は爆煙で埋め尽くされる。

それと同時に、爆煙の向こうにいるフォードに背を向け、俺は迷わず走り出した。

これ以上、野郎と愚論を交わす気はねエ。今はそんな事に時間を割いてる場合じゃなくなった。

確かめなきやいけねエ事がある。

問い質さなきやいけねエ相手がいる。

それは他でもねエ、『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』。

あろう事かこの俺を出し抜こうとしてやがった、『あの』クソ野郎だ！

『サランドロ』の北側。街並みから少し外れた所にある林の中。この辺りにジェイガと一緒に降り立っているはずのフォードを探して、俺は緑の中を駆け巡る。

辺りには背の高い木々が乱立し、足下は落ち葉や、地面から露出した太い木の根で覆い尽くされている。

思っていた以上に足場が悪く、思うように捜索に専念出来ない。

あの二人は間違いなく、この辺りにいるのはずなんだけど……。

「くっそ！ 一体どこに」

それは、いい加減イライラしてきた俺が、軽く悪態をつこうとした時だった。

数メートル程離れた林の奥で、いきなり物凄い爆発が起こった。

「どわっ!？」

吹き抜けてきた爆風に煽られ、俺は足を滑らせ尻餅をついてしまう。周りの木々は、爆風の力でギシギシと音を立てて揺さぶられて



いる。

突然起きた爆発。そして周りの木々を揺らす程の爆風。否が応でも、俺はその正体に気付いてしまう。

間違いなく、フォードとジェイガが戦ってるんだ！

「この先か！」

俺すぐさま立ち上がり、爆風が吹き抜けてきた方向へ向かって走り出す。

目的の人物を見つけたのは、数十秒後の事だった。

「フォード！」

徐々に晴れ始めているとはいえ、未だ辺りに漂う爆煙の残滓の中に、彼は一人佇んでいた。

俺はまだ、ジェイガが近くにいるのかと思い警戒したが、フォードは俺に気付くと首を軽く横に振る。それが答えになっていた。

「ジェイガは逃げたのか？」

「いや、逃がしたと言った方が正しいかもな」

「え？」

言葉の意図がわからず首を傾げる俺に、フォードは告げる。

どこか、悲痛に訴えかけるかのような表情で。

「デイン、お前に話しておきたい事がある。アイツに……、ジェイガに関する事だ」

どれくらい時間が経った頃だろう。

俺はフォードと共に、すでに確保してあった『サランドロ』の宿屋に帰り着き、その一室（俺が借りた部屋）に集まって、それぞれ

が持っている情報の整理を行なおうとしていた。

俺が帰り着いた時には、既にミレーナの姿もあった。どうやら頼んだ通り、リネが彼女を迎えに行ってくれたみたいだ。

彼女たちとお互いの無事を確かめ合った後、俺はベッドで休んでいる少年に眼を向ける。

「久しぶりだな、デイーン」

そんな言葉を返してきたのは、意識を取り戻したジンだった。

彼の怪我は、既にリネの『治癒』の力で完治しているようだが、リネが起きる事を許してくれないらしく、ベッドに身体を預けている。

帰り着いた直後に聞いた話では、リネはこの宿の人に手伝ってもらって、ジンを俺の部屋に運んだそうだ。自分とミレーナが借りてる部屋に運ばない辺り、案外リネにも異性に対する防衛本能が働いているらしい。

とにかく、リネが迎えに行ってくれたミレーナを含め、俺たちは漸く、こうして一堂に会する事が出来た訳だ。

「で、何でこの街にいるんだ？」

挨拶もそこそこに尋ねると、ジンは自分が辿ってきた経緯を掻い摘んで説明してくれた。

元老院ハルク・ウエスタインの命で、俺たちにジェイガの存在を伝えに来た事。その途中、『アジュール・ファウンテン紺碧の泉』で俺たちの行方を知った事。

俺は港でジンの顔を見た時に、彼の経緯は大体想像していた。だがジンの方は、俺がミレーナと合流出来ていた事に驚いたらしい。

驚いて、そして不思議に思っていたようだ。

戦う事自体を戸惑っているかのような、ミレーナの状態を。

「彼女、何かあったのか？ お前から話を聞いていた人物像と、少し差異があるようなんだが……」

ジンに倣って、俺も一緒にミレーナの方を見つめる。すると彼女は、どこか寂しそうな表情で軽く微笑んだ。

そういえば、ミレーナにも何かあったはずなんだよな。話さなく

ていって言ったのは俺だけど、やっぱり気になるのは確かだし……。

「ディーン？」

ジンに問い掛けられ、俺はハツとして振り返る。

「あ、悪い。え〜っと、まあ何て言うか、話すと長くなるんだけど……」

訝しげな顔をするジンに、今度はこっちが説明する番だった。

ミレーナの記憶喪失。

ジェイガ・ディグラッドの存在。

『デス・ベリアル』という言葉。

そして、『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』。

俺たちが遭遇し、見聞きした全ての事柄。上手く説明出来ているのかどうかすら俺には判断出来なかったけど、それでもどうやら、ジンはこっちの事情を理解してくれたらしい。

「記憶喪失、か。そしてそれに付随する妙な連中に、ジェイガ・ディグラッド。全く、つくづくお前もトラブルに巻き込まれやすい性質だな」

「ハハ……、そろそろお前にもそう言われるんじゃないかと思っただよ……」

げんなりして眼を逸らすと、逸らした先でリネがクスクス笑っている事に気付いた。……クソ、何か馬鹿にされてる気がする。

「それにしても、何と云うか不思議な感覚だ。眼の前にあの『英雄』が二人もいるというのが、未だに信じられない」

部屋の壁に凭れるフォードと、その近くの椅子に腰掛けるミレーナを見て、ジンは感慨深そうにそう口にする。

だが当の本人たち（ミレーナは仕方ないとしても）は、特に気にした様子もない。フォードに至っては手をヒラヒラ振って、軽く微笑んでいたりする。

そんな様子を見ていた俺は、思わずこう呟いてしまう。

「前から思ってたけど、あの人たちって、もう少し自分が『英雄』」

だって事を自覚した方がいいと思うんだよなあ」

「自覚云々の話をするなら、お前も人の事は言えないだろ？」

「え？」

指摘に対する指摘をされて振り向くと、ジンは苦笑しながら続ける。

「『フレイム・ウォーカー炎を操る者』と呼ばれる紅い髪の『魔術師』がいる、という噂になってるそうじゃないか。なあ、デイン・イアルフスくん？」

「ッ！ なッ、お前、それどこで聞いたんだ！？」

「だから噂になつてると言つたる。俺が聞いたのは『アジュール・ファウンテン紺碧の泉』で  
だつたがな」

ジンから視線を外し、俺は黒髪の少女をジトツと見つめた。するとその視線に気付いた当の本人は、嬉しそうな顔で応じる。

「良かったねデイン。カッコいい通り名が定着して」

「他人事みたいに言つてんな！ 大体最初に言い出したのは他でもないお前だろうが！」

「それはそうだけど、でもそれだけでここまで噂にならないんじゃない？ って事は、あたしと同じ事考えた人が他にもいるって事でしょう？」

「ぬぐッ……！」

もつともらしい反論しやがって、リネのくせに……！

やり場のない憤りで俺が拳を震わせていると、今まで傍観していたフォードが、急に真剣な口調で言い放つ。

「楽しそうな所申し訳ないが、少し話させてもらつていいか？」

彼の口調から雰囲気を感じたんだろう。それぞれ笑っていたリネとジンは笑みを消し、ミレーナも真剣な表情でフォードの方を見た。彼が話したい事。それについて、俺には心当たりがある。

「ジエイガの事、だよな」

「ああ」

壁に背を預けたまま腕を組み、フォードは俺の顔を見つめる。

彼は一体、何を話そうとしているんだ？ そう俺が感じた時、フ

オードはゆっくりと口を開き始めた。

「俺があいつの存在を知ったのは、今から五年程前の事だ」

## 第七章 終幕と語られる過去（後書き）

という訳で第七章でした。

話の集約が少し大変な章でしたが、まだこの章では全てが語り切れ  
ていません。

次の章でとりあえずのまとめ、さらに新展開にするつもりですので、  
楽しみに待っていてもらえると幸いです。

それでは！

## 第八章 召集命令（前書き）

我ながらあつという間に書き上げてしまいましたw

という訳で『魔術の館編』、第八章及び終章をうpします。

いつにも増して文字数が多くなっておりませんが、最後まで楽しんで頂けると幸いです。

## 第八章 召集命令

今から五年程前。事の発端は、ノイエから届いた一通の手紙だったそうだ。

フォードは俺たちの前で一つ一つ、しっかりと言葉を紡いでいく。「俺が昔、他の『英雄』たちと手紙のやり取りをしていた事は話しただろ？ まあやり取りと言っても、大層な事を書いてた訳じゃない。内容は大抵、自分たちの近況や取るに足りない世間話だった。だがある時、奴が寄こした手紙の文面にこう書いてあつたんだ。『少し前に、自分の弟子となる者を見つけた。もし時間があるなら見に来てくれ』、とな」

ノイエがなぜ、フォードにそんな事を提案したのかは、彼にもわからないらしい。ただフォードは、ノイエが選んだ弟子がどんな人物なのかという事に、少なからず好奇心を持ったそうだ。

その理由として、彼は笑ってこう言った。「多分同じ頃、ミレーナが弟子を取ったという話を聞いていたからだろうな」と。

「俺はノイエに指定された時間に、約束の場所へ行ってみた。だが妙な事に、その場所にいたのはノイエ一人だな。しかも奴は、俺に対してこんな事を言った」

『今から弟子の顔を見せるが、貴様は決して奴の前に顔を出すな。遠巻きに見ていればそれでいい。そして、奴の顔をよく覚えて忘れないようにしておけ。理由は……、いずれわかる』

「……何だよそれ」

意味がわからない、と言うか、意図がわからない。俺が訝しく眉根を寄せると、フォードは肩を竦めて答える。

「妙な話だろ？ だが今思えば、あれは忠告だったのかも知れない。ノイエはいずれ、ジェイガが俺たち『魔術師』を狙う事を予期して



いたんだ」

「フォードさんはそこで、ジェイガを見たんですか？」

「神妙な面持ちでリネが尋ねると、フォードは軽く頷く。

「ああ、確かに見た。奴と並んで、楽しそうな笑顔を見せるジェイガの姿をな」

「笑顔？ あいつが、笑ってたって言うのか……！？ しかもノイエと一緒に!？」

「何だよそりゃ？ ますます意味がわかんねえぞ？」

信じられないと思わず顔に出してしまった俺に、フォードは僅かに苦笑して答える。

「今のジェイガからは想像出来ないだろう？ だが事実だ。奴は本当にノイエの事を慕っているように見えた。遠巻きだったとはいえ、あれが演技だとは到底思えない」

「いや、でも、だったら尚更わかんねえ。何であいつは自分の師匠を殺そうとしてるんだよ？ あんたが見たのが事実なら、あいつは慕ってる人間を殺そうとしてるんだぜ？」

もっともな疑問をぶつける俺に、フォードは困り果てたような顔をして、「理由なんて俺にもわからないさ」と漏らした。

そして。

「だが一つだけ言える事がある。あくまで可能性の一つだが、ジェイガは『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』と関わりを持っているような気がするんだ」

「!？」 ジェイガとあいつらが!？ どういう事だよそれ？」  
俺は思わず声を張り上げてしまう。そして、そうする事でハツと

した。  
さっきまでの港での戦い。ジェイガを無理矢理引き離してまでフォードが一人で戦っていたのは、もしかしてこれを聞き出す為だったんじゃないか？

ジェイガから情報を引き出す為に。俺たちに真実を伝える為に。俺が一人そう思考している間にも、フォードは続ける。

「ガラムと言う男が、ミレーナの記憶喪失を知っていたという話を

ジェイガにしたんだが、その時あいつの表情には、明らかに動揺が走っていた。恐らくあれは……」

「ジェイガは『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』と繋がりを持っているのに、ミレーナさんの記憶喪失について何も聞かされていなかった、という事ですか？」

フォードの言葉を受け取る形でジンが続けると、フォードは「ああ。少なくとも、俺はそう考えている」と締め括った。

その言葉を受けて、俺は再び考える。仮にフォードの予測が正しいとしたら、ジェイガを操ってるのは『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』だって事になる。

じゃあ奴らが狙ってる相手って……。

「ノイエ・ガルバドア、なのか？」

しかし、そうだとしてもわからねえ。一体何なんだ？ 『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』がジェイガを操ってまでノイエを殺そうとする理由は……。

「詳しい事はわからない。だが奴らの狙いは、『ゴースト・コンタクターデス・ベリアル』の復活とノイエの抹殺。この二つと考えてまず間違いないだろう」俺の思考を遮るかのように、フォードはそう結論付ける。

「こつなるとやはり、全ての真相を明らかにする為には、ミレーナの記憶を戻す事が一番の近道になるはずなんだが……」

フォードは言い淀みながら、椅子に座るミレーナの方に視線を向ける。

それが結果的に、躊躇う俺を後押しする形になった。

聞くならきつと今しかない。今聞いておかないと後悔する。堰き止めていたはずのそんな勝手な感情が一気に溢れ出して、俺はついに言葉にしようと決心した。

「ミレーナ」

俺が声を掛けると、ミレーナは宝石のように煌めく金色の瞳で、俺を見つめ返してきた。その表情は既に、俺が何を言おうとしているかを察しているようだ。

「さつき港で俺に、何かを話そうとしてたよな。……俺の勘違いか

も知れないけど、もしかして何か思い出したんじゃないのか？」

俺の言葉で、部屋にいる全員が息を飲むのがわかった。

ただミレーナだけは、驚きと不安の混じったような顔で硬直している。だがやがて眼を伏せ、彼女は躊躇いがちに口を開く。

「……ええ、そうよ。思い出した事があるの。本当に少しだけ、ね」「何を思い出したんだ？」

俺が問い返すよりも早く、フォードがそう口走る。やはり彼も、少し動揺しているらしい。壁から背を離し、食い入るようにミレーナを見つめている。

「ジェイガのあの黒い大鎌を見た時に、フツと頭に浮かんだの。薄暗い闇の中で、何かの光に照らされて私の眼の前に立ってる、『ノイエ』の姿が」

「！」

「『あいつ』は私の前に立って、黒い大鎌を構えて何かを唱えてた。多分あれ、『魔術』だと思う」

ミレーナの口調は、どこか今までと少しだけ変わっているような気がした。ノイエの事を躊躇いなく呼び捨てにしたり、『あいつ』呼ばわりしている辺り、やっぱり記憶が戻り始めてる証拠なんだろう。

でも待てよ。黒い大鎌を構えてミレーナの前に立ってるって、もしかして……。

「それって、ノイエと戦ったって事なのか？」

俺が疑問を口にすると、ミレーナは僅かに首を横に振る。

「わからない。ただハッキリと言えるのは、私はノイエと呼ばれて自分から会いに行ったの。あいつと二人だけで、何かを話そうとしてたんだと思う」

二人だけで何かを……。一体何を話したんだ？

ミレーナが、何も言わずに俺の前から姿を消したのが一年前。

いつどこで会ったのかはわからないけど、とにかく彼女はノイエに会って、そこで何か起きたんじゃないか？

そして数カ月程前に、『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』に襲われてボロボロになっていた所を、『アシユール・ファウンテン紺碧の泉』でログハイムさんに助けられた。が、その時既に、ミレーナは記憶を失っていた。

今までの経緯から考えると、やっぱりノイエは、ミレーナの記憶喪失について何かを知ってるに違いない。

だとしたら、一体二人の間で何があったんだ？

どうしてミレーナは記憶を失う羽目になったんだ？

謎は徐々に解き明かされてる気はするけど、これだけじゃまだ足りない。何かもつと他に、重要な鍵が見つけないと！

「他に思い出した事は？」

あれこれ考え込んでいた俺を尻目に、フォードはさらに探りを入れていた。もしかしたら、彼も俺と同じ事を考えて、少しでも手掛かりがないか期待していたのかも知れない。

だがそんな思いとは裏腹に、ミレーナは弱々しく首を横に振る。

「……ごめんなさい」

悲痛な表情で呟いたミレーナは、ゆっくりと俯いてしまう。それを見てフォードは、追い討ちを掛ける事なく身を引いて、再び壁に背を預けた。

それが正解だと俺も思う。これ以上問い質しても成果が得られないのは、ミレーナの表情を見ればわかる。無闇に質問を続ければ、それだけで彼女に負担を強いてしまう事になるだろう。

とにかく、今はわかっている事をもう一度まとめ直して、何か見落としている事がないか考えてみるべきだ。

と、そう思った時だった。

俺は唐突に気付いてしまった。

椅子に座り、俯いているミレーナの肩が、僅かに震えている事に。

「ミレーナ……？」

俺が問い掛けた事で、俺以外の人間もミレーナを注視して、そこで漸く俺たちは理解した。

彼女は泣いている。

俯いたまま肩を震わせ、声を押し殺して、一人悲しみに耐えようとしている。

「どうしたんだよ一体？」

彼女に近付いて屈んだ俺に、ミレーナは震える声で告げる。まるで自分の罪を懺悔しているかのように。

「何も思い出せなくて、ごめんなさい。ディーンくん辛い思いをさせてるのは私なのに。私が思い出さなきゃいけない事なのに……ッ！ それなのに、ディーンくんに関する事、何一つ思い出せないなんてッ！」

「！」

そうか。だからミレーナは、港で俺に告げる事を躊躇っていたんだ。俺に関する事を何一つ思い出せていないと俺が知れば、それで俺が傷付くと思つて。

……全く、情けない話だ。悲痛な叫びを上げて涙を流すミレーナを見て、俺は今更のように思い知った。

一体俺は今まで、ミレーナの何を見て来たんだろう？

何も変わらないじゃないか。

例え記憶がなくなつて、俺の事を覚えていなくなつて、彼女は彼女だ。俺を十数年育ててくれた彼女の温かな優しさは、確かにここに残つてるんだから。

俺は、震える彼女の両手を優しく握つて、彼女の顔を覗き込む。

「ミレーナ、泣かないでくれよ」

俺を救つてくれた恩人。居場所をくれた大切な人。

そんな彼女を守るのが、俺の役目だ。

「確かにあんたが俺の事を覚えてないのは辛いけど、でもだからって、ミレーナまで哀しむ必要はないさ。俺はあんたに感謝してる。どれだけ礼を言っても足りない。だから気にしなくていいんだ。この辛さや悲しみが、あんたの記憶を取り戻す為に必要な痛みなんだとしたら、俺は喜んでそれを受け入れる」

「でも……ッ！」

「あんたは何も焦る必要なんてない。ゆっくり思い出して行けばいいんだ。それに前にも言っただろ？ ミレーナの記憶は、必ず俺が取り戻すってな」

俺は優しく笑って、彼女の手を握り続けた。

彼女の心から、少しでも辛さや悲しみが消える事を願って。

そんな俺の思いが通じたのかはわからない。だけどそれでも、ミレーナは言ってくれた。

泣きながら、それでもどこか嬉しそうに。

ありがとう、と。

それからしばらくの間、俺たちの間には長い沈黙が訪れた。

誰も何一つ言葉を発しない。多分この部屋にいる全員が、それぞれ複雑な思いを抱えているんだろう。

が、正直な所、俺はそろそろこの空気にも耐えられなくなっていった。誰か何か話してくれねえかななんて、人任せな事を考えたりしていた時。唐突に、『それ』は訪れた。

部屋の扉を数回ノックする音。部屋の中が静まり返っていた為、その音が妙に大きく響き渡る。

「？ 誰だ一体？」

「あ、ディーンは座ってなよ。あたしが出るから」

椅子から立ち上がろうとする俺を制して、入口に一番近かったリネが応対に向かう。

来客が誰なのかという事は気になったが、そんな俺の思考は、ベッドの方から聴こえてきたジンの声で中断された。

「ところでディーン。これからどうするつもりだ？ ミレーナさんの記憶を取り戻すにしても、もう目新しい手掛かりはないんだろ？」  
「そうなんだよなあ」

改めて指摘され、俺は軽く頭を掻く。ジンの言う通り手詰まりも  
いい所だ。

ミレーナの記憶を取り戻す。その目的は今でも変わらないが、今  
後どうするかという具体的な指針が尽きてしまっている。

俺たちが調べていた『デス・ベリアル』は、確かに『精霊』の名  
前ではあったが、ミレーナがなぜその言葉を口にしたのかという謎  
は残るものの、彼女の記憶喪失に直接関係しているとはあまり思え  
ない。

もしかしたら俺が遭遇した『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』たちなら、或いはその  
詳細を知っている可能性もあるんだろうが、その行方を追おうにも  
居場所がわからない。

それにミレーナが思い出したのは、最後に会ったのがノイエ・ガ  
ルバドアだという事だけで、具体的な事はほとんど思い出せていな  
い。これも、これからの指針を決める為の手掛かりになり得ないだ  
ろう。

ここまでどうにか進んできたのに、急に眼の前が行き止まりにな  
ってしまったような気がした。

何か行動を起こしたいのは山々だけど、手掛かりがない。具体的  
な指針となるものが見つけれない。でもだからと言って、『記憶』  
なんていう曖昧なものを探し出す為には、ただ闇雲に動き回る訳に  
はいかない。

どうする……。何かいい打開策はないのか？

腕を組み、深く思案を始めようとした時、リネが部屋の中に戻っ  
てきた。

なぜか少し、困ったような顔をして。

「どうしたリネ？ 誰か来てたんじゃないのか？」

「あの、それが……」

「？」

リネがゆつくりと部屋の入口の方を振り返ると、見慣れない来客が部屋の中に押し入ってくるのは、ほぼ同時だった。

「キミがデイン・イアルフスだな？」

現れたのは、口髭を生やした肌の黒い中年の男。見ているこつちが堅苦しくなりそうな厳しい顔で部屋の中を見回し、俺の方（特に髪）を見て、男は開口一番にそう言った。

男は灰色を基調とした服を着ていて、胸には金の装飾が施された勲章らしき物が付いている。

間違いない。どこからどう見ても、正規軍の兵士だ。

「軍人、だよなあんだ」

「ほう、わかるかね」

「馬鹿にしてんのかよ。そんなモン、その服を見れば一目でわかるだろ」

「フ、それもそうだな。……ああ、申し遅れた。私は正規軍大佐、マース・コアロッドと言う者だ」

「俺に何の用だ」

俺が若干眉根を寄せて言うと、色黒の男は厳しい表情で告げる。

「率直に用件だけ伝えよう。デイン・イアルフス。キミに『首都』の元老院から、召集命令が掛かっている」

「……。はあっ!？」

俺の頭は告げられた言葉の意味を理解するのに、数秒の時間を要した。

『首都』の元老院。そんなお偉いさん方が、俺に一体何の用なんだろう？

訳がわからず硬直する俺に、マース・コアロッドは厳しい表情のまま、続けてこう言った。

「悪いがキミに拒否権は無い。速やかに、我々に同行してもらおう」



元老院からの召集命令。それは一枚の羊皮紙に、現政権のテルノアリス王と元老院全員の署名と捺印がされた、言わば強制召還状だ。それを施行された者は一人の例外もなく、また拒否権すら与えられず、必ず首都へ赴かなければならない。

拒否権が与えられないとはつまり、拒否すれば、その場で即座に捕縛され、強制連行を余儀なくされるという事だ。

「そんなモンまで送りつけて、『首都』のお偉いさん方は俺に一体何を聞きたいってんだ？」

ブツブツ呟きながら、俺は一人、『魔術の館』へ向かう為の道を歩いている。

そう、一人で。

「どういう事が説明しろよ！ 何で今更俺が『首都』に向かわなきゃならねえんだ？」

「私は口を挟む立場にない。故にその質問には答えられない。黙って我々に従い給え。拒否すると言うなら、召集命令文規定第一条に基づき、キミを力尽くで捕縛する事になるが？」

「！」

マース・コアロッドが右手を軽く上げると、それを合図に三人の兵士が部屋にドカドカと踏み込んできた。全員その手に歩兵銃を握り、三方向から俺に銃口を向けてくる。

それが完全に、俺の勘に障った。

「上等だ……。力尽くでやれるモンならやってみやがれオラァッ！」

ここまで好き勝手にされて黙ってなんかいられない。命令文だろうが何だろうが、俺の知った事か！

頭に血が上っていた俺は、真っ先にマース・コアロッドに掴み掛かるうとした。

だがその時、前進しようとする俺を引き止めるかのように、俺の服の襟を背後から誰かが引っ張った。

「ぐえっ！」

思わぬ所から妨害された俺は、そのまま後ろにひっくり返ってしまふ。床に身体を打ち付けて悶絶していた俺は、漸く誰が俺を引き止めたのかを理解する。

俺の後ろにいたのは、いつの間にか起き上がっていたジンだった。彼は俺を床に倒すと、屈んでボソボソと声を掛けてくる。

「何をしようとしてるんだお前は？」

「決まってるんだろ。あいつらに大人しく付いてく気なんてねえんだよ俺には！」

俺が小声で応じると、ジンは浅く溜め息をついた。やっぱりそんなくならない理由か、と言いたげな顔をしている。

「馬鹿な事を言うな。さっきの言葉を聞いてなかったのか？ 元老院からの召集命令状は、一人の例外もなく拒否する事は出来ない。

仮に拒否したとしても、今お前がしようとした事を本気でやれば、捕えられて監獄行きだ。犯罪者として扱われるんだぞ？」

「それぐらい知ってるっつーの！ でも気に食わねえんだよあいつら！」

「何度も同じ事を言わせるな！」

小声で怒鳴ると言う荒業を披露して、ジンは俺の胸倉を掴む。彼の表情は真剣そのものだった。

「いい加減自覚しろデイン！ お前はもう一人で旅をしている訳じゃない！ お前一人の勝手な行動で、リネやミレーナさんが余計な被害を被る事だつて有り得るんだ！ お前は一時のくだらない感情で、あの二人を悲しませるつもりなのか！？」

「ッ！ それは……」  
的確過ぎる程に痛い所を突かれて、俺は何も言い返せなくなってしまう。

全く本当に、こいつは情け容赦がない。まあ、彼にここまで言わせてる俺が悪いってだけの話なんだけど。

「……悪かったよ。俺が浅はかだった」

「……わかればいい。こつちも熱くなって悪かったな」

そう言っただけで、俺に手を差し伸べて身体を起こしてくれた。

すると、その経緯を見ていたマース・コアロッドが、不思議そうな顔で告げる。

「おや？ キミはもしかして、ジン・ハートラーじゃないか？」

「え？ はい、そうですが」

「何と。これはまた奇遇だな。実はキミにも元老院からの言付けがある。まあ尤も、隣の紅い髪の少年と違って、キミの場合は首都への帰還指示だがね」

「俺にも？」

訝しげな顔をして、ジンはチラリと俺の方を見た。

だがそんな彼と違って、俺には心当たりがある。ジンにそんな指示を飛ばす人間は、一人しか思い浮かばない。

「ハルク・ウエスタイン、じゃないのか？」

「まあ、可能性としてはかなり高いが、なぜこのタイミングで……というよりデイン、敬語を使えとあれ程」

とジンが言い掛けた時、マース・コアロッドの傍らにいた兵士の一人が、何かに気付いた様子で口を開く。

「コアロッド大佐。こちらにいる方々はもしかして……」

「んん？ おお、何と言う事だ。失礼ですが、あなた方はもしかや、ミレーナ・イアルフス殿とフォード・ヒースクライム殿ではありませんか？」

「え、ええ、そうですけど……」

「ハハッ、本当に何と言う事だ。いや失礼。まさかあなた方二人が

このような所におられるとは」

マース・コアロッドは、言葉の端を嬉しそうに弾ませながら微笑する。って言うか、二人の事に今更気付いたのかよ？

「早速で申し訳ないのですが、あなた方も一度『首都』に戻ってもえませんか？ ジエイガ・デイグラッドと言う『魔術師』があなた方を狙っている為、護衛の意味も兼ねて『英雄』の皆さん全員を首都に招いているのです。バルベラ・スプリート殿とランザ・ダルベス殿も、既に『首都』にてお待ちになっておられますよ？」

「！ あいつらが？」

フォードは眼を丸くして、意外そうな表情を見せる。

それにしても今の話が本当なら、ここにいるミレーナとフォードが『首都』に帰れば、五人の内三人の『英雄』が一カ所に集結する事になる。こんな時に不謹慎かも知れないけど、ちよっと見てみたい集まりだな。

「さて。で、どうするのかね、紅い髪の少年」

「あ？」

黒ひげ大佐（たった今命名）が問い掛けてきたので、俺は不満な顔をして応じる。

こいつは明らかに、俺の時だけ対応が違うからな。そっちがそういう態度なら、こっちもそれ相応の態度で臨むまでだ。

「あとはキミの返事を聴くだけなんだがね。大人しく『首都』へ赴いてもらえるのかな？」

「こつなったら仕方ねえだろ。付いて来いって言つなら、どこへなりと付いて行ってやるよ。いちいちうるせえ奴だな」

俺がそう言い返すと、黒ひげ大佐は明らかに顔を顰め、不服そうに俺の事を睨み付けた。

が、特に何も言い返す事なく、表情を元に戻して続ける。

「よろしい。ではすぐに支度を始め給え。『首都』へは我々が用意した馬車で向かう。この街の駅近くに停めてあるので、準備が整ってから来るといい。では失礼」

物凄く事務的な口調で告げると、黒ひげ大佐は兵士たちを連れ、さっさと部屋を出て行ってしまった。

「チツ。何だよ偉そうに」

俺は適当に悪態をつけて、頭をガシガシと掻く。

すると、その時だった。

「ねえデーン」

妙に真剣な顔をしてリネが尋ねてきたので、俺は僅かに身構えてしまう。

「な、何だよ？」

「何か私だけ仲間外れにされてる気がする」

「……」

何を言い出すかと思えば……。そういう問題じゃねえだろ！こんな時にまで不必要なボケかますな！

軽く頭を抱える俺を、リネは首を傾げて不思議そうな顔で見つめていた。

そんなこんなで、宿での一件から首都に向かう羽目になった俺たちだったが、まだ肝心な事を済ませていない。

それは『魔術の館』の館長エミリアに預けている、『デス・ベリアル』に関する資料の閲覧だ。

リネはもう既に読んだそうだが、だからと言って俺が読まない理由にはならない。俺がこの街へ来たのは、自分の眼で確かめる為だったんだから。

ちなみに、俺以外の全員を含めて、既に支度は済ませてある。その上で『魔術の館』へ向かう事をみんなに伝えると、リネやミレーナが同行を申し出たが、俺の方からそれは断っておいた。あんまり大勢で行って時間が掛かると、黒ひげ大佐にどんな嫌味を言われるかわかったモンじゃないからな。

「あれ？」

そんな事を考えながら掛けていた俺は、『魔術の館』の正門付近に辿り着いた時、門の前に見覚えのある女性が立っているのを見つけた。その女性は、俺の顔を見るなり軽くお辞儀をする。

俺はその女性の傍に歩み寄り、声を掛けた。

「館長さん、何でこんな所に？」

「デインさんの事を待ってたんです。さっきここを離れる時にリネさんが、『デインも読みに来るはずだから』って言っていたので、例の資料をお渡ししようと思って」

その言葉通り、確かに彼女は資料らしき物を、両手で大事そうに抱えている。

だが、俺はそこでふと疑問に思った。

「ん？ でも確か、資料を外部へ持ち出すのは禁止されてるって言うてなかったっけ？」

俺が何気なく尋ねると、エミリアは薄く笑って応じる。

「ええ、確かにそうです。でもそれも、キチンとした手順を踏んでから館長である私が許可を出せば、持ち出し可能になるんですよ」

「いやでも、それってただの職権乱用なんじゃ……」

「構いません。私がデインさんたちの力になりたいと思ったから、そうしたまでです。幸い、この資料の原典は別の場所に保管してありますから、新しいものを造る事も可能ですしね。　という訳ですから、ハイどうぞ！」

半ば無理矢理押し付けられ、俺は思わず受け取ってしまう。って言うか、こういうのって共犯になるんじゃないのか？

「走って来られたみたいですけど、お急ぎなんですか？」

彼女に尋ねられ、俺は駅の方に眼をやりながら答えた。

「ああ、実は色々事情があって、『首都』に向かう羽目になっちゃってさ。これからすぐ出発しなきゃいけないんだ。本当はリネやミレーナも、あんたにお別れを言いたいって言ってたんだけど……」

「そうなんですか。何だか大変そうですね」

「全くだよ」

俺が苦笑すると、エミリアはクスツと笑って、ゆっくりと右手を俺の方に差し出してきた。

「他の皆さんにも伝えてください。ほんの少ししか話せませんでしたけど、皆さんに会えて良かったですって」

「！ ああ。必ず伝えるよ」

彼女の右手を握り返し、俺は笑って答える。

一人で旅をしていた間、俺はどこか人との繋がりを絶つようになっている部分があった。だけど今なら、心から思える。やっぱり人との繋がりは、悪い事ばかりじゃないと。

数秒後、手を離れた俺は、軽く会釈してから元来た道を歩き始めた。

と、ほんの数歩歩いた所で、俺は唐突にある事を思い付いて、背後を振り返る。

「エミリアさん」

「？」

呼び掛けると、館内に戻ろうとしていたエミリアが不思議そうな顔で振り返る。

俺が思い付いた事。それは複雑でも何でもない、単純な行動だった。

「お父さんみたいな立派な館長になってくださいね。俺も応援しますから」

俺は拳を握って、それを軽く掲げる。

頑張れ、という意味を込めて。

するとエミリアも、俺と同じく拳を握って、軽く掲げ返してくれた。そしてやがて、その拳を解いて手を振ってくる。

妙な照れ臭さはあったものの、俺は彼女に大きく手を振って、その場を後にした。

ふと頭上を見上げると、空が次第に橙色に染まり、夕暮れが迫っている事を感じさせてくれる。

宿に向かって走り出す俺の視界の中で、暖かな橙色の光が、『サ

ランドロ』の街並みを静かに、そして鮮やかに照らし出していた。



## 終章 The next stage is...

『サランドロ』を離れ、大陸の北西に向かって進み続けて、幾分か経った頃。俺は荒野の一角で、地面が隆起して出来た適当な大きさの岩の上に腰掛け、一旦身体を休める事にした。

「チツ……。あのクソ野郎のせいで、予定がかなり狂っちまったな」  
気に入らねエ翡翠色の光を思い出しながら、俺はその辺に唾を吐き捨てる。

どういふ経緯かは知らねエが、フォードの野郎は俺の過去を知つていやがった。尤も事細かに知ってる訳じゃあねエよだが、それでもあんな奴に知られてるってのは、それだけで充分虫唾が走る。

「何が『お前の事を知っている』だ、綺麗ごと抜かしやがって。テメエなんか俺の何がわかるってんだ」

俺はもう、誰一人信じねエ。心を許せば、それだけで付け入れられる隙が生まれる。

この世界に救いはねエ。

あるのは破壊と無秩序だけだ。

人の心に善意はねエ。

あるのは暗く陰湿な悪意と、どこまで黒く深い闇だけだ。

そんなモンにこれ以上振り回されてたまるか。光も希望も喰い尽されてたまるか。

「あんな悲劇はもオ、二度とゴメンだ……ッ！」

この世界に救いがねエなら、俺はどこまで破壊と無秩序を繰り返す。

人の心に善意がねエなら、俺が悪意と闇に染まるだけだ。

復讐してやる……！俺から全てを奪った奴ら、全員に！

「その為にはまず、あのクソ野郎どもにわからせてやらねエとなア。この俺をコケにすると、どういふ報いを受けるのかって事をよオ」

俺は以前、奴らの本拠地とも言える場所を訪れている。ここから

だとかかなり距離があるが、それでもまずは、奴らとの話をつけねエと気がすまねエ。

首都の北西、大陸の端。かつて『倒王戦争』において『魔王』側に付き、結果的に敗北し、城を追われた元貴族ども。そいつらが根城にしてやがる廃墟、『マッド・タウン墮落者の根城』。

そこが、『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』の巣窟だ！

既に夕暮れを迎え、太陽が西の空に沈みつつある頃。俺たち一行は、黒ひげ大佐が用意した馬車に乗り、『首都』へ向かってひたすら進み続けていた。

もちろん夜通し進むつもりはないらしい。途中の村か街で一泊した後、改めて『首都』を目指すとの事だ。

「ったく。途中で一泊するんなら、何も今日旅立つ必要なんてなかったんじゃないの？」

馬車独特の振動に揺さ振られながら、俺は窓辺に肘をつけて外の景色を見つめる。

辺りは既に薄暗い。もうすぐ夜になってしまっただろう。

「仕方ないだろ。不服なのはわかるが、元老院からの命令だ。大人しく従わないとどうなるかは、お前の友人がしっかり教えてくれたんじゃないのか？」

まるで俺を窘めるかのように、向かいの席に座るフォードが言う。すると、隣に座っていたリネが、いつぞやと同じようにクスクスと笑っていた。

「何が可笑しいんだよ？」

「フフ。だつてフォードさんやジンの前だと、ディーンが凄く子供みたくに見えちゃうんだもん」

「あゝそうですか」

不服に思つて生返事を返してみるものの、今のリネには効果がな  
いらしい。いつもならバカだの何だの言つて反論して来そうなのに、  
今は余裕があるのか笑い続けている。

すると、リネを挟んで反対側に座っているジンが、身を乗り出し  
て尋ねてきた。

「ところでディーン。元老院に呼び出された理由、思い付いたのか  
？」

「いや、全然。正直何がしたいのか、何をされるのかさっぱりだ」

俺は溜め息混じりに、もう一度外の景色を眺めてみる。

元老院から俺に対する、直々の召集命令。いくら考えても、未だ  
にその理由がわからない。一体お偉いさん方は、俺から何を聞こう  
つて腹積もりなんだ？

まあとはいえ、実は俺の方からも元老院に対して聞いてみたい事  
があつたりする。

それは鉦山都市『ワーズナル』で、ガラムから聞いた話だ。

鉦山の奥に眠っていた『精霊石』を、正規軍が隠していたという  
事。

そして、首都の元老院は『精霊』の存在を信じているという事。

もしもガラムの言っていた通りだとすれば、元老院たちはなぜ、

『精霊』の存在を信じているんだろう？ それにガラムは、『精霊  
石』を破壊する事が『デス・ベリアル』を呼び出す為に必要な第一  
段階だ、とも言っていた。

という事は、だ。『精霊石』の存在を隠そうとしていた元老院は、  
その事を知っていたという事になる。そしてその為に『精霊石』を  
狙う、『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』の存在も。

ん？ 待てよ？ じゃあもしかして、元老院が俺を呼び出した理由って……。

「『首都』って言えば、エリーゼさん元気にしてるかなあ？ ジンが最後に会ったのっていつ頃なの？」

景色から視線を外すと、俺の隣ではリネがそんな風にジンに尋ねていた。一方のジンも首を傾げ、「そうだな……」と考えるような仕草を見せる。

「エリーゼさんって言うのは、ジんくんの友達なの？」

すると今度は、ジンの真向かいに座っていたミレーナが、興味深げに質問を重ねてくる。

二人に色々問い掛けられ、少しあたふたしている様子のジンを見て、俺は思わず笑ってしまう。

と、そこで俺は、唐突に思い付いた。

「そうか……！ その手があったか！」

「……え？」

あまりにも唐突過ぎたせいか、騒いでいた三人が一斉に俺の方に視線を投げる。向かいに座っているフォードも、眼を丸くしている始末だ。

そうだよ。何で今まで思い付かなかったんだ。『首都』には『あの』エリーゼ・スフィリアがいる。

彼女はジンの古くからの友人で、占い師をやっている。初めて会った頃、内心で占いを馬鹿にしていた俺の前で、エリーゼはその時行方不明だったミレーナの居場所を、見事言い当ててみせたんだ。

最後の最後に占いに頼る事になるなんて、こんな馬鹿な話もないだろうけど、それでも彼女なら見つけ出してくれるかも知れない。

それは、俺が今一番会いたい人物であり、ミレーナが最後に会ったという人物でもある。

そう、ノイエ・ガルバドアの行方を！

「なるほどな。確かにこれは、ある意味好機だったのかも知れねえ」  
馬車は進み続ける。俺たちを乗せて。

次なる舞台、『首都・テルノアリス』へと。

終章 The next stage is... (後書き)

という訳で、『魔術の館編』いかがだったでしょうか。

毎度の事ながら、一つの編を終わらせるのに時間掛かり過ぎですよ  
ね……。

今回は特に時間掛かった気がします。

何とか更新速度を上げたいものなんですが、これが中々上手くいかない……。

こんなゆっくり更新な作者ですが、ぜひとも続きを気にして頂けたら幸いです。

それでは今回はこの辺で。

次回からは、『雷帝出現編』が始まります！

## 各章登場キャラクター集？（前書き）

次の章から登場人物が増えそうなので、またもやここらで箸休め。前回同様、名前しか出ていないキャラは載っていません。

しかし自分の書いてる小説とはいえ、ホント登場人物多いよなあ。そろそろ名前を言われても、「誰だっけそいつ?」と言われそうなキャラが出てきそうですわ……w

## 各章登場キャラクター集？

鉦山都市編 登場人物

アルフレッド・ダグラス

以前『ギルド』の仕事でディーン、ジンの二人とチームを組んだ事のある人物。その際、ディーンとある争いを起こし、それ以降ディーンを敵対視している。外見的特徴として、左耳に以前はしていなかった、逆さまになった三角錐型のピアスをしている。普段から短剣を二本所持しているが、状況によって様々な武器を使いこなす。

ガラム・ドラゴドム

ジラータル大陸で暗躍している闇組織、『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』のメンバーの一人。細身の身体からは想像出来ない腕力で、鎖付きの巨大な鉄球『鉄砕』てつさいを操る。外見的特徴として、橙色のバンダナを頭に巻き、右頬に十字架を模したような刺青がある。相手の事を『お前さん』と呼ぶのが口癖。

シグード・ファン

ガラムと行動を共にしている『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』の一員。常に感情の掴みにくい平淡な表情でいる上、無口でほとんど喋らない寡黙な戦士。右腕に装備された籠手型の『魔剣・蒼牙』そつがを使い、刀身から水流を生み出し戦う。



ラズネス・ヴィルバルトン

ガラムと同じく、右頬に十字架のような刺青がある十代後半の少女。任務パートナーのパーニヤに比べて、大人しい性格で丁寧な言葉使いをする。が、パーニヤに手出ししようとする者に対しては容赦がない。布に巻かれているのはギミック製の槍だが、体術も得意な為、使う相手を選んでいる。

パーニヤ・ロンドベル

妙に明るく間延びした口調の、十代前半の少女。『印術』が刻まれた札を複数枚所持していて、様々な『属性』の力を利用して戦う。歳相応な振る舞いを見せる事が多い半面、平気で物騒な事を口走る冷酷な一面もある。行動を共にするラズネスを、まるで姉のように慕い、とても懐いている。

魔術の館編 登場人物

フォード・ヒースクライム

ミレーナと同じく、『英雄』と呼ばれている『魔術師』の一人。『風属性』の『魔術』、『流衝魔法』の使い手。整った顔立ちと落ち着いた性格の為、かなり女性にモテる。五年程前にノイエからジエイガの存在を知らされていて、その頃と雰囲気の違いがジエイガに戸惑いを覚える。ノイエやミレーナ以外の『英雄』の事も当然知っているが、残る二人の事を『私の強い人間だ』と称した。

エミリア・ヴァーンズ

六年前から『王立・歴代魔術文献管理書庫』の二代目館長を務める、撫子色の髪的女性。初代館長である父親から館長職を引き継ぎ、自身が館長を勤めている事を誇りに思っている。普段は大人しいのだが、驚くとんでもない大声を出す。父親の形見である銀色のチエーンが付いた眼鏡を、いつも首から下げている。

マース・コアロッド

元老院からの召集命令の下、ディーンを連行しに来た正規軍の大佐を務める男。口髭を生やしており、肌が黒いのが特徴。大抵、見ている側が堅苦しくなりそうな厳しい顔をしていて、お堅い雰囲気醸し出している。あくまで口調は丁寧だが、なぜかディーンに対する風当たりがキツイ。黒ひげ大佐は、ディーンが即興でつけたあだ名。

## 序章 その王の名は（前書き）

予告通り、今回から『雷帝出現編』が始まります！  
ではいつも通りあらずじを。

意図せずして、首都『テルノアリス』に戻ったディーンを待っていたのは、現テルノアリス王を始めとする、元老院からの容赦ない取り調べだった。

それと時を同じくして、首都にある人物が現れる。

ディーンたちが予期しない所で、首都に再び破壊の魔の手が迫ろうとしていた。

徐々に明かされつつある多くの謎。ついに物語は、核心へと迫り始める！

## 序章 その王の名は

「では、今までにキミの旅の中で起きた全ての出来事について、キミの口から弁明を貰おうか」

少し高い位置から響いてくるその声に対し、俺はあからさまに不満な顔をしてみせる。

テルノアリス城の中央、その最上階に位置する、『王座の間』。

本来ならここは、『ギルド』にすら所属していない俺みたいな一般人が、簡単に足を踏み込めるような場所じゃない。それだけこの『王座の間』は、高尚な場という訳だ。

部屋の中央に立たされている俺を左右から取り囲む、六つの人影。まるで今から拷問でも始まるんじゃないかと思う程、室内は緊張した空気に包まれている。

立たされている俺とは違って、高そうな装飾のされた椅子に優雅に座っているこの六人が、この大陸の政治を動かす、『元老院』たちだ。

男女三人ずつの、計六人。真剣に俺の話に耳を傾けている奴もいれば、さして興味無さげに不真面目な態度の奴もいる。正直、真面目に話すのがかなり馬鹿らしくなってくる程だ。

「弁明も何も、俺はあんたらに追及されなきゃいけないような事をした覚えはない。なのに無理矢理首都に連行されて、こっちはいい迷惑だぜ」

その言葉を皮切りに、元老院たちの眼付きが鋭くなる。明らかに、俺の態度が気に喰わないんだろう。

まあそれも、至極当たり前な気持ちだと思う。

強いて言えばこっちは平民で、向こうは高尚な貴族様たちだ。平民の、しかもまだ十代の俺みたいな子供をこんな場所に呼び込む事自体、向こうの側には反対する奴もいたはずだ。

「口を慎め。何様のつもりだ、一平民の小僧が」

なんて考えていた傍から、予想通りの反応が返ってきた。俺は僅かに嘆息して、その言葉を放った人物の方を見やる。

「そつちこそ何様なんだよ。椅子に座って偉そうな御託しか並べられないような奴が、元老院の一角を担ってると思うと情けなくて仕方ねえっつーの」

「貴様……ッ！」

「まあ待ち給え」

憤慨して立ち上がるうとした元老院の一人を制したのは、俺の正面にある背凭れの長い椅子に座る人物。そいつの座っている椅子は、俺の周りに座る元老院たちの物より、かなり豪華に装飾されているのがわかる。

いや、それは多分当然の事なんだろう。

何せ今俺の眼の前には、この大陸を統べる王様なんだから。「どうやらキミは、随分と我々の事を嫌っているようだね。だが、出来ればそう斜に構えないでもらいたい。一応我々としては、キミとは友好的な関係を築きたいと思っているんだよ？」

牽制するかのような落ち着いた声。向こうが俺の事をどう思っているのかは知らないが、俺もその、どこか余裕のある口調が気に喰わない。

「そつだ、ならばこうしよう。我々の質問に答えてくれたら、我々もキミの質問に答える。どうやらキミは、我々に尋ねたい事があるようだしね。キミが知りたいと思う事に、出来得る限りの答えを与えるよ。　どうだい？　キミの考えている事を正直に話してもらえると、こちらとしても助かるんだがね、デイン・イアルフスくん？」

いや、彼の口調はもしかしたら、王族独特の高尚な雰囲気を出す為に、元々持って生まれた性質なのかもしれない。

俺はもう一度、眼の前の男を注視した。多分こんな機会でもなければ、俺が顔を合わせる事なんて一切無かったはずの人間。

ファルディオ・クロスレイン。  
それが現在の首都を統治する、  
現テルノアリス王の名前だ。

## 第一章 Back to the capital

首都『テルノアリス』はジラータル大陸最大の都市であり、大陸内の政治を動かす王族たちが住まう、巨大な城がある街だ、というのは以前にもどこかで話したと思う。

都市全体を囲むように張り巡らされた二十メートルにも及ぶ高さの外壁と、都市の中心に聳えるテルノアリス城、そして様々な大きさと種類の商店などが立ち並ぶ大通り、さらにはそこに溢れる人の多さが、大陸の各地から訪れる者の眼を圧倒する。

まあ無理もないだろう。それこそ別世界という言葉がピッタリな程に、都市の中と外では見える景色が全く違うんだから。

そんな大陸最大の都市に俺が足を運ぶのは、今回で一体何度目になるんだったつけ？

などと考え込んでいる内に、俺たちを乗せた馬車は『テルノアリス』に辿り着いていた。

『サランドロ』を旅立ってから、丁度一日が経過している。

夕暮れどころか夜が近い時間帯。昨日道中で一泊した街から休む間もなく走り続けた馬車は、今漸く『首都』の検疫所を抜け、都市の内部に入り込んだばかりだ。

「もう暗くなり始めてるから、首都がどれくらい復興したのかよくわかんないね」

俺の隣から窓の外を眺めながら、リネがポツリとそんな事を呟く。確かに所々『導力石』を用いた街灯があるものの、こう暗いと街の全体像を上手く見渡す事が出来ない。俺もリネと同じように、『あの事件』の当事者として、『首都』がどの程度復興しているのか気にならない訳がなかった。

『テルノアリス襲撃事件』。

元貴族アーベント・ディベルグが起こした、『首都』その物を消滅しかねなかつた大事件。あれからまだ三週間程度しか経っていな

いのか、と俺が感じてしまうのは、多分ここ最近、大変な戦いばかりを潜り抜けてきたせいだろう。

『ゴルムダル大森林』。

アジュール・ファウンテン  
『紺碧の泉』。

『ワーズナル』。

『サランドロ』。

改めて思い返してみると、確かに俺は行く先々で戦いを経験している。

そんな俺に対してジンは、「何か良くないものにとり憑かれてるんじゃないか？」と苦笑して言っていたが、正直な所、俺は笑い事で済ませられる気分じゃない。割と本気で何かにとり憑かれているんじゃないかと考えてしまう程、俺の周りでは大きな事件ばかりが起こっているんだから。

「……今回は何も起きませんように」

「？ 何が？」

首を傾げ、不思議そうな顔をするリネに説明してやるうかとも思ったが、何だか不吉な予感がして、結局俺は口を噤んだ。

そうだ、余計な事は考えない方がいい。悪い方向に考えるとその通りになるって、ミレーナもよく言ってたしな。

適当に気持ちを切り替えた俺は、『サランドロ』を出た直後に思い付いたある人物の顔を思い浮かべ、その人物と繋がり深いジンに質問しようとした。

「なあジン。この時間帯だとエリーゼの店って」

ところが、よく見るとリネの隣にいるジンは、背凭れに身体を預けて気持ち良さそうに寝息を立てている。そうしてふと気付いてみれば、向かいの席に座るミレーナとフォードも、それぞれ体勢は違えど寝息を立てて眠っている。

もう『首都』の中だというのに、起きているのは俺とリネだけだった。

「何だ。起きてるの俺たちだけかよ」



「みんな色々あつて疲れてたんじゃないかな？ 結局『サランドロ』ではゆっくり出来なかつた訳だしね」

「そういうお前は平気そうだな」

「うん、まあね。デインこそ疲れてないの？」

「まあ、疲れてないって言ったら嘘になるけどな。……って、そんな話してたら何か急に眠たくなってきた」

目を軽く擦りながら窓の外を見ると、馬車はいつの間にか見覚えのある通りを走っている。このまま行けば、もうすぐテルノアリス城に着くはずだ。

「まさか今から元老院に謁見しろ、なんて言われるんじゃないかな？」

「さすがにそれはないんじゃない？ 元老院の人たちだって当然眠ったりするだろうし」

「いや、わかんねえぞ。あの黒ひげ大佐なら平気でそんな事言い出しそうだし」

今ももう一台の馬車に乗っているはずの軍人の顔を思い浮かべながら、俺はそんな風に悪態をついてみる。

するとリネが不思議そうに首を傾げ、俺の言葉をゆっくりと反芻する。

「黒ひげ大佐……？ もしかしてそれって、あのマース・コアロツドって人の事？」

「他に誰がいんだよ。そもそも俺たちを連れ去りに来たのはあのおっさんだろ？」

「デイン、あの人にそんな渾名付けてたんだ……」

黒ひげ大佐、というのがお気に召さなかったのか、リネは笑顔だが苦笑しているように見える。良い線行つてると思うんだけどな、自分では。

「とにかく元老院への謁見なんかより、俺は先にエリーゼの所へ行きたいんだよなあ。この時間でもまだ店にいといいんだけど」

「エリーゼさんかあ。会うの久しぶりだけど、元気にしてるかな」

あ？」

「さあな」

「あれ、でも何でエリーゼさんの所に？ 何か用事でもあるの？」  
「またも不思議そうに首を傾げるリネに向かって、俺は悪戯っぽく笑って、『冗談混じりにこう言った。』

「彼女に占ってもらうんだよ。今俺が一番会いたい人の居所をな」

「何？ 街の宿に泊まりたい？」

馬車がテルノアリス城の門の前に辿り着いた所で、俺たちは漸く外の空気を吸う事が出来た。直前まで眠っていた三人も何とか眼を覚まし、今は各々欠伸をしたり身体を伸ばしたりしている。

そんな中、もう一台の馬車から降りてきた黒ひげ大佐、もといマース・コアロッドが、俺に向かってこんな事を言い始めたのだ。

『元老院との謁見は明朝に取り行なう。よってキミには、それまで城内の一室に留まってもらうおうと思っっているのだが、異論はあるかね？』

と、そんな風いきなり告げられた俺は、もちろんすぐさま異論を唱えた。城内の一室じゃなく、街の宿屋に泊まりたい、と。

理由は二つある。

まず一つは、今からエリーゼの所に行ってみたいというのがあったから。

そしてもう一つは、俺は貴族が使うような豪華な感じの部屋で寝泊まりするのがとてつもなく苦手だから、という理由だ。

それに恐らく、一度城内に入ってしまうと、そう簡単には外に出

してもらえなくなるだろう。俺が元老院に呼び出されている人間なら尚更だ。

まあそんな訳で、注文通り俺が異論を唱えてやると、マース・コアロッドは若干不服そうに顔を顰めているという訳だ。この男のこういう顔、既に俺は何回も眼にしているような気がするんだよね……。

「明確な理由はあるのかね？」

「いやまあ何て言うか、俺みたいな一平民の子供が、貴族様方がいらっしゃる豪華な空間にいるのは変じゃないかなあ」と思ったただけだよ。それにホラ、俺の方がよくても貴族様の方には嫌がる人もいるんじゃないの？ だからそういう人たちに気を使わせない為にもここは俺が引いとくべきなんじゃないかなあ」とも思った訳よ」

「むっ、むう……」

適当にそれらしい事をあれこれ並べる俺に、大佐は強く踏み込み切れないらしい。

よしよし狙い通りと思いつつながら、俺は止めとばかりに続ける。

「心配しなくても逃げたりなんかしねえよ。明日の明朝にやるって言うんなら、詳しい時間を指定してくれ。そうすればその時間に間に合うように城に来るからさ」

「……」

俺の言葉が信用に値するものかどうかを吟味するみたいに、大佐は顎に右手を添えて考え込む。

が、ものの数秒で考えるのを止めたらしく、厳しい表情のまま観念したように口を開いた。

「ならば明日の七時半だ。その時間までにこの門の前に来ておく事。門番には私からその旨を伝えておく。いいな？ 絶対に遅れる事のないようにし給え」

「はいはい。わかってますって」

適当にあしらうような俺の仕草に若干不服そうな顔をしたが、大佐はそれ以上言及して来なかった。

すると、そのやり取りを見ていたリネが、急に手をパツと上げて口を開く。

「あのすみません。あたしも宿に泊まりたいんですけど」

「!?!」

意表を突かれた俺は思わずリネの顔を見返してしまふ。え、何？ お前付いて来る気なの？

「キミもか？ ……全く。まあ、一応召集命令の対象となっているのは、そのこの紅い髪の少年だけだからな。キミは好きにし給え」  
「はあ〜い」

若干呆れ気味の大佐に偉くすんなりと許可されたりネは、どこか嬉しそうに間延びした返事をする。

何でお前まで付いて来るんだよ？ と言及してやるうかとも思っただが、何だか馬鹿らしかったので止めておいた。

「そついえば、他の三人はどうするんだ？」

俺は残る三人、ジン、ミレーナ、フォードの方に視線を向ける。すると、まず始めにジンが口を開いた。

「俺はこれからハルク様に謁見を申し出てみようと思う。なぜ呼び戻されたのかも気になるし、今までの事を報告する必要もあるしな。泊まる場所をどうするかはその後で決めるさ」

「そつか。ミレーナとフォードは？」

と俺が質問したにも拘らず、突然間に入ってきた大佐が、厳しい口調で言い放つ。

「お話合いの所申し訳ないが、警護の関係上『英雄』の御二方には城内に残ってもらいます。既にお話の通り、バルベラ・スプリート殿とランザ・ダルベス殿も城内にて警護させてもらっておりますので」

「……だとさ」

大佐が言い終わった後に、肩を竦めながらフォードがそう付け加えた。するとその隣にいたミレーナが、申し訳なさそうに言う。

「でも本当にいいの？ デインくんとりネさんだけ普通に宿を使

うだなんて……」

「気にすんなって。こっちはこっちで適当にやっつくからさ。貴族様たちに混ざってゆっくりして来いよ」

俺が特に気負う事なく言ってみせると、ミレーナはまだ少し気にしながらも、どうにか納得してくれたらしい。

城内に入るのを見送る俺とリネに軽く手を振って、ミレーナはジンとフォード、そして大佐に付き添われるようにして門を潜り、テルノアリス城へと入って行った。

そして、門が完全に閉まるまでの間その場に立ち尽くしていた俺とリネは、門が閉まると同時に踵を返して歩き始める。

「え〜っと。確かエリーゼの店があるのは、首都の東側、『ジエニツク通り』だったよな」

以前『テルノアリス』を訪れた際、ジンに教えてもらった通りの名前をどうにか思い出しながら、俺は方角を確かめつつ、周りの風景に眼を向けてみた。

もうすっかり日も暮れて、『導力石』の街灯に照らされた街の様子は、所々見え辛い場所があるものの、『テルノアリス襲撃事件』が発生する前の姿に戻りつつあるようだ。

それにこんな状態でも、夜だというのに首都の大通りには活気が溢れている。

どうやら俺が思っていた以上に早く、この街はあの事件から立ち直ろうとしているらしい。

「そういえば久しぶりだね。こうしてティーンと二人だけで街を歩くのって」

「え？ あ、ああ。まあそうだな」

不意にリネがそんな風に話し掛けてきたので、俺は変に緊張してしまった。確かに彼女の言う通り、ここの所色々と余裕がなかったせいか、もう随分の間こんな風にしてリネと二人だけで街を歩いている。

最後に歩いたのは確か、『アジュール・ファウンテン紺碧の泉』に着いた時だったっけ。そ

ういえば俺、あの時出店でリネにネックレスを買わされて。

と、その事を思い出した俺は、隣を歩くリネの方をチラリと見てみた。彼女の首には、今もあの時買わされた星型のネックレスが掛けられている。

あの時からリネは、一度たりともネックレスを外そうとしない。よっぽど気に入ったのか、肌身離さずという言葉が体現している。

まあ似合ってると思うし、大切にしてくれてるんならそれはいいんだけど……。

「どうしたの？」

「へっ？ あ、いや、何でもない」

チラ見していたはずが、俺はいつの間にかリネの顔を見入っていたらしい。不思議そうな顔の彼女に問われ、俺は慌てて視線を前に戻す。

すると、まるでそんな俺を面白がるみたいに、リネは可笑しそうにクスクスと笑い始めた。

「なっ、何笑ってんだよ？」

「フフ、ごめんごめん。だって何か、最近のディーン変なんだもんな。たまにボーっとしてる時があるから、あたしが『どうしたの？』って聞くと、今みたいに『何でもない』って繰り返してさ」

「あ……、そう、だっけ……」

歯切れ悪く曖昧な返事をしながら、俺は僅かに眼を逸らした。

正直な話、彼女の指摘は当たっている。どうも最近になってから、俺はたまにリネの事を見つめている時があるらしい。

……いや、『らしい』なんて曖昧かつわざとらしい表現で躲そうとしているが、見つめているのは間違いない。それ以上に充分自覚もある。

ただなぜ自分がそんな事をしているのか、という理由が俺にはわからない。こうする事に何の意味があるのか、どういふ感情に基づいてこんな事をしているのか、それが自分でも判別出来なくて困っている。

が、だからって別に深く思い悩んでる訳でもない。理由があるなら多分その内気付くんじやないかなあ、とかそんな風に考えている。

隣を歩く彼女は、俺がそんな事考えてるなんて思いもしないだろうけど。

「って言うかさ。今更だけど、エリーゼの店に行く為ってだけなのに、何でお前まで付いてきた訳？」

「えっ？ あ、え、と、それは……」

これ見よがしに話題転換を図ると、今度はリネの方がギクツとしたように顔を逸らした。何か答え辛いような質問だったんだろうか？

「あ、ああ、そうそう！ あたしもエリーゼさんに会いたいなあ、と思ったの。うん、それだけ！」

「そうそうって、何で今思い付いたような言い方なんだよ」

妙に慌てている様子のリネにツッコミを入れた所で、俺たちはいつの間にか『ジェニック通り』の一角、『LIME』という看板を掲げた店の前に辿り着いていた。どうやら、話しながらでもしっかりと目的地を目指していたらしい。

「あれ？ 店の灯り点いてないみたいだな」

「ホントだ。もうお店閉めちゃったのかな？」

店の前まで来た俺とリネは、外から店の様子を窺ってみる。

煉瓦造りの建物の窓は四角く嵌め殺しで、中を覗くと灯りは点いていない。やっぱり閉店しているのかとも思ったが、入り口にある扉には、閉店を示すような注意書きは見当たらない。一体どういう事なんだろう？

「どうするのデーン？」

「うーん、仕方ねえけど今日は諦めるか。黒ひげ大佐にああ言っちゃった以上、今晚泊まる宿も探さなきゃいけねえ訳だし……」

すぐにもノイエ・ガルバドアの居所を探してもらおうと思っていたのだが、占ってくれる本人がいないんじゃないかな。まだ若干名残惜しかったが、俺はリネを連れてその場を立ち去る

うとした。

するとその時。

「あら？ ディーン、トリネさん？」

「！」

聞き覚えのある声がして振り返ると、銀色のベールを纏った女性が驚いた表情でこっちを見ていた。

街灯の明かりに照らされて微かに見える、鮮やかな翡翠色の瞳。間違いなく、エリーゼ・スフィリアだった。

「よお！ 久しぶりだなエリーゼ」

「こんばんわ、エリーゼさん」

「やっぱりディーンとリネさんだったのね。ホント久しぶりね。二人とも元気だった？ どうして首都に帰ってきたの？」

以前と変わった様子もなく、明るく嬉しそうな声でエリーゼは問い掛けてきた。

そんな彼女の態度を嬉しく思いながらも、俺は問われた内容に対して若干言い淀んでしまう。

「あゝ、まあ何て言うか、色々と事情があつてさ……」

軽く頭を掻きながらどう説明したものかと考えていると、隣のリネが割って入るみたいに口を開く。

「どこかに出掛けてたんですか？」

「ええ。貴族の人に呼ばれて、ちよつと用事を済ませにね」

「貴族って、もしかしてエリーゼさんもテルノアリス城に？」

「え、何？ じゃああなたたちも？」

少し意外そうな表情で驚いた後、エリーゼは「入れ違いにならなくてよかったわ」と言っ、明るく笑ってみせた。そして服の袖口辺りから鍵のような物を取り出すと、店の扉の前へと進み出る。

「まあ立ち話もなんだから、中に入って。聞きたい事が色々あるし、そつちも私に用があるんでしょ？」



テルノアリス城。『首都』の中央に聳え立つその白い巨城は、大陸内の政治を動かす元老院が集う場所であり、同時に王族や貴族が住まう居住区でもある。

フォードから聞いた話だと、私はもう何度もこの城に、そして『首都』に、足を運んだ事があるそうだ。

だけど、もちろん私にはそんな記憶が一切ない。

ここがどういふ場所でもどんな人たちが住んでいる空間なのか、という事を知識として知ってはいても、ここを訪れた記憶なんて、私の中には残っていない。『サランドロ』での出来事で僅かながら記憶を取り戻したとはいえ、それだけは変わらなかった。

正門を抜け、石畳の道をしばらく歩いた後、漸く城内への扉を潜った私の眼の前には、見慣れない光景が広がっていた。

通常の建物の二階部分に相当する辺りまで吹き抜けになった大広間。上を見上げると、高い天井から大きなシャンデリアが吊るされていて、広間全体を明るく照らしている。

床には触り心地の良さそうな紅い絨毯が敷かれていて、さらに周りに眼を向けてみると、絵画や甲冑が飾られた大広間の奥と左右の壁に、それぞれ別の空間へと続いているらしい大きな扉がある。

見るからに重そうな、縦に長い長方形型の扉。それらの扉の先は何かの部屋なのか、はたまた別の廊下へと繋がっているのか。色々想像してみるだけでも、変な高揚感が溢れて来そうだ。

「リネさんだったら、眼をキラキラさせて喜びそうな空間ね」

小声で呟いてその場面を想像した私は、可笑しくてクスツと笑ってしまう。

本人たちに聞いた話だと、ディーンさんとリネさんはもう、ここ

を訪れた事があるらしい。ディーンくんの方は、「あの時はゆつくり見てる暇なんかなかった」ってぼやいてたけど。

「では、フォード殿とミレーナ殿はこちらへ」

他の事に気を取られていた私は、先導していたコアロッド大佐の声で前を向いた。彼は向かって左側の大きな扉の方を差して、私とフォードを促そうとしている。

「じゃあ、俺もここで失礼します。さっき言った通り、まだやる事が残ってるので」

コアロッド大佐が扉を開けて奥へと進み始めると、ジンくんは私たちとは逆方向の扉を差してそんな事を言った。

彼が謁見すると言っていた『ハルク』という人物は、ディーンくんから聞いた話だと、どうやら元老院の一人らしい。彼はさっきの言葉通り、自分がなぜ『首都』に呼び戻されたのか気になるんだと思う。

「ん？ そうか。道中世話になったな。またそれぞれ暇な時にでもゆつくり話をしようじゃないか」

そう言いながら軽く笑って、フォードは右手をジンくんの方へと差し出す。

対するジンくんも、特に気負った様子もなく、右手を差し出してフォードと握手を交わした。

「はい、喜んで。ミレーナさんもゆつくり休んでくださいね」

「ええ、そうさせてもらうわ」

ジンくんは私とも軽く握手を交わした後、踵を返して、私たちとは別の方向に歩き始める。

その時、不意にある事を思い付いて、私は彼の事を呼び止めてしまふ。

「あつ！ 待ってジンくん！」

「！ はい？」

立ち止まり、不思議そうな顔で振り返るジンくんに、私は改めてお辞儀をした。フォードが彼に世話になったと言っていたように、

私も彼には迷惑をかけたのだから。

「『サランドロ』では、私の事を助けてくれてありがとう。あなたには本当に感謝してる」

「いえ。当然の事をしたまです。それじゃあ」

彼はどこか照れ臭そうにそう言っ、すっかりとした足取りでまた歩き始める。

そんな彼の後ろ姿を、私が無気なく見つめている時だった。不意に隣のフォードが、私と同じように彼の背中を見つめながら、感慨深そうに呟く。

「ふむ……、ジン・ハートラーか。ディーンの友人の割には、中々礼儀正しい人間だな」

「それどういう意味？」

すぐさま私が無機嫌な顔を見ると、フォードは悪戯っぽく笑って「冗談だ」と言った。もちろんそうだとわかっていた私は、彼にっられて笑ってしまう。

「フォード殿、ミレーナ殿。どうぞこちらへ」

「　　と、大佐殿が呼びのようだな。俺たちも行く」

急かされるようにコアロッド大佐に追い付くと、彼は扉の奥に続いていた廊下にある、三番目の扉の前で立ち止まっていた。

私が無気なく廊下の奥を見てみると、先の方にはまだいくつも扉があつて、廊下もかなり先まで続いている。本当にこの城、どれだけの広さがあるんだろう？

「この中にて、ランザ・ダルベス殿とバルベラ・スプリート殿がお待ちになっておられるようです。フォード殿とミレーナ殿がお休みになられるお部屋は、用意が出来次第使いの者が案内いたしますので、それまで他の方々と談笑しつつお寛ぎください。それでは、私はこれで」

最後まで丁寧な口調を重ねた後、コアロッド大佐は一礼して大広間の方へと戻っていった。

「さて。じゃあ中に入るが、その前に確認しておきたい」

扉の前に立ったフォードは、突然何かの前置きのようにそんな事を言った。

私が僅かに首を傾げると、彼はやや真剣な顔で続けて口を開く。

「これからあいつらに会う訳だが、その、何と言うか……、心構えは大丈夫か？」

「？ どういう意味？」

「『今の』お前は、自分の記憶にない人間に話し掛けられて、変に動揺しない心構えがあるのか、という意味だ。この扉の向こうにいるのは、お前の友人であり、戦友でもある人間だ。だがお前はその事を覚えていない。だからこうして聞いてるんだ。お前にとっては仕方ない事かも知れないが、覚えていないと言われた方の人間には、言いようのない辛さを感じる者もいる」

出来ればそれを頭の隅にでも置いといてくれ、と締め括って、フォードは少し切なそうに笑ってみせた。

その言葉を聞いて、私はハツとする。

もしかしたら、あの少年もそうだったのだろうか、と。

……いいえ。『もしかしたら』じゃないわ。間違いなく彼は、デインくんは傷付いていた。彼の事を知らないと言った、私の顔を見て。

言い訳するつもりはない。私がデインくんの事を傷付けたのは、傷付けているのは、否定しようのない事実なんだから。

「……ええ。わかったわ」

記憶がないからと言って甘えは許されない。私はその事を、しっかりと自覚しなくちゃいけないんだ。

フォードの言葉を胸の内に深く刻みつけながら、私は部屋の中へと足を踏み入れた。

するとその瞬間。

「来るのが遅過ぎんのよー！ーッ！ー！」

いきなり怒鳴り声と共に、私の顔のすぐ横を、物凄い速さで何かが通り過ぎた。

驚いてそのまま後ろを振り返ると、廊下に転がっていたのは、ソファアの上に置く柔らかそうな四角いクッションだった。

「いきなり随分な御挨拶の仕方だな。もう少しお前は、人を待つという事を覚えた方がいいと思うぞ」

「うっさいわね！　ならあんたは人を待たせないって事を覚えなさいよ！」

とりあえずクッションを拾ってもう一度部屋の中に入ると、嘆息するフォードの向こうに私と同じ年くらいの女性が立っていた。

肩の辺りまで伸ばした、艶のある鮮やかな群青色の長髪を揺らし、かなり不機嫌そうな顔をしている女性の右手には、折り畳まれた扇子が握られている。肌は色白く、また理想的な痩せ型体型なのに、胸や腰回りの肉付きが適度に良い。

何だか同じ女性として、個人的にその体型に羨ましさを感じてしまふ。

「漸く来てくれたか。俺一人でこの女王様の相手してやるのに、辟易してた所だったんだ」

と、群青色の髪的女性に見蕩れていた私は、どこか渋味のある声で我に返った。

見ると、部屋の中央に置かれた接客用の幅の広いソファアに、大柄な体格の男性が一人で陣取って座っている。

萱草色かんそういろのやや短めの髪を生やした男性の身体は、ガッチリとした大きな体格に相応しく、分厚そうな筋肉に覆われていて、その肌は健康的な焼け方をしている。右目に黒い眼帯をしていて、その隙間から僅かに覗く肌に、生々しい傷跡があるのが見えた。

それに男性の背後には、ソファアの背に立て掛けられるようにして、両刃の大きな斧が置かれている。かなり重そうに見えるけれど、この男性の分厚い筋肉なら、難なく振り回す事が出来そうだ。

「辟易してたあ？　よく言うわよ！　ほんの十分ぐらい前までいび

き掻いてたのは、一体どこの誰だと思ってるの!？」

「ああ、そういやそうだったなあ。ガツハツハツハツハツ！」

「……まあ、相変わらずなようであんまり安心したよ。バルベラ、それにラ  
ンザ。本当に久しぶりだな」

呆れが混じったような顔をしながらも、どこか嬉しそうにフォー  
ドは言う。

「……って、あれ？　じゃあもしかしてこの二人が。」

「オウ、確かにこうして俺らが集まるのも珍しいこった。後はノイ  
エの旦那がいりゃ完璧だな」

「……ってか、あんた何呆けた顔してんのよ？」

ふと気付くと群青色の髪の女性が、怪訝そうな顔で私の方を見て  
いた。もしかしたら既に、会話に加わろうとしない私の雰囲気から、  
何かを察しているのかも知れない。

「あ、えつと……」

「ミレーナ、とりあえず座ろう。お前たちも聞いてくれるか？  
少し話しておかなきゃならない事がある」

戸惑う私を見兼ねたように、フォードは眼の前の二人にそう促す。  
そんな彼の姿を見つつ、この空間の中にいながら私は今更、どこ  
か他人事のようにこう思った。

かつて歴史を塗り替える役目を担った、『英雄』と呼ばれる五人  
の魔術師。その内の四人が今、こうして一堂に会しているんだな、  
と。

## 第一章 Back to the capital (後書き)

という訳で、『雷帝出現編』の序章と第一章でした。

またもや一万文字超えてしまいました。飽きずに読んでもらえる  
と有り難いですw

それにしても今回で漸く現テルノアリス王の名前、そして『英雄』  
の二人が登場と相成りました。

この『雷帝出現編』では色々な事を小出しにしていくつもりなので、  
ぜひ楽しみにしてくださいください。

それでは！ノシ

## 第二章 接触までの刻限（前書き）

我ながら早い投稿、という訳で第二章です。



## 第二章 接触までの刻限

ミレーナさん、フォードさんと別れた後、俺は真っ直ぐ、テルノアリス城内の東側の一角に向かった。そこにはハルク様専用の執務室がある。

各元老院には、一人一人個別の執務室が設けられていて、それぞれ城内の違う場所に設置されている。ハルク様の場合は一階だが、他の元老院たちはほとんどの者が上の階を選んでいるらしい。

紅い絨毯の敷かれた長い廊下を歩き続け、俺は漸く、執務室の前に辿り着く。

「『ギルド』所属ナンバー〇六四、ジン・ハートラーだ。ハルク・ウエストイン様に面会したいんだが、構わないか？」

執務室の前で警備している兵士に、『ギルド』のバッヂを見せ、確認を取る。今までも、もう何度もこなしてきたやり取りだ。

兵士はバッヂを確認した後、「少々お待ちを」と言って執務室の中に入っていく。

やがて、しばらく経ってから兵士が戻って来て、妙に畏まった様子で俺に敬礼をする。

「長旅ご苦労様です、ジン・ハートラー様。どうぞ中へ」  
「あ、ああ。すまない」

随分丁寧に挨拶されるな、と思いつつ、俺は部屋の中に足を踏み入れた。

「やあ、久しぶりだね。まさかキミがこんなに早く帰って来てくれるとは、正直思っていなかったよ、ジン」

部屋に入ると、事務机で何かしらの書類を見つめていたハルク様が、顔を上げてニコリと微笑んだ。

俺はすぐさま一礼し、口を開く。

「ジン・ハートラー、たった今帰還しました」

「ご苦労様。さっき他の兵士から連絡が入っていたよ。どうやらデ

「イーくんたちと合流出来ていたようだね」

「はい。その件で、ハルク様に色々のご報告したい事が……」

「すぐさま本題に入ろうとする俺を制する事なく、ハルク様は軽く頷いた。」

「頼むよ。こちら色々々と、状況の整理をしておきたいからね」

「以上が、今回の任務で俺が見聞きした全てです」

報告を終えた俺から一旦眼を離し、ハルク様は思案するかのよう  
に腕を組んで、椅子の背凭れに身体を預けた。

「なるほど。どうやら随分な巡り合わせがあったようだね。『英雄』  
たちに、ジェイガ・ディグラッド。しかしまさか、ミレーナ・イア  
ルフスが記憶喪失に陥っているとは……」

「ええ。彼女に何があったのかは依然不明のままで、ディーンもそ  
れを探ろうとして、各地で行動を続けていたようです」

「……」

ハルク様は黙り込んだまま、何事かを思案しているかのような表  
情で虚空を見つめている。

彼は時折、俺の前でこういった表情を見せる事がある。

何も語らず、何も話さず、深い思考の渦に沈んでいくかのように、  
ただジツと考えを巡らせている表情。もう見慣れたとはいえ、この  
時の彼が一体何を考えているのかまでは、さすがに俺でもわかりか  
ねる。

そんなハルク様の集中の邪魔をするのは、正直かなり気が引けた。  
だが俺には、どうしても気になる事があったのだ。

「ハルク様。少し、よろしいですか？」

意を決して声を掛けると、ハルク様はハツとしたように顔を上げ、  
軽い頬笑みと共に尋ね返してくる。

「何だい？」

「その……、元老院の方々は、なぜディーンに召集命令を掛けたん

ですか？ あいつ自身にその理由を尋ねても、あいつはわからないと言っていました。本人さえ心当たりが思い付かない内容で、わざわざ『首都』に呼び戻すなんて、元老院の方々はあいつに一体何を？」

「……」

もしかしたら、踏み込んではいけない内容だったのかも知れない。ハルク様は頬笑みを消して眼を僅かに逸らすと、またしばらく黙り込んでしまった。その表情はどこか、俺に話す事を躊躇っているようにも見える。

「デインくんを呼び出した理由は二つある。が、キミに教えられるのは片方の件だけだ。それを説明する為にはまず、キミに見せないといけない物がある」

どれくらい経った頃か、不意にハルク様は観念したかのように啞き、事務機の引き出しを探り始めた。

「……？」

何を探しているんだ？ と首を傾げていると、ハルク様は一枚の写真を取り出し、机の上を滑らせるようにして、俺に見える位置へと差し出した。

「この写真は？」

「ある調査の段階で手に入れた写真だよ。そこに写っている人物をよく見てくれ」

ハルク様に言われるがまま、俺は机の上の写真を手を取った。

どこかの集落らしき場所で撮られた、大人数人に子供が十数人の集合写真。皆それぞれ楽しそうに笑って、憂いのない表情で写っている。

だが、これが一体何だと言っただろう？

「何か気が付かないかい？」

諭すようなハルク様の言葉に、俺はもう一度注意深く、写真の人物たち一人一人の顔を見つめてみた。

そして俺は、今更のように気付いた。

ハルク様が一体、何を見せようとしていたのかを。

「これは……ッ、どういう事ですか……!？」

写真から眼を離し、俺はゆっくりとハルク様の方を見つめる。彼は真剣な表情で俺を見つめ返し、厳しい口調でこう言った。

「それを我々元老院も、デインくんから聞こうとしているんだよ」

「何なのよ、それ」

私自身の身に起きた事実。その全てを語り終えた時には、部屋の中は、言いようのない緊張感に包まれていた。

群青色の髪の女性、バルベラ・スプリートは私の方を見つめ、信じられないと言いたげな顔をしている。

「記憶喪失……？ 何がどうなればそんな事態に陥んのよ？」

「それはこつちが聞きたいくらいだ」

「……あつそ。どうもその言い草だと、詳しい事は何もわかってないみたいね」

僅かに嘆息するように顔を逸らし、バルベラは持っていた扇子を軽く開いてみせる。

すると、私の正面に座っていた大柄の男、ランザ・ダルベスが、彼女の言葉を引き継ぐかのように口を開いた。

「最後に会ったのがノイエの旦那だ、つてのは間違いないのか？」

「ええ。思い出した限りでは、間違いないと思う」

「あらあら、随分頼りない言い方だ事。あんだ、そんな状態でよくここまで来られたわね」

まるで私の事を責めているかのような付け足しに、私は思わず俯

いでしまう。

「……ごめんなさい」

私が弱々しくそう呟くと、少し変な事が起こる。責めるような言い方をしたのはバルベラ本人だというのに、その彼女がなぜか、酷く慌てた様子で立ち上がったのだ。

「あ、謝んな！ そんなしよぼくれた顔されたら、私が悪者みたいじゃない！ あゝッ、もうやり辛い！ 大体あんたそんな大人しいキャラじゃないでしょうがッ！！」

「えっ？ ええっ？」

ビシツと人差し指をこつちに突き付けて、バルベラは酷く興奮したように息を荒げる。そんな事言われても……、これが今の私の素なんだけどなあ……。

「ガッハッハッハッ！ こいつぁいい！ 憎まれ口を叩かないミレ！ ナ相手じゃ、さすがのバルベラ嬢も形無しだなあ！」

「うっさいわね！！」

なぜか心底楽しそうに、ランザは自分の膝頭をバンバン叩きながら笑う。ふと隣を見ると、その様子を見ていたフォードが、軽く頭を抱えて溜め息をついていた。

……ああ、そうか。ここにいる三人は、記憶を失う以前の私を知っている。だから以前の私との違いに戸惑って、若干空回りしてしまっただ。

何だか不思議な気分だった。私は彼らの事を覚えていないのに、彼らは昔の私の事を覚えている。

じゃあ。

だったら。

彼らが知っている『本当の』私って、一体どんな感じなんだろう？ 「全く。とにかく事情はわかったけど、これからどうするつもりなのよ？」

酷く取り乱していた様子のバルベラは、どうにか自己完結させたらしく、落ち着きを取り戻してそう尋ねてきた。

私はその質問に対し、僅かに間を開けて考える。これから先、私自身どうするつもりなのかを。

「……もちろん、記憶を取り戻す為に行動しようと思う。私をここまで守ってきてくれた、ディーンくんの為にも」

「ディーン……？ 誰だそいつ？」

聞き慣れない名前だったのか、正面に座っているランザが、随分訝しそうな顔をしていた。どうやら彼は、ディーンくんの事を知らないらしい。

「ミレーナの弟子だ。そういえばお前たちは、あいつの事を知らないんじゃないか？」

隣に座るフォードがそう問いかけると、ランザは軽く頷いたのに、バルベラの方は頷かなかった。まるで待ってましたと言わんばかりに、すぐさまフォードに反論する。

「あら、私は知ってたわよ。随分昔に一度だけ、あの子の顔見た事あるもの。ま、彼の方は小さかったから覚えてないでしょうけどね」  
「そう、なの？」

記憶のない私にとっては、一番意外な事実だった。まだ深く理解出来ないけれど、彼女の性格だとそんな事に興味を示しそうなものに。

「べつ、別に、あんたに弟子が出来たって聞いたから、気になって見に行ってみたとかそういう理由じゃないんだから！ 勘違いしないでよね！」

「ハッ」

「オラそこッ！ 二人して何小馬鹿にしたような笑い方してんのよ！？」

まるで示し合わせていたかのように鼻で笑ってみせるフォードとランザに、バルベラは不服そうに噛み付いてくる。

が、当の本人たちは然して気にした様子もなく、会話を続けていく。

「で？ その弟子とやらはどこにいった？ 当然城の中にも付いて

来てんだろ？」

「いや、あいつは街の宿に泊まると言っ、早々にここを立ち去った。今頃連れれの少女と一緒に、今晚の宿を探してる最中なんじゃないか？」

「連れれの少女？」

フォードが発した言葉に興味を持ったらしく、ランザは若干食い入るようにフォードを見つめる。

「ああ。リネ・レディアと言う子でな。俺もここへの道中で聞いて驚いたんだが、どうやら彼女は、『妖魔』一族の生き残りらしい」  
「……！」

『妖魔』、という一言で、ランザとバルベラの表情が僅かに強張った。

きつと勘違いなんかじゃない。二人のその表情に合わせるかのように、この部屋を包む空気が一変している。

「『妖魔』一族、ね……」

「ああ。久しぶりだなあ、その名前を聞くのも」

「……？ 何かあったの？」

思わずそう問い掛けてしまった私は、三人から一気に視線を浴びる羽目になった。彼らの眼は、どこか切なげで、何かを悔いているようだ。

「あんたねえ……！」

「止せバルベラ。さっき言ったばかりだろ。ミレーナには当時の記憶そのものがないんだ。俺たちと意見が食い違っても仕方がない」

「そうそう。別に悪気がある訳じゃねえんだ。これくらい許してやろうや、バルベラ嬢」

「……フン」

不機嫌そうに顔を逸らして、バルベラは黙り込んでしまう。

やっぱり私は、何か不味い事を聞いてしまったんだろう。

彼らに、そして本来なら私にとっても、辛いはずの出来事。それが何なのか、やっぱり私には思い出せないけれど……。

「しっかしそのディーンって奴、随分気を使う奴なんだなあ。泊まる事を拒否したってのは、師匠の事を気遣ってた訳だろ？」

まるで空気を換えようとするかのように、ランザはごく自然に話し出す。余りの手際の良さに、凍りついていたはずの空気が、一瞬でどこかへと消え去ってしまった。

「いや、あいつの場合、そんな殊勝な理由じゃないだろ」

苦笑するフォードの顔を見て、ランザは訝しそくに「あん？」と呟く。

「単に貴族の雰囲気と性に合わないだけだろうさ。その辺りは充分、師匠からの影響を受けているらしい」

久しぶりに足を踏み入れたエリーゼの店は、何だか酷く、俺を懐かしい思いで包み込んでくれた。

例の事件が起こる直前、アーベントに敗北を喫し、リネも姿を消した事で、俺は失意のどん底にいた。そんな俺に光を灯してくれたのが、紛れもないエリーゼ本人だった。

俺の命を救ってくれた、という点でリネには感謝しているが、エリーゼに対してはまた別の意味で感謝している。

彼女がいなければ、きっと今の俺は存在しなかつただろう。大袈裟な言い方だけど、それぐらいのものだと俺は思っている。

「そう。随分大変な道のりだったのね」

俺たちが『テルノアリス』を旅立った後で辿ってきた旅路における、粗方の説明を終えた所で、エリーゼは感慨深げにそう口にした。店内にて椅子に座った俺とリネは、温かい紅茶の入ったカップを



出され、一時の休息を得た。

これまた失礼な話だが、あまり広くないエリーゼの店の壁には、相変わらず何に使うのかわからない骨董品やら、額に入れられたどこかの風景画や写真やらが飾られたままになっている。

白いテーブルクロスを掛けられた、四角い木製のテーブルの上に、俺は口許に運んでいたカップをそっと戻す。

「そんな訳でさ、あんたにまた占ってほしい事があるんだ」

「あら意外ね。前は占いの事なんて全然信じてない風だったのに」  
エリーゼは優しくニッコリ笑いながら、的確に痛い所を突いてくる。

それになぜだろう。彼女は確かに笑っているはずなのに、俺にはその表情がかなり怒っているように見えた。あ、もしかして占いを信じてないって言った事、まだ根に持っていたりする訳？

「いや、まあ、それはそうなんだけど……、他に手掛かりを見つかるいい方法が思い付かなくてさ……」

「どうしよっかなあ。占いをせ〜んぜん信じてない人に、私なんかが見てもいいのかなあ？」

「うぐっ……」

な、なんてわざとらしい仕返しなんだ……！ 銀色のベールの下にチラリと見える、あのしたり顔。クソッ、絶対今の状況を楽しんでやがる！

「デイン！ 一体エリーゼさんに何したの！？」

「何もしてねえ！ 占いを信じてないって言ったただけだ俺は！」

何をどういう風に想像してそんな事抜かしてんだてめえは！？

最早ボケなのか狙いなのかすらわからないリネの言葉に、俺は思いつ切り脱力した。誰でもいいからこの位置変わってくれ……。

「とまあ、冗談はさておき」

なんて台詞を吐いて手をヒラヒラ振ったエリーゼは、その身から漸く真面目な雰囲気を出し始める。

「一体私に何を占ってほしいの？ 一応言っておくけど、私の力で

あなたの師匠の記憶を戻す、なんてそれこそ『魔法』みたいな芸当は出来ないから」

「わかってるよ。俺が占ってほしいのは、そういう事じゃない。前と同じで、ある人の居場所を探し当てたいんだ」

「ある人？」

やや首を傾げたエリーゼに対し、俺は真剣な表情で応じた。

「ノイエ・ガルバドア。この人の行方を占ってくれ」

「……！ あらまあ、随分と有名な人の居場所を知りたがるのね」

エリーゼは驚きつつも、その顔に僅かな笑みを湛えてみせる。その笑顔は、占い師として踏んだ場数の多さから来る余裕か、はたまた、重圧に呑まれない為に身に付けた手段か。

いずれにしろ、彼女はその笑顔の裏に、全てを見抜くかのような冷静さを兼ね備えている。例の事件の時に、その能力は実証済みだ。だが。

「でも悪いわね。多分、今あなたがノイエ・ガルバドアの居所を占おうとしても、あなたが望む結果は得られないと思うわ」

「？ どうしてだ？」

問い掛ける俺に対し、エリーゼは諭すような口調で応じる。

「私はね、例えばあなたのように、誰かの居場所を占ってくれって言う人が現れた時は、その人と強い『縁』で結ばれた人の力を借りるようにしているの。以前、あなたの師匠の居場所を探った時、私が師匠の居場所を占う事が出来たのは、師匠と強い『縁』で結ばれていたあなたが自身が、私の前にいたからなの」

「……つまりノイエと俺とじゃ、占う為に必要な『縁』が結ばれてない、って事なのか？」

「そういう事。もちろん、『ただ』占うだけなら出来なくもないけど、そうすると当たる確率がかなり下がってしまうわ。今回の場合だと、それは許されないでしょ？」

ある程度の事情を話しているからだろう。エリーゼは、絶対に見つけたいという俺の心情を見抜いているらしい。

彼女の言う通りだ。今回は、前回とは訳が違う。

ミレーナの記憶喪失について、何らかの事情を知っている可能性のあるノイエ。ミレーナの記憶を取り戻す為には、彼に会う事が一番の近道のはずなんだ。

だからこそ失敗したくはない。間違いなくノイエがいるという確証を、この手に掴みたいんだ。占いを当てにしてこんな事を言っている俺は、充分滑稽なんだろうけど。

「ノイエさんと『縁』が深いっていうと、やっぱり『英雄』の誰かなんじゃない？ 一緒に『倒王戦争』を戦い抜いた戦友なんだし」

「まあ、一理あるよな。あと可能性があるって言えば……」

と、リネの意見を反芻してみた所で、俺は嫌な奴の顔を思い出しってしまった。

ジェイガ・デイグラッド。

俺がミレーナの行方を占ってもらえた経緯から考えると、あいつも可能性としては充分考えられる。が、あいつをエリーゼの前に連れてくる事自体、不可能に近い事なんじゃないだろうか。

「となるとやっぱ、『英雄』の内の誰か、って事になるか。なあエリーゼ」

「俺と一緒に城へ行ってくれ、って言うんでしょ？ 私は構わないけど、その前にあなたには」

「わかってるよ。元老院との謁見を済ませてから、だろ？ ったく、面倒臭えな……」

エリーゼに忠告されなくても、忘れてなんかいない。第一約束を守らなかつたら、黒ひげ大佐に何を言われるかわかったモンじゃないし、何より元老院から処罰を受ける可能性だってある。そんなのはどっちも願ひ下げだ。

いずれにしろ、全ては明日。元老院との謁見を終わらせれば、全てが思い通りに運ぶんだ。

何があるうと乗り切るしかない。

例え明日、予想し得ない出来事が起きたとしても。

こんなに朝早い時間に起床したのは一体いつ以来だろう、という程早い時間に、俺の意識は覚醒した。

興奮して眠れなかったとか、悪い夢に魘うなされて眼が覚めた、って訳でもない。俺の中の何かがそうさせたのか、不思議と俺の眼は覚めてしまっていた。

昨日の夜、エリーゼと別れた後で宿を見つけた俺とリネは、宿の一階にある食堂で晩飯を平らげてから、各々が借りた部屋に直行した。馬車の中でリネが言っていたように、どうやら俺たちの方も気付かない内に、かなり疲れが溜まっていたらしい。

ベッドから起き上がり、軽く身体を伸ばしながら、部屋の壁に設置された時計を見やる。

現時刻、午前六時十二分。黒ひげ大佐が指定した集合の時刻まで、まだ一時間弱の余裕がある。今から準備して飯を食ってゆつくり歩いて城に向かったとしても、まだ充分お釣りが返ってくる時間帯だ。「うーん……、どうしたモンかな」

早く眼が覚め過ぎたせいで、若干暇を感じている。

かと言ってもう一度眠ったりしたら、間違いなく約束の時間に遅れる事になるだろうし。

「……あ、そうだ」

あれこれ思索していた俺は、不意にある事を思い付き、部屋の隅に置いてある自分の荷物の中から、一冊の本を取り出した。

それは『サランドロ』で手に入れた、『デス・ベリアル』に関する記述が載っている本だ。『首都』に着くまでの間に何度か読む機

会はあつたが、まだ全体に眼を通していない。

読み耽らないように注意しながら、俺は棊を挿んでおいた本の頁を開いた。

「『六大精霊』の名前と、それぞれの力の役割、か」

手に入れたこの資料によると、今から何百年も前、『魔術戦争』の時代においては、『精霊』の存在は今よりもっと当たり前信じられていたらしい。なぜなら『精霊』は、『魔術』の力の根源でもあり、自然界のパワーバランスを支える重要な存在として、多くの『魔術師』たちに崇められていたから。

しかも資料を読み進めてみると、実際に『魔術』で『精霊』を呼び出す事に成功した、なんて伝説も、大陸の各地に残っているそう

だ。

炎の『精霊』、『サラマンダー』。

水の『精霊』、『ウンディーネ』。

風の『精霊』、『シルフ』。

地の『精霊』、『ノーム』。

光の『精霊』、『ホーリー・デイバイン』。

そして、闇の『精霊』、『デス・ベリアル』。

この六つの『属性』と、力の象徴たる『精霊』が存在する事で、世界は絶妙なバランスで支えられ、存続する事が出来ているらしい。ではなぜ、そんな神秘的な話が、この大陸中に浸透していないのか。

俺のように、『精霊』の存在を信じていない人間がいる理由。それは多分、『魔術戦争』の頃と違って、今は確実に『魔術師』そのものの数が減っているからだろう。

一部の者には『人間兵器』とも呼ばれる事のある存在、『魔術師』

。この大陸の歴史の中で、何度も引き起こされた大きな戦争。近年で言えば『倒王戦争』がそれに当たるが、それ以前にも、この大陸は大きな戦争を経験している。

そして戦争が起きる度に、『人間兵器』である『魔術師』たちは、次々と戦場に駆り出され、志半ばで命を落とし、その数を徐々に減らしていった。

『精霊』の存在を伝承する人間の数が減れば、それに比例して信じる者もいなくなる。

まあ当然の結果ってヤツだよな。現に俺自身『魔術師』ではあるけど、ミレーナからそんな話を聞いた事なんて一度もなかったし。

だが『魔術師』が減ったからと言って、何も『精霊』の存在を信じる者が全くなりなくなった訳じゃない。

例えば、『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』。

俺が遭遇した奴らは、その存在を信じ、その存在を呼び出す為、この大陸の中で暗躍を続けている。

だけど奴らは、一体どうやって『精霊』を呼び出すとしているんだ？

以前遭遇したガラムが言うには、『精霊石』と呼ばれる特殊な石を破壊する事が、『デス・ベリアル』を呼び出す為の第一段階らしい。

という事は、まだ奴らには、踏まなきゃいけない段階がいくつかあるって事なのか？

それに、奴らが『精霊』を呼び出すとしている理由。『精霊』を操ろうとしている、目的。

「破壊……、なのか？」

至極単純に考えるなら、それが一番妥当だろう。

奴らは『精霊』の力を使って、この大陸に脅威を齎そうとしているのかも知れない。

以前この『首都』を襲った、アーベント・ディベルグのように。

『「破壊」こそが俺の「存在意義」だからだ！』

あの時、奴が叫んだ言葉が、一瞬脳裏を過ぎる。

「『存在意義』、か……」

あの男と同じように、奴ら『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』にも、それがあって言うのか。

存在している事の意義。

自分が自分であるという事の、理由。

「あ、やべっ。そろそろ朝飯食つとかないとな」

ふと時計に眼をやると、時刻は午前六時半を過ぎている。

とりあえず頭を切り替えた俺は、リネも朝飯に誘ってやるうと思  
い付き、支度を済ませて部屋を後にした。

「リネ。起きてるか？」

彼女が借りた部屋の扉を数回ノックしながら、俺は扉越しにそんな声を掛けてみた。

「が、数秒経つても返事がない。もしかして、まだ寝てるのか？」

「……いや、だからって中に入って確かめる訳には……」

いかねえよなあ、いくら何でも。普段あいつが、寝る時にどんな格好してるのかとか見た事ねえし、もしかしたらとんでもない格好して寝てる可能性もなくはないだろうし、それ以前に女の子の部屋に無断で入るなんて色々問題あるだろうし。

と、意味もなく俺が扉の前で悶々としていると、急にガチャツという音がして、部屋の扉がゆっくりと開き始めた。

「ん？ 何だ、起きてんじゃねえ」

か、と続けようとした俺の前に現れたリネは、白いワイシャツに青いショートパンツという、物凄くラフな格好をしていた。彼女は眠そうに眼を擦っていて、かなりボーっとした顔をしている。

「あ……、おはよう〜デイーン……」

「お、おう。悪い、もしかしてまだ寝てたのか？」

「ううん、全く然起きてましたあ〜」

ほとんど目を瞑った状態でゆ〜っくり話す彼女は、明らかに寝起きた。朝飯の為とはいえ、やっぱりこんな朝早くに誘いに来るのは間違ってたかな……。

「む、無理しなくていいぞ。まだ眠たいならベッドに戻れよ、なっ？」

「ううん、全く然へ〜き……」

「うおわっ!？」

言ってる傍から、リネはその場によるよるとへたり込んでしまう。何とか反応する事が出来た俺は、しかし思わず、彼女の身体を抱きしめるような格好で受け止めてしまった。

「……色々と不味いな、この体勢は」

彼女の身体から伝わってくる心地良い体温で、なぜか俺の鼓動は高鳴っていた。何か変な方向に意識が飛ぶ前に、リネを部屋の中に戻さないといけない気がする。

「おいリネ。立てるか？」

「……」

俺の呼び掛けに彼女は全く反応しない。それどころか、俺の胸に顔を預け、気持ち良さそうに寝息を立てている。完全に落ちてるな、こりゃ。

「仕方ねえか。　ちよつくらお邪魔しますよ、っと!」

これは完全な不可抗力だ、と胸の中で無意味な言い訳をしつつ、俺はリネの華奢な身体を両腕で担ぎ上げ、部屋の中へと運び込む事にした。

足だけでどうにか静かに扉を閉め、四角い部屋の窓際にあるベッ



ドまで歩み寄り、その上に出来るだけゆっくりとリネの身体を横たえる。

「ふう……。とりあえずこれでいい、かな」

何がいいのか自分でもよくわからないが、とにかく後は、彼女を起こさないように部屋を出るだけだ。

ベッドの脇に屈んだ状態だった俺は、そつと立ち上がろうとした。

と、その時になって、俺は漸く気が付いた。

ベッドの上で気持ち良さそうに寝息を立てているリネ。その彼女の胸元で、星型のアクセサリーが鮮やかに輝いている。

肌身離さずを体現している彼女は、どうやら寝る時もそれを守り続けているらしい。

「……ったく。寝る時ぐらい外せっつーの」

口ではそう言ってみたものの、俺は自然と微笑んでいた。

どこか幸せそうな顔で眠り続けるリネの頭を、俺は数回、ゆっくりと優しく撫でてみる。

「起こして悪かったな」

多分リネには聴こえていないだろうけど、俺はそう一言謝ってから、静かに彼女の部屋を後にした。

約束の時間に間に合う為には、どうやら一人で行かなきゃならぬらしい。

この街の朝というものは、他の街と比べても、どうやら段違いに活気に溢れているらしい。

昨日の夜はあまりハッキリとしなかったが、例の事件の爪痕は、確かにまだ街に残っている。にも拘らず、通りをある人の姿は絶えない。

さすがに真つ昼間程人は多くないものの、大通りには荷馬車に乗った商人らしき者や、軒先で店の開店準備に追われる者が、あちらこちらに散らばっている。後数時間もすれば、ここもすぐに、もっと多くの人で溢れ返る事だろう。

そんな景色を何気なく見つめながらも、俺の足は、しつかりとテルノアリス城に向かっていった。

「そういえば、昨日結局ジンはどうしたんだろ？ ミレーナとフォードも、ゆつくり休めたのかな？」

ぼんやりそんな事を考えながら、歩く事十数分。少し離れた所に、巨大なアーチ状の門が見えてくる。

相変わらずデカイ門だと思いつながら、その門前近くまで歩いていく。すると門のすぐ前に、見覚えのある人物が腕を組んで、石像のように仁王立ちしていた。

どうして朝っぱらから、よりにもよってあんな奴の顔を見なきゃいけないんだろう？ 何だか急激にやる気なくなってきた……。

「む？ おや、意外と時間を守るようだな。感心感心」

「……そりゃどうも」

って言うか、『意外と』は余計だ黒ひげ大佐！

内心で悪態をつきながら、俺は大佐の前で立ち止まる。一瞬挨拶代わりにブン殴ってやるうかとも思ったが、以前そうしようとしてジンに釘を刺された事を思い出し、どうにか我慢するに至った。

「では、城に入るとしよう。元老院の方々も、『王座の間』にてお待ちになっておられる」

大佐が指で軽く指示を出すと、それに応じた門番が、巨大な門をゆつくりと左右に開き始める。

その奥で、天高くにまで聳えるテルノアリス城。

俺にはなぜかその姿が、魔の巢窟と化しているように思えてなら

な  
か  
っ  
た。

## 第二章 接触までの刻限（後書き）

書いててふと思ったんですが、今回の『雷帝出現編』、『テルノアリス編』の二の轍を踏みそうな気がしてきました（汗）

今回の文字数も一萬文字突破……。

『テルノアリス編』は確か、序章から終章までで12万文字ぐらいあった気がします。

このままだと本当に二の轍を踏みそうだ……。

読者の方々疲れてませんか？ 飽きたりしてませんか？

その辺りが物凄く不安なのですが、出来れば作者の拙い長文に付き合ってもらえれば幸いです。

### 第三章 元老院（前書き）

あつという間に四月に入りましたね。  
という訳で、『雷帝出現編』第三章です。

### 第三章 元老院

テルノアリス城の中央、その最上階に位置する、『王座の間』。王と六人の元老院たちは、普段からここで会議やら会合やらを行なっているらしい。

最上階へと続く城内の階段を上り切り、長い廊下を黒ひげ大佐に先導されながら歩き続け、漸く『王座の間』の入り口に辿り着いた俺を待っていたのは、見覚えのある人物だった。

長い若竹色の髪を後ろで一つに纏め、どこか知的な雰囲気醸し出している眼鏡の青年。少しつり上がった眼をしているものの、物腰穏やかな表情をしたその人物に、以前俺は会った事がある。

「やあデインくん。キミとこうして会うのも久しぶりだね」

「ハルク・ウエスタイン！……様」

うつかり呼び捨ててしまいそうだった俺は、隣にいる大佐の眼が鋭く光るのを感じて、慌てて『様』を付け加えた。

恐らく大佐も最初から、俺が何か粗相をするんじゃないかと注意を払っていたんだろう。嫌味の籠った忠告が飛んで来るかと思いい、俺は内心で軽く身構える。

「が、大佐は特に何も言っていない。今のはギリギリセーフ、って事なのか？」

「お待たせして申し訳ありません、ハルク様。仰せの通り、デイン・イアルフスを『連行』して参りました」

「ああ、ご苦労様。下がってくださいって構いませんよ」

大佐は姿勢を正して敬礼すると、俺をチラリと一瞥してからその場を後にした。……って言うか、さっき『連行』の部分だけ妙に強調して言った気がする。

「わざわざ呼び出したりしてすまなかったね。元気にしていたかい？」

遠ざかっていく大佐の背を恨めしい気持ちで見つめていた俺は、

そんなハルクの声に振り返る。

「まあ、一応な。ってかそんな事より、何であんたがここで待ってるんだ？ てつきり他の連中と一緒に、部屋の中にいると思ってるのに」

大佐がいなくなった途端、敬語を使う素振りすら見せない俺を、ハルクは特に気にした様子もない。それどころか、文句の代わりと言わんばかりに、数枚の紙切れを差し出してきた。

「キミにこれを見せておこうと思ったからだよ」

「何だこれ？」

「貴族を毛嫌いしてるキミの事だから、多分元老院の顔と名前なんて知らないだろうと思ってるね。一応全員の顔写真と、名前や経歴を書いた書類を持って来たんだ。今の内に眼を通しておくといい。審問開始までもうあまり時間はないけど、全員分覚えられるかい？」

「……努力してみる。けど、そんな事する必要あんのか？」

ハルクから書類を受け取り、言われた通り眼を通してながらも、俺はそんな風に抵抗してみせる。が、当然ハルクの答えは厳しかった。「当然だろう？ 向こうは貴族で、キミは平民なんだ。ボクの場合言葉使いや態度なんてあまり気にしないけれど、この中にいる人間全員がそうだという訳じゃないんだよ。顔どころか名前すら覚えていない、なんて知れたら、それだけで処罰を与えようとする輩だっているんだ。変に畏まってくれと言ってる訳じゃない。けど、キミはもう少し、貴族と平民の違いというものを理解した方がいい」「あ、ああ」

矢継ぎ早に捲し立てられ、俺は反論する事さえ出来なかった。

にしても、こうして俺に諭すような事を言ってる眼の前の人間も、貴族様の一員である事に違いないはずなんだけど……。敬語を使わない事を咎められないせいか、その辺りの事実を忘れてしまいうになる。

「……っと、そろそろ時間だね。その書類は当然持っていけない方がいいから、ボクが預かっておくよ」

しばらく紙と睨めっこをしていた俺に、懐中時計を手にしたハルクがそう言った。

俺は何とか、紙に書かれた内容と元老院全員の顔を頭に叩き込み、ハルクの手に書類を返す。

「じゃあ、準備はいいかい、ディーンくん？」

「ああ。さつさとこんな事終わらせようぜ。その方が絶対、お互いの為になる」

俺の軽口にハルクは一瞬笑みを零したが、すぐに真剣な表情になった。そして眼の前の扉に向かって、大きな声を張り上げる。

「元老院ハルク・ウエスタイン、並びに召集命令対象者、ディーン・イアルフス。これより入室致します」

扉の奥から返事は返って来ない。その代わりに、両開きの扉が中から開けられ、俺たちを室内へと招き入れる。

ついに、元老院との謁見が始まるうとしていた。

「……もう。ディーンってば、すぐあたしの事置いて行っちゃうんだから」

一人宿の食堂で朝ご飯を食べながら、あたしは意味もなく頬を膨らせてみる。けど当然、いつもならここで溜め息をつくはずの男子が、今はあたしの眼の前にいない。

現在の時刻は、午前七時半を少し過ぎた頃。今頃ディーンは、一人でテルノアリス城に辿り着いてるんだと思う。

食堂の壁に掛けられた時計から眼を離して、あたしは不服に思いながら、朝ご飯のトーストの端を齧った。



「そりゃあ起きるのが遅いあたしが悪いんだけどさ……。一言くらい声掛けて行ってくれたって……」

なんて言いつつも、あたしには少し引っ掛かっている事がある。確かに今、ディーンはいない。だけど今朝、ディーンに起こされる夢を見た気がするんだよね。

よく覚えてないから何とも言えないんだけど……。もしかしてディーン、あたしの事起こしに来てくれたのかな？

「気のせい、だよな？」

もしあれが夢じゃなかったんだとしたら、それは素直に嬉しい。寝起きを見られたかも知れないっていう、恥かしさも多少あるけど……。

後でディーンに聞いてみようかな、なんて思いながら、あたしはもう一度時計に眼を向ける。

これから一人でどうしよう？ まだこんな時間だし、開いてるお店も少ないはずだよな。……。だからってお城に行っても、召集命令の対象者じゃないあたしは、多分お城の中に入れてもらえないだろうし。

「そういえば、こうして一人で朝を迎えるのも、久しぶりの事なんだよね」

今までは必ずと言っていい程、朝ご飯はディーンと一緒に食べたし、例えディーンがいなくても、途中からはミレーナさんがいる事もあったし。そう考えると、今のこの時間って結構貴重なものなのかも。

「せっかくだし、『首都』の中を回ってみようかな。開いてるお店は少なくとも、街中を回るだけで地理には詳しくなれそうだし」

そんな風に独り言を呟きつつ、あたしは温かい紅茶の入ったカップに手を伸ばす。一口啜ると、それだけで紅茶のほのかな香りが、口いっぱい広がった。

こうしてゆっくり出来る、久しぶりの一人の時間。だけど不思議と、昔みたいな不安な気持ちにはならない。むしろ

楽しく感じてしまっている。

探検気分で『首都』を回る。それこそ多分、一人でじゃないと出来ない事だ。

「デイーンがいたら、『早くしろ』って言われちゃうもんね」

クスツと笑って、何気なく窓の外を見てみる。

視線の先には、雲一つない青空が広がっていた。

足を踏み入れた『王座の間』と呼ばれる部屋は、奥の壁が硝子張ガラスりになっていた。

太陽の光が差し込むその壁を背に、俺の足下より少し高くなった位置に設置されている、金の装飾が施された一つの椅子。背凭れの長くなった椅子に腰掛けているのは、四十代前半の男だった。

丁寧に整えられた小麦色の髪の上には、紅い水晶の嵌め込まれた金の冠があり、それが不思議な神々しさを醸し出している。服装は紅と白を基調にした袖口の大きいローブで、何となく司祭のようにも見える。

さつきハルクに見せてもらったばかりの書類が、早くも役に立つてくれた。

俺の目の前にいるこの男。こいつが、ファルディオ・クロスレイン。現在の『首都』、そしてジラータル大陸を治める、テルノアリス王か！

「命令対象者デイーン・イアルフス。中央の審問台に進み給え」

ある意味王の姿に見蕩れていた俺は、隣から聴こえた厳しい口調に、思わず身を縮ませた。振り向くとハルクは、さつきまでと霧囲

気が一変した厳しい表情で、ジッと俺の事を見据えている。

「……」

俺は無言のまま、部屋の中央に設置された飴色の台へと進み出る。この字型をした審問台と呼ばれる台に近付いた所で、俺は漸く気が付いた。

審問台を左右から囲むように、台と同じ色をした机が弧を描く形で設置されていて、そこに銀の彫刻や装飾が取り付けられた値段の張りそうな椅子が、六つ置かれている。

そして、その内の五つに優雅に腰を掛けている、五人の人間。

男二人に女三人。どいつもこいつも、さつき書類で見たものと一致する顔ばかりだ。

と、俺が移動したのを見届けたハルクが、空いていた最後の席へと移動する。これで漸く、俺の眼の前に揃った訳だ。

この大陸を統治する、元老院全員が。

妙な緊張感を覚え、思わず俺が息を飲んだ瞬間、自らの席に着いたハルクが、まるで天に向かって吠えるかのように高々とこう告げた。

「ではこれより、召集命令文規定第五条に基づき、『魔術師』ディーン・イアルフスに対する審問を取り行なう！」

ハルクの声が室内に木霊す中、入口の扉が室内にいた兵士によって閉じられた事で、ただでさえ重苦しく感じる空気が、さらにその酷さを増したように思う。

……正直、場違いな事この上ないと、俺は呆れと共に自覚する。何で俺こんな所にいるんだっけ？

「随分戸惑っているようだね」

「！」

上の空状態になり掛けていた俺は、少し高い位置から聴こえてきた声で難を逃れた。

声の主は当然、ファルディオ・クロスレイン。この大陸を統べる王様だ。……って、こういう言葉使いも狼藉に値するんだっけ？

「心配する必要はないよ。何もキミの事を罰しようとしている訳じゃないんだ。ただこちらの要求に、素直に応じてくれればそれでいい」

ファルディオ……、じゃなかった、テルノアリス王はそう言って軽く微笑み、俺の返事を聞きもしないで続ける。

「では、今までにキミの旅の中で起きた全ての出来事について、キミの口から弁明を貰おうか」

開始早々の勝手な注文に、俺は不満な顔をせざるを得ない。こっちはまだ何で呼び出されたのかもわかってないのに、何をどう弁明しろって言うんだ。

内心で嘆息しつつ、俺は口を開いた。もちろんいつも通り、敬語を全く使わずに。

「弁明も何も、俺はあんたらに追及されなきゃいけないような事をした覚えはない。なのに無理矢理『首都』に連行されて、こっちはいい迷惑だぜ」

俺が眼を逸らしながら呆れ気味に吐き捨てると、それだけで元老院たちの眼付きが鋭くなった。

そんな中ハルクだけは、忠告を無視した俺に呆れているのか、若干頭を抱えるような仕草を見せる。

まあ（ハルクも含めて）当然の反応だと思うし、こっちもそれを狙ってやってたりする訳だが。

「口を慎め。何様のつもりだ、一平民の小僧が」

すると、そんな俺の言葉に対し、明らかに見下したような口調で反論してきた、少々大柄な三十代後半の男がいた。黒い短髪に、やや眼付きの悪さが強調されているその容姿が、男の特徴として俺の眼に止まる。

この部屋に入る前、ハルクから教えられた元老院全員の、それぞれの名前と容姿。それらと照らし合わせると、どうやらこいつがバ

ドアーズ・ガブラツシュって奴らしい。

いかにも平民を馬鹿にしている、典型的な貴族の人間って感じた。

「そつちこそ何様なんだよ。椅子に座って偉そうな御託しか並べられないような奴が、元老院の一角を担ってると思うと情けなくて仕方ねえっつーの」

「貴様……ッ！」

「まあ待ち給え」

憤慨して立ち上がるうとしたバドアーズを、俺の正面に座るファルディオが制する。さすがは王様と言うべきなのか、彼の口調は穏やかでどこか余裕に満ちている。

……ま、個人的にはそれがまた気に喰わなかったりするんだけど。「どうやらキミは、随分と我々の事を嫌っているようだね。だが、出来ればそう斜に構えないでもらいたい。一応我々としては、キミとは友好的な関係を築きたいと思っっているんだよ？」

牽制するかのような落ち着いた声でそこまで告げると、ファルディオは数秒程何かを考えるような仕草を見せ、やがて思い付いたように再び口を開く。

「そうだ、ならばこうしよう。我々の質問に答えてくれたら、我々もキミの質問に答える。どうやらキミは、我々に尋ねたい事があるようだしね。キミが知りたいと思う事に、出来得る限りの答えを与えるよ。　　どうだい？」

彼は薄く笑みを湛えた顔で、「キミの考えている事を正直に話してもらえると、こちらとしても助かるんだがね」と続けた。何て言うか、早くも腹の探り合いって感じたな。

まあ確かに、王様の言う通り突っ撥ねても埒が明かない。話を先に進める為には、俺が折れるしかないみたいだしな。

「……わかった。じゃあ遠慮なく聞かせてもらっせ」

意を決して、俺は口を開く。自分の周囲に満たされている言いよりのない緊張感に、呑まれる訳にはいかなかった。

「あんたらはどうして、『精霊石』なんて物を隠そうとしてんだ」

本当に一瞬の出来事だった。俺が放ったその言葉で、元老院全員が顔を僅かに顰めたのは。

そして今の反応で、俺は漸く確信するに至る。

間違いない。『ワーズナル』でガラムが言っていた事。元老院が、『精霊石』の存在を知っているというのは、本当の事だったんだ！  
「デイン・イアルフス」

不意に右側の席から名前を呼ばれ、俺は僅かに振り向く。

声の主は黒髪で、前髪が斜めに切り揃えられた、冷静な雰囲気を持った男だった。

入室前に見た書類の内容と照らし合わせると、こいつの名は確か、レオナルド・ブレイク。そういえばあの書類には、ハルクと同じ年だって書いてあったな。

「お前の口からその言葉が出るという事は、どうやら『ワーズナル』での一件は事実のようだな」

「あん？」

レオナルドが発した言葉に、俺は若干眉を顰める。こいつらの口からなぜ、『ワーズナル』という単語が出て来たんだらう？

……いや、違う。今の言葉で漸く納得した。

こいつらが、元老院がわざわざ俺を『首都』に呼んだ理由。

「そうか。あんたらが本当に知りたいのは、俺の旅路の全てって訳じゃない。召集命令を掛けてまで俺を『首都』に呼んだのは、『ワーズナル』での出来事を直接聞き出す為だったんだな？」

「そう思うか？」

「こっちはそれ以外考えられねえんだよ」

安易に誤魔化そうとするかのようなレオナルドの言葉に、俺は思わず語気を荒くしてしまう。

だが、レオナルドの方は意に介した様子もなく、それどころか僅かに笑みを見せる。随分余裕のある表情だな、オイ。

「お止めなさいな、レオナルド。いくら子供相手とはいえ、ここは  
椰揄<sup>からか</sup>う為の場ではありませんのよ？」

と、今度は左側の席から、妙に上品な言葉が聴こえてきた。俺は  
振り向いた先にいた発言者の顔を、さっきの書類と瞬時に照らし合  
わせる。

言葉使用と同じで、雰囲気にもどこか貴族らしい上品さが漂う、  
三十代後半の女性。レースの付いた珊瑚色のドレスを着た女性の金  
髪は、これでもかという程の巻き髪になっている。

マーシア・オブリム。それが彼女の名前だ。

「私<sup>わたくし</sup>から質問してもよろしい？」

マーシアは一言そう断ってから、俺に異論がない事を確認し、口  
を開く。

「随分冷静に私<sup>わたくし</sup>たちの思惑を推測しているようだけれど、なぜそう  
思うのかしら？」

「……『ワーズナル』で会ったガラムって奴が言ってたんだ。『首  
都』の元老院は、『精霊石』の存在を意図的に隠してる、ってな。

それに、そのガラムって奴は自分の事を、『<sup>ゴースト・コンタクター</sup>精霊指揮者』っていう  
組織の一員だとも言ってた」

「！」  
「この組織名にも聞き覚えがあるんだよな？ あんたらは」

俺は自分の周囲を見回すようにしながら、逆に元老院の連中を追  
求するつもりでそう言った。

実際俺の言葉を聞いて、連中の顔には僅かだが動揺が見て取れる。  
それがもう、答えだという何よりの証だった。

「あんたらは一体何を隠してる？ 『精霊石』ってのは何だ？ 『<sup>ゴースト・コンタクター</sup>精霊指揮者』ってのは何者だ？ わざわざ俺を呼び出した以上、そ  
れなりの答えを聞かせてもらえるんだろうな！」

いつの間にか俺は、問われる側から問い質す側へと変わっていた。  
訳のわからない奴らに、これ以上振り回されるのは御免だ。俺の  
目的を果たす為にも、こいつらには知ってる事を全部話してもらわ

なきゃならない。

例えばそれが、どんな事実だったとしても。

「話さないと納得しないんじゃない？ 『ギルド』からの報告にあった通り、この子かなり面倒臭い性格みたいだし」

と、どこか気だるそうに発言したのは、マーシアの隣にいる三代中頃の女だった。

長い茶髪を頭の後ろで団子状に纏め、紅紫色のドレスに身を包むこの女の名前は、確かアンリエッタ・プロイツェン、だったはずだ。……って言うか、誰が面倒臭い性格だった？

「アンリエッタさん。いくら何でもそれは言い過ぎです。確かに彼は、言葉使いが悪い人ですけど……」

アンリエッタに文句を言ってるうとしていた俺は、反対側から聴こえてきた大人しそうな声に、思わず振り向いてしまう。

視線の先にいたのは、ハルクの隣に座る二十代後半の女。

肩の辺りまで伸びた石竹色の髪。純白のドレスを着たその女の肌は、他の女二人よりも色白い。妙に胸の辺りの膨らみが目立つのは、恐らくその部分かなり発育しているからなんだろう。

この人が、リーシャ・クロードレス。ハルクに見せてもらった書類上でも、一番最後に見た人だ。

しっかしまあ、これで漸く全員の顔と名前を一致させるに至ったって訳か。人の顔と名前を一致させるのに苦労したのは、多分これが初めてだな……。

「調子に乗るのもいい加減にしろ！」

「！」

内心で辟易していた俺にそうやってきたのは、マーシアやアンリエッタと同じ側の席に座っている、バドアーズだった。

どうやら向こうも向こうで、俺の傍若無人っぷりが相当頭に来てるらしい。バドアーズは怒り心頭といった様子で、射抜くような眼で俺の事を睨み付けている。

「先程から黙って聞いていれば、好き勝手な事をべらべらと……！」



貴様はこの城に『招かれた』のではない！ 『連行』されたのだぞ！？ にも拘らず、テルノアリス王は直々に、貴様のような平民の小僧の言葉に、聞く耳を持ってくださっているのだ！ 王に感謝する事はあれど、そのような不遜な態度を取るとは何事か！ 恥を知れ！！」

「……うるせえな。偉そうに指図してんじゃねえこの」  
「止め給え！」

激昂して立ち上がるバドアーズに、俺が齒向かおうとした瞬間だった。今まで沈黙を守ってきたテルノアリス王が突然声を荒げ、俺たちを制止する。

王が放ったその一言で、混迷を極めそうだった部屋の中が静まり返った。これこそ、王族が持つ独特の覇気というものなんだろうか。「ここは争いの場ではない。議論を行なう為の場だ。バドアーズ。私に対するその篤い忠誠心には感服するが、感情的になればいいというものでもない。そこは反省し給え」

「……ハッ。申し訳ありません」  
王に窘められ、バドアーズは落ち着きを取り戻したように着席する。

それとほぼ同時に、テルノアリス王の眼が真っ直ぐに俺を捉えた。「やはりキミは、我々に対して色々と疑念を抱いているようだね。……確かにキミの推測通り、我々は『精霊指揮者』ゴースト・コンタクターという組織の事を知っている。彼らの狙いが、『精霊』を召喚する事だということもね」

「！」  
まるで自分の罪を自白するかのように、テルノアリス王は続ける。俺が知りたいと願っていた、真実について。

「我々が『精霊指揮者』ゴースト・コンタクターの存在を、彼らの狙いを知ったのには理由がある。全ての始まりは、ある遺跡で発見された『碑文』……。そこに書かれていた内容こそが、我ら元老院が『精霊』の存在を信じようになっただけだった」

朝ご飯を食べ終え、宿を後にしたあたしは、一人で『首都』の大通りを歩いていった。

今現在歩いているのは、街の南側にある『ワグルア』という名の通りだ。

前方に巨大なテルノアリス城の姿を捉えながら、宿から続く通りを真っ直ぐ北上する。たったそれだけの事なのに、あたしの気分は随分浮かれていた。

あまり知らない土地を一人で歩くと、少し不安な気持ちにもなるけど、同時に何とも言えない高揚感が込み上げてくるんだよね。

道幅の広い通りの両脇では、開店準備に取り掛かる店の人の姿が、ちらほらと見える。街の復興もだいぶ進んだみたいだし、あと何週間かすれば、この街は完全に元の姿を取り戻すと思う。

「それにしても、やっぱり『首都』は広いなあ。まだ大通りの方には足を伸ばせてないのに、裏道とか入れたら踏破し切れる気がしないよ」

前はあまりゆっくりと見られなかった分、街のあちこちに視線を巡らせながら、あたしはどんどん先へと進んでいく。

「……そういえばディーン、今頃どうしてるのかな？」

通りを北上していると、どうしてもテルノアリス城の姿が視界に入ってしまう為、あたしはすぐにディーンの事が気になってしまう。

元老院の人たちと直接話すなんて、考えてみれば凄い事のはずなんだけど……。ディーンはそういうのあんまり気にしてない、って言うか嫌がってるよね、むしろ。

また面倒臭そうな顔して貴族の人に怒られてるのかなあ、なんて考えながら、あたしは思わず笑ってしまう。

と、その時だった。

前方のテルノアリス城に気を取られていたあたしは、突然脇道から現れた黒いローブ姿の人物にぶつかってしまった。

「きゃっ！」

思わず尻餅をついたあたしは、そのままその人物の事を見上げてしまう。

特に何の装飾や模様も入っていない、黒いローブを身に纏ったその人物は、フードを目深に被っていて、表情が読み取れないばかりか、性別すら判断出来ない。

何だか不思議な感じがして、しばらくボーっと見つめていたあたしに、その人物はゆっくりと右手を差し出してきた。

「すまないね、余所見をしていたようだ。立てるかい？」

「！ あっ、ハイ！ ごめんなさい、ぶつかったのはあたしの方なのに……」

フードの内から聴こえてきたのは、どこか優しげな男の人の声だった。

あたしはその人の手に引っ張り起こされながら、今更のように謝る。だけど、男の人はあたしの事を責める素振りすらなく、優しい声でこう続けた。

「気にしなくて構わないよ。余所見をしていたのは私も同じだからね。……それにしても」

「？ ハイ？」

「キミ、随分と珍しい力を持っているようだね」

「えっ？」

男の人が何の事を言っているのかわからなかったあたしは、一瞬呆然としてしまう。

「その力をどう使おうとキミの勝手だが、あまり使い過ぎない方がいい」

硬直するあたしに構わず、男の人はあたしの横を通り過ぎながら、まるで忠告するかのようにはななめを向けた。

「さもないと……、『消えて』しまつよ？」

「!？」

最後の言葉に異様な雰囲気を感じて、あたしはすぐさま背後を振り返った。

「だけど。」

「……あれ？ いない？」

ついさっきあたしの横を通り過ぎたばかりのはずなのに、黒い口――ブ姿の人物はどこにも見当たらない。

『消えて』しまつ。

その言葉だけが引つ掛かって、あたしはしばらく、そこから動く事が出来なかった。

### 第三章 元老院（後書き）

今回の章で元老院全員が出て来ましたが、誰が何を発言したのか、ちやんと描けているでしょうか？

キャラの数が多いので混乱するかも知れませんが、最後まで読んでもらえると幸いです。

#### 第四章 均衡を保つ者（前書き）

お待たせしました、第四章です。

何やら色々殺伐とした内容ですが、最後まで読んでもらえると幸いです。

## 第四章 均衡を保つ者

テルノアリス王、ファルディオ・クロスレインの言葉が、静まり返った『王座の間』に響き渡った。

『精霊石』と『精霊指揮者』ゴースト・コンダクター。

その二つの関係性が、一つの事実として浮かび上がろうとしている。

「『契りの証たる六の霊石、彼の地に眠らん。均衡を保つ者、霊石によりて意思を封じ、契りを破らぬ限り、永劫目覚める事なかれ』」

「あ？ 何だよ突然」

突然テルノアリス王が口にした謎の言葉。その意味を理解出来なかった俺は、思わず聞き返してしまふ。

疑問符を浮かべる俺に対し、テルノアリス王は硬い表情のまま続ける。

「大陸の北側に、『グラステッド山脈』という山々が連なっているのを知っているかい？」

「ああ、名前だけならな」

この大陸の地理なら、回った事のない地域でも一通りは頭に入ってる。俺だって、伊達に長い事一人旅をした訳じゃねえっの。

内心で意味もなく胸を張る俺に、テルノアリス王は「ならこれは知っているかな？」と、興味深げに尋ねてきた。

「あの土地には古くから、『精霊』召喚の伝説が多く残っていると  
いう事を」

「！」

思わぬ言葉が出てきた事で、俺は一瞬自分の耳を疑ってしまふ。

『精霊』を召喚しただって？

「だけどそれは、あくまでも伝説だろ？」

「確かにそうだ。だが、そうだった伝説が多く残る土地で、『精霊』の存在を肯定するものが出てきたら、キミはそうやって否定し続け

る事が出来るかな？」

「何だと？」

含みを持たせた王の発言に、俺は眉根を寄せて応じた。が、すぐにある事を思い付いた。

こいつらが、『精霊』の存在を信じるようになったきっかけ。

「……さっき言ってた、『碑文』ってヤツか」

「その通り。『グラステッド山脈』で発見された遺跡の中に安置されていた『碑文』には、こう記されていた」

『後世の者たちへ。我らは「均衡者」と契りを交わし、世界の崩壊を阻止した者なり。後世の者たちよ。我らは願う。そなたらが「均衡者」の怒りに触れ、世界を崩壊させぬ事を。決して彼らの怒りに触れてはならぬ。彼らと我らの契りの証たる霊石に、触れてはならぬ。もしも禁を破れば、世界はすべからく崩壊を迎えるであろう』

テルノアリス王は『碑文』の内容を暗記しているらしく、俺の顔を見つめたまま、妙にスラスラとした口調で語り終えた。

「……よくわかんねえな。どういう意味に捉えりゃいいんだよ？」

「キミなら大体は察しがつくだろう？ なぜならキミは、自らの旅路で少なからず、この『碑文』の内容に触れているんだから」

「あん？」

俺の思考を促そうとするかのような発言に、俺は眉を顰めてしまう。俺の旅路に係る事、だって？

……いや、待てよ？ 言われてみれば確かに、テルノアリス王が最初に口にした『碑文』の言葉の中に、引っ掛かるものがあった。

「六の霊石……。まさか、この『霊石』って……」

「ああ。我々は『精霊石』の事だと考えている。と言うよりも間違いないだろう。現に我々は、六つの『精霊石』の内、五つの所在を確認していた」

「なっ……！？」



状況的に仕方がないとはいえ、今更教えられた事実には俺は言葉を失う。

遺跡に残されていた『碑文』の通りに、元老院は『精霊石』を発見していた。しかも一つや二つじゃなく、六分の五の所在を。

俺が啞然としているのを良い事に、テルノアリス王は平然と続ける。

「我々の見解を述べようか。『碑文』にある『均衡を保つ者』とは、『精霊』の事。『契り』とは、『碑文』を残した者が『精霊』たちと交わした契約であり、『精霊』がこの世に現出しない為の、言わば封印の事。つまり、この『碑文』を残した者が伝えようとしている内容はこうだ」

次に続く言葉を強調する為なんだろう。テルノアリス王は一旦間を開けると、厳しい口調でこう言い放った。

「六つの『精霊石』が破壊されれば、『精霊』がこの世に解き放たれ、世界は崩壊する」

世界が、崩壊する？ 崩壊だって……！？

あまりの話の大きさに頭が付いていかない。って言うか、いくら何でも飛躍し過ぎだ。

混乱し掛かっている脳味噌をどうにか整理しようとする俺を、テルノアリス王は待たない。気にしている様子もなく、話を先に進めようとする。

「だから我々は『精霊石』の存在を隠し、守り続けてきたのだ。何者かの手によって壊されるのを、未然に防ぐ為にな」

「ち、ちよつと待てよ！ 待ってくれって！ あんたらの見解が正しいのかどうかはこの際置いてこう。だけど仮に、『精霊』がこの世に解き放たれたからって、何でそれで世界が崩壊する事に繋がるんだ？」

どうにか会話の流れを押し止めようとする俺に、しかしテルノア

リス王は容赦しなかった。止めと言わんばかりに、追い討ちを掛けるような発言をする。

「キミも『魔術師』なら聞いた事ぐらいあるだろう。『精霊』とは、この世のバランスを保つ存在だと。彼らは言わば、世界の裏側からこの世の均衡を保っている存在だ。それゆえに、無闇に世界の表側へ干渉する事が出来ない。仮にそんな存在が表舞台に現れたら、世界はどうなると思う?」

「……!」

この世の均衡は崩れ、世界その物が崩壊してしまう……、って言うのかよ!?

声に出す事はなかったものの、思わず復唱してしまった程、世界崩壊という言葉が頭の中で、何度も繰り返し再生された。

ついこの間まで、俺は自分の師匠を探す旅をしているだけの、単なる『魔術師』に過ぎなかったはずだ。

それなのに一体俺は、いつの間にこんな大事に関わってしまったんだろう?

「我々としても手は尽くしたつもりだ。『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』なるものが現れても、どうにか彼らを食い止めようとした。……だが、どうやら我々は、後手に回り過ぎてしまったようだ」

軽い衝撃を受けて僅かに動揺している俺の耳に、テルノアリス王の沈みがちな声が聴こえてきた。

何やら不穏な空気を感じて、俺は正面に向かって問い掛ける。

「どういう意味だよ?」

だが、俺の質問に王様は答えない。その代わりにと言わんばかりに、やけに冷静な別の人物の声、俺の耳に響いてきた。

「破壊された『精霊石』の数は、『ワーズナル』の物を含めて、既に五つになっているんだ」

「! 何だと……!?!」

俺は声を荒げて、発言者であるレオナルド・ブレイクの方を睨み付ける。彼は終始冷静な態度である為、ある意味言葉に危機感が感

じられない。

「あいつらが……、ゴースト・コンタクター『精霊指揮者』が全部やったってのか？」

「いいえ、そうではありませんわ」

俺の問い掛けを否定したのは、マーシア・オブリムだった。

彼女の方に俺が視線を向けると、マーシアは真剣な表情で見つめ返してくる。彼女はレオナルドと違い、その口調に多少の焦りが感じられた。

「彼らはいくまで、ある人物の後を継いでいるに過ぎません。彼らが現れる以前にも、『精霊石』を破壊しようと目論んだ者がいたのです」

「誰なんだよ、そのある人物って？」

俺は自分が感じた疑問を、そのまま口にしただけだった。にも拘らず、元老院の誰一人、すぐに答えを返そうとする者はいない。

どれぐらいかの沈黙が続いた後、やがて一人の人物が、重たい口調で言い放った。

「前テルノアリス王、ベルセルク・アドリスター」

「!!!」

その最悪な名前を口にしたのは、元老院の中で唯一、俺と少しばかり繋がりのある男、ハルク・ウエスタインだった。

思わずゆっくりと彼の方を振り向くと、ハルクは厳しい口調でこう続ける。

「今となつてはその名を知らない者などいない。かつて独裁的な栄華を極めた、この大陸の歴史始まって以来の『魔王』だよ」

「リネ？　こんな所で何をしてるんだ？」

ぼんやりとしたまま歩き続けていたあたしは、そんな風に声を掛けられて漸くハツとする。

声のした方を振り向くと、不思議そうな顔をしたジンが立っていた。

「あ……、おはようジン」

「ああ、おはよう。……どうしたんだ？　随分とぼんやりしていたようだが」

ジンに指摘されて初めて、あたしは今自分がどこにいるのかに気付いた。ここって確か、エリーゼさんのお店の近くだよ。昨日の夜も通った道だから間違いないはずだし。

それにしても、あたし一体、どれくらいの間ボーツとしてたんだろ？

さっきの黒いローブ姿の人。あの人の事がずっと気になってるからって、いくら何でも呆け過ぎだよ。こういうのを、心ここにあらずって言うんだっけ……。

多分ジンの眼から見たあたしは、かなり呆然としているように見えただと思う。

心配してくれている様子の彼に対して、あたしは思わず頭を振ってしまふ。

「何でもないよ。ちょっと考え事してただけだから」

「そう、なのか？」

「うん、だから気にしなくても大丈夫だよ。ジンはここで何してるの？」

深く追及されそうな気配を感じて、あたしは内心で必死になりながら、何とか話を逸らそうとする。

さっきの人の事は確かに気になるけど、別に話す程の事でもないような気がして、結局あたしは黙っておく事にした。

ジンはまだ少し気にしてるみたいだったけど、雰囲気察してくれたのかそれ以上何も言わず、あたしの問い掛けに答えてくれた。「エリーゼの所へ行く途中なんだ。あいつに少し相談したい事があるってな」

「そうなんだ。……ねえ、あたしも付いて行っている？ デイーンが戻ってくるまでまだ時間あるだろうし、エリーゼさんに会っておきたいんだ」

「！ ああ、ああ。別に構わないが……」

「？」

ジンはなぜか少し戸惑った様子で口籠ると、僅かに顔を逸らした。……何だろう？ 明らかにジンの様子がおかしい。

そういえば以前、デイーンが言ってたっけ。普段のジンは、こういった表情をほとんど見せる事がないから、少しの変化でも余計にそれが目立ってしまうって。

確かにその通りかも知れないけど、だったら今のジンは、一体何を抱え込んでるんだろう？

「あ、もしかして迷惑だった？」

付いて来られるのを嫌がってるのかな、とも思っただけ、あたしは率直に尋ねてみる。

するとジンは、少々慌てた様子で首を横に振った。

「いや、そういう訳じゃないんだ。ただ……」

「ただ？」

「……」

あたしが首を傾げて問い返しても、ジンは言い出しにくそうに口を噤んでしまう。

もしかして、聞いちゃいけない事だったのかな？ エリーゼさんに相談しに行くって言ってたし、あんまり人に聞かれたくない内容なのかも。

「リネ」

「！ 何？」

そんな風に考え込んでみると、急にジンが意を決したように、真剣な表情であたしの事を見つめてきた。

「デインが帰って来てからでいいんだが、キミに話したい事があるんだ。構わないか？」

「うん、いいけど。どうしたの突然？」

「理由は……、後で話す。とりあえず今は、一緒にエリーゼの所へ行こう」

「？ うん……」

妙に歯切れの悪いジンは、詳しく説明する素振りすら見せずに歩き出してしまふ。

彼の後を追いながら、何かあったのかな？ と考えてみたものの、そう簡単に答えが思い付けるはずもない。

ジンの言う通り、理由を聞くのはもう少し後になりそうだ。

俺は自分の身体が、芯まで硬直するのを感じた。この局面でその名を耳にするとは思ってもみなかった分、受けた衝撃の大きさはかなりのものだ。

ベルセルク・アドリスター。

『倒王戦争』時代、この大陸の頂点に君臨していた前テルノアリス王。

数々の独裁的かつ残虐的な所業を繰り返し、後世においても尚、

『魔王』と呼ばれている存在。

いくら貴族や王族の事に興味がない俺でも、『魔王』の本名ぐらいは知っている。歴史書を捲れば必ず出て来る名前の一つだし、あ

まり戦争当時の事を話しながらなかったミレーナからも、『魔王』の名前は聞いた事があった。

「って言うか、今の発言かなり聞き捨てならねえぞ？」  
『精霊指揮者』が『魔王』の後を継いでるって事は……。

「かつての『魔王』様も、この世界に『精霊』を呼び出そうとしてたつてののか？」

「残念ながらそういう事になる。『碑文』と最初の『精霊石』が発見されたのは、『倒王戦争』が始まる少し前だったからね」

苦笑いを含んで問い掛けると、ハルクは硬い表情でそう答えた。

「しかし、ここまで来たらもう認めざるを得ないな。『精霊』の存在も、『精霊指揮者』がやるうとしていている事も。」

『精霊石』の破壊は、『精霊』を呼び出す為の第一段階。ガラムが言つてたこの言葉も、『碑文』に刻まれてるっていう禁忌そのものと一致する訳だし。

頭の中で情報を整理し続けながら、俺は話を続けるハルクの声に耳を傾ける。

「かつて『魔王』は、『倒王戦争』開始直前に二つの『精霊石』を発見し、その二つを相次いで破壊している」

「って事は、発見された『碑文』の内容を、『魔王』も知つてたつて事だよな」

「ああ。だが彼が全ての『精霊石』を見つけ出す前に、戦争は終結し、彼は敗北した」

「なるほど？」で、それからこの十二年の間に、あんたらは残る四つの内の三つを見つけて隠しはしたものの、『魔王』の後を継いで石を探し始めた『精霊指揮者』に、まんまと見つけられて破壊されちまつたつて訳か」

皮肉っぽく俺が話をまとめると、元老院の連中はまた、不服そうに顔を歪めた。

するとその内の一人、バドアーズ・ガブラッシュが、反論するかのように口を開く。

「確かに、『精霊石』を守り抜けなかったのは我々の落ち度だ。……だが忘れていないか？ 貴様には我々を責める権利などないという事を」

「あ？」

妙に嫌味っぽい口調で話すバドアーズの方を、俺はキツと睨らんでみる。が、彼は意に介さず、平然とした様子で続ける。

「『ギルド』の者から報告は受けているぞ。『ワーズナル』の『グレッグス鉱山』に、我々が隠していた『精霊石』。意図せずにはいえ、その隠し場所まで『精霊指揮者』ゴースト・コンタクターを導いてしまったのは、他でもない貴様自身なのだろう？」

「！ それは」

「違つとでも？」

「……ッ！」

俺は悔しさ紛れに歯噛みしてみるが、確かにそれは事実だ。『精霊石』の事を知らなかったとはいえ、奴らをあの場所まで導いてしまった責任は、状況的に考えて俺にある。

痛い所を突かれて俺が口籠るのをいい事に、最後にバドアーズはこう付け足した。

「自分だけが有利な立場にいると思うなよ、小僧。我々の立場が並ぶ事はあつても、変わる事はあり得んだ」

妙に偉そうな口調で締め括ったバドアーズは、満足気に背凭れに身体を預ける。

全く、やつぱこのおっさんは、俺が最も苦手とする貴族の代表つて感じた。こんな機会でもない限り、一生口を聞こうとは思わない。とりあえずム力つく野郎は放っておこうと思ひ、俺は視線を正面、テルノアリス王の方に向けて口を開く。

「あんたらが言いたかった事は理解した。で、これからどうするつもりなんだよ？ まさかこのまま黙ってみてる、なんて間抜けな事言つたりしねえよな？」

ゴースト・コンタクター

「無論、我々としても『精霊指揮者』ゴースト・コンタクターを止める為に、最大限の努力



をするつもりだ。彼らの目的が『精霊石』の破壊である以上、何としても彼らより先に最後の一つを見つけ出し、絶対に守り抜く必要がある。……そしてその為には、キミの力も必要なんだ」

「回りくどく言わなくていいぜ。要するに、協力しろって言いたいんだろ？」

俺にも責任の一端があるって事に託けやがって。何が、『キミとは友好的関係を築きたい』だ。最初っから俺を顎で使う気満々なんじゃねえか。

「そんなわかりきった事、今更あんたらに言われるまでもねえ。『ゴースト・コンダクター 精霊指揮者』だろうが、『精霊』だろうが、喜んで相手になってやるよ」

俺がそう答えた瞬間、元老院全員のその身を包む冷たい雰囲気が、若干緩くなる。

「だけど勘違いすんなよ」

だからこそ俺はそう告げた。こんな奴らと慣れ合う関係になるなんて、何をどう考えてもあり得ない。願い下げもいい所だ。

再び威圧的な表情を見せ始める元老院たちに対して、俺は真っ向から叫ぶ。

「俺は断じて、あんたらの為に戦うんじゃない。俺が守りたいと思うものの為に、自分自身の意志で戦うんだ！」

こいつらに利用される気なんて毛頭ない。

自分の道を決めるのは、いつだって自分自身なんだから。

すると、俺の態度が気に入らなかつたのか、最後の最後でアンリエッタ・プロイツェンが鼻で笑ってみせる。

「あらあら、随分大層な言い方だ事。ま、こっちとしては、それがどこまで貫けるものか見物だけど」

「かいか 擲<sup>かいか</sup>うのは良くないですよ、アンリエッタさん。子供とはいえ、彼は真剣なんですから」

と、フオーローしているつもりなのか、アンリエッタを窘めるリーシャ・クロードレス。

って言うか、逆にその言葉が余計だったりするんだけど……。

「とにかく、もうこれ以上あんたらと話す事はねえだろ。いい加減俺を解放してくれよ」

「ああ、ちよつと待ってってくれるかいディーンくん。もう一つキミに尋ねておきたい事があるんだ」

「あ？」

審問台から離れようとする俺を呼び止めたのは、ハルク・ウエスタインの声だった。

これ以上何があるんだよ、と思いながら、俺は渋々ハルクの方を振り向く。するとハルクが目配せして、傍らにいた兵士に何やら手渡している。

「実はつい最近、ある調査の段階で手に入った物があるんだけど、それがかなり興味深いものでね。ぜひ、キミにも少し見てもらおうと思っただ」

「興味深い、ね……」

何でいちいち含みを持たせた言い方するんだ、こいつら？ 言いたい事があるならハツキリ言えっつーの。

兵士はハルクから手渡された物を、随分丁寧に俺の許まで運んできた。その動作がやけにゆっくりとして少タイラついた俺は、差し出された物を半ば無理矢理取り上げる。

俺が兵士から乱暴に奪い取ったのは、一枚の古びた写真。大人数人と子供十数人が、どこかの集落らしき場所で撮ったものようだ。「これが何だつてんだよ？」

怪訝な顔で俺が尋ねると、ハルクは落ち着いた表情で言い返してくる。

「写真の左側。一番最初の列の端に写ってる人物に、心当たりがあるんじゃないかい？」

「あん？」

ハルクに促され、俺は言われた通りの部分に何気なく眼をやる。

写真には横一列に並んだ七、八歳の少年少女たちが、楽しそうな

笑顔で写っている。

その最初の列の、一番左端。そこに写る人物を見た瞬間、俺の身体が硬直した。

「！　これって……！」

列の左端に写っている、とある少年と少女。俺はその二人の顔に見覚えがある。いやそれ以上に、よく見知った顔だった。

「ジェイガと……、リネ！？」

今より少し幼く見えるが、恐らくジェイガの方は間違いない。写真に写る奴の表情は、今まで遭遇した時には見せた事もないような、優しい笑顔を浮かべている。

そのジェイガの隣で、同じく優しい笑顔を浮かべて写る、黒髪の少女。

どこからどう見ても、普段俺がよく眼にしている少女、リネ・レディアにそっくりだ。

「その写真を見て、キミはどう思う？」

写真から目を離せないでいる俺に、ハルクは続ける。

その声と口調は、重みのある真剣さを纏っていた。

「その写真はね、指名手配犯、ジェイガ・デイグラッドの身元を調べている最中に手に入れた物だ。そしてその写真に写っている集落は、恐らく彼の故郷だと思われる。そんな場所で撮られた写真に、なぜキミの旅の同行者、リネ・レディアが写っているんだろっね？」

「……何が言いたい」

彼が何を言おうとしているのか、大体の察しが付いた俺は、漸く写真から眼を離し、ハルクの顔を睨み付ける。

するとハルクは、俺から眼を逸らすかのように、一瞬だけ瞳を閉じた。

「そうか、キミは回りくどい言い方が嫌いなんだったね。では率直に結論を言わせてもらおう」

俺と見つめ合う形になったハルクは、今度こそ視線を逸らさず続ける。

俺自身も予想してしまった、最悪の結論を。

「我々はリネ・レディアを疑っているんだよ。もしもその写真に写る人物が本人たちなら、リネ・レディアは指名手配犯ジエイガ・デイグラッドと、個人的な深い繋がりを持っているのではないか、とね」

#### 第四章 均衡を保つ者（後書き）

伏線を徐々に明らかにしているつもりなのですが、上手い事行ってますかね？

というかここ最近、バトルから遠ざかりっ放しですがw w

あともう少しでバトル展開を入れるつもりなので、楽しみにしている方は待っていてください。

ミレーナさんもちゃんと出て来るからね！w

第五章 忍び寄る魔の手 - The conductor - (前書き)

お待たせしました第五章、そして『フレーム・ウォーカー』通算6  
0 部目です。

以前どこかで言った通り、文字数の多さが完全に『テルノアリス編』  
の二の舞になっっていますww  
飽きずに読んでもらえるかどうか、不安で仕方ない…… (ガクブル)

テルノアリス城一階。城外へ続く長い廊下を一人で歩きながら、俺は一人思い悩んでいた。

元老院から漸く解放されたつてのに、清々しさなんてこれっぽっちもない。むしろ審問を受ける前より、若干気分が沈んでいる。

その理由は言うまでもなく、解放直前に尋ねられた内容が原因だった。

幼い頃のジェイガが、リネらしき少女と一緒に写っている写真。

その写真の存在によってあいつは、リネは今、元老院からあらぬ疑いを掛けられている。

恐らく彼女自身、そんな事予想すらしていないだろう。

話を聞いた俺ですら、寝耳に水だったんだから。

「 そんな馬鹿な事ある訳ねえだろ！」

ハルクの、いや元老院全員のくだらない考えを、俺は真っ向から否定した。

リネがジェイガと個人的に繋がってるだつて？ 馬鹿馬鹿しい！

何勝手にあいつの事を犯罪者みたいに扱おうとしてんだ！

「 あんたらだつて知ってるはずだ！ あいつは……、リネは『妖魔』一族の生き残りで、この街がアーベントに襲われた時には、自分の身を犠牲にしようとしたんだぞ！？ そんな人間が犯罪者と通じてるなんて、あんたらは本当にそう思ってるのかよ!？」

憤慨する俺に対し、ハルクは躊躇うような表情を見せた。

すると彼の態度を見兼ねたように、レオナルドが代弁を始める。

「 もちろん忘れてなどいない。お前が今言った通り、あの少女は例の事件の際、初めてその存在を確認された人間だ。彼女が我々に敵対し得る理由こそ、探るのが困難だろう」

「だったら」

「だが、だからと言って疑いが全て消え去る訳じゃない。どんな人間にも裏の顔というものはある。俺やお前、そしてあの少女にもな」  
「んだとオ……ッ!？」

完全に頭に血が上っていた俺は、レオナルドの言葉を上手く飲み下せなかった。感情の赴くまま、俺は審問台から離れ、レオナルドに詰め寄ろうとする。

が、そんな俺の行動が制止されないはずがなかった。

レオナルドに詰め寄ろうとした瞬間、俺は左右両側から、室内にいた兵士二人に取り押さえられてしまう。

「無様だな。そうやって激情に任せて行動する事しか出来ないとは……。かの『英雄』の弟子の名が泣くぞ」

「てッ、めえ……ッ!」

「落ち着いてくれ、ディーンくん！ お前も止めるレオナルド！  
ここで彼を刺激してもどうにもならないだろ？」

ハルクはかなり必死な様子で、暴れようとする俺と涼しい顔のレオナルドを窺める。

そんな彼の表情を眼にした俺は、胸の内に蟠りわたかまを残しつつも、どうにか身体から力を抜いた。

癩な話だが、ここで俺が手を出してしまえば、それこそ取り返しのつかない事になる。

折れると言うなら折れてやるさ。以前ジンに言われた通り、俺はもう、一人で旅している訳じゃないんだから。

「とにかく我々が知りたいのは、ジェイガとその写真の少女の関係だ。仮にその少女がリネ・レディア本人なら、彼女を通してジェイガ・デイグラッドの過去を探る事が出来るかも知れない」

兵士から解放された俺は審問台に戻りつつ、ハルクの言葉の端から、元老院の狙いを読み取った。

「……要するにあんたらは、この写真の真偽を、俺の口から直接あいつに問い質せって言いたいんだろ？」



不服に思いながら誰にともなく告げると、待つてましたと言わんばかりに、バドアースが口を開く。

「無論、我々がリネ・レディア本人を審問しても一向に構わんのだが、彼女と親しい仲である貴様が問い質した方が、嘘や偽りを述べられる可能性がより下がるのではないか？」

「！」

こいつら……ッ、そこまでしてリネを疑おうつてのか！

全く、どこまでも気に喰わねえ連中だぜ。

「頼めるのかな？ デイーン・イアルフスくん」

腹立たしく思う俺を尻目に、正面から響いてくるテルノアリス王の声。

頼めるのかつて、例え俺が断つたつて結果は同じだろ？ 単にリネを問い質す相手が変わるだけだ。こいつらの前にリネを連れて来るくらいなら、迷わず俺は自分で問い質す方を選ぶ。

そんな風に思いながら、俺は渋々、テルノアリス王の言葉に返事をしておいた。

「……ヘイヘイ。テルノアリス王の仰せのままに」

と、最後の最後で嫌味全開の返事をした俺は、もちろんその後五分程、俺の態度に憤慨したバドアースと、何とも愚かな口論を繰り広げる事になった。

で、漸く『王座の間』から脱出した俺は、とりあえず城を出る為に一階に下り、城門のある方向へと歩いている訳だ。

「……うーん。でも何か引っ掛かるんだよなあ、この子」

元老院から預かった例の写真を見つめながら、俺は頭の上に疑問符を浮かべる。

写真の中の黒髪の少女。その少女の顔を見る度に、なぜか俺は首を傾げてしまう。

少女の隣にいる幼い頃のジェイガは、間違いなく本人だと確信が

持てるのに、どういふ訳か少女の方は、『間違はなくリネ本人だ』  
という確信が持てない。

あいつを庇いたいからそんな事を思ってしまう、って訳じゃない  
……と思う。

そういうのとは別に、なんて言うかこう、俺が普段見てるリネと  
は何かが違う気がする。だけどそれが何なのかがわからない。

本人が今眼の前になれば、その何かがわかると思うんだけどなあ。  
「あいつ今頃どうしてんだろ？ 大人しく宿で待ってる……訳ねえ  
か」

一瞬芽生えた希望的観測を、俺は即座に否定した。

あの好奇心旺盛なりネの事だ。どうせ早い内に宿を出て、探検気  
分でその辺ウロウロしてるんじゃないのか？

容易に想像出来てしまう有り得そうな場面に、俺はやれやれと思  
いつつ、城の玄関となる大広間から外へ出ようとした。

するとその時。

「デーンくん」

「！」

背後から俺を呼ぶ声がして、俺は立ち止まって振り返る。が、そ  
うする前から声の主が誰なのかは予想が付いていた。

腰の辺りまでありそうな長い金髪に、知的な雰囲気醸し出す金  
色の瞳。別れたのは昨日の夜だというのに、俺はその姿を見るのが、  
何だか久しぶりな気がしてしまった。

「おつす、ミレーナ。貴族様方の優雅な雰囲気は堪能出来たか？」

俺が悪戯っぽく笑ってそう言うと、ミレーナは「おはようデーン  
くん」と言った後で、苦笑しながら僅かに首を横に振る。

「うーん、微妙な所かしら。こんな事言っちゃいけないんだろうけ  
ど、少し肩が凝った気がするわ。確かに部屋は豪華だったけど、あ  
の雰囲気には慣れそうにないわね」

「！ 八八ッ、そうだろうな。昔のあんたもよくそう言って、貴族  
の豪華な装いとか雰囲気を毛嫌いしてたよ」

「えっ？」

記憶を失ってはいても、彼女の根っこの部分は変わってない。それに気付いた俺は、つい嬉しくて笑ってしまう。

すると、ミレーナは驚いた表情をしつつも、どこか照れ臭そうにクスツと笑い返してくれた。

「ところで、元老院との謁見は終わったの？」

と、ミレーナに尋ねられた事で、俺は笑った表情のまま一瞬固まった。

さっきまでのあれやこれやが胸の内から湧き上がってきて、酷く気分が落ち込んでくる。

「……一応、な」

俺は口から無理矢理吐き出すみたいに、短い言葉を言い放つ。気分が落ち込んでいる、というのもあったし、素直に疲れたというのもあった。

だが、さっきまでのある意味濃密だった時間を思えば、漸く解放された今のこの時間は、素晴らしい程穏やかさに満ちている。多分これ以上を求めるのは贅沢なんだろうな。

と、そんな俺の心境を表情から読み取ったのか、ミレーナは申し訳なさそうに言ってくる。

「あ、もしかして聞かない方が良かったかしら？」

「いや、まあ大丈夫だから。ってか、ミレーナの方こそここで何してんだ？ フォードは一緒じゃないのか？」

話を逸らす意味でも尋ね返してみると、ミレーナは一瞬、困ったような表情を見せた。

「ああ、それがね。どうも私たち、この城から出る事を禁じられるらしいの」

「は？」

微妙に話が噛み合っていない気がして、俺は思わず首を傾げて聞き返してしまう。

いや待てよ？ 城から出る事を禁じられてるって……。

「もしかしてそれ、元老院からの命令だったりすんの？」

「ええ、そうみたい。まだ私たち『四人』は護衛対象として扱われているから、許可が下りるまでは勝手に外を出歩けないらしくて、フオードも部屋に籠りっ切りなの。私は気分転換を兼ねて、城の中を歩いて回ってる最中なんだけど」

「ちょ、ちよつと待った。『四人』って事は、昨日言ってた通り、他の二人の『英雄』に会ったのか？」

未だに行方のわからないノイエ・ガルバドアを除いた、四人の『英雄』。この大陸の歴史を変えた四人が一堂に集結している場面は、恐らくそう何度も見られるものじゃない。

正直な所、俺もその場面を見てみたいと思う。これはミレーナの弟子になった時からずっと、密かに願っていた事でもあるんだから。

「ええ。昨日の夜、デインくんたちと別れた後すぐにね。何だったら二人に会って行く？ 多分バルベラもランザも、この城のどこかにいるはずよ」

「あゝ、そうしたいのは山々なんだけど、ちよつと野暮用があつてさ……」

そう。見てみたいとは思ふものの、生憎今の俺にはやる事がある。俺は右手に持ったままだった例の写真を、ミレーナに見えないようにズボンのポケットへと隠した。

彼女は俺が写真を持っている事にも気付いていないようだが、リネに尋ねる内容の事も含めて、彼女には黙っておこう。城から出る事を禁じられている今だと、彼女にリネの件を教えても、余計な心配をさせてしまうだけだしな。

……って、そうだ。もう一つ肝心な事を忘れてた。

「なあミレーナ。実は俺、あんたに会わせたい人がいるんだけど、いいかな？」

「会わせたい人？」

訝しそくに首を傾げるミレーナに、俺は諭すように会話を続ける。

「ホラ、『サランドロ』を出た時に、馬車の中で話してただろ？  
ジンの友達で、エリーゼって奴なんだけど」

「……………！ ああ、そういえば話してたわね。でも、どうしてその人を私に？」

どこか興味深げに尋ねてくるミレーナに、俺は笑って、わざと勿体ぶった言い方をする。

「詳しい理由は連れてきた時に説明するよ。だからそれまで、大人しく待っていてくれよな」

『首都』の東側、『ジェニック通り』の一角にエリーゼが構える店、『ライム』。

店の軒先には、店名を掲げた表の看板以外、特に目立った物が置かれておらず、初めて彼女の店を訪れた際、俺はそこが何の店なのかわからなかった。

だが、後でジンから聞いた話だと、『ライム』が占いの店だと知っている人は結構多く、エリーゼに色々なアドバイスをもらう為、よく店を訪れるらしい。まさに知る人ぞ知る隠れた名店、ってヤツだ。

「あつ！ お帰りデーン！」

もう既に店への行き方も覚えてしまった俺は、特に迷いもせず『ライム』に辿り着いた訳だが、店の入り口を潜った所で俺は一瞬間まってしまう。

なぜなら、店に入った俺を出迎えたのは、やけに楽しそうな顔をしたりネだったからだ。

「……何でお前がここにいんだよ？　つーか何してんだ？」

「トランプのゲームだよ。エリーゼさんに遊び方教えてもらってる途中なんだ」

「トランプって……、今やってるそれ、どう見てもポーカーじゃねえか」

リネは両手で、それぞれ絵柄と数字の入った五枚のカードを持って、楽しそうに椅子に座っていて、テーブルを挟んで対面に座っている占い師・エリーゼも、リネと同じように五枚のカードを持ち、どこか真剣な眼差しでカードを見つめている。

「お帰りデーン。遅かったわね」

エリーゼは自分の手札から眼を離さず、ほとんど投げやりな感じでそう言ってきた。

「遅かったわね、じゃねえよ！　人が苦勞してる間に何して遊んでんだお前は！？」

俺が不満を口にした所で、漸くエリーゼはカードから眼を離し、俺の顔を見つめてくる。

「いいでしょ別に、暇だったんだから。　それより知ってた？」

リネさんったらポーカーするの初めてなのに、信じられないくらい強いのだよ！」

「それよりって、お前な……」

俺はやや呆れつつも、リネの後ろから、チラリと彼女の手札を覗いてみた。すると確かにエリーゼの言う通り、リネは引き運が強いのか、手札にはかなり強い手が揃っている。

……って言うかいいのかよ、占い師が賭け事に使うようなゲームやっても？

「で？　何でお前はここにいて、エリーゼと一緒にポーカーをやってる訳？」

俺が再度問い掛けると、リネは自分の手札から眼を離し、無邪気な顔で俺の方を仰ぎ見た。

「デーンに置いて行かれた後で街を歩いてたら、エリーゼさんの

お店に向かう途中のジンと偶然会ったの。で、一緒にここに来て、ポーカーを教えてもらってたんだ」

置いて行かれたって、起こしに行ったのにお前が起きなかっただけじゃねえか。

と、心の中で愚痴りつつ、とりあえず俺は会話を続ける。

「一緒に来たって言うけど、その当の本人はどこに行ったんだ？」  
四角い形をした店内を見回しても、銀髪の少年の姿は見当たらない。

すると、俺の視線に気付いたエリーゼが、店の軒先の方を見やりながら言い放つ。

「さっきまで私たちと一緒に遊んでただけけど、あなたが遅いからって様子を見に行ってたわよ。多分もうそろそろ帰ってくるんじゃないかしら？」

何だ、じゃあ入れ違いになっちまったのか。そりゃ気にしてくるのは嬉しいけど、まさか城の方に向かってたりしねえよな？  
……まあ、ジンには特に用事がある訳でもないし、エリーゼがあ言っなら、そこまで気にする事もないか。

「それでどうだったの？ 元老院との謁見は」  
「！」

エリーゼの何気ない言葉が、関係ない方向に傾いていた俺の思考を、どうにか軌道修正してくれた。

リネがここにいるなら丁度いい。元老院からの用事を済ませてしまっ、絶好の機会だ。

「リネ、ちよつといいか。お前に話したい事があるんだ」

「え？ デイーンも？」

俺が真面目な雰囲気を出している事を察したように、リネは持っていたカードをテーブルの上に戻した。

「って、ちよつと待て。」

「『も』ってどういう意味だ？」

俺が眉根を寄せると、リネ自身も、どこか不思議そうな顔で答え

る。

「それがね、さっきここに来る前、ジンにも同じような事言われたの。話す内容はディーンが帰って来てからでいいって言われたんだけど……」

「ジンが？」

話の端から妙な雰囲気を感じ取って、俺は僅かに押し黙る。あいつもリネに話があるだって？

一体何だろう、と考え込もうとした瞬間、俺の背後で店の扉が開く音がした。振り返ると、内開きの扉を開けて立っていたのは、妙に妙な面持ちをしたジンだった。

「ディーン。帰ってきてたのか」

俺の顔を見るなりそう言い、ジンは扉を閉めて、店の中に入ってくる。

「おう、ついさっきな。　って言うかジン。　たった今聞いたんだけど、リネに話したい事があるんだって？」

「！　ああ、その通りだ」

一瞬ジンの表情が強張ったように見えたのは、俺の気のせいなんかじゃない。彼はどこか躊躇いつつも、真剣な表情でこう続けた。

「……だがもう、俺の口から話す必要はなくなった」

「あん？　どういう意味だ？」

「俺がリネに話そうとしていた事はディーン、お前が彼女に話そうとしている事と同じ内容だからだ」

「！」

俺と同じって事は、まさかジンもあの写真を見たのか！？

思わず困惑してしまう俺の眼に映った、ジンの真剣な表情。そこから読み取れる、彼の心情。

……間違いない。どうやらジンは、俺より先にあの写真の存在を知っていたようだ。

「えっと……、何の話してるの？」

この場を包むやや重たい空気を、リネは敏感に察知したらしく、



不安そうに俺の顔を覗き込んでくる。

意を決し、俺は自分がテルノアリス城で見聞きした全ての事を、リネ、ジン、エリーゼに話して聞かせた。

もちろん、元老院から預かった、例の写真をテーブルの上に差し出しながら。

「……何、これ」

事の経緯を説明し、例の写真を見せると、リネはどこか弱々しくそう呟いた。

俺とリネ、それにジンとエリーゼを交えた四人で話す事三十分程。彼女に経緯を説明する過程で話した感じだと、どうやら俺の読みは当たっていたらしい。

ジンは昨日の段階で、ハルク・ウエスタインから元老院の見解を聞き、この写真の事については、俺がリネに直接話すまで傍観する事に決めていたそうだ。

「だが実際、リネに尋ねられた時にも迷いがあったのは事実だ。お前の事を待たずに、聞いてしまいそうになったよ」

そう言っただけでジンは自嘲気味に苦笑する。多分それだけ、ジンにとっても今回の件は衝撃が大きかったんだろう。

「それでどうなんだ？ お前、この写真に見覚えあるのか？」

俺が率直にそう尋ねると、リネは無言で首を横に振った。彼女が若干俯いているのは、事の重大さに驚いているからなのか、それとも……。

「……ディーンも、あたしの事疑ってるの？」

「！」

リネはゆっくり吐き出すみたいに呟くと、不安そうな眼で俺の方を見つめてきた。

疑われているという事実が、彼女の心に不安を齎している。今の表情が、それを表す何よりの証拠だ。

「バカな事言ってるじゃねえよ。俺だって、お前がこんなくたない嘘をつくような人間じゃないってわかってるさ。ただ確認したいから聞いてるだけだ」

「……うん」

しょんぼりした様子で頷くリネは、俺の言葉だけでは不安が拭い切れないのか、まだ少し元気がない。

まあ当然だよな。身内に疑われる事程、辛い気持ちになる事なんてないだろう。俺だってリネやジンから疑われたりしたら、結構傷付くと思うし。

「ねえティーン。その写真、私にもよく見せてくれない？」

「え？ ああ、いいけど」

妙に興味深げなエリーゼに催促され、俺は彼女に例の写真を手渡した。

写真を受け取ったエリーゼは、まるで写真に写る人物と睨み合いでも始めるのかと思う程、ジッと写真に見入ってしまう。

俺たち四人の間に訪れる、暫しの沈黙。

と突然、写真から眼を離れたエリーゼが顔を上げる。

「この写真の女の子、リネさんとは別人じゃない」

「えっ？」

エリーゼはいきなり、しかもかなり自信ありげに、そんな風に口走った。一体どこからそんな自信が湧き上がってくるんだよ？

「根拠はあるのか？」

俺の思いを代弁するかのようになり、ジンが冷静な口調でエリーゼに問い掛ける。

すると彼女は、なぜか呆れたような表情で俺とジンを交互に見つめてきた。

「……あなたたち、もしかして気付いてないの？」

「はい？」

打ち合わせなしで声が揃った俺とジンに対し、エリーゼは深い溜め息で応じる。彼女の表情はまるで、この程度の事にも気付かないなんて情けない、と言っているようだ。

「よく見てみなさいよ。この写真の女の子、確かにリネさんに似てはいるけど、瞳の色が違うでしょ？ それに左眼の下。泣き黒子があるのに気が付かない？」

写真を俺やジンの方に差し出しながら、諭すようにエリーゼは言う。

俺は写真を受け取ってから、ジンと一緒にもう一度、問題の少女の顔をよく観察してみた。

そして漸く気付く。俺が感じた違和感の正体はこれだったんだ！写真の少女の顔には、エリーゼの言う通り確かに泣き黒子があるのに対し、リネの顔には黒子というものが一切ない。それに瞳の色も、写真の少女は薄茶色であるのに対し、リネの瞳は黒一色だ。

「つまり、この写真の少女はリネに似ているだけで、全くの別人という事か？」

「まあ、リネ本人にも覚えがない時点で、その可能性の方が高いよな」

「って言うより、あなたたちならこの程度の事、すぐに気付いてもいいはずよね？ ジンは仕方ないとしても、ディーンはリネさんと長い時間過ごしてるんだから」

「……面目ない」

エリーゼは思ったよりも、俺やジンがこの事実気付かなかった事に憤慨しているらしい。説教のような言葉を浴びせられたのはむしろ俺の方なのに、なぜかジンまで一緒に謝ってくれた。

「だがそうになると、この写真の少女は一体誰なんだ？」

エリーゼに向かって若干頭を下げていたジンは、頭を上げつつそんな疑問を口にした。

確かにジンの言う通り、俺もそれが気になる。

僅かな違いを見逃せば、それこそリネと瓜二つな写真の少女。こ

の少女がジェイガの関係者だと考えている元老院は、顔の特徴が違うという理由だけでは、恐らくリネへの疑いを晴らしはしないだろう。

リネの無実を証明する為には、この少女がリネとは別人だという証拠が必要だ。それこそ、連中に有無を言わせない程決定的な物が……そういえば、『紺碧の泉』アジュール・ファウンテンでジェイガに初めて会った時、あいつはリネの顔を見て、酷く動揺していた事があった。

もしあれが、リネと写真の少女を重ね合わせていたからだだったとしたら。ジェイガは写真の少女の事を、よく知っている可能性がある。

という事は、だ。

「やっぱりあいつをとっ捕まえて吐かせるのが、一番手っ取り早い方法か……？」

他の三人には聴こえないように呟いた俺は、もう一度熟考してみる。

確かに良い方法だとは思いつけど、とっ捕まえる以前に、あいつ自身の居場所がわからない。

ジェイガは恐らく、今もどこかで自分の師匠、ノイエの行方を追っているんだろう。全く、師弟揃って居場所がわからないなんて、探す方の身にもなれって。

「！ 待てよ？ こっちが先にノイエを探し出す事が出来れば、それを餌にしてあいつを誘き出す事が出来るんじゃないやねえか？」

これが上手く行けば、あいつを捕まえる機会が生まれるし、なおかつ写真の少女の事を直接聞く事だって出来る。やっぱり鍵になるのは、ノイエ・ガルバドアの行方だ！

「エリーゼ！」

「なっ、何よ突然？」

今度こそ大声を張り上げた俺に、エリーゼはかなり驚いた様子で聞き返してくる。

全ての鍵は、ノイエの行方。辿り着いた結論を胸に、俺はもう一

度エリーゼに頼み込む。

「今から一緒にテルノアリス城へ向かってくれ！ 昨日言った通り、『英雄』たちの力を借りて、ノイエの行方を探りたいんだ！」

デインさんと別れてから、どれくらい経った頃。外出を許されていない私は一人で、暇潰しに城の敷地内を散策していた。

『テルノアリス城』の敷地面積は、予想通りかなり広いらしい。

上空から見る事が出来ればわかるらしいけど、この城を囲む城壁は、『首都』全体を囲む外壁と同じように、整った正方形型に造られているようだ。

白い煉瓦で強固に造られた、高さ五メートル程の城壁。その内側には、外観を損なわないようにする為なのか、綺麗に手入れの行き届いた背の短い草木が、石畳の道の両側に沿うようにして、あちこちに設置されている。

それにあらゆる設備が成されているのは、何も外部だけじゃない。デインさんに聞いた話だと、貴族が住まう空間の他に、『修練場』と呼ばれる鍛錬の場となる空間もあるらしく、彼も一度、そこを使用させてもらった事があるようだ。

素直に感服してしまう程の、圧倒的な敷地の広さ。何かから何まで揃っているのは、やっぱりこの城自体が、貴族の住まう場所だからなんだろうか。

「あら？」

そんな風に思いつつ、城壁の内側近くを歩いていたら時だった。

不意に私は、変な違和感を感じて立ち止まる。

「……？ 地面が、揺れてる？」

と言うより、何かの振動が伝わってきているのだろうか？ すぐ傍にある白い煉瓦の城壁が、微かに震えているように思う。

それに何だろう？ 壁の向こう側から、何かを叩き付けるような重たい音が響いて来てる気がするんだけど……。

不思議に思い、私が城壁の方に歩み寄ろうとした、その時だった。

突然一際大きな轟音が響いたかと思うと、数メートル先の城壁の一部に、巨大な亀裂が蜘蛛の巣のように広がって、砕けた煉瓦が爆音と共に敷地内に飛び散ってきた。

「なっ!?!」

驚きのあまり数歩後ろに下がった私の傍を、巨大な瓦礫と化した城壁の一部が、まるで紙屑のように軽々と転がっていく。

それにしても、今のは何？ 城壁が爆発したの!?!

「ミレーナ様、お下がりにください!」

「!」

眼の前の出来事に私が呆然としてみると、騒ぎに気付いた巡回中の兵士三人が駆け付け、私の事を庇うように前へと進み出た。

とはいえ、彼らも突然の出来事に困惑しているらしい。私を庇ってくれてはいるものの、三人ともかなり浮足立っているのが容易にわかる。

「一体何が」

と、兵士の一人が言い掛けた瞬間だった。

ビュゴォツという、何か風を切る音が聴こえた直後、グチャリという、トマトを握り潰した時のような不快な音が続け様に聴こえた。

「……え？」

一瞬、何が起きたのかわからなかった。

だけど不快な音が聴こえた方向に眼を向けた事で、私の脳が遅れ

て状況を理解する。

城壁を抉るように出来た三メートル程の巨大な穴。未だに粉塵が舞っていて視界がハッキリしないその穴の奥から、突如として飛来した鎖付きの巨大な黒い鉄球が、私の傍らにいた兵士の身体を押し潰していた。

地面に倒れる兵士の胸の中心には、黒い鉄球が深々と突き刺さり、胸部の肉が抉れ、砕けた肋骨が肌を突き破って露出し、血管が破れたのか、鮮やかな色の血液が止め処なく流れ出ている。

「ッ!？」

すぐさま私は、見るべきじゃなかったと後悔した。

視線を逸らして口を手で押さえる。気分が悪い所の話じゃない。胃の中のありとあらゆる物を吐き出してしまいそうだ。

「う……っ、うわあああああ!？」

身体中を駆け巡る気持ち悪さと必死に格闘している私の傍では、残った二人の兵士が腰を抜き、恐怖を浮かべた顔で地面を転がり回っている。彼らも恐らく、今の惨状を見てまともな思考回路を働かせられないんだろう。

と、その時だった。

「おやあ？ こりやまた意外な奴と出くわしたモンだなあ」

今の状況に場違いな程陽気な声が、粉塵の晴れ始めた穴の向こうから聴こえてきた。

その声を聞いた瞬間、私は穴の方に視線を向けてしまう。その陽気な声と口調に、心当たりがあつたからだ。

「お前さんの顔を見るのも、『ワーズナル』の時以来か。そんな久しぶりって訳でもないんだろうが、元気にしたか？」

橙色のバンダナを頭に巻き、右頬に十字架のような形の刺青をした、二十代後半の男。

ガラム・ドラゴドム。それがこの男の名前だったはずだ。

「またお前さんに会えるとは、正直思ってたぜえ？ なあ、ミレーナ・イアルフス」

冷笑でも嘲笑でもない。私に会った事を心から喜んでいるかのよう  
うに、膝をつく私を見つめて、ガラムは快活に笑ってみせた。

店で話した結果、俺たちは四人で城に向かう事を決め、早速『ラ  
イム』を後にし、城への道を歩いていた。

だが俺は、朝方よりさらに人の数が多くなった大通りを歩いてい  
る内に、妙な違和感を覚え始める。

そんな俺とは対照的に、リネ、ジン、エリーゼの三人は、『それ』  
に気付いていないらしい。

「……………」

不可思議な胸騒ぎのようなものに胸の内を駆り立てられ、俺は辺り  
を見回してみた。

今の所、眼に見える異変は起きていないように思う。

だが違う。確実に何かが変わっている。

街の風景や人の多さが、じゃない。この街全体を包む空気が、だ。  
眼に見えない何か、軽く肌を刺しているかのような、ピリピリ  
とした感覚。氷に素手で触れているかのような、身の震える冷たい  
感覚。一体これは何なんだ？

「どうしたのデーン？」

立ち止まって虚空を見つめる俺に、少し遅れて立ち止まったりネ  
が、不思議そうに尋ねてきた。その傍らには、訝しそうな表情をし  
たジンやエリーゼもいる。

と、その時だった。



まるで地面を這う波のように、俺たちの足下を燈色の光が、瞬間に駆け抜けて行った。

「なっ、何？ 今の光？」

驚きと不安に満ちた顔で、光の波が駆け抜けて行った先をリネとエリーゼは見やる。

だが俺とジンは違った。彼女らとは対照的に全く逆、光の波が流れてきた方向に、瞬時に眼を向けていた。

多分俺たちは今、互いに同じ事を考えているんだろう。

「ジン、気付いたか？」

「ああ。門外漢の俺でもわかる」

俺の問い掛けにジンは軽く頷き、続けてこう言った。

「今の光は、『魔術』によって引き起こされたものだ」

「えっ!?!」

リネとエリーゼは声を合わせ、訝しそうな表情で俺たちの方を振り向く。

すると次の瞬間、ジンの考えが正しいと証明するかのようになり、またしても異変が起きた。

俺たちの周囲。綺麗に造り込まれた石畳の道のあちこちから、黄土色をした粘土質の液体のようなものが、次々と現れ始めたのだ。

「なっ、何なのよこれ!?!」

戸惑いの声を上げるエリーゼと違って、俺は眼の前の現象がどういふものなのかを、瞬時に予測する。

「俺の考えが正しければ、これは複数の『ゴーレム』を造り出す為の『大規模魔術』だと思う。多分『首都』全域で、さっきの光が走った場所から順に、ここと同じような現象が起きてるはずだ」

「! デイーン、周りを見る!」

ジンがそう叫んだ所で、俺は思わず眼を睜みはった。

辺り一面、石畳の道の至る所に張り付いている黄土色の液体。その全てが、粘土のようにグニャグニャと不気味な伸縮を繰り返し、見る見る内に人のような形を成し始める。

「!？」

出来上がった人型の銅像のような物を見た瞬間、俺は思わず顔を顰めてしまう。

眼の前の物体を人間に例えて言うなら、その大きさは大体一七〇センチメートル程。全身が石膏で出来ているかのようなツルツルとした質感で、腕や脚、胴体もしっかりと人間の形をしている。

だがその半面、顔の部分には人間らしい骨格を表す凹凸があるものの、瞳は硬く閉じられていて、鼻や口は呼吸する為の穴が開いていない。

顔があるのに表情がない。眼の前の物体は人の形をしていても、人間じゃないし生物でもない。

『魔術』で造り出された、不気味な人形だ。

「こいつら、一体」

「避けるデイン！」

「！」

警戒を怠っていた俺の右側から、突然人形が襲い掛かってきた。

ジンの叫びで何とか反応出来た俺は、掴み掛かって来ようとした人形の右腕を左腕で防御し、即座に右膝蹴りを人形の腹に叩き込んだ。

一瞬膝に硬い感触が伝わった後、人形の身体がくの字に折れて後方に吹き飛ぶ。

「そうか……、考えてみれば当たり前だよな。『魔術』で造られているって時点で、こいつらは明らかに友好的な存在じゃないんだっただけだ。『魔術』とは、人を殺す事にのみ特化した技術だ。今更ながらそれを再確認した俺は、自嘲気味に笑ってしまう。

すると周囲の光景に眼を奪われていたエリーゼが、困惑した様子で俺に言い放った。

「ちょっと待って！　これが『魔術』によって引き起こされているものだって言うなら、まさか……！」

「ああ。今また誰かに狙われてるんだよ、『テルノアリス』がな！」  
俺がそう告げると、エリーゼは一転、声の出し方を忘れてしまったかのように絶句する。

あの『テルノアリス襲撃事件』からまだ、たった三週間程。それぐらいの時間しか経過していないにも拘らず、まさに今この瞬間、新たな事件が起きようとしている。

この街に着いた直後、俺は心の中で、『今回は何も起こらないように』と願っていた。

だがそんな願いは、どうやら叶わなかったらしい。

やっぱりジンの言う通り、俺は何か良くないものに憑かれてるのかも知れないな……。

「そういう事なら黙っている訳にはいかない」

という、ジンの真剣な声で、妙な思考に囚われていた俺は、すぐさま頭を切り替えた。

今は余計な事を考えてる時じゃない。この街の危機は、すぐそこに迫っているんだから！

「デイン。この『大規模魔術』とやらを止める方法は、前回の事件の時と同じだと考えていいのか？」

「さすが話が早いな、ジン。お前が考えてる通り、俺たちが向かうべきはこの『魔法』の『中心点』だ。多分さっきの光が流れてきた方向に、発動者の『魔術師』がいるはずだぜ？」

前回の事件の時も、俺とジンは今と似たような状況下で奔走した経験がある。特にジンは飲み込みが早い分、俺が改めて説明するまでもなく、どうすればいいのかが判断出来ていたようだ。

すると、そんな俺とジンの会話の端から、傍らにいたりネは状況を察したらしい。俺と違って『魔術』に関する知識がないはずの彼女が、珍しく的を射た台詞を言い放つ。

「それってつまり、術を発動している『魔術師』を探し出して倒せ

「ばい、つて事？」

「大正解　よくわかったな」

俺が快活に笑って彼女の方を指差すと、リネは周囲に溢れる軍勢と俺の顔を交互に見つめ、戸惑った様子で言う。

「でも、どうやってそこまで行くつもりなの？　相手はこんな大勢なんだよ？」

確かに向かう先には、障害となる人形たちがウジャウジャいる。前回の事件同様、この中から発動者の『魔術師』を探し出すのは、かなり困難な事だろう。

だが俺には……いや、俺たちには迷いが一切なかった。

「そんなモン、考えるまでもねえ」

「ああ。やるべき事はただ一つ」

俺とジンは口々に告げると、俺は右手に炎を集束させつつ、ジンは背中にある二本の剣を引き抜きつつ、同時に叫ぶ。

「正面突破だッ！！」

第五章 忍び寄る魔の手 - The conductor - (後書き)

という訳で、『雷帝出現編』も漸く第五章に到達。

次回からいよいよバトル展開だあゝ！

不定期更新は相変わらずですが、どうか次回をご期待ください！

## 幕間 墮落者の根城（前書き）

長い間更新出来なくてすみません。

今回更新はしますが、話の位置付けが第五章と第六章の間で起きている話となっておりますので、普段よりかなり文字数が少なくなっています。

第六章は改稿次第、順次うpしていきますので、楽しみにしてください。m(\_\_\_\_)m

## 幕間 墮落者の根城

大陸北西の端。北に向かう為の街道からやや外れた位置に、面積の狭い森林地帯がある。

海岸線が程近い事もあるせい、年中潮風に晒され続けてやがるその森林は、草木の育ちが異常な程悪く、木々のほとんどは枯れる上、道となる足下には枯れ葉の落ち葉が敷き詰められてやがる。

しかもそうになると、リスやウサギの餌となる木の実なんかが育たねエ訳だから、小動物どもは寄り付かず、そいつらを餌にしてるオカミやキツネといった肉食動物も集まって来ねエ。故にこの森には、そういった動物どもの姿がない。

森としてのまともな生態系が維持出来てねエ。そんな、動物どころか普通の人間すら近付かねエ場所だからこそ、とある連中にとつては、身を隠すのにうってつけの場所なのかも知れねエが。

ジラータル大陸北西のスラム街。

通称、『墮落者の根城』。

育ちの悪い森林地帯の奥に残る、長い月日雨風に晒され続けた影響で、かなり荒れ果ててしまった廃墟。

かつてはその辺にある街と同じように、ある程度栄えていた街だったらしいが、今じゃそんな面影は微塵も感じられねエ。今じゃこの場所は、大陸の各地から集まって来やがる浮浪者どもが住まう、汚らしいスラム街と化してやがる。

が、何もここを根城にしてるのは浮浪者だけじゃねエ。

このスラム街には、十二年前に起きた『倒王戦争』で、『魔王』側に加勢した為に城を追われる身となった元貴族が、行き場所を失って住み着いていやがる。

後で知った事だが、これはあまり世間には知られていない事実らしい。実際俺も、以前ここを訪れた時に初めてその事実を聞かされるまで、全く知らなかった事だ。

現政権に恨みを持つ者が集う場所。それが『マッド・タウン墮落者の根城』。

ここには言うまでもなく、まともな思考を持った奴が存在しねエ。どいつもこいつも口々に、現政権に対する恨み辛みを呟き続けるような連中だ。会話する事はもちろん、長居する事も願い下げな場所だってのは間違いねエ。

「チツ……。それにしても、まさか俺の方からまた、奴らの根城に赴く羽目になるとはなア」

俺が『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』に招かれ、あのスラム街を訪れたのはいつの頃だったか。別に思い出すつもりはねエが、それでももうかなりの年月が経ってるはずだ。

枯れ葉の多い地面を踏み締め、俺は特に急ぐ訳でもなく、森の奥を目指していた。

奴らには、『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』には聞かなきゃならねエ事がある。奴らの返答次第によっちゃあ、俺はその場で全員の首根を掻き切つてやろうと思っていた。

だが歩を進めていた俺は、そこであるものを眼にする。

「あ？ 何だありゃ？」

視線の先、森の奥の方から微かに立ち上っているのは、火事場を思わせるかのような黒い煙。何かただならねエ雰囲気を感じ、俺は少し歩く速度を速めた。

俺自身、破壊者として何度も引き起こし、この身で感じてきたからこそわかる。

あれは紛れもなく破壊の爪痕だ。何者かがあの場所で暴れたっていう、確かな証拠だ。

そんな経験則からの確信を胸に、俺は足早に歩き続ける。

やがて視界が徐々に拓けていくと、それに伴って、何かが焦げたような臭いが鼻を突き始めやがった。



「……チツ、やっぱり思った通りだったか」

俺が辿り着いた先は、まさに焼け野原と化していた。

『マッド・タウン墮落者の根城』の廃墟は、東西南北に正円状に広がっている。半徑にすれば大体四百メートルつて所か。その敷地内に点在する建物の多くは、ほとんどが煉瓦で造られている。が、もちろんその全ては廃墟らしく、大きく罅割れたり砕けたりして、大半が原形を留めない程に朽ち果てている。

だが今の状態は、俺が以前訪れた時に見た光景より、遥かに荒れ果てていた。

周囲にあるのはほとんどが瓦礫の山。廃墟のあちこちからは微かに炎が残っているのか、黒い煙が朦々と立ち上り、そして微かにだが、吹き付ける風に混じって血の臭いがする。

「……どうなってやがる。浮浪者同士で殺し合いでも始めやがったのか？」

元々廃墟だった場所を破壊し尽くした所で、眼に見える違いはほとんどねエのかも知れねエ。だがそれでも、以前の景色を見ている俺からすれば、眼の前の景色はまさに様変わりしてやがる。

俺の周囲には、たった数歩進む毎に、人間の死体が瓦礫に紛れてゴロゴロ転がっていた。

四肢や胴体を際限なく切り刻まれ、流れ出た夥しい量の血の海に、ただ黙して沈む者。

火だるまにでもなったのか、全身を炭のように黒く焼き焦がし、捨て置かれた廃材のように横たわる者。

巨大な硬質性の物体か何かで、頭や胸を押し潰され、肉片や血液を辺りに飛び散らせて、身体をグチャグチャに変形させている者。

どいつもこいつも、まともな死に方じゃねエのは確かだ。とてもじゃねエが、この中に生き残ってる奴がいるとは思えねエな……。

と、内心で生存者を捜す事を諦めようとしていた時だった。前方

三メートル程の所で、山なりになっていた瓦礫が、何の前触れもなく崩れたのは。

一瞬身構えた俺は、だがすぐに構えを解く。

瓦礫に紛れて、弱々しく地面を這っていたのは、探す事を諦めようとしていた生存者だった。

性別は男だが、煤や泥に塗れているせいか、年齢の予想が付けにくい。

着ている服、と言っているのかわからね工程、男の服は袖口や襟元が裂け、胴周りや背中周りが悉く破れ、原形を留めていない。しかも肌が裸出している部分には、何か鋭利な物で切り裂かれたような傷が多数ある。

何かに襲われたという事だけは、容易に察しが付いた。

「オイ、起きやがれ。一体何があつた？」

俺は男の傍まで歩み寄ると、一旦屈んで僅かに残っている男の服の襟元を掴み、強引に上半身を引き起こす。

すると男は、「ヒイツ！」と叫び声を上げ、反射的に両腕で顔を庇った。どうやら自分はまた襲われそうになっている、と勘違いしてやがるらしい。

「妙な方向に考えんな。何も取って食おうとしてる訳じゃねエ。ただ話を聞きてエだけだ」

前置きをする事を面倒臭く思いながら、俺は男にそう言った。

すると男は、顔を庇っていた腕をゆっくりと下ろし、まだ少しビクついている表情で軽く頷く。

「もう一度聞けど。ここで一体何があつた？」

再度問い掛けつつ、俺は男の襟元から手を離す。すると男は、俺に支えられずとも身体を起こし、どこか呆然とした様子で地面に座り込んだ。そしてやや虚ろな瞳のまま、掠れた声を必死に搾り出してくる。

「見ての通り、襲われたんだよ……。ここを根城にしてた、妙な連中に……」

「……『精霊指揮者』の事か？」

「！ 奴らの事、知ってんのか……！？」

俺が奴らの組織名を口にした瞬間、男の表情が驚きに満ちる。言い当てられるとは思わなかった、と言いたげな顔だ。

「あんた、『ギルド』か正規軍の人間なのか？」

「俺の事アどオだつていい。それより質問に答える。何で奴らがここを襲った？ 自分たちの根城だつたんだろ？」

男の質問をはぐらかして俺が問い返すと、男は地面を見つめるかのように視線を下げ、首を横に振る。

「わ、わからねえ……。近々何かデカイ事をやらかすつもりだつてのはわかったが、それ以外は何も……」

「……」

デカイ事、ねエ。まア質問してみたものの、大体は察しが付く。

『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』がここを襲ったのは、恐らく口封じの為だろう。

この『マッド・タウン墮落者の根城』には、かつて『魔王』側に就いた元貴族どもが多く住みついてやがる。言わば、現政権に対する反乱分子どもの巣窟つて訳だ。

そんな場所に身を置いていた『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』は、現政権に対して何かをし掛ける為に、まず自分たちの存在を知ることの奴らを消す事から始めた、つて所だろう。何をするつもりなのかは知らねエが、随分手回しの良い事だ。

「いきなりだつたんだ……」

「！」

思考していた俺は、男が俯いて呟いた言葉に、思わず耳を傾けてしまう。

見ると男の身体は微かに震えていて、まるで土を抉るかのように、地面に付いた両手を握り締めていく。

「ただ逃げる事しか出来なかった……。そんな俺たちを嘲笑ってるみたいに、『お前らはもう用済みだ』つて言つて、俺たちは何もしてねえのに……。ッ、いきなり襲い掛かってきて……。この人間全

員を殺しやがったんだあッ！」

恐らく男の脳裏には、未だ襲われた時の光景が鮮明に刻み付けられてやがるんだろう。突然襲われた事への怒りや悔しさ、恐怖や哀しみがなймаぜになつたような表情で、男は闇雲に腕を振り回し、地面へと叩き付ける。

「もう一つ答える。奴らはどこにいった？ 内輪揉めがあつたにして、テメエらは少なからず『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』と繋がりを持ってたはずだ。なら奴らの行き先にも見当がつくんじゃねエか？」

「知らねえよ！ 奴らの事なんざもう考えたくもねえ！ 俺は何も関係ねえんだ！」

駄々をこねるガキみてエに大声で喚き散らすと、男は震えながら頭を抱え込むようにして地面で丸くなつてしまふ。

チツ、役に立たねエ野郎だ。これじゃあ『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』の行方を追う為の手掛かりがねエままになつちまふ。さて、どうしたもんかねエこの状況……。

と、面倒臭く思いながら、男から視線を外した時だった。

突然、足下から橙色の光が発生したかと思うと、それに呼応するかのように、地面のありとあらゆる場所から、黄土色をした粘土質の液体が次々と溢れ始めた。

「ヒイイイツ！ また出やがったああッ！」

「あん？」

眼の前の光景を見つめていた俺は、妙に上擦った声を上げる男の方をもう一度振り返つた。

「どういう事だ。この現象に心当たりがあんのか？」

「どうもこうもねえよ！ 妙な格好の泥人形みたいな奴らだ！ こいつらが集団で襲い掛かつてきたんだよあッ！」

「泥人形だア？」

いまいち状況を把握し切れなかつた俺は、震えながら縮こまる男

を無視して、再び謎の現象が起きている方向を見やる。

すると、例の粘土質の液体は、いつの間にかある形を成して、俺と男の事を取り囲んでいた。

「ハッ、なるほどな。泥人形ってのはこういう事かよ」

俺たちを取り囲んでいるのは、妙に艶のある黄土色の体躯をした人型の人形だった。

詳しく確かめるまでもねエ。恐らくこれは、『地属性』の『魔術』によって、より人間の姿に近い状態に造られた『ゴーレム』だ。今こうして現れたのは、無駄に生き残った奴を始末する為って所かア？

「面白エ……！ 高が泥人形ごときがこの俺に向かって来ようとはいい度胸だア！」

俺は即座に両の手を胸の前で合わせ、左右にゆっくりと開いていく。すると両掌の間に黒い稲妻が発生し、徐々にある形を成していく。

俺が操る『魔術』、『黒煉魔法』によって形成されるのは、漆黒に染め上げられた身の丈程の鎌。

その名は、『漆黒の大鎌』だ。

「さアて、始めるとするかア。思う存分楽しませてもらうぜエ、泥人形どもオツ！」

大鎌を携え、俺は何の躊躇もなく泥人形の群れに飛び込む。

どうやら久しぶりに、際限なく破壊を楽しめそうだ。

## 第六章 宣戦布告（前書き）

お待たせしました、第六章です。

またもや一万文字超えてたりしますが、投稿を怠けてた時間が長かった、作者自身に対する罰だと思って頂ければ幸いです（笑）

## 第六章 宣戦布告

俺の頭上を軽々と飛び越えて前進したジンが、両手の剣を鮮やかな太刀捌きで振るう。横薙ぎに、或いは垂直に放ったジンの斬撃が、人形の身体を次々と斬り伏せていく。

「ただ俺だって負けてはいない。群がる人形たちを一体一体確実に、右手に握った炎剣の一撃で破壊する。」

まさに流れるような手際の良さで、俺とジンは人形を撃破しつつ、リネとエリーゼを引き連れて、首都の大通りを西に向かって進んでいた。

「こうして俺たちが共に戦うのも、随分と久しぶりな気がしないか？」

自身に襲い掛かるうとした人形を、左肩口から袈裟斬りで両断したジンが、不意にそんな言葉を漏らした。戦闘中とはいえ、俺たちには会話をする余裕が若干残っている。

「そうだな。って言うか、実際そうだと思う、ゼツ！」

返事をしつつ、俺は目前に飛び込んできた人形の胸に、右手に構えた『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』の刀身を叩き込む。

爆炎の一撃によって、人形は腹の中心から蜘蛛の巣状の亀裂を身体に走らせ、次の瞬間には粉々に砕け散る。

胸や手足を両断されたり、身体を部分的に損壊した人形たちは、地面に倒れて活動を止めると、まるで氷が急速に溶けていくかのよう<sub>に</sub>に形を失って崩れてしまう。

そんな光景をもう何度も眼にした俺は、一瞬の間が出来た事で軽く息を吐いた。

「が、炎剣を構え直した所で、俺は眼の前の光景に違和感を覚えた。……」  
「と言うより、少し前から気にはなっていた。」

「今も周りで蠢いている人形たち。気のせいかその数が、全く減っていないように思う。」

「なあジン。俺の気のせいかも知れねえんだけど……」

「いいや、気のせいじゃない。お前の考えてる通りだ。見る」

俺の考えを察していたらしいジンが、そう言つて『黒裂剣こくれつけん』の刃先をある一点に差し向けた。

するとその瞬間、俺たちを嘲笑うかのような現象が起こる。

ジンが剣の刃先で指し示した場所。都市の大通り、石畳の道が続く地面の一角から、次々と粘土質の液体が溢れ出し、また同じように人形と化していく。

今まで注意深く観察してなかったから気付かなかつたけど、思った通りだ。人形の数が減つていないように見えたのは気のせいなんかじゃない。実際に倒した端から、新たな人形が造り出されていたからなんだ。

「際限なく現れてる……。これじゃキリがないよ！」

俺やジンと同じく、リネやエリーゼも眼の前の事態に気付いたらしい。周りで蠢く人形たちを見つめ、心底辟易したような顔をする。確かにこれじゃあ、無駄に時間と体力を削り続けるばかりだ。人形たちにこれ以上の破壊をさせない為にも、一刻も早くこいつらを操っている『魔術師』を見つけ出して倒す必要がある。

「リネの言う通りだ。とにかくゆっくりはしてられねえ。ドンドン薙ぎ払つて行くぞ！」

俺は自分自身を鼓舞する意味でも、腹に力を込めて叫び、炎剣を握っていない左手を頭上に翳かきした。

そして続け様に自分の周囲に炎を発生させ、翳かきした左手の掌の先に集束させていく。

「『深紅クリムゾン・レインの流星』！」

頭上高くに出来上がった直径二メートル程の炎の塊は、俺の向上と共に爆音を上げて弾け飛び、無数の火球となって周囲の人形たちの身に降り注いだ。

俺が全弾命中の手応えを感じ取った瞬間、今度は傍らにいたジンが、両腕を胸の前で交差させるように構え、前方に向けて振り抜く



と同時に叫ぶ。

「『黒白雷閃』！」

振り抜き様に放った黒と白の衝撃波が、折り重なるように渦を巻いて直進し、俺たちの前方に群がっていた人形たちを容赦なく吹き飛ばした。

『クリムゾン・レイン  
深紅の流星』と『黒白雷閃』。二つの技を放った事で、周囲はだいぶ見通しが良くなった。

「わあ〜っ！ 二人ともすごい！」

「さすがは『魔術師』と『ギルド』有数の腕利き、って所かしらね。あなたたちの力には毎回感服させられるわ」

少し離れて付いて来ているリネとエリーゼが、まるで華やかな劇を見ている観客のように、口々にそんな感想を漏らす。

だけど安心するのはまだ早い。さっき見た通り、黄土色の人形たちは次々と現れて来る。すぐにここも、また人形たちで埋め尽くされるはずだ。

「お前ら、感心してくれるのは素直に嬉しいけど、のんびり構えてんなよ。今の内に少しでも先へ進んどかねえと、また余計な足止めを」

と言いつけた、その時だった。

「……………？ 何だ？」

突然辺りが薄暗くなり始めたかと思うと、身体の芯にまで響きそうな重低音が、どこからともなく聴こえてくる。俺はその音源を探して、まず最初に自分の周囲を見回してしまった。

だが俺はすぐに、その行動が見当違いのものだった事に気付く。

今なお続く現象を引き起こしている元凶は、空に浮かんでいたんだ。「飛行船……………！？」

首の付け根が痛くなりそうな程、俺は青い空を覆う巨大な影を見上げてしまう。

全長二十メートルくらいはありそうな、太陽光を反射して煌めく銀色の船体。その側面には、鳥のような翼が左右二枚ずつ付いてい

て、船首には向かい風を突き抜ける為なのか、鏃型の突起が取り付けてあり、船尾には大きな筒状の物体が三つ備え付けられている。外側だけでも随分な装備が施されているのがわかるが、特に船尾に付いた筒状の物体。あれは船その物の推進力を大幅に上げる為の動力機関のようだ。

何年か前にミレーナと『首都』を訪れた時、俺は正規軍所有の飛行船を目撃した事がある。だがその中に、あれ程の装備が成された機体はなかったはずだ。だとしたら、一体あの飛行船は何なんだ？と、疑問に思っていた俺の隣で、同じように空を見上げていたりネが、驚いたような声を上げる。

「あの飛行船……！」

「！ リネ、見覚えがあるのか？」

「あるも何も、あれが『ワーズナル』で見た飛行船だよ！」

「何だつて!？」

確かに俺は以前、リネから聞いていた。『ワーズナル』の『グレッグス鉱山』での戦いの際、ガラムやシグードを迎えに来たという飛行船の存在を。

「って言うか、あれがその時の飛行船だつて言うなら……！」

「じゃあ、今この街を襲つてるのは、『精霊指揮者』ゴースト・コンダクター って事かよ!？」

「どういう事だ？ 何で今になって奴らが『首都』を襲う!？」

奴らが狙ってるのは『精霊石』の破壊と、『デス・ベリアル』の召喚のはずだ。この二つを防ごうとしてる『首都』の元老院は、確かに奴らにとって邪魔な存在だろうけど、何も今『首都』を狙う必要なんて。

「！ まさか……！」

瞬時に思考を巡らせた事で、俺はある可能性に辿り着いた。

奴らが、『精霊指揮者』ゴースト・コンダクター が『首都』を狙う理由。

「俺とミレーナがいるから、か？」

一つの可能性として考えられなくはない。現に『ワーズナル』で遭遇したガラムは、ミレーナと同じように、俺の事も殺すべき標的として見定めていた。

それに今、何らかの『魔術』によつて『首都』に出現している、人型『ゴーレム』の群れ。奴らが街中で暴れ回っている事で、表面的には『首都』その物を狙っているように見える。

だが、もしかしたらこの破壊工作は、俺やミレーナを焙り出す為に行なわれてるんじゃないか？

そうだとしたら、尚更ゆっくりしてる場合じゃねえぞ！ 今城にいるミレーナの許にも、刺客が差し向けられてるかも知れねえ！

だけど、どうする？ 今は一刻も早く、人形を操つてる『魔術師』を探し出して倒す必要がある。そうしないと、『首都』が破壊され尽くしてしまうのも時間の問題だ。

でもだからって、ミレーナの事を放っておくなんて俺には出来ない。

優先順位を付けるべきなんだ。

例えどんなに、どちらも切り捨てられない、大切な事なんだとしても。

「ジン。頼みがある」

やがて俺は、自分の中で答えを導き出した。

そしてその答えを伝える為、俺はジンの肩を強く掴む。

「リネとエリーゼの二人を連れて、このままテルノアリス城に向かってくれ！」

俺が強くそう言い放つと、ジンは酷く驚いたような顔をした。

恐らく彼は、俺と同じ考えを持っていたはずだ。今やるべき事に、優先順位を付けるべきだと。

だが俺が選んだ答えが、ジンにとっては予想外のものだったんだ

ろう。

何せ俺は、ミレーナよりも『魔術師』の方を優先した事になるんだから。

「俺が城に……？　だが、本当にそれでいいのか？　お前はミレーナさんを」

「ストップ。それ以上言うな」

俺はジンの言葉を遮りながら、制止の意味を込めて右手を軽く前に突き出した。

ジンの言わんとしてる事は大体察しが付く。だけど今、最優先すべきはそれじゃない。

「確かに俺だって、出来る事ならミレーナの許に駆け付けたいさ。けどそうしたからって、『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』が破壊の手を緩める訳じゃない。なら今最優先すべきは、人形を操ってる『魔術師』を倒す事。だろ？」

「お前……」  
「それに今、城には他の『英雄』たちもいる。俺なんかが助けに行かなくても、きっとあの人たちがミレーナの事を守ってくれるはずだ」

別に彼らに押し付けようとしてる訳でも、縋ろうとしてる訳でもない。

彼らを、『倒王戦争』を勝ち抜いた『英雄』たちを信じてるからこそ、俺は自分出来る事を精一杯やるだけなんだ。

「だからジン。お前はリネとエリーゼの二人を、城まで送り届けてくれ。街の中をうるついでるより、城にいた方がいくらか安全なはず」

「やだッ！　あたしディーンと一緒に行きたい！」  
「！」

と、突然俺とジンの間に割って入ってきたのは、不満そうに顔を顰しかめているリネだった。彼女は唇を強く引き結び、ジツと俺の顔を見つめている。

「こ……、こんな時に駄々捏ねるなよ！ 今の状況わかってんのか？ ジンならともかく、まともな戦えもしないお前が俺に付いてくるなんて無謀だ！ どんな危険が待ってるかわかんねんだぞ！？」

「そんな事あたしだってわかってるよ！」

「だったら」

「それでもデインと一緒にいきたいの！」

「！」

リネは真剣な表情で、俺の言葉を遮るように叫んだ。彼女がなぜここまで頑なになるのか。その理由が、俺には皆目見当がつかない。ただ普段のように、茶化して流せる雰囲気でない事だけは確かだった。

俺が言葉を失っていると、リネは若干俯き加減で、ゆっくりと口を開く。

「デインの言う通り、あたしには戦う力なんてない。でもだからって、自分だけ何も出来ずにただ見てるなんて事、もうあたしはしたくないの。あたしの知らない所で、デインだけが傷付いていくなんて耐えられない。あたしだって……、デインの力になりたいよ！」

「……」

普段のリネからは想像も出来ないような真剣な表情で、彼女は俺に真摯に訴え掛けてくる。

しかしだからと言って、簡単に首を縦に振るなんて事、俺には出来ない。

さつきも言った通り、『魔術師』を探し出そうとする以上、これから進む先で戦闘は避けられないだろう。相手が『精霊指揮者』ゴースト・コンタクターともなれば尚更だ。

そんな危険な場所にリネを連れては行けない。自分でも情けない話だと思つが、戦闘中にリネの身を守り切る自信が俺にはない。

「……俺が必ずお前を守るって保証は、どこにもないんだぞ？」

「わかつてる」

「今までよりずっと危険な眼に遭うかもしれないんだぞ?」

「わかってる。自分で決めた事なんだから、覚悟は出来てるよ」

リネは一瞬も、俺から眼を離さない。揺らぎのない、迷いのない瞳で、ジツと俺の顔を見つめ返してくる。

そんな彼女の強い意志に圧され、結局俺は、溜め息をつく羽目になった。

「……わかった。但し約束してくれ。何があっても俺の傍から離れるんじゃないぞ。いいな?」

「……! うん!」

俺が渋々承諾すると、リネは漸く普段の明るい微笑みを見せる。緊迫した状況でこういう笑顔を見せてくれる事が、嬉しいような悲しいような、何とも複雑な気分だ。

と、意味もなく内心で悶々としていた俺は、ジンに軽く肩を叩かれてハツとする。

「ならこうしないか? 誰がどこへ避難する、という事は一旦置いておいて、二手に別れて『魔術師』を探すんだ。これなら発見に掛かる時間が、少しは短縮出来るんじゃないか?」

「ええっ? いやでも、エリーゼは……」

思わず言い淀んで彼女の方を見た俺は、しかし当の本人に軽く額を小突かれた。

「私の事は心配しないでいいから、ちゃんとリネさんの事を守ってあげなさい。それがあなたの『存在意義』なんですよ?」

「!」

俺が僅かに眼を瞬かせると、エリーゼはクスツと笑い返してくる。確かに彼女の言う通りだ。気にし過ぎる事と身を案じる事は、意味合いが少し違って思うように思う。とにかく俺は、自分にやれる事をやるべきなんだよな。

「悪いなジン、エリーゼ。俺の身勝手に付き合わせる事になって」「お前が謝る事はない。それより早く『魔術師』を見つけ出そう。

「じゃあ、道中気を付けろよ」

「ああ。また後で、必ず会おう」

俺はジンと、軽く拳を打ち付けあった後、リネを連れて残りの二人とは別の方向へ走り出した。

街のあちこちからは、破壊音らしきものが鳴り響いてくる。

これ以上、『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』の好きにさせる訳にはいかない。

完全に見誤っていた。

城の城壁を破って敷地内に侵入したのはガラム一人だと、私は勝手にそう思い込んでいた。

だけど事態はそんなに甘くはない。侵入していたのはガラムだけじゃなく、もう一人いたからだ。

「ぎゃああああつ！」

私の眼の前で首筋を斬り裂かれた兵士が、血飛沫を上げながら地面へと崩れ落ちていく。

兵士を斬り殺したのはガラムじゃない。彼が行動を共にしている黒い長髪の男、シグードだ。

一体いつ現れたのか、私には全くわからない。

ガラムが城壁に開けた大きな穴から侵入してきたのか、はたまた別の場所から現れたのか。いずれにしろ、彼の動きに反応出来なかった事は確かだ。

「ふむふむ、さすがはシグードだな。仕事をこなすのが早いっつらねえぜ」

眼の前の惨劇に硬直してしまっている私の正面、五メートル程の距離を開けて立っているガラムが、感心したように呟く。

シグードは右腕に、青色と銀色で螺旋状に装飾された、分厚い籠手型の剣を携えていて、薄く透き通った青色だったはずの刀身は、兵士たちの返り血ですでに紅く染まっている。常に平坦な表情で、感情が読み取りにくい彼は、兵士を次々と斬り殺しても、一切表情を変えない。逆にそれが、不気味な冷徹さを醸し出していた。

「さて、だいぶ周りもスツキリした所で、いよいよ本題に入ろうか」  
辺りに血溜まりを作って倒れる兵士たちを、まるで存在しないものとして切り捨てるかのように、ガラムは平然と無視している。

ガラムとシグード。この二人を包囲しようと、敷地内のあらゆる場所から駆け付けてきた複数の兵士たちを、シグードはたった一人で、次々と容赦なく斬り殺した。

時間にして、ものの数分。その間ガラムは、一切手を出さずに傍観していた。

「しっかし驚いたぜ。まさかお前さんが、ジェイガの手を逃れて『首都』に辿り着いてやがったとは……。どうだ？ あれから少しは記憶が戻ったか？ それにお前さんがここにいてるって事は、デーモンも一緒なんだよなあ？」

私が黙っているのを良い事に、今の状況に場違いな程明るい声で、ガラムは矢継ぎ早に言葉を投げ掛けてくる。

「ん、それにしても、これだけ暴れてあの紅髪あかがみが飛んで来ないって事は、かの『炎を操る者』殿も、四六時中自分の師匠に引っ付いてる訳じゃねえって事か。ま、ここにいないならそれでもいい。アイツは相手は他にいるし、俺は自分の仕事をしなくちゃいけない」  
「？」

何だろう。ガラムの言葉に、いくつか気になる点がある。一体彼は何をここに……。――

と、考え込んでいた私の方へ、ガラムが突然歩みを進め始めた。どうしよう、今の私に戦う術なんてない。戦いの感覚を思い出せてはいても、まだ『魔術』を操る事は出来ない。それなのに、この二人を相手にする事なんて……！



心が逃げに走っているせいか、近付いてくるガラムから、私は思わず後退ってしまう。

すると、その時だった。

「ミレーナ！ 伏せろ！」

「！」

どこから聴こえてきたのかもわからなかったけど、私はその声の通りにその場に屈んだ。

するとその瞬間、上空から翡翠色の光が落雷のように飛来し、私とガラムの間を引き離す形で爆発を起こした。

舞い上がる砂塵に紛れて、翡翠色の光の粒子が、尾を引くように消えていく。

その光景を目にした時、私は漸く気が付いた。

いつの間にか、私の前に立ちはだかっている三つの人影。その正体を私が口にするより早く、晴れ始めた砂塵の向こうで、ガラムが感慨深げに言い放つ。

「ほう、これはこれは。『英雄』三人が揃い踏みって訳か」

どこか楽しげに、ガラムはニヤリとした笑みを見せる。

ガラムの言う通り、私を庇うように立っているのは、フォード、ランザ、バルベラの三人だった。その背中に思わず見蕩れていた私に、正面を向いたままフォードが話し掛けてくる。

「ミレーナ、怪我はないか？」

「ええ、平気よ。ありがとうみんな」

「呑気に座ってないでさっさと立ちなさいよ。言っとくけど、私はあんたを助けたつもりなんてないから」

フンツと鼻を鳴らして、バルベラはチラリと私の方を振り返る。

そんな彼女の態度に、私は僅かに苦笑しながら立ち上がった。それとほぼ同時に、巨大な斧を肩に担いだランザが、興味深げに聞いてくる。

「ところでミレーナ。もしかしてこいつらが、昨日の話に出てた『ゴースト・コンタクター 精霊指揮者』って連中か？」

「！ ええ、そうよ」

私が短く返事を返すと、ランザは「そうかい」とだけ言った。が、チラリと見えたランザの表情は、まるで好きな物を買って与えられた子供のように、喜びの笑みを浮かべていた。彼は多分、今ここにいるどの人間よりも、この状況を楽しんでいるに違いない。

「早速だが聞かせてもらおうか。一体ここへ何しに来た？」

ランザの様子に気を取られていた私は、フォードの強い口調で正面を向き直った。

すると問われた本人、ガラムは飄々とした様子で、城の方を指差しつつ、重みの感じられない軽い口調で言い放つ。

「ツハハア。いや何、お前さんたち『英雄』が出て来てくれたんなら話は早え。ちよつとばかし俺たちの方から、中にいる役立たずども、元老院に伝言を頼みたいんだよ」

「伝言……？」

「んん？ いや、これはどっちかって言うと、宣戦布告になるのかもな」

言葉の使い方が少々気に入らなかったのか、ガラムは僅かに首を傾げて、もう一度言い直してみせた。

するとその言葉に、私たちの内で誰よりも早くランザが反応する。「宣戦布告ねえ。面白そうな話じゃねえか」

かなり興味深げに話すランザは、今の緊迫した状況を楽しんでいるらしい。私やフォード、バルベラとは違い、その表情にどこか余裕のようなものが感じられる。

と、私たちの反応を見たガラムは、「俺たちのボスからの伝言だ」と言っ、まるで絵本を読み聞かせるかのようなゆっくりとした調子で、こう続けた。

「『長きに渡る序曲は終わりを告げ、我々は新たな段階へと進みつつある。『精霊』を現出させる為の最後の『霊石』。ついに我々はその在処を突き止めた。無能なる王と六人の貴族たちよ。我々を止めなければ、かつての『悲劇の地』へと赴くがいい』」

「かつての『悲劇の地』？」

なぜだろう……。ガラムが告げた言葉の意味は理解出来ないのに、言葉の端々から得体の知れない不安を感じてしまう。どうしてそう感じてしまうのか、それがわからないんだけど……。

「ま、こんな風にウチのボスも意味深な言葉を使っちゃいるが、記憶を失ってるミレーナはともかく、他の『英雄』さん方なら、『悲劇の地』ってのが何を意味してるかわかるよな？」

内心で一人考え込んでいた私は、そんなガラムの言葉でハツとする。

私がフォードたちの方を見ると、確かに彼らは何かを察しているらしい。今の状況を楽しんでいたはずのランザですら、表情が曇っている。

「わざわざ自分の部下にそんな伝言を届けさせるなんて、あんたの言うボスって奴は、よっぽど私たちの前に顔を出すのが嫌みたいね」  
わざとらしく嫌味のようにバルベラが言うと、ガラムは言い訳するみたいに、僅かに頭を掻きながら答えた。

「何もそういう訳じゃねえさ。実際ウチのボスは今、ちゃんとこの街の中にいるぜ？」

「何イ？ だったら何で顔を出さねえ？」

なぜか不満そうな声を上げるランザに対し、ガラムは愉快そうにニヤリと笑う。

「別に大層な理由がある訳じゃねえ。ただ会いに行っただけさ。あんたらも知ってる奴の所へな」

「『バーニング・クロス  
烈火の十字爆撃』！」

高く跳躍して上空から襲い掛かろうとしてきた二体の人形を、右手で放った十字の炎を撃ち落とす。

人型『ゴレム』たちは数は多いが、動きがあまり素早くない。だからこそ、逃げに徹する事も十分に可能だ。

人形を撃ち落とした所で、俺は建物の陰に隠れる為、呆けていたリネの手を強引に引つ張って走り出した。

目指すは数メートル先にある、喫茶店脇の陰。正規軍の旗を掲げた騎馬隊をモデルにした、二メートル程の高さの銅像が設置されている。その銅像の裏に回り込んで屈めば、暫く身を隠す事が出来るだろう。

「リネ！ 先にその物陰に入れ！」

俺は返事も聞かずに、彼女の身体を押し出すように誘導し、背後を振り返った。

辺りには未だ、夥しい数の人形が跋扈している。ここまで来ると、さすがにもう見るのも嫌になってきた。

「ま、そうも言ってられねえか」

諦めに似た感情を抱きながら、俺は両腕を水平に構え、頭上に炎の塊を作り出した。

「『クリムゾン・レイ  
深紅の流星』！」

口上し、炎の塊が弾け飛んだ瞬間、俺は踵を返して、リネが待っている物陰へと飛び込む。

その瞬間、俺の視界が利かなくなった方向で、連鎖的に激しい爆発が起きた。恐らく背を預けている銅像の向こうでは、無数の火球となった炎が、人形たちを吹き飛ばしている事だろう。

「フウ……。いい加減、あいつらの相手をするのも面倒臭くなってきたな」

「デーン、大丈夫？ 『魔術』の使い過ぎで疲れてるんじゃない？」

少しだけ乱れていた息を整えていると、隣にいるリネが、右手に

持ったハンカチで俺の額を優しく拭ってくれた。どうやらいつの間にか、汗も掻いていたらしい。

「あ……、ありがと、な」

「どういたしまして」

リネは一旦微笑んでからハンカチを仕舞うと、物影の隙間から、大通りの方の様子をチラリと窺う。

「やっぱりあの人形、倒しても倒しても減らないね」

「ああ。多分あいつらを操ってる『魔術師』が、『魔術』の『核』になる物を持つてるはずだ。それさえ壊せれば、あいつらは消えると思う」

リネと同じように、俺も僅かに大通りの様子を窺ってみた。

さつき放った『深紅の流星』<sup>クリタム・レイン</sup>の一撃で、粗方の人形は倒せていたはずだ。だが大通りのあちこちからは、再び粘土質の液体が出現し、人型『ゴレム』へと形を変えていく。ここへ来るまでも、もう何度も眼にした光景だ。

「くっそ……！ 一体『魔術師』はどこにいるんだ！」

二手に分かれたのはいいけど、さすがに探す範囲が広過ぎる。

そういえば前の事件の時も、確か同じようにアーベントの行方を探し回った事があつたっけ。あの時は『術式魔法陣』の存在に気付けたから、奴の居場所を探し当てる事が出来たんだ。

とにかく、このままじゃ埒が明かない。今回もあの時みたいに、何か手掛かりを見つける必要がある。

「とは言っても、手掛かりなんて一体どこに……」

自分自身の考えに疑問を見出しながら、俺はもう一度大通りの方に視線を向ける。

と、その視界の中に、俺は違和感を感じた。

その原因は、喫茶店の陰から数十メートル離れた位置にある広場にあった。

周囲に群がる人形たちの中、明らかに、普通の人間が紛れ込んでいる。

「何してんだ、あの人？」

俺が見つけたその人物は、正円状に造られた広場の中央に、どこか悠然とした雰囲気で行んでいる。

遠目だと少しわかりにくいだが、多分俺より少し背が高い。特に目立った装飾や模様のない、黒一色のローブを纏っていて、雨も降っていないのに、フードを深く被っている。そのせいで性別はおるか、表情すら読み取れない。

それにしても、何か得体の知れない雰囲気のある奴だな。

「あれ？ あの人……」

と、そんな風に思っていると、俺と同じく黒いローブ姿の人物に気付いたリネが、不思議そうな声を上げた。

「知ってる人間なのか？」

俺が問い掛けると、リネは件の人物を見つめたまま僅かに頷く。

「少し前、一人で街を歩いてた時にあたしがぶつかっちゃった人だと思う。その時も不思議な感じのする人だったんだけど……」

感慨深げなりネの言葉を聞いていた俺は、しかし唐突に疑問に思った。

そもそもなぜあの人物は、人形たちに襲われる事なく、あんな風に悠然と立っていられるんだ？

「まさか……！」

あの人物が、人型『ゴーレム』を操っている『魔術師』なのか！？

そう思った瞬間、俺はリネをその場に置いて駆け出していた。と同時に、身体の周囲に炎の渦を発生させ、それを集束し、炎の塊を作り上げる。

「邪魔だあああつ！」

広場への道を塞ごうとした人形たちに向けて、俺はすぐさま『深紅の流星』を放った。

無数の火球が流星のように飛来し、人形たちを次々と破壊する。

と、その時だった。

黒いローブ姿の人物が、連続して発生した爆発に気付いて、俺の方に身体を向けた。フードのせいで顔が見えないが、顔の角度でわかる。今あいつは間違いなく、俺の存在を認識している。

俺は構わず、数十メートルの距離を一気に駆け抜け、黒いローブ姿の人物と充分会話出来る位置まで近付いた。

するとその瞬間。

「奇遇だな。まさかキミの方から私の許へ来てくれるなんて。ずっと探していたんだ、キミの事を」

「！」

俺が何か問い掛けるよりも先に、フードの内側から聴こえてきたのは、落ち着きのある男の声だった。

ここまで近付いてきたものの、俺はなぜか、すぐに攻撃に移れない。

先に手を出すべきじゃない。と、本能的に感じてしまっていた。

「誰だ、あんた」

やや身構えた状態で、俺は短く問い掛ける。

すると男は、フードの内側で忍び笑いをした後、ゆっくりとした動作で自らの顔を覆うフードを捲りつつ、こう切り出した。

「私の名はボルガ・フライト。『ゴースト・コンタクター 精霊指揮者』の創設者として、『フレイム・ウォーカー 炎を操る者』と呼ばれるキミに会いに来たんだ。よろしくね、紅い髪の少年」

## 第六章 宣戦布告（後書き）

という訳で、第六章でした。

バトル展開、とは言いつつも、やはりまだバトルに走り切れていない感が否めません……。

まあ、皆さんが楽しんでもらえてるならそれでもいいのですが。

ところで、世間ではG・W真っ最中ですねえ。

これを利用して、最近書けなかった分小説の続きが書けたらいいなあ、なんて思ってますが、まああまり期待しないで待っててください  
いW



## 第七章 名を知る者と知らぬ者（前書き）

またもやかなり間が開いてしまいました、すいません。 m（――） m  
かなり遅筆になってはいますが、漸く『雷帝出現編』第七章です。

## 第七章 名を知る者と知らぬ者

右手に握る『黒裂剣』<sup>こくれつけん</sup>を横薙ぎに振るい、俺は襲い来る人型『ゴ  
ーレム』の胴を上下に両断した。

断末魔の叫びすら上げる事なく、黄土色の人形は地面に倒れ、瞬  
く間に艶のある身体を崩壊させる。

『『白雷』<sup>はくらい</sup>！』

その様子を一瞥し、俺は続けざまに左手に握った『白滅剣』<sup>はくめつけん</sup>を振  
るい、一ヶ所に固まっていた人形たちを白い衝撃波で吹き飛ばす。

ほとんど流れ作業と化している一連の動作。もう既に手慣れた戦  
い方とはいえ、さすがにこう何度も同じ事を繰り返していると、ま  
るで自分が操り人形になったかのような錯覚に陥りそうだ。

「ジン、大丈夫？ さつきからずっと戦いつ放しじゃない」

周囲の人形を粗方倒した所で俺が息をつくとき、少し離れた位置に  
いたエリーゼが、心配そうな表情で駆け寄ってきた。

「ディーンやりネと別れてから、三十分は経過しただろうか。彼女  
の言う通り、度重なる人形たちからの襲撃を躲し続けてはいるもの  
の、肉体的疲労がないとは言えなかった。」

俺は剣を握ったまま、右手の甲で軽く額の汗を拭う。

「心配ない。とにかく今の内に先に進もう。早くしないと、またこ  
こも人形たちで埋め尽くされる」

エリーゼはまだ心配そうな顔付きだったが、どうにか頷いてくれ  
た。

それにしても、未だに人形たちを操っている『魔術師』に遭遇し  
ない。やはり『首都』全体という広い範囲の中から、何の手掛かり  
もなく一人の間を探し出すのは容易な事じゃない。行く手を阻む  
人形たちの事も考えれば、恐らくディーンたちも苦労しているはず  
だ。

とにかく、例えば闇雲でも、探し出そうと行動しない限り、いつま

で経っても事態は收拾しないだろう。

気を引き締め直し、俺は再び走り出そうとした。

が、その時。

「……？」

不意に俺は、妙な違和感を感じて立ち止まった。同じく走り出そうとしていたエリーゼが俺の肩にぶつかり、怪訝な表情を向けてくる。

「ちょ、どうしたの急に？」

エリーゼに声を掛けられたにも拘らず、俺は返事をする余裕を失っていた。

俺が感じた違和感の正体。それは、周囲の微妙な変化だった。

「妙だ……。人形たちが現れない」

「！ えっ？」

不思議そうな声を上げるエリーゼを横目に、俺はもう一度周囲を見渡してみた。

するとどうだろう。俺の違和感が正しいと言っているかのように、周囲には何の現象も起こらず、人々が避難して静かになった街並みだけが残っている。

ここに来るまでに遭遇した人形たちは、倒した傍から、または数十秒経った瞬間には、再び周囲を埋め尽くす程に出現していた。

だが今は、そんな様子が一切見られない。俺が薙ぎ払ってから既に一分は経っているにも拘らず、だ。

「どういう事だ？ なぜ突然」

「ギャハッ！ おいおいマジかよ！？」

「！？」

不意にどこからか、陽気な男の声が聴こえてきた。

思わず身構え、周囲に眼を光らせていた俺は、その声が自分の視線より上から聴こえてきた事に気付き、すぐ傍にあった木造二階建ての建物の屋根に眼を向けてみる。

するとそこには、屋根の先端に屈んで、両腕を前方にダラリと垂

らした状態でこちらを見ている、妙な男がいた。

歳は二十代前半。黄土色のだらしなく伸びたボサボサの髪。つり上がった細い眼が、獲物を探る鷹や鷲のように光っている。

「銀髪に二刀流。話に聞いてた通りだな。てめえがジン・ハートラ  
ーだろ？」

男はただでさえ細い眼を更に細め、食い入るように俺を見つめながらニヤリと笑う。

俺は剣を構えたまま、警戒を怠らずに答える。

「確かにそうだが、だとしたら何だ。いやそれ以前に、貴様は何者  
だ」

「おやあ？ てつきり気付いてるモンだと思っただが、違っのか  
？ まあいいや。とりあえず自己紹介から始めようか」

そう言つて、男は身に纏っていた枯色のマントを優雅に払うと、  
軽く跳躍して屋根の上から飛び降りてきた。

建物二階分の高さから飛び降りたにも拘らず、男は派手に転げる  
事もなく、華麗に着地してみせる。

俺はすぐさま、エリーゼを右手で制して男から距離を取るように  
促し、再び剣を構え直した。

「俺の名はガイザック・エルドラド。『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』の一員だつて  
言やあ、話が早えのかな？」

「！ まさか、貴様が人型『ゴーレム』を操っている『魔術師』か  
？」

「ゴ名答」

特に誤魔化そうとする様子もなく、『魔術師』ガイザックはニヤ  
ニヤしながら答えた。

しかし何だろう、この不快感は。まだ二、三度言葉を交わしただ  
けだというのに、ガイザックのニヤニヤとした笑みを見ると、  
どうしようもなく気分が悪くなってくる。

本人は意識してやってるのかどうかはわからないが、奴の笑い方  
には、人を不快にさせる厭らしさがある。

「貴様ら『精霊指揮者』の狙いは何だ。何の為に今、『首都』を攻撃している？」

相手のペースに呑まれないよう、俺は探りを入れる事から始めた。すると、意志の疎通はまともに来るらしく、ガイザックはニヤニヤしながらも口を開く。

「別に大仰な理由はねえさ。……まあ、強いて言うなら人探しか。俺らのボスには会いたい奴がいるらしくてな。そいつに会う為に、わざわざボス自らがこの街に赴いてんだぜえ？ 凄えだろ？」

「『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』の創設者が……！？」

「ああ。で、それが済むまで、俺らは適当に街の中で暴れてるって言われてな。まあボスにしてみれば、主な目的以外は全部、遊びの範疇って事なんじゃねえの？」

「！」「遊びだと？ 何をふざけた事を言ってるんだ、こいつらは！？ 無意識に、剣を握る両手の力が強くなる。

こいつらの言動に、憤りを感じずにはいられない。

「そんなくだらない理由で破壊を……、この街を襲っているのか、貴様らは！？」

「ギャハッ！ ギヤハハハッ！ おいおい、マジで聞いてた通りのお堅い野郎じゃねえか！ 正義感振り翳して英雄気取りかよ？ お前面白いなあ！」

「！？」 聞いていた、だと？  
そういえばこの男、さつきも似たような事を口にしていたな。

聞いていた、というのは言葉の通り、俺の容姿や性格について、他の誰かから情報を得ていた、という事なのか？

「気になるか？ てめえの事を知ってたのが誰なのか」「！」

思わず顔に出してしまっていたのだろう。表情から俺の内心を察したかのように、ガイザックはわざと勿体ぶったような言い方をする。

が、次の瞬間には、俺が返事をしていないにも拘らず、こう切り出した。

「てめえの事を教えてくれたのは他でもねえ、俺らのボスだよ」

「……何？ 貴様のボスとやらが、なぜ俺の事を知っている？」

「単純な話さ。ボスはてめえと知り合いだと言ってたぜ？ 名前を出せばすぐにわかるはずだってな」

「名前……？」

ガイザツクの言葉を聞き終えた瞬間、とてつもなく嫌な予感があった。

俺の容姿や性格まで熟知している人物であり、ゴースト・コンダクター『精霊指揮者』のような闇組織に関わりを持ち得る人物。

もし俺の予想が確かならば、それは最悪な人物の名前に行き着く事になる。

「別に教えるなど言われてる訳でもねえから、喋っちまってもいいだろ。その方がより面白くなりそうだしなあ」

頼んでもいないのに口を開くガイザツクの顔は、今まで以上に醜く歪んでいる。

奴はゆっくりと、『その名前』を口にした。

出来る事なら、二度と耳にしたくなかった、『あの男』の名前を。

「ゴースト・コンダクター『精霊指揮者』の首領が、デインくん……！？」

ガラムの口から告げられた言葉は、俄かには信じ難いものだった。

彼らの言う、『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』の首領となる人物が、今この瞬間、

デインくんに接触を図っているなんて……！

「ああ。今頃はもう会えてんじゃないかな？ まっ、ディーンの方がどうなるかは正直俺にもわからねえ。そんなに心配なら、今から探しに行ったらどうだ？」

完全に他人事として話すガラムの口調は、緊張感を感じさせない程軽い。

そんなガラムの態度に憤慨するかのように、フォードは少し声を荒げて告げる。

「お前たちの首領は、なぜディーンに会いに来た？ あいつを……、殺すつもりなのか？」

「ッ！」

『殺すつもりなのか』。

フォードの放った言葉のその部分だけが、何度も頭の中で再生される。

彼を……、ディーンくんを信じていない訳じゃない。

ただそれでも、彼の身に危険が迫っているという事実だけで、私は不安な気持ちを抑え込む事が出来ない。

今この瞬間、彼の身は無事なんだろうか？

「だから詳しい事は知らねえよ。知りたきゃ自分で探してみな……って、ボスの容姿もわかんねえんじゃないあ探しようがねえか」

然も私たちをバカにしているかのように、ガラムは愉快そうに笑ってみせる。

と、その時だった。

「オラアアアアアアアッ！！」

突然私たちの頭上から、暴れ回る猛獣のような雄叫びが降ってくる。

そして私は遅れて気が付いた。さっきまで傍らにいたはずのランザの姿がない。

「まさか……」

声の振ってくる方向を見上げようとすると、声の主が地上に落下するのはほぼ同時だった。

地面の岩盤を容赦なく砕き、轟音と土煙を巻き上げた者の正体は、落下しながらガラムに向けて大斧を振り下ろしたランザだった。

間違いないも無い答えに啞然とする私やフォードを尻目に、落下地点から回避していたガラムが、攻撃者を睨みながら言う。

「おいおい。随分いきなりだなあ、『英雄』さんよお」

やや重たい口調に変わったガラムの表情に、さっきまでの愉快そうな気配はない。

が、睨まれた本人であるランザは、特に気にした様子もなく、地面に深くめり込んだ大斧をゆっくりと引き抜きながら、涼しげに応じる。

「もう充分過ぎる程喋り倒しただろ？ ならちつとばっか付き合えや。ここんとこ身体動かしてなかったモンで鈍ってんだよ」

首の骨を乱暴にゴキゴキと鳴らしながら、ランザは愉悦に歪んだ笑みをガラムに見せつける。

昨日の夜、私はフォードに聞いていた事があった。

それはこの男、ランザ・ダルベスのある性格についてだ。

彼は『魔術師』として、確かに高い能力を持つてはいるものの、人格形成に若干難があるらしい。

その難と言うのが、すなわち『戦闘狂』。

ランザは一度戦闘に入ると、その勝敗が決するまで、敵味方の区別がつかなくなる程暴れ回ってしまうそうだ。

その反面、普段は意志疎通が問題なく行なえる程度に落ち着いているので、戦闘が起これないと、彼の本当の性格が人に気付かれにくい。

実際、私も今初めてその姿の片鱗を眼にしているのだから、これが今以上に暴れ回ってしまう場面を想像したくない。何か恐そうだもんなあ、色々と……。

「アクア・スライサー水圧裂閃」！

「！」

ランザの方に気を取られていた私は、そんな叫び声で視点を移し



た。

見ると、バルベラが右手に持っている扇子の先端に、蒼い水の膜が出来ていて、彼女がそれを振ると、水が物凄い速度で一直線に噴射した。

僅かでも記憶の戻った今なら、少しは『魔術』の事が理解出来る。あれは恐らく、高圧水流によって物体を切断する『魔法』だ。『魔術』の力によって生み出された水流は、ほとんど斬撃同然の威力を持っているに違いない。

現に、ガラムの許へ近付こうとしていたシグードは、バルベラの放った『水圧裂閃』アクア・スライサーによって足下の地面を一直線に抉られ、立ち止まる事を余儀なくされている。

まるで、動けば次はあなたの身体を切り裂くと、暗にバルベラが示しているかのようだ。

「あなたの相手は私がしてあげる。どうやら同じ水流系の力を使えるみたいだし、その力、見せて御覧なさい」

ランザとは少し形は違えど、バルベラも充分相手を挑発している。するとその誘いに乗ったのか、今までほとんど無表情だったシグードが僅かに顔を顰め、ポツリと呟く。

「『蒼牙』の露にしてやる……！」

まさに四者四様。それぞれが別々の表情を浮かべ、対峙している構図。

が、それも長くは続かなかった。

ランザとガラムは、城壁に出来た穴へと同時に駆け込んで。

バルベラとシグードは、生み出した水流をバネのように操作して城壁を軽々と飛び越えて。

私とフォードをその場に置き去りにする形で、あっという間に姿を眩ませてしまった。

「お、お前たち！ ちょっと待てっ！」

遅ればせながらフォードがそう叫んでみるものの、当然返事どころか、彼らが戻ってくる事はなかった。

「くそ、これだからあの二人は……」

僅かに頭を抱えるフォードを見て、私は漸く思い至る。確かにあの二人は、良くも悪くも私の強い人間のようだ。

だけど、ここでのんびりしている訳にはいかない。

さっきのガラムの言葉が本当なら、ディーンくんは今、危険な目に遭っているかも知れないんだ！

「とにかく、一刻も早くディーンくんを探さないで！ フォードも協力してくれるでしょ？」

ほぼ強制的な私の物言いに、フォードは渋々ながらも頷いてくれる。

「こうなったら仕方ないだろ。元老院の命令には背く事になるが、とりあえずそれは後回しだ。俺たちも城の外へ行こう」

フォードの言葉に、私は力強く頷き返した。

もう守られてばかりいる訳にはいかない。

今度こそ私が、ディーンくんの力になってあげなくちゃ！

フードを捲くった事で露わになった顔は、声色通り男の物だった。少し逆立った灰色の髪に、思慮深さを感じさせる同色の瞳。歳は三十代前半といった所だろうか。黒いローブから覗く男の胸元には、ひし形の枠に嵌め込まれた黄金色の水晶らしき物が、首飾りとして下がっている。

男の容姿に一瞬気を取られていた俺は、だがすぐに自分の耳を疑った。

きつと何かの間違いだ。そうでなきゃおかしい。

「ボルガ・フライトだと……!?」

俺は男が名乗った名前に心当たりがあった。もうずっと以前に、一度だけ聞いた事のあった名前だ。

でも何でだ……。何でよりもよってこの局面で、『その名前』  
が出て来るんだ! しかもこいつが、『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』の創設者だつて!?

「おや、妙だな。私の名を知る者は『一部の例外』を除けば、世間一般にはいないはずなのだが……。私の名前に聞き覚えがあるのかい?」

驚いて聞き返した俺に対し、件の男ボルガは不思議そうな顔で応じる。動揺を隠せないでいる俺の事を、然して気にしている様子はない。

こうなったら確かめるしかない。疑ってばかりじゃ、話が先に進まないんだから。

「……あんた、ジン・ハートラーって名前を知ってるか?」

少し躊躇いつつも、俺がそう質問返しをした瞬間だった。

「ハートラーか。久しく聞かなかった名前だ」

思い出す素振りも、考える素振りもなく、ボルガは俺の質問に即答した。そんな芸当が出来る程、こいつもジンの名前を忘れた事になかったってのか……。

「それにしても、キミの口からその名前が出るという事は、キミは彼の友達か何かなのかな?」

俺の口振りから、ジンとの関係を悟ったのだらう。ボルガはまるで、子供に絵本を読み聞かせるかのような柔らかい口調で、そう尋ねてくる。

「……友達だ」

「フフ、そうか。彼は元気かい? 最後に会ったのはだいぶ以前の事だから、ずっと気に掛かっていたんだよ」

「気に掛かってた、だと……!?!」

何を言ってるんだこいつは? さっきといい今といい、まるで俺

やジンの保護者みたいな口振りじゃねえか。

俺がジンから聞いたこいつの正体は、笑顔で話せるような人物じゃない。一体どういう神経してたら、平気な顔でそんな台詞が吐けんだよ!?

「あんたなんだろ！ ジンの家族の命を奪ったのは!？」

腹の底から怒りが湧き上がり、俺は思わず叫んでいた。こいつが『ゴースト・コンダクター』の精霊指揮者の首領なんだとか、何しにこの街へ来たのかとか、そんな疑問は一切頭から吹っ飛んでいた。

これは以前、ジン本人が口にしていた事だ。

俺とジンが知り合うきっかけになった、『ゴーレム討伐作戦』。その作戦の中で俺は、ジンに尋ねられた事があった。

ボルガ・フライトという人物を知っているか、と。

もちろん俺はそんな名前を知らなかったし、作戦中という事もあって詳しい話は聞かないままになっていた。

だがあの時、ジンは確かにこう言っていた。

奴は自分の家族の命を奪った仇だ、と。

一体なぜ、そんな奴が今、俺の眼の前に立ってるんだ？ いくら物事を鋭く見抜く力を持っているジンですら、今のこの状況は予想も出来ていないだろう。

顔を顰め、怒りに震える俺に、だがボルガは涼しい顔で言い放つ。

「感心しないな。いくら友達とはいえ、他人の過去を無闇に詮索するものではないよ。誰にだって、知られたくない過去はあるものだからね」

「うるせえ！ そんな言葉、あんたに言われる筋合いはねえんだよ！」

「心外だな。私はただ、キミの為を思って諭しているだけなんだよ？」

「……ッ!! ふっざけんなぁッ!!」

感情の高ぶりが頂点に達した事で、俺はほとんど無意識の内に、『魔術』を発動させていた。

即座に発生させた炎の塊が頭上で弾け飛び、無数の火球となってボルガの許に降り注ぐ。

その間、僅か五秒。着弾した火球は次々に爆発を起こし、大量の爆煙がボルガの姿を覆い隠してしまう。

随分と無茶な力の使い方をしたせいで、俺は知らない内に息を切らしていた。

だが今の攻撃は、先制攻撃としては充分だ。一度にこれだけの炎弾を浴びせれば、どんな人間でもただでは済まない。

と、そう思っていた。  
だが。

「随分乱暴な真似をするね」

「!?!」

一瞬、俺は頭が真っ白になって硬直した。訳がわからなかった。なぜなら、あろう事かボルガの声は正面からではなく、俺の背後から聴こえてきたからだ。しかもその声からは、怪我を負ったような様子は感じられない。

思わずゆっくりと振り返ると、ボルガは先程までと変わらず、五メートル程の間隔を開けて、悠然とした表情で佇んでいる。

俺は眼の前で起きた事実が信じられなかった。と言うか、理解出来ない。

奴は『クリムゾン・レイン深紅の流星』を避け切っただけじゃなく、然も当たり前のように俺の背後に回り込んでいる。もし仮に、自分自身の足で移動したんだとすれば、その速度が異常過ぎる。一体何をどうすれば、こんな芸当が可能なんだ……!?!

「言っただよ? 私はただキミに会いに来ただけだ。『フレイム・ウーオーカー炎を操る者』と呼ばれる、キミにね」

だからそう牙を剥かなくていい、と告げ、ボルガは不敵な笑みを見せる。

だが俺は、さっきの一連の出来事のせいで、動揺が隠し切れずにいた。それこそ、ついさっきまで抱えていたはずの怒りが、一瞬で消え去る程に。

「どうしたんだい？ そんなにさっきの攻撃を躲されたのがショックだったのかな？」

「……っ！」

「しかし中々強力な炎の『魔術』を使えるようだね。『普段の状態』でこれか。という事はやはり、ガラムの言っていた事は事実のようだ。まあそれ以前に、こうして確かな証拠があるのだから、否定しようがないのだからうけどね」

「……？」

ボルガは何かブツブツと呟いていたようだが、最後の方になる程、俺には上手く聞き取れなかった。

僅かに首を傾げている俺に、少し不思議そうな表情になったボルガが、再び尋ねてくる。

「ところで、あそこにいる彼女もキミのお友達なのかな？」

「え？」

ボルガに指摘され、奴が軽く指差した方向を見て、俺は一瞬肝が冷えた。

俺たちから五、六メートル程離れた位置に、もどかしそうな表情をしたリネが立っている。その光景が俺の脳裏に、嫌な記憶を蘇らせた。

以前、ここ『テルノアリス』の裏路地で、アーベント・ディベルグと戦った時の記憶。

あの時俺は、同じような事をアーベントに指摘され、気を逸らしてしまった隙を突かれて、剣で胸を切り裂かれた。

今まさに同じような展開を招いているにも拘らず、だが気付けば俺は、自分の身よりもリネの身を案じて叫んでいた。

「リネ！ 離れてる！」

俺の叫びを聴き、あの時と同じような顔をしたリネは、それでもどうにか踏み止まってくれた。

が、俺の方は言えば、ボルガから何かしらの攻撃を受ける事を覚悟していた。これだけ無防備な状態の敵を放っておくなんて、そんな甘い話があるはずないと。

それにしても、どうやらいつの間にか、俺の中での優先順位はかなり変わってしまったらしい。自分の身が危険に晒されてるのに、他の誰かの身を案じるなんて、考えてみれば相当バカな話だな……。

内心で自嘲気味に思っていた俺の正面からは、しかし攻撃ではなく、かなり意外な言葉が返ってきた。

「心配する必要はないよ。彼女に危害を加えるつもりはないし、今の隙を狙う、なんて野暮な真似をするつもりもない」

「！」

驚く俺を尻目に、ボルガは静かに続ける。

「私はキミたちの持つ『特別な力』に、興味があるからね」

「あ？」

特別な力、だって？ こいつまさか、リネが『妖魔』一族の生き残りだって事に気付いてるのか……！？

「興味があるからこそ、キミの力を試してみたい。その為には小細工なしで、真つ正面から受けるのが妥当だろう？」

疑問に思う俺に、ボルガはまた不敵な笑みを見せつつ、ゆっくりと四肢を動かし始める。

と、そこで俺は初めて気が付いた。右腕を空に掲げようとするボルガの右掌に、妙なものが刻まれている。

線分が三つに別れた正三角形の中心に、鳥の目を模したような模様がある記号。俺にはそれが何なのか、すぐに察しがついた。

つまりは、『印術』。

奴の右掌に刻まれた記号が意味するものは、『雷』だ。

「我が御手に刻まれし印に導かれ、降臨せよ、雷帝の剣」  
自らの右手を空へと掲げ、奴が言霊のようなものを詠唱した瞬間だった。

雲一つない青空の中、なぜかボルガの直上の空だけが、唐突に曇り始める。

ボルガの遙か頭上でもくもくと育つ、重たい灰色の雲。

一瞬雨雲かと思ったが違う。あれは雷雲だ。

重たい灰色をした雲が、猛獣の唸り声に似た重低音を響かせたかと思うと、次の瞬間、ボルガのほぼ真正面に凄まじい光を放って落雷が降り注ぎ、とてつもない爆音が辺りに響き渡った。

あまりにも激しい光と爆音に、俺は思わず両腕で顔を庇っていた。そしてゆっくりと両腕を下ろした所で、俺は自分とボルガの間に、ある物が割り込んでいる事に気付く。

「剣……!?!」

俺たちの間、ボルガのすぐ目の前の地面に、深々と突き刺さっている大剣。

長さはボルガの身の丈とほぼ同じ。刃の太さは大体三十センチ程だろうか。黒い刀身の中心には、根本から刃先まで流れるように、激しく波打った金色の模様が掘り込まれている。

そういえば、ジンが言っていたっけな。ボルガ・フライトは、雷を操る『魔剣』を持ってたつて。

多分、掌に刻まれた『印術』とあの『魔剣』は『魔術』で連動していて、決められた言霊を詠唱すると、即座に呼び出せる仕組みになつてるんだらう。

「さあ、もつとキミの力を見せてくれ。我が『雷帝剣』の力を以て、存分に手合わせ願おうか」

ボルガは『雷帝剣』の太い柄を右手のみで力強く握ると、地面に深く突き刺さっているはずのそれを難なく抜き去り、刃先を俺の方へと差し向けた。

あれだけ大きな物体を片手だけで支えているにも拘わらず、身体



の重心にブレが全くない。ただ剣を構えただけでここまで隙がなくなるなんて、こいつも只者じゃないって事か。

……いや、さっきの『クリムゾン・レイン深紅の流星』の件から考えれば当然かも知れない。あれが『魔術』の力で引き起こしたものだとしても、相当の手練れである事は否定しようがないだろう。

だけど奴の台詞の一部分に、気に喰わない点がある。

そこだけが唯一、俺の癪に障った。

「何が手合わせだ。あんたとそんな有意義なモンを交わすつもりは、最初っから頭にねえんだよ」

「ほう……。ならばどうするつもりなのかな？」

「決まってるんだろ！」

俺は叫ぶと同時に、右手に炎を集束させる。

『魔術』によつて造り上げた炎剣、『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』を握り締め、俺は力強く地を蹴り付けて、ボルガの許へと直進する。

「徹底的に叩き潰す！」

またも不敵に笑い、大剣を振り上げるボルガ。

炎剣と雷剣。ほんの一瞬の内に、二つの刀身は重なっていた。

## 第七章 名を知る者と知らぬ者（後書き）

という訳で、第七章でした。

それにしてもこの『雷帝出現編』、もしかしたら………というかもっ

確実にシリーズ中最長の内容になってるw

やっぱ文字数削った方がいいのかなあ………？

## 第八章 終わりを迎える彼の地の戦い（前書き）

大変長らくお待たせしました、『雷帝出現編』第八章です！

## 第八章 終わりを迎える彼の地の戦い

聞きたくはなかった。俺はその名を聞く事を、心のどこかで恐れていた。

だがそれと同時に、ずっと探し求めていたのも事実だ。

その者の名は、ボルガ・フライト。

雷を操る『魔剣』を持つ、忘れられぬ存在。

俺が最も憎むべき、仇の名。

ガイザックが口にした『あの男』の名を耳にした事で、俺は全身が凍り付くような感覚に襲われた。

なぜ奴がここにいる？ なぜこの局面でその名が出て来る？

況して俺が今対峙している『魔術師』は、この大陸に未曾有の危機を齎そうとしている闇組織、『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』に与する人間だ。そんな連中と『あの男』が、なぜ繋がりを持っている！？

「信じられねえって顔だな」

「！」

動揺の余り呆然としていた俺は、愉快そうな声で話すガイザックの言葉で我に返る。

前方に焦点を合わせると、聴こえてきた声の様子を、そのまま表情に表したガイザックがこちらを見つめていた。

「……どういう事だ。なぜあの男が、貴様ら『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』と手を組んでいる！？」

「おいおい。てめえ、ちゃんと俺の話聞いてたのかよ？」

ガイザックは心底呆れたような表情になると、動揺に囚われたままの俺を諭すかのように、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「さっき言っただろうが。ボルガ・フライトは『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』を組織した創設者であり、『破壊者』である俺たちを束ねる首領だって

よ。思考回路は生きてますかあ？ 動揺し過ぎて脳細胞がブツ飛んでんじゃねえの？ ギャハハハハハッ！」

「……………」

耳障りな声を上げ、腹を抱えてガイザックは笑う。

その様子が、動作が、俺の胸に言いようのない不快感を齎す。奴の……、ボルガ・フライトの名を出されているからこそ、上手く呑み下すだけの余裕が、今の俺には無い。

黒と白の剣を握る両手に、骨が砕けてしまいそうな程、余分な力が入る。

冷静にならなければいけないと、自分自身に言い聞かせても、その命令は即座に消去されてしまう。

ある意味、ガイザックの言う通りだ。ボルガ・フライトと言う名を聞いただけで、俺の思考回路は一切纏まらなくなっている。

するとそんな俺の耳に、またもや不快な声が響いてきた。

「ところでよオ。さつきからそこに突っ立ってる外野は、ハートラーくんのお友達ですかア？」

「……………」

ガイザックの細い眼が、まるで獲物を狙う猛獣のようにギラついた事で、俺は瞬時にその言葉の意味を悟った。

俺たちから十メートル程離れた建物の陰から、心配そうな様子でこちらを見ている者。

銀色のベールを纏ったその女性の許に、突如として周囲から出現した十体の人型『ゴレム』が、彼女の身体に折り重なるうとするかのような勢いで殺到していく。

「エリーゼっ！」

本当に一瞬だった。

先程まで動揺に支配されていたはずの俺の身体は、瞬時に、そして猛然と駆け出していた。

「退けえ、人形どもおおおおおおおおっ！！！」

腹の底から怒鳴り、俺が両腕を胸の前で交差させた瞬間、視界の

中でエリーゼがその場に屈むのが見えた。

それを合図と受け取り、俺は両腕を前方に勢い良く振り抜く。

「『黒白雷閃』！」

前方に向けて打ち出した黒と白の衝撃波が折り重なり、渦を巻きながら直進する。

ほんの一瞬で十メートルの距離を詰めた衝撃波は、屈んでいるエリーゼを避けるようにして十体の人型『ゴーレム』を巻き込み、その身体を容赦なく爆散させた。

「エリーゼ、怪我はないか？」

数秒遅れてエリーゼの許に駆け付けた俺は、立ち上がるうとする彼女に手を貸しつつ、その身の安全を確かめる。

するとエリーゼは、若干躊躇いがちに口を開いた。

「え、ええ。何ともないわ。ありがとう」

俺は僅かに安堵して息を吐く。

そして次の瞬間には、ガイザツクの事を睨み付けていた。

「随分と下衆な真似をするんだな。抵抗する力を持たない者を痛め付けて、楽しいのか？」

俺は自覚出来る程に語気を荒くして、少し距離の出来たガイザツクに言い放つ。

先程までの動揺は、俺の中から完全に吹き飛んでいる。その代わり、俺の胸中には新たなものが生まれていた。

ガイザツクに対する、燃えるような怒りだ。

そんな俺の心中を察しているのか、ガイザツクはやや真剣な表情で答える。

「ああ、楽しいね。弱者をいたぶるのは人間の習性であり本能だろ？俺はただ、それに従って正直に生きてるだけだ」

「最低だな」

「だからこそ面白えんじゃないか。『あの時』も今と同じで気分爽快だったぜ」

「『あの時』、だと……？」

怪訝に思い聞き返すと、その瞬間、またしてもガイザックの表情が歪み始めた。

この上なく、愉快そうに。

この上なく、面白そうに。

そして奴は告げる。両腕を広げ、天を仰ぎながら、狼が月に向かって咆哮するかのようには。

「決まってるだろ！？ かの『英雄』、ミレーナ・イアルフスを痛め付けてやった時だよ！」

「！！！」

ガイザックの口から吐き出された言葉が、俺の脳を瞬時に駆け巡った。信じ難い事実によって、僅かに動悸も早くなる。

この男がミレーナさんを襲撃した、だって？

「ホント最高だったぜ！ あの女、どうも記憶を失ってやがったみたいだよあ！ 『魔術』も使えねえ上、自分が誰かもわかってねえモンだから、成す術無く逃げ回ってたんだぜえ！？ 途中で崖から落ちて逃がしちまったのが、ホント惜しかったぜえ！」

「……一つだけ確認したい。貴様は記憶を失くした彼女を……、たった一人だったミレーナさんを、人型『ゴーレム』に襲わせたのか？」

「ああ、そうさ！ 大量に生み出してやったぜえ！？ それこそ、<sup>なぶ</sup>翱り殺して言葉がピッタリなくならいになあ！！！」

……そうか。デインから事情を聞いてはいたが、こいつが記憶の無いミレーナさんを襲った張本人だったのか。

彼女、ミレーナ・イアルフスは、『<sup>アジュール・ファウンテン</sup>紺碧の泉』で保護された時、かなりボロボロの状態だったらしい。

身体中に打撲や裂傷を受け、着ていた服も原形がわからなくなる程スタスタにされた、眼も当てられぬ姿。

記憶を失っていたとはいえ、敗北した『英雄』の惨たらしい姿を、

一体誰が想像し得ただろうか？ 恐らく、いやきつと、彼女の弟子であるディーンですら、そんな姿を想像した事もなかっただろう。だからこそ俺は、今この場にディーンがいなくてよかったと、少しだけ安堵してしまった。

あいつがこの男と遭遇し、この事実を耳にしていたとしたら……。あいつは間違いなく激昂し、全力で戦おうとするだろう。

それこそガイザックを、問答無用で戦闘不能に追い込む程の力を使つて。

……だが悪いな、ディーン。どうやら今回ばかりは、お前に譲る訳にはいかない。

俺にもこの男に対して、すでに剣を振るう理由が出来ている。

だからせめて、お前が感じるはずの激しい怒りも、俺の怒りに上乘せしておこう！

眼の前の下劣な生物を、叩きのめす力として！

意を決し、俺はここぞとばかりに足に力を込め、ガイザックに向かって猛然と駆け出した。

「面白え！ 掛かって来いよ、ジン・ハートラー！ ギャハハハハッ！」

歡喜するかのように叫ぶガイザック。奴の右手には、いつの間にか鉄製の鉤爪が携えられていた。

長さ二十センチメートル程の三又に別れた鉄の爪が、手甲部分から垂直に伸びている。

その手甲の部分に嵌め込まれている、菱形に加工された黄土色の水晶。

どこか怪しげな光を放つあの水晶こそ、ディーンが言っていた、奴の『魔術』の『核』となつている物に違いない。

その証拠に、ガイザックは再び叫んだ。

「銀髪野郎をブツ殺せ！ 人形どもおっ！」



奴の言葉に呼応するかのように、水晶が一際強く光を放つと、俺の周囲から黄土色の液体が無数現れ、瞬時に五体の人型『ゴーレム』に形を変える。

意表を突かれそうになったものの、俺は何とか急停止し、両手の剣を握り直した。

「ふっ！」

短く息を吐き、右手の剣を横薙ぎに振るい、正面を塞いでいた人形の胴を上下に両断する。

その身体が崩れ落ちるのを待たず、俺は地面を蹴って跳躍し、左前方から襲い掛かるうとしていた別の人形に向けて、左手の剣で上段斬りを放つ。

落下の速度も加わった事で、人形の身体は頭頂部から股まで、一直線に真っ二つになった。

残り三体　！

「『黒閃』！」

着地とほぼ同時に、右手の『黒裂剣』に蓄えていた力を、横薙ぎに振るう事で開放させる。

三体同時に飛び掛かって来ようとしていた人形たちは、黒い閃光に一瞬で吞まれ、その身体を爆散させた。

この勢いを殺さず、ガイザックに追い討ちを掛ける！

と、次の動作に移ろうとした瞬間だった。

「ジン！　真上よ！」

「！」

背後から聴こえたエリーゼの声で、俺は咄嗟に防御を選んだ。

上空から飛来したのは、ガイザックの攻撃。鉤爪が交差させた二本の剣と衝突し、耳を刺すような金属音が鳴り響く。

「ヒヤッハアッ！」

鉤爪の一撃を防ぎはしたものの、ガイザックの追撃を防ぐ事は出来なかった。

奴が左足から放った中段蹴りが、俺の右脇腹に突き刺さる。

「ぐつ!?」

鞭のように撓しなった横合いからの一撃で、一瞬だけ身体が宙に浮く。受け身を取れなかった俺は、そのまま地面に倒れ込み、石畳の道を数メートル程転がってしまふ。

「オラオラどうしたあ!? まだ動揺してんのかジン・ハートラーさんよお!」

挑発するかのような叫び声が、起き上がるうとする傍から聴こえてくる。

だが俺は返事をせず、体勢を立て直すと同時に、再びガイザックの許へ突貫した。

人形を造り出す暇を与える訳にはいかない!

長期戦になればこちらが不利だ!

次の一撃で、決める!

「『黒白雷閃』!」

両手の剣の刀身に、黒と白の光が集束していく。

突進しながら放った『魔剣』の一撃は、直後に凄まじい爆発と爆風を齎した。

ある意味、一方的な展開だった。

『深紅魔法』のあらゆる技を駆使して攻撃したにも拘らず、俺の炎は、一度たりともボルガを捉えられない。

『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』も。

『クリムゾン・レイン深紅の流星』も。

『バーニング・クロス烈火の十字爆撃』も。

『フレイム・チェイン紅蓮の縛鎖』も。

ボルガの異常な回避速度によって、悉く躲かれてしまう。

「おおおおおおおおあああッ！」

俺から五メートル程離れた位置で、優雅に佇むボルガに向けて、俺はもう何度目になるかわからない『クリタム・レイン深紅の流星』を撃ち込んだ。

炎の塊が無数の火球へと変化し、流星のように降り注ぎ、継いで起こる連鎖爆発によって、石畳の地面が粉々に碎かれる。

そんな光景を、俺は一体何度眼にしたんだろう？

だが、何度試そうと結果は同じだった。

「どうしたんだい？ 捉えられていないよ」

「ッ！」

またしてもボルガの声は、俺の背後から聴こえてきた。

齒噛みして振り返ると、どこか余裕のある表情で立ち尽くしているボルガの姿が眼に映る。これももう、何度も見た光景だった。

どうしてだ……！ どうして全部躲される！？ 一体あの移動速度は何なんだ！？

「そんなに不思議なのかな？ 私がキミの攻撃を躲し続けられる事が」

「！ くっ……」

俺の表情から内心を見抜いたのか、ボルガは不敵な笑みを湛えて告げる。

と、そんな表情のまま、ボルガは大剣の刃先を俺の方へと差し向けた。

「『雷霆衝波』」

奴がそう言い放った瞬間、耳を突き刺すような鋭い音を鳴り響かせながら、大剣の刀身に電撃が発生し、それが刃先へと集束していく。

そしてボルガが突きを放つと、その動作に合わせて電撃が前方に

向けて発射された。

「ッ！」

飛来する鏃の形と化した電撃を、俺は片手の力だけで左に側転し、どうにか回避する。

だが体勢を立て直した時には、またもやボルガの姿が消え去っていた。

「どこに」

「デーン！ 後ろ！」

「……！」

遠くから戦況を見守っているリネが叫んだ事で、俺は背後を振り返りながら右手の『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』を水平に構えた。

その直後。容赦無く振り下ろされた黒く太い刀身が、炎剣に勢い良くぶつかって止まる。と同時に、銃弾が発射された時のような衝撃音が辺りに木霊す。

今の音は、双方の剣に込められていた『魔術』の力が鬨ぎ合い、相殺された為に起こった現象だ。

「パートナーに上手く助けられたね。でなければ今頃、キミの身体は両断されていたはずだよ」

「……！」

鏑迫り合いの状態のまま、ボルガは涼しい顔をして言い放つ。

認めるのは悔しいが、だが確かにその通りだ。リネが叫んでくれていなければ、俺は今の攻撃を防ぐ事が出来なかつただろう。

それにしても、いくら何でもこの状況は可笑しいとしか言えない。今の一連の動作にしたって、ボルガの移動速度は、人間が出し得るものとしては異常過ぎるんだ。

勘違いなどでは決してない。明らかに奴は、何らかの『力の影響  
下』にいる……！

「あんたのその移動速度、『魔術』を使ってるのか？」

俺は率直に、自分の見解を確かめる為に問い掛ける。

すると意外にも、ボルガはあっさりと答えを返してきた。

「半分正解、と言った所かな」  
「半分？」

俺が問い掛けると、ボルガは大剣を大きく振るい、鏝迫り合いの状態から無理矢理俺を引き剥がした。そして俺と距離を取りつつ、静かに続ける。

「キミも気付いているだろうが、私が持つこの『雷帝剣』は、『魔剣』と呼ばれている代物だ。この剣にはちょっとした細工が成されているんだよ。もちろん、『魔術』的な意味でね」

そう口にしながら、ボルガは大剣を水平に構え、刀身の表面を俺の方へと向ける。

何をする気なのかと身構える俺の前で、奴は静かに呟いた。

「『鳴神』」  
なるかみ

一瞬の出来事だった。

俺が一度瞬きした瞬間に、今の今まで目の前に立っていたはずのボルガの姿が消えていた。

動いた事に気付けなかつたとか、そういう次元の話じゃない。

まさに文字通り、その場から忽然と消え去ったんだ。

「つまりはこういう事さ」

またしても突然、ボルガの声は見当違いの方向から聴こえてきた。声がしたのは背後。振り返るとボルガは、六メートル程離れた位置にある、高さ三メートル程の黒塗りの街灯の上に悠然と立っていた。街灯の天辺は、一人が漸く立てるかという程狭い足場だといふのに、ボルガの身体は一切揺らいでいる様子がない。

「この『雷帝剣』の影響下にある者は、その身に雷光の力を宿す事で、瞬発力や反射神経を著しく強化する事が出来るんだよ。私がキミの攻撃を躲したり、目視不可能な移動速度を出し得たのは、この剣の御陰という訳さ」

ボルガは不敵に笑いつつ、軽く跳躍して街灯の天辺から飛び降り

る。

ドスツという鈍い音を立てて地面に着地したボルガは、「だが…」と付け加えるように再び口を開いた。

「この力も万能という訳では無くてね。『雷光の力をこの身に宿す』とは、要するに『魔剣』を介して身体中に電氣的刺激を加える事によつて、肉体を無理矢理動かしているという事に他ならない。キミの眼からどう見えているかは知らないが、それでも今の私は、かなり体力を消耗しているんだよ？」

自らの手の内を晒すような事を言つて、ボルガはフツツと笑う。俺には、そんな奴の行動がまるで理解出来ない。

一体こいつは、何を求めて俺の前に姿を現したんだろう？

「……あんた、一体何がしたいんだ。まさか、自分の戦法をわざわざ俺に見せる為に来た、とか言うんじゃないかねえだろうな？」

「その逆だよ。私は、キミの力をこの眼で確かめる為に来たんだ」

「あ？」

言葉に含まれている不穏な空気を察し、俺は思わず顔を顰めてしまふ。

だが当のボルガは、それを意に介した様子もなく続ける。

「隠す必要なんてない。キミの力はこんなものじゃないはずだ。なぜキミは、自らの力を抑え込むような愚かな真似をするんだい？」

「？ 何の話」

そう言い掛けて俺は、ある事を思い付く。

この男はさつき、ガラムから俺の事を聞いたと言っていた。あいつが見た俺の力と言えば、『ワーズナル』で発動した『あの力』しか考えられない。

『ワーズナル』近郊の『グレッグス鉱山』内において、『導力石』の影響で『魔術』を発動出来なくなつた俺は、無意識の状態で謎の力を発揮し、ガラムとシガードを退けたらしい。

俺はその時の事をあまりハッキリと覚えていない。自分がどうやってそんな力を使ったのかすら曖昧なままだ。だが、恐らくボルガ

が見たがっているのはその時の力の事だろう。

「……別に抑え込んでるつもりなんてない。俺が使える力は、『魔術』は、ミレーナに教えてもらった『深紅魔法』だけだ」

「それは違うよ」

謙遜ではないにしろ、否定する俺の言葉に、ボルガは即座に否定の言葉を重ねて来た。

まるで俺の全てを、余す所無く知り尽くしていると言っているかのように。

「キミは力を使えないんじゃない。キミが自分の『本当の力』を知らないだけだ。『自分が何者なのか』、という事もね」

「!? どういう意味だ……!」

俺が疑問の言葉を投げ掛けると、ボルガは不適に笑って大剣の刃先を俺に差し向けた。

たったそれだけで、近づく事も、況して動く事も許されない程の圧倒的な威圧感が、俺の身体を締め上げてしまう。

「知りたいかい? キミ自身の本当の力を。本当の存在を。キミが知りたいと願えば、私がその答えを教えてあげよう」

「……!?!」

さつきから何を言ってるんだ、こいつは?

まるで俺を、見通しの利かない道の先へ導こうとするかのような

台詞。

何だか得体が知れない。

理由はわからないが、漠然と不気味さを感じてしまう。

この男の言葉に、耳を傾けちゃいけない……!

そう結論付けた瞬間、俺は既に『魔術』を発動し、炎を生み出していった。

散々試した揚句、『雷帝剣』を持ったボルガに命中させるのはほぼ不可能だとわかっていながら、それでも俺は予備動作を行なっていた。

『深紅魔法』の大技、『クリムゾン・レイン深紅の流星』発動の動作を。

「うおおおおおおおおおつ！！」

凝縮した炎の塊が、俺の叫びと共に弾け飛ぶ。

無数の火球と化した、流星のように飛来していく炎。

その光景の中で、ボルガが俺の方を見つめ、静かに口を開くのがわかった。

「そうか。どうやらまだ、『完全に』目覚めていないようだね。早計だった、という事なのかな」

落胆しているような言葉を吐きながら、ボルガは大剣を片手で上段へと掲げる。

「『雷霆衝波・鉄鎚』」

ボルガがそう言い放った瞬間だった。

突然、奴の直上の空にドス黒い雲が発生したかと思うと、視界が真っ白に染まる程の凄まじい光が、俺の放った炎に目掛けて落ちてきた。

「なッ！？」

辛うじて眼で追う事が出来たのは、そこまでだった。

身を切るような凄まじい爆風と、耳がおかしくなるんじゃないかと思う程の激しい爆音。その二つの現象によって、一瞬意識が飛びそうになる。

視界が二転三転し、自分が今立っているのかどうかもわからない。数秒後、俺は背中から硬い何かにぶつかった。

と、そこで俺は漸く気付く。ボルガが『魔剣』から放った雷撃の爆風に煽られ、自分の身体が数十メートルも吹き飛ばされている事に。

俺が背にしているのは、広場の端にある建物の壁だった。

煉瓦造りの壁に背を預けたまま、俺は全く動く事が出来ない。意識はあるが、さっきの衝撃で身体の方が麻痺しているみたいだ。

……おい、待てよ。そういえば、リネはどこに行った？



少し離れた位置で俺とボルガの戦いを見守っていたとはいえ、あいつの許にも相当な激しさの衝撃波が押し寄せているはずだ。もしかしたら、吹き飛ばされて何かにぶつかり、怪我をしている可能性だってあるかも知れない。

俺は自分の状況よりもリネの安否が気に掛かり、彼女を探す為、どうにかして身体を動かそうと躍起になる。

と、その時だった。

「自分自身の事より、パートナーの事を気に掛ける。何とも涙ぐましい騎士道精神だね」

「！」

声のした方に視線を合わせると、いつの間にかすぐ目の前に、ボルガが悠然と立っていた。

俺は反論の言葉を口にしようとするが、身体が麻痺しているせいか、上手く声を発する事が出来ない。

俺が僅かに口を開け閉めしていると、ボルガは俺の隣に片膝を付いて屈み込んだ。

「今は無理に動かない方がいい。心配しなくても、キミのパートナーは無事だよ」

「！」

「今頃ガラムたちは、自らの仕事を全うしてくれている事だろう。だから私も、キミに面白い事を教えておいてあげるよ」

不敵な笑みを見せつつ、ボルガはゆっくりと顔を近づけてくる。もちろん抵抗する力の無い俺には、どうする事も出来ない。

そして奴は、俺の耳元で『ある事』を静かに囁いた。

「」

それは、俄かには信じ難い事実。

なぜこの男が『それ』を俺に教えるのかが、全く理解出来ないものだった。

疑問の表情（作れているかどうかはわからないが）を浮かべる俺を他所に、ボルガは不敵な笑みのまま立ち上がり、静かに告げる。

「信じるかどうかはキミ次第だ。だが私は確信している。きつとまた、キミに会えるという事をね」

そう言つて、ボルガは踵を返し、俺に背を向けて何処かへと歩き出す。

恐らく『鳴神』なるかみとやらを使ったんだろう。

次の瞬間には、奴の姿は消え去っていた。

左の脇腹の辺りに、熱を帯びた激しい痛みが走る。そして気付けば俺は、両手の剣を取り零し、地面に両膝を付いていた。

「ジンっ！」

痛みの余り、左脇腹を両手で押さえていると、エリーゼがこちらへ駆け寄つてきた。銀色のベールの下に覗くその表情は、とても焦っているように見える。

「エリーゼ、怪我は」

「私は平気に決まってるでしょ！ それよりあなたの方よ！ 傷口を縛るからジツとしてて！」

ほとんど怒鳴り声に近いものを浴びせ、エリーゼは自分の服の袖を無理矢理引き千切り、包帯の代わりにするみたいに、俺の胸へと巻き付けていく。

しかし、俺の腕もまだだ。この傷は恐らく、ガイザックと交差した瞬間に、奴の鉤爪で僅かに肉を抉られたんだろう。怪我をした事に気付くのが遅れたのは、それだけ奴の反撃が俺の意表を付いていたという事だ。

奴の姿は今、目視出来ない。

なぜなら奴は、大通りの商店の壁を突き破り、その中で瓦礫に埋まっているはずだからだ。

俺が渾身の力を込めて放った、『黒白雷閃』<sup>こくぱいかいせん</sup>。ほぼ間合いを開けずに放ったその一撃は、奴の身体を吹き飛ばす事に成功した。

結果的に反撃はされていた訳だが、それでも、これで奴も無事では済むまい。後は上手く、奴の『魔術』の『核』が破壊されていればいいんだが……。

「ぐっ……!!」

「ちよっ、大丈夫!？」

応急処置をしてきているエリーゼが、情けない俺の声に心配そうな声を上げる。彼女のこんな様子を眼にするのは、本当に久しぶりの事だ。

「問題ない、と言えば嘘になるな……ッ。もしも今の一撃で決まっていなければ」

「決まっていなかったら、どうだったんだ？」

「!」

俺は思わず、声のした方を振り向いてしまう。

俺から十メートル程離れた位置。商店の壁に出来た直径四メートル程の穴の中から、その絶望的な声は聴こえてきた。

声の主ガイザックは、まるで土煙を引き連れるかのように、ゆっくりと穴の中から現れた。

奴が着ていた枯色のマントは、ほとんど布切れ同然になっていて、唇や額の辺りには僅かに血が滲んでいる。

手傷を負わせる事には成功している。が、意識を断つまでには至っていないかった。

「チッ……。正直『魔剣』の力つてのを侮ってたぜ。まさかここまで威力のあるモンだったとはな。道理でボスが好んで使ってる訳だ」

「!!!」

苦笑するガイザツクの言葉で、忘れかけていた事実が再び蘇る。

今この街にあの男が……、ボルガ・フライトがいる事を！

「答えるガイザツク！ 奴は……、ボルガ・フライトはどこにいる！？ 奴が会いに来た人間とは誰なんだ！」

「うるせえなあ。どこにいるかまで俺が知ってる訳ねえだろ。それに、ボスが会いたがってた奴の名前も忘れた。ああ、でも確か、紅い髪がどうだのと言ってた気がするな」

「！？？」

紅い髪、だつて？ その外見的特徴が付随する人間は、俺の知る限り一人しかいない。

デイン・イアルフス。

『英雄』ミレーナ・イアルフスの弟子であり、『深紅魔法』の使い手。

俺の戦友であり、親友でもある少年だ。

そんな、俺にとって大切な存在である彼に、なぜボルガ・フライトは接触を図ろうとしている！？

「どういう」

更にガイザツクに詰め寄ろうと俺が口を開き掛けた、丁度その時。突然、遠く離れた首都の街並みの一角に、謎の光が降り注ぎ、盛大な爆音が響いてきた。

その光が齎したものののだろうか。数秒遅れて、俺たちの許にまで激しい爆風が吹き抜けてくる。

「きゃっ！」

俺のすぐ隣にいるエリーゼが、爆風に煽られ転びそうになる。彼女は倒れる事こそなかったが、その表情は驚きを隠せないようだ。

「何なの、今の光……？」

光が落下した方角を見つめ、疑問を口にするエリーゼ。

だが彼女と違って、俺にはあの光に見覚えがあった。

忘れるはずがない。

忘れようもない。

あれは、あの光は。

「『雷帝剣』……！」

「！ えっ？」

俺が呟いた言葉を耳にし、エリーゼは僅かに首を傾げる。

それもそのはずだ。彼女は俺と長い付き合いだが、全ての事情を知っている訳ではない。俺の生い立ちを事細かに語れる人間は、極限られた者しかいないのだから。

いずれにしろ、今の光で確信する事が出来た。

ボルガ・フライトは、間違いなくこの街にいる！

「お〜お〜、ボスも随分派手にやってやがんなあ。……って事はあれか。目的の人間に会えたって事か？」

俺たちと同じく、光が落ちた方角を見つめていたガイザックが、ニヤニヤしながらそう言った。

確かに、ガイザックの言葉通りだとすれば、あの方角にはボルガと、恐らくデーンもいる事になる。あいつの身も心配だが、同行しているリネは無事なんだろうか？

と、そう思っていた時だった。

「あ〜っ、いた！ もう、こんな所で油売ってたのお〜？ 無駄に探し回っちゃったじゃんかあ〜」

妙に間延びした緊張感のない声が聴こえて、思わず俺は声のした方に眼を向けてしまう。

声の主は、十代前半の少女だった。黒と白の縞模様が入った長袖のシャツに、紺の短いスカートを履いている。少々短めの鈍色の髪は、お洒落としてなのか、少しボサついた髪形をしている。

一見大人しそうな雰囲気少女。だがその少女の視線は、明らかにガイザックに対して向けられていた。

「何だよパーニヤ、もう迎えに来やがったのか？」

「さっきの光見たでしょ〜？ ラズから聞いたんだけど、あれが撤

収の合図なんだってさあ」

「そうかよ。ま、言われなくてもそうするつもりだったがな。この通り、玩具が壊されちまったんでね」

皮肉げに笑いつつ、ガイザックはパーニヤと呼んだ少女に、自分の右手を見せつける。するとその手に装着されている鉤爪が、原形を留めない程に拉<sup>ひきちぎ</sup>げていた。

どうやら俺の放った『魔剣』の力は、ガイザックの『魔術』の『核』を打ち抜く事が出来ていたようだ。

「壊されたって誰に〜?」

「てめえの眼は節穴か。さつきからそこにいんだろっが」

言いながらガイザックは、忌々しそうに俺の方を指差す。

それに促される形で、少女は漸く俺の存在に気付いたようだ。

「銀髪に黒と白の剣……。そっかあ、キミがジン・ハートラーだね」

「……そういうキミは、その男の仲間なのか?」

ガイザックを一瞥してから尋ねると、少女は「うん、そうだよ」と言っ、ニコリと笑ってみせる。

「アタシの名前はパーニヤ・ロンドベル。見ての通り『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』の一員だよ。よろしくね、ジンくん」

少女パーニヤは場違いな程明るい。それこそ、自らが『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』の一員だとは到底思えない程に。

一体なぜこんな少女が、闇組織などと呼ばれる連中と行動を共にしているのだろうか?

「……キミは、自分がどんな連中に加担しているのか、本当に理解してるのか?」

「!」  
つい口から出してしまったその言葉で、パーニヤの顔から笑顔が消え去る。ほんの一瞬で、少女の雰囲気ガラリと変わってしまった。

「キミの隣にいる男だけじゃない。『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』に所属している

人間は、他者の命を平気で弄ぶ」

「どうでもいいよ、そんな事」

「！」

無表情で俺の言葉をそう遮り、パーニヤはジッと俺を見つめ返してくる。その視線は、予想し得る彼女の年齢とは掛け離れた、歳不相応な冷徹さを孕んでいた。

「ホント、聞いてた通り綺麗事しか並べられないんだね。自分は正義の味方で、アタシたちは悪人だつて言いたいのか？ だとしたら言っておいてあげる」

パーニヤはそう前置きし、僅かに腰を折り、身を低くする形で視線を下げる。そして、まるで屈んでいる俺に言い聞かせるかのように、ゆっくりと口を開く。

「アタシたちの間に、善悪の区別なんてつけるだけ無駄だよ。要は殺すか殺されるかの、二択しかないんだからさあ」

少女の言葉は平淡で、どこまでも冷たいものだった。一体どんな生い立ちがあれば、こんなに幼い少女が、ここまで荒み切ってしまったのだろうか？

「そろそろいいか？ こっちは撤退しなくちゃならねえ身なんだ。敵を説得しようなんてくだらねえ考えに付き合ってる暇はねえんだよ」

俺たちの間に割って入るかのように、ガイザックは少々イラついていっているような表情で告げる。

するとそれに答えるように、パーニヤは姿勢を正すと、スカートの腰の部分に付いている長方形型の革のケースの中から、白いカードの様な物を一枚取り出した。そのカードの表面には、何か記号のような物が記されている。

点線で書かれた円を中心に、三方向に伸びる菱形。

……そういえば、以前デインから聞いた事があったな。『魔術』

の力を記号として刻み付ける事で、様々な能力を発揮させる、『印術』と呼ばれる技術があると。

もしかしたら、少女が持つあの革のケースの中には、いくつもの『印術』が刻まれたカードが収納されているのかも知れない。

「じゃあね、ジンくん。もしまた会う機会があったら、その時はアタシとも戦ってくれと嬉しいな」

再び笑顔を見せるパーニヤは、最後にそんな台詞を残して、右手に持ったカードを頭上に掲げる。

するとその途端、パーニヤとガイザックを包み込むのように、荒れ狂う程の強風が発生し、二人の身体を空高く飛翔させた。

やがて空中で方向転換した二人の身体は、首都の南の方角へと流れていく。

二人の姿は、すぐに見えなくなった。



## 第八章 終わりを迎える彼の地の戦い（後書き）

何度も言いますが、遅くなつて大変申し訳ありません。

遅筆街道まっしぐらな作者ですが、恐らくあと二章程で、この『雷帝出現編』も終わりを迎えると思います。

本当長過ぎますね、色んな意味で……。

伏線が解き明かされていくと同時に、様々な因縁が生まれていく……、という風に書いてるつもりなんです、上手く行つてるんでしょうか？w

続きを気にしてくれている方がいる事に感謝しつつ、これからも精一杯執筆を続けようと思います！

それではまた次回！ノシ

## 第九章 英雄の行方（前書き）

お待たせしました！

この第九章、及び次話の終章を以て、漸く『雷帝出現編』も終わりと相成ります！

## 第九章 英雄の行方

金や銀で細かく装飾された豪華な来客用の長机が、今にも砕かれてしまいそうだった。

「ああッ、ちくしょう！ あのバンダナ野郎、俺との戦いを放棄して逃げやがってえッ！」

憤慨して何度も机に拳を打ち付けるランザは、さっきからずっとこんな調子だ。

私は今、フォード、ランザ、バルベラの三人と一緒に、テルノアリス城内の一室に招かれている。

突如として首都を襲撃した『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』が逃げ去ってから、既に二時間近くが経とうというのに、ランザの興奮は治まりそうになり。どうやら彼は、『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』を取り逃がした事よりも、自分が最後まで気持ち良く戦えなかった事に腹を立てているみたいね。まあ斯く言う私も、スッキリしない結果だったという点だけは、多少なりランザと通じるものがある。

ガラムとシグードがテルノアリス城を襲撃した後、私はフォードと共に市街へ出たものの、結局ティーンくんたちと合流する事が出来なかった。

街中に蔓延っていた人型『ゴレム』の処理に手間取った（尤も、倒していたのはフォードだけ）というのもあるし、突然の襲撃で混乱する市街の中を、思うように進めなかったというのもある。

そうして私とフォードが四苦八苦している間に、人型『ゴレム』は出現しなくなり、市街の一角に落雷のような現象が起きた事を皮切りに、『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』が撤退を始めた為、私とフォードは、何だかよくわからない内に正規軍兵士に保護されてしまった。

そんな経緯があつてから、城に戻った私とフォードを待っていたのは、同じく正規軍兵士に保護されたいらしい、ランザとバルベラの

二人だった。

二人はどうやら、市街を西へ東へ移動しつつ、それぞれガラム、シグードの二人と戦っていたようだ。

が、その戦いを放棄する形でガラムたちも撤退した為、こうしてランザは憤りを露わにしている。

「いい加減落ち着きなさいよ野蛮人。過ぎた事はどうしようもないでしょうが」

興奮し続けるランザを窘めるようなバルベラの声で、私は思考の渦から抜け出した。見ると彼女は、右手に持った扇子を広げて、肌触りの良さそうなソファーに優雅に腰掛けている。

「だけど、気のせいかしら？ ランザにそんな言葉を放った彼女自身も、どこか不満そうな顔をしているように見えるんだけど……。」

「だがよオ……ッ！」

「もういいだろ、ランザ。納得いかない点は多々あるだろうが、それでも戦いは終わったんだ。お前も少し、身体を休めた方がいい」

「……チツ」

念を押すようなフォードの発言に、ランザは渋々といった様子で従い、バルベラの向かい側にあるソファーへと乱暴に腰を下ろした。それにしてもこの二人、強敵と一戦交えた後だというのが信じられない程、身体に目立った外傷が見受けられない。それだけこの二人は、戦いを優勢に運んでいたという事なのかしら？

「今は襲撃を受けたばかりだからな。恐らくどの機関も、事後処理や情報収集に追われて混乱しているはずだ。俺たちがここに呼び集められて以降、何の音沙汰もないというのが、その証拠だろう」

若干上の空だった私は、フォードの真剣な声で我に返る。

すると、そんなフォードの言葉に付け足すかのように、どこか面倒臭そうな表情でバルベラが口を開く。

「こんな状態じゃあ、いつ元老院と謁見出来るかわからないわねえ……。私たちって、一応あの人たちに報告の義務があるんでしょ？」

「ああ。『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』が言い残して行った内容も含めて、な」

フォードは僅かに嘆息すると、腕を組んでどこともない虚空を見つめた。

そんな彼の表情を見ていた私の脳裏にも、不敵に語っていたガラムの表情が過る。

これは宣戦布告だ、と。

「……ねえ、みんな」

しばらく沈黙が続いていた室内に、自分の声が響き渡る。するとそれに答えるように、三人の視線が私の方に集中した。

「ガラムが言ってた、『かつての悲劇の地』って、どこなの？ みんなは見当がついてるのよね？」

私が順番に三人の顔を見ると、みんな一様に、複雑そうな表情をしていた。まるでその場所の名を口にする事を、躊躇っているかのように。

「……昨日ここで話した事を覚えてるか？」

それでも、そう切り出したのはフォードだった。僅かに動揺の色が浮かぶ彼の瞳が、真っ直ぐ私を捉えている。

「デーンが連れていたリネという少女が、『妖魔』一族の生き残りだと話しただろ？ ……かつての悲劇の地というのは、他ならぬ彼女の故郷の事だ」

「！ それって……」

以前私も、リネさんの口から聞いた事があった。

彼女が住んでいた村は、かの『倒王戦争』の際に、当時の軍によって滅ぼされてしまった、と。

「あの『倒王戦争』で、俺たちは『妖魔』一族を助ける事が出来なかった。『ブラウズナー渓谷』。それが悲劇の地と呼ばれている場所だ」

『ゴースト・コンダクター  
精霊指揮者』の襲撃から、二時間は経ったかなという頃。ディーンに連れられてジン、エリーゼさんの二人と合流したあたしは、未だ事後処理などで混乱している街中の一角に、ひっそりと身を置いていた。

というのも、合流したジンが左脇腹に怪我を負っていて、無理に動かす事を避けたかったからだ。

彼の怪我を見た瞬間、あたしはいつにも増して傷の治療を手早く始めた。そのせいか、ディーンが少し驚いた顔をしてたけど。

そんな彼の表情に少し照れ臭さを感じつつ、あたしはジンの治療を続ける。

するとその場で、ディーンとジンは情報の整理を始めようと言い出した。やっぱり二人とも、こういう所は歳不相応にしっかりしてるよね。

「ジン。俺……、お前に話しておかなきゃいけない事があるんだ」

なんて内心で感心していた時だった。

あたしの身体から溢れ出る『治癒』の光に照らされながら、ディーンは神妙な面持ちでそう切り出す。

するとジンは、ディーンの意図を察したかのように、軽く首を横に振って応じた。

「……わかってる。あの男に、ボルガ・フライトに会ったんだろ？」

「！ お前、何でその事を……」

随分驚いたような顔をするディーンに、ジンは苦笑して口を開く。

「俺と戦っていた『魔術師』が丁寧に教えてくれたよ。あの男が、『ゴースト・コンダクター  
精霊指揮者』の首領だという事もな」

少々啞然とするディーンに対して、ジンは視線を僅かに逸らし、伏し目がちになってしまふ。

一方、二人の会話を傍で聞いていたあたしは、状況が上手く飲み込めずにいた。

ボルガ・フライトって、さっきあたしとティーンが遭遇した人だよな？　もしかしてジンは、あの男の人の事何か知ってるのかな？　そんな風に思いながら、ふとジンの隣にいるエリーゼさんを見てみると、彼女もどこか、複雑そうな表情をしている。

多分そんな彼女の表情を見たからだと思う。

何だかあたしだけ、除け者にされているように感じてしまったのは。

「……ねえ、何の話？　ボルガ・フライトって人の事、みんなは何か知ってるの？」

気付けばあたしは、そんな風に責めるような言葉を投げ掛けている。すると三人の視線が、一気にあたしの方に注がれる。

「……そうか。考えてみれば、ティーンやエリーゼにはあっても、リネには話した事がなかったな」

あたしの『治癒』の光に照らされながら、ジンは自虐するみたいに苦笑する。

そして僅かに間を置いた後、ゆっくりと言葉を紡ぎ始めた。

「ボルガ・フライト。この名前は俺にとって、忘れ難い名前なんだ」

「忘れ難い？　……どうして？」

ジンの言葉の端に不穏な空気を感じながらも、あたしは聞き返せずにはいられなかった。

内心で戦々恐々とするあたしを他所に、ジンはその重い口を静かに開く。

「仇、なんだよ。あの男は……ボルガ・フライトは、俺の家族を殺した男なんだ」

「！」

あたしはすぐに、聞くべきじゃなかったと後悔した。

人の過去を無闇に詮索するものじゃないと、つい最近学んだばかり

りのはずなのに……。

「今から六年程前の事だ。俺の生まれた村は、大陸の南西にある森林地帯の奥にあるんだが、その村で俺の一族は、この二つの剣を代々受け継ぐ使命を持っていた」

そう言いつつ、ジンは地面に置いてある二本の剣に視線を落とし

今は鞘に隠れて見えないけど、それぞれ刀身の色が黒と白に染め上げられた二本の剣は、ディーンの話だと『魔剣』と呼ばれる物らしい。長い年月を掛けて、刀身部分に『魔術』の力を馴染ませている為、『魔剣』とはそれぞれ、強力な力を有しているそうだ。

それこそ使い方によっては、『魔術師』と対等に渡り合える程に。何もかも突然の事だった。俺の生まれた村に現れたあの男は、父さんを、母さんを、そして、本来ならこの二本の剣を受け継ぐはずだった兄さんをその手に掛け、俺の前から姿を消した」

一体何が起こったのか。

どうして両親と兄を殺したのか。

なぜ自分だけ生かされたのか。

当時のジンにわかる事は、何一つ無かったそうだ。

あたしが余計な事を聞いたせいで、昔の記憶が蘇ったんだらう。

いつの間にか、ジンは唇を強く噛み、悔しそうに表情を歪めていた。「この六年間、奴の事を忘れた日は無かった。どれだけ時間が掛かろうとも、必ず奴を見つけ出し、追い詰め、真実を暴き出そうと心に誓っていた。……だがなぜだ!? なぜ奴が『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』の首領なんだ! 一体何の為に、奴はお前に会いに来たんだ!？」

まるでやり場のない怒りをぶつけるかのように、ジンはディーンに強い口調で詰め寄る。

そんなジンに対して、ディーンは困惑した表情を浮かべて、僅かに顔を逸らした。

「……悪い。俺にも、詳しい事はわからねえんだ」

弱々しく吐き出したディーン言葉に、ジンは漸くハツとしたよ



うに眼を瞬かせる。そして一旦眼を伏せ、自分を落ち着かせるかのように再度口を開く。

「……すまない、どうかしてるな。お前に詰め寄った所で、何がわかる訳でもないだろうに……」

「気にすんなよ。こんな時まで冷静でいられる奴がいたら、どうかしてると俺は思っぜ?」

自分を責めているジンを気遣うように、ディーンは苦笑しながら彼の肩を軽く叩いた。こういう時のディーンって、本当に優しいんだよねえ。

「ところでリネさん。ジンの怪我の具合、どう?」

と、その場の空気を変える為に話題転換を図ってくれたのが、エリーゼさんが心配そうな顔であたしに尋ねてきた。

そういえば、会話に気を取られて忘れる所だった。もうとっくにジンの傷は癒えてるはずだよな。

「もう心配ないですよ。出血は止まったし、傷跡も残らないと思います」

発動したままだった『治癒』の力を抑え込みながら、あたしはエリーゼさんに笑い掛ける。すると彼女も、漸く一安心したのか、軽く安堵の溜め息をついた。

って、あれ?

「? どうしたリネ?」

「……えっ? あ、ううん、何でもなし」

一瞬ボーツとしていたあたしは、不思議そうな顔をしたディーンに尋ねられ、思わず頭を振ってしまう。すると、ディーンは若干首を傾げつつも、ジンの方に視線を移して、何事かを話し始めた。

そんな彼からは見えないように、あたしは自分の掌を改めて見つめてみる。

ほんの一瞬感じた違和感。

気のせいなのかな……? とも思ってしまう程、小さく僅かな違い。

つい最近まで、何の問題もなく使っていたはずの『治癒』の力。その力の働き具合が、何だか以前よりも少しだけ、鈍くなっているように感じた。

「それ、本当なの！？ ノイエが『ブラウズナー溪谷』に向かったかも知れないって」

俺が告げたある事実に対して、ミレーナは酷く驚いた声を上げ、残る三人の『英雄』たちも、皆一様に驚きを隠せない様子だ。

街中でジンの治療を終えた後、テルノアリス城の一室で待機していたミレーナたちと漸く合流した俺は、かの『英雄』たちを前にして、今回の騒動で手に入れた情報を開示していた。

既に事情を説明し終えているジンとリネは、俺が宿泊していた宿に向かっている為、ここにはいない。

その代わり、という訳ではないが、俺が城へ連れてきたのはエリ―ゼー一人だった。

なぜ彼女をここへ連れてきたのか。それを語るにはまず、『あの時』の事を説明しなければならぬ。

それはボルガ・フライトの『魔剣』の一撃によって、俺の身体が麻痺していた時に、奴が俺の耳元で囁いた内容だった。

「私はこれから『ブラウズナー溪谷』へ向かう」  
「！」

突如として自らの行き先を俺に教え、ボルガはなぜか愉快そうに

唇の端を持ち上げる。

身体が麻痺して言葉を発せないでいる俺に、ボルガはさらにこう続けた。

「確かキミのパートナーの故郷でもあるんだらう？ あの地には少し用事があつてね。それに恐らく、キミが探している人物、ノイエ・ガルバドアもあの地へ向かっているはずだ」

……あの時の奴の口振りからすると、どうやらボルガは、一目見ただけでリネが『妖魔』一族の生き残りだという事に気付いていたらしい。なぜ奴がそれに気付けたのかという疑問は残るが、俺にとつてそれよりも衝撃的だったのは、奴がノイエ・ガルバドアの所在を掴んでいる、という事実だった。

こうしてミレーナたちに説明し終えた今でも、俺にはボルガの言う事が真実なのか、判断が付けられない。

だからこそ、占い師エリーゼ・スフィリアの定番、という訳だ。今ここにいる『英雄』たちの力を借りて、彼女にノイエの居所を占ってもらおう。そうすれば、ボルガの言っていた事が本当かどうか証明出来る。なんとって彼女の占いは、高確率で当たると有名らしいからな。

「エリーゼ・スフィリアです。『英雄』の皆さん、初めまして」

かなり畏まった様子で、エリーゼは軽くお辞儀をする。こんなに緊張しているエリーゼを見るのは、多分初めての事だと思う。

「あなたがデインくんの言つた人ね。会う事が出来て嬉しいわ」「そ、そんな！ 私こそ光栄です！ こうして『英雄』の方々に会い出来るなんて……」

銀色のベールの下に見え隠れするエリーゼの頬が、心成しか紅い気がする。ミレーナたちに会えたのがそんなに嬉しかったんだらうか？

なんて思っていると、さっき自己紹介を終えたばかりのランザ・

ダルベスが、ぶつきら棒に尋ねてくる。

「ところでよお、ミレーナの弟子。このお嬢ちゃんの力を疑う訳じやねえが、本当に占いなんか頼っていいモンなのか？」

「ああ、それなら心配いらねえよ。エリーゼの凄さは、俺が身を以て体験済みだからな」

「……こう言っちゃなんだが、お前の弟子って結構単純な奴なんじやねえか？」

「え？」

怪訝な表情のランザに指摘され、ミレーナは不思議そうに首を傾げる。……って言うか、聴こえてんぞ眼帯。誰が単純だった？

「まあいいじゃない。この子が大丈夫だって言うなら大丈夫なんですよ。くだらない会話に時間を割いてないで、さっさと始めちゃいなさいよ」

我関せずといった様子で、俺の事を『この子』呼ばわりするバルベラ・スプリートは、ソファアの肘掛けに凭もたれつつ、優雅に扇子を広げてヒラヒラと扇いでいる。

すると、そんな彼女の様子を、ソファアの後ろに立って横目で見ていたフォードが、その言動に辟易しているかのように、僅かに溜め息をつく。どうやら彼も立場的に、結構苦労している人間のようにだ。

「じゃあ、始めさせてもらいますね。すみません、ミレーナさん。私と手を握ってもらえますか？」

テーブルを挟んで、ミレーナの向かい側に座ったエリーゼが、両手をゆっくりとミレーナの方に差し出す。対するミレーナも、ゆっくりと両手を差し出し、エリーゼの手を優しく握った。

「そのままゆっくりと眼を閉じて、心を落ち着かせてください。

デイン。確かミレーナさんって、まだ完全に記憶が戻ってないのよね？」

「えっ？ あ、ああ。ノイエの事も、容姿ぐらいしか思い出させてねえみたいだけだ」

突然視線と話を振られた俺は、若干慌てて言葉を返した。

するとエリーゼは、「そう、わかったわ」と言っつて、再び視線をミレーナへと移す。

「ではミレーナさん、思い出せる限りで構いません。眼を閉じたまま、ノイエさんの顔を思い浮かべてもらえますか？」

「はい……」

ミレーナの返事を合図とするかのように、エリーゼも同じようにゆっくりと瞳を閉じる。

瞳を閉じ、静かにエリーゼの誘導に従うミレーナの脳裏には今、一体どんな光景が浮かんでいるんだろう？

そんな風に思いながら、俺は固唾を飲んで二人の様子を見守った。両者が瞳を閉じたまま数分が経過した頃。不意にエリーゼが、静かに口を開いた。

「……ぼんやりと、どこかの谷が見える。谷の間には大きな川が流れていて、見るからに険しい山岳地帯も広がっているわ」

「谷と大きな川。それに、険しい山岳地帯って……」

エリーゼの口から紡がれる言葉を反芻しつつ、俺は思考してみる。確か『ブラウズナー溪谷』は、険しい山岳地帯があるせいで、未だに未開拓の土地が残っている事で有名な場所だ。それに東西を分断する形で、南北に流れる大きな川があるという話も聞いた事がある。こうして考えれば、今の所一致している部分が多い事になるけど……。

「これだけで判断するのは早計だな。土地環境が似たような場所など、このジラータル大陸にはいくらかでもある」

「……だよな」

腕組みして難しい顔を浮かべるフォードに指摘され、結論を急ぎそうになっていた俺は反省した。

それにしても、さすがは『英雄』の中で、一番のキレ者と呼ばれるフォード・ヒースクライムだ。冷静で的確なものの方が出来るのは、やはり長年培ってきたものがあるからなのだろうか。

「ちょっと待って」

と、内心で感心していた時だった。ミレーナと手を握り、占いを続けていたエリーゼが、再び口を開く。

「何か他に……、薄らと建物のような物が見えるわ」

「建物？」

「……いえ、これは……。廃墟になった……村、かしら？」

「廃墟になった村……」

その言葉を繰り返した瞬間、俺はすぐにある事を思い付いた。谷と大きな川。

険しい山岳地帯。

そして、廃墟になった村。

もしも今、エリーゼの占いが示している場所が、『ブラウズナー溪谷』だと仮定するならば。廃墟となった村とは、一つしか考えられない。

「まさか……、『妖魔』一族が暮らしてた村……!？」

俺がそう口にした途端、フォード、ランザ、バルベラの三人の表情が、一気に険しくなった。

エリーゼの占いの的中率は高い。それこそ、王族や貴族から、好んで占ってもらおうとする者が後を絶たない程に。

今この瞬間、俺はボルガ・フライトの残した言葉が、急に現実味を帯びてきたような気がした。

だがそれと同時に、新たな疑問が俺の頭に浮かぶ。

人によっては、『悲劇の地』と呼ぶ事もある場所、『ブラウズナー溪谷』。

そんな負の遺産とも言えるような場所で、かの『英雄』ノイエ・ガルバドアは、一体何をしているのだろう？

「何？ 『ブラウズナー溪谷』へ向かいたいだと？」  
俺が進言した内容に対し、元老院たちは当然のように怪訝な顔を見せた。

城の一室でエリーゼによる占いを終えた丁度その時、元老院からの使いが俺の許に寄こされたのは、二十分程前の事だった。

半ば無理矢理『王座の間』へと引き摺られてきた俺は今、今回の襲撃の事情説明を受けさせられている。

その報告が一通り終わった所で、俺はこう切り出した。

『ミレーナ、ジン、リネの三人を連れて、『ブラウズナー溪谷』に向かいたい』、と。

すると元老院は全員、今のような表情を見せているという訳だ。もちろんこっちは、そんな態度を取られるだろう事は予想出来ている。

特にミレーナの場合、保護対象の『英雄』の一人として、城の中に軟禁されているような状態だ。そんな人間を城の外に連れ出したいと言えば、当然元老院は簡単には首を縦に振らないだろう。

だからこそ俺は、彼らに強く念を押すように口を開く。

「ああ、そうだ。だからミレーナに外出許可を出してくれ。記憶を取り戻す手掛かりがあるかも知れない以上、彼女を連れていけないと意味がないんだ」

「例の『精霊指揮者』ゴースト・コンダクターの創設者なる人間の言葉か。その者の言葉は、信用に値するものなのか？」

提案した傍から、元老院の一人であるレオナルド・ブレイクが、冷静な口調で言い放ってくる。

「……どういう意味だよ」

「その男に騙されているんじゃないか、と言ってるんだ。その男の言葉には、何の確証も証拠もない。向こうが敵である以上、その男の言葉はお前や他の人間を誘き出す為の罠、という可能性もあるんじゃないのか？」

「それは……」

レオナルドの厳しい意見に、俺は僅かに言い淀む。

確かにもっともな意見だ。俺だって出来る事なら、敵の言葉をバカ正直に鵜呑みにするような真似したくはない。

だけど今回の場合、そんな事を言ってもらえる状況じゃないんだ。

あのエリーゼが占いで出した結果は、『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』の言葉に沿う形で一応の決着が付いた。

ボルガ・フライトの言葉がどこまで真実なのかなんて、俺には一切わからない。ただそれでも、賭けてみる価値はあるはずだ。

例え全てが、奴の思惑通りに動いているんだとしても。

「あんたらに迷惑を掛けるつもりはない。ミレーナの外出許可を出してくれさえすれば、後は俺が何とかする。……だから頼む。俺が動かなかつたら、何も変わらないし、変えられないんだ！」

強く懇願する俺の勢いに、元老院全員が厳しい表情を見せた。

ただ一人、俺の眼前に座る男を除いて。

「……そこまで強く望むのなら仕方ない。ミレーナ・イアルフス共々、『ブラウズナー溪谷』へ向かい給え」

頼んだ俺の方が拍子抜けしてしまいそうな程あっさりとした口調で、テルノアリス王は僅かに頬笑みを湛えて告げた。

が、当然他の元老院からは、すぐさま反論の言葉が飛ぶ。

「テルノアリス王！ お言葉ですが、この者に自由を与えるのは些か早計過ぎます！ ただでさえこの者の周囲では争い事が絶えない上、先程レオナルド殿が指摘した通り、『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』の罠とも考えられる。そのような場所に記憶を失ったままのミレーナ・イアルフスを向かわせるなど、危険過ぎる。さらなる災厄を招きかねません！」



バドアーズは俺の方に冷たい視線を投げつつ、テルノアリス王を制している。どうやらこの男は、元老院の中で一番、俺の事を信用していない人間のようなだ。……まあ、それは俺も同じだけど。

「確かにキミの言う通りだ、バドアーズ」

明らかに熱くなっているバドアーズを落ち着かせるかのように、テルノアリス王は丁寧な口調で続ける。

「だが一方で、デイン・イアルフスの主張も納得出来る部分があるのは確かだ。彼は己の師匠の事を第一に考え、行動を起こそうとしている。そんな彼の意志を尊重するのも、この大陸の民をまとめる我々に必要な事なのではないか？」

「それは……、そうですね」

バドアーズは言葉を詰まらせると、若干悔しそうな表情でなぜか俺の方を睨んできた。いやいや、俺を睨まれても困るんだけど……。

そんなバドアーズの行動に、釈然としないものを抱える俺を他所に、テルノアリス王はふと、何かを思い付いたように口を開く。

「ならばこうしよう。正規軍の方で部隊を編成し、キミたちとは別動隊として現地の調査に向かわせる。もちろん『精霊指揮者』ゴースト・コンタクターが待ち構えている事も考慮して、十分な装備を整えさせる。さらに首都の側が手薄になる事を防ぐ為に、大陸の各『ギルド』から応援を寄こしてもらおう。そうすれば、正規軍に出来た穴を埋める事は可能なのではないかな？」

まるで賛成意見を求めるかのように、テルノアリス王は残る元老院たちの方を見回した。するとそれに答えるように、ハルクが軽く手を上げてから静かに立ち上がる。

「丁度明日、各『ギルド』の『ギルドマスター』と定例会を開く予定があります。その席の場で協力要請を仰げば、実現は可能だと思います。ただしその場合、正規軍での部隊編成も合わせて、全ての準備が整うのに数日掛かる事にはなるでしょうが……」

「だそうだよ。どうだい、デイン・イアルフスくん？ もし異論がなければ、この方向性で進めたいんだがね」

両手を組み、再び頬笑みを湛えた柔らかな表情で、テルノアリス王は尋ねてくる。

準備に数日掛かる、というハルクの言葉には、若干不満を持ったのは確かだ。出来れば俺は、そんな事にあまり時間を割きたくないかと言つて、もし今回の一連の出来事が畏だった場合、俺のせいで余計な被害が出る可能性もある。気持ちは焦るが、準備を整えておくのは必要な事だ。

「わかった。今回ばかりは、あんたらの提案に乗っておく事にするよ」

最後の最後まで素直にならない俺を、バドアーズやレオナルドがやや不満そうな眼で見つめてくる。

そんな冷ややかな視線を受け流しつつ、俺の興味は、既に別の所に向いていた。

今は一刻も早く、ボルガの真意を問い質したい。

俺の脳裏に焼き付いて離れない、『あの言葉』の真意を。

というのも、俺はみんなに黙っている事が一つある。

元老院はもちろん、『英雄』のみんなや、ミレーナ、ジン、リネにすら教えていない、一つの事実が。

城の一室でミレーナたちに語ったボルガとのやり取りには、実はまだ続きがあった。

それは、奴がノイエの居所を俺に教えた、その後続く言葉だ。

「なぜ私がキミにこんな事を教えるのかわからない、と言いたそうだね。まあその理由は、至極単純なものだ」

反論する力が出せない俺を尻目に、ボルガは囁き続ける。

「キミと私が『同じ』だからだよ。ああ、誤解がないように言っておくと、これは物事の考え方や感じ方が同じだという意味じゃない。本当の意味で、私たちは『同じ』なんだ。……まあわからないけども無理はない。キミが知らないのは、当然の事なんだから」

「……!？」

意味が全く分からない上、ボルガはどういう事なのか説明しようとしてもしない。無防備なままの俺に対して、ただ言葉を紡いでいくだけだった。

「キミの中に眠る本来の力を、早く目覚めさせる事だ。そうすればキミはあらゆる柵しかいみから解放されて、本当の意味で私と『同じ』になるのだから」

そこまで囁き終わると、ボルガは満足気に俺から身体を離し、踵を返して立ち去った。

脳裏に焼き付いたあの時の事を思い出しつつ、それとは別に、ボルガが言っていた言葉が頭に響く。

『キミは自分が何者なのかを知るべきだ。その答えを、私なら教えてあげられる。知りたいのなら私の後を追ってくるといい』

奴が残した謎の言葉が、俺の心を焦らせる。

自分が何者なのか。その言葉の意味を知る為には、もう一度奴と接触するしかないようだ。

向かってみるしかない。

リネの故郷でもある、かつての悲劇の地。

『ブラウズナー溪谷』へ。

## 終章 意図せぬ帰郷

「チツ。泥人形どもに付き合ってたせいで、余計な時間を喰っちゃまったなア……」

随分長い間、人型『ゴーレム』の群れを薙ぎ払い続けた俺は、少々疲弊した身体を休ませる為、その辺の瓦礫の上に乱暴に腰を下ろした。

今はもう、泥人形どもの姿は跡形もねエ。

どれぐらいの時間を割いて戦ってたのなんて計算する気もねエが、周りは一応静かになった。これで心置きなく、情報収集が出来るってモンだ。

「んで？ 落ち着けた事でちよつとは思いついたのかア？ ゴースト 精霊指揮者コンダクター」がこれから、どこに向かおうとしてんのかをよオ」

俺は少々雲の掛かった空を仰いだまま、生き残った浮浪者の男に言い放つ。

「が、どういう訳か返事がすぐに返って来ねエ。奴はその辺の地べたに這い蹲ってたはずだが……、まさか気絶でもしてやがんのか？ 「オイ、聞いてんのか temeエ？」

面倒臭く思いながらも、俺は男を探す為、曇天の空から眼を離した。

すると、その瞬間だった。

「もしかしたら、『ブラウズナー溪谷』に向かったのかも知れねエ……」

「！ あん？」

声のした方を見ると、浮浪者の男はいつの間にか、俺が腰掛けている瓦礫の陰に、背を預ける形で座っていた。

にしても、『ブラウズナー溪谷』だと？

「間違いねエんだろオナア？」

「あ、ああ。冷静に思い返してみたら、そんな事言っただけだよな。うな気もする……」

何だそりゃ……。結局ハッキリとはわからねえんじやねえか。

男の頼りない情報に、内心で溜め息をつきはしたものの、他に宛がないのも事実だった。

仕方がねえ。面倒臭エ上に灼な話だが、少しでもまともな情報がないか、もう少し探りを入れてみるか。

「奴らは他に何か言っただけか？ 地名に限らず、人名でも何でもいい」

「……！ そういえば、あいつら仲間内で、頻りに何かを確認し合っただけだ。セイレイ？ が何だの、石がどうしたのって……」

「ああ？」

男の口調が妙に片言だったからわかりにくいけど、もしかして『精霊』の事を言っただけなのかな？

『精霊』、そして石……。いや、『精霊石』か？

それに奴らの組織名。精霊を指揮する者、って意味だよな？

……。ハッ。おい待てよ、冗談だろ？ 初めて組織名を聞いた時から馬鹿馬鹿しい名前だとは思ってたけど、まさか本気で『精霊』を指揮しようなんて考えてんじやねえだろうな？

「こりゃ傑作だなア。頭の中が幻想と化してやがんのかあいつらは？」

前々から何考えてんのかわからねえ連中だったが、ここまで来ると滑稽だな。

……。ま、この際奴らの狙いなんざどうでもいい。

今一番に俺が成すべきは、俺を良いように利用しようとしやがった連中を捻り潰す事だ。ノイエの野郎を探するのは、それを終わてからまたじっくり始めりゃあいい。

「さアてと。それじゃあそろそろ行くとするか」

俺は軽く身体を伸ばしてから、瓦礫の上から飛び降りた。

もうここに用はない。奴らが『ブラウズナー溪谷』へ向かった可



が差し向けた破壊の軍勢によって焼き払われた。

『妖魔』という特殊な力を持つ一族だった為に、反乱分子となる『かも知れない』という、たったそれだけの理由で、あたしの一族は滅亡させられた。

生まれ故郷、『ブラウズナー溪谷』。

何の巡り合わせなのか、あたしは今、数年ぶりにその地を訪れようとしている。

帰ろうと思った訳じゃない。

帰りたいと願った訳でもない。

ただ彼が……、デイーンがそこへ向かう事を、強く望んだから。

だからあたしは向かっている。

自分にとって、悲劇の地である故郷へ。

そこできっと、全ての真実が明かされる。

## 終章 意図せぬ帰郷（後書き）

という訳で、やっとこさ『雷帝出現編』が終幕を迎えました。今回は本当に全編通して時間が掛かり過ぎましたね……。お待ちさせた皆さんには大変申し訳なく思っています。

この次の編で、一旦『フレーム・ウォーカー』のまとめが出来ればなあ〜と考えてます。

まとめはもちろん、伏線の回収です。

ディーンやリネの謎、他にも挙げればいくつもあります、それらの謎を解き明かしたいと考えてます。

上手く行くかはわかりませんが……（汗）

では、また次回お会いしましょう！

次回からは、『ブラウズナー溪谷編』が始まります！



序章 帰路 - Ever saw the sky - (前書き)

お待たせしました、いよいよ新章『ブラウズナー溪谷編』スタートです！

では、毎度の事ながらあらすじを。

かつて、『妖魔』一族が暮らしていた古き集落。『ブラウズナー溪谷』の奥地にあるとされるその地を目指し、ディーンたちはリネの案内の下、山道を突き進んでいた。

しかし、溪谷に辿り着いた彼らは、『精霊指揮者』の手荒い歓迎を受け、分断を余儀なくされてしまう。

そしてディーン、リネ、ジン、ミレーナの四人は、それぞれの場所で因縁ある人物たちと遭遇する。

今、物語は一つの終着点に向けて、動き始めようとしていた。

窓辺から見える空は、汚れを知らない程青く、澄んだ色をして  
いた。

あたしはこの空を知っている。

雲一つないこの空を知っている。

どれだけ長い間、この空の下に帰ってくる事を避けていただろう？  
きつとあたしは知らない内に、この空を恐れるようになっていた  
んだと思う。

思い出してしまっから。

泣きたくなくなってしまっから。

平らに均されていない、ゴツゴツとした地面を軽快に駆け抜ける  
度、あたしの身体を運ぶ馬車が、小刻みに振動を繰り返す。

いつの頃だったか、あたしも一人で、この道を歩いたかも知れな  
い。

遠く遠く、どこまでも続く長い道。

見るからに険しい山岳地帯の間を、馬車は休む間もなく駆け巡る。  
行き先は初めから決まっていた。

あたし自身、もう二度と眼にする機会など無いだろうと思いつい  
でいた『その場所』は、馬車が突き進む、この道の遙か先にある。

生まれ故郷、『ブラウズナー溪谷』。

目的地は溪谷の奥深くにある、今は名も無き村。かつてあたしが  
暮らしていた、人里離れた小さな村。

来訪する人間を手荒く歓迎する山道は、これから先まだまだ続く。  
この道こそが紛れもなく、あたしにとっての帰路だった。

## 第一章 遭遇

『ブラウズナー溪谷』。

それは、広大なジラータル大陸の自然環境の中で、最大との呼び声高い溪谷の名だ。

大陸西側に集中している山岳地帯が、大多数の人間に険し過ぎると称されるのには訳がある。

その理由として挙げられるのが、標高差だ。

粗く削られたような山肌を持つ山々は、一〇〇〇メートルから二〇〇〇メートル程度の、比較的低めに分類される標高の物もあれば、四〇〇〇メートルから五〇〇〇メートルを優に超える物まで、とにかく出鱈目な標高差の山々が乱雑に連なっている。

未だに未開拓の土地が残っているのも、数多くの調査団がこれらの山々に行く手を遮られ、踏破を断念させられているからだ。

その為、この溪谷の全貌が明らかになるのは、あと数十年先になるんじゃないか、とさえ言われている。

調査が思い通りにいかない場所として、ある意味不名誉な言い方をされがちなこの地だが、それとは別に、この土地には見所とも言える、雄大な自然が創り出した景色がある。

その景色とはずばり、溪谷を流れる巨大河川、『サンダーズ・リバー』だ。

険しい山岳地帯を東西に分断する形で、南北に流れる河川。その形状が、稲妻のように右へ左へ激しく曲がりくねっている事から、旅人などからそう呼ばれているらしい。

……とまあ、ここまで語った情報は全て、この地方の出身者であるリネからの、単なる受け売りなのだ。

とにかく、その川に沿う形で溪谷の南へと続く山道を、俺たちを乗せた馬車は、一定の速度を保って走っている。

山道の道幅は、大体十五メートルくらい。進行方向の左側には、

ゴツゴツとした山肌が壁のように切り立っているが、逆に右側は断崖絶壁となっていて、谷底までの距離は、大体十メートルくらいだろうか。

谷底に流れる『サンダーズ・リバー』は、馬車の中から見下ろしても、かなり流れが速いように思う。

「落ちたら結構ヤバそうだな……。道幅が狭いから気をつけてもらわねえと……」

首都を出発してからというものの、元老院が手配してくれた御車は、努めて安全運転を心掛けてくれている。

とはいえ、馬車が突き進むのはこの荒れた道だ。わざわざ元老院が手配する程の御車なんだから、簡単に事故を起こしたりはしないだろうが、それでも少々の不安は感じてしまう。

馬車の中で崖側の席に座っている俺は、御車の手綱捌きを信じつつ、外の危険そうな景色から目を離し、隣に座る少女の様子を窺った。

黒髪の少女リネ・レディアは、どこか物憂げな表情で、馬車の窓から見える外の風景を眺めている。

俺が『ブラウズナー渓谷』へ向かう事を決めてからというもの、リネはやはり、眼に見えて元気を無くしている。落ち込む、という程ではないようだが、それでも無理しているのは確かだろう。

出来る事ならこいつは、『あの場所』には向かいたくないはずなんだから。

『ブラウズナー渓谷』の奥地に残っているとされる、かつて『妖魔』一族が暮らしていた集落。

そこが今、俺たちを乗せた馬車が目指している本当の目的地だ。

数日前、元老院との謁見で『ブラウズナー渓谷』へ向かう許可を取り付けた俺は、彼らからいくつか条件を出されていた。

一つ、ミレーナ以外の『英雄』を同行させない事。

二つ、馬車と御車は手配するが、正規軍の護衛は俺たちに付けない事。

三つ、俺たちを嵌める為の罠だという可能性も踏まえ、正規軍の別動隊を向かわせる事。

この三つが、俺が元老院に固く誓わされた条件だ。

何とも偉そうに色々付け足してくれたもんだ、と思うばかりだが、一つ目と二つ目を条件に加えた元老院の狙いはわかってる。

要するにあいつらは、首都を守る為の戦力を俺たちに、延いてはミレーナ個人の為に割きたくないんだ。

大勢の命と、個人の命。

両者を天秤に掛ける事自体おかしいような気もするが、それでも首都や自分たちの命を守りたいと思う元老院の気持ちも、全く理解出来ない訳じゃない。

守りたいと思うものはきつと、人それぞれ違うんだから。

「リネ、ちよつといいか？　これから先の進行ルートを訪ねたいんだが……」

と、そんな風にあれこれ考えていた俺の正面。進行方向に背を向けて座る、銀髪碧眼の少年ジンは、両手で広げていた地図から眼を離し、俺の隣にいるリネにそう問い掛けた。

だがなぜか、いつまで経ってもリネから反応が返って来ない。

不思議に思い彼女の方を見ると、リネは窓の外に視線を向けたまま、心ここに在らずといった様子で呆然としている。

「リネ、聞いてるか？」

念を押すようなジンの言葉で、リネは漸くハツとして振り向く。

「ああ、ごめん。ちよつとボーッとしちゃってた」

リネは苦笑して頭を振ると、「どうしたの？」と言ってジンに話し掛け直す。

やっぱり思った通りだ。リネは明らかに無理して、平静を保とうとしている。無理矢理会話を進めようとしている辺り、どうやらそれを指摘されたくないみたいだ。

「……え〜つと。うん、大丈夫。今の所は一本道だから、そんなに頻繁に進行ルートを気にする必要はないと思うよ。目的地が近くなったら、ちゃんとあたしが案内するから」

「あ、ああ……」

ジンも、そんなリネの様子に気付いてはいるんだろう。正面に座る俺に対して、何か言いたそうにしていたものの、結局は口を噤み、広げていた地図を静かに仕舞い始める。

……まあ今回の場合、何かしら抱えているものがあるのは、リネに限った事じゃないからな。どことなくみんなの雰囲気暗いのも、多分そのせいだろう。

リネの場合は、悲しみの記憶が蘇るであろう故郷に、帰る事になったから。

ミレーナの場合は、自らの記憶喪失に関わっている可能性のある、ノイエ・ガルバドアがこの地にいるかも知れないから。

ジンの場合は、『テルノアリス』を襲撃した自らの仇、ボルガ・フライトとこの地で相見えようとしているから。

そして、俺の場合は。

「今頃フォードたちはどうしてるかしら？」

ぼんやり考え込んでいた俺は、そんなミレーナの声で我に返った。俺は視線を、ジンの隣に座っているミレーナに向け、彼女の言葉に応じる形で口を開く。

「さあな。フォードはともかく、ランザとバルベラは『城から出せっ！』って騒いでるかもな」

その場面を想像しつつ、俺はわざと悪戯っぽく笑ってみせた。

だが、ミレーナの表情は晴れやかじゃない。少し不安そうに俯き、白くて華奢な手を膝の上で組んでいる。

「……やっぱ、フォードたちじゃないと頼りなかったか？」

どこか弱々しいミレーナの様子を見つめていた俺は、思わずそんな風に口走ってしまった。これじゃあまるで、頼られてない事を責めてるみたいだよな……。

「！ あつ、ごめんなさい！ そんなつもりで言ったんじゃないの」  
口を衝いて出た言葉から、俺の心情をすぐさま察したのか、かなり慌てた様子でミレーナは首を横に振る。

「ただ……、これから向かう先にノイエがいるかも知れないと思うと、変な緊張感が湧くの。こういう時フォードたちがいれば、まだ思い出せてないノイエの人柄なんかを聞き出せるのにな、と違って……」

「ああ、そっか」

確かに今ここにいるメンバーじゃ、ノイエの事を深く語れる奴なんていないもんな。

俺は昔会った事があるけど、顔を見たのは一回切りだったし、ともに会話した覚えもない。ただ物凄く、無口と言うか寡黙と言うか、とにかく物静かな人だった事は覚えてる。

そう考えると、やっぱり不思議に思うんだよなあ。あんな物静かな人が、ジエイガみたいな騒がしい奴を弟子に選ぶなんて。

……ま、今はその弟子に、どうしてただか命を狙われてる訳だけど。「ノイエさん、本当にこの『ブラウズナー溪谷』に来てるのかな？」

「……さあ、どうだろうな。『精霊指揮者』の言葉と、エリーゼの占いを信じるなら、そういう事になるんだらうけど」

俺が『精霊指揮者』<sup>ゴースト・コンダクター</sup>という言葉を出した瞬間、正面に座っているジンの表情が、一瞬だけ強張った。

『精霊指揮者』<sup>ゴースト・コンダクター</sup>の首領ボルガ・フライトは、ジンの家族の命を奪った、憎むべき仇。

結局ジンは、首都襲撃の際は奴と遭遇しなかった訳だけど、その胸中は決して、穏やかではいらなかっただろう。

それこそきつと、殺意を抱いてしまう程に。  
正直な所、俺は怖くてたまらない。

ジンがもし、ボルガ・フライトに遭遇してしまったら。憎しみの対象に出会ってしまったら。彼は一体、どうなってしまうんだらう？  
そう考えると俺は、怖くなって聞けなくなる。

お前はあいつに出会ったら、一体どうするつもりなんだ、と。

「? デイーン、どうかしたのか?」

怪訝な顔で俺に尋ねてくるジンを見て、俺は漸く、嫌な考えから抜け出す事が出来た。

全く、こんな嫌な事ばつか考えてちゃダメだよな。

ジンの事だけじゃない。俺にだって、確かめなきゃいけない事があるんだから。

「いや、何でも無い。とにかく、何が起きてもいいように、気をしっかり引き締めて行こう。元老院が懸念してた通り、これが罠だつていう可能性もあるんだからな」

自分に言い聞かせる意味でも口にした言葉に、三人それぞれが真剣な表情で頷いてくれた。

とはいえ、心配の種はどうしても残る。別動隊の指揮は黒ひげ大佐、もといマース・コアロッドが取ってくれてるらしいけど、どこで何が起きてるかなんて、今この場でわかる事じゃねえからな……。と、そんな風に思っていた時だった。

唐突に、地面を深く抉るような音を上げて、俺たちを乗せていた馬車が急停車したのは。

「どおわっ!?!」

「きゃう!?!」

と、間拔けな悲鳴を上げたのは俺とリネだ。

馬車はいきなり、何の前触れも無く止まった為、俺たちは狭い車内で転げ回る羽目になった。

時間にして、ほんの数秒の出来事。

窓や低めの天井といった、硬い部分にぶつからなかったのは、不幸中の幸いか。俺は正面に座っていたジンに、前のめりに突っ込みそうになったものの、馬車が横滑りを起こしたせいで、座席に尻餅をつく程度で止まった。



……まあ、それでもやつぱり、微妙な感じの痛みはあったけど。

「な……っ、何なんだよ急に……？ みんな、怪我してねえか？」

腰の辺りを軽く摩りながら、俺は他の三人に声を掛けた。

すると三人がそれぞれ、順に口を開く。

「うっ、肘掛けにお尻ぶつけたあ……」

「私は、何とか平気……」

「俺も一応何ともないが、馬車の方には何かあったみたいだな。御車の様子を見てくる」

そう言っつて、ジンは率先して、馬車の右側にある両開きの扉を開け、外の様子を窺いに行った。

俺は体勢を立て直しつっ、とりあえず被害のあったらしいリネにだけ、再度声を掛ける。

「大丈夫かよ　って、肘掛けにぶつかった程度なら心配いらねえか」

「えっ、そんなあ！　もう少し心配してくれた方がいいじゃん！」

「命に関わるような怪我ならまだしも、軽くぶつけたくらいで泣き言ほざいてんじゃねえよ」

「もう！　だから何でそういう言い方するの！？　ひょっとしてデイン、ワザとやってる！？」

「うるせえ奴だな。そうですよワザとですよ文句あるんですか？　「ミレ、ナさあ、んッ！」」

まるで神様にでも助けを求めるかの如く、リネは苦笑しているミレーナの腕に縋り付く。フム、これはこれで新しい反応だな。

とりあえず、ふざけるのもここまでにしておこうと思ひ直し、俺はジンの後に続こうと、馬車の扉から外に出ようとした。

するとその時。

「デイン！　ちょっと来てくれ！」

「！」

妙に緊迫した声のジンに催促され、俺はすぐさま扉を潜り、外へと飛び出す。

そこで俺は瞬時に、ジンの声が緊迫していた理由を察するに至る。

急停止した馬車から十五メートル程前方。緩く右に曲がり始めていた溪谷沿いの道が、大量の土砂といくつもの巨大な岩の塊によって、完全に進路を塞がれていた。

「おいおい……。何だってこんな事になってんだよ？ 土砂崩れでも起きたのか？」

目の前の光景に辟易しつつ、俺は馬車の前方、ジンと御車の男が佇んでいる場所まで歩み寄る。

するとジンが、ぎょしゃ御車の男を一瞥してから、訝しげな表情で口を開く。

「それが妙なんだ。この御車は何度かこの道を走った事があるそうなんだが、今までこんな事は一度も無かったらしい。そうですよね？」

ジンが話を振ると、小麦色の肌をした二十代後半の御車は、芥子色の短い髪が生えた頭を、面倒臭そうにガリガリと掻いた。

「ええ、俺の知る限りじゃ初めての事です。ここ最近は何も降ってないはずだし、地盤が緩くなったりはしてないはずなんですけどね……」

そう言っただけで御車の男は、困り果てた様子で前方の土砂と岩の壁を見つめる。

確かに俺も、ここ最近雨が降っていないはずだという、彼の意見には賛成だ。その証拠に、さっき馬車の中から見下ろした『サンダーズ・リバー』は、流れこそ速いものの、雨で増水しているような印象を受けなかった。

……数分前に自分に言い聞かせたばかりだったのに、早くも嫌な予感がする。

もし仮に、目の前の土砂や岩の塊が、天災によるものじゃなく、『人災』によって引き起こされたものだとしたら。導き出される最悪

の答えは。

「やつほあ〜！ また会ったねえ〜、ジン・ハートラーくん」

「！」

嫌な予感、的中して訳だ。

妙に間延びした、緩さを感じさせる明るい声。その声は、俺たちの頭上から響いてくる。

すぐさま視線を向けた先には、十代前半に見える、幼い少女の姿があった。

黒と白の縞模様が入った長袖のシャツに、紺の短いスカート。お洒落なのかどうかわからないが、短めの鈍色の髪を、少しボサついた髪形にしている。

見た目だけなら、どこにでもいそうな幼い少女。

だが一つだけ、明らかにおかしな点があった。

俺たちの視線の先にいる少女は、地上から五メートル程離れた空中に、ふわりと浮かんでいる。

何の支えも無く、重力に逆らうかのように。

まるでその身全てが、大気と同化しているかのように。

「ごめんねえ〜。キミたちに用があったから、ちよつと道を塞がせてもらったよあ？」

どこか優雅な表情でこつちを見下ろす、不可思議な雰囲気の少女に、だが俺は心当たりがあった。

ジンヤリネ、ミレーナから聞いていた容姿と、寸分変わらず一致している。人違いという事はまずあり得ない。

少女の名前は確か……、パーニャ・ロンドベル。

俄かには信じられねえけど、この幼い少女は列記とした、ゴースト『精霊  
・コンダクター』の指揮者』の一員だ。

ジラータル大陸の北西、通称『マント・タウン墮落者の根城』を出発してから、今日で三日目。

俺は漸く、『ブラウズナー溪谷』の北端、溪谷の中心へと向かう為の、山道に差し掛かっていた。

少々距離があつたとはいえ、時間が掛かっちゃまった感は否めねエ。正規軍の監視を避ける為に、馬などの移動手段を一切使わず、ただひたすら歩き続けたからなア。弱音を吐くつもりはねエが、さすがに疲労感が拭えねエのも確かだ。

「さアて、と。ここからどう動いたモンかねエ……」  
俺は何気なく、山道の真ん中で立ち止まり、周囲をゆっくりと見回してみた。

道幅十五メートル程の山道は、幹が太くしつかりとした木々に囲まれ、鬱葱としてやがる。微かに遠くの方からは、川の流れる音が響いてくる。恐らく『サンダース・リバー』とか言う、急流が奏でる自然の音だろう。

チツ、何だか落ち着かねエな、この穏やかな雰囲気。  
自分が平和ボケしちまったみてエで、酷く気分が悪くなる。

とにかく、さっさと動くに越した事はねエ。『マント・タウン墮落者の根城』で手に入れた情報が確かなら、『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』どもはこの地域のどこかで、何かをやらかすつもりらしい。

……とはいえ、その正確な場所も、具体的に奴らが何をしゃがるつもりなのかも、俺には全く見当がつかねエ訳だが。

この広く険しい溪谷の中から、手掛かりなく奴らを見つけ出すのは至難の技だろう。

「チツ……」。ノイエの野郎といい、『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』といい、余程隠れ

るのが好きらしいな。ったく、どこまでもウザってエ連中だ」

適当に思い付いた奴らの悪態をつき、俺は再び山道を歩き始める。……おっと。そういやア忘れ掛けてたが、あの紅髪あかがみどもは今、どこにいやがるんだろう？

『サランドロ』での遭遇を最後に、奴らの動向もさっぱりわからなくなつた。別段気になる訳でもねエが、また妙な邪魔が入るのだけは勘弁願いてエ。

そんな風に考えながら、数十メートル程進んだ時だった。自分の背後に、何かの気配を感じたのは。

「おやあ？ こりやまた可笑しな来客だな。何でこんな所にお前さんがいやがる？」

どこか陽気さを感じさせる、聞き覚えのある声。

俺は一旦立ち止まり、ゆっくりと背後を振り返つた。声の主が誰かは、既にわかっている。

「よオ、また会つたなバンダナ。『サランドロ』近郊で会つた以来じゃねエか」

俺は意識して不敵な笑みを作りつつ、五メートル程離れた位置に立つ男の顔を、食い入るように見つめた。

橙色のバンダナを頭に巻き、右頬に十字架を模した特徴的な刺青を入れた、二十代後半の男。

ガラム・ドラゴドム。

それが、『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』の一員である、この男の名だ。

「お前さんとの再会を喜ぶのは後だ。聞いてんだぜこっちは。何でここにいやがるんだ、ってな」

ニヤリと笑つてはいるが、ガラムの瞳からは怪しげな光が感じ取れる。それこそ、こっちの身に危険を及ぼしそうな、ドス黒い負の光が。

「答える必要があんのかア？ 俺がどこで何をしようとして、テメエ

には関係がねエだろオが」

「ツハハア。随分と舐められたモンだな。その程度の言葉で、『俺たち』を誤魔化せるとても思ってたやがんのか？」

そう言ってガラムが笑みを消した瞬間、俺はまたもや自分の背後から、新たな気配を感じ取った。

肩越しに一瞥してみると、そこには見覚えのある黒い長髪の男が立っていた。

歳や背格好はガラムと同じくらい。人形のように平坦な表情で、感情が読み取りにくそうな男。当然この男の名前にも、俺は心当たりがある。

「シグード・ファンか。相も変わらず、バンダナ野郎に随伴してるとはなア。よく飽きねエモンだぜ」

俺が苦笑混じりに言ってみせると、シグードはゆっくりと右腕を胸の前に掲げた。

奴の右腕に装着されている、青色と銀色で螺旋状に装飾された分厚い籠手型の剣。刺突が主として考えられてやがるんだろう。その剣の刀身は、刃先へ行く程細く、鋭く尖った形をしている。

「お前さんの目的はわかってんだよ、ジェイガ・デイグラッド」

俺が視線を前を戻すと、ガラムはいつの間にか、その手に巨大な黒い鉄球を抱えていた。

見るからに超重量だと理解出来る程に、黒く塗り潰された鉄の塊。それを軽々と手の中で弄びつつ、ガラムは続ける。

「誰に何を吹き込まれたのかは知らねえが、我らが偉大なるボスに、そう簡単に会わせる訳にはいかねえ。大人しく退く気がねえなら、ここで遠慮なく潰させてもらうぜ？」

前後から俺を挟み撃ちにした状態で、ガラム、シグードの二人は臨戦態勢を取る。

どうやらこいつらは、俺を見逃すつもりがねエらしい。ガラムも口ではああ言ってるやがるが、例えば俺がどう返答したとしても、攻撃を仕掛けてくるのは眼に見えてる。

それだけ今の俺は、『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』にとって邪魔な存在って訳だ。だがよオ。

「それがどオしたってんだア？」

俺は両手を胸の前で合掌させ、左右に引き離す事で、両の手の間に黒い稲妻を発生させる。やがてその稲妻は、徐々に形を成して行き、黒い大鎌へと姿を変えた。

『黒煉魔法』によって造り出した武器、『ダイク・デスサイズ漆黒の大鎌』だ。

大鎌を軽く振り回し、応戦する為の構えを取った俺は、命知らずな周りの馬鹿どもに向かって叫ぶ。

「そこまで言うなら話は早エ。テメエらには是が非でも答えてもらうぜ。ボルガ・フライトの居所をなァッ！」

## 第二章 分断

今、眼の前で起きているこの状況を、俺は喜ぶべきなんだろうか？  
『ゴースト・コンダクター 精霊指揮者』の一員、パーニヤ・ロンドベルがこうして俺たちの前に姿を現したという事は、少なくとも奴らはここで何か行動を起こすつもりでいる、という事だ。

そしてそれは、この地にノイエ・ガルバドアがいる確率がかなり上がった事にも繋がる。

ミレーナの記憶喪失について、何かしら知っている可能性のある、あの『魔術師』に。

「紅い髪のお兄ちゃんは、確か直接会うのは初めてだよねえ。アタシの名前はパーニヤ・ロンドベル。よろしくねえ、デーインくん」

と、突然俺たちの前に現れたパーニヤは、妙に陽気さを感じさせる声でそう言った。

やっぱり話に聞いてた通りだ。この子の振る舞いからは、張り詰めた糸のような緊張感というものが、まるで感じられない。

一見、歳相応の振る舞いを取っているようにも感じるが、違う。

この子の心にはきつと、深い闇がある。人間として普通の感情を抱けなくなるような、常軌を逸した行動を取ってしまうような、深い心の闇が。

それを胸の内に抱えているからこそ、こんなに幼い少女が『ゴースト・コンダクター 精霊指揮者』の一員として行動しているんだろう。

……まあその闇が何なのかは、俺には全く想像がつかない訳だが。「でも嬉しいなあ。まさかホントにこの渓谷へ来てくれるとは思ってなかったからさあ。来てくれなかったらどうしようって、ずっと悩んでたんだよねえ」



「そうかよ、そりゃご苦労な事だな。で、用件は何なんだ？まさかお前一人で戦いに来た、なんて言うつもりじゃねえよな？」俺は僅かに身構えつつ、宙に浮かぶ少女の動きに警戒する。

傍らのジンも、半ば呆然としている御車を庇うかのように前に進み出て、背中 of 剣の柄に右手を掛けている。

すでに戦闘態勢に入りつつある俺とジンを前にして、しかしパーニヤは、困ったような表情で口を開く。

「まさかあゝ。いくら何でも、キミたち二人を相手に出来る力量なんてアタシには無いよお」

「あん？ じゃあ一体何しにここへ来たってんだ？」

「うゝん、実はねえ、ちよっとした用事を頼まれたからなんだあ」クスクスと笑いつつ、パーニヤは続けてこう口にした。

「私たちのボス、ボルガ・フライト様にね」

「！」

その名を耳にした瞬間、俺は思わずジンの方に眼を向けてしまった。

彼は俺が見ている事に気付いていないようだが、しかしその表情は、さつきより確実に曇っている。

その心中を俺が知る術は確かに無い。だが、それでも俺は気になっってしまう。

ジン、お前は今、一体どんな気持ちでいるんだ……？

「ところであゝ、『術式魔法陣』って知ってる？」

まるで話題の転換を図ろうとするかのように、パーニヤは突然、そんな言葉を口にした。

俺とジン、どちらに対して話し掛けているのかわからないが、彼女は言いつつ、自分の腰の辺りにある革製のケースから、白い札のような物を取り出す。

今までに、リネやジンから聞く機会があった、パーニヤ・ロンド

ベルの特徴。

その中で俺が一番興味を持ったのが、あの白い札の事だ。

彼女は『印術』が刻まれた白い札を複数枚所持しており、状況に応じて札を使い分ける事で、様々な『魔術』的な力を操って戦っているのだろう。恐らく今、彼女の身体が宙に浮いているのも、『印術』の札を使って引き起こしている現象に違いない。

……って言うか、今この子何て言った？ 『術式魔法陣』だって？

「まるでバカにしてるみたいだな。俺はミレーナ・イアルフスの弟子で、『魔術師』なんだぜ？ そのくらいの事知ってるに決まってるんだろ」

すぐさま言い返しつつ、俺は右手に『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』を生み出した。これでいつ戦闘が始まっても、瞬時に対応出来る。

しかしそれにしても、『術式魔法陣』とはまた懐かしい『魔法名』だな。その名を聞けば、否が応でも思い出してしまふ。

『テルノアリス襲撃事件』の事を。

そしてあの男、アーベント・ディベルグの事を。

『術式魔法陣』。例の事件の際にも使われたその『魔法』は、『限定空間破壊』という能力を持っている『魔法』だ。

各『属性』毎に、『魔術師』数人で決まった形の陣形を組んで『魔法陣』を作り出し、それを設置した限定空間内に、『魔術』の力を流し込み凝縮する事で、莫大な破壊エネルギーを生み出すと同時に、対象物を一瞬で消滅させる事が出来る。

絶大な威力を持つている半面、発動までにそれ相応の時間を有する事や、陣を安定させる『魔術師』が倒れると、術そのものが発動しなくなる、などの制約がある為、扱うには相応の知識と技術が必要な代物だ。

俺はアーベントとの戦いで、頓挫したとはいえ、その力の凄さを眼にしている。もちろん俺だけじゃなく、今隣にいるジンもそうだ。そんな俺たちにこんな質問をするなんて、このパーニヤって奴は何を企んでるんだ？

「へえ、やつぱさすがだよねえ。それもミレーナ・イアルフスに教えてもらったのお？」

「もしそうだとしても、お前には関係ねえだろ」

「冷たい言い方だなあ……。じゃあさ、これは知ってる？」

場違いな程ニコニコ笑いながら、パーニヤはさらりところ続けた。

「別に『魔術師』を数人集めなくても、『術式魔法陣』を発動させる方法があるんだよ」

「!？」

その物騒な台詞に、俺は自分の耳を疑うしかなかった。あんな超破壊的な『魔法』を、簡単に発動させる手段があるだって!？」

「何言つてやがる！ そんなモンある訳

「あれえ、知らないのお？ さすがの『炎を操る者』フレイム・ウオーカーも、この方法

だけは知らないんだねえ」

「……ッ！」

嫌味にしか聞こえねえ台詞だなオイ。しかもワザとらしく不名誉な『通り名』（だと俺は思っている）まで口にしゃがって……。

不満に思う俺を尻目に、パーニヤはケラケラと笑いながら続ける。

「もちろん『魔術師』が陣を描いて発動するものに比べたら、威力は格段に落ちるんだけどねえ。だけど『印術』を使って陣を組めば、結構簡単に発動する事が出来るんだよ。こんな風にさあ」

そう言つてパーニヤが、右手に持った札を高く掲げた時だった。

俺たちが立っている地面に、血のような紅い光を放つ『魔法陣』が出現したのは。

「なっ!？」

以前経験しているからこそわかる。この光の強さは間違いなく、発動が間近に迫っている証拠だ！

……まさか、俺たちを土砂で足止めしたのは、発動までの時間を稼ぐ為だったのか!?

「くっ……! 一体どういうつもりだ!」

俺と同じく鬼気迫っている様子のジンが、地面の『魔法陣』から眼を離し、パーニヤに向かって叫ぶ。

だが当の本人は、完全に他人事として捉えているのか、楽しそうに答える。

「どういうつもりって簡単な事だよ。こうして足場を崩せば、キミたちを分断させられるでしょ?」

「分断……!？」

「何の為に、って言いたそうだねえ。ま、その内わかるんじゃないかなあ? ボルガ・フライト様が何を願ってるのか、って事はねえ」

パーニヤが間延びした声を上げ続ける間にも、足下の『魔法陣』はその紅い光を強めていく。

俺はもう手遅れだと理解しつつも、停車している馬車に向かって走り出した。

すると丁度その時、馬車の中からリネとミレーナが降りて来るのが見えた。恐らく彼女たちも、地面から湧くこの紅い光を不自然に思っただらう。

「リネ! ミレーナ! 今すぐここから離れろ!!」

俺が走りながら必死に叫ぶと、リネとミレーナは不思議そうな顔付きになった。

すると、次の瞬間。

「残念。時間切れえ」

緊張感の無い、間延びした声が聴こえたかと思うと、俺たちが支えにしている地面が、爆ぜた。

まるで火に掛けられた水が、熱湯となって沸々と沸き上がってい

るかのように、『魔法陣』が描かれている部分の地面だけが次々と弾け、瞬時に粉々になっていく。

足場が崩れ、一瞬身体の中身がフワリと浮く感覚に囚われる。だが次の瞬間には、俺の身体は谷底に向かって落下し始めた。

悔し紛れに叫んだ声は、崩落の轟音で掻き消され、ただ一人空中に浮かぶ少女パーニヤの姿が、あつという間に遠退いていく。

次に俺が見たのは、激しい流れを生み出しながら暴れ回る、蒼く透き通った水面だった。

投擲された巨大な鉄の凶器が、途轍もない速度で俺の鼻先を掠め、すぐ傍にあった大木の幹に深々と突き刺さった。

その衝撃に耐えられず、中途から折れてしまった大木は、轟音を上げて地面に沈む。

「ッハハア！ こう言っちゃなんだが嬉しいぜ！ まさかお前さんと戦える日が来るとはなあ！」

「ああそうかい。能気な脳味噌をお持ちのようで何よりだ」

鎖付きの鉄球を振り回しながら迫るガラムを牽制しつつ、俺は右手に握る『漆黒の大鎌』ダイク・デスサイズを振り上げる。

だがその瞬間、突然横合いから砲弾のような水の塊が飛来し、俺の足下に命中した。

「くっ………！」

足場が無理矢理決られた事でバランスを崩した俺の許に、ガラムが容赦無く追い討ちを掛けてくる。

「もらったあ！」

再び放たれた巨大な鉄球が、俺の頭蓋骨を粉碎しようと襲い掛かる。

だが俺は、あくまでも冷静だった。

飛来する鉄球目掛けて、水平に構えた『ダーク・デスサイズ漆黒の大鎌』の刃から、瞬時に黒い衝撃波を発生させる。

ガラムの武器を吹き飛ばした所で（なぜか奴の鉄球は『黒煉魔法』でも破壊出来ねエ）、俺は攻撃目標を切り替えた。

狙うのは、さっきからチマチマとうざってエ横槍を入れてきやがるシグードの野郎だ！

「コソコソ隠れてんじゃねエぞ三下がア！」

瞬時に方向転換して、向かったのは数メートル先にある細い木々の間。

俺は大鎌を両手で握り、直進する勢いを殺す事無く、横一文字に振り抜いた。

ザンツ、と言う音と共に細々として木々の幹が真横に両断され、急に視界が広くなる。

だがそこには既に、攻撃者の姿は無かった。

数秒遅れて真上を見上げると、シグードは高く跳躍して空中で身を翻し、ガラムの傍へと音も無く着地した。

「へエ、随分軽々と躲せるんだなア。テメエひよっとしたら、大道芸人の方が向いてるんじゃないのかア？」

「……」  
嫌味のつもりで吐いた言葉にも、シグードは大した反応を見せない。

「……なんつーか、受け答えに面白味のねエ野郎だなア。こういう時あの紅髪あかがみなら、俺に負けじと憎まれ口を叩いてきそうなモンだったのに、無表情かつ無口を貫き通しやがって。コイツ一体、他の連中とどうやって意志の疎通を図ってやがるんだ？」

「なあジエイガ。お前さん、本気で俺たちに齒向かうつもりなのか？」

「あ？」

突然、何の前触れも無く切り出したガラムは、ジツと俺の顔を見つめている。コイツ急に何言い出してやがんだ？

「質問の意味がわからねえな。一体俺に何を言わせてエんだ？」

「いや何、ちよつとした興味さ。自分の命を投げ売ってまで、勝ち目の無い相手に歯向かおうとする人間の心境つてのは、どういうモンなのかと思つてな」

「……何だと？」

俺に勝ち目がねえつて？ ……このクソ野郎、三下の分際で俺が負ける事を前提に話してやがる。随分舐められたモンだなアオイ。

「本当はお前さんもわかっているはずだ。ウチのボスは強え。無慈悲なまでに圧倒的な力を持つてる。それこそお前さんの師匠、ノイエ・ガルバドアを凌ぐ程の力をな」

「前にも言わなかつたかア？ 俺の前で気安くあいつの名前を出すなつてよオ」

「悪い事は言わねえ。無残な死を遂げる前に引き返した方が身の為だぜ、ジエイガ・デイグラッド」

俺の台詞を聞き流すかのように、ガラムは平然とそんな言葉を口にする。

……全く、どこまでも気に喰わねえ連中だぜ、本当によオ！

「舐めた口利いてんじやねえぞ三下がアツ！！」

叫ぶと同時に、俺は『漆黒の大鎌』ダイク・デスサイズを振り抜いて衝撃波を生み出した。

目標に向かって瞬時に突進する黒い光。

だがガラムとシグードは、左右に分かれる形で回避を選び、その場から飛び退く。と同時に、目標を見失った衝撃波が地面に炸裂し、激しい爆発を起こした。

天高くまで舞い上がる土煙。それを切り裂き現れたガラムは、ニヤリと笑いながら言う。

「交渉決裂つてヤツだな。残念でならねえよジエイガ」

「ハッ！ 交渉も何も、テメエらと結託してた覚えなんざ初めから無えがなア！」

空中から放たれた言葉と鉄球の一撃を回避しつつ、俺はガラムに叫び返す。

と、飛び退いた先で、またもや追撃するかのような水弾の嵐が、俺の許へと飛来する。

その数は五つ。

俺は体勢を整え直し、大鎌を横薙ぎに振るって水弾を一気に切り裂いた。

するとその瞬間、五つの水弾全てが破裂すると同時に、大量の水蒸気を発生させて、俺の視界を埋め尽くした。

「チィ！ 眼眩ましか！」

それは、俺がその場に踏み止まり、ほんの一瞬動きを止めた時だった。

俺の真正面、水蒸気の膜を突き抜けるように放たれた蒼く細い刀身が、連続で七回、俺の身体の節々を切り裂いた。

「ぐっ……！？」

ダンッ、と力強く地面を蹴り付け、俺は素早く後退する。

だが、それも奴らには計算されていた。

ビュゴオッ、という風斬り音と共に、俺の右側から黒い鉄球が突き進んできた。

回避は間に合わねエ！ そう判断した俺は、咄嗟に大鎌を両手で握り、長い柄の部分で鉄球の一撃を防御する。

しかし、速度の乗った鉄球の衝撃は凄まじく、俺は止め切る事が出来なかった。

「ぐおおおっ！」

後方に激しく仰け反り、倒れた俺の身体は勢い良く地面を転がった。

天地が入れ替わったような感覚の中、俺の身体は数メートル転がった所で漸く止まる。



脳が激しく揺さ振られている。そのせいで、視界を安定させるのに数秒の時間を要してしまった。

「ツハハア！ 無様な格好だな、ジエイガ・デイグラッド！ 三下三下と吠えやがる割には、随分情けねえ展開じゃねえか！」

地に伏す俺を嘲笑うかのように、ガラムは心底愉快そうな声を上げる。

確かにザマアねエが、こいつらに見下されんのは我慢ならねエ。

俺は身体を起こしつつ、ガラムを睨みながら口を開いた。

「悪いな。三下二人が相手じゃ、こつちとしても物足りなくてよオ。ワザとこういう展開にでもしねエと、話が盛り上がって来ねエだろ？」

「！」

どうやら俺の挑発は上手く行ったらしい。ガラムは表情を不満そうな物に一変させると、その両眼から鋭い眼光を放ち始める。

……とはいえ、ここらが潮時なのかも知れねエ。

どれだけ三下だと強がりを抜かそうが、この二人が相当な力を持つていやがる事は俺も充分承知している。それに俺は戦闘が起きた場合、なるべくだが長期戦を避けるようにしている。なぜなら俺には、『魔術』を行使する上で、どうしようもない『制約』を持つてしまっているからだ。

その『制約』とは、『魔術』の持続時間。

俺がノイエの野郎から享受された『黒煉魔法』は、他を圧倒する強力な力を持つている半面、行使し続ける為には莫大な体力と精神力を消費し続ける必要がある。

故にこの『魔法』を扱う者は、長期戦に向かへエ。絶大な力で短期決戦に持ち込む事こそが、この『魔法』の真髄と言える訳だ。

それこそ『紺碧の泉』<sup>アジュール・ファウンテン</sup>での戦いにおいて、俺が紅髪あかがみの前からあつさり身を退いたのには、実はそういう理由も含まれていたからに他ならねエ。

その『制約』があるからこそ、今のこの状況は、僅かにだが分が

悪いと言える。ガラムとシグード、この二人との戦闘を始めて、既に一時間近くは経過したはずだ。

さすがにこれ以上長引くのは不味い。奴ら二人に弱点を見抜かれる前に、潔く撤退を選ぶべきだろう。

……ま、この上無く灼な話である事に変わりはないがな。

「ジエイガ、最後にもう一度だけ聞いてやる」

「！」

思案に走っていた俺は、念を押すかのようなガラムの言葉で気を引き締め直した。

ガラムは厳しい表情で静かに、そして淡々と続ける。

「俺らのボスに歯向かうのを止めるつもりは、本当にねえのか？」

大人しく身を引こうって気があるなら、術の発動を解いて投降しろ。何度も言うが、これはお前さんの為でもあるんだぜ？」

「ハッ、恩着せがましい言い方してんじやねエぞ三下が。何度も言うってんだろ、テメエらと結託してた覚えはねエってよオ」

「そうかい……。なら死んでもらうしか」

「残念だったなア」

俺はガラムの台詞を遮り、大鎌をゆっくりと掲げながら、ニヤリと笑ってみせる。

もう時間稼ぎは必要無い。

既に『魔術』の発動準備は完了した。

あとは、こいつらを吹き飛ばすだけだ！

「生憎テメエら如きに殺される程、俺は矮小な存在じゃねエんだよ」

「！ ガラム！」

俺の言葉の端から何かを察知したらしいシグードが、珍しく怒鳴り声に近い叫びを上げる。

だがもう遅エ。俺が意図的に『ダーク・デスサイズ漆黒の大鎌』に蓄えていた力は、

今やっとガラムたちの眼に映る程に肥大化し、その全貌を現した。

「『ダークネス・レイ漆黒の光刃』！」

大鎌の刃の部分から出現した黒い光の球体は、俺の向上と共に、

その身から無数の黒い衝撃波を発生させる。

まるで雪崩のように四方八方へ飛来する黒い光。周囲で次々と起る爆発は、ガラムとシグードの姿を覆い隠し、破壊の渦となって爆風と爆煙を齎した。

「悪いな三下ども。テメエらがどう言おうと、俺は最後まで自由にやらせてもらっぜ」

奴らに聴こえるはずの無い捨て台詞を残して、俺は踵を返して走り出す。

もちろん返答など、ある訳が無かった。

その後、走り続ける事十分程。俺は奴らが追って来る可能性も考慮し、ワザと山道を外れ、溪谷の一番低い位置、『サンダーズ・リバー』の川縁まで下って来ていた。

「ここならそう簡単には見つからねエだろ。……ま、奴らが追ってくる可能性の方が低そうだがなア」

奴らが何の目的でこの溪谷に来たのかはわからねエが、俺と遭遇したのは偶然って感じだったしな。奴らにも何かしらの目的がある以上、俺個人を狙う事にまで時間を割いたりはいしねエはずだ。

とにかく、俺の目的はボルガ・フライトを探し出す事。ガラムたちから情報を引き出す事は出来なかったが、奴がこの地にいるのは間違いねエだろう。

奴を見つけ出してハッキリさせなきゃいけねエ。俺を手駒に利用しようとした理由を。

それに、もしかしたらボルガは知ってるのかも知れねエ。

あの男の……、ノイエ・ガルバドアの居場所を。

「しかし妙だな。この周辺、やけに川縁が荒れてるみてエだが……」  
思考していた俺は、今自分が歩いている場所の荒れようが、何となく気になってしまった。

今俺は、川の流れに沿って『サンダーズ・リバー』を南下している訳だが、さつきから進む度に、川縁に大量の土砂が流れ着いているのが眼に付く。まるで土石流でも発生したみてエな惨状だ。

だが眼の前の川は、増水してるようにも、流れが速くなっているようにも見えねエ。まるでこの土砂だけ、どこから切り崩して持ってきたみてエだ。

「何だつてんだア？ まさか、これも『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』の仕業だつてんじゃない」

苦笑混じりにそう言い掛けた俺は、その時前方に、土砂とは明らかに違う物を発見した。

いや、この場合『物』じゃなく『者』か。眼の前に横たわってるのは、どう見ても人間なんだからよオ。

「女……、か？」

上半身だけを岸に打ち上げた形で、うつ伏せのまま倒れている黒髪の人物は、服装だけ見ると男のようにも見えた。

だが近付いてよく見ると、背格好や体型が男の物とは思えねエ。明らかに女の体型だった。

「……死んでんのか？ だとしても、何でこんな所に……」

しばらく逡巡したが、とりあえず俺は、その人物の人相を確かめようと、傍らに屈んでその身体を強引にひっくり返した。

その瞬間、俺は息が止まるかと思った。

女の顔には見覚えがある。確か『アジユール・ファウンテンあかがみ紺碧の泉』で紅髪と戦っていた時、間に割り込んできたあの時の少女だ。

だが肝心なのはそこじゃねエ。女の顔に見覚えがあるのは、そのせいだけじゃねエ。

『似ている』からだ。

俺の記憶の中にある、ある人物と。

「な……、何で……」

そんなはずない、有り得ねエ！

記憶の中にある『アイツ』は『死んだ』。俺の目の前で『殺された』んだ！

『アイツ』はもうこの世にいない！

存在などしている訳が無い！

……と、心の中でどんなに否定しても、俺の口は勝手に言葉を紡ぐ。

もう二度と、口にする事など無いと思っていた、『彼女』の名前を。

「ユリイ」

眼の前にいる少女は『彼女』じゃない。ただ似ているだけなんだ。ずっと昔、俺に優しく微笑み掛けてくれた『彼女』に。

多分俺が、一番大切に想っていた少女に。

ユリイ・アルヴィード。

その名を忘れる事なんて、きっと何年経っても出来ねエだろう。過去に縛られ続けている、俺のような不様な人間には。

## 第二章 分断（後書き）

という訳で、一カ月ぶりの投稿です。

長い事放ったらかしにしててすみません……。

ついに、というのでしょうか、リネとジェイガが出会ってしまいましたね。

どこかに書いたような気もしますが、この『ブラウズナー 溪谷編』で、一旦『フレ임・ウォーカー』のまとめに入ろうと思ってます。今まで明かされなかった、もとい明かさないようにしていたあれやこれやを露見させようと考えておりますので、どうぞお楽しみに！

リネの存在がジェイガに何を齎すのか？

そして分断されたデイーンたちを待ちつけるものとは？

……なんて次回予告風に書いてみましたw

### 第三章 因縁

一体俺は何してやがるんだ？ 例え実害を齎す外敵じゃねエとしても、『この女』は紅髪あかがみの連れなんだぞ？

自分自身の行動に疑問を抱き、俺は何度も考えを改めようとした。『この女』を助ける事に意味はねエ。どれだけ顔が似ていようと、その身の雰囲気お荷物が似ていようと、『この女』は『アイツ』じゃない。だからこのまま放っておいても、何の問題もねエはずだ、と。

が、結局俺は、自分の感情に抗い切れなかった。

『アイツ』に似ているから。

助ける理由は、それだけで充分だった。

川岸で黒髪の女を拾った俺は、まず隠れる場所を探す事にした。

俺自身、妙な遭遇で混乱し掛けたが、ガラムとシグードが俺の後を追って来る可能性は、低いとはいえ消えた訳じゃねエ。この女お荷物を抱えた状態で戦闘にでもなりや、不利になるのは自明の理だ。それを避ける為には、一旦どこかに身を潜める必要がある。

そう考えつつ、女を抱えて川岸から元の山道へ戻ろうとしていた時だった。俺は偶然にも、川岸と山道の間にある林の中に、小さな洞穴を見つける事が出来た。

高さと幅は、それぞれ三メートル程度。奥行きは大体十二、三メートルお荷物つて所か。さすがに陽の光は奥まで届いてねエようだが、それでも足下を確認出来る程度の明るさはある。

俺は迷わずその洞穴に足を踏み入れ、出来るだけ奥の方まで進み、適当な所で女を地面に下ろした。

「チツ……、成り行きとはいえ、何で俺がこんな真似しなきゃならねエんだア？」

……ま、俺が自分で勝手にやってんだから、誰にも文句は言えね

エんだがな。

愚痴っぽく独り言を呟いた俺は、もう一度、黒髪の女の顔を見つめてみた。

こうして間近で見ると、益々『アイツ』に似てやがんなこの女。何から何まで全く同じって訳じゃあねエだろうが、それでも生き写しって言葉が当て嵌まる程似ている事には変わりねエ。

「……………」

妙な感情に後押しされねエ内にと思い、俺は女から距離を取る。

おっと、そっぴやアずぶ濡れの女を抱えてきたせいで、俺の服も少し濡れてんだよな。

「……………」

幸いこの周辺は林になってやがるから、火種になるモンは揃ってはずだ。火元の方も、『魔術』で火花を起こせば事足りる。

早速行動に移ろうと考え、俺はもう一度外に出る為に歩き出す。

だが俺は、その途中で肩越しに振り返り、また黒髪の女の方に視線を向けてしまう。

「……………」

自分の情けなさに軽く苛立ちを覚え、吐き捨てながら視線を戻す。どれだけ都合良く捉えようとした所で、結果は何も変わらねエ。

この事実だけは変えようがねエんだ。

あの女は『ユリイ』じゃねエ。

ただ単に似ているだけの、赤の他人。

だから、こんな気分になるのは間違ってる。

死んだはずの『ユリイ』が、生き返ったような気分になるのは。



どれだけの距離を流されたのかもわからない。気付くと俺は、どこかの川岸に流れ着いていた。

徐々に意識が覚醒し始め、俺は激しく咳込んだ。どうやら無意識の内に、川の水を飲み込んでしまっているらしい。

しばらく悶える事、三十秒程。漸くまともに呼吸出来るようになった俺は、ゆつくりと立ち上がり、辺りを見回してみた。

青々とした草木や粗く削られた山肌が見える事から、どうやらまだ渓谷の中にはいるらしい。

だが、近くにみんなの姿は無い。それに、ここがどの辺りなのか、正確な事もわからない。意識を失っていた事を考えると、恐らく結構な距離を流されているはずだ。

「くそつ、まさかあんな方法で『術式魔法陣』を発動させるなんて……！ もう少し周りに気を配ってれば、気付く事が出来たかも知れねえのに……」

ギリツと、俺は奥歯を強く噛み締めた。

そうだ、気付いても良かったはずだ。第一俺は、畏を張られている可能性を考慮してははずなんだから。

やっぱり俺は、無意識の内に注意力が散漫になっていたんだろう。あの男、ボルガ・フライトの存在を意識する余りに。

「……いや、今更悔やんでたってどうにもならねえ、か」

反省する事は確かに大事だろうけど、悔やみ続けてても何も始まらないのも確かだ。ここでジツとしてたって、状況が良くなる訳でもないしな。

腹の中でどうにか踏ん切りをつけ、俺はびしょ濡れの格好のまま歩き出す。

今は服なんて乾かしてる場合じゃねえし、俺の場合その気になれば『魔術』でどうとでもなる。いずれにしても、みんなの安否を確かめるのが先だ。

幸いな事にこの辺りの地形は、川縁から十メートル程上にある山

道まで緩やかな斜面になっていて、徒歩で上る事が出来そうだった。俺は迷わず歩き続けながら、改めてみんなの事を考えてみる。

恐らく残る三人の中で、一番心配がいらぬのはジンだと思う。

彼は仮にもギルドメンバーの一員だし、その辺のヤツとは踏み越えてきた場数が違う。どんなに厳しい状況下でも、そう簡単に動揺したりはしないはずだ。

それに俺の記憶違いで無ければ、山道の崩落に巻き込まれた時、あいつは御車の男を助けようとすらしていた。それだけの行動力があるジンなら、恐らくは自力で切り抜けられるだろう。

が、問題は残る二人、リネとミレーナだ。

リネは俺と出会うまで一人旅をしていた事から、さすがに状況判断能力はしっかりしてる。こういう切羽詰まった場面で、短絡的な行動に走ったりする事は無いだろうが、それでもやはり、あいつを一人にするのはかなり不安が残る。

それにミレーナ。彼女も彼女で、再会した頃よりは記憶を取り戻してはいるものの、全盛期の頃に比べれば、その行動力には雲泥の差があるだろう。故にこちらも、簡単に安心してしまふ訳にはいかない。

こうなってくると俺は、愉快で素敵な偶然を、信じてもない神に祈ってしまいそうになる。

崩落の際、二人は互いが近い場所にいた。もし仮に二人が同じ場所に流れ着いているとすれば、さっき考えた不安も少しは解消する事が出来る。

だがその可能性が、一体どれだけあると言うのだろうか？

この世界、或いは神様って奴は、無慈悲なまでに残酷なものだ。それこそ矮小な俺の願いなど、簡単には聞き入れてくれない程に。

だから俺は、神様って奴を信じないようになっている。

『精霊石』の一件に関わる神秘的な存在を俺が鵜呑みにしなかったのも、そういう感情論から来ているものが多少はあったからだ。

信じれば、願えば、神はきっと答えてくれる。

という、いかにもな売り文句で信者を募り、とんでもない悪さを働いていた宗教団体が、一体いくつ正規軍の手によって潰された事か。

そういう感情すらも利用するような奴がいるから、俺は神様を信じない。信じられる訳が無い。

神様なんて。

「オイオイ、マジかよ？ 俺の許にはジン・ハートラーの野郎が流れ着いてほしかったんだがなあ。全く、神様ってヤツは薄情な野郎だ」

酷く落胆したような男の声で、俺は思わず歩みを止めた。

ふと前方を見ると、いつの間にか見知らぬ男が俺の行く手を阻む形で佇んでいる。

歳は二十代前半だろうか。黄土色をしたボサボサの長髪が、何となくこの男のだらしなさを演出している。おまけに少しつり上がった細眼が、品定めするかのようにこつちを見つめているせいで、俺はその視線に嫌悪感を抱いてしまった。

……いや、ちよつと待て、何かが引つ掛かっている。

見知らぬ男と表現したばかりだが、俺はなぜか、この男の容姿に心当たりがあった。

「ああん？ 何ポーっとしてんだてめえ？ 自分の敵が眼の前に現れたつてのに、呑気に考え事か？」

男は俺の顔を見つめながら、若干不満そうな言葉を漏らす。

だが俺の意識は、それでも別の所に飛んでいた。この違和感の正体を探るには、やはり質問してみるのが一番だろう。

「なあ、一つ聞いていいか？」

「あん？ 何だよ突然。俺の誕生日でも教えてほしいのか？」

あからさまにふざけた様子で男は言うが、それでも俺は気にしない。俺は今、もっと別の所に興味が向いている。

「あんたの名前は？」

「ハアツ？ 何を聞いてきやがるのかと思えば、んなくだらねえ事かよ。俺の名前はガイザック・エルドラドだ。これで文句ねえか？」

と、ガイザックは心底面倒臭そうに吐き捨てる。

その名前が、俺にとってどういう意味を持つのかも知らずに。

「ハッ！」

俺は神様を信じていない。

だから奴に祈る事なんて絶対に無い。

「ハハッ！」

だけどこの時ばかりは、俺は神様の存在を信じてもいい気分になつていた。

信じれば、祈れば、神はきっと答えてくれる。

エセ宗教の上等文句を、俺はこの時、初めて心の底から受け入れる事が出来た。

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！」

「……！？」

声高々に大笑いする俺を怪訝な表情で見つめ、ガイザックは若干首を傾げる。

頭のおかしな奴だと思われた事だろう。だけど俺は、それでもしばらく笑う事を止められなかった。

「何がそんなに面白えんだ、てめえは……？」

漸く俺が落ち着きを取り戻し始めた頃、ガイザックは少々不満げな表情でそう尋ねてきた。

俺は、笑い過ぎて眼に溜まった涙を拭いつつ、ゆっくりと口を開く。

「いや、別に。全然大した事じゃねえよ」

散々笑い転げた拳句に、俺が口にしたのはそんな言葉だった。

その答えが気に入らなかつたのか、ガイザックは顔を顰め、怒りを露わにする。

「ふざけてんじやねえぞてめえ！ 俺をバカにしてやがんのか！？」  
「別にそんなつもりはねえって。言い掛かりも甚だしい野郎だな、  
ガイザック・エルドラドさんよ」

「くッ、そがア……！ そうやって余裕ぶってられんのも今の内だ  
！ この俺をバカにした事、存分に後悔させてやる！」

「そうかい。なら、あんたは今の内に悔やんどくんだな」

「ああ！？ 俺が何を悔やむってんだア！？」

怒りの声を上げ、右手に鉤爪を構えるガイザックに対し、俺は不  
敵に笑ってみせる。

自分の周囲に、激しい炎の渦を生み出しながら。

「この俺に出会っちゃまった事をだよ！！」

ガイザック・エルドラド。

それは間違いなく、ジンから聞いていた『ゴースト・コンダクター精霊指揮者』のメンバ  
ーの名前。

記憶を失ったミレーナを騷り物にし、無残な姿にした張本人。

俺が今、最も憎むべき男の名前だった。

「う、ん」

自分の身体の近くに何かの温かさを感じて、あたしはゆっくりと  
眼を開けた。そしてぼんやりとする頭で、温かさの正体を探ろうと  
視線を動かしてみる。

少し距離を開けてあたしの身体を温めているのは、紅い火の粉を  
散らして静かに燃えている炎だった。少し長めの小枝らしき物が、  
火種としてくべられているのがわかる。

「……？」

徐々に意識がハッキリしてきたあたしは、自分が地面に横たわっている事に気付く。

反射的に上半身を勢い良く起こし、辺りに視線を投げてみると、周囲はゴツゴツとした岩の壁で囲まれていた。どうやらここは洞窟のような場所らしい。

「あたし、何でこんな所に……」

未だ微かにぼんやりとする頭で、あたしは何とか記憶を整理してみる。

確か、山道を走ってる途中で急に馬車が止まって、ディーンとジンが外の様子を見に行つて、それから。

「漸く眼が覚めたか」

「えっ？」

声を掛けられた事で、あたしは漸く自分以外の誰かの存在に気付いた。

声のした方に視線を向け、声の主の顔を見た瞬間、あたしは思わず眼を見開いてしまう。

焚き火の煌々とした灯りに照らされているのは、少し尖った青紫の髪に、蛇を思わせる鋭い眼付きの少年。

紛れも無く、ジェイガ・ディグラッド本人だった。

「な……っ、何であなたがここに……！？」

「フン、どこにしようか俺の勝手だろオが。テメエにとやかく言われる筋合いはねエ」

あたしの態度が気に喰わなかったのか、ジェイガは鬱陶しそうに呟くと僅かに顔を逸らした。

対してあたしは、驚きを隠す事が出来ない。何でこの人が『ブラウズナー溪谷』にいるのかわからなかったし、随分落ち着いた様子であたしの傍にいる事も不思議だった。

……いや、そうじゃないよね。よくよく考え直してみれば、あたしとこの人の間には少しだけ、因縁のようなものがあるんだった。

数日前、元老院がジェイガの身元を調べてる最中に手に入れたっていう、一枚の写真。

そこに写っていた、まだ少し幼い頃のジェイガと、あたしそっくりな少女。

あの写真はもう返却されたらしいけど、それが原因であたしは、元老院からあらぬ疑いを掛けられていた。……うっん、多分今も疑われてるんだと思う。

指名手配犯ジェイガ・デイグラッドと、関わりを持っているかも知れない人間として。

でももちろん、あたしはそんな関わりを持った覚えなんてないし、当然写真に写っているのはあたしじゃない。

ディーンやジンは、あの写真に写っていた少女が、ジェイガの過去に何かの形で関わっているんじゃないか、って考えてるみたいだけど、実際の所はわからない。

彼の過去に関わっているかも知れない写真の少女と、どういう訳か似ているあたし。

あれ？ って事は……。

「もしかして、あなたがあたしをここまで運んでくれたの？」

山道の崩落に巻き込まれて川に落ちたはずのあたしが、川から離れたこんな洞窟みたいな所に横たわってるはずない。誰かが運んでくれたんだって、そう考えた方が自然だ。

そして今のこの状況で、それを行なえそうな人間は一人しかいない。

ある程度の確信を持って尋ねると、ジェイガは顔を逸らしたまま、ぶっきら棒に答える。

「別に、ただの気紛れだ」

大した意味なんてありやしねエよ。そう言ってジェイガは立ち上がると、ワザとらしくあたしに背を向けた。

何か、ディーンとはまた違った意味で取り付く島が無いって感じだなあ……。助けてくれた、って言うていいのかわかんないけど、

もう少し柔らかく受け答えしてくれたっていいんじゃない？

と、そう思っていたあたしは、不意にある事を閃いた。この方法なら彼も案外、デーンみたいなツツコミを披露してくれるかも！  
「ねえ、ちよつと確認してもいい？」

「あん？」

肩越しに振り返るジェイガに対して、あたしは恥かしそうにしているように見せる為、ワザとらしく身体を擦りながらこう言ってみた。

「あたしが気絶してる間に、その……、何か変な事したりしてないよね？」

「本気でそう思ってたなら今からでも既成事実にしてやるオカア！？」

「冗談ですごめんなさい！」

ジェイガの獰猛な獣のような迫力で、あたしは即座に平謝りしてしまう。

うう、やっぱりこの人怖いよお。デーンってば、よくこんな人と一対一で戦ったり皮肉を言い合ったり出来るよなあ……。

と、恐々考えていたあたしは、ジェイガの動きに若干違和感を覚えた。

焚き火を挟んで反対側にいる彼は、身体を庇うみたいに少々ぎこちなく立っているように思う。

「ねえ、あなたもしかして、怪我してるんじゃない？」

気付けばあたしは、そんな風に尋ねていた。

するとすぐさま、ジェイガが鋭い眼付きを伴って言い返してくる。

「……だったら何だ」

「ちよつと見せて！」

あたしは物怖じする事無く、ほとんど反射的にそう答えていた。

あたしの受け答えが意外だったのか、ジェイガは若干、眼を丸くして驚いたような顔付きになる。

それに構わず、あたしはジェイガの傍らに近付き、彼を半ば無理



矢理小さな岩の上に座らせて、怪我の具合を観察してみる。

彼の身体には所々、何かで切り裂かれたような真新しい傷が付いていて、傷口からはジワリと血が滲んでいる。大した傷じゃないみたいだけど、やっぱり放っておいたらダメだよ。

「少しの間ジツとしてね。すぐに治してあげるから」

「あ？ 治すだと？」

訝しそくに眉根を寄せるジェイガを尻目に、あたしは両手の手袋を外して、彼の傷の部分に翳す。

するとその瞬間、あたしの身体から淡い光が発生し、彼の身体を包み込んでいく。

『治癒』の効力で傷が治り始めている事を実感したのか、淡い光を見つめながら、ジェイガは随分驚いた様子で口を開いた。

「テメエ……、何なんだこの力は？」

「多分あなたも一回くらいは聞いた事あると思うよ。『妖魔』って言う、『治癒』の力を持った一族の事。あたしはね、その一族の唯一の生き残りなんだ」

「！ テメエが……？」

食い入るようなジェイガの視線に、あたしは少し照れ臭さを感じた。やっぱり、こうして自分の正体を明かすと、みんなかなり驚いた表情になるんだよね。

と、そんな風に思いながら力を使い続けていたあたしは、また『あの時』と同じ違和感を感じた。

数日前、『テルノアリス』でジンを治療している時に、初めて感じた違和感。最初は気のせいなのかと思うくらい小さい感覚だったけど、やっぱりおかしい。気のせいなんかじゃない。

『治癒』の効力は確かに発揮されてるのに、傷の治る速度が明らかに遅くなってる。

ほんの少しの違和感だけど、それでもディーンと初めて会った時

に比べたら、確実に落ちてるように思う。一体どういう事なんだろう……？

「 テメエ、一体何考えてんだ？ 」

「 えっ？ 」

しばらく考え込んでいたあたしは、ジェイガの言葉で顔を上げる。すると彼は、どこか冷めた眼付きであたしの方をジッと見つめていた。

「 俺がどういう人間か、どんな事をしてきた人間か、知らねエはずねエよな？ 大体俺は、テメエと一緒にいるあの紅髪あかがみの敵だ。『紺碧アジユの泉』で俺がミレーナ・イアルフスや無関係の人間に対して何をしたか、テメエだって忘れちまった訳じゃねエだろ？ にも拘らず、憎しみをぶつけるべき相手と普通に会話して、あまつさえ怪我まで治そうとするなんざ、正気の沙汰とは思えねエな 」

「 …… 」

「 だから聞いてんだよ。一体何を考えてんだ、ってな 」

まるで突き放そうとするかのようなジェイガの言葉に、あたしは口を噤んでしまう。彼の言う通り、知らないはずがないし、忘れるはずがないからだ。

彼の名前はジェイガ・デイグラッド。大陸の各地で正規軍やギルドメンバーを襲撃した事で、政府から指名手配されている『魔術師』。

その上この人は、自分の師匠の行方を探す為に、情報を持っていそうなミレーナさんを襲い、彼女を守ろうとしたログハイムさんを意識不明にまで追い込んだ張本人だ。

憎しみをぶつける事はあっても、怪我を治してあげる理由なんて一つも無い相手。

でも。

「 確かにあなたの言う通りだと、自分でもそう思うよ。少し前のあたしだったら、多分あなたの怪我を治そうなんてこれっぽっちも考えなかったはずだしね 」

でも、あたしは知ってしまった。偶然にも見てしまった。

今眼の前にいる彼の、過去の断片と呼べるものを。

「『テルノアリス』で、あたしそっくりな女の子と、あなたが笑って写ってる写真を見たよ」

「!!!」

あたしが口にした瞬間、ジェイガの表情が一瞬で強張った。

他人に知られなくなかった事を知られてしまった、と言いたげな表情。多分あたしも、誰かに自分の正体を知られてしまった時、こんな顔をしていたんだと思う。

「あの写真を見てから、ずっと思ってたの。あなたに話を聞いてみたい、あなたと話してみたいって。この気持ちはどういうものなのか自分でもよくわからないけど……、でもあなたには、憎しみだけをぶつけてもダメなんじゃないかなって思ったの。だからこれは、あたしからの勝手なお願い」

漸くジェイガの傷が癒えた所で、あたしは力の発動を止め、彼の眼を真っ直ぐに見つめた。

例え拒否されても、拒絶されてもいい。

あたしはただ、単純に彼の事を知りたいと思った。

だから切り出す。あなたを知りたいという願いを込めて。

「聞かせてほしいの。あなたが抱えているものの正体を。あなたの、過去を」

### 第三章 因縁（後書き）

はい、という訳で『フレーム・ウォーカー』も通算70部目に突入しました！

いやあ〜しかし、小説全体で見るとなんて多い文字数だ。

学生時代、読書感想文なんてまとみに書いた事なかったのに、やっぱり物事って趣味にしたほうがスラスラと行くもんなんですかねえ……。

それはさておき、ディーンくんですよ！

こちらも漸く、師匠を傷付けた怨敵と遭遇してしまいました。

こっからどうなっていくのか作者としても楽しみですww

それではまた次回！ノシ

## 第四章 選択

乾いた地面の上を駆け抜ける度、微かに吹き抜ける心地良い風が、炎のように紅い俺の前髪を揺らす。

それを感じ取りながら、俺は地面を滑るように急停止し、即座に身体を反転させた。

するとその瞬間、景色が一変する。

方向転換した視線の先には、夥しい数の黄土色の物体が接近しつつあった。

それは、数日前にも辟易させられた存在。

『魔術』によって造り出された不気味な人形。

物言わぬ襲撃者、人型『ゴーレム』だ。

「そいつを殺せ、泥人形ども！ 皮を剥ぎ、肉を引き裂き、骨を砕け！ 調子に乗りやがったそのバカを、惨めな死体に変えてやれ！」

口角をこれ以上無いくらいに引き上げ、邪悪な笑みを湛えるガイザックが叫ぶ。

すると『ゴーレム』たちは、人間の身体では到底見せる事の出来ない速度で動き回り、上下左右から俺を挟み込もうと突進してくる。殺到する泥人形たちに向けて、俺は即座に『深紅の流星』クリムゾン・レインを放った。

炎の塊から派生した無数の火球が、辺りを埋め尽くす黄土色の肢体に悉く命中し、次々に爆発を起こす。

今の一撃で粗方吹き飛ばせたはずだが、のんびりはしていられない。

数日前の『テルノアリス』での戦いでも経験した事だが、人型『ゴーレム』は何度倒してもすぐに別の個体が造り出されてしまう。

自らの手足となる兵隊を無尽蔵に生み出し続ける。それが、ガイザックが行使する『魔術』の能力だ。

新しい戦力を生み出される前に決着を付けたければ、ガイザック  
本人を狙うか、もしくは『魔術』の力の『核』となる物を破壊する  
しかない。

狙うのは、奴が右手に装着している鉤爪。以前あいつと戦ったと  
言うジンからは、あの『核』は破壊したって聞いてたけど、今こう  
して『魔術』を発動してるって事は、恐らくこの短期間で修復した  
んだろう。何とも手回しの良い事だ。

適当に思いつつ、俺は右手に『紅蓮の爆炎剣』フレイム・ロンゲソードを造り出すと、微  
かに辺りを舞っている爆煙を突き抜けるように走り出した。  
が、その足はすぐに立ち止まる結果となる。

雪崩を思わせる巨大な地鳴りと、足場が崩れる程の強い揺れが、  
俺の行く手を阻んだからだ。

「なっ!？」

しかも、事態はそれに留まらなかった。

突然、数メートル先の地面が大きく隆起し、地中から轟音を上げ  
て、何かが這い出してきた。

まず眼に映ったのは、巨大な右腕だった。

粗く削った岩石を無理矢理繋げ合わせたかのような、太く茶色い  
それは、辺りに轟音を響かせ続けながら、地中に残っているである  
う部分を引き上げようと、地面を強く叩き付けた。

その途端、爆風に近い風と砂埃が巻き起こり、俺の視界を奪い去  
ってしまう。

「何なんだ一体……!？」

自然と眼を細めてしまう俺を尻目に、轟音は尚も続いている。

と、最後に一際大きな爆音が響いたかと思うと、眼の前の現象は  
漸く治まりを見せた。

するとその瞬間。

「どうもてめえの相手をする為には、泥人形如きじゃ足りねえらし

いからな。ちよつとばかり方法を変えさせてもらつたぜ」

どこからともなく聴こえてくる、どこか誇らしげなガイザックの  
声。

晴れ始めた砂埃の中、奴の姿を探していた俺は、しかしある事に  
気付く。

何だか俺の周囲だけ、やけに陽射しが遮られている。空が曇つて  
いる訳じゃない。日影が出来ていない場所も確かにあるんだから。

だとすれば、考えられる理由はただ一つ。

俺のすぐ傍に、太陽の光を遮る巨大な物体が屹立しているからだ。

「さあてと。そんじゃ遠慮せずじつくりと見て逝けや。俺の『傀  
儡魔法』の真髓つてヤツをよお！」

達した結論を裏付けるかのように、ガイザックの愉快げな声は随  
分上の方から聴こえてきた。

砂埃が完全に晴れ、周りが見通せるようになった俺の眼に飛び込  
んできたのは。

「石の、巨人……!？」

見上げた先に屹立しているのは(全体像が掴めない俺からは)、  
人型かどうかも怪しいと思ってしまう程、巨大で歪な岩の塊だった。  
その姿は、感覚としては『ゴーレム』に近い。だが、普段荒野な  
んかで遭遇する機会のあるそれとは明らかに違う。その大きさだけ  
なら、確実に『ゴーレム』の二倍以上はある。十メートルを軽く超  
えているだろう。

しかもその身体は、岩や石で出来てるとはいえ、かなり分厚く頑  
丈そうだ。恐らく『フレイム・ロングソード紅蓮の爆炎剣』じゃ、身体ほんの一部を削  
れる程度だと思つ。

いくら何でもムチャクチャだ。『魔術師』であるこの俺が、『魔  
術』そのものを否定しかねないこんな言葉を、素直に口にしそうに  
なつた。

「こんなのアリかよ、と。」

「どうしたんだあクソガキ？ 随分呆然としてるみてえだが、そんな悠長に構えてていいのかよ!?」

「!!!」

石の巨人の肩（らしき所）に立つガイザックが、狂気に満ちた声を上げた瞬間だった。

巨人の身体から放たれる右拳が、俺目掛けて接近してくる。しかもその巨大さに反して、予想以上に動作が速い。

咄嗟に右に跳んだ俺の背後。さっきまで立っていたはずの場所が、凄まじい轟音と共に一瞬で砕かれ、抉られる。

地面を数度転がってから、再び立ち上がった俺は、すぐさま『クリムゾン・レイ深紅の流星』の予備動作に入った。

炎の塊を作り上げ、『魔法名』を口上する事で爆散した炎が、火球となって石の巨人の身体のおちこちに降り注ぐ。

だが。

「!?!? 嘘だろ……!」

火球による連続爆撃を受けたにも拘らず、石の巨人の身体はほんの少し削り取られただけで、倒壊に繋がるような罅らしき物の一つすら見当たらない。

おいおい、『深紅魔法』の大技でこの程度つて、どんだけ硬いんだよあの巨人!?!

「ハッ! 無駄だ無駄無駄! その程度の威力じゃ俺の人形は破壊出来ねえよ! ペシヤンコに踏み潰されたくないけりやあ、さつさと土下座でもしてみやがれ! そうすりゃあ俺も考え直してやるよ! てめえをブツ殺す為の方法をなあ!!!」

「……!」

何だそりゃ。結局殺す事には変わりねえんじゃねえか。どこまでも悪趣味な野郎だな。

しかしどうする? 『クリムゾン・レイ深紅の流星』すら効かないような強固さに対して、小技を繰り返しても埒が明かない。あの巨人を仕留める



為には、それこそ『術式魔法陣』クラスの破壊力が必要になるだろう。

……、仕方が無い。少々危険な賭けではあるが、これ以外に方法が思い付かない。

これだけの強敵を前に戦うなら、これぐらいの覚悟が必要なのはただ！

「あん？ 何してんだてめえ？」

俺は右手に炎剣を造り出すと、一旦膝を折って、左掌を地面に押し当てた。

訝しげな声を上げるガイザックに対して、俺はゆっくりと顔を上げる。

尚も戦いを諦めていないと告げる為、不敵な笑みを浮かべながら。「行くぜガイザック。俺もあんたに見せてやるよ。『深紅魔法』の真髓ってヤツをな！」

合図のつもりで叫んだ言葉と共に、俺は地面を強く踏み付ける。

その直後、俺の身体が疾走を開始した。

互いの距離は五メートル程度。巨軀を操る石の巨人からすれば、俺の身体はすぐにも射程範囲に入ってしまうだろう。

すると案の定、相対する石の巨人は、突貫する俺の身体を押し潰そうと、その巨大な右腕を振り上げ、拳を金鎚のように振り下ろしてくる。

俺はその一撃を右に跳んで回避し、巨人の一撃が地面を抉るより早く、もう一度力強く跳躍した。そうして空中に逃れる事で、破壊の余波による揺れは俺の身体を襲わない。

俺は跳躍の勢いをそのままに、巨人の右腕、前腕部に当たる部分目掛けて炎剣を振り下ろした。

直後、命中させた箇所から爆炎が勢い良く吹き出す。

だがもちろん、今の一撃はほとんど無意味に近かった。石の巨人の、人間に例えるなら薄皮の部分を、それも浅く削り取ったに過ぎない。

「ハッ！ 何をする気かと思えば、バカの一つ覚えか！ その程度の一撃じゃあ掠り傷にもなりやしねえんだよ！」

巨人と交錯し、地面に左手をつく形で着地した俺に、高所からガイザックが嘲笑うかのような台詞を吐く。

と、その言葉に呼応するかのように石の巨人は、今度は右腕をそのまま、地面に擦り付けるような体勢で横薙ぎに払い始めた。

ドガガガッと、地面を強引に削り取りながら迫り来る右腕。俺の位置からだ、それはもう単なる岩の壁にしか見えない。

が、それでも俺は怯まず、そして退かなかつた。

俺は炎剣を携え、三度目の跳躍によつて岩の壁に足を掛け、四度目の跳躍によつて、巨人の右腕の前腕部分に着地した。そしてそのまま、岩肌を駆け上がるかのように右腕を伝い、巨人の右肩の辺りに立つガイザックの許へと疾走する。

「なっ！？」

戦慄くガイザックを尻目に、俺は走り抜けながら、左手で虚空に十字の炎を生み出した。『深紅魔法』の技の一つ、『パーニング・クロス 烈火の十字爆撃』だ。

十字の炎の中心を殴り付ける事で、それはガイザックの許へと飛来する。が、もちろん奴は、身体を軽く捻る事でそれを回避する。

しかし次の瞬間、俺はすでに、ガイザックの許へと辿り着いていた。

「そんな所で高みの見物決め込んでんじゃねえよ！」

「チイツ！ クツソがあ！」

炎剣と鉤爪。互いに携えている武器を振るつた俺たちは、ものの数秒で交差した。

ガイザックの真横を通り抜ける形で落下した俺は、着地の瞬間に『パーニング・クロス 烈火の十字爆撃』を放つて落下の衝撃を殺す。

左手を地面について岩の巨人を見つめる俺は、右肩の辺りに微かに痛みを感じた。どうやらさっき交差した瞬間、鉤爪で皮膚を切り裂かれたらしい。

「惜しかったなあ、クソガキ。どうやらてめえは、この鉤爪に付いてる『核』を狙おうとしたみてえだが、残念ながら空振りだ。とはいえ、自分の身を危険に晒すその根性は称賛に値すんぜ。さすがはかの『英雄』、ミレーナ・イアルフスの弟子って所か？」

「！」  
言葉通り、爆炎に晒された様子の無いガイザックは、高所に立ち尽くしたまま皮肉げに笑ってみせる。

俺は、そんな奴の言動が気に喰わなかった。

この男は、記憶を失ったミレーナを嬲り物にした張本人だ。こいつの性格からして、恐らく執拗に、そして徹底的にミレーナの事を甚振ったに違いない。

そんな最低のクソ野郎が、平然とミレーナの名前を口にする。その軽はずみな行為が、俺には我慢ならなかった。

「……あんたに同情の余地はねえ。だけど一応、先に断つとくぜガイザック」

「あ？ 一体何の話してやがる？」

だから俺は、語気を強めながらゆっくりと立ち上がる。自分の顔に、不敵な笑みを湛えながら。

障害となる要素は何一つ無い。

準備は全て整った。

後は、奴に対して告げるだけでいい。

確信という名の、勝利宣言を。

「灰になりたくなけりゃ、今すぐそこから離れた方がいい」

「！？」

それは、俺が言葉を発した瞬間だった。

突如として、石の巨人を取り囲む形で三つの火柱が発生すると同時に、地面から紅い炎で形成された無数の鎖が出現し、石の巨人の巨体のあらゆる箇所に、それが一瞬で何重にも巻き付いた。

しかもそれだけじゃない。火柱が発生している部分から、地面に一瞬で炎の線が引かれ、点となる三つの火柱を繋ぐ。

それは『深紅魔法』の力によって地面に刻まれた、対象物を拘束する三角形型の魔法陣だ。

「何、だこりゃあ！？ てめえいつの間にかこんな」

「『深紅魔法』の中にも、あんたが使ってたのと同じように、陣を描いて発動する『魔法』があるんだよ」

驚愕を露わにするガイザックの言葉を遮り、俺は懇切丁寧に説明を始める。

それだけの余裕を持つ事が、出来るようになっていた。

「もちろん威力は『術式魔法陣』には及ばねえし、あれとはまた『術式』が随分違う。それにこの『魔法』は、一人で造り上げなきゃいけない分、間合いの取り合いになるような一対一の戦いじゃ、まづ使えない手だ。が、今回の相手はバカみたいに図体のデカイ奴だったからな。『仕掛け』を設置するのは意外と簡単だったよ」

そう言っただけ俺は、ワザとらしく左手をヒラヒラと振ってみせる。

すると、やはりガイザックも『魔術師』の端くれではあるらしい。その動作だけで、どういう事かを瞬時に理解する。

「まさかてめえ、その左手で……！」

「ご名答」

俺が石の巨人を相手に始めた瞬間から、頻りに『左手を地面に押し当てて』いたのは、魔法陣形成の為に、掌に造り上げた炎の『術式』を、予め決められている配置通りに地面に刻み込むのが目的だったからだ。

そして、この『魔法』を発動させるのに必要となる最後の一手は、『言霊』の『詠唱』。

俺は、未だに石の巨人の肩から離れようとしなないガイザックに向けて、静かに告げる。

「残念ながら、次が最後の仕上げだ。今の内に言いたい事があるなら聞いといてやるぜ？」

「くっ……、くっ……！」

「……返答無し、って事でいいみたいだな」

言葉に詰まるガイザックをほとんど無視する形で、俺はすぐさま仕上げに取り掛かる。

俺はもう、我慢する事が出来なかった。早く最後の『詠唱』を済ませて、この戦いを終わりにしたいと思っていた。

そうすれば、ミレーナの仇を討った事に繋がるんだから。

「配列は力を。力は炎を。炎は破壊を。破壊は消滅を。我、導き出される理にて、劫火の柱を生み出さん」

左手を前方に翳し、静かに口上する俺の声に呼応するかのよう、魔法陣内の紅い炎の鎖は、徐々に力強い光を放ち始める。

視界の端で、紅い光に晒されているガイザックが何かを言い掛けたのはわかったが、それでも俺は『詠唱』を止めなかった。

続けて口にしたのは、絶大な破壊を齎す『魔法名』。

「『クリムゾン・バースト深紅の爆裂波』」

直後、力を凝縮した魔法陣が炸裂し、十メートルを超す紅い炎柱が、石の巨人の姿を覆い隠した。

勝敗は恐らく、確かめるまでもない。

「そオいやア、まだテメエの名前を聞いてなかったな」

一旦避難していた洞穴から抜け出した俺は、とある場所を目的地に定め、黒髪の女を連れ立って歩いている。

もちろん名前を確認しようと思ったのは、ユリイとこの女を明確に『区別』する為だ。別にそれ以上の意味や感情がある訳じゃねエ。「リネ・レディアだよ。良かったらあなたもリネって呼んでね」

と、俺の内心を察しているはずの無い黒髪の女リネは、屈託の無い笑顔でそう言った。……何だか知らねエが、こいつ妙に馴れ馴れしくなつてねエか？

疑問に思いつつも、とりあえず女の戯言を聞き流し、俺は木々に囲まれた道無き道を歩き続ける。

この女から聞いた話だと（敵に自分の情報を簡単に教えるとは、何とも間抜けな奴だ）、どうやらあの紅髪は、かつて『妖魔』一族が暮らしていた、すでに廃墟と化した村を目指してやがるらしい。

だが、なぜそんな場所を目指してるのかと尋ねると、女は口籠って理由を明確にしようとしなかった。

俺としては、こんな女とはさっさと別れて、ボルガ・フライトの行方を追いたい所なんだが……。

この女は俺が洞穴を出ると決めた時から、「あなたの過去を話してくれるまで付いていくから」と言っつて、俺の傍から離れようとなない。

いつその事『魔術』の力で黙らせちまえばいいのかも知れねエが、俺の中に残る唯一の『甘さ』が、それを頑として実行しようとしやがらねエ。

……やれやれ、我ながら情けねエ限りだ。

『ユリイに似ている』。たったそれだけの事で、こつも身動きが取れなくなつちまうとはなア。

つー訳で（不本意な事には変わりねエが）、俺は渋々、女が目的地とする場所に向かって同行を続けている。

「やっぱり、あたしに過去の出来事を話すのは、嫌？」

黙って歩き続ける事数分。一向に口を開かない俺に痺れを切らしたのか、女は少々不満そうな声で尋ねて来やがった。

ちなみに、目的地への道順を把握してやがるのは女の方のはずな

んだが、なぜか奴は先導しようと思わず、さつきから俺の数歩後ろを歩いてやがる。

だからこそ俺には、女がどんな表情でそう口にしているのかわからなかった。

女が一体どういう意図の下、俺の過去を掘り返そうとするのかも。……どオしてそこまで知りたがる。俺の過去をテメエが知った所で、一体何がどオ変わるってんだア？」

「それは、わかんないけど……。でも、何か行動を起こさない限り、変えられるものなんて何一つ無いんじゃない？ 少なくともあたしは、ティーンと旅してきた事でそう思えるようになったよ」

「……」  
なるほど、やっぱ常に紅髪あかがみと行動を共にしてるだけの事はあるな。ウザってエ考え方があの野郎とそっくりだ。

「能天気な野郎だなア、テメエは」  
「え？」  
俺は立ち止まり、女の方を振り返った。そして、眼を丸くして佇む女に向けて語り始める。

いつの間にか俺は、自分の考えを相手に押し付けようとしていた。自分でも気付かぬ内に、どこか八つ当たり気味な口調で。

「虚しくならねエのか？ そんな綺麗事や戯言を並べ立ててよ。テメエの言う『行動』ってのが齎あがすものは、何も良い結果だと決まってる訳じゃねエんだぞ？ そりゃまア確かに、テメエの大好きな紅髪あかが今まで行動を起こす事で、どれだけの『良い結果』を生んできたのかを俺は知らねエ。だがなア、それでもこれだけは言える」

俺は一旦言葉を切ると、どこか悲しげな表情を浮かべる女に、続けてこう言った。

忠告だと暗に伝わるよう、わざと語気を強めて。

「もしも『良い結果』が訪れなかったとしたら。あの紅髪あかがみの行動によつて、『悪い結果』が齎あがされちまったとしたら。その時テメエはきつと、今みたいな台詞を吐いた自分自身を、心の底から呪う事に

なるだろうぜ」

だからこそ、余計な詮索はしねエ方が身の為だ。と、俺は締め括りのつもりで女に言い放ち、前を向いて再び歩き出した。

これでこの女も、少しは自分の立場を弁えるだろうと、俺はそう思っていた。

だが、どうやら後ろを歩く能天気野郎は、こっちの予想以上に強情な性格らしい。それこそ、頑固者という言葉がピッタリと当て嵌まる程に。

「仮にあなたの言う通りだったとしても、それでもあたしは聞きたいよ。あなたの過去を、あなたの口から聞かせてほしい」

「……！」

妙に強い意志を感じさせる女の台詞で、俺は思わず立ち止まる。

すると女は、俺の身体を追い抜かして真っ正面に立ちはだかると、黒真珠のような深い輝きを思わせる双眸で、ジッと俺の顔を見据えた。

たったそれだけの事だったのに、俺は不思議と眼が離せない。吸い込まれるように、女の瞳を見つめ返してしまう。

「……面白なんざこれっぽっちもねエんだぞ？」

「わかつてる」

「どれだけ真剣に耳を傾けた所で、何かが変わる訳じゃねエんだぞ？」

「もしも変わらなかつたら、その時はその時だよ」

「……ハッ。人様の過去を穿ろうとしてるっつーのに、随分投げ遣りな考え方だなア。つくづく身勝手な女だ」

思わず脱力感に苛まれ、俺は女の頑なな姿勢に呆れつつ息を吐いた。ここまで執着心を見せ付けられると、否定や拒絶の言葉が意味の無い言霊に思えてくる。

若干頭を垂れていた俺は、内心で重たい気分を抱えながらも、表情には出さねエように平静を装い、顔を上げた。

「聞かねエ方が良かったと、後で文句を垂れるんじゃないぞ」



「心配しなくてもわかかってるって！」

これから陰鬱な過去の話を聞かせようとしてるにも拘らず、女はなぜか、場違いな程明るい頬笑みをその顔に湛えている。

……一体何考えてんだコイツ。いや、もしくは何も考えてねエだけなのか？

幼いガキみてエにニコニコしてやがる女を尻目に、俺は頭を抱えそうになる。

リネ・レディアと言う人間の事が、益々わからなくなった瞬間だった。

人は決して一人では生きていけない。

互いに認め合い、互いに助け合う事で、初めて人は共存し生きていく事が出来る。

この台詞は、かつて俺が敬愛していたある男が、口癖のように繰り返していた言葉だ。

誤解が生まれねエよう、まず始めに断っておくが、その男つてのはノイエ・ガルバドアの事じゃねエ。あの野郎とは全く別の人間の事だ。

そいつの名は、ヴェグナ・ブラッドリー。

今から十年程前。『倒王戦争』終結直後のジラータル大陸は、各地に生々しい戦争の爪痕を多く残し、政府や民衆は疲弊した状態が続いていた。

ヴェグナと言う男は、そんな他人の事にまで気を掛けてられねエ時期に、どうという理由からか身寄りの無い子供を引き取り、そして

育てる為、大陸南西の端に小さな村を構え、そこで自らが村長を務めるという妙な生活を送っている人間だった。

今思い返してみても、実に物好きな野郎だったと言わざるを得ねエ。それに普段から、何を考えているのかもよくわからねエ奴だった。

そのせいか俺も、奴に心を許すまでには、相当な時間を要した記憶がある。

「今から十二年前の話だ。俺は『倒王戦争』が始まる直前、両親と呼べる人間を亡くした。もうほとんど記憶にねエが、何かしらの事件だか事故だかに巻き込まれて死んだらしい」

……ま、今となつてはどうでもいい事だが。

という最後の台詞は、敢えて口にしなかった。なぜなら俺の話を聞いていやがる女が、神妙な顔で俺を見つめていたからだ。

……こいつがこんな顔をしてる理由は、大体想像がつくがな。フン、くだらねエ。

とにかく、身寄りの無かった俺は、同じような境遇の子供に混じつてその村へと招かれた。

そしてそれが、アイツと出会うきっかけだった。

「……テメエが見たつー写真の女の名前は、ユリイ・アルヴィードだ。アイツは確かにテメエに似てるが、テメエと違って特殊な力なんざ持っていなかった。本当に、ごくありふれた普通の人間だった」

そつだ。ユリイ・アルヴィードと言う少女は、特殊な力と呼べるようなものを何一つ持っていなかった。

俺と同じ、幼くして身寄りを亡くした人間。

だがそれでも、アイツは明るく笑いながら暮らしていた。過去の悲しみに囚われず、懸命に生きようとしていた。

少なくとも、『あの事件』が起きるまでは。

#### 第四章 選択（後書き）

という訳で、遅くなりましたが第四章でした。

相変わらずデイン、リネ、ジェイガがメインの展開ですが、ジン、ミレーナももう少しで出て来る（予定）と思うのでお楽しみに

ひよっとしたらひよっとすると、今回のお話、今までで一番話数が多くなる展開かも知れないw

## 第五章 悪夢

「何で、俺を殺さなかった？」

酷くしゃがれた声で尋ねられた俺は、地面に仰向けの状態で倒れている声の主を、静かに見つめた。

喉が焼けているせいだろう。弱々しくも俺の事を睨み付けているガイザツクの声は、少々聞き取り辛くなっている。

俺が発動した『クリムゾン・バースト深紅の爆裂波』によって、石の巨人の姿は、すでに跡形も無く消し飛んでいる。

一対一の戦いで使ったのは初めてだったが、やはり打ち込む術式の難しさは相変わらずだ。この『魔法』を使った後は、決まって身体が疲労感に苛まれるからな。使う機会が少なくて慣れてない分、それが顕著に表れてる訳だ。

だが恐らく、『クリムゾン・バースト深紅の爆裂波』を使わなければ、あの石の巨人を破壊する事は出来なかっただろう。そう考えれば、この程度の疲労感など、代償としては安いものだ。

「随分な物言いだな。一撃で殺さなかった事に、むしろ感謝してもらいたいね」

「ふざけやがって。情けでも掛けたつもりか……、この偽善者が」  
力無くニヤついた笑みを浮かべながら、ガイザツクは身体を揺らす。全く、情けなく地面に倒れてる分際で、よく強がり吐けるよなこいつ。

内心で呆れつつ、俺はすぐさま反論する。

「文句を言われる筋合いはねえ。どうしようと俺の勝手だろ。それに、あんたには聞きたい事があったからな。止めを刺さなかったのはその為だ」

と、俺も負けじと強がり言った。もちろん止めを刺さなかったのは、聞きたい事があったからというより、ミレーナとの約束を重んじているから、という感情の方が強いせいだが。

「ハッ……、戯言ほざきやがって……」

「何とでも言え。第一俺が何を聞こうとしてるかぐらい、あんただって予想は付いてるはずだろ？」

「ウチのボスの居場所、って訳か」

ガイザックは忌々しそうに顔を顰め、わかりやすい抵抗の意志として、俺から顔を逸らした。

が、俺は構わず、ガイザックを見据えたまま話を続ける。

「あいつが元老院に対して残した言葉が本当なら、この渓谷のどこかに、最後の『精霊石』が眠ってる事になる。だったらあいつは今、その場所に向かつてるんじゃないかねのか？」

「さあ、どうだかな……。そもそも俺がその質問に答える必要はねえだろうが。用件がそれだけなら、さっさと止めを刺しやがれ」

「お前なあ……！」

どこまで強情な奴なんだ。もう碌に戦えない身体になってるだろうに……。やっぱこうなると、強硬手段で口を割らせるしかねえのか？

ふてぶてしいガイザックの態度に、少々苛立ちを覚えた俺は、思わず炎を生み出してしまいたいそうになる。

するとその時、まるで掌を返すかのように、ガイザックは妙に真剣な眼差しで俺の方を見た。

「それに、わざわざめえがボスの居所を探し回る必要はねえと思っぜ」

「あ？ どういう意味だ？」

「大体の居場所はすぐに特定出来るっつってんだ。なぜなら」

それは、言葉の中途だった。

俺に何かしらの情報を与えようとしていたガイザックの声は、俺の背後で発生した凄まじい光と、数秒遅れて聴こえた、渓谷全体に響き渡るかのような大爆音によって、悉く遮られた。

「ッ!？」

何事かと思い振り返ると、『サンダーズ・リバー』を挟んだ谷の丁度向こう側、鬱葱とした林に隠れて視認出来ない位置から、白い爆煙が立ち昇り、天に向かつて伸びていくのが見えた。

今起きた現象を、俺はハッキリと目視出来た訳じゃない。それでもなぜか、俺には確信に近いものがあつた。

あれは、今のあの光は……!

「わざとらしく驚いてんじゃねえよ、ディーン・イアルフス」

眼の前の光景にただただ硬直する俺の耳に、愉快げなガイザックの声が響き渡る。奴はきつと、その顔にニヤついた笑みを浮かべているはずだ。

「今の光は、『魔剣・雷帝剣』から放たれた雷<sup>いかすち</sup>。だから言つただろうが。居場所はすぐに特定出来るつ、てよ」

ウチのボスはやる事が派手だからなあと、最後に付け足したガイザックは、満足したと言わんばかりに高笑いを始める。

あの光を見た後でさえなければ、俺はそんな奴の態度に憤りを覚えていたはずだ。

だが今の俺には、何の感慨も湧かなかつた。興味が完全に別の所に向いていた。

あの光の下にいるのが、本当にボルガなんだとすれば。

今、あそこで奴と戦っているのは、一体誰なんだろう？

『ジラータル大陸』南西地域。

大陸一険しいとされる『ブラウズナー溪谷』から連なる大地は、

荒廃した土壌環境の多い大陸内でも、比較的緑豊かな森林や草原がその割合を占めている。広大な森林地帯である『ゴルドムダル大森林』程じゃねエにしる、大陸南西地域には、荒野と呼ばれるような土地はほとんど無いと言っている。

そんな場所に、かつて存在していた小さな村。

村長であるヴェグナ自身、名付ける事の無かった村。

その村がユリイの、そして、かつての俺の住処だった。

『倒王戦争』終結から、二年が経った頃。身よりの無い子供を受け入れ続け、共に生活を支えてくれる大人たちも招き、村に平穏な日々が続いていた、とある日の事。

その日は丁度アイツの、ユリイの誕生日だった。

ヴェグナが村長を務めていた村から程近い場所にある、村の景色を見下ろせる小高い丘。爽やかな風が吹き抜け、鮮やかな緑をその身に帯びた草が足下に生い茂るその場所は、当時村に住んでいたガキたちの憩いの場、或いは遊び場となっていた。

ガキの足取りでも十分程で行ける距離。

俺はその日、夕方近くになった頃、ユリイを連れてその丘へと向かった。

「これやるよ」

目的の場所に着くなり、ぶつきら棒に差し出した長方形型の木の箱を、ユリイはまじまじと見つめ、不思議そうに首を傾げる。

「これなあに？」

と、疑問の声を上げる黒髪の少女。誰だつて突然得体の知れねエ物を手渡されたりすりゃあ、疑問に思うのも無理ねエだろオ。

至極当然な表情を浮かべるユリイの顔を、しかし俺は、照れ臭さから直視する事が出来なかった。

「な、何でもいいだろ。いいから受け取れよ、やるつつつてんだから」

強引に会話を押し切ろうとするが、ユリイは不思議そうな顔をしたまま、俺が差し出している木の箱を中々受け取ろうとしない。

「だって気になるんだもん。ジエイガがアタシにくれる物って、何か想像出来ないし。どうしてアタシに渡そうとするの?」

「う、うるせエな! 仕方ねエだろ? だって今日はお前の誕生日だからって父さんが」

「え? 誕生日?」

眼を丸くするユリイを前に、今更のようにハツとした俺は、強引に眼を逸らして押し黙る。口を滑らせたと思った時には、すでに手遅れだった。

……あア、補足説明すると、俺が『父さん』と呼んでいるのはヴエグナの事だ。俺だけじゃなく、当時村に住んでいたガキたちは全員、自然とあの男の事を『父さん』と呼ぶようになっていた。

「じゃあこれって、アタシへの誕生日プレゼント?」

完全にバれてしまった事情を反芻するかのように口にしながら、ユリイはどこか照れ臭そうに、箱と俺の顔を交互に見つめている。

対する俺はと言えば、気味なくて仕方無かった。

そもそも本当の事を言えば、これは俺が用意した物じゃなく、ヴエグナが「ユリイに渡してあげなさい」と言っつて、半ば強引に俺に押し付けてきた物だ。

今にして思えば、あの男は俺がユリイに抱いていた感情を見抜いていたのかも知れねエ。全く余計な世話が過ぎる大人だ。

「……開けてもいい?」

漸く木の箱を受け取ったユリイは、少々上眼遣いで躊躇いがちに聞いてくる。

気恥ずかしさもあつた俺は、そんなアイツの様子を一瞥してから、黙って頷いた。

ユリイの手に渡った長方形型の木の箱は、上蓋を外して開ける構造になつてゐるらしい。彼女はその小さな手でそつと蓋を外し、箱の中身を注視する。

「わあ〜! キレ〜イ!」

ヴエグナから押し付けられてそのままユリイに手渡した俺は、プ



プレゼントの中身が何なのかを確認していない。

随分弾んだ声を上げるユリイが気になって、俺は彼女の横合いから、チラリと箱の中身を盗み見る。

そこに納められていたのは、桜色の貝殻数枚を、丈夫そうな糸で丁寧に繋ぎ合せた手作りのネックレスだった。よく見ると貝殻を繋ぎ合せている糸は、白と青、それぞれ別の色の糸を交互に編み込んで作られている。簡単そうな作りに見えて、実はかなり手間が掛かっているんじゃないか？

「ありがとねジェイガ！ 大切にするよ！」

そう言って、ユリイは少しも躊躇う素振りを見せずに、思い切り俺に抱き付いてきた。

「お、おい！ 何すんだよいきなり！」

「何って、プレゼントのお礼だよ？」

俺にすっかりと抱き付いたまま、ユリイはクスクスと笑う。どうやらユリイは、このネックレスを用意したのが俺だと思ってやがるらしい。

喜んでくれたのは素直に嬉しかったが、今更「これは父さんが用意した物だ」なんて言えねえ俺は、複雑な気持ちで黙り込むしかなかった。

と、ユリイが漸く俺から身体を離すと、まるでタイミングを合わせたみてエに男の声が掛かる。

「ここにいたのかい、二人とも。姿が見えないから心配したよ」

「あつ！ 父さん！」

俺とユリイに向けて柔らかく微笑み掛けながら、右眼に片眼鏡を掛けた三十代前半の男は、ゆっくりとこっちに歩み寄ってくる。

灰色に近い黒髪をオールバックにした、どこか紳士的な雰囲気を持つこの男こそ、俺たちが父さんと呼んでいる存在、ヴェグナ・ブラッドリーだ。

「ねえ見て見て！ 今ね、ジェイガから誕生日プレゼントを貰ったんだ！ 貝殻で作ってあるネックレスだね、すごくキレイなの！」

「へえ、確かに綺麗だね。良かったじゃないかユリイ。ちゃんとジエイガにお礼は言ったのかい？」

「うん！」

嬉しそうにはしゃぐユリイから視線を外すと、ヴェグナはどこか得意げな様子で、俺にウィンクしてみせる。

やっぱりこいつ、わかってて遊んでるよな絶対……。

「さあ、そろそろ夕食の時間だし、村に帰ろうか。みんなも二人の帰りを待ってるはずだよ」

「はあ〜い。ほら、ジエイガ」

ユリイは優しく微笑みつつ、右手を差し出してくる。

それは、手を繋いで帰ろう、という意志の表れだった。

気恥ずかしさと、プレゼントに対する負い目があった俺は、その手を取るのを躊躇い、チラリとヴェグナの方に視線を向ける。

俺の視線に気付いたヴェグナは、だが何も言わず、静かに微笑み、軽く頷いてくれた。

たったそれだけの事で、胸の内にあつた蟠りは消え、気付くと俺は、ユリイの小さな手を握り返していた。

「その頃すでに、村に招かれたガキ共の数は十人を超えてた。

が、今思い返してみても、俺が心を許してた人間と言やア、ヴェグナとユリイの二人だけだった」

「えっ、どうして？」

語り続ける俺の言葉に、リネ・レディアは躊躇う様子も見せずに関き返してくる。……さっきからずっと思ってる事だが、この女、俺に対する遠慮つてもものがドンドン無くなってきてねエか？

やっぱり話すべきじゃなかったかと後悔しつつも、しかし不思議と俺の心は落ち着いていた。

冷静に、そして慎重に言葉を紡ぐ。

かつて眼の前で起きた事実を、脳裏に思い浮かべながら。

「……こんな事自分で言いたくはねエが、昔から俺は人見知りの激しい性分でなア。親を亡くして村に招かれてからも、楽しそうに遊んでやがるガキたちの輪に、上手く馴染む事が出来なかったんだ。そんな俺にいつも明るく話し掛けてくれたのが、他ならねエユリイで、アイツや他のガキたちと接する機会を増やしてくれたのが、ヴェグナだった」

二人が俺にとって掛け替えの無い存在だと、幼いながらに漸く自覚出来るようになったのは、恐らくこの時が初めてだった。

だからこそ、幼い俺は胸の内で願ったんだろう。

こんな幸せな日が、楽しい時間が、ずっと続いてほしいと。

ユリイに手を引かれ、ヴェグナに優しく迎えられたあの時、俺は確かにそう思っていた。

そんな矮小な願いが、あっけなく打ち砕かれる事も知らずに。

「結論から言っちゃえば、俺たちの村を襲ったのは、『魔術師』数人を含んだならず者の無法集団だった。……そいつらは金品を強奪するのが目的だった訳じゃねエ。もし金が目当てだったってんなら、ガキばかりが住んでるような小さな村を襲撃したりはしねエだろオ。奴らは単純に飢えてやがったのさ。弱者の命を狩り取る事に、な」

「……」

女は俺から眼を離そうとしない。が、その表情には確実に陰りが差していた。多分俺が丁寧に教えるまでも無く、この話の結末を察してやがるんだろう。

しかし俺は、それでも語るのを止めなかった。自分でも不思議な事だが、なぜかそういう考えは思い浮かばなかった。

「ならず者連中に甚振られてたユリイを助けようと、俺は奴らの前に立ちほだかった。が、もちろん子供が相手出来るような連中じゃ

ねエ。俺は呆気無く、奴らの玩具にされちまった。それでも、どうにかユリイだけをその場から逃がす事が出来た時だった。連中の一人が、『魔術』を使ったのは」

「……ッ！」

俺が『魔術』という言葉を発した瞬間、女が辛そうに顔を顰めた。どうやらしつかりと、俺の言葉が意味する所を理解しているらしい。そう……、その『魔術』によつて、ユリイは俺の目の前で殺された。

そいつが行使したのは恐らく、風系統の『魔術』だったように思うが、詳しい事はわからねエ。当時の俺はガキだった上に、『魔術師』でもなかった訳だからなア。当然と言やア当然だ。

とにかく、ユリイは『魔術』によつて殺された。

本当に、一瞬の出来事だった。

逃げようとするユリイの背中に、剣や斧で斬り付けたかのような、深い深い傷が走ったのは。

アイツの背中から、大量の鮮血が雨のように飛び散ったのは。

糸の切れた操り人形のように、アイツの身体が力無く地面に倒れ込んだのは。

「……あの時の俺には、泣き叫ぶ事しか出来なかった。周りで嘲笑い続ける連中に拳を振るう事も、況してこの手でブツ殺す事すら出来ずに、腕の中でドンドン冷たくなっていく動かねエユリイを抱えて、ただ泣き喚き続けた。その時だった。まるでタイミングを計つたみてエに、あの野郎が俺の前に現れたのは」

「あの野郎……？」

「『黒煉魔法』の使い手、ノイエ・ガルバドアだ」

「！」

奴の名を口にした瞬間、女の顔が驚きの色を強くする。その名前が出るなんて考えもしなかった、と言いたげだ。

ノイエ・ガルバドア。

かつての『倒王戦争』において、『魔王軍』を退けた『反旗軍』

の、実質的リーダーだった男。この大陸に存在する『魔術師』の中で唯一、『光』と『闇』、二つの『属性』の『魔術』を操る事が出来る者。

奴は自らが行使する『魔術』の力で、村を襲ったならず者連中を一瞬で葬った。

無慈悲に、そして圧倒的に。

あの男が現れなければ、俺はあの時、確実に命を落としていただろう。例え何年経とうと、その事実だけは変わらねエ。

奴がもう少し早く俺の前に、俺たちの前に現れてくれていたら、ユリイは死なずに済んだかも知れない、って事もな。

「……ヴェグナさんや他の村のみんなは、どうなったの？」

顔を顰め、若干俯いている俺の耳に、かなり沈んだ声が響いてきた。見ると女は、もう俺の方を見つめていない。視線を逸らし、顔を背け、悲痛な面持ちで在らぬ方向を見ている。

「どオモこオモねエ。死んじまったさ、俺以外全員な。ノイエの野郎が来た時には、すでに全部が手遅れだったって事さ。襲撃してきた『魔術師』の手で、村の方も全焼しちゃった訳だしなア。……だから俺にはもう、過去の思い出なんて何一つ残ってねエんだよ」

んな辛そうな顔するぐれエなら、最初から人の過去を穿り返そうとなんてするんじゃねエよ。と、内心で吐き捨てはしたものの、結局俺は、それを口に出しはしなかった。

女は相変わらず視線を逸らしたままだが、その顔にはやはり、後悔の念らしきものが浮かんでいる。

フン、それにしても、『過去の思い出』か。自分で口にした言葉ではあるが、なんて甘ったるい台詞なんだ。

俺はあの日全てを失った。

ユリイやヴェグナ、そして自分の居場所さえも。

だがそんな俺に、あの野郎は偉そうに言っただけなア。

『力が欲しいか、小僧』

『力を欲するのならば、力を求めるのならば、我が「魔術」を受け継ぐ弟子となるがいい』

『全てを失った弱者として、地に伏したまま涙に暮れるか。全てを手に入れんとする強者として、再び立ち上がり己が意志を貫くか。』

小僧。貴様はどちらを選ぶのだ？』

全く、何度思い返してもム力つく台詞だ。大体俺も、何であんな奴の弟子になろうとなんて思っちまったのかねエ。自分自身の事だが、今でも不思議でたまんねエゼ。

「でも、だったらどうしてあなたは、ノイエさんの命を狙ってるの？」

過去の自分を思い出しつつ、自虐的な笑みを浮かべていた俺は、妙に真剣な女の口調で思考を中断した。

女はいつの間にか気力を取り戻したらしく、真っ直ぐ俺を見据えて続ける。

「今の話から考えたら、ノイエさんはあなたの命の恩人になるんじゃない？ それなのにどうして……」

「正直な話、最初は俺もそう思ったさ。助けに入るのが遅かったとはいえ、奴は確かに俺の命を救ってくれた。感謝すべき恩人だと、そう思っていた事もある。だがそんなモンは、ただの幻想に過ぎなかったのさ」

「どういう事？」

女に問われ、俺は話題が少し変わりつつある事を感じ、仕切り直すつもりで歩き出す事にした。

すると女の方も、特に何も言わずに俺の後に付いてくる。

「あかがみ紅髪と行動を共にしてやがる teme エなら、フォード・ヒースクラムから聞いたんじゃないエのか？俺がノイエの野郎と親しげにしてた時期があるって事をよオ」

「え？ う、うん……」

一瞬返事をするのに躊躇ったような雰囲気のを、俺はワザと無

視して続ける。

「いつフォードの野郎がそんなモンを見てたのかは知らねエし興味もねエが、これは俺がノイエの弟子になって、五年ぐらいが経過した頃の話だ。その日は丁度、ユリイたちの命日だな。俺はノイエの野郎に断りを入れて、ユリイたちの墓参りに行った。その時墓の前で、ヴェグナの友人だと名乗る男に遭遇したんだ」

「ヴェグナさんの？」

やや後ろを歩く女は、興味深げに聞き返してくる。肩越しに背後をチラリと一瞥すると、女は（俺が予想した通り）若干眼を丸くしていた。

よくもまあ、これだけ表情をコロコロと変えられるモンだ、と呆れつつ、俺は浅く息を吐いてから続きを話す。

「そいつはどういう訳か、俺がノイエの弟子だつて一事を知つてやがってなア。奴の事を色々口にした揚句、最後に妙な事を口走りやがったんだ」

俺はそこで一旦立ち止まり、女の方を振り返った。

そして出来るだけ強い口調で、一つの事実を言い放つ。

「ユリイたちの死に、ノイエの野郎が関わってるつてな」

「ええっ!？」

同じく立ち止まっていた女は、これでもかという程デカイ声で叫んだ。そして食い入るように俺を見つめ、疑問の言葉を投げ掛けてくる。

「誰なの？ その、ヴェグナさんの友達だつて名乗った人つて」

「あかがみ テメエや紅髪がこの溪谷にいるつて事は、恐らくこの男の名前に聞き覚えがあるんじゃないか」

俺は女を見据えたまま、淡々と言葉を紡いだ。

俺が今行方を追っている、もう一人の男の名を。

「ボルガ・フライト」

「！！！」

「テメエも知つての通り、ゴースト・コンダクター『精霊指揮者』とやらの首領を名乗つて  
る野郎だ」

凄まじい光が落下したあの場所で、今誰かがボルガ・フライトと戦っている。

それを確信した瞬間、俺はガイザックの事を放り投げ、風のように疾走し始めていた。なぜならそう、一つの不安に駆り立てられていたからだ。

もしもあの光の下にいるのが、俺の想像している人物だとしたら。俺の大切な友達である、あの銀髪の少年だったとしたら。

この渓谷に辿り着いた時に、頭を過ぎったあの不安が、現実のものになってしまう！

ボルガ・フライトと、ジン・ハートラー。この二人が衝突しているとすれば、そこは凄惨なまでの戦場と化しているはずだ。

自らの仇を狙う、復讐者となった少年の手によって。

「早まるなよジン……！ 絶対に、道を踏み外すんじゃないぞ！」  
確証なんて何も無い。あそこにいるのがジンだと、まだ決まった訳じゃない。だがそれでも、前へ進み続ける俺の両脚は、速度を緩める事は無かった。

今まさにあの場所で、怒りに任せた凶刃が振るわれているとしたら、何が何でも止めなくちゃならない。

例え相手が、どんなに卑劣で憎しみをぶつけるべき人間だったとしても。



あいつに、ジンに人の命を奪わせる訳にはいかないんだ！

## 第五章 悪夢（後書き）

という訳で、遅まきながら第五章です。

執筆が遅れた理由は、ジエイガくんの過去をどのように書くか迷ってしまい、中々筆が進まなかったんですよね。（まあ遅いのは今に始まった事ではありませんが）

書き切れなかった部分は、いつか外伝の方で補完しようかなあ、なんて甘い事を考えていたりいなかったりw

さて、お話の方も（恐らく）中盤戦に差し掛かっております。

漸くジン、ミレーナの二人が登場！……するかも知れない！w

## 第六章 対峙

身体中から嫌な汗が噴き出している。心臓が激しく高鳴り、自然と吐く息が荒くなってしまう。

まさに一瞬の出来事だった。

天空から飛来した、全てを破壊する殺人的な一撃。……いや、今の現象を『一撃』と表現するには余りにも不正確過ぎる。

例えるなら、強大な力の壁が対象物を一瞬にして押し潰した、と言った所か。止めに入る事も、況して放たれた光の鉄槌を防ぐ事すら、今の俺には成し得なかった。

視線の先、数十メートル程離れた位置からは、黒煙と土煙が高々と天に向かって伸びている。と同時に、凄まじい力が叩き付けられた地面には、直径十メートル程の巨大なクレーターが出来上がっていた。その中に、いくつもの人影が見える。

その影の主たちが誰なのかを俺は知っている。なぜなら彼らは他にも無い、個人的な理由を持って行動していた俺やディーンたちとは違い、『首都』の元老院からの命令の下、別動隊として動いていた正規軍の兵士たちだ。

そして、彼らに多大な損害を与えた豪胆たる襲撃者。そいつが誰なのか、という事も。

「貴ツ、様……！」

憤慨の意気を声に込めつつ、俺は数メートル先に悠然と佇む者を睨み付けた。

特に目立った装飾の見当たらない黒いローブを身に纏い、右手に自身の身の丈程もあるつかという大剣を握り締める、灰色の髪をした男。

なぜ後ろ姿だけで男だとわかるのか。

それは俺が、奴が何者なのかを既に知り得ているからに過ぎない。ずっと以前から、『あの男』の存在を。

不敵な笑みを湛えつつ振り返る男の名を、俺は語気を荒げて惜しげも無く叫ぶ。

「ボルガ・フライトオオオオツ!!!」

猛り狂う獣のように咆哮する俺を、ボルガは静かに見つめ返してきた。

今から六年前程の話だ。

広大かつ雄大な土地を持つ『ジラータル大陸』の、やや南寄りの南西にある小さな森林地帯。緑豊かなその奥地にあるのが、俺の故郷である村『ノーザスト』だ。その村で俺の一族は、代々二つの『魔剣』を継承していくという使命を担い、何十年もの間、その仕来りを守り続けていた。

『白滅剣』と『黒裂剣』。

数が希少だとされる『魔剣』を二本も所持している人間は、恐らくこの大陸の中で俺一人だけだろう。例えそれが誤った見解だったとしても、それくらいの自負が俺にはある。

だが本来ならば、この『魔剣』たちを継承するのは俺では無かったはずだった。

受け継ぐべき資格を、能力を、血統を持っていたのは俺では無く、俺の兄　ザクス・ハートラーだった。

にも拘らず、こうして俺が二本の『魔剣』を所持している理由は、『偽りの』継承者として、『魔剣』の力を振るっている訳。それらは全て、単純な結論であっさり片付いてしまう。

つまりは、兄さんの死。

ザクス兄さんだけじゃない。父さんも母さんも、俺の家族は皆、俺だけを残してこの世を去っている。

しかもただ死んだ訳ではない。『殺された』のだ。

何の前触れも無く、突発的に。

命乞いの暇すら与えられず、無慈悲に。

奴が俺の家族を殺した理由は、全くわからない。

『雷帝剣』と言う強大な力を持った『魔剣』を携えておきながら、なぜ村全体を襲わず、俺の家族だけを狙ったのか。しかも奴は、ザクス兄さんが継承するはずだった二本の『魔剣』にすら興味を示さなかった。

『魔剣』を奪う事が目的では無いと言うなら、奴は何を考えていたのだろう？

何か別の目的があったのか。それともただ気紛れに人を襲っているだけなのか。

いずれにしろ、俺はその答えを、自らの手で掴もうと決心したんだ。

ザクス兄さんの代わりに二本の『魔剣』を譲り受け、その力を使って奴を……、ボルガ・フライトを追い詰めよう。

そして、気付けば俺は『ギルド』に加入し、一族殺害の忌まわしき日から、六年という歳月が経過していた。

ボルガの間合いに踏み込みつつ、俺は左手の『白滅剣』はくめつけんで鋭い突きを放つ。

まるで吸い込まれるかの如く突き進む粉雪のように白い刀身は、しかし寸前の所で薙ぎ払われた。

突きの軌道を逸らされた俺は、前のめりになりながらも、しつこくボルガに喰らい付く。

「はあっ！」

逸らされた勢いを逆に利用し、身体を無理矢理回転させ、右手の『黒裂剣』くくれつけんを横薙ぎに振るう。

が、横一文字の一撃を、ボルガは素早く跳躍する事であっさり回避してしまう。

空中で身を翻し、静かに着地したボルガは、まるで俺との間合いを計るかのように大剣を構え直す。

なぜ俺が、今こうしてボルガと一対一で剣を交えているのか。

そもそも発端は、数十分前に遡る。

パーニャ・ロンドベルと言う少女の襲撃によって、『サンダーズ・リバー』に落とされた俺は、落下の最中に何とか捕まえる事が出来た御車の男と共に、随分長い距離を漂流し、命辛々どこかの岸に辿り着いた。漂着したその場所は、未だ『ブラウズナー渓谷』の流域ではあるようだったが、正確な位置も、他のみんなの行方もわからずじまいだった。

とにかく、妙な事態に巻き込んでしまった御車の男だけでもどうにかしてやらなければと思い、彼を連れ立って山道を南下し始めた、その直後。運良く、或いは悪く、俺は正規軍大佐マース・コアロツド率いる、軍の別動隊と合流を果たした、のだが。

彼らはすでに全滅し掛けていた。俺が長年行方を追っていた、あの男の手によって。

ボルガ・フライト。闇組織『ゴースト・コンタクター精霊指揮者』の首領であり、同時に俺が憎むべき仇でもある男。

奴はその手に携えた『魔剣・雷帝剣』を振るい、俺のしているその前で、別動隊の面々に止めを刺した。

『雷霆衝波・鉄鎚』。

魔の力を宿した大剣から放たれ、天を裂くかの如く飛来したその光を、俺は昔、この眼で見ている。あの一撃は、父さんや母さん、そして兄さんを葬った光の鉄鎚だ。

……なぜなんだ。どうして奴は易々とばかりに、俺の眼の前でその光を放ってみせる！？

傍らで腰を抜かして戦慄く御車の男を尻目に、気付けば俺は、背中の『魔剣』を瞬時に引き抜き、ボルガに斬り掛かっていた。

マース・コアロツド以下、別動隊の兵士たちの生死はわからない。ただ今の惨状を見る限り、無傷で済んでいる事は有り得ないだろう。奇跡、などという希望的観測はこの場面にはそぐわないはずだ。

「怖い顔だな。こうして久しぶりに顔を合わせたと言うのに、随分と冷たいじゃないか」

大剣を構えつつどこか悠然と告げるボルガに対し、俺は心の内のざわめきがより一層酷くなるのを感じた。

なぜ貴様はこの状況で、そうして落ち着いていられる？

「貴様と愚論を交わすつもりは無い。答えてもらうぞ、ボルガ・フライト。貴様が何の為に、俺の家族の命を奪ったのかを！」

「……ああ、そういえばそんな事もあったね」

「！……そんな事、だと？」

「キミが持つその二つの『魔剣』は、本来ならばキミの兄が継承するはずの物だったそうじゃないか。それを代わりに受け継ぐとは大したものだ。どうだい？ 少しは上手く扱えるようになったのかな？ キミが憧れ敬愛していた、あの立派な兄のように」

「貴……ッ、様アアアアツ！」

挑発だとわかっていて、それでも俺は自分自身を抑え切れなかった。

腹の底から湧き上がる怒りに任せて、俺は両手の剣を振るう。黒と白の衝撃波が渦を巻きながら突き進み、螺旋状の衝撃波となってボルガに襲い掛かる。

が、奴は回避どころか、防御しようとする挙動すら全く見せない。ただそこに佇み、不敵な笑みを湛えたままピクリとも動かない。

直後、俺の放った『黒白雷閃』が派手な爆発を上げて弾け飛び、辺りに荒々しいまでの爆風と土煙を怒濤の如く齎した。

自らの攻撃で巻き起こった余波に眼を細めていた俺は、僅かに構えを解く。

なぜ奴は、あんな無防備な状態で立ち尽くしていたんだ？　いくら奴でも『魔剣』の力をその身に受けて、無事で済むはずが無い。それは自らも『魔剣』所有者である奴なら、充分承知しているはずだ。それなのに。

「申し分の無い殺意だ」

「ッ!？」

「私に対する憎しみの強さが手に取るようにわかる。今程の一撃を放てるのは素晴らしい。さすがだね、ジン。キミは間違いなく、ハートラー一族の血を受け継ぐ者だよ」

涼しげなボルガの声は、俺の虚を突く程に、あらぬ方向から響いてきた。

即座に視線を向けると、奴はいつの間にか俺の背後数メートルの位置に移動している。見逃した、どこの話では無い。全く反応出来なかったし、奴が移動している事にすら気付けなかった。

まさか今のが、デインが言っていた……。

「『鳴神』」

「!」

慌てて剣を構え直す俺に、ボルガは尚も不敵な笑みを保ったまま、悠然と口を開く。

「あの紅い髪の少年から聞いているんじゃないかな？　対峙した相手に悟られぬ程の高速移動を引き起こす。それが、我が『雷帝剣』に宿っている能力の一つだ。尤も、己の身体に無理強いをさせているのは事実だね。この移動術を使うと、身体の各所が即座に悲鳴を上げるんだ。全く以て本当に、『魔術』とは人を殺す事に特化した技術だと言える。キミもそう思うだろ？　ジン」

自ら『雷帝剣』の欠点を露見させたにも拘らず、ボルガからは依然余裕のようなものが感じ取れる。それだけ奴は、己の力に自信を持っているという事なのだろう。



……それにしても、人を殺す事に特化した技術、か。

こうして誰かと、例えば相対した敵と『魔術』の在り方みたいなものを議論する場面に遭遇した時、決まって聴こえてくるのは、『魔術』に対する否定的で落胆的な考えだ。

だが俺は、その見解に異議を申し立てずにはいられない。口を閉ざす事など出来はしない。

それを真っ向から否定する為に、ずっと戦い続けているあいつを見てきたからこそ。

「俺は『魔術師』じゃないからこんな事が言えるのかも知れないが……、『魔術』が如何に人を殺す事に特化した技術であろうと、結局それは使い方の問題なんじゃないのか？ 貴様のように人を殺す事にしか使えない者と違ってあいつは、ディーンは人を守る為に、救う為にその力を使っている。あいつのような人間がいる限り、いずれ『魔術』は、人を殺す事『だけ』に特化した技術とは呼ばれなくなるさ」

俺は誰よりも信じている。ミレーナ・イアルフスの弟子であるあいつを。人を守る『魔術師』として、変わらぬ信念を持ち続けているあいつを。

対するボルガも、まるで俺の言葉に賛同しているかのように、フツと軽い笑みを漏らした。

「確かに彼は面白い人間だ。それこそ、『魔術師』としては実に稀有な存在と言える程にね」

どこか可笑しそうにそう告げたボルガは、しかし続け様にこう言った。

だが残念だな、と。

「彼は自分の存在が何を意味しているのか、まるで理解していない。例え、彼のような存在によって『魔術』そのものの見方が変わろうとも、彼自身の存在を変える事など、到底出来はしないと言っのに

……」

「……！？ どういう意味だ！」

言葉の端に不穏な空気を感じ、問い返した瞬間だった。

ガンツ！ と、鋭く大剣を地面に打ち付け、ボルガは俺が言葉を放つのを遮った。そしてこの話はこれで終わりとはかりに、冷徹な眼差しで俺を見据えてくる。

「キミが知る必要は無い。それにキミが本当に知りたいのは、そんな事じゃないはずだ」

再び不敵な笑みを作りつつ、ボルガは大剣の矛先を俺の方へと差し向ける。そしてその格好のまま、静かにこう言い放った。

「ジン・ハートラー。今こそキミに聞かせよう。私が一体、何の為にキミの家族の命を奪ったのかを」

「！！！」

それは俺自身予想だにしない、しかし、願っても無い申し出だった。

ジェイガの話を聞きながら歩いている内に、気付けば周りの景色は鬱葱とした林道に変わっていた。

目的地にしている場所が、少しずつ近くなって来てる。と心の中で感じつつ、あたしは少し前を歩くジェイガにもう一度問い掛けた。「さっきの話。あのボルガ・フライトって人があなたに言った事が事実なら、それがきっかけであなたは自分の師匠、ノイエさんの命を狙うようになったって事だよね？」

「あア、そうなるな」

「でもどうして？ あなたに情報を渡したボルガ・フライトって人は、闇組織を創って周りに危険を齎そうとするような人間なんだよ

？ なのにあなたは、どうしてそんな人の言葉を信用したの？」

前を向いたままこつちを振り返ろうとしないジェイガは、あたしの問い掛けにしばらく答えなかった。もしかしたら、何でも質問してくる面倒臭い奴だ、と思われてるのかも知れない。

「……墓の前で渡されたからだ。ヴェグナの字で書かれた手紙をな」  
「手紙？」

数秒経ってから漸く返ってきた答えを、あたしは思わず繰り返してしまった。

首を傾げて聞き返すと、ジェイガは何となく、気分が沈んでいるような声で続ける。

「ああ。自分の身に何か起こったら、自分の代わりに村のガキたちを助けてやってくれっつー内容の文面だった。ヴェグナ本人しか知り得ないような事も書いてやがったから、改竄かいざんされた物とは思えねエ。それにあの野郎ホルガの話だと、生前にヴェグナが言っていたやがったらしいぜ。『最近自分の周りで怪しげな「魔術師」がうるついでる』ってな。その『魔術師』の容姿が、ノイエにそっくりだったって訳だ」

地面の至る所にある落ち葉を踏み締める度に、カサカサと言う独特な足音が耳に響いてくる。あたしはそれに、ほんの一瞬気を取られそうになった。

だけど続け様に聴こえてきた、どこか皮肉げなジェイガの言葉が、そんないい加減な思いを簡単に吹き飛ばした。

「で、こつちからが傑作でなア。その話を聞いた直後だったのさ。ノイエの奴が、何も言わずに俺の前から姿を消しやがったのは。ここまでタイミングが良けりゃあ、何かあると思うのが普通たるオが」  
「それは……」

確かにそうだと思う。それだけ条件が揃ってしまえば、誰だつて疑いの気持ちを持たずにはいられない。部外者のあたしにわかる事なんて一つも無いだろうけど、それでもノイエさんの行動は、より強く疑念を抱いてしまうには充分過ぎるものだ。



この坂を上って林を抜ければ、多分そこには。  
「付いて来て！」

「あ？ おいテメエ、どこ行く気だ！」  
突然走り出すあたしに対して、ジエイガは少し不満そうな声を上げる。ただどあたしは取り合う気になれなかった。

僅かに鼓動が高鳴っているのは、風を切るような速度で駆けているせいだけじゃない。多分緊張しているからだ。

自分が生まれ、四年くらいの間を過ごした、『故郷』と呼べる場所が近付いているから。

林道を脱兎の如く走り抜け、視界が拓けたその先に現れたのは、見るも無惨な程に荒れ果ててしまった無数の家屋だった。

辛うじて残っている瓦礫から木造の建物なんだろうなと推測は出来るけど、それがどれくらいの大きさで、どんな生活様式を取り入れた家だったのかまでは判断出来ない。ただそこには間違いなくかつて人が住んでいた場所なんだ。

あたしと同じ、『妖魔』一族の人たちが。

廃墟と化した村の広さは、大体半径二百メートルくらい。平地のあちこちに点在する家屋（今は全部潰れてしまっているけど）全てを囲むように、高さ二メートル程の木製の塀が正円状に設置されている。

村人が誰一人いなくなってしまった村の中は、吹き抜ける風の音がやけに激しく聴こえる程静まり返っている。あたしは至る所に草が生え尽くしている、かつて村の通りとして使われていた道をゆくりと歩き始めた。

「……あ」

それは、ものの数メートル進んだ時だった。道端の草に覆われた一角に、それは唐突に現れた。

「あ……、ああ……」

無意識の内に口から漏れ出た自分の声は、明らかに震えていた。震える声で喘ぎながら、震える両足を動かしながら、あたしは眼の前に転がっている『それ』に引き寄せられるように近づく。

見つけたのは、元々あつた色を失ってしまったかのような真っ白な物体。球体と比べるとその歪な形が特徴的と言える、生き物なら大抵、自身の身体に備えられている物。

……明らかに、人の頭蓋骨だった。間違いなくここで息絶え、長い年月の間に白骨化してしまった、『妖魔』一族の人間だった。

地面に無造作に横たわっている『それ』に歩み寄ったあたしは、その場に崩れ落ちるかのように両膝をついた。

幼い頃にここを飛び出した後、数年経ってから風の噂で聞いていた。元老院からの要請を受けた正規軍の手によって、放置されていた『妖魔』一族の遺体は粗方回収され、手厚く葬られたって。

……だけどこうして骨が残っていたり、廃墟と化した家屋の撤去がされていない所を見ると、作業はあまり積極的に行われてないみたいだね。

でも、やっぱりそれは仕方無い事なのかな。この惨状を作り出したのは、言わば正規軍のかつての身内、『魔王』の配下だった当時の軍なんだから。戦争終結後に政府及び軍全体の大改正が行なわれたとはいっても、今の政権からすればあんまり関わりたくない案件なんだよね、きつと。

でもだからって、あたしは今の政権の人たちを責めるつもりは無い。第一あたしには、そんな資格自体が無いんだから。

我が身可愛さにここから逃げ出したまま、今この時までこの地に足を踏み入れようとしなかった、薄情な人間であるあたしには。あたしはそつと、白骨と化した同胞の亡骸を両手で掬い上げる。こんな事に何の意味があるのか自分でもわからないけど、そうせすにはいられなかった。

「……テメエ、今までここに足を運んだ事は無かったのか？」

地面に膝をつき、真っ白な頭骸骨を両手で抱えるあたしに、いつの間にか傍らに立っていたジエイガから、どこか躊躇っているみたいな声が掛かった。

あたしは彼の方を振り向かず、今はもう動かなくなった人を見つめながら、静かに答える。

「無いよ。意識して、この場所へは近付かないようにしてたから……。薄情者だよね、あたしって。何もかも放つたらかしたままここから逃げて、みんなの事を吊ってあげてないなんてさ……」

「……」  
自分を責める言葉を吐いた事で、あたしは余計暗い気持ちになった。

ジエイガから反応は返って来ない。言葉を失くしてるのかも知れないし、もしかしたらどうでもいいと思ってるのかも知れない。

沈黙が支配する中、あたしは眼を瞑り、両手で抱えた頭蓋骨を自分の額に寄せた。そしてそうする事でふと気付く。

この場所で命を落としたのが『妖魔』一族の人たちだという事は、今抱えているこの人は、もしかしたらあたしの……。

「ねえジエイガ。あなたにこんな事頼むの筋違いなんだろうけど……、この人を埋葬するの手伝ってくれないかな？ ちゃんとお墓を作って、埋めてあげたいんだ」

「……」  
すぐ後ろに立っているジエイガを仰ぎ見つつ、気付けばあたしはそう頼んでしまっていた。

すると当然、ジエイガは若干眼を丸くして黙り込んでしまう。やっぱりこんなお願い、彼に頼む事自体間違ってるよね……。

彼から眼を逸らして俯いたあたしは、内心で肩を落とした。  
するとその瞬間、

「……あア、わかった」

という、少々面倒臭そうな声が頭の上から降ってきた。

思わずあたしが勢い良く顔を上げると、そこには声色通りの表情

があつた。けれど心無しか、ジエイガはそんなに嫌がつていないようにも見える。

「……ありがと、ジエイガ」

彼を見つめて素直にお礼の言葉を口にすると、ジエイガはどこかバツが悪そうに、わざとらしく顔を逸らした。

……頭が痛い。

まるで自分の頭の中で絶え間無く鐘が鳴らされているみたいに、不快な痛みが断続的に続いている。視界が激しく明滅しているせいで、ゆっくりと歩く事は出来ても、走る事なんて到底不可能だ。

どうして私は今、こんな状態に陥っているんだろう？

山道の崩落に巻き込まれてデーンくんたちと逸れてから、どこかの川岸に流れ着いた私の意識を強引に呼び覚ましたのが、正体不明の頭痛だった。

痛みの原因はわからない。でも、痛みが発生している理由なら、何となく想像出来ている。多分、近付いているからだ。

私の記憶を取り戻す為に必要な、『鍵』となるものに。

「あっ」

不意にある気配を察知した私は、ノロノロと動かしていた両足を止める。

どうして……？ という気持ちが強かった。

なぜ『彼』がここにいるんだろう？



偶然の一言で片付けるには余りにも奇妙な、静かなる遭遇。

眼の前に現れたのは大柄の男性だった。茶色いマントの上からでも体格が良いとわかるその身体は、多分単純な力比べなら、『英雄』の一人であるランザ・ダルベスと余裕で渡り合えるくらいの物だ。が、その強靱そうな見た目に反して、落ち着き払った表情から読み取れる寡黙さと聡明さ。その二つは恐らく、『魔術師』として長年培ってきた多くの知識によって成り立っているものなのだろう。

今も私の頭を蝕み続ける痛みが、間違いないと告げている。

眼の前の人物が、何者なのかという事を。

「……やはり来てしまったのか、『深紅魔法』の使い手」

「……！」

額の右側に痛々しい傷跡を付けた、紫黒色の髪 of 男性は、私が誰なのかを知っているらしい。

いえ、それも当然の話よね。だって私と彼は、旧知の仲なのだから。

「出来る事ならば、貴公には安寧たる平穏と安らぎが齎されればと願っていたのだが……、どうやらそれは叶わなかったようだ。

だが同時に、こうなるのであるという予感があったのも事実。……

……当然であろうな。貴公は我れが知り得る者の中で、誰よりも気高く誇り高い『魔術師』であるのだから」

表情に抑揚の無い男性は、ジツと私を見つめたまま、私が口を開くのを待っているかのようにだった。

彼の思いに応えるように、彼と語り合う為に、酷い頭痛に顔を顰めながらも、私はゆっくりと口を開く。そして、彼の名を呼ぶ。

「ノイエ・ガルバドア……」

「久方ぶりだな、イアルルス。よくぞまた、我が眼前に現れてくれた」

まさにこの時、この瞬間。長きに渡る沈黙が破られたかのように、彼は私の前に姿を現した。

『英雄』と呼ばれる五人の『魔術師』の、最後の一人として。



## 第六章 対峙（後書き）

つー訳で長らくお待たせしてしまいましたが、第六章投稿です！

ついに！ ついにノイエ・ガルバドアが姿を現しました！

いや〜、ここに来るまでにどれだけ時間掛かってんだって話ですよ、いやホントにw

これでめでたく（？） 『英雄』五人が揃い踏みとなった訳ですが…。

ふと考えてみると、こうして一話の中に主人公であるディーンくんが全く出て来ないので、もしかして初めての事だったりするんじゃないか……？

60万文字近くも書いてるとその辺も曖昧になって来るんですよw

とにかく、どうにかこのまま話を突き進めて、ちゃっちやと終章に持って行きたいものです。

また別の章の話の展開思い付いたりしたりしてるんだよなあ、これがw

それではまた次回！ノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1376n/>

---

フレイム・ウォーカー

2011年10月3日03時25分発行